

ドラえもん のび太のギレンの野望(偽) 更新停止

宇宙大戦

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

機動戦士ガンダムのザビ家に転生した転生者達。

彼らはスペースノイドの自治独立の為に動き出すが、思わぬ形で戦争が勃発したことで彼らの計画は狂い出す。

そんな中、あるアニメのキャラの副主人公がこの世界にやって来た。

これはそれから始まる物語

注　なんか話がごちゃごちゃして訳が分からなくなっていましたので、一旦更新を停止して1年戦争以降の物語を修正し、元のガンダムとドラえもんのかrossオーバーの作品に戻します。迷惑を掛けますが、ご了承ください m ( ) m

12月11日、申し訳ありませんが、ネタが全く思い付かず行き詰まってしまったので、リメイクして物語を1から作り直します。本当に申し訳ありません。 m ( ) m

一年戦争編

目次

|         |       |              |     |
|---------|-------|--------------|-----|
| UC0079年 | 1月3日  | 思わぬ開幕        | 1   |
| UC0079年 | 1月4日  | 混乱           | 7   |
| UC0079年 | 1月6日  | ルウム沖会戦       | 14  |
| UC0079年 | 1月10日 | ルナツー攻略作戦     | 23  |
| UC0079年 | 1月15日 | 邂逅           | 29  |
| UC0079年 | 1月20日 | 交渉決裂         | 38  |
| UC0079年 | 1月21日 | 地球方面軍設立      | 45  |
| UC0079年 | 1月24日 | 悩み           | 53  |
| UC0079年 | 1月25日 | 覚悟           | 61  |
| UC0079年 | 1月27日 | 罪悪感          | 71  |
| UC0079年 | 2月1日  | 第一次降下作戦      | 78  |
| UC0079年 | 2月4日  | 反撃の兆候        | 86  |
| UC0079年 | 2月5日  | 第一次オデッサ攻防戦   | 92  |
| UC0079年 | 2月7日  | 東欧攻勢案        | 100 |
| UC0079年 | 2月8日  | 第二次降下作戦      | 107 |
| UC0079年 | 2月11日 | ワルシャワの戦い     | 115 |
| UC0079年 | 2月18日 | 第二次南極会談      | 123 |
| UC0079年 | 2月21日 | 第三次降下作戦      | 131 |
| UC0079年 | 2月23日 | のび太の異変       | 139 |
| UC0079年 | 2月27日 | のび太の怖さ       | 146 |
| UC0079年 | 3月2日  | タスマニア島上陸作戦   | 154 |
| UC0079年 | 3月4日  | 旧アメリカ東海岸反攻計画 | 162 |
| UC0079年 | 3月8日  | 2人のニュータイプ    | 170 |

|         |       |               |     |
|---------|-------|---------------|-----|
| UC0079年 | 5月16日 | 不満            | 345 |
| UC0079年 | 5月13日 | ダーウィン基地陥落     | 337 |
| UC0079年 | 5月9日  | 風邪            | 330 |
| UC0079年 | 5月5日  | 新兵器・ビームサーベル   | 322 |
| UC0079年 | 5月4日  | 新兵器・ビームライフル   | 314 |
| UC0079年 | 5月2日  | 1と7の裏         | 307 |
| UC0079年 | 4月30日 | 危険人物          | 299 |
| UC0079年 | 4月25日 | 暗躍の開始         | 292 |
| UC0079年 | 4月21日 | アフリカ戦線崩壊      | 283 |
| UC0079年 | 4月17日 | ジブラルタル炎上      | 276 |
| UC0079年 | 4月12日 | 東海岸奪還戦        | 268 |
| UC0079年 | 4月8日  | 交流            | 258 |
| UC0079年 | 4月5日  | ハワイ攻略戦        | 250 |
| UC0079年 | 4月3日  | アフリカの惨劇       | 243 |
| UC0079年 | 4月2日  | V作戦           | 236 |
| UC0079年 | 4月1日  | 懸念            | 230 |
| UC0079年 | 3月29日 | 闇夜の襲撃         | 222 |
| 214     |       |               |     |
| UC0079年 | 3月26日 | ニューカレドニア島上陸作戦 | 206 |
| UC0079年 | 3月22日 | 中欧侵攻作戦        | 199 |
| UC0079年 | 3月19日 | ノーフォーク島哨戒基地破壊 | 193 |
| UC0079年 | 3月13日 | 策略            | 185 |
| UC0079年 | 3月11日 | 北米攻防戦         | 178 |
| UC0079年 | 3月10日 | 攻勢前夜          | 178 |

|         |       |            |     |
|---------|-------|------------|-----|
| UC0079年 | 8月1日  | ルナツー防衛戦    | 528 |
| UC0079年 | 7月31日 | 攻勢前夜       | 520 |
| UC0079年 | 7月27日 | 有線式ビット     | 514 |
| UC0079年 | 7月23日 | 再会         | 506 |
| UC0079年 | 7月20日 | マハラジャからの提案 | 499 |
| UC0079年 | 7月17日 | キューバの戦い    | 492 |
| UC0079年 | 7月15日 | 慰め         | 483 |
| UC0079年 | 7月11日 | ハワイ失陥      | 476 |
| UC0079年 | 7月8日  | 不穏な音       | 469 |
| UC0079年 | 7月5日  | ルナツー着任     | 462 |
| UC0079年 | 7月1日  | ガダルカナル島撤退  | 455 |
| UC0079年 | 6月29日 | ラバウル沖海戦    | 447 |
| UC0079年 | 6月26日 | 再攻勢        | 439 |
| UC0079年 | 6月22日 | ホバークラフト    | 431 |
| UC0079年 | 6月19日 | 連邦軍撤退      | 423 |
| UC0079年 | 6月17日 | 攻防         | 416 |
| UC0079年 | 6月14日 | 違和感        | 408 |
| UC0079年 | 6月10日 | 正念場        | 401 |
| UC0079年 | 6月7日  | 困難な任務      | 394 |
| UC0079年 | 6月3日  | 政治生命       | 387 |
| UC0079年 | 6月1日  | ジオンの内情     | 381 |
| UC0079年 | 5月31日 | 無謀な潜入案     | 373 |
| UC0079年 | 5月27日 | 連邦の悲哀      | 367 |
| UC0079年 | 5月23日 | 不審         | 360 |
| UC0079年 | 5月21日 | 見えない危険     | 353 |

|         |        |                 |     |
|---------|--------|-----------------|-----|
| UC0079年 | 10月10日 | 哀れな存在           | 706 |
| 699     |        |                 |     |
| UC0079年 | 10月8日  | ブリデン・アイルランド攻略作戦 | 691 |
| UC0079年 | 10月4日  | ホワイトベース陥落       | 684 |
| UC0079年 | 10月1日  | 重力戦線の戦況悪化       | 677 |
| UC0079年 | 9月28日  | ガルマの苦悩          | 670 |
| UC0079年 | 9月23日  | 大気圏降下           | 661 |
| UC0079年 | 9月22日  | 新部隊の結成          | 652 |
| UC0079年 | 9月18日  | (量産型)ガンダム、大地に立つ | 645 |
| UC0079年 | 9月16日  | 不吉な前兆           | 638 |
| UC0079年 | 9月12日  | 第三次南極会談         | 631 |
| UC0079年 | 9月9日   | 報復核攻撃           | 623 |
| UC0079年 | 9月5日   | 第二次オデッサ攻防戦 後編   | 615 |
| UC0079年 | 9月4日   | 第二次オデッサ攻防戦 前編   | 608 |
| UC0079年 | 9月2日   | 行方知れず           | 601 |
| UC0079年 | 8月30日  | スパイ             | 594 |
| UC0079年 | 8月24日  | 支持              | 586 |
| UC0079年 | 8月21日  | 嫌悪              | 579 |
| UC0079年 | 8月17日  | 第五次降下作戦         | 570 |
| UC0079年 | 8月14日  | 情けない思い          | 563 |
| UC0079年 | 8月11日  | 拠点移動            | 555 |
| UC0079年 | 8月7日   | 青い狸の来訪          | 547 |
| UC0079年 | 8月6日   | 崩壊の足音           | 540 |
| UC0079年 | 8月2日   | 処置              |     |

|         |        |                  |     |
|---------|--------|------------------|-----|
| UC0079年 | 10月15日 | 安っぽい正義           | 713 |
| UC0079年 | 10月19日 | 狂気               | 721 |
| UC0079年 | 10月21日 | ソロモン防衛への懸念       | 729 |
| UC0079年 | 10月24日 | ゴツプ大将            | 736 |
| UC0079年 | 10月27日 | 来るべき時への備え        | 744 |
| UC0079年 | 10月31日 | 不穏な空気            | 752 |
| UC0079年 | 11月1日  | ガルマの嘆き           | 759 |
| UC0079年 | 11月5日  | マハラジャの焦り         | 765 |
| UC0079年 | 11月7日  | オペレーション・アウステルリッツ | 772 |
| UC0079年 | 11月8日  | オペレーション・アウステルリッツ | 778 |
| UC0079年 | 11月9日  | オペレーション・アウステルリッツ | 785 |
| UC0079年 | 11月11日 | 第四次南極会談          | 793 |
| UC0079年 | 11月16日 | 不信の払拭            | 801 |
| UC0079年 | 11月20日 | 文民統制の崩壊          | 809 |
| UC0079年 | 11月24日 | 大西洋大津波           | 816 |
| UC0079年 | 11月28日 | 汚い空襲             | 823 |
| UC0079年 | 12月1日  | ギレンの決意           | 831 |
| UC0079年 | 12月3日  | ユーリの決意           | 837 |
| UC0079年 | 12月6日  | 休戦の申し出           | 844 |
| UC0079年 | 12月9日  | 感染の広がり           | 851 |
| UC0079年 | 12月13日 | 反乱の予感            | 858 |
| UC0079年 | 12月17日 | 4代目連邦軍総司令官の憂鬱    |     |
| 前編      |        |                  |     |
| 中編      |        |                  |     |
| 後編      |        |                  |     |

|           |        |             |      |
|-----------|--------|-------------|------|
| UC0080年   | 2月27日  | 狂気          | 1026 |
| UC0080年   | 2月22日  | 危機のフラグ      | 1019 |
| UC0080年   | 2月19日  | エウーゴに秘策有り   | 1012 |
| UC0080年   | 2月16日  | マチルダの最期     | 1005 |
| UC0080年   | 2月12日  | アフリカ戦線の危機   | 999  |
| UC0080年   | 2月9日   | ジーン・コリニーの焦り | 992  |
| UC0080年   | 2月5日   | 碇シンジ特務准尉    | 985  |
| UC0080年   | 2月3日   | MS計画変更      | 978  |
| UC0080年   | 2月1日   | 東南アジア戦線     | 971  |
| UC0080年   | 1月29日  | 大人の仕事       | 963  |
| UC0080年   | 1月23日  | 幼女の虐殺       | 956  |
| UC0080年   | 1月19日  | 赤髪の少女       | 948  |
| UC0080年   | 1月17日  | 行き詰まり       | 941  |
| UC0080年   | 1月13日  | 子守り         | 934  |
| UC0080年   | 1月11日  | ネオ・ジオンの進路   | 927  |
| UC0080年   | 1月8日   | スカウト(恐)     | 919  |
| UC0080年   | 1月6日   | 地獄の4日間      | 912  |
| UC0080年   | 1月2日   | 新たな火種       | 906  |
| UC0080年   | 1月1日   | 第五次南極会談     | 899  |
| ネオ・ジオン抗争編 |        |             |      |
| UC0079年   | 12月31日 | 一年戦争終結      | 893  |
| UC0079年   | 12月25日 | ラプラスの影      | 886  |
| UC0079年   | 12月24日 | ゴツプの依頼相手    | 879  |
| UC0079年   | 12月20日 | ジオンの限界      | 872  |



|         |       |             |      |
|---------|-------|-------------|------|
| UC0081年 | 3月5日  | ラサの裏側       | 1208 |
| UC0081年 | 3月3日  | かつて戦った者達    | 1201 |
| UC0081年 | 3月1日  | 将来を見据えて     | 1194 |
| 再構成戦争編  |       |             |      |
| UC0080年 | 4月20日 | 一先ずの終結      | 1186 |
| UC0080年 | 4月18日 | 雨の中の決着      | 1175 |
| UC0080年 | 4月16日 | 軌道上の遭遇戦     | 1168 |
| UC0080年 | 4月15日 | 逆攻勢案        | 1162 |
| UC0080年 | 4月13日 | スーパーガンダム    | 1154 |
| UC0080年 | 4月11日 | 連邦の策略       | 1147 |
| UC0080年 | 4月8日  | 華南の戦い       | 1140 |
| UC0080年 | 4月5日  | 闇夜の蹂躪       | 1133 |
| UC0080年 | 4月3日  | 南洋の反乱       | 1126 |
| UC0080年 | 4月1日  | 掛け違い        | 1117 |
| UC0080年 | 3月28日 | 決まった戦局      | 1110 |
| UC0080年 | 3月25日 | 上空からの狙撃     | 1103 |
| UC0080年 | 3月22日 | ルオ商会の悲劇     | 1094 |
| UC0080年 | 3月20日 | 毒ガスの脅威      | 1085 |
| UC0080年 | 3月18日 | 毒ガス         | 1076 |
| UC0080年 | 3月14日 | 暗殺作戦        | 1068 |
| UC0080年 | 3月11日 | ペガサスの死      | 1061 |
| UC0080年 | 3月7日  | スポンサー       | 1105 |
| UC0080年 | 3月4日  | フォン・ブラウン沖会戦 | 1047 |
| UC0080年 | 3月1日  | 隠蔽          | 1040 |
| UC0080年 | 2月29日 | 秘密道具        | 1033 |

U C 0 0 8 1 年 3 月 1 1 日 地球統一軍  
U C 0 0 8 1 年 3 月 8 日 三人目の来訪者

12221214

## 一年戦争編

UC0079年 1月3日 思わぬ開幕

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 1月3日 サイド3 ズムシテイ  
サイド3。

それはL2宙域に存在するコロニー群であり、全てのコロニー群の中でも地球から最も離れた位置に存在している。

更にこのコロニー群はジオン公国を名乗っており、独自の軍を有していることから、現在、地球連邦政府に警戒されているコロニー郡でもあった。

そんなジオン公国の首都バンチであるズムシテイでは、ジオン公国の総帥であるギレン・ザビが感慨深げにカレンダーを見つめていた。

「今日が原作での開戦日か。ここまで大変だったな」

ギレンはそう言いながら今までの事を思い出す。

そう、ここに居るギレン・ザビは原作のギレン・ザビではなく、前世でガンダムファンだった男が転生したギレン・ザビだった。

と言っても、転生者は彼だけではない。

ザビ家の人間であるデギン、サスロ、キシリア、ドズル、ガルマも転生者だ。

彼らは後に起こるであろう一年戦争で地球連邦相手に勝利を得るためにこれまで奔走し、その結果、国力は地球連邦の10分の1程(原作では30分の1以下)となり、人口も2億人(原作では1億5000万人)にまでに増やすことに成功した。

とは言っても、原作に合わせて連邦に戦争を吹っ掛けるつもりは更々無い。

国力邁進や人口増加に注力した結果、軍事技術こそ原作知識を応用した先取りによってほとんどが原作通り、一部は一年戦争後期に登場するような兵器まで配備されているが、兵員数の増強まで予算が回ら

なかった結果、軍の人員数は原作より明らかに劣っていた。

もつとも、連邦にはミノフスキー物理学の概念が無い（ミノフスキー博士が連邦に亡命しなかった上に僅かにあった資料もザビ家が回収した為）ので、メガ粒子砲はおろか、核融合炉の小型化に必要なIフィールド技術もない。

その為、原作より連邦との数の差が大きいにしても、短期決戦では原作同様の大きな価値を見込めるのだが、連邦の国力はジオンの10倍。

これは第二次世界大戦の頃の大日本帝国とアメリカ合衆国がガチンコで戦うに等しい戦力比であり、決して油断は出来ない。

その為、開戦日は今より半年後の宇宙世紀0079年7月と見込まれているが、下手をすればこの予定は来年の今頃まで持ち越される可能性も存在する。

要は頭数を満足に揃えられるまで戦争をしたくなかったのだ。

「まあ、戦争なんてしないに越したことは無いんだろうがな。今のところ順調に事は進んでいるし」

10年ほど前にザビ家が実権を完全に握った後に行ったのは各サイドの切り崩しだ。

スペースノイドの独立を唱う以上、原作のような虐殺は避けなくてはならないし、そうでなくともそのような虐殺行為など進んでやりたくもなかった。

更にはスペースノイド全体がジオンの味方に着けば、原作よりは戦いがやり易くなるだろう。

まあ、そもそも戦争をやる意味があるかどうかも疑問だ。

原作では最初こそ宇宙移民者達は地球の資源に依存してきたが、ユニコーンくらいになると徐々に宇宙で採掘される資源が主流になっていった。

更に原作でモナハン・ハバロが画策したサイド共栄圏構想も基礎段階ではあるが、形になっている。

このまま行けばなにもしなくとも10年〜20年後には地球と宇宙の関係を逆転させることが出来るだろう。

「そして、あのジオン最大の死亡フラグであるアムロ・レイはこちらの手の内だ」

そう、あのファーストガンダムの主人公であり、地球連邦の救世主（ジオンにとっては疫病神）のアムロ・レイは現在、サイド3に留学していた。

経緯としてはまず父親であるテム・レイをMS開発者として招聘し、そのついでに『息子さんに宇宙の事を学ばせたら良いのではないですか?』というお題目を並べてアムロをサイド3に留学させたのだ。

これは当然、原作でジオン敗北の一因となった白い悪魔の存在を事前に潰すためであり、そのついでにパイロットになってくれればこちらの戦力を上げられるという狙いがあつたからだだった。

なにしろ、原作では僅か3ヶ月の実戦でランバ・ラルや黒い3連星等のエースレベルの存在を建て続けに討ち取っているし、ニュータイプ覚醒後にはチートレベルの活躍をしている。

まあ、宇宙世紀最強のパイロットの名は伊達では無いという事なのだろうが、そんなジオンにとって厄介な存在を転生者達（特に原作で実際に討ち取られているガルマに転生した人物）が見逃しておく筈もなく、彼らは事前に手を打つ事にしたのだ。

その結果、アムロはサイド3に留学する事態となっていた。  
更にそれだけではない。

「シャア・アズナブルは原作と違って我々を恨んでは居ない様子だ。これは凄く助かる」

原作でガルマとキシリアを打ち取り、ジオン公国崩壊後も色々やらかしてくれた人物であるシャア・アズナブルことキャスバル・レム・

ダイクン。

彼はこの世界でもジオンの士官学校に入学しているのだが、その経緯は少々異なる。

原作通り、ジオン・ズム・ダイクンが急死した後にダイクン一家は地球に逃れた。

しかし、この世界では原作とは違って母親であるアストライアもザビ家の手によって一緒に地球へと逃がしている。

理由としては物凄く簡単で、原作でシャアがザビ家を恨んだのは母親であるアストライアの扱い（と言っても、アストライアを幽閉したのはザビ家ではなくダイクンの正妻であるローテルシアなのだが）からであったので、この世界ではアストライアはキャスバル兄妹達と共に地球に逃し、更にザビ家から様々な支援も行うことで出来る限り恨まれる要素を無くそうと考えたのだ。

おまけに連絡員として定期的に派遣しているランバ・ラルの報告では特に問題なく暮らしているらしいので、ザビ家の存在を恨むことはないだろう（それでも地位を篡奪したのは確かなので、気に入りはしないだろうが）。

まあ、一時、キャスバルが居なくなつたと聞いたときには大騒ぎになつたのだが、（どうやってかは知らないが）シャア・アズナブルの名前と戸籍を手に入れてジオンの士官学校に入学したらしい。

正体がバレればジオン内部が荒れかねないし、転生者達からしてみればシャア・アズナブルは原作ではガルマとキシリアを暗殺した他にも、グリプス戦役や第二次ネオ・ジオン抗争などで思いつきりやらかしてくれた危険人物。

本来ならどうにかして追い出したかったのだが、赤い彗星として大きく活躍した人物でもあるし、下手に放置してネオ・ジオンを結成されたら堪らないという意見もあり、地球に残ったアストライア達と話し合つた結果、最終的にキャスバル・レム・ダイクンの名を捨ててシャア・アズナブルという単なるジオン国民の一員としてジオン軍に入るという形で決着した。

もつとも、原作の感じからするに、いつやらかすか分からないので

監視は必要なだろうが。

「これであとはあの箱だな。あれさえあれば景気付けにはなる」

ギレンはそう言いながら、現在、ビスト財団と交渉中の「箱」について思いを馳せる。

ラプラスの箱。

それは原作ガンダムUCで焦点となった宇宙憲章の欠けた部分だが、正直言つてギレンはこの箱の効果を疑問視していた。

と言うのも、これが存在したのは80年以上も前であるし、しかも公開前に爆破されたのでそれが本当に正式な宇宙憲章であったのかを証明する手段はない。

連邦側が『そんなものは存在しない』と言つてしまえばそれまでであるからだ。

現に原作でこれが公開されたときも、特にこれといった変化は起こらなかった。

しかし、いずれやるかもしれない戦争の際の景気付けにはなるし、もしかしたら原作でこれが公開されたUC0096年の時は民衆が戦争に疲れていたからこそ効果が無かったと主張する転生者も居たので、ビスト財団と交渉自体は現在も続けていた。

「まっ、今のところは平和だ。いずれそうではなくなるかもしれないから、今のうちにそれを享受しておこう」

そう言いながら、ギレンは若干冷めた紅茶が入ったカップを手に取る。

だが、その時――

「あ、兄貴！・大変だ!!」

サスロが慌てた様子で入ってくる。

「どうした？いつになく慌てているな」

ギレンはそう言ってカップの中に入った紅茶を口に含みつつ、サス口に報告を促す。

「そんな呑気なことを言っている場合じゃない!!いま連邦のテレビ放送でやっていたんだが、連邦政府がアルテイシア・ソム・ダイクンを党首としたジオン正統自治体を樹立させて、俺達ジオン公国政府に対してテロリスト制圧という名の宣戦布告をしてきたんだ!!」

ギレンは盛大に紅茶を吹き出した。



U C 0 0 7 9 年 1 月 4 日 混乱

◇宇宙世紀0079年 1月4日 サイド3 ズムシテイ  
突如行われた原作とは違う連邦による宣戦布告。

これを受け、ザビ家では緊急家族会議（全員が転生者な為、実質上は転生者会議）が行われることとなった。

「「「「」」」」」

しかし、この場に集まった人間達は誰も口を開こうとしない。  
当然だ。

彼らにとって、これはあまりにも予想外すぎる事態だったのだから。

しかし、それでも現実逃避しても何も始まらないということ、ま  
ずギレンが口を開いた。

「・・・皆も知つての通り、昨日、連邦はセイラ・マスことアルテイシア・ソム・ダイクンを旗頭にジオン公国に事実上の宣戦布告をしてきた。だが、サイド3内のダイクン派が動かなかったことから分かる通り、どうやら今回の件は向こうの独断らしい。・・・それだけは救いだったな」

ギレンはそう説明する。

そう、これが本格的なダイクン派の反抗ならばジオン本国に居るダイクン派が連動して動かない筈がない。

少なくとも、すぐさま配下の部隊を率いてクーデターを起こそうとする筈だ。

それが無いということは、連邦がアルテイシアを確保した後、公国内のダイクン派に話を通さずに独断で彼女を旗頭にした可能性が高い。

おそらく、話を通さなかったのはこちらに気づかれないためだろう

し、アルテイシアを旗頭にしたのはジオン内部の分裂を期待して制圧をスムーズに進めようという魂胆からだろう。

しかし、同時にそれは救いでもあった。

なにしろ、事前に根回しをしなかったことで連邦が目前に居る状況の中でクーデターで国内が内戦状態に陥るということは避けられたのだから。

「しかし、これで我々はダイクン派に対する締め付けを強化しなければならなくなった。よりにもよってこんなときに、な」

ギレンは苦々しい顔をする。

ダイクン派はこれから冷や飯を食わされることになる事は確かだ。

何しろ、彼らが崇める存在を建てたのは、よりにもよってジオン国民が敵視する連邦だったのだから。

ここで甘くすれば付け入られる危険性があるし、仮にザビ家がなにもしなくとも国民が売国奴の仲間としてダイクン派を冷たく見る可能性が高い。

しかも、放っておけばザビ家にも飛び火する可能性があるし、万が一、ジオンを裏切って連邦に着いたりなどすれば手が付けられなくなるので、ダイクン派の粛清はこちらで主導しなければならぬだろう。

「参ったな。ダイクン派の将校はジオン軍全体の3割を占めているのに」

「仕方あるまい。しかし、何故、アルテイシアはあんな事をしたんだ？ この世界のランバ・ラルの報告では原作とさほど性格は変わらないみたいだったが」

ガルマの苦言にドズルはそう答えつつ、1つの疑問を口にする。

ランバ・ラルの報告ではこの世界のセイラ・マスも医者を目指して

勉強しており、原作通りの気の強さはあるものの、思想や性格なども特に危険な部分はないとの事だった。

いや、仮にクーデターを本気でやるとしても、よほどの馬鹿でない限りはサイド3のダイクン派に根回しくらいはするだろう。

それをしなかったことにドズルは首を傾げる。

だが、そんなドズルの問いに苦々しげに答えたのはサスロだった。

「ざつき内務省に情報が入った。どうやら今回の裏に居るのはジンバ・ラルだ。奴が連邦にアルテイシアを旗頭にしてクーデターを起すように話を通したらしい」

そのサスロの言葉を聞いて、転生者達はだいたいの事情を察し、次いで全員一致でこう思った。

『あのクソジジイが!!』、と。

本来、アストライアと違ってジンバ・ラルは地球に送るつもりはなかった。

なにしろ、原作ではキャスバル達に『ザビ家は篡奪者である』という旨を延々と説いていた人物なのだ。

そんな人物をアストライア達の傍に置きたいなどということをやザビ家の人間である転生者達が思うわけがなく、むしろジオン本国に留まらせて入念な監視を行うつもりだったのだが、アストライアからどうしてもと懇願があつて仕方なく地球に行くことを許可したという経緯がある。

しかし、こんなことになるのならば許可すべきではなかったと転生者達は今更ながらに後悔していた。

「・・・しかし、奴は何を考えているんだ？連邦の力なんて借りたらどうなるか奴も政治家の側近だったなら想像がつくだろうに」

デキンはそんな疑問を口にする。

仮にクーデターが成功してジオンを掌握したとしても、今度は連邦

に頭が上がりなくなってしまうし、サイド3の住民からすれば連邦は敵だ。

と言うより、そうでなければザビ家がこんな独裁的な実権を握れる筈もない。

その為、こんな売国奴的な真似をしたクーデター派を許すとは思えないし、まず間違いなく統治に反対する輩が出てくるだろう。

ジンバ・ラルがよほどのバカでもなければそこら辺は分かっている筈だ。

「さあ、ジンバ・ラルが何を考えているのかは分かりませんが、今は当面の問題である連邦艦隊の撃滅について考えましょう。キシリア、報告を」

「はい。私の統括する情報部の報告によれば、例の宣言の後、地球各地やルナツーから連邦軍の主力艦隊が発進したとの事です」

ギレンの促しに、情報部の責任者であるキシリアはそう報告する。実のところ、連邦艦隊は事前に集まっている訳ではなく、あの演説から少ししてようやく動き始めていた。

まあ、向こうはそれで十分だと考えているのだろうし、艦隊が集結するような事態になれば当然注目されるので、事前に気づかれてしまうと考えたのだろう。

「うむ。不味いぞ、これは」

ドズルが唸るようにそう言った。

敵艦隊の迎撃についてはまだ時間があるので、迎撃体制を整えることは可能だろうし、撃滅することも可能だ。

なにしろ、向こうはモビルスーツを持っていないし、それどころかメガ粒子砲すらも無いのだから。

だが、問題はその次だ。

迎撃して返り討ちにするということは、当然の事ながら連邦と本格的な戦いが始まるということでもある。

しかも、こちらをテロリスト認定してしまった以上、簡単には引いてくれないだろう。

引けば『連邦はテロリストに屈した』ということになるのだから。しかし、一番不味いのはジオン側に「戦う準備が整っていない」ということだった。

一応、半年後に開戦するプランは立てていたので、宇宙軍の規模は原作通りであるのだが、全体の兵員数では原作より少ない

具体的にそれが何を意味しているのかと言えば、原作で三次まで行われた地球降下作戦が、この世界では二次がギリギリ出来るかもしれないというくらいになっている。

「戦いは数」というのは原作ドズルがよく言っていたことであるし、的を射ても居るのでこれで戦い抜けるかと言えば、疑問視せざるを得なかった。

「・・・原作の地球方面軍の創設は遅らせるから問題はない。地球降下作戦も後回しだ。いや、もしかしたらその必要すらも無いかもしれない」

「と言いつつ・・・」

「我々は敵艦隊の撃滅後にルナツールの攻略を行う予定だ」

「そうか。確かにあそこを占領すれば、連邦は地球に閉じ込められることとなる。各サイドも今は沈黙を保っているが、ジオンが勝てばこちらに靡いてくるだろう」

ギレンの説明にサスロは納得する。

ルナツールは原作では何故かジオンに見逃されて、連邦に残った唯一の宇宙基地となった場所だ。

確かにここを攻略すれば、連邦は地球に閉じ込められることとなり、連邦が反撃を行う際もまず拠点を確保するための苦しい戦いを強いられることとなる。

だが――

「それでは足りないのでは？原作ではコロニー落としをして地球の人口を半分消滅させても屈服しなかった連中ですし、なによりこの時代はまだ地球の資源を活用することが主流です。地球降下作戦はやはり必要かと」

ガルマはそのような意見を出す。

そう、後の世と違い、この時代はまだ地球の資源を活用して物作りをするのが主流だ。

実際、ギレンの野望では第一次降下作戦の際のブリーフィングでギレンがカスピ海や黒海沿岸部を目標に選んだのは、周辺一帯の資源を確保するためだと言っている。

まあ、他にも理由はあるのだろうが、今のところは宇宙で取れる資源だけで戦争を戦い抜くのは不可能に近く、地球の資源地帯を確保する必要があるということだけは確かだった。

「・・・分かった。では、こうしよう。まず我々が月面に侵攻し、グラナダを制圧。更に各サイドに駐留する連邦軍の撃滅を行う。そして、その後にやって来た敵艦隊を撃滅する。ここで問題なのは戦う場所だ。原作のようにルウム会戦が起こってサイド5が全滅などという事態になれば、ジオンの政治的失点となってしまう。その為、我々はルウムの前面、あるいはグラナダの軌道上で敵艦隊を迎撃する。その後ルナツーを攻略。ここで連邦が講和を行わなければ、原作通り地球降下作戦を行う。・・・何か異議はあるか？」

ギレンはそう言って兄弟達を見渡すが、誰も口を開かない。  
どうやら異議はないようだった。

「では、以上だ。ただちに持ち場に就いてくれ」

ギレンがそう言って会議の終わりを伝え、兄弟達は部屋を退室していく。

そんな中、残ったデキンはギレンにこのような事を尋ねる。

「ギレンよ。連邦相手に勝算はあるのか？」

それは原作でも開戦前にデギンがギレンに対して行った問いだ。

そして、それを承知の上で、この世界のギレンはその問いに対してこう返した。

「・・・既に連邦から宣戦布告をしてきた以上、勝算の問題ではありません。勝つか、負けるかなのです。父上」

かくして、ジオンもまた地球連邦との戦いの準備を始める。

——そして、翌日、ジオンもまた本格的に動き出し、些か泥縄式ではあったが、グラナダの制圧と各サイドの連邦駐留軍撃滅を開始した。

UC0079年 1月6日 ルウム沖会戦

宇宙世紀0079年 1月6日 サイド3 ズムシティ

「ギレン総帥、まもなくドズル閣下の宇宙攻撃軍が連邦艦隊と交戦を開始します」

ギレンに対してそう報告するのは、紅茶色のロングヘアをした19歳の美女。

原作と髪型こそ違うが、ギレンの秘書であるセシリア・アイリーンだった。

「そうか。では、ドズルにはこう伝えておけ。健闘を祈る、とな」

「はこ」

そうやってセシリアは通信室に向かうためか、ギレンの執務室を出ていく。

それを見届けつつ、ギレンは大きなため息をつく。

「本当に頼むぞ」

やれるだけの事はやった。

初っぱなはダイクン派への対応で出遅れたが、それでもどうにか会議の翌日の1月5日にはシーマ・ガラハウ少佐率いる海兵隊に先陣を切らせる形でグラナダを制圧させ、各サイドの駐留部隊もコンスコン率いる宇宙攻撃軍の別動隊によって撃滅。

ちなみに原作ではジオンの主力部隊はドズル率いる宇宙攻撃軍とキシリア率いる突撃機動軍に分かれていたが、この世界ではドズルの宇宙攻撃軍に一本化させた。

とてもではないが、原作のように軍を2つに分けている余裕はない



からだ。

そして、この世界のキシリアは転生者であることと、あまり軍の指揮が得意ではないこともあって、それを了承している。

しかし、同時にここで負けてしまえば全てが終わってしまう。

勿論、負けるとは思っていなかったし、その為に色々な手を打つてもいたのだが、どうにも負けたらどうしようというネガティブな考え方が頭を過ってしまうのだ。

原作のギレンならばそのようなことは無かったのだろうが、頭脳が同じレベルにあるとはいえ、この世界のギレンはあそこまで傲岸不遜にはなれなかった。

「・・・まあ、そこら辺は考えても仕方あるまい。ドズルに任せるしかないのだから」

ギレンはそう思いながら、ルウム沖会戦の後に控えているであろうルナツー攻略に思いを馳せていた。

◇  
ギレンがルナツー攻略について思案していた頃、今正にドズル艦隊はレビル率いる連邦の主力艦隊と接敵しようとしていた。

「この戦いは必ず勝てる」

ドズルはこの戦いに関してだけ言えば、そう確信している。それは根拠のない妄想ではなかった。

ドズルは自分の事を名将と過信しているわけではない。そもそも自分にあるアドバンテージは原作知識が有ることくらいで、実際の指揮となると、この世界で学んだことしか使えないのだから。

ましてや、相手は原作で名将と呼ばれたレビル。油断など出来るわけがないし、そんなことをして余計な死亡フラグを立てるなど真つ平ごめんだ。

が、それでも勝てるという確信が出来ているのはミノフスキー粒子十モビルスーツ、更にはこの世界で連邦が持っていないメガ粒子砲（連邦は熱核融合炉こそ完成させて艦艇に積んでいるが、ミノフスキー物理学を知らないため、これを装備していない）などの装備があるからだ。

幾ら名将と言えど、これを初見で看破できる人間など居るわけがない。

もしこの状況をレビルがなんとかできるとしたら、それは自分が大ポカをやらかした時だ。

更にこの世界はドズルの趣味である装備まで完成している。

（拡散大型メガ粒子砲・・・これを上手く使えば原作より少ない被害で勝てるかもしれない）

そう、実はジオン艦隊の艦艇は原作と違う。

葉巻型の形をしていて艦首に大型メガ粒子砲を仕込んだ巡洋艦（ミヨウコウ型）、3連装メガ粒子砲を前に2基、後部に1基搭載し、艦首に2つの穴に大型メガ粒子砲と拡散大型メガ粒子砲を仕込んだ戦艦（ドレットノート型）。

それは見る人が見れば分かるだろう。

宇宙戦艦ヤマトに登場する地球防衛軍の艦艇である、と。

まあ、機関は波動エンジンではなく、核融合炉であるという違いは存在するが。

ちなみに拡散大型メガ粒子砲はアプサラスと拡散波動砲からヒントを得て作られていたりする。

（これで更に原作通りシヤアの別動隊も居るし、時間をかければ増援がやって来る予定にもなっている。大丈夫だと思いたいが）

ドズルがそのようなことを思っていると、灰色を基調としたジオンの軍服（08小隊でシロー・アマダ達が着ていた服）に身を包んだ副官のラコック中佐がある報告を行ってきた。

「ドズル少将、間もなく大型拡散メガ粒子砲の射程内に入ります」

「よし、巡洋艦隊を一旦後方に下がらせろ。そして、戦艦部隊は全艦マルチ隊形を取れ」

ドズルはそう指示する。

そして、ドズルの指示の下、15隻のドレットノートは宇宙戦艦ヤマトのPSゲームで波動砲発射に一番適していると言われたマルチ隊形へと移行していく。

「全艦、配置完了しました！」

「よし！拡散波動砲・・・じゃなかった。拡散メガ粒子砲発射!!」

・・・なんとも締まらない言葉はあつたが、ドズルがそう指示した直後、15隻のドレットノートの艦首から15条の巨大な光線が向かっていき、相対していたティアンム艦隊の前で拡散。

これにより、連邦軍第2艦隊は光のシャワーを浴びせられることとなった。

◇連邦艦隊本隊 アナンケ 艦橋

「ティアンム提督の第2艦隊・・・半数が消滅しました」

呆然とした様子で艦隊の司令官であるレビルにそう報告するオペレーター。

だが、その報告をされたレビル自身も流星にこの光景には絶句せざるを得なかった。

(まさか、ここまでとは・・・)

正直、ジオンがここまでやるとはレビルも予想外だった。

ジオンが軍備を整えていたのは知っていたが、モビルスーツという作業機械を主力にしており、艦艇にはあまり力を入れていないと聞いたからだ。

勿論、それを鵜呑みにしていた訳ではなかった。

艦艇と言っても、連邦の戦艦に対抗できそうなサイズであり、十分な脅威であったし、あのモビルスーツを軍用に転用したところではなにかがあるとも思えなかったからだ。

まあ、それでも連邦より全体的に数が少ないことから、連邦軍上層部は楽観視していたが、それが間違いであったということはたった今、味方の犠牲という結果で証明された形になった。

「レビル將軍、ティアンム提督の座乗艦と通信が途絶しました。おそらくは……」

「分かった。第2艦隊には下がるように伝えてくれ。我々が出る」

「しかし、それだとあの粒子砲の格好の餌食に」

「あれだけのエネルギーだ。そう何度も撃てるわけではあるまい。その間に我々は肉薄して敵を叩く」

レビルはそう言って前進を命じる。

実際、このレビル將軍の考察は間違っていないかった。

拡散大型メガ粒子砲は一度撃つと、かなりのエネルギーを消耗するので、チャージに最低でも2時間は掛かってしまうからだ。

更にジオン艦隊は拡散大型メガ粒子砲を上手く使うために艦隊の陣形が砲撃に向いていない状態になっている。

ここで突っ込めば、如何にメガ粒子砲という存在があっても、ジオン艦隊は総崩れになる可能性が高かった。

そして、レビルの指示により、艦隊は尚もジオン艦隊に向かってい

く。

しかし――

「?あれ、可笑しいな」

「どうした?」

「いえ、レーダーに異常が・・・」

「こちらもです。通信機にノイズが発生しています」

「電波妨害か?」

「おそらくは。近くにジオンの艦艇が居るのかもしれませんが」

アナンケでそのような会話が交わされる。

だが、その直後、艦隊を構成していたサラミスの1隻が爆発を起  
した。

「何事だ!?!」

「分かりません!突然、爆発を起こしました!!」

アナンケの艦橋でそのような怒号が響き渡る。

だが、彼らは知らなかった。

彼らの悪夢はここからであったということ。



「勝ったな」

ジムⅡ改を駆るジオン軍別動隊の攻撃隊の指揮官シャア・アズナブル中尉はそう言いながら、戦場全体を見渡す。

状況は明らかにジオン側の優勢だった。

ミノフスキー粒子の海に溺れた結果、ミサイルはろくに機能せず、レーダーも働かないせいで主砲の荷電粒子砲（メガ粒子砲ではない）もろくに当たらないレビル艦隊はジオンのMS隊の対艦ライフルとバズーカ砲の前に次々と撃沈されるか、廃艦と言えるほどの状態になるまでにズタボロにしていく。

かくいうシャアも、マゼラン級戦艦を5隻とサラミス級巡洋艦8隻を撃沈していた。

「・・・」

だが、シャアは手放しには喜べない。

原作とは違い、ザビ家を見極めるという理由でジオン軍に入ったシャアではあったが、流星に例のアルテイシアの一件は彼にとっても予想外な事態であった。

そのせいで、ジオン内部のダイクン派は逮捕されるか、拘束されての監視、更にはアンリ・シユレツサー准将のように問答無用で退役に追い込まれる将校も居た。

シャアやランバは前線に必要であるということでのそのような対応

をされなかったが、自分がキャスバル・レム・ダイクンだということ  
をザビ家の人間が知っている以上、ここで戦果を挙げられなければ同  
様の運命になるのは想像に難くない。

それ故に頑張ってはいたが、同時に妹が今どうなっているのか気に  
なつてもいた。

(アルテイシア・・・いったい何が起きているというのだ)

シャアがそのようなことを考えていた時、新たなジオン軍の増援が  
月の方角からやって来た。

「むっ、あれは予定していたシーマ少佐の増援部隊か」

それはベースジャバーに乗ってグラナダ基地からやって来たシー  
マ少佐の海兵隊のMS部隊だった。

彼女らの出現はジオン軍にとって更なる士気向上を促し、逆に連邦  
軍にとっては絶望に叩き落としていく。

そして、それから数時間が経った時、連邦軍の残存部隊は撤退し、こ  
の戦いはジオン軍の大勝利に終わった。

この戦いで連邦軍が失った艦隊戦力は9割以上(原作のルウム会戦  
では8割)に上り、以後、半年間の間、ジオン軍は制宙権を完全に握  
ることとなる。



## UCC0079年 1月10日 ルナツー攻略作戦

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 1月10日 サイド3 ズムシテイ

「そうか。失敗したか」

セシリアからの報告に、ギレンはそう言っただけで残念そうな顔をする。ルウムでの会戦後、ジオンは連邦に講和を申し込んだ。

これは『ジオンには話し合いをする意思がありますよ』という事を示すポーズであり、成就することについてはあまり期待していなかった行為だったが、成就したら成就したでジオンにとって戦争が早く終わることを意味していたので、それが実らなかったことについては少し残念だった。

もつとも、よく考えれば当然のことだ。

原作では開戦から僅か40時間で28億人の人口が失われ、その後のコロニー落としやルウム会戦などで更に27億人の合計で55億人の命が失われた上に艦隊の8割がルウムで壊滅した事で連邦の心は折れ掛けた。

もしレビル將軍の『ジオンに兵無し』演説がなければ、ジオンの降伏文書に連邦がサインすることになっただろう。

が、逆に言えばここまでしてようやく連邦の心を折れたと言えるのだ。

そして、この世界では連邦艦隊の9割以上が壊滅しているものの、他の死者は各サイドとグラナダに駐留していた連邦軍と流れ弾に巻き込まれた少数の民間人ぐらい。

死者は正確な数は分からないが、おそらく15〜20万人程だし、コロニーも落とされていなかったので地球には全く被害はない。

その為、今は駄目でも年内には逆転出来るという希望が連邦政府内に存在するのだろう。

いや、もしかしたら軍人だけに被害が集中しているために余計に意固地になっているのかもしれない。

まあ、これについては仕方ないだろう。  
幾らジオンのためとはいえ、民間人の大量虐殺などやりたく無かつたのだから。

「申し訳ありません」

「いや、問題ない。さして期待はしていなかったからな。それよりドズルの艦隊はもう配置に着いているのか？」

ギレンはセシリアにドズルの艦隊の位置を尋ねる。

実は講和の打診と平行して、宇宙攻撃軍には艦隊の再編成と共にルナツー攻略の準備を行うように伝えており、既に講和を拒否された時の為にルナツー近辺へと移動していた。

本来、講和の打診と同時に戦力を動かすのは、前世の価値観で見れば条約違反なのだが、この世界では南極条約は結ばれていないし、向<sup>連</sup>こ<sup>邦</sup>うの言い分ではこちらはテロリストなので、その点を考慮する必要はあまり無い。

「はい。例の兵器や艦艇も移送を完了しており、ルナツー攻略はすぐにでも始められるかと」

「そうか。では、準備出来次第、すぐに始めるように伝えろ」

サイド1、2、4は連邦軍を撃滅したことと外交に力を入れたことよって既にサイド共栄圏に基づいてジオン側についているし、グラナダは制圧され、フォン・ブラウンとサイド6は原作通り中立。

建設中のサイド7は知らないが、原作通りに少なくとも表面上は中立を保つだろう。

つまり、現在のところルナツー以外にジオンの敵となる存在は居らず、ルナツーを落とせば宇宙は完全にジオンのものとなるのだ。

それからまた講和を申し込もう。

ギレンはそんなことを考えながら、ルナツー攻略の指示を出した。



「ドズル中将、総帥府から連絡が入りました」

「そうか。なんと言っている?」

「ただちに作戦を実行せよとのことですよ」

「よし、分かった。全艦に伝えろ。ルナツー攻略は予定通りとな」

「はっ」

◇ルナツー司令部  
ルナツー。

それは月の反対側に位置する地球連邦軍の宇宙要塞だ。

その規模はとても大きく、ア・バオア・クーやソロモン、アクシズなどの小惑星型宇宙要塞が全幅30キロ前後なのに対し、このルナツーはその6倍の全幅180キロだと言われれば、如何にそれが巨大なのかが分かる。

更にこの要塞は原作の一年戦争において唯一ジオンの手に落ちなかった宇宙拠点であり、19年も前から要塞化が行われているだけあつてかなりの防衛設備と人員が配置されていた。

しかし――

「司令、もうこれ以上の交戦は……」

「……」

副司令の言葉にルナツー司令の男は沈黙する。

難攻不落の筈のこのルナツーは現在、ジオンの猛攻を受けた結果、非常に不利、否、もう陥落寸前の状態となっていた。

(まさか、こんなことになるとは……)

司令はジオン艦隊が攻撃を開始してからの経緯を思い返す。

ジオン艦隊が攻勢を開始した時、まず最初に行ったのがヨルムンガンドによる砲撃だった。

このヨルムンガンドはミノフスキー物理学を応用した核融合プラズマビームを用いた原理で作られており、マゼラン級戦艦を一撃で轟沈させるほどの威力がある。

有効射程は300キロ、最大射程に至っては2000キロを誇るこ

の砲は、正にジオンの艦隊決戦の切り札でもあった。

しかし、それでも原作でこのヨルムンガン드가採用されなかったのは、幾つかの理由がある。

まずこのヨルムンガンドに使われる弾丸は、1発につきザクが3機作れるほどの高コストであり、コストパフォーマンスが悪すぎたこと。

次に発射する際に高温度のプラズマが砲塔内部を迸る為に次弾を発射する際には冷却する必要がある、連射が事実上不可能だったこと。

3つ目にミノフスキー粒子下で運用することを前提に作られているために、レーダーを使わず、前線部隊からの観測指示が必要だったことなどが挙げられる。

そういった点から、このヨルムンガンドはジオン軍上層部からあまり期待されておらず、原作ではモビルスーツが活躍するための隠れ蓑兼当て馬にされたという経緯がある。

だが、この世界では転生者達はこう考えた。

『ヨルムンガンドを宇宙要塞の攻略に使えば良いのではないかと。』

確かに1発でザクが3機作れるというほどコストパフォーマンスが悪い兵器ではあるが、ザクと違って砲弾そのものに人が乗っているわけではないので、人的損害はない。

更に宇宙戦艦ヤマトの大きさとほぼ同等のマゼラン級戦艦を一撃で轟沈するほどの破壊力は強固な要塞の外壁を破壊するにはもってこいだった。

実際、要塞に設置されていた防衛設備の大半はヨルムンガンドの砲撃によって、砲弾そのものの破壊力によって破壊されるか、砲弾に纏ったプラズマによってショートして役に立たなくなっており、転生者達の狙いは正解だったと言える。

勿論、その高価な弾丸を多数撃ちまくったので、戦費の事を考えると頭が痛い筈なのだが、まともに攻略をやって大損害を受けるよりはよっぽどマシだ。

そして、それは本命である兵器——ソーラ・システムが発動するまでの時間を稼ぐことになった。

ソーラ・システム。

それは原作でソロモンを攻略する際に連邦軍が使用した大量破壊兵器だ。

それは虫眼鏡の原理で、太陽光を反射して集中的に浴びせるというからくりとなっている。

戦場で多数の巨大なパネルを組み立てなくてはならないという欠点はあるが、原理は簡単なので比較的簡単に作る事が可能だということも開発を後押しした。

もつとも、原作のジオンがア・バオア・クーで使ったソーラ・レイの方が威力も射程も長いのだが、あれは1度撃つと装填が面倒だし、コロニー1つを丸々使わなければならないのでこの世界では開発は見送られている。

そして、このソーラ・システムはただでさえヨルムンガンドによって大打撃を受けていたルナツー要塞に更なる打撃を与え、守備隊の士気をドン底に落とすことになった。

その隙を見逃さず、シーマ・ガラハウ中佐の率いる海兵隊とランバル少佐の率いる部隊が取り付き、内部へと侵攻していく。

もはや陥落は時間の問題だった。

「……副司令、ジオン艦隊にこう打診してくれ。降伏する、とな」

もはや抵抗は無意味だと判断した司令は降伏を選択した。

——その後、ルナツーの連邦軍司令部の降伏をもって戦闘は終結し、宇宙要塞ルナツーは陥落。

そして、このルナツー陥落により、ジオンは制宙権を完全に掌握することになった。

U C 0 0 7 9 年 1 月 1 5 日 邂逅

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 1月15日 サイド3 ズムシティ

連邦からの宣戦布告?から12日が経った1月15日。

ザビ家の次兄であるサスロ・ザビは気分転換を兼ねてズムシティの町を歩いていた。

(やはり連邦との戦いを長引かせるのは駄目だな)

サスロはザビ家の中でも国内の政務を担当しており、政治についてはザビ家の中でも一番手腕を振るっていると自負している。

しかし、だからこそ分かってしまうのだ。

このままではジオンが持たない、と。

この戦争が原作通りに1年で終わるのならば問題ないのだが、これが2年、3年と続くと、もはやジオンは経済的に破綻してしまう。

それを回避するには早期講和しかないのだが、相手である連邦がそれを承諾してくれないのだ。

(しかし、原作ではよくこの3分の1の国力で戦えたな。原作の3倍になった今のジオンの国力でさえ十分キツイのに。・・・いや、あれはコロニー落としとかをやって連邦の国力を出来るだけ削いだからなのか?)

サスロはそう考える。

キシリアの情報を信じるならば、現在、連邦はようやく戦時体制に入り、動員や軍需工場などのフル稼働を始めたところだという。

この世界ではコロニー落としは行われておらず、連邦の国力の減退はあまり無い。

原作でさえ、1年以内に何百もの艦船を建造できたことを考えると、この世界では先のルウム沖会戦での損害も半年程で回復できると見て良かった。

(おまけに向こうにダイクン家の遺児が付いているせいで一部の将兵の士気が低下している。こんなんでも本当に勝てるのか?)

そう、原作でもそうだが、この国の名称にジオンと名が付けられている時点で、ジオン・ズム・ダイクンの存在はサイド3の住民の心の中に残っている。

勿論、ジオン・ズム・ダイクンが亡くなったのはもう10年以上前なので、その間にサイド3に移り住んだ住民についてはそうでもないし、中には憎むべき連邦に与したアルテイシアという人物に対して裏切り者という視線を向けている人間も決して少なくはない。

だが、それでもサイド3の住民の大半は動揺しており、おまけに仕方がなかったとはいえ、開戦直後にザビ家がダイクン派の過激派を拘束したこともあって、ダイクン派の将兵は明らかに士気を落としていた。

(・・・やれやれ。原作よりも厳しい環境だな。まあ、それでも今さら止める気はないが)

そう思いながら、サスロは周囲を見る。

そこには文明レベルこそ違うものの、子供が学校に通い、大人は家族を養うために仕事をし、中には母親と子供と一緒に買い物に出掛けている日常の光景があった。

2年前に連邦軍の艦艇が農業コロニーに激突したのを発端としたジオンの住民のデモと鎮圧にきた連邦軍の部隊が争いになったことがあったが、今ではその傷も癒えている。

前世ではアニメの中の光景でしかなかったが、転生した今ではその人々の暮らしは現実なのだ。

そして、今の自分にはその暮らしを護る義務がある。

サスロも他の転生者達もそう思いながらジオンの政治に取り組んでいた。



(さて、帰ったらまた兄上達と今後の方針について話し合わねばな)

サスロはそう思いながら、帰路に着こうとする。

だが、考え事をしていたのが祟ったのか、正面から歩いてきた1人の子供とぶつかってしまう。

「おっと！君、大丈夫・・・か？」

サスロがぶつかったことで尻込みを着いてしまった子供にその声をかけるサスロだったが、その少年の顔を見た瞬間、目を大きく見開いた。

何故なら、そこには――

「いてて。あつ！えつと・・・大丈夫、です？」

前世で自分の故郷の公用語だった日本語を使う東洋系の顔立ちをした眼鏡を掛けた10歳頃の少年。

それだけなら珍しくもないが、問題は顔立ちだった。

そう、そっくりだったのだ。

前世ではガンダムとは全く別の国民的アニメの副主人公である小学5年生の少年――野比のび太と。

――そして、この日を境に物語は本格的な始動を見せることになる。



「「野比のび太と会ったあ!!」」

会議の場で言われたサスロの発言に一同は驚く。

「ああ」

「ど、どういうことだ!？」

「実はな——」

サスロはそう言つてのび太から聞いた事情を説明する。

「どうやら彼はこの世界とは違う本来の世界、すなわちドラえもんの世界に居たらしいのだが、突然、謎の人物の襲撃を受けて気づけばこの世界へとやって来たとの事だった。」

「ちなみに時系列的には劇場版の大冒険を全て終えて、11歳の誕生日を迎える前日の小学5年生の8月6日らしいぞ」

「「「・・・」」」

その説明にサスロ以外の一同は沈黙せざるを得なかった。それはそうだろう。

ガンダムとは全く関係の無い“ドラえもん”の世界から、その主要人物がやって来るとは夢にも思っていなかったのだから。

そして、そんな中、いち早く立ち直ったのはやはりというべきか、IQ240の頭脳を持つギレン・ザビだった。

「・・・なるほど。それで、対応はどうするんだ？」

「・・・」

ギレンの問いに、サスロは目を逸らす。

はつきり言って、野比のび太は爆弾そのものだ。

そして、野比のび太がこの世界に来ると分かれば、ドラえもんもこの世界に来てしまう可能性が高い。

そのまま連れて帰ってくれるだけならば問題ないのだが、ここで一番厄介なのが、戦争に介入されることだった。

ドラえもんの秘密道具は物理現象すらひっくり返せる力があり、万が一、ジオンの敵に回った場合、まず間違いなくジオンは終わりだ。

かといって味方に回ってしまえば、それはそれで問題がある。

それをしてしまえば、戦争は短期でジオンの勝利に終わるのだろうが、今度はジオンを始めとしたスペースノイドの増長が始まってしまい、新たな争いの火種になる可能性が高い。

「結論を言えば、さっさとお帰り願いたいですね。・・・まあ、そうはならないでしょうが」

ガルマはそう呟く。

ドラえもんの世界もそうだが、アニメの世界というのは他の世界に転移したりすると、そこに何らかの意味があったりするのだ。

そして、今回の事態もそうである可能性が高い。

だが、転生者達としては戦いに介入されても正直迷惑なので、なるべく自分達とは関係のないところでそのようなことが起こって欲し

かった。

「しかし、放置するのは不味い。それをしたら何かが起こった時、彼らが何をするか把握できなくなる」

「それはそうですが・・・誰が面倒を見るんです?」

「それは・・・」

キシリアのその問いには流石のサスロも答えを窮する。

なにしろ、ここに居る人間は全て連邦との戦争で忙しいのだから。

しかし、サスロの言った通り、放置しておくのは不味いというのもまた確かだった。

「・・・ミノフスキー博士の元に預けよう」

そう呟いたのはギレンだった。

そして、その瞬間、全員が一斉にギレンの方を見る。

「兄上、それはいったいどういうお考えで?」

キシリアはそう尋ねた。

ミノフスキー博士は言うまでもなく、ミノフスキー物理学を提唱した人物であり、人道派の研究者として知られていて原作ではそれゆえにジオンの狂気から逃れるために連邦に亡命しようとしてキシリアの諜報機関に暗殺されている人物だったが、この世界ではジオンに残っており、現在はフラナガン博士に代わってニュータイプの研究を行っている。

だが、何故、彼の元に預けるといふ結論に至ったのか分からず、キシリアは首を傾げていた。

「奴はニュータイプになる可能性がある」

「ニュータイプに？ああ、そう言えば確かに新宇宙開拓史ではそんな兆候があった気もしましたが・・・」

ガルマはそう言いながら前世で見た新宇宙開拓史の話を思い出す。確かにあの時、のび太は地球はおろか、銀河系という存在すら知らない宇宙の彼方の星に居たロップルの危機を関知して見せた。

それを考慮したら、確かにのび太にはニュータイプの素養はあるのだろう。

だが――

「しかし、兄貴。あいつは11、いや、誕生日を迎えていなかったらしいから10だぞ。もし戦いに駆り出すつもりだとしたら、色々問題がある」

「いや、駆り出すつもりはない。私もそこまで外道ではないし、ドラえもん達を敵に回す可能性のあるような行為はしたくない。それにジオンが勝っている今ではそんな必要性もないしな。だが、下手なところに預けてもしょうがないというのも確かだ」

なにしろ、開戦やら粛清やらから時間が経ってないせいで、ジオン国内はガタガタしている。

一応、国民の間では連邦艦隊撃破などの功績によって、そういったものはうやむやになっているが、実際に粛清の被害を受けているダイクン派はそうはいかないし、そもそもザビ家も全てのダイクン派を把握しているわけではない。

その為、先鋭化したダイクン派がテロを起こす可能性というのも十分存在するのだ。

更に言えば、周りが大人という光景も知り合いがこの世界に居ないのび太では精神的に負担になる。

それならば、重要施設な為に警備が整っていて、人の出入りも少なく、尚且つのび太と同年代の人間が集まる場所にのび太を置いた方が色々と手間が掛からないだろう。

そして、そんな場所はミノフスキー博士が管轄するニュータイプ研究所くらいしかない。

そう説明をするギレンだったが、彼は1つだけ忘れていた。

「なるほど、それは確かに妙案かもしれないが……1つだけ忘れている点があるぞ」

「なんだ？」

「言葉だよ。あいつは英語話せないぞ」

そう、実はジオンを含めたこの世界で使う言語は基本的に英語だ。

だが、のび太は当然の事ながら日本語しか話せない。

そして、転生者達は前世が日本人だったからこそ、日本語を話せるが、ジオンで日本語を話せる者はほとんど居ないと言っても良く、転生者達抜きでは事実上会話は不可能だった。

「……そうか。それを忘れていたな」

「まあ、ドラえもんのアニメの中じゃ何故か“ほんやくこんにやく”を使わずに宇宙人や外国人と意思疎通が出来たりしたこともあったが、今回はそれに当てはまらなかったらしい」

「じゃあ、私が時折面倒を見に行こう。あとは本人がどうにか英語を覚えて貰うしかないな」

この世界にどれだけ居るかは分からないが、何日も居るのであれば英語の習得は必須だ。

そして、こればかりはギレン本人でもどうにもならないので、本人に覚えて貰うしかなかった。

「そうか。まあ、兄貴がそう言うなら・・・」

「うむ、他の者は何か有るか？」

「いや、無い」

「有りません」

「ええ、ちゃんと面倒を見てあげてください」

「しつかりな、ギレン」

「はい、分かっております」

ギレンはそう言って、全員の前でのび太の身柄を預かる旨を告げた。

UC0079年 1月20日 交渉決裂

◇宇宙世紀0079年 1月20日 サイド3 ニュータイプ研  
究所

「やあ、久しぶりだね」

「あつ、ギレンさん」

のび太がこの世界にやって来て5日。

ギレンはミノフスキー博士の元に預けたのび太の様子を見に来ていた。

「どうかな？ミノフスキー博士はよくしてくれるかな？」

「はい、ミノフスキーさんにはお世話になっています。あとメイさんやアムロさんが作ってくれたシミュレーションも面白くて、非常に充実しています」

のび太は笑顔でそう答える。

ちなみにメイというのは、メイカーウインの事であり、本来はニュータイプではないのだが、彼女の本家であるカーウイン家がダイクン派であった為に今回の騒ぎで完全に没落してしまったこと、更にはニュータイプ用のMSやMS用シミュレーションを作る過程で有用な人材だと思われたことなどから、ここに送り込まれていた。

「そうか。それは良かった」

「あ、あの・・・一つ聞きたいことがあるんですが・・・」

「ん？なんだ？」



「その……ここは軍隊の施設だと聞いたのですが、もしかして僕たちも戦争に駆り出されたりするんでしょうか？」

「ああ、その事か。それはないよ。今のところ、ジオンは勝っているしね」

基本的にこの世界の兵役基準は旧世紀のジュネーヴ条約を遵守しており、徴兵は18歳、志願の場合は15歳からという決まりが存在する。

だが、のび太は現在10歳。

まだ徴兵どころか、志願の年齢にすら達していない。

もともと、この施設に居る人間に関しては15歳に達していなくても志願できるという他にはない特殊な規則があったりするのだが、それを言うつもりはギレンには無かった。

言ったら、何かが起こりそうで怖かったからだ。

「今、妹のキシリアが南極で和平交渉をしているよ」

「南極？あんなところでですか？」

のび太は首を傾げる。

南極はのび太も行ったことがある（のび太の南極カチコチ大冒険）から分かるが、氷の大地であり、かなり寒い。

正直、会談を行うのに適している場所とはとても思えなかった。

「ああ、そうだ。今回の場合は相手側の顔を立てる必要もあってね。だが、我々も向こうの土俵に出向くのは危険が大きいから、南極でということになったんだ」

「そうなんですか」

「うむ。それに仮にこの交渉が決裂しても、君が戦争の地に赴くことにはならないだろう。そこら辺は安心して良い」

嘘は言っていない。

確かにルウム沖会戦では少なくない被害を負ったジオン軍だが、1ヶ月程度で回復可能な損害でしかないし、動員を開始したジオン本国を始め、サイド共栄圏構想に賛同した各サイドから次々と義勇軍が集まり続けている。

つまり、現状でニュータイプ部隊を前線に出す必要は全く無かったのだ。

・・・もつとも、コロニー落としが行われていないこともあって、連邦も原作より消耗が少ないのだが、それは気にしても仕方がないだろう。

「そ、そうですか。それは良かった」

のび太は心底安堵している様子だった。

そもそももののび太の場合、戦いの才能が有るのは劇場版を見れば明らかだが、肝心な覚悟が今一なのだ。

まあ、ここぞというときにはキチンとした決断力を発揮するが、そうでない限りはこの通りだった。

「・・・ところで、君のニュータイプ能力をミノフスキー博士はどう評価しているのかな?」

「あつ、はい。アムロさんと同じか、若干上回るくらいだと言われました」

「ほう、そうか」

アムロと同じということはかなりニュータイプとしての能力があるということだ。

まあ、流石に最高のニュータイプと言われたカミーユ・ビダンには及ばないのだろうが、グリプス戦役のカミーユ・ビダンの末路を考えれば、あまり感受性が高いのも良いとは言えない。

「あまり無理はするな。あと実験に協力している分、給料はちゃんと出すから、しっかり受け取りたまえ。・・・早く仲間が迎えに来ると良いな」

「はいーありがとうございます!!」

「うむ、では」

そう言ってギレンはのび太の前から立ち去っていった。

#### ◇南極

ギレンがのび太と会っていた頃、南極ではジオンと連邦の交渉が行われていた。

「……こんな条件が呑めると思っているのですか？」

ジオン側代表キシリア・ザビはそう言って、連邦側の代表団に厳しい視線を向ける。

ジオン側の提案によってどうにか漕ぎ着けた南極会談であるが、原作と違い、早くも交渉決裂の空気が漂っていた。

ちなみにこの会談でジオンが出した和平条件はこうだ。

- ・ジオン公国の独立の承認。
- ・ジオンの国名をジオン公国からジオン共和国に改め、立憲民主的な政治体制を作る。

- ・サイド共栄圏の承認。

- ・ルナツーの連邦への返還と非武装化。

これはかなり連邦側の顔を立てた条件であり、正直、勝っている側が出す条件では破格と言っても良いだろう。

本来ならば、ここに連邦の軍備の制限を設けたかったのだが、流石にこれは連邦の反発を招くということで却下されている。

対して、連邦がジオンに出してきた条件はこうだ。

- ・ジオン公国の即時解体とジオン正統自治体の承認。

- ・デギン公王の退位とギレン・ザビを始めとした戦犯を連邦に引き渡す。

- ・サイド3の持つ全ての技術を連邦に開示する。

- ・3年間のサイド3の保証占領。

- ・……はつきり言って、無茶苦茶だった。

少なくとも、負けている側が出す条件ではないし、勝ってる側でこんな条件を飲むバカは居ないだろう。

だが、連邦はどうやら本気のようにだった。

「そうは仰いまして、我々としてはこれ以上妥協するつもりはありません」

連邦側の代表はそう言った。

その舐めているとしか思えない態度に、ジオン側の交渉団の1人が怒りにまみれた顔で何かを言おうとするが、それをキシリアが手で遮り、連邦に対してこのような言葉を返す。

「妥協？あなた達は自分の今の状況を分かっておられるのか？少なくとも、現在の状況で妥協という言葉を使うべきは我々だと思うが？」

妥協という言葉は勝ってる者が使うべきもの。

それが鉄則であり、現在の状況に当て嵌めるならば勝っているジオンが連邦に対して使うべきものだった。

特に今回の戦いは連邦から吹っ掛けてきているものであるから尚更だ。

それにそもそも連邦が出している条件はとても妥協しているとは言えず、ジオンからすれば暗に『お前らと交渉する気はねえよ』と言っているようにしか見えない。

「我々としてはテロリストと交渉しているだけでも大きな妥協なのです。それはお分かりいただきたい」

「ほう？そつちから喧嘩を吹っ掛けてきた癖にこちらをテロリスト呼ばわりか。更にそのテロリストに宇宙艦隊が壊滅させられているのにも関わらず、そこまでの態度を取れるとは。あなた方の面の皮はいったいどのような構造をしているのだろうか？」

連邦の代表にそう言って返すキシリア。

交渉の場で言う発言としてはかなり失礼な言葉だったが、先の条件から連邦に交渉の意思がないことを確認した以上、だからだと話を続けるつもりなどなかったし、遠慮などする必要はもつと無かった。

「無礼だぞ！今ここで貴様たちをテロリストの使者として拘束しても良いのだぞ!!」

「やれるものならやっていただきたいですな。まあ、その場合、ジオン軍はサイド7で建設中のコロニーを落とすかもしれないが」

キシリアはそう言う。

もつとも、これは勿論ブラフだが、転生者達が聞けば顔をひきつらせるだろう。

何故なら、サイド7の建設中コロニーは人もあまり居ないし、ギレンの野望の第二ブリティッシュ作戦からも分かる通り、コロニー落としをするにはうってつけの大きさだったりするからだ。

「そんな脅しに乗るか!!」

「では、交渉決裂ですな」

キシリアはそう言う立ち上がり、部屋を出ていく。

他のジオン側代表団もそれに続く。

そして、ある程度、会談場所から離れると、キシリアはジオン軍の連絡員の1人にこう言った。

「ギレン総帥に伝えよ。『交渉は決裂、戦争は続行』とな」

——こうして、後に第一次南極会談と言われる和平交渉は決裂し、ジオンと連邦の戦争は続くこととなった。

U C 0 0 7 9 年 1 月 2 1 日 地球方面軍設立

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 1月21日 サイド3 ニュータイプ研  
究所

「えっ、戦争の最前線に行く?」

その日の夕方。

いつもの通りシミュレーション訓練を終えたのび太は夕食を共に  
していたハマーンの言葉に驚いていた。

「うん」

「ど、どうして、いきなり」

「お父様のためだよ」

「お父さんの?」

「うん、メイのところもそうだけど、家はあまり良いように思われてい  
ないから」

そう、ハマーン・カーンの父であるマハラジャ・カーンは言うまで  
もなくダイクン派の人間だ。

彼については相応に使い、更には過激な人物ではないことから、ラ  
ンバ・ラルやシャア・アズナブル、更にはダグラス・ローデン大佐と  
同様に見逃されたが、当然、ザビ家以外のザビ派から厳しい視線を向  
けられていたし、粛清の際に何も被害を受けていないことから同じダ  
イクン派からの風当たりも強かった。

その為、マハラジャの心労がかなり溜まっているのをニュータイプ  
として感受性の高いハマーンは察しており、それを出来るだけ和ら

げ、更にはその冷たい視線を浴びせてくる者を見返すために戦場に赴いて活躍したいという思いがあったのだ。

「・・・それで、戦場に？」

のび太は眉をしかめた。

意外に思われるかもしれないが、のび太はこのニュータイプ研究所の中では一番実戦経験がある人間だったりする。

その理由は当然、劇場版などの大冒険を経験しているからだ、そういうった事情からのび太は並の新兵よりもよっぽど実戦という場の世界をよく知っていた。

それ故に分かるのだ。

戦場はそんなに簡単な場所ではない、と。

確かにのび太も大冒険の時、戦場で活躍して英雄として称えられたことはある。

だが、あれはかなり命懸けの戦いの末にもたらされたものだったし、狙ってやれと言われたらまず無理だし、やりたくもないというのが本音だった。

「あのさ。事情を聞いてやった後でこんなことあまり言いたくはないんだけど、危険な場所に進んでいくのは・・・」

「そこら辺は大丈夫。だって、私にはニュータイプとしての力もあるし」

「・・・」

ハマーンの言葉に、のび太は彼女が戦場という場を完全に軽視していると思わざるを得なかった。

力が有るからと言って必ず勝てるとは限らない。

戦いとなれば、力が無い方も必死で戦うし、そもそものび太自身、ド



ラえもんの秘密道具やその土地の環境を利用したりすることで大冒険で多数の敵相手に無双したりしたことがあるが、それでも数で押されたり、相手の策略によって危機に陥ったことも一度や二度ではないのだ。

なにより、1つ大きな問題がある。

「ハマーン。戦争は基本的に人を殺す行為だよ？」

「そう、それが問題だった。」

のび太も西部の時代に行った時に人を3人程殺したことがある。

あの時は自分の命が危なかったからこそうやむやに出来たが、もし自分から一方的に殺したのであれば、のび太は凄まじい罪悪感に押し潰されることになっただろう。

もったも、戦争に参加することそのものを否定するつもりなど無い。

戦わなければ守れないものも確かにあるのだから。

それに伴う殺しだって、一応は割り切れる。

だが、ハマーンのように（父親のためとはいえ）英雄になりたいからという事情であれば話は別だ。

流星にこれはのび太でも賛同はできないし、ハマーンのような女の子にそんなことをしてほしくは無かった。

しかし――

「うん、分かってるよ。当たり前じゃない」

「どうやらのび太の言葉の意図をハマーンは分かかっていないようだった。」

これは危険だ。

そう思ったのび太は更に言葉を発する。

「分かかってないよ。それにギレンさんは僕たちを前線に出す気はな

いって言ってたよ。そこのところはどうするつもり？」

「ああ、大丈夫よ。この研究所に居るニュータイプはどの年齢でも志願できるようになっていいるから」

「えっ？」

ハマーンの発言にのび太は驚いた。

そんなことになっているとは思わなかったからだ。

実はこのニュータイプ研究所に居る人間は、志願すれば例え15歳になつていなくとも戦場に参加できるという規則があったりする。

この制度は本来、万が一、原作同様にジオンが苦境に陥った場合のための規則だったのだが、ハマーンはこれを利用して前線に立つことを考えたのだ。

ちなみにギレン・ザビが昨日これをのび太に言わなかったのは、今まさにハマーンがやろうとしている事を、万が一にものび太がやることを恐れたからだったのだが、当然の事ながらのび太はそれを知らない。

「あつ、もうこんな時間。じゃあ、私、訓練に戻るから」

「あつ、ちょっとハマーン！」

訓練に戻ろうとするハマーンをのび太は慌てて呼び止めようとするが、ハマーンはそれを無視する形で食堂を出ていった。

「・・・どうしよう」

そして、後に残されたのび太はどうすれば良いのか分からず、頭を抱えていた。

◇ズムシテイ 総帥府

「地球方面軍の設立、か。出来ればこのような事態は避けたかったものだな」

ギレンはそのような言葉をこの世界でも愛人であり、秘書でもあるセシリア・アイリーンに溢す。

「はい、計画書を見ましたが、あまり良いものとは思えませんでした」  
それに対して、セシリアもまたギレンに賛同するように自身の意見を口にする。

予定されている地球降下作戦。  
その降下ポイントについては第一次、第二次については原作と全く同じ中央アジア、北米だった。

第三次については当初はジャブローを予定していたのだが、義勇軍などが予想以上に集まったことで原作と同じオセアニア方面に変更

されている。

だが、転生者ではないセシリアからしてみれば第三次降下作戦については不安しか残らない。

なにしろ、使う兵隊が義勇軍がほとんどなために練度に不安がある。

一応、ジオンからジムIを供与されてはいるが、MSにあまり慣れていない兵士が多く、更には装備も旧式ゆえに何処まで使い物になるか疑問だった。

しかも、作戦開始日は2月1日。

原作の地球降下作戦が3月1日であったことを考えれば、原作より1ヶ月も早いスケジュールだったが、これは原作より国力の消耗の少ない連邦に時間を与えないための処置だった。

しかし、これは同時にジオンの方も準備の期間が少ないことを意味している。

「まあ、そこら辺は仕方あるまい。元々想定外の時期での開戦だったのだからな。しかし、戦時条約が結ばれなかったのは痛いな」

ギレンは史実の南極条約のような戦時条約が結ばれていないことを残念に思った。

なにしろ、これが結ばれていないということは核などは撃ち放題であるし、捕虜も虐待し放題であることを意味するのだから。

まあ、そこまで極端な事態になるとは思いたくはないが、それが起こるのはガンダムの世界だったりする。

しかも、こちらは正義を標榜するためにも捕虜の虐待は厳禁にしなければならぬことを考えると、この不平等さから将兵の不満も出てくるだろう。

その対応にギレンは頭を悩ませていた。

「今からでも連邦に打診しましょうか？」

「いや、向こうは乗ってこないだろう。なにしろ、こちらがテロリストであるという姿勢は崩していないからな。それを認めてしまうと、連邦はテロリスト相手に妥協したということになってしまう。」

連邦は民主主義だ。

議会があり、与党もいれば野党も居る。

そして、与党が一度テロリストとして認定した以上、妥協を行えばその点を野党から追求されてしまう。

原作のように地球の人口が半減するような事態になったのならともかく、宇宙艦隊が壊滅した程度では政治的失点を恐れて妥協しない可能性が高い。

「それは・・・そうかもそれませんが・・・」

「それにあまりこちらから色々言い出すと、こちらの現状が苦しいと向こうに捉えられかねない。そうならないためにも、次回の和平の打診は連邦から言い出すようにしなければならぬ」

ギレンはそう言いながらも、ガンダムSEEDの連合とプラントのような関係になってしまった戦争に頭を痛めつつ、気になっていたあることをセシリアに聞く。

「・・・ところで話は変わるが、プル達の様子はどうなっている？」

ギレンはセシリアに預けている自分の娘であるエルピー・プル達プル・シリーズの様子を聞く。

長女であるエルピー・プルは試験管ベビーとして生まれ、誕生日は原作と同じUC0077年3月8日だ。

そして、産まれた直後は当初の予定通り、ニュータイプの実験台として使用される予定だったが、彼女の事を聞いたギレンは配下の部隊を使ってその研究所を制圧し、彼女を自分の養女とする形で引き取っ

ており、世話は基本的にセシリアや屋敷の使用人に任せていた。  
ちなみに他の11人の姉妹についても同様の処置を施している。

「はい、色々と体を弄くられていたようですが、一応はこれから生きていくのには支障はありません」

「・・・そうか。それは良かった」

ギレンはそれを聞いて、頬を少しだけ綻ばせていた。

U C 0 0 7 9 年 1 月 2 4 日 悩み

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 1月24日 サイド3 ニュータイプ研  
究所

「ご無沙汰しています。ギレン総帥。本日はどのようなご用件で」

「うむ。近々地球降下作戦を行う予定なのだが、この作戦に参加する  
ニュータイプに話を聞きたいと思ってな」

ミノフスキー博士の言葉に、ギレンはそう答える。

この研究所にはアムロやハマーン、のび太などの未成年の少年の  
ニュータイプの他にも、クスコ・アルやシャリア・ブルなどの大人の  
ニュータイプも居る。

そして、彼女らは軍人であるので、頃合いを見計らってジオン軍の  
ニュータイプ部隊に配属させる予定となっており、今日はその事でミ  
ノフスキー博士に話を聞くためにここを訪れたのだ。

「そうでしたか。クスコ・アル少尉、クランブル・カルレア少尉、シャ  
リア・ブル大尉については既にファンネルを使いこなしており、サイ  
コミュを機体に搭載すればMAだろうと、MSだろうと戦果を挙げら  
れるでしょう。しかし——」

「しかし?。」

「この3人はいずれもアムロ君、ハマーン君、のび太君の3人には  
ニュータイプ能力がどうしても劣ってしまいます。特にアムロ君と  
のび太君は天才で、既にアムロ君は操縦技術全般で、のび太君は射撃  
技術で先程言った3人を追い抜いています」

「・・・」

その報告にギレンはひきつった顔をしつつ、こう思った。  
流石は物語の主人公達、と。

「そうか。だが、アムロ君やのび太君を前線に出すつもりは今のところ無い。ミノフスキー博士は先程言った3人を実戦投入するように調整してくれ」

「はい、了解しました。ですが、その・・・」

「なんだ？」

「はっ。実はハマーン君とアムロ君がジオン軍に志願すると言っているのです」

「なに？」

ギレンは眉を顰める。

ハマーンはまだ分かった。

原作のZ期と違って戦いが出来そうな少女には見えなかったが、何らかの事情で戦うことを決意したのだろうと察することは出来たからだ。

しかし、アムロはどうだろうか？

正直、あの人物は一年戦争後ともかくとしてこの期間はただの引きこもりだった。

まあ、この世界では違うが、それでも戦争に積極的に参加するような輩には見えない。

そう思い、ギレンは事情を聞いてみることにした。

「ジオン国民であるハマーン君はともかくとして、アムロ君は何故志願したのか言ったのか？」



「あつ、はい。彼はどうやら同じく戦場に行くことになったメイ君と仲が良いらしく、彼女の助けになりたいとのことですよ」

「ほう」

それを聞いたギレンは原作のアムロを思い返す。

原作のアムロは一言で言ってしまうえば、ナイーブな少年だ。

幼馴染みの肉親がジオンのザクに殺されたからと、近くにあったガンダムに乗ってザクと戦ったり、ガンダムに乗ってホワイトベースから脱走したりしている（ついでにジオンの基地も1つ潰した）。

つまり、物凄い気難しい性格をしていて、少々傲慢なところはあるが、正義感も確かにあつて芯の強い性格をしているというのがギレンの原作アムロの評価だった。

この世界ではどうなのかは知らないが、この施設で他人と上手く交流しているところから見ると、一年戦争とその後の中間辺りの性格となっているのだろうとギレンは思う。

（確かにアムロならば、仲の良い少女が戦争に行くとなったらほっとけないだろうな。ましてや、彼女はアムロの1つ年下だからな）

ギレンは『アムロINジオン』とはなんの冗談だと内心で思いつつ、ミノフスキーに対してこう言った。

「分かった。ハマーン君とアムロ君の軍への参加については了承しよう。細かい調整はミノフスキー博士に任せる。それと他に何か気づいたことはないかね？」

「他にですか？そうすな・・・そう言えば、のび太くんが何か悩んでいる様子でしたな」

「ほう？分かった。私が直々に話してみよう。彼は今どこに居る？」

「先程まで中庭に居りましたが・・・」

「分かった。ありがとう、ミノフスキー博士」

ギレンはミノフスキー博士に礼を言くと、のび太に会うためにその部屋から立ち去っていった。



「ここに居たか」

ミノフスキー博士と別れ、中庭にやって来たギレンは丁度中庭のベンチに座っていたのび太の姿を発見して声を掛けた。

「あっ、ギレンさん」

「隣、良いかな？」

「あつ、はい。大丈夫です」

のび太に断りを入れ、ギレンはのび太の隣に座る。

「さて、時間もないので単刀直入に聞こう。ミノフスキー博士から何か悩みが有ると聞いたが、良ければ話してくれないかな？」

ギレンは真剣そうな顔でそう尋ねる。

これは赤の他人の子供に対しての対応と考えれば大袈裟ではあつたが、のび太の場合は違う。

彼の感じる違和感は、何かしらの“大事”が起きる前兆を意味しているといった場合もよくある事なのだから。

そして、このギレンの真剣そうな顔にのび太は少々引き気味になったが、やがてポツポツと言葉を溢す。

「・・・実はこの研究所に勤めている女の子が戦場に出たいと言っているんですが、それをどうやって止めるかで悩んでいました」

「なるほど。まあ、その気持ちは分かる。誰しも友人に戦場に出て欲しくないと思うだろうからな」

人間というのは、誰しも親しい人間には危ないことをして欲しくないと考えるものだ。

まあ、中にはそれに該当しない友情も有るのだが、それは良くも悪くも“普通の友情”とは決して言えないだろう。

そう思えば、のび太がせっかく友達になった女の子（おそらくハマーン）に戦場に行つて欲しくないという言い分も分かる。

だが――

「しかし、それはその女の子が決めることだぞ。君が友人であるならば止める権利くらいはあるだろうが、それはその女の子の決意を踏みじじる行為でもあるのだぞ？」

「それは・・・分かってはいるつもりです。でも、あの子は英雄として名を売るために戦場に行くと言っているんです。そんな理由で戦場に行つて人を殺すなんて、敵もハマーン自身も可哀想ですよ」

「・・・ふむ」

ギレンはのび太の考え方に少し舌を巻いた。

10歳の少年にしてはなかなかよく出来た考え方だと思つたからだ。

この年代の男の子というのは英雄だの名誉などの偶像に惑わされがちであり、英雄の敵である「悪」に対して情けを掛けるなどあり得ない。

しかし、確かに自分の名を売る為に相手の命を踏みつけにするというのは、その踏み台にされる敵の人間があまりにも可哀想だし、そんな血にまみれた英雄という偶像を被る人間の末路など、歴史的に見てほとんど悲惨なものと決まっている事を考えれば、のび太の考え方は非常に的を射ていた。

(これは凄い大人な考え方だな。野比のび太というキャラは「心優しく、いざという時には勇敢だが、臆病で頭が悪くて、めんどくさがり」というのが前世での評価だったが、これは認識を改める必要があるな)

ギレンはそう思った。

そもそものび太は意外に思われるかもしれないが、頭の回転は早い方だ。

でなければ、癖の強い秘密道具などを使いこなすことは出来ないだろうし、劇場版ではのび太の頭の回転の早さによって救われた場面が結構あったりする。

そして、今、のび太が口にした考え方は少なくとも原作ガルマよりはよっぽど大人な考え方だった。

そこら辺は流石、国民的アニメであるドラえもんの副主人公というだけはあるのだろう。

「君の考え方は分かった。それをハマーンには言つたのかね？」

「ええ、言いました。・・・まあ、その事で昨日、喧嘩しちゃいましたけど」

「ふむ、それで君はどうしたいのだ？」

「えっ？」

「私から君に提示できる選択肢は2つだ。1つはこのまましつこく説得を続けること。もう1つは戦場に出て彼女を守ることだ」

「!?でも、それは・・・」

「うむ、戦場に出るということは人を殺すことだ。当然、殺された方にも遺族が居るわけだから、そういった面々からも恨まれるだろうな。なにより、君自身への命の危険もある」

「・・・」

のび太はギレンの言葉に押し黙る。

二つ目の提案はのび太も少しは考えたのだ。

だが、命の危険についてはこれまでも大冒険で散々経験してきたか

ら良いのだが、どうしても人を殺すという行為が受け付けられず、無意識のうちにそれを却下していた。

「それでも彼女を守るかね？」

「……人を殺すのはともかく、守るのは確かだと思います」

ギレンの言葉にのび太はそう返すが、それは甘いとギレンは感じていた。

「それでは甘い。人を殺してでも友達を、仲間を守る覚悟があるのか？その覚悟を私は君に説いている」

「……」

「まあ、いきなりこんなことを言われても困るか。そこら辺はゆつくり考えたまえ。少年」

ギレンはそう言うと、ベンチから立ち上がり、のび太の前から立ち去っていく。

あとに残されたのび太はそれを見送りつつ、何かを考え込んでいた。

U C 0 0 7 9 年 1 月 2 5 日 覚悟

宇宙世紀<sup>U C</sup>0 0 7 9 年 1 月 2 5 日 サイド 3 ニュータイプ研究所  
M S 格納庫

「・・・」

ギレンにあの問いを投げ掛けられた翌日、のび太はM S 格納庫にやって来てそこに存在するM S——ジムを見上げていた。

(はあ、殺し合い、か。理屈は分かるんだけどなあ)

のび太は内心で溜め息をつきながら、昨日、ギレンに投げ掛けられた問いについて考える。

あの問いに関しては、のび太も理屈上では分かっているのだ。

本来、戦争とは生きるか死ぬか、勝つか負けるかの殺し合いではないと。

実際、人魚族の王女(今は女王だが)ソフィアに協力して海底での戦いを行った時、大勢の人魚族とそれなりの数の海魚族の兵士が海底で命を落としている光景を見てきた。

のび太達はその戦いに参加して命を狙われながらも、結局最後まで相手を殺すことは無かったが、本来、戦争とはあの時に人魚族と海魚族がやっていた殺し合いを表すのだろう。

いや、そもそもこののび太が今までの大冒険で相手を殺さずにいられたのは、単にドラえもんの道具があったからにすぎない。

西部での一件では本物の銃を扱いながらも、人に当てなければ良いとは気づいたが、それ以前には人を3人も殺してしまっているし、あんな都合の良い展開が早々来るわけもなかった。

「どうすれば、良いんだろうっ..」

覚悟を決めるべきなのか、それとも今まで通りにするべきなのか？  
正直、どっちも正しいと思う。

だが、後者はともかく、前者は正しいからといって簡単に踏み切れるようなものではない。

そこでのび太は再びジムを見る。

(確かモビルスーツって、作業用に作られたモビルなんとかつていうのを兵器に転用したものだって言っていたな。・・・そう言えば、ザンダクロスもそんな感じだったような)

のび太がジムを見て思い出すのは、かつて偶々“どこでもドア”北極で拾ったザンダクロスだった。

確かあれも元々は工作機械だったのを、軍事用に改造したものだと言っている。

(・・・お前は本当にそんな存在で良いのか?)

こんなことを問うのは見当違いだと分かっている。

モビルスーツは人間が乗って初めて動く兵器であり、そこに意思は存在しないのだから。

かつての鉄人兵団の時のピツポみたいな存在が居れば話は別だが、逆に言えばザンダクロスもピツポが居なければただの兵器にすぎなかっただろう。

「あれ？ノビタか？」

そんなことをのび太が考えていると、いつの間にか格納庫へと入ってきたアムロが声を掛けてきた。

ちなみにアムロの傍らにはメイの姿もある。

「アムロさん、メイさん・・・」



「こんなところで何してるの?」

「いえ、なんとなく眺めていただけです」

「そうなんだ。あつ、良かったら私が詳しく解説してあげるよ!」

「い、いえ、遠慮します」

メイの誘いをのび太は全力で断った。

以前同じようなことがあった時、メイのMS解説に二時間以上付き合わされた経験があるからだ。

しかも、専門的すぎてのび太には何を言っているのか全然分からなかった。

あれについていけるのは、正直アムロくらいなものだろう。

「遠慮しないで!」

「いえ、本当に大丈夫ですから!」

「そう?残念だなあ」

「あはは・・・あつ、そう言えばミノフスキー博士から聞きましたけど、アムロさんとメイさんは戦場に出られるんですたよね?」

「あつ、うん。まあね」

「よろしければ、その理由をお聞かせ願いませんか?なんか、別に戦況が不味いという訳でもないのに最前線に行くというのが少し気になっちやって・・・」

のび太はメイの誘いを断ってしまった罪悪感から逃れるために、半ば強引に話をすり替える。

もつとも、聞いてみたかったのは確かだったが。

「私はお父さんの為かな。まあ、大方ハマーンと同じだね。アムロは？　そう言えば、聞いてなかったけど」

「えっ、僕か？　僕は・・・」

メイの問いにアムロは若干言い籠るが、やがて言葉を紡ぎ出す。

「・・・僕は、メイやハマーンみたいな年下の女の子が戦場に出ているのに、自分だけ後方に下がっているのは違う、と思ったからかな。・・・ああ、勿論、ノビタは僕の考えに付き合う必要は無いぞ。君はまだメイやハマーンよりも小さいんだからな」

自分の考えを披露したものの、のび太がそれを真似して流されるように戦場に出たら大変だと、慌ててのび太に対して弁明する。

だが、のび太とは別にその言葉に対して不機嫌そうに頬を膨らませる1人の少女が居た。

「むー、アムロ。それじゃあ、私が頼りないみたいじゃない！」

「ええ!? いや、でも・・・」

「もういい！　ノビタ、行く」

「えっ、ちよっ・・・」

呼び止めようとするアムロを無視する形で、メイはのび太の腕を引っ張って格納庫を出ていった。

「ここでいっか」

◇

格納庫からのび太を連れ出したメイは昨日、ギレンと話した中庭までやって来ると、そのベンチへのび太を座らせる。

「メイさん？」

「それで、悩みってなに？」

「えっ？」

「あれ？違った？何か悩みごとがあるんじゃないかと思っていただけど……」

メイはこのところ、のび太が何かを思い悩んでいたことから、何か悩み事があるのではないかという事は薄々察していた。

まあ、切っ掛けが無かったことから遠目に心配するだけだったのだ

が、今日が良い機会だと捉えたメイはのび太の相談に乗ることにしたのだ。

「あはは、鋭いですね」

「ううん、たぶんアムロも気づいていたと思うよ。ただ触れなかっただけで」

「そうでしたか・・・」

のび太は皆に心配を掛けていたという事に気づき、それを反省しつつ、この際なので自分の悩みをメイに打ち明けることにした。

「実は——」

のび太は昨日、ギレンと話した内容をメイに伝える。

「——そうだったんだ。で、ノビタはそれに対してどう思っているの？」

「・・・友達の為に戦うのは良いんです。それには命を賭けなければいけないことも勿論分かっています。ただ、相手を殺すということに踏ん切りがつかないんです」

そう、命を賭けて戦う覚悟は既に出来ている。

これについては今までの大冒険でもよくあったことだったので、然程抵抗はない。

しかし、殺すとなると話は別であり、のび太はその点に踏ん切りがついていなかったのだ。

「・・・」

メイはこの言葉を聞いて、どう声を掛けるべきか悩んだ。

本来なら、ここでお姉さん面を吹かせてのび太を抱き締めながら『君は戦う必要はないんだよ』と言ってあげるべきなのだろう。

しかし・・・同時に妬ましい気持ちも存在した。

(この子はザビ家の庇護を受けている子だった)

メイの実家であるカーウィン家はダイクン派であり、またメイ本人が天才的なメカニクだった上に、ザビ家がダイクン派に対する融和を行っていたこともあって、なに不自由ない生活を送っていたのだが、先の開戦時のアルテイシア・ソム・ダイクンが連邦の旗印として立った一件で、ダイクン派のほとんどはザビ家によって肅清されることになり、その余波でメイの実家であるカーウィン家も没落することになった。

また先日、実家が反連邦派の暴徒に襲われて両親が亡くなったという凶報を受けてしまったこともあって、メイはその原因を作ったザビ家の事をよく思っていない。

もつとも、それをザビ家の人間が聞けばこう言うだろう。

勝手に国を売り払うような真似をしたジンバ・ラルが悪く、彼がダイクン派だったことが不幸だったのだ、と。

だが、そんな裏事情を知らないメイにはザビ家が悪いように思えてならなかったのだ。

そして、ニュータイプ適性の高いのび太はそのメイの悪感情を敏感に感じ取っていた。

(メイさん。どうしたんだろう?)

突如、黒々としたものがメイから漂ってくることに、のび太は困惑していた。

だが、そんなのび太を他所に、メイはこのような事を言い出す。

「・・・ねえ、ノビタ。仮に私がノビタに対して『私の為に戦って』って言ったら、ノビタは了承してくれる？」

「・・・は？」

「どうなの？」

「えっ、そりゃあ、メイさんは大事な友達だから、やれと言われればやるけど・・・」

「良かった。じゃあ、お願い。『私の為に敵——連邦の人達を殺して』」

「メイさん？」

過激な発言が目立ってきたメイに、のび太は益々困惑の色合いを見せる。

当然だ。

会ってまだ1週間程であるが、メイがそのようなことを言う人物ではないことはよく知っていたのだから。

(どういうことなんだろう?)

のび太はその意図を考えるが、その隙をメイは与えずに更に言葉を重ねる。

「私はアムロにもハマーンにも死んで欲しくないの。でも、私はMSのパイロットになれない。だから、あなたの協力が必要なの！」

「・・・」

その叫びのような声に、のび太はあることに思い至った。

(そっか。メイさん、自分が戦えないことに劣等感を抱いているのか。だから、こんな黒い感情なんだ)

元の世界で劣等生だったこともあり、のび太は劣等感という感情のことをよく知っている。

だからこそ、MSの才能が比較的あるのび太の事を羨み、代わりに仇を取ってほしいのだろう。

(・・・でも、それでも僕は)

気持ちは分かる。

だが、それでものび太は躊躇う。

そんなのび太にメイは決定的な一言を話す。

「お願い！お父さんもお母さんももう居ないの!!連邦の人に殺されちゃったの!!」

のび太はその言葉に衝撃を受けた。

まさか、そんな過去があったとは思わなかったからだ。

実際はその話は半分は嘘だった。

確かにメイの実家が反連邦派の襲撃を受けたのは、間接的には連邦がアルテイシアを首魁にしたジオン正統自治体を立ち上げたのが原因だ。

しかし、直接手を下したのは反連邦派の人間だったので、そういう意味ではメイの言っていることは丸つきり嘘なのだが、のび太はそんなことは知らないため、勝手に勘違いをしてしまう。

(メイさんの両親が・・・)

その事実のにび太は若干の怒りを抱く。

それでも憎悪に呑まれることは流石にない。

両親を失った悲しみなど、当のメイ本人にしか分からないし、なんだかんだ言っても所詮は他人事なのだから。

だが、のび太にとつての不幸はそう断じる事が出来るほど、冷徹な思考にはなれなかった事だろう。

まあ、小学生でそれだけの冷徹な思考を行うのは無理があるし、出来たとしても逆に怖い。

しかし、この場合は完全に裏目に出ていた。

(覚悟を決めるしかない、か)

事ここに至り、のび太は遂に覚悟を決めた。

だが、このままメイの家族の仇を取るために立ち上がるというのも何か違う気がしたので、のび太はメイに対してこう宣言した。

「分かったよ。僕がメイさんの両親の代わりにメイさんを守る。僕はその為に戦うよ」

のび太は笑顔でそう答える。

これが正解かどうかなど分からない。

だが、ここでメイを放っておけば一生の後悔をすることになる。

のび太はそう直感していた。



UC0079年 1月27日 罪悪感

◇宇宙世紀0079年 1月27日 サイド3 ニュータイプ研  
究所

「そうか。軍に参加することに決めたのか」

「はい」

ギレンの問いに、のび太はそう答える。

あの決意をしてから2日。

再び様子見としてやって来たギレンにあの時の解答を尋ねられたのび太は軍に参加する旨を伝えていた。

(随分と早いな。もう少し掛かるかと思ったんだが・・・)

あの日、ハマーンとのことを話された時、のび太が前線に参加するようになるのは既に確信していた。

なにしろ、映画などでは最初は躊躇っていたが、最終的には戦いに参加していたのだ。

そうなくても可笑しくはないし、勝手に参加する可能性もあるのだ、そうなるくらいならばこちらでコントロールしようと、ギレンはあの提案を提示したのだが、同時にここまで早く参戦の意思を示したのは予想外だった。

(ハマーンが出撃した直後か直前辺りで参加するものと思っていたが・・・まあ、この程度は許容範囲か。何があったかは知らないが、気にすることは無かろう)

ギレンはそう思い、細かいことについては詮索しないことを決める。

ちなみにこの時、ギレンはメイとのび太のやり取りを知らなかったが、その心情と台詞を知っていたら内心でこう思っただろう。

『お前はフレイ・アルスターか!!』、と。

まあ、のび太はキラ・ヤマト程追い詰められた状況には無かったので、参戦を選んだのは完全にのび太の意思であったが、メイの台詞が切っ掛けになったというのは確かだった。

「今さら聞くまでもないと思うが、軍というのは合法的な人殺し組織だ。戦場に立てば、君もその手を汚すことになるのだぞ?。」

最後通牒と言わんばかりにギレンはのび太に尋ねる。

のび太が1度意思を固めた時の強さを知っているギレンはこんな質問は無意味だと思っていたが、同時にのび太が何処までの覚悟を見せているのかを確かめるためにこのような問いを投げ掛けたのだ。

もしのび太が相手を殺したくないなどという事を言えば、『甘い!』と断じて参加させないつもりだった。

シロー・アマダのように『味方を死なせない』というのなら良い。

その志は軍人として甘いとも取れるが、人間としては立派であるし、正直、軍としても兵士にポンポンと死なれても困るので、シロー・アマダの考え方も決して間違っているという訳ではないのだから。

しかし、マット・ヒーリイのように相手を殺さないという考え方は、味方の命という形で代償を払わされる可能性が高く、とてもではないが賛同できない。

だが――

「もう覚悟は出来ています」

ギレンの再度の問いにも、のび太はきっぱりとそう答えた。

その目に迷いはない。

この1度決めたら中途半端な覚悟はしないというところも、ある意味でのび太の良いところでもあった。

「では、これで最後の問いだ。これに答えられれば入隊を認めよう。軍に参加している時、元の世界から君の仲間が迎えに来た。君はどうする?」

これも聞いておきたいことだった。

のび太が勝手に抜け出して、元の世界に帰る程度なら良い。

元々、のび太達が居なかつたとしてもなんとかなるようにジオンの戦略は組まれているのだから。

しかし、参戦されるとなると、良くも悪くも非常に面倒なことになるため、のび太が友人を巻き込むようだったら、それを止めるつもりだった。

だが、これについてものび太はきっぱりとギレンにこう答えた。

「この戦争が終わるまでは帰れない。そう言うつもりです」

のび太はあらかじめ用意しておいた解答を口にする。

仲間が迎えに来たらどうするか?

それはこの2日間で考えた。

しかし、それでものび太は戦場に留まるだろう。

既に1人の女の子を放っておけなくなってしまったのだから。

「・・・そうか。そこまで言うのであれば問題なからう。君にはアムロやメイ君、ハマーンと同じ准尉の階級を与えよう。ただし、未成年に階級を与えることになるので、特務階級になる。これから人に階級を尋ねられた時はノビタ・ノビ特務准尉と名乗れ」

「はい!分かりました!!」

ギレンの言葉にのび太はそう返答した。

◇同時刻 MS格納庫

「・・・」

「メイ、どうしたんだ？ポケツとして」

「あつ、アムロ。いえ、なんでもないの」

「そうかい？集中できていないみたいだったけど・・・」

「本当になんでもないの。気にしないで」

「・・・そっか」

聞かれたくないといったメイの感じに、アムロはそれ以上踏み込むのを止める。

しつこく言ったところで話してはくれないし、逆に頑なになると思っただからだ。

だが、これだけは言っておかなければならない。

「でも、メイ。今はMSの整備中だ。僕たちがミスれば操縦者の大事になりかねないから、集中してやらないと・・・」

「分かってる!!」

アムロの注意に、メイはヒステリックに叫ぶ。

その声にアムロは怒るよりも先に困惑してしまった。

(どうしたんだろう?)

思えば一昨日から様子が可笑しかった。

メイがのび太を連れ出した後、今日と同じMSの整備をするために格納庫に戻ってきた時にはこうなっていたのだ。

(何かのび太に言われたのかな?)

だが、それにしても空気が可笑的。

あの子ののび太はメイとは逆に何か晴れ晴れとした様子であり、喧嘩したようには見えなかった。

もつとも、のび太がメイに酷いことを言ったのにも関わらず、そういう態度を取っているなら話は別だが、のび太がメイを悪く言う様子はなかったし、そんな感情も感じ取れない。

なにより、のび太がそんなことを言うとはアムロも信じられなかった。

(いったいどういふことなんだろう?)

アムロはそんな疑問を抱きながらも、やはり答えは出ない。

一方、アムロにそんなことを思われているとは露知らず、メイは物凄く罪悪感に悩まされていた。

(なんで、あんなこと言っちゃったんだろう)

あの時はザビ家への憎しみから忘れていたが、冷静になって考えればのび太はまだ10歳の少年だ。

しかも、別に血縁者というわけではなく、庇護を受けているだけ。そんな人間を戦いに駆り立てるのは、ザビ家以下の所業ではないか？

そのような考えがメイを蝕んでいた。

(今からでも、ノビタに謝ろうかな?でも……)

メイはのび太の言葉を思い出す。

あの時、のび太は自分の復讐のためではなく、自分を守るために戦うと言ってくれた。

これが復讐を肩代わりしてくれていると言っているのであれば、メイがそれを止めてくれと言われればなんとかなる。

しかし、守ると言うのであれば、流石に自分では止められないし、止めたところでそれは自分が謙遜しているように見えてしまう。

……いや、これは言い訳だ。

のび太を戦場に出さないためにメイが取れる手段の中で、なにが一番良い手段なのかは、本当はメイには分かっていた。

あの時の自分の内心を全て暴露して戦いに駆り立てるように仕向けたことを謝罪すれば良いのだ。

幸い、今なら戦場にも立っていないので、取り返しがつく可能性が

ある。

しかし、それには1つ問題があった。

(そうになったら、ノビタに嫌われちゃう)

それはメイに自分の内心を話す勇気を出すことが出来なかったこと。

何故なら、それをすればのび太に嫌われてしまうとメイは考えていたからだ。

この前のあれによって、メイは無意識のうちにのび太に心を奪われてしまっており、のび太に嫌われることを恐れるようになってしまった。

これはメイの事情(嘘)を聞いても、他人の復讐を肩代わりするのではなく、メイを守ると発言したところのはのび太の何時もの優しさから出たものであったが、今回に限っては完全に裏目に出ていた。

(・・・ごめん。ごめんね、ノビタ)

メイはのび太を戦いに巻き込むことになった切っ掛けを作ってしまった罪悪感と本当の伝えることが出来ない自分の精神的な弱さへの嫌悪感で押し潰されそうになっていた。

## U C 0 0 7 9 年 2 月 1 日 第一次降下作戦

宇宙世紀 0 0 7 9 年 2 月 1 日 地球軌道上

2 月 1 日。

それはジオンによる地球への 1 度目の降下作戦が始まる日であり、地球侵攻作戦が本格的に始まる瞬間でもあった。

既に地球の対空砲火は 1 月 2 8 日から始まった月面のマスドライバー攻撃によって目立つものは軒並み潰されており、特にジャブローには念入りに撃ち込まれる。

この世界では南極条約が締結されておらず、質量兵器に関するものが制限されていない。

その為、原作よりも大きいサイズの岩が次々と月面から打ち上げられて地球の連邦軍基地へと直撃し、ダメージを与えていく。

しかし、ジャブローは南米の地下奥深くにある要塞。

流星にこの程度でやられる筈もなく、その機能を維持していた。

だが、ジャブローはあくまで陽動にすぎず、第一次降下作戦の降下ポイントは原作通り中央アジアだ。

そして、その先陣を切るのやはりというべきか、シーマ・ガラハウ中佐率いる海兵隊だった。

「準備は良いかい。赤い彗星？」

作戦指揮官であるシーマは一時的に自らの指揮下に入っている将校——シャア・アズナブル大尉に声を掛ける。

「ええ、何時でもどうぞ」

「そうかい、頼もしいことだね。・・・しかし、それにしてもけつたいな機体だねえ、それ」

シーマはシャアの乗る赤く塗られた新型 MS —— 試作型ガンダム



にそのような感想を抱く。

その言動は間違つてはいない。

この試作型ガンダムは試作型であるということを考えても、ジムⅡが15機買える程の予算を使って作られており、更にエネルギーC APや新型のビームサーベル及びビームライフルなど、最新技術がてんこ盛りな状態で今回の作戦に投入されることになったのだ。

・・・もつとも、だからこそ、この機体が鹵獲されることをジオン軍上層部は極度に恐れており、自爆装置が搭載される程の徹底ぶりだった。

ちなみにその自爆装置の遠隔起動ボタンはシーマが握っていたりする。

「ははっ。しかし、私は意外と気に入っていますよ。この新型機・・・確かガンダムでしたか？これが量産された暁には連邦など烏合の衆にすぎません」

シヤアはそう言いながら、ガンダムを褒め称えるが、これは実は財務省に対して全力で喧嘩を売るような発言だったりする。

なにしろ、この機体は高性能であり、滅多な事では撃破されないが、同時に高コストで作られている。

今は国家存亡の危機で軍事関係に惜しげもなく予算が投じられているとはいえ、ガンダムの量産などされればジオンの財政がとんでもないことになるのは目に見えていた。

もつとも、そんなことが前線の人間に分かるわけがない。

彼らにとって装備された兵器というのは、使い潰すことが前提であり、いちいち貴重に使っていたら自分の命が危ないということも事実だったのだから。

「あはは、そりゃあ結構ーじゃあ、行くよー！」

シーマがそう宣言した数分後、第一次降下作戦は始まり、海兵隊は

中央アジアに向けて降り立っていった。



「ドズル中将、先陣を切ったシーマ中佐の海兵隊が降下を完了しました！」

「よし、そのまま周辺の連邦軍を掃討させろ。それが終わり次第、増援部隊をH L Vにて降下させる」

ラコックの通達に対して、ドズルはそう指示した。

原作では地球侵攻作戦はキシリア率いる突撃機動軍の管轄であったのだが、この世界の歴史では突撃機動軍は編成されていないため、地球侵攻作戦の指揮は宇宙攻撃軍であるドズルが取っている。

だが、正直、シミュレーションでは幾度となく演習を行ったとはいえ、連邦側が秘密基地みたいなものを作ってそこに兵力を隠していれば作戦が失敗する可能性すら留意していた。

なにしろ、原作よりも連邦は消耗していないし、そういう基地を作る時間もある程度作ってしまったのだから。

だが、シーマ海兵隊が堂々と橋頭堡を築いても出てこないということはやはり陽動は成功したのだろう。

そうドズルは思うことにした。

（悩んでも仕方がない。もう作戦は始まっているのだ。このまま進むしかない）

ドズルはこの世界に転生してきて長く、更に最近では妻（原作と同じゼナ）も出来てもうすぐ子供も出来る身だ。

死ぬわけにはいかないが、同時に臆病になりすぎて作戦を失敗させるわけにもいかない。

それをすれば、代償は配下の人間の命、最悪は自分の命という形で支払われることになるのだから。

そんなことをドズルが考えていた時、副官のラコック大尉が更なる報告を持ってくる。

「HLV部隊、降下を開始しました！」

「よし。着地次第、展開。その後は予定通りオデッサ及びバイコンール宇宙基地に向かえ」

今回の第一次降下作戦は原作通り、オデッサ一帯の資源地帯の確保と付近にある連邦軍の宇宙基地であるバイコンールを占領することが目的だ。

そして、その後、降下部隊は後日行われる中東侵攻作戦によって中東に展開し、そこにある化石燃料を確保する。

その後は侵攻を停止し、各地に陣地を築いて防衛戦を行うというのが、この第一次降下作戦の最終目的であったが、正直言って何処まで踏ん張れるのかは疑問だ。

何度も言うようにこの世界ではコロニー落としは行われておらず、連邦の消耗も少ない。

特に人的資源に至っては原作より多いことは確実だ。  
当然だろう。

月面からのマスドライバー攻撃が行われるまで、地球の人間は誰も死んでいないのだから。

しかし、そんなことを将兵に言うわけにもいかず、ドズルはこの作戦の完遂に集中することにした。

(問題となるのは連邦軍の地上戦力だな。原作と違って大して消耗してはいないだろうから、すぐに反撃は来ると思うが・・・)

原作ではコロニー落としによつて事前にある程度削減されていた連邦地上軍。

だが、この世界では今のところ、不幸にもシーマ率いる海兵隊と遭遇してしまった部隊を除いて殆ど消耗していない。

連邦が馬鹿で功を焦るようにバラバラに部隊がやって来るのであれば話は別だが、そうでない限りはすぐに態勢を整えて反撃してくるだろう。

まあ、そうなったとしてもモビルスーツのあるこちらが基本的に有利に立てるだろうが、圧倒的な物量で攻められてはとてでもないが耐えきれない。

(そして、侵攻はまだ始まったばかり。ここで躓く訳にはいかん)

ここで躓けば致命傷ではないが、戦争は確実に長引く。

そうなれば、スペースノイドの独立は間違いなくともジオンは確実に終わる。

ドズルはそう考え、改めて気を引き締めつつ、第一次降下作戦の指揮を取り続けていた。

◇南米 ジャブロー

ジオンの中央アジア降下の報はすぐにジャブローの連邦軍本部までもたらされ、当然の事ながら連邦軍総司令官であるレビル將軍（原作とは違って捕虜になることなくルウム沖会戦を生き残った）の耳にも入った。

「そうか。やはり、ジオンの目標はジャブローではなかったか」

レビルはそう言いながら、壁に貼られた地図を見る。

ジオンの目標はジャブローではないのではないかという疑惑は薄々感じていた。

確かにジャブローには連邦軍本部どころか、政府首脳部も存在しており、ここが落ちれば地球連邦全体の結束力を大きく落とすことが可能だ。

それはジオンの勝利をほぼ決定付けるものであるため、ルウム会戦後に連邦軍主力部隊を南米に集中させた理由もよく理解できる。

更にマスドライバーによって大型の対空施設が潰されてしまったのも、ジオンがジャブローを目指しているという判断材料にするには十分だった。

——しかし、それでもあくまで場所を選ぶのは攻める側であるジオン軍であって、守る側である連邦軍ではないのだ。

（出遅れたな。これは不味い。そもそも政府の連中が勝手なことをするからいかんだ）

レビルは元々、この戦争の開戦経緯についてはあまりよく思っていない。

確かに昨今のジオン公国には不穏な動きがあり、1度宣戦布告してくれば徹底的に叩き潰すつもりはあった。

しかし、先に連邦軍が宣戦布告同然のことをしたとなると話は異なってくる。

しかも――

(まさか彼女の母親を人質にとるとは。あまりにもやっていることが外道すぎるぞ)

そう、実を言うとジンバ・ラルの手によってアルテイシアは確保したは良いものの、彼女はジオン正統自治体の長になることについてはどんなに説得されようと、首を縦に振らなかったのだ。

当然だ。

彼女はそれなりに正義感は強かったし、なによりサイド3には兄も居る。

連邦に味方したことを表明したりすれば、兄の命が危なくなることぐらいすぐに分かった。

しかし、そこで連邦政府は強行手段に出る。

なんと彼女の母親であるアストライアを人質として使ってきたのだ。

兄と同じアストライアを敬愛していたアルテイシアはこの連邦の行いに憤慨しながらも、母親を人質に取られては首を縦に振らざるを得ず、やむなくジオン正統自治体の長になることを了承し、サイド3鎮圧の宣言を出したというのが今回の開戦の経緯だった。

(ジオンの強さが分かってから政府の連中は慌てて戦時体制を整えつつあるが・・・遅すぎたな)

レビルはそう思いつつ、次の手を打つために頭を回転させ始める。

なにはどうあれ、レビルは連邦の將軍なのだ。

どれ程腐つていようと、連邦という国の勝利のために尽くさなければならぬ。

だが、自分が功績を挙げてジオンを倒し、ザビ家を潰した時はサイドロ3の統治は自分が行い、できる限りの融和政策を行おう。

それがアルテイシアという少女を利用した罪滅ぼしになる。

レビルはそう信じることにした。

U C 0 0 7 9 年 2 月 4 日 反撃の兆候

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 2月4日 サイド3 ズムシテイ

「そうか。連邦は早くも態勢を立て直しているか」

ギレンはセシリアの報告に思わず唖る。

地球侵攻作戦の発動から3日が経過し、戦況はジオン有利に進んでいた。

まずオデッサ一带の資源地帯は既に初日に占領され、即席ではあるが防衛用の要塞も築かれている。

またバイコヌール宇宙基地についてはその翌日である2月2日に占領が完了したが、こちらには要塞は築かれず、代わりに基地のあちこちに爆弾を仕掛けており、いざとなれば味方を撤退させた後、派手に爆破してしばらく使えなくさせる予定だ。

そして、肝心の連邦軍だが、どうやら主力はジオン軍上層部の目論見通り南米に集中しているらしく、ヨーロッパにもそれなりの規模の軍が居るものの、決して撃破できない規模という訳ではない。

が、どうやら優秀な指揮官が居るらしく、連邦軍のヨーロッパ方面軍は早くも態勢を建て直しつつあった。

「参謀本部の予想では明日には連邦軍による反攻の可能性が大とのことです」

「・・・早いな」

あまりにも早すぎる。

(降下してから僅か4日で反撃とはなんの冗談だよ!?)

ギレンはそう思いつつ、セシリアに連邦軍側の指揮官の名前を尋ね



ることにした。

「それで、連邦軍のヨーロッパ方面軍の指揮官は誰だ？」

「はい、ヨーゼフ・シュインベルク少将という人物らしいです」

聞いたことのない名前だった。

確実に原作ガンダムに登場していない。

（原作のモブキャラだった人物か？いや、それはない。原作でそれほど活躍していたなら名前が上がっている筈だ）

ギレンはそう考え、原作のモブキャラという可能性を抹消する。となると、考えられる可能性は2つ。

1つ目は原作ではコロニー落としで死んで活躍の場を奪われた人物だったという可能性。

これは十分に考えられる可能性だった。

なにしろ、この世界では原作のコロニー落としで死んだ連邦軍の将官クラスの人間は当然生きているのだから。

2つ目はその人物が転生者である可能性。

これは最悪の可能性だが、十分にありうる。

なにしろ、自分達だっとうこうして転生しているのだ。

他にも転生者が居ないという保証など何処にもない。

（一応調べてみるか）

ギレンはそう思いながらも、そこで一旦その思考を打ち切り、連邦軍の動きについて尋ねる。

「他の地方の連邦軍の動きは？」

「現在のところジャブローに集中していますが、我々が侵攻しているヨーロッパに援軍を送ろうとする動きは既に有るようです」

「なるほど。だが、思ったより動きが鈍いな」

ギレンはそう感じた。

普通なら、最低でも侵攻された翌日である2月2日には南米からヨーロッパに援軍を送っていても良かった筈だ。

この世界の軍隊の展開速度はそれほど速いのだから。

しかし、3日経ったこの段階でやっとその動きが出たという事は、ジオン軍に撃滅されることを恐れたのか、それとも守備兵力が自分の手を離れることを恐れた政治家が足を引つ張っているかのどちらかだろう。

だが、連邦軍の指揮官がレベルという話を聞いて、ギレンはおそらく後者だと認識していた。

(やはり民主主義の軍隊はこういうところで弊害が出てくるな)

古今東西そうであったが、民主主義の軍隊というのは初動が遅い。

これは軍備に政治的事情なども絡んでおり、政治家などは文民統制の関係上、軍隊に好き勝手にされることを好まないし、軍隊なども上位者である政治家に付け入る隙を与えて予算や権限などを縮小されたくないという心情上、あまり政治家に過剰と思われる動きはしたくないという思いがあるからだった。

その点、ジオン公国のような独裁国家であれば、独裁者が命令すればそれだけでスムーズに動き出すので、軍隊を動かすという観点だけで言えば独裁国家の方が有利なのだ。

(まあ、独裁国家なんてよほど国民が好戦的じゃなきゃ支持なんてされないだろうがな。それに弊害も無いわけではないし)

よく勘違いされがちであるが、独裁国家の独裁者というのはその国の国民の支持が必要なのだ。

それは実際に独裁者が支持されなかった国家で、民衆による革命が起きて独裁者が処刑された例が歴史上に存在することからも分かる。

更に独裁制というのには弊害もある。

まず硬直した体制になってしまうことから、下の人間の柔軟性があまり期待できないという欠点や、その独裁者が居なくなった時に後継者争いなどで内部抗争が起きる危険性。

更にはその国の政治が独裁者の裁量に依存してしまうという問題があった。

例えば、その独裁者が優秀かつ現実を見ている人間ならまだ良いのだが、変に自分の正義を主張する純粋な人間であったり、陰謀に精を出して自分の欲を満たすだけな人物であったりすると大変なことになる。

その良い例がシャア・アズナブルやキシリア・ザビだ。

シャア・アズナブルはララア・スンの戦死以後、ニュータイプに幻想を見すぎた事と地球連邦の腐敗具合を目の当たりにして、単独でハマーンが率いていたネオ・ジオンを再編し、地球に住む人間を滅ぼすために隕石（アクシズ）落としを行ったりしているし、人道面でも13歳の少女でしかなかったクェス・パラヤを戦闘マシンとしてしか扱わなかったり、グリプス戦役では自分でアクシズから逃げておきながら、ハマーンにミネバの教育について問い詰め、結果的にエウーゴとアクシズの同盟を破綻させたりしている。

キシリア・ザビは元々のジオンを支配したいという欲望が有ったのもそうだが、サスロを暗殺したり、ア・バオア・クーの戦いで連邦との戦闘中であった状況下にも関わらず、指揮官であったギレン・ザビを暗殺して、連邦に付け入る隙を与えてしまい、結果的に連邦が勝利する切っ掛けを作ってしまったっており、更にはレベルを逃した疑惑が存在することもあって、もはやジオン軍の足を盛大に引つ張る愚行を行っていた。

まあ、この世界のキシリアはそもそも中身が原作と違うので原作は

参考にならないだろうが、シャア・アズナブルについては原作と違っているとはいえ、転生者ではないので魂そのものは同一人物だ。

その為、原作のようなことをしないようにしっかりと手綱を握っておく必要がある。

「では、現地のシーマ中佐に伝えてくれ。援軍の到着までオデッサはなんとしても死守してくれ、とな」

ギレンは現在、暫定的なオデッサ基地の司令となっているシーマ・ガラハウ中佐に実質上の死守命令を出すことにした。

あまりこういった命令は良いとは言えないのだが、ここでオデッサを抜かれたら戦線が崩壊してしまうというのも確かであり、なにより後退する場所はほぼ無い。

当然だ。

ジオンは地球の大地に存在する国家ではないのだから。

「かしこまりました」

「ああ、それと確かニュータイプ部隊の投入は第三次降下作戦の後からだったな」

「はい、様々な資材の積み込みや調整の関係上、そうになるとミノフスキー博士が言っておられましたか・・・」

「そうか。では、ミノフスキー博士に伝えてくれ。様々な資材を優先的に融通してやるから第三次降下作戦にニュータイプ部隊を投入するように、と」

「構いませんが・・・『子供』の方もですか？」

「そうだ。いや、と言うより彼らが居るからと言うべきか。彼らの中

で野比のび太以外はどこか戦場を楽観視している風潮があるからな」

戦場への楽観視。

これは別に良い。

誰でも、それこそ新兵ならば1度は通る道だし、いざ激戦地に放り込まれたり、戦鬪を何回も繰り返せばそんな考えなどあつという間に吹き飛ぶだろう。

だが、ニュータイプは別だ。

この世界では既にニュータイプ専用の兵器も揃えて訓練している以上、彼らは普通の戦場など簡単にクリア出来てしまっだろうし、そうなったら増長してしまう可能性がある。

そして、増長したニュータイプなど手に負えないのは明らかであり、それくらいならば最初から激戦地に放り込んで“慢心”の二文字を無くしてしまう方が良いとギレンは考えた。

もっとも、H L Vに乗せて降下途中で運悪く撃墜されて失われても困るので、別な降下手段を用意するつもりだったが。

「分かりました。ミノフスキー博士とシーマ中佐に伝えて参ります」

「頼んだぞ」

ギレンはそう言って壁に張られている地球の地図の東欧——オデッサの部分を見た。

UC0079年 2月5日 第一次オデッサ攻防戦

宇宙世紀0079年 2月5日 地球 オデッサ周辺

「随分と建て直しが早い」

オデッサ基地所属のMS部隊の内の一個中隊（8機）を率いる指揮官——シヤア・アズナブル大尉は連邦軍の見事な戦いぶりに思わずそう呟く。

今日、オデッサ基地奪還の為に攻めてきた連邦軍の数は約5万。

対して、ジオン軍オデッサ基地の人員は3万だったので、数的にはジオンの方が不利だが、攻撃3倍の法則を基にすれば連邦軍はその基準を満たしていなかったし、オデッサは即席であれども豊富な資材で造られたそれなりに立派な要塞が存在する。

更にはジオンにはMSもあるので、数では不利であっても十分勝つことは可能。

それがシーマ中佐を含めたオデッサ基地上層部の考えであり、シヤアもまたそのように考えていた。

そして、その予想は間違っておらず、ジオン軍は戦いを有利に進めている。

しかし、同時に連邦軍の建て直しの早さによって予想よりも損害が大きいのというのも確かであり、かくいうシヤアも指揮下にあつたジムIIを2機と、パイロット1人を失っていた。

「連邦軍にも優秀な指揮官が居るようだな。これで向こうがMSを持っていればこの戦いは危なかったかもしれない」

シヤアはそのような感想を抱いた。

シーマ中佐も相当に優秀な指揮官であるのはシヤアも認めるところだが、この連邦軍の指揮官もおそらくそれに負けず劣らず優秀だろう。

何故なら、連邦にとってはほとんど初見に近いミノフスキー粒子散布下で曲がりなりにも5万人もの兵力の統制を取っているのだから。

更に言えば、数的有利は元々向こうにあった。

これで向こうにMSが有れば、今回の勝利は向こうのものでオデッサ基地は奪還されていたかもしれない。

「だが、この戦いは我々の勝ちだ」

シヤアはそう言いながら、もはや掃討戦の段階に入りかけている戦いへと参入していく。

だが、この時、彼は知らなかった。

オデッサ基地の司令部がとんでもないことになっていたことを。

◇オデツサ基地司令部

「まだ連邦の連中は排除できないのかい!？」

シーマは司令部の席に座りながら部下に向かってそう叫ぶ。

何処か楽観的な雰囲気になりかけていた前線と違い、こちらの司令部ではむしろ緊迫化しており、完全に普通の状態とあべこべになっていたが、それも道理だった。

何故なら、彼らはいま正に連邦軍の奇襲を受けていたのだから。

「駄目です！周辺の部隊は連邦軍と交戦中。他の部隊もミノフスキー粒子が濃いせいで・・・」

「ちい！」

シーマは盛大に舌打ちする。

(完全にしてやられた！まさかミノフスキー粒子を利用してこっちの司令部を逆に襲撃してくるなんて!!)

そう、有利に状況を進めていたジオン軍は状況を不利と見て後退した連邦軍を追撃したのだが、それこそが連邦の罠だった。

ジオン軍主力が遠く離れた隙にいつの間にか浸透してきた連邦軍の1個大隊(1000人)の戦力がこちらの司令部を強襲してきたのだ。

しかも、これらの兵力は精鋭らしく、シーマ直属の部隊と言えども簡単に排除することが出来ておらず、更には他の部隊に連絡しようにも周囲にばら蒔かれたミノフスキー粒子が濃いせいで連絡が着かない。



(せめてこのミノフスキー粒子をなんとか出来れば・・・あたしとしたことが、ばら蒔きすぎちゃった！)

加えて、この状況になったのはシーマのミスもあった。

ミノフスキー粒子はジオン軍でも使い始められたばかりであり、戦闘中にどれ程の濃度にするのかは指揮官の裁量に委ねられている。

一応、転生者達は原作の戦闘濃度と言われている50パーセント程(高速で移動する物体以外は捉えられない濃度。つまり、MSが歩く程の速度であれば発見されない濃度)を推奨していたが、あくまで推奨であって別に強制しているわけではない。

そして、今回、連邦のミサイル攻勢を避けるために念入りにミノフスキー粒子を散布してしまい、味方との通信がほぼ出来ない状況に陥ってしまったのだ。

まあ、それでもミノフスキー粒子散布下の訓練は行っていたので、連邦と戦っている部隊が連携を取る分には問題なかったのだが、今回に限っては司令部の周辺に居た部隊以外が司令部防衛に使えなくなってしまうので、シーマ達からすれば全くよろしくない事態だった。

(ここで私たちが死んだとしても、この戦いに特に影響はないだろうけど、こんなところで死ぬなんて真つ平ごめんだね!!)

シーマがそんなことを考えていると、彼女の部下が敵の発見の報告を入れてくる。

「シーマ様、敵の1個小隊(30人程)がまもなくこの司令部に到着します!!」

「よし！白兵戦用意!!ここが正念場だ！しつかり踏ん張りな!!」

「「おお!!」」

シーマの激励に司令部の部屋に居た海兵隊の将兵達は歓声を上げる。

そして、この数十秒後、連邦軍がやって来たことで彼らは戦闘状態へと突入した。



「よしーもう少しだ!!頑張れよ!!」

ジオン軍オデッサ司令部に浸透してきた連邦軍の大隊の指揮官――ダート・トリーカ中佐（オリキヤラ）は部下を激励しながら自らも司令部へと向かっていく。

しかし、実のところ、彼らもこの状況を狙ってやったわけではない。戦っている最中にミノフスキー粒子によって通信やリンクシステムなどが途絶してしまった為に、他の部隊とはぐれてしまい、いつの

間にかこの司令部に浸透していたのだ。

その後、この施設が敵司令部だと気づいて襲撃を掛けていたのだが、当然、周囲には司令部を守るシーマ中佐直属の海兵隊が居り、それと交戦することになった。

だが、シーマ中佐の海兵隊の兵士達とは違い、ダートを含めた連邦軍の将兵はミノフスキー粒子散布下での交戦に慣れていない。

その為、時間が経てば経つごとにダート達は不利になっていった。しかし、それでも奮闘してどうにか敵司令部まで部隊の一部がたどり着いた事で、最後の賭けとして敵司令部を部隊の全力を以て攻撃することにしたのだ。

(既に部隊は壊滅。ここで向こうの司令部を全滅させたとしても大勢に影響はないだろうし、俺も死ぬだろうが、いつか行われる連邦軍反抗の礎くらいにはなる!!)

彼はそう信じながら、敵将であるシーマを討ち取るために部下と共に尚も司令部へと向かっていく。

・・・ここまで彼はついていた。

敵味方合わせて8万人もの会戦とミノフスキー粒子によって連携度は落ち、状況は混戦の度合いを見せていたとはいえ、1個大隊の将兵を3万人のジオン軍の兵士の目を掻い潜らせたのは、間違いなく彼の運が絡んでいる。

更に言えば、シーマが直接率いている部隊は数が少なく、ダートの部隊が急行すれば間違いなくシーマの首を取れたかもしれない。

だが、残念なことに彼らの幸運はここで終わってしまった。

何故なら――

「た、隊長！敵のMSがこちらに来ます!!」

「なに?!!」

ダート中佐が部下の言葉に思わずそちらを向くと、そこにはこちらに向けて90ミリマシンガンを構える紅いジムII改の姿があった。

それはオデッサ基地救援にやって来たジオン軍側の援軍であり、彼らは運悪く鉢合わせしてしまったのだ。

そして、ダート中佐が真紅の稲妻——ジョニー・ライデン大尉の操る紅いジムII改を認識した直後、90ミリマシンガンの銃口から何発もの90ミリ弾が放たれ、ダートの体は部下共々肉片へとその姿を変えた。



「くそっ、ダメか！」

ヨーゼフ・シュインベルク少将はそう言いながら旗色の悪い戦況に舌打ちをする。

ヨーゼフ・シュインベルク少将。

それは本来のガンダムの世界ではコロニー落として亡くなっていた筈の人物だった。

ギレンが最悪な可能性として考えていた転生者ではなかったが、優秀な指揮官であり、短期間で浮き足立っていた連邦軍ヨーロッパ方面軍の一部を建て直して、逆に拠点奪還を図るといってもない働きぶりを行っている。

だが、MSなどの新兵器を前には如何ともし難く、更には曲がりなりにも統制は取れているとはいえ、5万人の兵力は明らかにジオン軍と比べて動きが鈍い。

これがミノフスキー粒子によるものであるということとはヨーゼフも既に気づいていたが、それが分かったからと言って戦況を変えられるわけでも無く、先程撤退の指示は出したものの、その動きは統制されているとは口が裂けても言えなかった。

当然、ジオン側がそれを見逃すわけもなく、追撃によってどんどん連邦軍を駆逐し、または捕虜にしていく。

そして、どうにか戦線を離脱した時、その兵力は5000人——開戦時の1割程までに減っており、とてもではないが戦いを続けられる力は残っていないかった。

「今は敗けを認めよう！だが、私は必ず戻ってくる!!」

ヨーゼフはそう宣言し、遠ざかるオデッサの方向を睨み付けた。

UCC0079年 2月7日 東欧攻勢案

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 2月7日 サイド3 ニュータイプ研究所

「・・・ふう」

戦闘訓練用シミュレーションを終えたのび太は息を吐きながらゆっくりと背もたれに身を預ける。

ギレンにより第三次降下作戦への参加が決められて以降、戦闘訓練用シミュレーションの使用時間は必然的に増えた。

特に降下の際に連邦が行ってくるであろう地上からの対空砲火を想定したシミュレーションはなかなかクリアするのは難しく、今のところのび太は5回の内2回程度しか地上着地に成功していない。

他にも、のび太があまり得意ではない肉体トレーニングについても訓練が開始され、元々運動音痴な点のあるのび太はあまりそれが好きでは無かった。

しかし、一度参加すると言ってしまったことと、かつての大冒険の際に体力が無かったせいで危機に陥ってしまった事が何度かあった反省から、少しずつではあるが、研究所で課せられた訓練の他に自主トレも行うようになっていたのだ。

だが、それによってあまり鍛えていなかったのび太の体は悲鳴を上げており、毎日筋肉痛に苦しんだりしている。

「お疲れさま」

そんなのび太にタオルを差し出したのはメイだった。

彼女はあの件以来、積極的にのび太の手伝いをするようになっており、のび太はそんな彼女の対応に戸惑いつつも、献身的な彼女の行動には非常に感謝している。

「ありがとう、メイさん」

のび太はお礼を言いつつ、タオルで自分の顔の周りに浸る汗を拭う。

「・・・少し休んだら？ちよつと無理しすぎよ」

「いえ、大丈夫・・・と言いたいところだけど、そうだね。もう一度やったら休むことにするよ」

「そんなに上手くいっていないの？」

「いや、そうではないんだけど、今のままじゃ地上に着く前に死にそうだから」

のび太は苦笑しながらそう言うが、これは決して冗談ではない。

近いうちに行われる可能性の高い第三次降下作戦の際は、のび太達は他の部隊とは違い、耐熱装備とベースジャバーを装着したモビルスーツで地球に降下する事になっている。

しかし、そこで懸念されるのは地上からの対空砲火だ。

事前にある程度潰すとのことだが、向こうも潰される前に一旦隠すだろうし、何処まで効果が有るかは分からない。

その為、こうして対空砲火を掻い潜って地上に降りるというシミュレーションを行っていたのだが、その結果が降下の成功率は4割。

・・・これではとてもではないが安心出来なかった。

「ふーん」

「まあ、このシミュレーションはハマーンとアムロさんはあつさりクリアしちやっているから、単に僕が出来ないだけなんだろうけどね」

のび太はMSに乗った期間がまだ1ヶ月に満たないということも

あつて、アムロ達のようにMSの操縦に慣れているわけではない。

射撃だけは既に両者を凌駕していたが、肝心な操縦技術に関してはジオン軍の新兵レベルに留まっていたのだ。

まあ、ハマーンのはのび太と違って何カ月もの時間を掛けてMSの操縦訓練を行っていたし、アムロに至っては原作ではマニュアルを持ちながらガンダムを操縦し、ザク2機を撃破してしまうような天才だったので、比べるのは酷と言えるが。

「じゃあ、私がプログラムを上手く組んであげようか？」

メイがそう言ってプログラム改変を進める。

確かに天才的なメカニックである彼女ならば、のび太に合う効率的な訓練シミュレーションを組んでくれるかもしれない。

だが――

「折角だけど、断るよ。それじゃ訓練の意味がないから」

そう、仮にそれでのび太が上手く訓練シミュレーションをクリアできるとはなったとしても、それでは意味がないのだ。

なにしろ、実戦の場でこのシミュレーションの中に存在する対空砲火を撃ってくるのは敵軍なのだから。

生温い訓練で敵の最前線に突っ込んでいくなど悪夢でしかない。

「・・・そっか。それじゃあ仕方ないね」

メイは暗そうな雰囲気させながらそう言った。

その雰囲気は少しだけ罪悪感の沸いたのび太は慌ててこう言う。

「あつ、いや、でも、メイさんの組んだプログラムっていうのもやってみなければ分からないんだよね。やっぱり、一度やってみようかな」



「本当に？」

「うん、ちょうど休憩が欲しかったところだし、メイさんがプログラムを組む間に僕は休んでいるから、その間にやっちゃってくれないかな？」

「うん、分かった！物凄いの作るから！」

メイは満面の笑顔を浮かべながらそう言った。

・・・ちなみにその後、メイが張り切って作ったプログラムをやった結果、あまりにも上がりすぎた難易度へのび太が真っ白に燃え尽きたのは別な話。

◇サイド3 ズムシテイ

「オデッサの安全確保及び明日行われる第二次降下作戦の陽動の為に東欧侵攻だ？」

ギレンはドズルから送られてきた意見書に何かを考える仕草をす

る。

『ああ。先日のオデッサの戦いを聞いて分かったことがあるんだが、やはりオデッサ一帯だけ占領しても防衛線が何らかの形で抜かれてしまえば、容易くオデッサは失陥してしまう。そうならないようにならざるべく戦いの幅を広くした方が良い』

ドズルはテレビ越しにそう言ってくる。

そもそも事前の計画ではオデッサ一帯の資源地帯とその周囲100キロ程の占領となっていた。

これは戦線を拡大させて補給の負担を増やすことを嫌がって練った計画で兵力の集中という観点からも良い案のように思われたのだが、これは逆に言えば紙一枚の防衛線とも言えるのだ。

その為、幾ら防衛線が硬くとも、何らかの形で防衛線を一度抜かれてしまえば再構築はほぼ不可能であり、オデッサに居るジオン軍は窮地に立たされることになる。

それを打開する案としては機動防御しかないのだが、これは土地を大きく使う戦い方であり、今のジオンの戦線ではなかなか行うのが難しいために、ドズルは限定的な戦線拡大案として東欧侵攻を叫んでいるという訳だ。

これには一定の理もあるために、ギレンも理解の意を示すが、問題なのはその拡大範囲だった。

「北はワルシャワを含めた旧ポーランド地域、中央は旧オーストリアとチェコ。そして、南はバルカン半島と旧トルコを占領して黒海を内海化する、か。とても現状の中央アジア方面軍の兵力では出来るとは思えんな」

現在、降下している中央アジア方面軍は30万人以上居るが、これらの内、10万人程は第二次降下作戦を終えた後に予定されている中東侵攻作戦に使われる兵力だ。

ドズルの言う東欧侵攻作戦を行うとなると、これらの兵力が必要になつてくるだろうが、これを使った場合、現状の戦線が突破されたり、中東侵攻作戦に遅れが生じる可能性が出てきてしまう（もつとも、旧トルコ占領については、中東侵攻作戦の際に行う予定だったので、それが早まるだけでも取れるのだが）。

戦線拡大そのものについては理解を示したとはいえ、流石にこの兵力でここまでの拡大は無理があるのではないかとギレンは考えていた。

「それはそうだが・・・連邦の戦時体制が完全に整っていない今がチャンスだぞ？少なくとも、全部は無理でも東欧、もつと言えばバルカン半島だけでも確保しておいた方が良い」

これも事実だった。

なにしろ、開戦からまだ1ヶ月。

流石にこれだけの期間では幾ら原作より消耗の少ない連邦と云えど戦時体制は整っていなかったし、先日のオデッサ攻防戦で連邦のヨーロッパ方面軍はある程度消耗しているため、やるなら今がチャンスだろう。

「・・・分かった。良いだろう、許可する。中東侵攻作戦に使う兵力を使って作戦を行え。だが、占領は東欧までだ。トルコの占領は現状は却下する」

『感謝する！兄貴!!』

「では、もう切るぞ。私は第二次降下作戦の最終確認を行わなければならんからな」

『ああ、分かった。無理を言ってすまなかった』

そう言うと、ドズルの姿は画面から消える。

そして、ギレンはそれを見届けると、ひとまずドズルの言った東欧の事を頭の隅へと置き、明日行われる第二次降下作戦についてを考える。

「第二次降下作戦は原作通り。だが、なにぶん降下地点はジャブローの存在する南米に近い。大丈夫だろうか？」

ギレンは今更ながらに不安に思った。

第二次降下作戦の降下ポイントは原作と同じ北米、もつと言えば旧アメリカだ。

狙いとしては連邦の兵器生産拠点であるキャリフォルニア・ベースの確保と北米の政治的集約地点であるニューヨークの確保。

更には旧アメリカの広大な穀倉地帯を確保して食料を確保することもこの作戦の目的でもある。

指揮官は原作と同じ（ただし、中身は違う）ガルマ・ザビ中佐だ。なんでも将来の嫁（予定）らしいイセリナを探しに行くためらしい。動機は少々不純ではあるが、優秀なのは間違いないので第二次降下作戦の指揮官を任せている。

「・・・まあ、不安に思っても仕方がない。それに地球そのものが地球連邦の本土である以上、何処に降下しようと、やってみなければ分らんからな」

ギレンはそう思うことにして、第二次降下作戦の最終承認のサインをした。

## UC0079年 2月8日 第二次降下作戦

宇宙世紀0079年 2月8日 軌道上

「ガルマ中佐。ギレン総帥から作戦開始命令が出ました！」

「よし！全軍に告げろ！第二次降下作戦を開始すると」

副官であるダロタ少尉の言葉に指揮官であるガルマ・ザビ中佐はそう言った。

そして、その指示によって一部の艦艇が真っ先に降下を開始して第二次降下部隊の降下先を掃討し始める。

（遂に始まったか。第二次降下作戦）

ガルマは緊張した様子でそう思う。

この第二次降下作戦は原作でもガルマ・ザビが指揮を執って行ったものであるが、良くも悪くも自分には同じことは出来ないだろうとは感じていた。

確かにガルマは原作と同じく暁の蜂起の指揮を執り、原作と違って誰も死なせることなく士官候補生200人で連邦軍の2個大隊（200人）の制圧に成功しているが、あれはあくまで運の良さが重なったからにすぎないのだ。

いや、仮にあれが実力だったとしても同じこと。

実際に戦いに入れば、原作知識は役に立たないため、結局は自分の頭だけが頼りになる。

（自信はある。原作では試作が開始されるかだけで量産はされなかったヒルドルブが3個中隊（24両）も存在するし、他にもジャブローに近い場所に降下するということで陸戦型ガンダム2機と陸戦型ジムIIが回されてきている。これで勝てなきや私は無能だ）

そう、第二次降下作戦は南米に近いということもあつてかなりのところ入れがされていた。

まずはヒルドルブ。

これは一言で言えば巨大戦車であり、モビルスーツの台頭もあつて原作では試作1両で終わった機体だが、その主砲の口径はなんと30センチ（300ミリ）。

直撃すればMSの撃破は勿論のこと、巡洋艦の撃沈、果ては当たりどころが良ければ戦艦ですら撃沈することが可能な口径だった。

ただし、原作であつた変形機構はあまり意味がないこととコストダウンの関係から削除されており、この世界ではモビルタンクではなく、純粋な戦車として完成されている。

しかし、変形機構を削除したことで原作のものよりコストダウンされたとはいえ、その巨体故に未だにそのコストは高く、MBT（主力戦車）の座はI号戦車（原作にはなかったコロニー内戦闘を考慮して考え出された戦車）のままだった（ちなみにヒルドルブは重戦車という分類にされている）。

そんな馬鹿高い戦車を24両も預けて貰っているし、最新鋭の陸戦型ガンダムなども通常のガンダムよりはコストダウンされているとはいえ、やはりガンダムの名を冠するだけあつて高価。

これで勝ち以外の報告を入れなかった場合、ガルマの今後の軍隊人生は悪い意味で素晴らしいものとなるだろう。

（だが、それでも不安はある。世の中に絶対は無いからな）

そう、幾ら高価な装備を整えたところで戦場に絶対は存在しないのだ。

何らかの予想がつかない展開が待っているかもしれないし、想定通りに進んだとしても油断してポツクリやられてしまう危険性もある。

（それだけは御免だ。なにしろ、私はまだイセリナ嬢を嫁にしていな

いのだからな)

ガルマはそう思いながら、未来の嫁(予定)の為にもこの北米降下作戦を成功させることを決意した。

◇

「戦況はどうだ？ラコック」

第二次降下作戦が始まって暫くした後、ドズルは副官のラコック中佐に戦況の様子を尋ねた。

この第二次降下作戦は2つのポイントに同時に降下する事になっている。

1つはニューヤーク、もう1つはキャリフォルニア・ベースだ。

そして、その内、ニューヤークを攻める部隊はガルマ・ザビ中佐が直率している。

だが、基本的に降下部隊は宇宙攻撃軍から分派した部隊という事になっっているので、ドズルには戦況を見守る義務があるのだ。

「はい、戦況はニューヤーク、キャリフォルニア・ベース共に優位に運んでおり、あと一時間もすれば占領できる見込みです。流石、ガルマ様ですな」

「ああ、自慢の弟だ」

ドズルは誇らしげにそう言う。

実際、ドズルはガルマの腕を高く評価していた。

ガルマはあまり意識していないが、原作と違い、被害0で10倍の敵を無力化したその才能は並大抵のものではないということを理解していたからだ。

(しかし、奴の指揮官の才能は物凄いな。これならば原作のような政治だけでなく、軍事もある程度は任せられるかもしれない)

ドズルはそう思う。

原作のガルマはあまり軍の指揮の腕が良いとは言えなかった。

いや、あれは相手が主人公補正を持つ理不尽な存在だったし、惜しいところまで行ったのも確かなので、負けたからと言ってすぐに無能という判定を下すのは難しい。

しかし、少なくとも親の七光りという立場とシヤアというライバル



にコンプレックスを抱いていたのは確かだった。

もつとも、この世界のガルマはそもそも中身が違うので比べるのは間違いなのだろうが、暁の蜂起を被害無しで成功させたとはいえ、士官学校を出たばかりということもあって、何処まで実戦で戦えるかは疑問視していたのだ。

だが、それは杞憂だと分かり、ドズルは安堵していた。

「取り敢えず北米は大丈夫そうだな。同時進行している東欧侵攻作戦の方はどうだ？」

ドズルは第二次降下作戦と同時に進行中の東欧侵攻作戦の進捗状況について聞く。

なにしろ、この作戦はドズルがギレンに無理を言っただけ承認させたものだ。

更に中東侵攻作戦に使う予定だった兵力を使用しているため、中東侵攻作戦は本来の計画よりも遅れてしまうことが確定している。

だからこそ、この作戦は失敗は許されないし、放置することはもつと許されない。

「そちらも順調です。しかし——」

「なんだ？」

「予想より抵抗が激しいようで、制圧には時間を要するかと」

「・・・むう。やはり10万人程度の兵力では無理があったか」

ドズルは唸る。

そう、計画ではこの10万人の兵力を用いて数日で東欧一帯を占領する筈だったのだ。

連邦軍のヨーロッパ方面軍も先のオデッサ攻防戦で消耗している

為に、今ならば攻略は容易いと思われたのだが、そう簡単にはいかなかったらしい。

(少し調子に乗りすぎていたか)

ドズルはそう自覚せざるを得なかった。

そもそもこの東欧侵攻作戦自体、綿密に計画された作戦ではない。オデッサの防衛線を拡げるといふ自分の狙いは間違っていないかっ

たとは思うが、いささか焦りすぎていたような気もした。  
しかし、だからと言って今さら作戦は中止できない。  
賽は既に投げられてしまったのだから。

「・・・仕方があるまい。侵攻部隊にはバルカン半島を優先して制圧しろと伝えてくれ。ワルシャワの方は無理なら諦めろとも」

こうなつたらバルカン半島だけでも確保するしかない。

ドズルはそう思いながら、ラコツクにその事を通達するように指示を出した。

「よしーこれでまた1両撃破!!」

ヒルドルブの300ミリ砲により、文字通りの意味で木っ端微塵に破壊される連邦の61式戦車を見ながら、デメジエール・ソンネン少佐は喝采を上げた。

「モビルスーツとやらが出てきた時は陸戦の主役は奪われたかと思っただが・・・まだまだ戦車も捨てたもんじゃねえな」

戦車は元々陸戦の王者だ。

しかし、現在では連邦の150ミリ砲に耐える装甲と一時的とはいえこの重力戦線でも空を飛べるモビルスーツによって、お払い箱になるかとも思われた。

しかし、このヒルドルブは違う。

主砲である300ミリ砲はモビルスーツどころか、陸上戦艦であるビクトレーですらある程度の距離ならば撃ち抜ける。

更に戦車の正面装甲というのは、その戦車の主砲に耐えられる（ただし、側面や背面は異なるが、ヒルドルブの場合はそれでも200ミリ砲には耐えられるようになってる）ように設計されているため、連邦の150ミリ砲程度ではよっぽど至近距離で攻撃しないと撃破は不可能。

歩兵が近づいて撃破しようにも、ヒルドルブは機銃ですら口径が105ミリも有るので、それに直撃すれば歩兵など容易くミンチへと変わってしまう。

そして、そもそもこの300ミリ砲の有効射程は通常の状態で32キロ、ミノフスキー粒子散布下でも20キロという長大な射程を誇るために、よっぽど地形が相手側に都合がよくない限り、近づくのは困難だった。

「このヒルドルブの量産は既に始まっている。変形機構が削除された

のは少し不満だが、これが大量生産されれば連邦などものの数じゃないぜ」

ソンネンはそう言って笑う。

だが、彼は知らない。

『強力なものも認めるし、変形機構を削除したことでコストダウンはしたけど、それでもコストが掛かりすぎる！』という至極尤もな理由によって、ヒルドルフは大量生産されることはなく、少数生産に留まるということ。

U C 0 0 7 9 年 2 月 1 1 日 ワルシャワの戦い

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 2月11日 旧ポーランド ワルシャワ郊外

「・・・妙だな」

105ミリマシンガンを構えた赤い試作型ガンダムを操る男——  
シヤア・アズナブル大尉は敵の動きに違和感を感じていた。

東欧侵攻作戦が始まって3日。

侵攻軍はドズルの命令に従ってまずバルカン半島を陥落させた後、  
3万5000人の兵隊をワルシャワに向かわせた。

対して、連邦軍はワルシャワに7万人の兵隊を集めており、ジオン  
軍はこれと熾烈な戦いを繰り広げることになるのだと思っていたの  
だが、ここで連邦軍は予想外の動きを取る。

なんとこちらの姿を確認した途端、戦わずに撤退を開始したのだ。  
無論、向こうが撤退したからといってジオンがそれをただ見送る理  
由も義務も無いので、追撃を行ったのだが、反転して攻撃してくる理  
子は全く無い。

そして、シヤアがそれを不自然に思う理由はもう1つあった。

「何故、無人の町を捨てたのだ？」

ワルシャワは現在、住民が全員避難しているのか無人だ。

人が居るならば、住民が戦いに巻き込まれるのを嫌って撤退したと  
いうことも分かる。

しかし、無人の町ではわざわざそのようなことをする必要はない。  
特にこのワルシャワはかつて一国の首都だっただけあって、高い建  
物が多く並んでおり、障害物も多い。

正に立て籠るには絶好の場所と言えたのだが、それを向こうは自ら  
放棄した。

しかも、向こうの兵力がこちらの倍なのにも関わらず、だ。

(何かとんでもない策が有るのか?)

シヤアがそのようなことを考えていると、2機のジムⅡが近づいてくる。

シヤアの部下であるデニム曹長とスレンダー軍曹の機体だ。

「大尉、ご無事ですか!？」

「ああ、なんとかな。そちらは終わったのか？」

「はい。ですが、連邦の連中、何故か逃げるのに必死で、なかなか戦果は挙げられませんでしたが・・・」

「構わんさ。私だって似たようなものだ。それより今は本隊に合流して――」

シヤアは何かを言おうとするが、それは直後に響いてきた凄まじいまでの爆音によって掻き消される。

「な、なんだ!？」

突如ワルシヤワの方角から響いてきた轟音に3人は慌ててそちらを向く。

すると、そこには爆風によって作り出されたであろう巨大なきのこ雲が発生しているのが見えた。

「なっ!あれはまさか・・・」

シヤアはまさかの可能性を頭に思い浮かべる。

そう、それはワルシヤワに仕掛けられた核兵器。

連邦は最初からジオンをワルシヤワに引き寄せて、町共々吹き飛ばすつもりだったのだ。

まあ、流石に住民や味方もろとも吹き飛ばしてしまうのは不味いので、住民や味方が退去してから発動するほどの理性はあったらしいが、実際に被害を受けることになったジオンにとってはそんなことはどうでも良いことだった。

(どう見ても核兵器だな。まさか、地上で使ってくるとは。確かに有効かもしれないが、連邦は何を考えているんだ)

宇宙空間のように無重力で放射能が瞬く間に拡散してしまう場所では核兵器は確かにでかい威力を持つ爆弾にすぎないのかもしれない。

しかし、地球は重力が存在するので、放射能は当然の事ながら残ってしまう。

勿論、長い年月を掛ければそれも除去されるだろうが、そうなるまでは汚染された土地が残るだけだ。

しかも、ここは元々連邦の領土。

確かにこちらの兵力を減らすという意図だけならば良いのかもしれないが、向こうはこれから先、ここを奪還しなければならぬ筈だ。しかし、その土地を汚染などしたら奪還してもなんの意味もないものになってしまう。

にも関わらず、それを躊躇なく使ってきた連邦の意図が分からず、シヤアは困惑していたがすぐに思考を切り換えて部下に指示を出す。

「デニム、スレンダー。急いで郊外に居る味方に合流する。おそらく、向こうは反転攻勢を仕掛けてくる筈だ。味方と合流して迎え撃たないと袋叩きに合う！」

「了解！」

シャアの指示にデニムとスレンダーは頷くと、3機はその場から離れて味方の元へと向かっていく。

そして、それから数十秒後、シャアの予想通り、連邦は反転攻勢を仕掛け始めた。

#### ◇サイド1 ソロモン要塞

「なに!? 連邦が核を使ってきただ!!」

ここはサイド1宙域近辺に存在するジオンの宇宙要塞『ソロモン』。ドズル中将率いる宇宙攻撃軍が管轄する要塞であり、その位置関係上、ルナツーと並んでジオンの最前線宇宙要塞でもある。

そんな要塞には居住施設や小規模ながら娯楽施設も作られており、ドズルの妻であるゼナもここに滞在している。

その司令室に居たドズルの元には現在、ワルシャワで起きた事が報告されていた。



「は、はい」

「それで、被害は!？」

「ワルシヤワに入っていた7000人程の将兵が死傷したとのことです」

「7000人・・・」

7000人。

それはワルシヤワ攻略に参加していた兵力の2割の数字だ。

致命的ではないが、十分甚大な被害でもあった。

更に凶報はもう1つある。

「それと撤退していた連邦軍が一斉に反転攻勢を開始しました」

「・・・やられたな」

ドズルはワルシヤワ攻略の失敗を悟る。

元々、連邦軍の数はワルシヤワを攻略するジオンの2倍の数が居た。

連邦軍が撤退する際の追撃によってある程度減らしてはいたものの、元々の母数が多いのでそれほどダメージを受けていたとは思えない。

対して、こちらは核兵器によって兵力の2割を失い、数は3万を切ってしまったている。

これでは幾らMSが有っても、数の暴力で押しきられてしまうだろう。

(まさか、グリプス戦役の時のテイターンズのような真似をしてくるとは・・・いや、この場合だとベルカ式国防術に近いのか?まあ、ど

ちらにしても自分達の領土の町ごと吹き飛ばすなんて、あまりにも予想外にすぎるぞ!!)

ドズルは自分達の領土で核兵器を使う暴挙に連邦の狂気を感じつつ、今後の展開を考え始める。

(しかし、これは不味いぞ。もしこの事が公国の強硬派にバレたら核で報復しろなんて主張しかねない)

原作と違い、ここまで両軍は核を一発も使ってこなかった。

しかし、ここで連邦が使ったとなると、ジオン公国の強硬派の人間の中には必ず報復しろと言ってくる輩が出てくるだろう。

それを抑えるためには情報封鎖を行わなければならないのだが、それには1つ懸念がある。

(問題は連邦だな。あいつら、どういうプロパガンダをしてくるんだ?)

ドズルはそれを問題に思っていた。

単に情報封鎖をするだけなら良い。

それならば、ジオンも情報封鎖をすることで、少なくとも終戦までは核兵器使用の事実を「無かったこと」にすることが出来る。

だが、グリプス戦役でエウーゴによるジャブロー降下戦後のテイターンスのように、相手がやったと情報操作をしてくるならどうだろうか?

地球連邦の市民はジオンに対して激しい敵愾心を持つこととなるだろう。

勿論、今回の場合、ジオンの方も幾らでも弁解は出来る。

なにしろ、核で吹っ飛ばされたのはジオンの将兵だけなのだ。

その事を主張すれば、連邦に疑惑を持つ市民が出てきても可笑しくはない。

もつとも、そうなった場合、連邦はこちらに敵愾心を向けるためのジオンの自作自演だと主張してくるだろうが、少なくとも人類の大半であるスペースノイド（現在、地球圏の人口は約110億人居るが、ルナリアンを含むスペースノイドはその内90億人）はそれを信じない。

そんなことをやっていられる程、ジオンの兵力に余裕がないのは彼らが一番よく分かっているのだから。

しかし、地球市民（20億人）の場合は別だ。

彼らにとつてジオンが敵であるということは変わらないし、そもそもジオンが攻めてこなければワルシャワが吹っ飛ぶことは無かったという見方も出来る。

そして、なにより人間というのは身近に居る強い方の言葉を信じたくなるものだ。

それを考えれば、連邦に疑惑を持つ人間よりもジオンに敵愾心を持つ人間の方が多くなるであろうことは容易に想像できることだった。

そして、そんな世論になつてしまうと、連邦の政治家達は選挙のためにも戦争継続を主張するようになってしまう。

（これでジャブローを占領して連邦政府を物理的に降伏させるか、何百万人も連邦の将兵を殺す以外にジオンの勝利は無くなつてしまったな）

ドズルはそう思ったが、後者についてはかなり困難であることは本人も一番よく分かっていた。

なにしろ、原作ではレビルの演説もあつたとはいえ、コロニー落としや宇宙軍の全滅などでも屈しなかつた連邦だ。

しかも、この世界ではコロニー落としが無かつた為に連邦はまだまだ元氣一杯。

何百万人という兵士が死んだところで諦める可能性は非常に低い。

やはりジャブローを攻略しなければ勝つ可能性はほぼ無いと見て良いだろう。

まあ、宇宙軍を何度も壊滅させ続ければ、流石に厭戦気分が連邦内部で漂ってくるかもしれないが、そんな都合の良いことがそうそう起きるわけもない。

(まあ、政治のことについては兄貴達に任せるとして、問題はワルシヤワを攻めていた部隊だな。無事に撤退してくれば良いが・・・)

現在の状況からするに、ワルシヤワ攻略部隊は相当追い詰められている。

しかし、ドズルは何らかの命令を下すつもりはなかった。

この混乱している状況下で下手な命令を下してしまえば、ワルシヤワ攻略部隊は総崩れになってしまう危険性がある。

かといって、バルカン半島の部隊を援軍として派遣するのも不味い。

手薄になったバルカン半島に連邦軍が逆襲を掛けてくる可能性もあるからだ。

なので、ドズルには味方の無事を祈ることしか出来なかった。

——そして、この数時間後、ワルシヤワの戦いはどうにか連邦軍の逆撃を凌いだジオン軍の撤退という形で幕を閉じる。

しかし、この戦いでジオン軍は初めて戦略的な敗北を喫し、その後、1ヶ月にも渡り、ヨーロッパ戦線は膠着状態が続くこととなった。

UCC0079年 2月18日 第二次南極会談

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 2月18日 南極会談

ワルシャワの戦いから1週間後。

南極では連邦側の提案により、二度目の南極会談が開かれ、ジオン側からは前回と同じキシリアを中心とする外交団、連邦側からは前回と若干顔触れが変わった外交団が出席してきていた。

「では、これより二度目の会談を行うが、よろしいかな？」

「ええ、構いません」

連邦側の代表の言葉に、ジオン側の代表であるキシリアは頷く。

「まず我々から申し出る講和の条件はこれだ」

連邦側が最初に講和の条件を提示する。

・ジオン公国をジオン共和国へと変えて、ジオン正統自治体をジオン共和国の首脳へと据えること。

・デギン公王の退位とギレン・ザビを始めとした戦犯を連邦に引き渡す。

・サイド3の持つ全ての技術を連邦に開示する。

・2年間のサイド3の保証占領。

・・・前回と比べると、緩和したと取れなくもない条件だ。

いや、サイド3の保証占領期間が前は3年と提示されていたのを考えれば、間違いなく緩和されていると言えるだろうし、この条件ならばジオンは曲がりなりにも独立国として認められることになる。

だが、だからと言ってジオン側が考慮するかは別問題だった。

「・・・なるほど、前回よりはマシなようすな。しかし、我々がこんな条件を飲むとお思いで？」

ワルシャワの戦いでは戦略的に敗北したとはいえ、地上は未だジオン優勢だ。

現にワルシャワ攻略には失敗したが、バルカン半島の占領には成功しているし、第二次降下作戦によって北米の旧アメリカのキャリフォルニア・ベースを中心とする西海岸とニューヨークを中心とする東海岸の占領にも成功している。

そして、宇宙ではもはや言うまでもない。

むしろ、前回の会談よりも優勢になった状況下でジオンがこのような条件を飲むことはあり得ないだろう。

「しかし、前回のワルシャワでは貴国の軍は相当なダメージを負った筈ですが？」

「見くびらないで頂きたいな。確かにあの打撃はそこそこ痛かったが、回復不能という訳ではない」

ジオンがワルシャワの戦いで失った兵力は捕虜も含めて1万5000人であるが、人口が2億人も居るジオンからすれば回復が不可能という訳でもないし、それどころかこの程度の損害ならば各サイドからの義勇軍でも補える数字だ。

だからこそ、ジオンが譲歩することは決してない。

そういう態度を見せるキシリアであったが、連邦側の代表は次に思考が凍り付くような発言を行う。

「そうですね。しかし、先日、あなた方は核兵器を使用しました。あなた方が幾つ核兵器を持っているかは知りませんが、核の撃ち合いで我々に勝てるのですか？」

最初、何を言っているのか分からなかったキシリアであったが、代表としての責任も有るのか、どうにか気を持ち直すところ言った。

「これは笑わせてくれる。そもそも核で吹っ飛んだのは我々の将兵だけで貴国の人間は将兵はおろか、住民も1人も居なかった。これで我々が使用したと? いや、そもそも核の撃ち合いと言っても、あなた方は地球上で撃ち合うつもりか?」

重力圏下の地球では放射能は長年残り続ける。

そんな中で核の撃ち合いなどすれば、何処かの世紀末のように『地球は核の炎に包まれた』になってしまうだろう。

いや、そもそも地球連邦の支持母体はアースノイドだ。

こんなことをすれば、幾ら地球連邦政府と言えども支持を失ってしまっただろう。

「いえ、地球でそんなことをする訳にはいきませんよ。使用するにはコロニーに対してです」

「き、貴官は何を言っているのか分かっていいのか!？」

ガンダムSEEDに出てくる地球連合（厳密にはブルーコスモス）のようなことを言い出す連邦に、キシリアは思わず動揺してしまう。まさか連邦がそこまでの事を言い出してくるとは思わなかったからだ。

そもそも地球連邦のコロニーへの対応は各サイドによって異なる。でなければ、原作でサイド1、2、4が連邦を支持するわけがない。もつとも、だからこそ原作では開戦序盤にジオンに全滅させられたとも言えるのだが。

この世界では開戦前のジオンの積極的な外交と各サイドに駐留していた連邦軍があつという間に散ってしまったこともあって、それらのサイドは一応、ジオンを支持しているが、未だに親地球連邦派閥も多く、予断は許されていない。

しかし、コロニーを吹き飛ばすということはそれらの勢力も一緒に

吹き飛ばすことになりかねないし、そもそもこれはガンダムSEEDでも思ったことだが、地球政府はコロニーから莫大な利益を得ているので、それらを吹き飛ばすことは自分の首を閉めるということでもある。

だが、連邦側の代表は平然とした表情でこう言った。

「そうですね。私としてはコロニーの1つ2つを吹き飛ばして次の反乱を未然に防いだ方が適切だと思っています。まあ、これは私個人の意見ですし、反対する人間も多いのですがね」

「……」

「さて、話を戻しますと、この会談の本命としては双方の核兵器の使用の禁止を設定したいのです」

「……そういうことですか」

つまり、連邦はこの会談で講和を行うつもりはなかったのだ。

本当の狙いとしては先日でのワルシヤワで使用した核の報復を防ぐために、核の使用をここで禁止したいという思惑があるのだろう。

(色々と怒りはあるが……ここは結ぶべきだろうな)

核の被害を受けたジオンからすれば、連邦から核を使用してきたにも関わらず、連邦から核の使用を禁止する旨を提案してきたことに色々と言いたいことはある。

しかし、ここでごねたとしても良いことなどない。

連邦の方が多くの核を有しており、撃ち合いになれば連邦が勝つのは事実なのだから。

「……分かった。良いだろう。核兵器の使用の禁止については了承し



よう。ついでにNBC兵器の使用についても禁止するべきだと思うが、どうだろうか?」

「よろしいでしょう。あとは質量兵器の禁止についてですな」

「それについては物にもよるが、マスドライバーの事について言っているのなら了承はしない。あれは別に非人道的な兵器という訳でもないからな」

ジオンが連邦に対して優位に立てるものは少ない。

MSやミノフスキー粒子は今のところ連邦より扱いは一歩リードしているが、ミノフスキー粒子についてはあと1ヶ月もすれば連邦も使ってくるだろうし、MSについてもこちらから鹵獲したものを解析すれば、いつかはものにするだろう。

まあ、テム博士がこちらに居る以上、連邦のガンダムの誕生は無いだろうが。

ここでマスドライバーを削られれば、その数少ない優位に立てる要素すら自分に捨てることになるので、キシリアはそれを譲ることは出来なかった。

「そうですか。残念ですな。では、質量兵器の制限については無しということだ」

「うむ。あと捕虜についてだが、これは旧世紀のジュネーヴ条約を遵守するという事で良いだろうか?」

「ええ、それで構いません。それと捕虜の交換についてですが――」

その後、だいたいの戦時協定を結んだ後、最後とばかりに連邦の間はこう尋ねる。

「それで、最初に提示したこちらの条件は承諾いただけるのでしょうか？」

「ご冗談を。我々は独立国家ジオン公国だ。こんな条件を飲むわけにはいかない」

残念です。

その連邦の男の言葉を最後に、二度目の南極での会談は幕を閉じた。

◇サイド3 ズムシテイ

『申し訳ありません。兄上』

南極会談が終わった後、総帥府に通信を行ったキシリアは開口一番、ギレンに対してそう謝罪する。

「いや、構わんよ。戦時協定が結ばれただけでも大きな進展だ」

『恐縮です。それで第三次降下作戦は？』

「予定通り進める」

ギレンはきつぱりとそう言った。

二度目の南極会談が戦時協定の制定だけで終わってしまった以上、地球降下作戦は予定通りに進めなくてはならない。

少なくとも、ギレンはそう考えていたし、キシリアもまたそれは同じだった。

『分かりました。私は急ぎ、グラナダに戻ります』

「うむ、それではな」

ギレンがそう言った直後、通信が切れたのか、キシリアの姿が画面から消える。

それを見届けながら、ギレンはこう考えた。

(連邦はやはり諦める気配はなしか。ここが落としどころだと思っただが……)

ギレンは連邦の粘りに内心で呆れていた。

なにしろ、宇宙軍が壊滅して地球に侵攻されているというのに講和の“こ”の字もないような対応をしてくるのだ。

まあ、ここで戦争を止めてしまえばジオンに喧嘩を売ってしまう形となった連邦の政治家達の政治生命は間違いなく絶たれるので、必死になる理由はよく分かるが、そんなことに付き合わされる軍の人間を気の毒に思う。

(まあ、こちらも似たようなものだが……)

だが、ジオンも事情は似たようなものだ。

なにしろ、連邦が核を使ってきたせいでそれに反発したジオン国民が戦争継続を叫んでいる始末なのだから。

例の連邦のプロパガンダは情報封鎖をしたお蔭でバレてはいないが、これがバレれば手がつけられなくなるだろう。

そうなれば、講和など夢のまた夢だ。

だからこそ、連邦のプロパガンダはこちらで「無かった」ことにしなければならぬ。

(まったく。なんで我々が連邦の不始末を処理しなきゃならぬ)

ギレンは余計な事をやらかした挙げ句、自分の仕事を増やしてくれた連邦に怒りの感情を抱きつつ、執務を続けるためにペンを手に取った。

U C 0 0 7 9 年 2 月 2 1 日 第三次降下作戦

宇宙世紀 0 0 7 9 年 2 月 2 1 日 軌道上 巡洋艦『ハグロ』 格納庫

ここは地球軌道上。

今そこでは第三次降下作戦に参加するための兵力が集まっており、ジオン軍と今回から参加する各サイドの義勇軍は今か今かと作戦開始の時を待っていた。

「ねえ、本当に乗るの?」

そんな中、ジオン軍の巡洋艦『ハグロ』に乗艦していたのび太も耐熱装備を施したジムⅡ改のコクピットで作戦開始の為の準備を行っていた。

しかし、問題だったのは今回の降下作戦で同乗者が居ることだ。

正直、自分一人で降下するのは不安もあったので、同乗者が居てくれるのは非常に助かるし、その為に複座型のコクピットを用意してくれたのも感謝しているのだが、その同乗者がメイだということには流石に驚かざるを得なかった。

「うん。だってナビゲーターくらいは必要でしょう?」

「それはそうだけど・・・」

のび太はそれでも躊躇う。

なにしろ、自分が飛び込むのは対空ミサイル（と言っても、ミノフスキー粒子のせいではほとんど役に立たないが）や対空機銃（これもリーダーがミノフスキー粒子によって役に立たないため、手動）の弾丸の嵐の中だ。

そんな中に女の子を連れていくのは、流石に抵抗があった。

「それに、3つも年下ののび太だけを前線に出して、私だけ後ろに引っ込んでいるなんて出来ないよ。私にも意地があるんだから！」

「・・・そっか。分かったよ。でも、何度も言うけど命の危険は有るからね」

「それくらいは分かってるよ」

のび太の言葉にメイはそう答える。

そのメイの反応に、のび太は若干の不安を覚えるが、これ以上の説得は意味がないと思い、それ以上言うことを止めた。

そして、メイは逆にこのような質問をしてくる。

「・・・ねえ、本当に私のために戦ってくれるの?」

「ん?・・・ああ、そうだけど、それがどうかしたの?」

「のび太は怖くないの?戦いが」

「・・・怖いよ。僕もメイさんを助ける為じゃなかったらここに来なかったかもしれないね」

それはのび太の本音だった。

そもそもこのび太は別に正義のためとか、そういう理由で戦いに関わったことはない。

かつて魔法の世界に行った時に仲間と共に魔界に乗り込んだのも美夜子とその父親の為であったし、コーヤコーヤでガルタイト工業と戦ったのも、ロップル達を含めたコーヤコーヤの人達を守りたいと思ったからだった。

人魚族の一件で人魚族に味方したのもソフィアを助けるためだったし、鉄人兵団の時に戦ったのは、自分達の星の人類が危機に貧して

いたからだ。

その他にも色々冒険はあったが、たいがい友達を助けるためだったり、困った人々を助けたいという思いがあつて戦いに参加したのがほとんどだった。

つまり、誰かの為という理由がつかないと戦えない。

それが野比のび太という人物の根幹だった。

その行動を正義と見る人も居るだろう。

あるいは皮肉を込めて「偽善」という人間も居るかもしれない。

だが、のび太にそのようなつもりはなかった。

彼からしてみれば、「人」として当たり前的事をしたただけなのだから。

まあ、大冒険の中には普通の人間に出来ない事も多々あったのだが、それはのび太達のポテンシャルの高さと土壇場の際の意志の強さ、更には秘密道具による難易度の低下がそれをもたらしたと言える。

さて、話を戻すと、この戦いも実はそれまでの大冒険と同じだ。

この戦いに参加したのだから、あくまでメイ達を守るために参戦したにすぎない。

それさえなかったら、のび太はこの戦いに参加するという決断をしなかっただろう。

幾ら戦争が起きていると言っても、己のちっぽけな正義だけで戦争に進んで参加するほど、のび太は勇猛でも無謀でも無かったのだから。

「そっか。ごめんね、巻き込んだじゃって」

「いや、そんなことは気にしないで良いよ。自分で戦うって決めたんだし」

のび太はそう言ってフォローするが、メイは内心でかなり気にしていた。

なにしろ、のび太を戦いに巻き込む決定的な決め手になつてしまつたのは、間違いなく自分の言葉であると自覚していたからだ。

(ここで本当の事を言わなきゃ、もう引き返せなくなる)

メイはそう予感していたが、なかなか口には出せなかった。当然だろう。

それはのび太との決別を意味していたのだから。

そして、そうこうしているうちに、艦内スピーカーからこのような音声が流れてきた。

『第三次降下作戦発動！本艦及びモビルスーツ隊は降下用意!!』

——こうして、第三次降下作戦は開始された。



「凄まじい活躍ぶりだな」

◇

第三次降下作戦の指揮官——ダグラス・ローデン大佐はそう言っ  
てニュータイプ部隊の活躍に驚いていた。

なにしろ、今回投入されたのはたった数機であるにも関わらず、次  
から次へと降下地点周辺に居る敵部隊を掃討していつているのだか  
ら。

特にアムロの機体の活躍が凄まじく、鬼神のような働きぶりで敵を  
叩きまくっていた。

「あれがかつてジオン・ズム・ダイクンの言っていたニュータイプとい  
う存在なのか？」

「デギン公王は厳密には違うと主張していますが……本当のところは  
よく分かりませんね」

ダグラスの言葉に、副官であるジェーン・コンティ中尉はそう返し  
た。

この世界ではニュータイプは2つの定義に別れている。

ジオン・ズム・ダイクンの主張する宇宙に適應する優れた資質を  
持った新人類という考え方。

もう1つはデギン公王の主張する人間が無意識下で持っている第  
六感が異常発達しているだけの普通の人間という考え方だ。

正直、どっちの主張が正しいのかは2人には分からない。

彼らはニュータイプではない存在——所謂、オールドタイプの人間  
なのだから。

「その意見には同意だがな。俺はデギン公王の言っていることが正しい。いや、そう思わなきゃいけないもんだと思う」

「どうしてですか？」

若干驚いた顔でジェーンはそう尋ねる。

ダグラスは言うまでもなくダイクン派として知られており、ジオン軍の将兵の大半からは冷たい目で見られている存在だ。

ジェーンが彼の副官についているのもダグラスの見張りのためだが、彼女はザビ家にあまり良い感情を抱いていない（ちなみにザビ家の方もその事を知っているが、あえて彼女を送り出した）為、あまりダグラスに都合の悪い情報は送らないつもりでいたし、ダグラスもその事を知っている上に彼女の事を信頼してもいる。

なので、ザビ家に配慮した発言をする必要はなかったので、この発言には心底驚いていた。

「仮にニュータイプという存在が特別な新人類だったとしよう。それで俺達は簡単にそれを受け入れられるか？」

ダグラスはそこは疑問だった。

幾らニュータイプが新人類で世の中を導ける存在だからと言って、大半のオールドタイプが必ずしもそれを受け入れるとは限らない。

人間とは基本的に“普通”と違う存在は受け入れられない種族なのだから。

勿論、長い年月を掛けていけばニュータイプという存在も受け入れられるのかもしれないが、逆にニュータイプという存在自体が異端として刈り取られる未来も存在するかもしれないのだ。

旧世紀に起きた魔女狩りのように。

「それは・・・確かにそうですが・・・」

「まあ、そういうことだ。それに特別扱いされるのはニュータイプの奴等にも不幸しかもたらさない。だったら、デギン公王が言うように普通の人間の延長と考えた方が良い」

特別扱いされてチヤホヤされた人間の末路など2つしかない。

舞い上がって傲慢な人間になるか、もしくは却って嫌気が刺すか。どちらにしても、ろくなものではないとダグラスは言う。

しかし、実のところ、ニュータイプは心の感受性が高いために、大半が後者の“周りに嫌気が刺す”人間になる。

原作のシャア・アズナブルやカミーユ・ビダンがそうであったし、マフティーことハサウエイ・ノアもそれに近かった。

そして、そういった人間に限ってとんでもない事をやらかすケースも多かったので、ダグラスの危惧も間違いでは決して無いのだ。

だが、ダグラスはニュータイプが普通の人間とは少し違うということとは分かっている。心の感受性については当然知らず、それ故に先の意見が出ていたのだが、ぶつちやけ知っていても大して結論は変わらなかっただろうし、むしろ却ってニュータイプの存在を心配したかもしれない。

原作アニメでギレンがシャリア・ブルに対して言ったように、あまり人の心を覗きすぎると身の破滅をもたらすことになるということ、ダグラスもよく分かっていたのだから。

「・・・」

「もつとも、こんなことを言うとは他のダイクン派に何を言われるのか分かったものではないし、ニュータイプ達の士気も落ちるだろうから、面と向かって言うつもりはないがな。特別扱いはしないつもりだよ」

ダグラスはそう言いながら、ジエーンと共に戦況を見守っていた

が、やがて先に先行させた部隊が降下ポイントを確保したという報告を受け取ると、第三次降下部隊の本隊を投入する決断を下す。

「全部隊、降下開始！先に降下した部隊に遅れを取らぬ健闘を期待する！！」

ダグラスがそう言った直後、第三次降下部隊の本隊は降下地点であるオーストラリア大陸東部に向けて降下を開始した。

## UC0079年 2月23日 のび太の異変

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 2月23日 オーストラリア大陸中東部

「まるでもぐら叩きだ」

オーストラリア大陸中東部にてガンダムに搭乗するパイロット——アムロ・レイはそのような感想を抱く。

開戦から2日経ち、ジオン軍はオーストラリア大陸東部の制圧を成功させた。

オーストラリアは都市が東部に集中しており、連邦軍の各部隊の駐屯地司令部もそこに置かれている。

だが、それ故に初日でジオンに司令部を壊滅させられたオーストラリア方面軍はミノフスキー粒子の効果もあってか、全く統率が取れずに散り散りになった。

そして、そのままジオン軍は無人の荒野を駆け巡るような勢いでオーストラリア大陸西部に向かって進撃を行っていたが、ここで1つ連邦軍は厄介な手段に出てくる。

そう、ゲリラ戦だ。

オーストラリアは七大陸の中で一番小さい大陸だったが、それでも大陸と付けられているだけあって広く、おまけに中央部には砂漠地帯も存在する。

第二次世界大戦のアフリカ戦線で活躍した有名なラット・パトリル部隊もオーストラリア出身の人間で構成されており、この時代にも同じような事が出来る連邦のオーストラリア方面軍の人間は大勢居た。

その結果、司令部と通信が途絶えたオーストラリア方面軍の兵士達は、すぐさまこのようなゲリラ戦に移行していて、その処理に駆り出されたアムロ達は大変に苦勞しており、アムロ自身も先程襲撃を受けたばかりだ。

「でも、向こうも連携は取れていない」

アムロはなんとなくだが、そう感じていた。

と言うのも、この2日間の間、たまたまこちらにも襲撃を受けるのだが、小隊や分隊レベルの場合がほとんどで、一度だけ中隊レベルの襲撃を受けた時もあったが、それ以上の規模の部隊で襲撃を受けた時はついで無かったし、襲撃のタイミングも場所もてんでバラバラだ。

まあ、それ故に波状攻撃じみたものを受けるとなり、ジオン軍は精神的に疲弊していたのだが、それ故に各個撃破はしやすくなっていた。

そして、それはおそらく司令部が潰れたことと、ミノフスキー粒子による通信の妨害が関係しているのだろうとアムロは考えている。

「地道に掃討していくしかないか」

アムロはそう呟きながら、この場にのび太が居なくて良かったと考える。

この神経のすり減るような戦いは、自分より4つも年下の少年にはあまりにも過酷すぎるのだから。

◇シドニー付近 ジオン軍駐屯地

「はあ・・・はあ・・・はあ」

シドニー付近に存在するジオン軍の駐屯基地。

そこはつい数日前まで連邦軍が使っていた施設であったが、現在はジオン軍が修理して滞在している。

その基地の所属になったのび太は、先の降下作戦以降、実戦に駆り出されることは無かったものの、日々こうして訓練に明け暮れていた。

「ふう・・・ふう。次でラストだね」

今回の訓練は基地内を一周3キロ近くもある距離を10周するといふのび太の年齢を鑑みると、かなりハードな訓練であったが、ニュータイプ研究所での訓練の成果が出ているのか、限界を見せることなく息を大きく吐く程度で問題なく続けられていた。

(しかし、なんで僕は実戦に出されないんだろうね)

ラスト一周の道のりを走りながら、のび太はそのようなことを考える。

第三次降下作戦時、のび太はメイのナビゲーションの下、先行して降下ポイントまで突っ走った。

正直、自分を迎え撃ってきた対空砲火は少し怖かったが、あの鬼畜なシミュレーションのお蔭か、比較的冷静にメイの誘導する座標に降下する事に成功したのだ。

その後、自分の機体を連邦軍が攻撃してきたものの、応戦して最終的に戦車5両、車両8両の計13両の撃破するという戦果を挙げた。

しかし、その際、のび太は感知してしまったのだ。

それらの車両に乗っていた人間の死を。

のび太のニュータイプ能力は今のところ、宇宙世紀最高のニュータイプであるカミーユ・ビダンには明らかに劣っているが、それでもアムロと並び立つほどに強力なニュータイプなのは変わらない。

だからこそ、人の死をのび太は敏感に感じ取り、1両目の車両を撃破した時、のび太は吐きそうになった。

しかし、メイの存在と今までの大冒険にて培った経験で強化された精神によつて、すぐに態勢を建て直して戦闘に望んでいき、気づけば前述したように13両もの敵を撃破していたのだ。

(その時は呆然としていたなあ)

直接じゃないとはいえ、自分の手で人を殺してしまった事実のにび太はその時は呆然とした。

だが、のび太が降り立った場所は戦場。

ぼうっとしている暇はない。

幸い、周辺の車両はのび太によつて撃破され、その後、すぐに本隊の降下が始まったから良かったが、この次もそうだとは限らないのだ。

だからこそ、のび太は改めて気を入れ直しながら次の実戦に備えていたのだが、予想に反して次の出撃命令は降りなかった。

これは司令官であるタグラス大佐がのび太には次の再出撃は難しいと判断したからだだったが、のび太はそれを知らないし、その判断に



のび太は特に不満はない。

出ないなら出ないで良いと思っていたし、偉い人の言葉には出来るだけ従うべき（勿論、どうしても納得できないものや、あまりにも理不尽なものであれば話は別だが）だと思っていたからだ。

そして、現在は次の実戦に備えるためにこうしてトレーニングを行っていた。

「しかし・・・僕ってこんなに足が早かったっけ？」

のび太は自分の足を見ながらそのような疑問を抱く。

のび太がこの世界に転移する前ののび太の50メートル走のタイムは10秒代だった。

ちなみにのび太の年代である小学高学年の平均タイムは9秒代なので、これは同年代にしてはかなり遅い部類に入るのだが、これはのび太が運動音痴な為仕方ないとも言えただろう。

しかし、先程メイに計って貰ったこの基地での50メートル走（ちなみに他の兵士は100メートルだったが、これをのび太がやると体を壊すかもしれないという配慮で半分にされた）は8、59秒。

つまり、8秒代だ。

これは中学生の平均タイムだったりするので、のび太が小学校高学年であることを考えると、同年代の中でもかなり足が速い部類に入ることになる。

まあ、他の兵士はもっと上の年齢だけあってもっと足が速いので、特段のび太の足が速いというわけでもないのだが、ついこの前まで10秒代だったのにも関わらず、たった1ヶ月程の間に8秒代になったとなると、流星ののび太も疑問を覚えてきていた。

（この世界の地球も根本的には同じ重力の筈だから、コーヤコーヤの時みたいなのは無い筈なただけだなあ）

のび太はそう思った。

そう、ここは別世界とは言えど地球であり、のび太の世界の地球と重力は変わらない。

コーヤコーヤの時は重力が地球の十分の一という環境だったからこそ、身体能力を格段に上げることが出来たが、この世界の地球ではそのようなことは無い筈だった。

だからこそ、このような急激な身体能力の向上は本来ならあり得ないのだが、何故かそれが出来てしまっていた事にのび太は困惑していたのだ。

(まっ、いつか。細かいことを気にしても仕方がないし、それに足が速くなるに越したことはないしね)

だが、のび太はそこで思考を打ち切る事にした。

考えても仕方がなかったし、別に悪いことが起きているという訳でも無かったからだ。

そして、そのまま走り抜けようとしたその時――

「ッ!？」

何かが頭の中に流れてくるような感覚を覚え、のび太は思わずその場で立ち止まる。

(なんだ?この感触、あつちの方から感じるな)

のび太はその妙な感触を覚えた方角に顔を向ける。

すると、そこには小高い丘に佇むのび太より年下であろう1人の金髪の少女の姿があった。

「リタ・・・」

そして、その少女と目が合った時、のび太は思わず彼女の名前を口

ずさむが、そこである違和感に気づく。

(あれ？僕はなんであの子の名前を知っているんだ？)

のび太の記憶にはあの金髪の少女の姿は影も形もない。

単純にのび太が忘れているという可能性もあるが、年下とはいえあれだけ綺麗な少女ならば確実に印象に残るために、その可能性は限りなく低かった。

となると、彼女は間違いなく初対面であり、のび太は話したことも聞いたこともない彼女の名前を知っていたことになる。

(いったいどうなっているんだ？)

のび太がその状況に困惑していると、彼女はクスツと微笑むと、丘の向こう側へと立ち去ろうとする。

「あつ！待って……」

それに気づいたのび太は慌ててリタを呼び止めようとするが、彼女はそれを無視(そもそも聞こえていたかどうか怪しいが)する形で丘の向こうへと立ち去っていった。

「……なんだったんだ？」

のび太は呆然としながらそれを見送ってしまったが、その時に会った金髪の少女の姿は、のび太の脳裏に大きく刻まれることになった。

UC0079年 2月27日 のび太の怖さ

宇宙世紀0079年 2月27日 サイド3 ズムシテイ

「そうか。オーストラリア大陸はあと数日で制圧の見込みか」

ギレンはセシリアからの報告に、少しだけ顔を綻ばせる。

第三次降下部隊は当初の予定通りにオーストラリア大陸制圧を行い、初っぱなに厄介な東部を潰しただけあって僅か6日で東部から中央部にかけてを制圧しており、残る西部も数日で制圧できるところまで来ていた。

まあ、その後は砂漠に散った連邦軍残党の掃討という厄介な仕事も残っているが、鉱物資源の宝庫であるオーストラリアを制圧できた意味はそれを加味しても非常に大きい。

なにしろ、これで万が一オデッサが陥落したとしても、代わりにオーストラリアから資源を採掘すれば良いのだから。

「しかし、思ったより制圧が早かったな」

「どうやらオーストラリア大陸には大した連邦軍は居なかったようです。それでこれほど早いのかと。ですが、気になる情報も有ります」

「なんだ？」

「はっ。これは情報部からの報告なのですが、どうやら南米からニューカレドニア島にかなりの戦力が送り込まれているようです。目的はおそらくオーストラリア大陸の奪還、あるいは牽制かと」

「・・・なるほど、もう出てきたか」

ギレンはその報告を聞いて眉をしかめる。

天国に一番近い島とも言われるニューカレドニア島は南太平洋にある比較的大きな島だ。

ニツケルを産出し、過去の太平洋戦争の時にはソロモン諸島に侵攻してきた日本軍に対抗するため、米軍の南太平洋艦隊司令部が置かれたこともある。

おそらく、連邦軍はオーストラリア大陸に侵攻したジオン軍をジャブローのある南米に向かわせないための牽制としてこの島に戦力を投入し、更には何かしらの事情でオーストラリア大陸のジオン軍が弱体化したときには奪還の為の戦力として使おうと考えているのだろう。

「ならば、ニューカレドニア島を奪取・・・いや、ダメか」

ギレンは一瞬、後顧の憂いを無くすためにその島を攻めようかとも考えたが、それは断念した。

なにしろ、ニューカレドニア島は今まで降下したポイントと違って起伏の激しい土地が多い。

占領は確実に出来るだろうが、ジオン軍も無視できない損害を負ってしまうことになるだろう。

(とは言え、ニューカレドニア島はオーストラリア大陸に近いから無視するわけにもいかんしな。さて、どうしようか)

ギレンはそう考えるが、ここでセシリアがある報告を入れてきた。

「ギレン閣下。その事についてですが、オーストラリア方面軍のタグラス大佐からある意見具申が有りました。これがその書類です」

そうやってセシリアはその意見具申書をギレンへと渡す。

そして、その書類は読み上げるが、その内容には少し驚かされた。

「ほう。ニューカレドニア島を牽制するために旧ニュージーランドを制圧する、か」

それはニュージーランド攻略作戦の提案書だった。

実はタグラス大佐もニュージーランド島の連邦軍の存在には危機感を抱いており、その牽制策としてギレンに対して旧ニュージーランド攻略を打診してきていたのだ。

「策としては悪くないが・・・ニュージーランドの敵戦力はどれ程のものなのだ？」

「はい、南島に1個旅団5000人、行政区画のある北島に1個連隊3000人の計8000人の兵力となっています」

「・・・ずいぶんと少ないな。曲がりなりにも最前線に近い場所になっているのだから、もっと戦力が有っても良さそうなものだが？」

「なにぶんオーストラリア侵攻からまだ6日しか経っていませんから。それに旧ニュージーランドは大きな島とは言え、重要な拠点があるというわけでも無いようですから、連邦にとつて優先順位は低いのでしょうか。もっとも、もう少し経てば戦力は増えると思われませんが・・・」

セシリアは自信なげにそう言う。

なにしろ、ニューカレドニアと比べて戦力のでこ入れが無さすぎるのだ。

情報の精度を疑うのも無理はなかった。

「事前に情報の是非を確かめる必要が有りそうだが・・・もし事実ならば攻略を許可しよう。タグラス大佐には後でそう伝えるように。それとオーストラリア大陸には確かノビタ・ノビ特務准尉が派遣されて

いたと思うが、彼はどうしている?」

「はい、第三次降下作戦に参加した後は訓練に励んでいるとの事です。あと、3日後に行われるタスマニア島上陸作戦に参加する予定となっております」

「そうか。無事ならば良い」

「・・・ずいぶんとあの子供の事をお気になさるのですね」

「まあ、な」

ギレンはセシリアの疑問にそう返す。

セシリアは転生者ではないが故に分かっていなかったが、ギレンのような転生者達からすればのび太は普通の人間とは訳が全く違う。

なにしろ、ドラえもんの劇場版では大した道具を使っていない上に、1体のロボットと四人の小学5年生というとんでもなく少ない人員にも関わらず、劇場版補正というふざけた能力によって、時には1つの国の政権をひっくり返し(新のび太の大魔境)、時には宇宙から来た侵略者(新のび太と鉄人兵団、のび太の新魔界大冒険)相手に過去の歴史を変えて侵略者(鉄人兵団)をその星の歴史から強制退場させたり、敵対者の星(魔界星)を丸々消滅させたりしているキャラの内の一一人なのだ。

劇場版などでの悪運の強さから、戦死する心配は全くしていなかったが、その動向は嫌でも気になってしまう。

まあ、流石にこんなことを転生者でもないセシリアに言うわけにはいかなかったが。

「あの子供には色々と有るのだよ。色々、な」

ギレンは苦笑しながらそう言った。

◇地球 オーストラリア シドニー周辺 ジオン軍基地

「ねえ、ノビタ。最近、どうしたの？」

今日の訓練を終え、基地で夕食を取っていたのび太はメイからそのような言葉を投げ掛けられた。

「えっ？どうしたのって・・・別になんでもないけど」

「そう？最近、ぼうつとしている時があるから何か気になることがあるんじゃないかと思ったんだけど・・・」

そう、実はここ最近、のび太は心ここに在らずといった感じになる



ことが多くあった。

そんなのび太の事をメイは心配していたのだが、聞きづらい雰囲気  
を漂わせていたので、なかなかその事について聞くのを躊躇していた  
のだが、今日、少し勇気を出して聞くことにしたのだ。

しかし、のび太からしてみれば、メイに聞かれるまでそのような変  
な空気になっている自覚はなかったので、そこをメイに指摘されて少  
し困惑していた。

「・・・そうだったんだ。ごめん、あまり自覚してなかった」

「いや、別に謝る必要はないよ。ただ心配だっただけで・・・」

「心配かけてごめんね。でも、本当になんでもないんだよ」

そう言いながらも、のび太は4日前に会ったあの金髪の少女の姿が  
頭から離れない。

(いったいなんなんだ?あの子は)

あの時感じた魂が触れ合うような不思議な感触。

自分の中に存在するニュータイプ能力が何か関係しているとい  
うことはなんとなくが分かっていたが、そもそもニュータイプ能力に  
ついてあまり理解しているとは言えないのび太にとって、あの感触は  
非常に興味深いものがあった。

のび太はそのまま思考を続けたかったが、今はメイと話をしている  
最中なのを思い出し、すぐさまその思考を打ち切る。

「ところで、今度の作戦で使うモビルスーツを乗せる飛行機みたいな  
奴・・・ええっと、ベースジャバーだったかな?その使い方をもう一  
回教えて欲しいんだけど」

「ああ、あれ？それなら心配いらぬよ。私が操作するから」

「……えっ？」

のび太は一瞬だけメイが何を言っているのだから分らなかった。それはそうだろう。

メイと一緒にMSに乗るのは降下作戦の時だけの特例で、今後の出撃は1人でやるものになると思っていたのだから。

「あれ？知らなかった？」

「いや、聞いてないよ。メイさんが出撃の時に一緒に乗るのって、あの時だけの特例じゃなかったの？」

「違うよ。だって、のび太はMSに乗ってから日が浅いでしょ？だから、暫くはサポートしてくれて頼まれてるんだもん」

「そ、そうだったんだ」

全く聞いていなかった話に、のび太は顔をひきつらせるが、よく考えたら当然だと思ひ直す。

なにしろ、毎日錬成に励んでいるとは言え、未だのび太のMS操縦レベルは新兵以上ベテラン以下といった感じだ。

おまけに体力はジオンの一般兵士どころか、各サイドの義勇軍の兵士にすら劣る（まあ、これは子供なので当たり前だが）。

そんな人間にMSを1人で操縦させるのは、やはり不安と考えているのだからのび太は推測した。

まあ、実際にはその他にも、のび太の精神面の負担軽減などの考慮もあってメイと一緒に乗せる処置となったのだが、流星にそこまではのび太も知らない。

「じゃあ、今度出撃するときはよろしく頼むね」

「うん、任せといて！」

のび太のその言葉に、メイは満面の笑顔を浮かべながらそう返した。

——そして、この3日後、2人はセシリアがギレンに報告した通り、タスマニア島上陸作戦に参加することとなる。

## U C 0 0 7 9 年 3 月 2 日 タスマニア島上陸作戦

宇宙世紀<sup>U C</sup>0 0 7 9 年 3 月 2 日 タスマニア島上空

タスマニア島。

それはオーストラリア大陸南東部から240キロ南方に存在する島であり、その面積は北海道の8割程。

かなり大きい島であり、その位置関係から連邦のオーストラリア奪還の橋頭堡となる危険ありとして、第三次降下作戦前からジオン軍の占領予定地域として組み込まれていた。

ちなみに島を守る連邦軍は1個中隊300人。

物凄く少ないが、これは守備兵力をオーストラリア大陸に集中していた為であり、尚且つオーストラリア大陸にジオン軍が降下した後も特にテコ入れなどがなかった為に、このような僅かな戦力となっていたのだ。

そして、今日、ジオン軍によるタスマニア島上陸作戦は行われようとしており、その攻略部隊にはのび太とメイの姿もあった。



「そろそろ降下地点に到着するよ。準備は良い？」

ベースジャバーに乗せられた複座型ジムⅡ改のコクピットの中でベースジャバーを操作するメイはモビルスーツ本体を操作するのび太に対してその声を掛ける。

ちなみに今回の作戦はまず先行したアイナ・サハリン少尉が操縦するMA——試作型アプサラスが敵を蹂躪し、それをのび太の機体を含めた5機のMSが支援。

そして、然る後にこちらの1個中隊200人を上陸させてタスマニア島を制圧するという趣旨になっていた。

「うん、もう準備は出来てるよ。だけど・・・」

「どうしたの？」

「あれが出てきてるのに、僕達、必要あるのかな？」

そう言うのび太の視線の先にはMSよりも遥かに巨大な虫のような形をしたギニアス・サハリン技術准将力作のMA——試作型アプサラス（後にアプサラスIと呼ばれることになる機体）の姿がある。

この機体のコンセプトは小型のメガ粒子砲を搭載してジャブローの頑丈な岩盤を撃ち抜くというものだったが、最終的には小型の拡散メガ粒子砲を搭載して大多数の敵を蹂躪するというチート兵器となる予定だった。

もつとも、小型拡散メガ粒子砲の開発とマルチロックシステムの開発は少し難航していた為、今回、実戦試験も兼ねて出撃した試作型アプサラスに搭載されているメガ粒子砲は通常のものであったのだが、それでも僅か300人の連邦軍を相手にするには十分すぎる程の火力を持っている。

「火力的には確かにアプサラス一機だけでも十分なんだけど、あれに搭載されているメガ粒子砲は前にしか撃てないんだよ」

「えっ？他の武装は？あれだけ大きいんだから、他にも何か積んでいるんじゃない？」

「残念ながらそれだけ。小型化されたメガ粒子砲に動力以外の全エネルギーを使っているから」

「じゃあ、後ろや横から撃たれたらそれに対応は出来ないってこと？」

「そういうことになるわね」

「なんだ。見かけ倒しか」

ギニアスが聞いたら怒り狂いそんなことを呟くのび太だったが、実のところアプサラスは鎮座しつつ真正面に居る敵を大火力を以て叩き潰すというコンセプトなので、モビルスーツのような機敏な動きは出来ない。

なので、今回のような少数の敵を相手にするにはあまりお勧めの兵器ではなかったのだが、前述したように今回の出撃は実戦試験も兼ねており、のび太達はその護衛だったりする。

そして、のび太もメイの話聞いて、なんとなくだがそれを理解していた。

（要は制圧はあのアプサラスだっけ？それに任せて僕達はアプサラスを守れるってことか。・・・別に構わないけど、まるで子供のお守りみたいだな）

これもあながち間違っではない。

なにしろ、アプサラスは出来たばかりの赤ん坊と言っても良いほどの完成度だったのだから。

そして、のび太がそんなことを考えていた時、遂に降下ポイントが見えてきた。

「あれか。よし・・・それ！」

のび太は降下ポイントを目視すると、タイミングを見計らってパツクパツクのスラスタを吹かせ、同時にベースジャバーを切り離す。そして、スラスタを上手く緩めて、ゆっくりと地面へと着地した。

（他の機体は・・・全機居るな。あのアプサラスとかいうのは上で止まっているし、ここからどうすれば良いんだろう？）

のび太は今後の行動に少し迷う。

第三次降下作戦の時は、ただ降下地点周辺の敵をやつつければ良かったが、今回は敵をやつつけつつアプサラスというデカブツも守らないといけないのだ。

しかし、周辺には見たところ敵は居らず、この場合、敵を探さなければいけないのだが、アプサラスを放置するわけにもいかない。

なので、そこら辺をどうすれば良いのかは、未だ戦場に出て日の浅すぎるのび太には全く分からなかったのだ。

だが、のび太が迷う必要はあまりなかった。

何故なら、着地して1分後には周辺に展開し始めた敵がロケット弾を多数こちらに向けて発射してきたからだ。

その中にはミサイルもあったが、それらは全てミノフスキー粒子の干渉によって明後日の方向に行くか、そこら辺の地面に突き刺さって目標に命中しないという末路を辿る。

だが、ロケット弾の方は弾自体に誘導装置が存在するわけではないので、ミノフスキー粒子の干渉を受けずに不規則な起動ながらもこちらに向かって真っ直ぐ飛んできた。

しかし、ジムⅡの機体は四肢はともかく、胴体部は61式戦車の150ミリ砲を喰らっても大丈夫なように作られており、戦車の正面装甲（戦車の中で一番硬い部分）を破壊できるかどうか分からないレベルのロケット弾ではよっぽど当たりどころが悪くない限り、ジムⅡを破壊できる筈もない。

「このー！」

MS部隊は反撃と言わんばかりにロケット弾が放たれた方角に向けて、それぞれの機体が持つマシンガンを発砲し、のび太もまた90ミリマシンガンを発砲する。

マシンガンというより、アサルトライフルに近いこのマシンガンはセミオート・三点バースト・フルオートの3つにモードの切り換えが可能であり、のび太は三点バーストモードにしなから敵の陣地と思われる方目掛けて3発ずつ弾を放り込んでいく。

途中でのび太の攻撃で死んだ兵士の思念がのび太の頭に飛び込んできると、多少は慣れてきたのか、初戦と比べて気にならなくなっており、若干気分が悪くなる程度で済んでいた。

（よし、順調だ。このままいつてくれれば良いんだけど・・・）

のび太はそう思いながら、辺りの掃討を続ける。

そして、一通り制圧し、残るは1つに固まっている装甲車と歩兵の集団だけとなったその時、鎮座しているだけだったアップサラスが突然動き出した。

「な、なんだ？どうしたんだ!？」

突然の行動にのび太は少し慌てるが、そんなのび太にメイがある報告を入れてくる。



「ノビタ、すぐにこの場から離脱して」

「えっ？どうしたの、いきなり」

「あのアップサラスだけど、どうやら敵の掃討のためにここでメガ粒子砲の発砲を行うみたい。ここに居たらそれに巻き込まれるよ！」

「わ、分かった！」

メイにそう言われ、のび太は慌てて機体を操作して今の場所から移動していく。

そして、のび太を含めた全てのモビルスーツが戦線離脱を行った直後、アップサラスの開口部からメガ粒子砲の特徴である巨大なエネルギーの奔流が放たれる。

(す、凄い！)

のび太はその光景に圧倒されていた。

なにしろ、アップサラスから放たれたメガ粒子砲はその射線上に存在した連邦軍を障害物ともども消滅させ、地形には見事なクレーターを描いていたのだから。

それはのび太の中に存在した『アップサラスはお荷物』という評価を吹き飛ばすには十分な光景だった。

(これは喰らった方は堪らないな。あれが味方で本当に良かったよ)

のび太は心底そう思った。

なにしろ、敵軍が文字通り消滅する様を見せつけられたのだ。

これでそうとも思わなければ、その人間は相当に頭の可笑しいことになる。

そして、のび太はバカだが、頭の可笑しい人間というわけでも無い

ため、アップサラスがもたらした功績と味方としての頼もしさを素直に受け入れていた。

だが、一方でこうも見ている。

(でも、あれは気を付けないと味方を吹き飛ばす兵器になりかねない。あれが戦場に出てきた時は僕達も十分注意しなければならないな)

そう、アップサラスの火力はあまりにも強すぎるのだ。

今回は事前に光学通信で警告してそれが届いたから良かったが、もし先程の通信が届かなかったら？

そう考えるだけでゾツとする。

なにしろ、ミノフスキー粒子散布下では通常の無線通信など使えない。

となると、交信手段は光学通信か、もしくは有線や接触通信、はたまた信号弾での大まかな指示命令となる。

だが、これらの通信手段はいずれも何らかの要因で届きにくそうなものばかりだ。

それで通信が届かずに味方のMSが撤退出来なかったり、アップサラス側も通信が届かないために勝手に味方が撤退していると判断して、最終的に敵味方問わず吹き飛ばすような事態になるといいうことは、十分に考えられる可能性だった。

(まあ、流石にわざと味方ごと吹き飛ばすような人間が居るとは思えないし、僕達が気をつけていれば良いんだろうけどね)

そう思ったのび太だったが、この見方は実は甘い。

世の中には何らかの理由でわざと味方ごと敵を吹き飛ばそうとする輩はそれなりに居るのだ。

それを後にのび太は思い知らされる事になる。

——その後、予定通りタスマニア島は後からやって来たジオン軍200人によって占領され、ジオン公国の手に落ちた。

そして、連邦軍の生存者は負傷者を含めても40人にも満たず、更には脱出した人間が居なかったことやミノフスキー粒子による通信妨害によって、この時点で連邦軍上層部がアプサラスの脅威が知ることは全く無かったと、後に公開された連邦軍の資料には乗せられている。

UC0079年 3月4日 旧アメリカ東海岸反攻  
計画

宇宙世紀0079年 3月4日 旧ニュージールランド 北島 ウェ  
リントン郊外

「少佐、ただいま戻りました」

たった今、ウェリントンの偵察から戻ったアコース少尉は部隊の指揮官であるランバ・ラル少佐に対してそう報告する。

ルナツールの攻略戦の後、ランバ・ラル率いる部隊は特に地球降下作戦に参加することもなく、ソロモンに待機したままとなっていたのだが、旧ニュージールランド攻略の過程で旧ニュージールランドに居る連邦軍の戦力を計っておく必要性を迫られたジオン軍上層部はランバ・ラル隊に旧ニュージールランドの偵察を命じることとなった。

そして、その命令を受諾したランバ・ラル隊は戦力の補充と増強を行った後、地球に降下し、現在は二手に分かれ、旧ニュージールランドで一番の主要都市であるウェリントンの存在する北島をランバ・ラル少佐の本隊が、南島を彼の副官であるクランプ中尉が率いる別動隊がそれぞれ偵察を行っている。

「ご苦労。それで、どうだった？ 連邦の様子は」

「事前の情報通り、特にてこ入れなどはされてないみたいです。いや、むしろ情報よりも少ないくらいで」

「・・・やはりか」

ランバはやはりといった顔をした。

事前の情報では、この北島に存在する連邦の戦力は1個連隊300

0人だと聞いている。

そして、その内、このウエリントン駐屯地は1個大隊800人程度らしいが、それより少ないとなるとウエリントンだけならランバ・ラル隊だけでも制圧できることになってしまう（仮に相手が800人のままでも無理をすれば可能かもしれないが）。

だが、実を言うと事前情報より少ないと見なされたのはこのウエリントン基地だけではない。

北島全体がそうであったし、クランプが担当する南島でもそのような報告が寄せられていた。

「お前の報告を疑うわけではないが、見間違いということはないのか？」

「それは私も思いました、入念に調べました。ですが、本当に居ないようですよ」

「ふむ」

ランバはそれを聞いて再度考える。

（どういうことだ？連邦はここを捨てたということか？）

これまでの情報は考えられる可能性は2つ。

1つは連邦軍がジオン軍情報部はおろか、直接潜入しているラル達にも気づかれないようにいずれ訪れるであろう反攻のために戦力を巧妙に隠している可能性。

もう1つは連邦がこの旧ニュージーランドを捨てたという可能性だ。

前者の方は可能性は皆無ではないが、限りなく低い。

何故なら、それなりの規模の部隊を維持するというのは必ず大規模な補給が不可欠だからだ。

食料は勿論のこと、兵士の錬度を落とさないために訓練も必要なので、武器弾薬も外から持ってこなくてはならない。

しかし、ここ数日、色々と偵察を行ってもそのような補給部隊らしき存在は一向に来ない（逆に出ていく船や航空機は有ったが）し、そもそもジャブローのような何百万人もの人員を養え、更には隠蔽できる超巨大要塞など、そうポンポン有るものではない。

となると、捨てたという線が有力となる。

何故なら、多数の拠点を防衛するのは国力の優れた連邦とさえも負担は掛かるので、拠点を放棄して他の場所に戦力を集結させるといふやり方も戦術の1つであるからだ。

だが――

（しかし、連邦がそのような領土の放棄などするか？）

そう、連邦は何度も言うようだが民主主義国家だ。

しかも、ここは彼らの本土と言える地球。

領土を無闇に放棄したりなどすれば、次は自分が見捨てられるのではないかと国民の厭戦感情が高まる事になるので、主戦派の議員は選挙で失脚しかねないのだ。

もともと、原作のようなコロニー落としによつて地球市民そのものが混乱した状況ならば幾らでも言い分は作れたかもしれないが、あいにくこの世界ではそこまで地球市民は混乱していない。

おまけにジオンとの戦争は対武装勢力戦争と連邦が定義してしまっているのです、領土の放棄は彼らにとつて命取りになりかねない所業だった。

だからこそ、そんな命取りになりそうなことを行う連邦の思考が分からなかったラルだったが、それは彼が軍人だからこそする思考であり、これをザビ家、特にギレンが聞いたらこう言うだろう。

『確かに放棄は命取りになる。が、逆に言えば少数。それこそハリボテであっても兵隊が残っていれば放棄という形にはならないのだよ』

つまり、この島に残る連邦軍は政治のための捨て駒にされている兵士達ということなのだが、ランバは父親と違って政治家ではないのでそこまでは思い至らなかった。

だが――

(・・・まあ、理由はどうでも良い。我々のような軍人にとって連邦の政治的理由などあまり興味はないからな。しかし、連邦の戦力が少ないということはもしかしたら・・・)

この時、ランバ・ラルの脳裏にはある事が浮かんだ。

それはこの旧ニュージールランドを自分達だけで制圧できないか、ということである。

ランバは武人とは言え、出世欲が無いわけではない。

いや、むしろ、自分の出世は部下達の安全に繋がると考えており、更には例の一件でダイクン派が日干しにされていることを鑑みると、出来るだけ出世はした方が良くランバは考えていた。

「・・・なあ、アコース。もし我々の部隊だけで北島と南島を制圧すると言ったらお前はと思う？」

ランバのその言葉に、アコースは大きく目を見開くが、やがてこう反論する。

「し、少佐。流石にそれは無理です。確かにこちらのモビルスーツ戦力は増強されているので破壊は可能でしょうが、こちらの人員はクランプ中尉の隊を含めても200人余りしか居ません。対して、連邦は事前の情報より少ないとは言え、それでもこちらの隊より圧倒的に多いです。占領は無謀ではないかと・・・」

そう、ランバ・ラル隊は基本的に中隊規模の部隊であり、開戦時よ

り増員されたとは言えその人員は全部で256人しか居ない。

対して、相手は減つたと言つても未だ5000人以上居るのは間違  
いなく、占領は流石に無謀と言えた。

「・・・そうだな。ワシも焦っていたようだ。今の話は忘れてくれ」

「わ、分かりました。忘れます」

「うむ。では、撤収する。アコース、お前も早く準備しろ」

「はっ」

こうして、偵察を終えたランバ・ラル隊は旧ニュージーランドから  
撤退した。

——そして、後日、オーストラリア方面軍から送られた部隊により、  
旧ニュージーランドはあつさりと陥落することとなる。



「・・・本気ですか？」

レビルはある資料を見ながら連邦の高官に対してそう尋ねる。

「本気だ。我が軍は1週間後を目処に北米方面のジオン軍に対して反攻に出る」

そう、それは連邦軍の反攻作戦についてだった。

今現在、北米方面の戦いは旧アメリカを中心に展開されており、キャリフォルニア・ベースを基点とした西海岸一帯とニューヨークを基点とした東海岸一帯をジオン軍が、中央部の穀倉地帯を連邦軍が確保している形となっている。

だが、両側から挟み込まれている関係上、連邦軍は常に劣勢に立たされており、このままではあと1ヶ月で旧アメリカは完全にジオンの手落ちると見なされていた。

それを打開するために今回の反攻を行うというのが、連邦政府上層部が出した結論だったという訳である。

「・・・確かにコリニー中将が出したこの作戦案は成功すれば効果的ではありません」

レビルはコリニー中将から出された作戦案が良いことは認めていた。

敵を東海岸に居るジオン軍に絞り、東海岸に向けてメキシコ方面軍15万人を北上、カナダ方面軍13万人を南下させ、南北から挟撃して撃滅、あわよくばガルマ・ザビを確保、あるいは討ち取り、急ぎ救援に東進してくるかもしれない西海岸のジオン軍については旧アメリカ中部に残存する連邦軍が作戦終了まで足止めする。

確かにこれが成功すれば、最低でも東海岸は取り戻せるし、旧アメリカ方面のジオン軍戦力は西海岸方面だけとなるので、そうなれば北

米方面は一気に連邦軍優位に傾く。

だが――

「しかし、失敗すれば北米での反攻は当分は不可能。下手をすれば旧アメリカ全体が陥落することになりかねません」

それも成功すればの話。

失敗したときは確実に旧アメリカはジオンの手に落ちることになるだろうし、今後の反攻作戦にも支障が出る可能性が高い。

反攻作戦の前にモビルスーツの配備を考えているレビルとしてはここで戦力を消耗したくないという気持ちが強かったのだ。

しかし、高官の意見は違った。

「うるさいー！だいたい君が何時までもジオンに好き勝手させているから悪いのではないかね!!それにこれは高度に政治的な話で、既に私を含めた連邦政府高官が承認しているのだ！軍人の君にとやかく言う権利はない!!」

「・・・失礼しました」

内心で不満に思いながらも、レビルは高官に向かって謝罪する。

そう、連邦はジオンとは違って文民統制がされており、武官より文官の方が立場が上となっているのだ。

その為、連邦軍の最高司令官であるレビルですら、連邦政府の決定には逆らえない。

しかし、レビルからしてみれば戦争の素人集団と自分と対立している派閥の軍人が勝手に決めた計画に良くも悪くも振り回されることになるのだ。

面白いわけがない。

（・・・こんな作戦に振り回される将兵達には申し訳ないが、今は我慢

するしかないか)

しかし、ここは我慢するしか道がないというのも事実だった。

なにしろ、レビルはルウムで敗戦した身であり、本来ならいつ更迭されても可笑しくない立場だったのだから。

——かくして、地球連邦軍は1週間後の北米反攻に向けて、カナダ・メキシコの両方面に大規模な戦力を送り込むこととなる。

UCC0079年 3月8日 2人のニュータイプ

宇宙世紀0079年 3月8日 サイド3 ズムシティ

「やれやれニュージールランド攻略が済んだと思ったら、今度は北米か。連邦の仕事ぶりには感服するな」

ギレンはそのような皮肉を言いつつも、対応策を考える。

現在、北米に展開しているジオン軍は東海岸方面に10万人、西海岸方面には12万人の計22万人だ。

対して、今回動かしている連邦の戦力は情報部の解析によると、少なく見積もっても20万人を越えており、下手をすれば30万人に到達すると言われている。

これに旧アメリカ中部の連邦軍の部隊も加算されることを考えると、言うまでもなく数では連邦軍有利だ。

だが、こちらにはモビルスーツがある。

それぐらいの数の差は逆転できる・・・と思いたいところだが、そこは連邦も分かっているだろう。

「となると、向こうはどう出てくるんだ？」

そう呟きながら、ギレンはこの作戦での連邦の目的を考えてみる。

(わざわざなんの意味もなしに攻めてくるほど連邦は暇ではない筈だ。何かしら意味がある)

ギレンがこの時考えていた可能性は3つ。

1つはこの北米での行動自体が陽動という可能性。

2つ目は特に意味はないが、政治家が政治的得点を稼ぐために行うという可能性。

そして、最後にこの北米での軍事行動が北米奪還そのものが目的な

のではなく、何か別な戦略的目標があるのかもしれないという可能性があった。

まず1つ目は0ではないが、可能性は低い。

北米を陽動にして襲撃する場所となると、心当たりがあるのはニューカレドニア島の連邦軍がオーストラリア大陸に攻めてくることだが、現在、ニューカレドニアに居る連邦軍は5万人程度しか居らず、てこ入れはされ続けているものの、それでも北米のてこ入れには及ばず、むしろこちらが陽動で北米が本命と言った方が説得力がある。

2つ目は無いと思うが、一応は有りそうな可能性だ。

この戦争は原作と違って連邦から宣戦布告を行う形で始まっている。

である以上、政治家の戦争に巻き込まれる形となったこの戦争は国民にとってあまり乗り気ではない可能性が高い。

となれば、ここらで厭戦気分の高まりを防ぐために攻勢を掛けるということも十分考えられた。

まあ、失敗してしまえば余計に厭戦気分が高められることとなるのだが、そこら辺は連邦に何らかの策があるのだろう。

そして、3つ目だが、これはガルマ・ザビを討ち取る、あるいは捕虜にすることだ。

ガルマ・ザビは2年前の暁の蜂起でギレン達からの多少の支援は有ったとは言え、無傷で自分達の10倍の敵を武装解除という快挙を成し遂げており、ジオン国民に人気がある。

そんなガルマを討ち取ってしまえば、ジオン国民の士気は低下し、尚且つ連邦の士気を高めることが出来ると考えても不思議ではない。

「もし3つ目だとしたら、向こうが集中してやって来るのは東海岸か」

ギレンは連邦の意図に気づき始めた。

ガルマは最近、イセリナを口説くのに夢中になっており、ニューヤークの存在する東海岸に居るケースが多い。

その事は連邦側にも伝わっているだろう。

何故なら、ガルマの報告ではニューヤーク市長のヨーゼフ・エツシエンバッハは原作と違い、中立的な立場を取っているとの事だが、それはあくまでガルマの主観であるので、実際会っていないギレンには分からないし、仮にエツシエンバッハ市長が何も伝えていなかったとしても、その側近の誰かがその事を伝えるだろう。

よって、ガルマがニューヤークに居るケースが多いということは連邦に伝わっていると見るべきだ。

「そうすると、ガルマにも勧告を出さなければなるまい」

ギレンはそう思いながら、内線でセシリアを呼び、ガルマに通信を繋げるように通達した。

◇オーストラリア

「やあ、こんにちは」

のび太はこの前見掛けた金髪の少女に挨拶を行う。

タスマニア島上陸作戦の後、オーストラリア大陸へと戻ったのび太はなんとなくこの前会った金髪の少女のことが気になって、外出を許可を取り、件の少女を探し始めたのだが、途中でまたあの妙な感じが頭を過り、そのまま引き寄せられるようにこの場までやって来ていたのだ。

そして、その場所に辿り着くと、そこには座った状態でのび太に背を向ける一人の少女が居た。

「君が僕を呼んだの？」

のび太がそう尋ねると、のび太に背を向ける形でしやがみこんでいた金髪の少女——リタ・ベルナルは、のび太の方に向き直り、ニッコリと笑いながらこう返した。

「そうだよ。私と同じような人が居たから、気になって話してみたかったの」

「そっか。じゃあ、まず自己紹介からしないとね。僕は野比ノビタのび太。君は？」

「私はリタ・ベルナル。この辺りに住んでいるんだ」

「リタ、か。じゃあ、早速聞きたいことがあるんだけどさ。私と同じような人〴〵って、もしかしてニュータイプ能力の事かな？」

「そう。宇宙の人達は人と人が解り合おうとする能力だって言うてる」

『人が人が解り合おうとする能力。それこそがニュータイプである』

そんな話をニュータイプ研究所に居た時にのび太は聞かされたし、それが平和に繋がるかもしれないという話も聞いた事がある。

「・・・そうだね。でも、解り合えたからと言って平和になる訳じゃないし、良いことばかりではないよ」

だが、のび太は解り合えるという点には興味を持ったが、平和に繋がるという点には半信半疑だった。

確かにこれまで誤解や相互の解釈の違いなどからのび太も酷い目に遭った経験はあるし、それを理不尽だとも感じていたので、そういった無駄な争いを無くすにはニュータイプという理論は効果的ではあるのだが、それでも人には解り合っても譲れないものがある。

良い例が鉄人兵団のリルルだ。

彼女は最終的にのび太達と解り合った事で人間の奴隷狩りが悪いことだとは理解を示してくれたが、結局、同胞を裏切りたくないとのび太達と同じ戦列には並んでくれなかった。

別にそれはそれで構わない。

仮にのび太がリルル達と同じ立場になった場合、のび太は自分達と同じ戦列に並んでくれたピツポと同じ選択肢を選ぶだろうが、同時に同胞を裏切りたくないという気持ちも分かる。

加えて、間接的とはいえ、最終的にのび太達のことを救ってくれたのはリルルなのだ。

礼を言うことはあっても、文句を言うことは出来ない。

更には言えば、仮に解り合ったとしても鉄人兵団が『それでも人間の奴隷』が欲しいと主張してくれば、のび太達も敵対の路線を変えることは出来なかっただろう。

鉄人兵団の星（メカトピア）の事情があるからといって、今までなんの接点も無かった星の住民の為に地球人が奴隷にされる光景を



黙って見過ごす訳にもいかないのだから。

そういう訳で、のび太は『ニュータイプⅡ平和に繋がる』という思想には酷く懐疑的だった。

もつと言えば、勝手に人の心に踏み込んで良いのかも疑問だ。

人には踏み入れられたくない心というものがあるのはのび太も知っているし、それでも敢えて踏み入れるのであれば、相応の覚悟が必要だというのがのび太の考えだった。

その覚悟も無しに軽い気持ちで踏み入った場合、例え上手く相手の心に踏み入れたとしても、後で何らかの綻びが生まれてしまう可能性が高い。

そういうことを考えれば、なんの覚悟も無しに相手の心に踏み入れるニュータイプ能力は却って軋轢を生む場合もある。

ちなみにのび太は当然知らないが、実際、原作のグリップス戦役の際にカミーユとハマーンが心を通わせた時もそんな感じだったので、のび太の懸念も決して間違いではない。

「そうなのかな?」

「そうだよ。勝手に人の心を覗くのは良い行為とは思えないし。君だって、友達に隠したいことや言いたくないことの1つや2つは有るだろう?」

「・・・ふふっ、そうだね」

そう言いながら、クスリと笑いを溢すリタ。

その様子は外国の女の子だけあって様になっており、少し前ののび太であれば顔を赤くしただろう。

だが、今ののび太は違った。

この世界に来てから備わったニュータイプ能力、更にはたった2回とはいえ経験した本物の戦場はのび太の精神年齢を嫌が応にも上げさせていたのだ。

「ねえ、突然、こんなことを聞くのもなんだけどさ。生まれてから何かに生まれ変わりたいと思ったことはある？」

「えっ、それは・・・」

「ちなみに私は鳥になりたい。それでこの空を大きく羽ばたきたいの」

「!?」

のび太はリタのその言葉を聞いて、思わずリルルとリタを重ね合わせて見てしまった。

リルルもメカトピアの歴史が変わって生まれ変わった時、鉄人兵団のスパイではなく、天使として新たに生まれ変わったことはのび太がこの目で確認している。

それと似た願いを持っているリタに、のび太が何かしらの運命じみたものを感じるのもある意味では仕方のないことだった。

「・・・素敵な夢だね」

「そう？この話をヨナやミシエルに言っても、あまり理解されないんだけど・・・」

「その子達はまだ想像がつかないんだよ。死んだ後のことなんて、ね。まあ、そういう僕も似たようなものなんだけど」

「・・・そっか」

リタはその言葉に、少し寂しげな雰囲気を漂わせるが、そのままその場から立ち上がるところ言った。

「ごめん。約束を思い出しちゃった。もう行かなくちゃ」

「そう。じゃあ、さようなら」

「うん。それでなんだけど、また会えないかな？私の友達にも紹介したいんだ」

「良いけど、僕はちよつと常日頃から用事があつてね。必ず君と約束した日に会えるとは限らないんだけど・・・」

「知ってる。軍人さんなんでしょ？大丈夫、あなたの都合の良い日はなんとなく分かるから」

「なにそれ。まるで超能力みたいだね」

のび太は苦笑しながらそう言う。

しかし、実のところ、ニュータイプはそういった超能力じみた行為は条件さえ揃えば出来たりするのだが、その事をのび太はまだ知らない。

「ふふっ。じゃあ、そういうことだから」

最後にそう言つてリタはその場から去っていく。

そして、のび太はリタの姿が見えなくなると、基地の自分の部屋に帰るために帰路へと着いていった。

UC0079年 3月10日 攻勢前夜

◇宇宙世紀0079年 3月10日 旧アメリカ ニューヨーク

「準備の方はどうなっているのかね？」

ニューヨークのとある一室。

その部屋ではニューヨーク市長のヨーゼフ・エツシエンバッハと複数の男達がある計画を練っていた。

ちなみにこの部屋についてはジオンの人間は誰も知らず、またそれ以外の勢力が設置した盗聴機か盗撮機の類も入念にチェックされた上で外されており、更には防音処理もされているため、この部屋の会話が外に漏れることは一切ない。

「はい、連邦軍は明日の夜明けから攻勢を開始する予定で、我々はその少し前の未明から蜂起を行う予定です」

男はそう言いながら、計画の概要を説明する。

そう、ここまで聞けばだいたいは想像がつくだろうが、彼らは連邦軍の攻勢と連携してのニューヨーク解放を目論んでいた。

彼らは原作程ジオンを憎んでいるわけではない。

原作のようにコロニーの一部が北米を破壊したとかそういうわけでもなかったし、北米のジオン軍はガルマ・ザビの下に上手く統括されておられ、住民の受けも良かったからだ。

しかし、エツシエンバッハ家は原作と同じように連邦と深い繋がりを持っており、更にはこの戦いも国力の差から最終的には連邦が勝つとヨーゼフは読んでいたため、現時点で連邦を裏切るという選択肢はヨーゼフの中には存在しなかった。

「そうか。しかし、タイミングが意外と早いな。連邦軍がニューヨークに入る前に鎮圧される危険はないのか？」

ヨーゼフはその点を尋ねる。

仮に連邦軍がニューヤークを解放できたとしても、その間に自分達が死んでは意味がないのだ。

「その点は問題ないでしょう。ジオンの方も連邦軍の部隊が集結していることは知っています。あちらが動き出したらそちらに掛かりきりにならざるを得ませんよ」

男は不敵に笑う。

実際、彼らもそれなりの兵力を揃えているとはいえ、明日攻めてくる連邦軍よりは流石に数は劣る。

その為、仮に連邦軍が動き出したとしたら、蜂起したこちらより遥かに脅威度の高い連邦軍に集中せざるを得ないだろう。

少なくとも、男はそう読んでいた。

「むしろ、そちらのお嬢さんは大丈夫ですか？ ずいぶんあのガルマという男と親しいようですが」

「ああ、忌々しいことにな。だが、大丈夫だ。今日中に説得する予定だし、それでも駄目なら多少強引な手も使う予定だ」

「そうですか。しかし、くれぐれも我々の計画は漏らさないで下さいな。万が一にも漏れたら計画は事前に潰されてしまいますから」

「分かっている。そこまで迂闊ではないつもりだ」

「では、頼みますよ。あと蜂起後の連邦軍との合流に関してですが――」

そう言っつて男は話を続けていく。

——だが、彼らは知らなかった。  
この蜂起が既にガルマによって察知されていたということ。

◇

「やはりエツシエンバツハ市長は蜂起を企てているか」

副官のダロタ少尉が持ってきた報告に、ガルマ・ザビ大佐は予想通りといった顔を見せた。

そもそもガルマは原作でエツシエンバツハ家が連邦と深い繋がりを持つていることは知っている。

加えて、原作ではガルマの暗殺も考えていた以上、幾らこの世界であまり目立った反ジオンの動きを見せないと言つても安心など出来る筈もなく、ガルマはそれとなく部下にエツシエンバツハとその側近の動向を常に探るように命じていた。

そして、その結果、エツシエンバツハ市長の手によつて大量の武器弾薬が特定の場所に運び込まれているという情報を手に入れており、更に最近の連邦の動きも考慮すると、ガルマはこの時点で連邦と連携した大規模な蜂起がニューヤークで起きることを予想していたのだ。

「申し訳ありません、ガルマ様。父がこのようなことを」

そう言うのはガルマの傍らに立っていたヨーゼフ・エツシエンバッハの娘——イセリナ・エツシエンバッハだった。

彼女は原作通りガルマによって口説き落とされており、既にガルマに恋という感情を向けていたのだが、同時に父親が自分とガルマとの関係を良くないものと思っているのも知っていたので、その板挟みにあつて苦しんでいたのだ。

しかし、今回、流石にこのような事が発覚しては、イセリナも父に対する愛想が尽きていくのをひしひしと感じざるを得なくなっていた。

「いや、イセリナが悪いのではない。それにイセリナのお父上にも彼なりの信念が有るんだろうからね。まあ、ジオンの人間としてその信念を認めるわけにはいきませんが、その生き方は感服出来る」

これはガルマの本音だった。

そもそもガルマはジオンが優勢になった途端、こちらにすり寄ってくる蝙蝠な人間の事をよく思っていない。

鬱陶しいし、いつ裏切るかも分からないからだ。

だが、ヨーゼフ・エツシエンバッハ市長は少し違った。

彼は下手な裏もなく、占領者であるジオンをあまりよく思っていないことを態度に出してくるのだ。

流石に言葉には出してこないし、人によつては不快かもしれないが、それでもガルマにとつては何を考えているか分からない人間よりはよほどやり易い。

「それはともかく、イセリナ。貴女はこれからどうする?」

「どうするとは?」

「僕と一緒に着いてきてくれるのか、それともお父上と一緒にここに残るのかだよ。それを決めて欲しい。はつきり言つて、戦いがどう展開されるにしろ、ニューヤークは手放すつもりだからね」

そう、戦いがどう展開されるにしろ、ガルマはニューヤークを手放すつもりだった。

なにしろ、北米に居るジオン軍は全部で22万人居るとはいえ、その内ガルマの手元に存在する東海岸の兵力は10万人程だ。

対して、相手はカナダ方面だけでも13万人、更にメキシコ方面からこちらに北上してくると考えられている兵力も15万人程居り、それらを合わせれば28万人。

・・・とてもではないが、ニューヤークを護りきれれるとは思えない。勿論、ガルマも負けるつもりはないが、流石にこの兵力差でニューヤーク防衛に拘るといふのは不味いのだ。

だからこそ、ヨーゼフが蜂起するにせよ、しないにしろニューヤークは捨てるつもりだったので、愛するイセリナに決断を迫っていたというわけである。

「ああ、ニューヤークに残った場合、連邦軍に何かされるかもしれないという心配に關してはおそらく大丈夫だ。君の父上がなんとかしてくれるだろう」

「いえ、問題ありません。私はガルマ様と共に行きます」

イセリナはキツパリとそう言う。

そのあまりにもあっさりとした解答に、ガルマは思わず啞然としたが、どうにか持ち直すと改めてイセリナに尋ねる。

「・・・本当に良いのか？もしかしたら、父上とも今生の別れになるかもしれないぞ？それに君の友人なども・・・」



「構いません。それに・・・私には本当の友人と呼べる者は居りませんから」

イセリナはそう言いながら、内心で苦笑せざるを得なかった。

元々、イセリナはあまり周囲の人間と上手く付き合える関係ではない。

父親とも最近はずれ違いによって疎遠になっていたし、友人とも言える人物も居るには居たが、それも家同士の事情による薄っぺらい関係だった。

事実、イセリナがガルマと恋に落ちたのを見ると、あっさりとその友人達はイセリナとの交友関係を絶っている。

イセリナ本人の思いきりの良い性格もあって、それらを捨てるのにあまり躊躇いはなかったのだが、イセリナは簡単に捨てられる程の関係しか周囲の人間と築けていなかった事に改めて気づき、その事実には自嘲せざるを得なかったのだ。

「・・・そうか。ありがとう」

ガルマはそれ以上なにも言わなかった。

元々、彼女が思いきりの良い性格であるということは原作で知っていたし、交友関係についてもガルマの目であり良いものではないということの確認していたからだ。

そして、イセリナの事をソツと抱き寄せると、彼女と唇を重ねた。

「ガルマ様・・・」

イセリナはその行為によって、改めて自分は愛されていると実感し、思わず涙を溢した。

——そして、この翌日、カナダ方面とメキシコ方面に居る連邦軍が一斉に東海岸に向けて攻勢を開始し、ここにジオン・連邦両軍合わせて50万人を越える兵力による戦い——北米攻防戦の幕が上がる事となる。

UCC0079年 3月11日 北米攻防戦

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 3月11日

「旧カナダ方面の連邦軍、旧アメリカ国境を越え、こちらに向けて南下してきます」

「よし、では、作戦通りに動け」

報告を行ってきたダロタ少尉に対して、ガルマはそう指示する。

「はい、予定通り、部隊はニューヨーク及び東海岸全体より撤退します。・・・しかし、よろしかったのでしょうか？勝手にニューヨークからの撤退を決めても」

「構わないよ。兄上達が一番気にしているのは兵員の消耗だ。逆に言えば、それさえなければ占領地なんて幾ら手放しても構わないと思ってる。私はその考え方に追従しているに過ぎないからね」

今のジオンの泣き所は実は資源でも物量でもなく兵員だ。

そもそもこの世界のジオンは本来なら7月を目処にした開戦の準備を行っており、兵員などもそれに合わせて準備する予定だった。

ところが、現実には原作と同じ1月に戦争が始まってしまい、ジオンは地球侵攻作戦の為に兵員の必要数が揃っておらず、やむをえず無理矢理動員を掛けて兵士の頭数を揃えた状態となっていたのだ。

その為、地球侵攻作戦のために降下した兵士の質は原作よりも低下しており、ガルマもこれらを纏めあげるのに非常に苦労した覚えがある。

そして、こんな新兵が多い状態なために、開戦前から居る兵士や実戦を経験した兵員はなによりも貴重となっており、ガルマにはなるべくそれを保全するようという勧告が出されていて、その為ならば多

少占領地を放棄することになっても構わないとも言われていた。

ガルマはそれを利用する形で今回の事を思い付いたのだ。

・・・もつとも、この作戦が失敗したら東海岸側の兵力は完全に喪失することになるだろうが、それはどんな作戦だったとしても同じことだろう。

「それに北米戦線を西と東に分けるのは戦力分散でもある。ならば、北米戦線は1つに纏めて戦力を集中するべき。そうは思わないか？  
ダロタ」

「はあ。ガルマ様がそう言われるのであれば構いませんが・・・それよりイセリナ様は本当に連れていくのですか？」

「ああ、彼女が親ジオンであることを知られている以上、ここに残って居ては色々と迫害を受けるかもしれないからね。ああ、スパイかもしれないという不安なら心配ない。万が一の時は私が責任を取る」

「いえ、そういうことではありません。私が心配しているのはイセリナ様がアースノイドであるという事実です」

「・・・どういふことかね？」

「ガルマ様に誤解の無いように言っておきますが、私は別にイセリナ様を差別している訳では有りません。ですが、他の将兵に関しては必ずしもそうは思わないと申し上げているのです」

ダロタが言いたいのはこのようだった。

確かにダロタ個人の意見としてはイセリナは信用できる人物だ。

しかし、ダロタ以外の将兵からしてみればどうだろうか？

スペースノイドであつたらいざ知らず、彼女はジオンの将兵からすれば憎むべきアースノイド。

特に前述したようにこの北米方面軍には軍に入ったばかりの将兵も多く居る。

そういった人間はまともな軍隊教育を受けていないので、そんな人間達にイセリナの存在を明かせば何かしらのやつかみを生む可能性が高かった。

そうなったら軍全体の士気に影響するかもしれない。  
それをダロタは危惧していたのだ。

「なるほど、そこは考えていなかったな。だが、今はそんなことを考えている余裕はない。作戦に集中してくれ」

「分かりました。では、予定通り我が軍はこれより西進し、西海岸の部隊と共に旧アメリカ中部の敵を挟み込みます」

「ああ、よろしく頼む。それと今作戦は逆サンドイッチ作戦と名付ける。連邦への意趣返しだ。盛大にやれ」

——かくして、ガルマ率いる東海岸方面軍は東海岸から撤退し、旧アメリカ中部を逆侵攻するために西進を開始することとなった。



「作戦の首尾はどうかね？」

ジーン・コリニー中将はそう言いながら、副官に戦況の確認を行う。

この彼が立案した東海岸に向けての構成作戦——サンドイッチ作戦は彼の居るカナダ方面とメキシコ方面の南北によって東海岸に攻勢を掛けて挟撃するという作戦内容になっていた。

しかし、メキシコの位置関係上、彼らが東海岸に到達するのはカナダ方面の軍より若干遅れる見込みであり、その事に対してコリニーは若干の懸念を抱いている。

もつとも、より東海岸に近いカリブ海からとなると海路となり、到達する前に沈められてしまう危険性があるということ、安全面を考えると北上はどうしてもメキシコ方面からならざるを得なかったのだが。

「今のところは順調です。ジオンの連中は抵抗らしい抵抗もせず後退していつています」

「そうか。だが、罨の可能性もあるし、我々を引き付けたところで一気に叩こうと考えているかもしれないから気を抜くなよ」

「はっ」

「……ところで、ニューヨークの蜂起の方はどうなっているのだ？」

コリニーはサンドイッチ作戦と連動して行われる予定となってい

るニューヨーク市の蜂起について尋ねる。

あくまで一都市規模の蜂起であるために然して期待はしていなかったが、ジオン軍を混乱させることは出来るだろうし、あわよくばガルマ・ザビを討ち取ってくれるかもしれないという期待も若干ではあるが、存在していた。

もつとも、事前に察知されていなければ、という但し書きが付くが。

「はい。蜂起の報告は入っていませんので、おそらく事前に察知されて鎮圧されたのかと」

「そうか。やはりダメだったか。まあ、それでも問題はないがな」

コリニーは特に表情を変えることもなくそう言うと、壁に貼られていた旧アメリカ中部の地図を見る。

（さて、中部の我が軍が上手く西海岸のジオン軍を足止めしてくれるかが問題だな）

そう、実はこの作戦の要は東海岸救援にやって来るであろう西海岸のジオン軍12万人を旧アメリカ中部に居る連邦軍5万6000人の将兵が上手く足止めできるかが鍵となっているのだ。

もしこの足止め失敗した場合、仮に東海岸を奪還できても東海岸に居るジオン軍10万人の撃滅は不可能になる可能性が高い。

（まあ、それはそれで良いがな。東海岸さえ奪還できれば戦略的勝利となり、私の地位は安泰だ）

コリニーはそう思いながら、机の上に置いてあったカップを手に取り、コーヒーを口に含んだ。

◇旧アメリカ中部

「くそっ！これは完全に戦線が崩壊しているな!!」

旧アメリカ中部方面隊の指揮官カッチング中佐はそう言いながら、戦況を見渡す。

このサンドイッチ作戦で彼の部隊は西海岸から救援のために東進してくると思われるジオン軍西海岸方面軍の足止めをする役目を与えられていたが、それを聞いた時、カッチング中佐は思わず怒り狂いそうになった。

なにしろ、この旧アメリカ中部方面の戦線はメキシコを介して補給こそ充実しているものの、両側からの圧力を常に受けることで兵士の精神は参っており、疲労はとんでもないところまでになってきている。



そんな中で西海岸方面からやって来る数でも質でも優位な敵軍を足止めしろというのは、あまりにも無茶ぶりの命令であり、もし通信してきた相手が上官でなければ『お前らの部隊が代わりにやれ!』と怒鳴り付けていただろう。

だが、命令が下った以上、カッチングにはどうにもならず仕方なく命令に従い、連邦軍のサンドイッチ作戦が始まった後に慌てて動き始めたジオン軍の西海岸方面軍の足止めを行っていた。

ロッキー山脈という天然の要害を利用する形でどうにか食い止めたものの、損害も多く、遂にその一部が突破されるという時がやって来たタイミングで最悪の事態が発生する。

そう、ガルマ率いる東海岸方面軍が西進してきて、反対側から旧アメリカ中部方面隊を挟撃してきたのだ。

数と質で有利な相手にもどうにか粘っていた旧アメリカ中部方面隊も、流石に反対側から現れた10万近い戦力にはどうにもならず、次々と部隊は撃破されていく。

勿論、部隊が撃破されていく毎に戦意も共に低下してきていたが、それでも戦線が持ちこたえられているのはカッチング中佐が有能な指揮官である証と言えるだろう。

(本隊の連中はなにやってたんだ!! 本来なら東海岸の部隊があいつらが担当する筈だっただろうに!!)

カッチングは内心でそんな悪態をつくが、現実はそのようなものではどうにもならない。

やむを得ず、残りの部隊を統率する形でこの場から離脱を計ろうとするが、そのタイミングでカッチング中佐の副官が叫ぶ。

「中佐! 伏せてください!!」

だが、その警告は遅かった。

何故なら、その直後に120ミリマシンガンから発射された複数のの

120弾がカツチング中佐と警告をした副官、更にはその周囲に居た兵士共々肉片へと姿を変えたからだ。

ただでさえ不味い状況が指揮官が居なくなつた連邦軍は完全に戦意を喪失し、部隊の統制は完全に瓦解。

そして、それをジオンが追い撃ちをかける形で更なる損害を与えていく。

——その後、旧アメリカ中部方面隊は完全に壊滅し、3万5000人が死傷、1万7000人が捕虜となり、無事にこの戦線からメキシコへと逃げられたのは僅か4000人にすぎず、更には旧アメリカ中部はジオンによって占領される形となり、この北米攻防戦は連邦が東海岸をジオンが中部を占領し、双方が戦略的勝利を得るといふ奇妙な形で決着した。

UC0079年 3月13日 策略

◇宇宙世紀0079年 3月13日 サイド3 ズムシテイ 公王府

「北米戦線はニューヨークを失った代わりに旧アメリカ中部を得て完全に膠着、か。これは予想外だったのではないか？ギレン」

公王の席に座りながらデギンは公王府に報告に訪れたギレンに対してそう言う。

だが、ギレンの顔に変化はない。

いや、むしろ不敵な笑みすら溢している。

彼からしてみれば、兵員の大半さえ無事であれば別にニューヨークの失陥などあまり気にすることではなかったし、代わりに中部の穀倉地帯を得たならば、十分お釣りが出ていると考えているからだ。

それにこのまま重力戦線の戦況を膠着状態で終わらせるつもりもない。

だからこそ、今日、ある計画書をデギンの元へと持ってきたのだ。

「ええ、確かにそうでした。まあ、それは許容範囲内でもあります。大敗して大量の貴重な兵士を失ったわけではないのですから。して、父上。先に送った今後の計画書には目を通して頂けたでしょうか？」

ギレンがデギンに送った計画書。

そこには4つの事が書かれてあった。

1つ目はジオン占領下の地球領土における工業生産体制の確立。

2つ目は中欧侵攻作戦。

3つ目はニューカレドニア攻略作戦。

そして、最後に第四次降下作戦を行ってアフリカ戦線を形成することだった。

「ああ、あれか。確かに目を通したし、ある程度納得もしているが：：アフリカ制圧は流石に無謀じゃないか？」

デギンは疑問に思った点を指摘する。

1つ目は分かる。

今のジオンは連邦に比べて不足している工業力を少しでも補う必要があるが、今は戦時中であり、のんびり工業用コロニーを造ってる余裕はない。

だからこそ、現地に工場を建てて生産体制を確立したいという考え方は理解できるのだ。

まあ、仮に連邦に無傷で占領されたりすれば却って敵に力を与えてしまうことになるが、そんなリスクを恐れているばかりではなにも出来ないのです、この際、その点には目を瞑るしかない。

そして、2つ目と3つ目。

これは明確な戦線拡大であるので、あまり良い印象は無いのだが、そこら辺は会議で何度も話し合っているし、実際に戦争を指導しているギレンが必要だというのならそうなのだろう。

しかし、4つ目のアフリカ降下だけはどうしても解せない。

確かに原作ギレンの野望では第二次降下作戦の際にジオン軍は北米の他にも中央アフリカに降下していたが、そこに降下した意味が今一つ理解できなかったのだ。

だからこそ、連邦との戦争計画の中にはアフリカ降下は端から入っていないかった。

しかも、ギレンの計画ではこの作戦にはジオン軍は一切関与せず、武器だけ供与して人員は各サイドからの義勇軍を使うとなっているのだ。

デギンはそこを疑問に思っていた。

「それにアフリカ降下には各サイドからの義勇軍を使うとあるが、武器を供与するとはいえ、彼らだけで成功するのかわ？」

「いえ、成功しなくとも構いませんよ」

ギレンはきつぱりとそう言った。

その発言にデギンは思わず目を丸くする。

「この戦いは出来るだけ各サイド・・・特に1、2、4の力を削ぐことが目的なのですから」

そう、建前上はアフリカ降下作戦はオセアニア、北米、アフリカの3つを封鎖することでジャブローのある南米包囲網を形成するとなっているが、ぶつちやけこれが成功しようが、失敗しようがギレンは興味などなかった。

では、何故、このような無駄とも思える作戦を敢えて立てているのか？

それは1、2、4の各サイドの力を削ぐことが目的だった。

この3つのサイドは開戦直後に親連邦を標榜していたサイドであり、現在はジオンが占拠して親連邦派の首脳部を拘禁したことから、現在は親ジオン派の人間が実権を握っている。

しかし、蝙蝠野郎を無条件に信じる馬鹿な人間など、よっぽど頭がお花畑の人間でなければあり得ない。

その為、万が一、連邦が宇宙に再度進出してきて仮にソロモンを占領された場合、これらのサイドはあつという間に親連邦に鞍替えする可能性が高いとギレンは考えており、そうなれば借款の引き受けの代わりに譲渡していたジムIや連邦の61式戦車などの鹵獲装備がそのまま脅威となってしまう。

勿論、そうなたたとしてももつと上の装備を持っているジオンからすれば大した脅威ではないのだが、潜在的脅威はなるべく叩いてしまった方が良いというのも事実だった。

だが、原作のようにジオンが直接叩いてしまうというのも不味いため、アフリカ戦線にこれらの装備や人員を投入させて、出来るだけ消耗して貰おうと考えていたのだ。

仮にそこで派遣された義勇軍が装備ごと連邦に寝返るといふならそれでも良い。

元々アフリカ戦線は重要ではないし、それを理由にして、ジオンは賠償代わりに幾らかの借款の帳消しを要求するという手が使えるのだから。

そして、犠牲者が出ることで連邦に対する敵愾心を植え付けられたら上々だ。

「なるほど。だが、そこまでする必要があるのか？表向きだけでも協力しているのであれば問題はないと思うが・・・」

「ええ、私も最近までそう思っていました。が、どうやらサスロの報告ではサイド1、2、4の義勇軍が連邦向けのスパイの巣窟となっているらしいのです」

そう、ギレンもなんの突拍子もなしにこんなことを考えたわけではない。

実はこれらのサイドは義勇兵の中にスパイを送り込んでいたのだ。

まあ、これだけならば問題はない。

義勇兵の中にスパイを送っているのは、他のサイド5や6、フォン・ブラウンなども同じだったのだから。

しかし、問題なのは『何処』に情報を送っているかだ。

これがサイド5や6、フォン・ブラウンのスパイがやっているように自分達の故郷向けならまだ良い。

それならば当面問題は無いし、いちいちそんなものを警戒していたらキリがないからだ。

だが、問題なのはサイド1、2、4の義勇兵の中に連邦に対して情報を送っている者が居ることだった。

しかも、個人単位ではなく、集団単位で行うケースも多くある。

もはや許容できる範囲を明らかにオーバーしており、これらのサイドに強力な親連邦派の協力者が居るのは明白だった。

「・・・そうだったか。しかし、幾ら大義名分があるとはいえ、お前がやろうとしていることは悪魔の所業だぞ?」

「ご冗談を。原作ジオンの方がよっぽど悪魔の所業をしていますよ」

ギレンは苦笑しながらそう言う。

実際、これは本当の話だ。

原作ジオンは開戦僅か40時間の間に1、2、4の3つのサイドを壊滅させ、28億人の命を奪い、更にその後コロニー落としをしたことで地球の半数の人口(10億人)を奪ったし、その後も条約を度々破ったりしている。

更にこれはザビ家だけの話ではなく、後のシャアも第二次ネオ・ジオン抗争で連邦との間で結ばれた条約を平然と破ったり、アクシズを(未遂となったが)地球に落とすという間違はなくコロニー落とし以上の悪業をやっていたりするのだ。

だが、この世界のジオンは別にそんなことはしていない(戦いに巻き込まれる形で若干民間人が死んだりはしたが)し、今後もそんなことはない・・・と思われる。

それを考えれば、仮に今回の策謀で犠牲になる人間が多数居るとしても、それは原作ジオンがやった悪業とは比べるのも烏滸がましい程小さいものだというのがギレンの考えだった。

「そうだったな。しかし、あまり損害が大きすぎると、各サイドで反戦機運が盛り上がるのではないか?」

「それは無いでしょう。参加しているのはあくまで義勇軍なのですから。まあ、そうになったらそうたつたで放置していても構いません。なにしろ、彼らが居ても居なくとも、大して変わりませんので」

実際のところ、いつ裏切るか分からないサイドの人間をいつまでも

戦列に加えておく訳にもいかない（実際、このアフリカ降下に使用される兵力はサイド1、2、4の義勇軍で編成されている）。

だからこそ、借款を引き受けてくれさえすれば、あとはジオンと中立のサイド5、6やフォン・ブラウンなどから派遣された義勇軍でなんとか出来る。

少なくともギレンはそう考えていた。

「・・・分かった。この計画を承認しよう。ただし、くれぐれも足元は掬われるなよ?」

「分かっております」

——かくして、ジオンの戦線拡大方針は決定された。

そして、この5日後の宇宙世紀0079年3月18日。

第四次降下作戦が行われ、中央アフリカに多数の義勇兵が上陸し、彼らを主役としてアフリカ戦線が形成されることとなる。



UC0079年 3月19日 ノーフォーク島哨戒  
基地破壊

◇宇宙世紀0079年 3月19日 ノーフォーク島  
ノーフォーク島。

それはニューカレドニア島と旧ニュージーランドの間に存在する  
小さな島であり、この島には連邦軍の哨戒基地が存在し、1個連隊（3  
000人）の兵力が駐屯していた。

「また爆発だ!!」

「くそっ！敵は何処に居るんだ!?!」

だが、島に居る連邦軍は現在、混乱の只中であつた。

この日、いつも通り、飛び立っていく哨戒機などを見送りながらこ  
の島でそれぞれの部署についていた彼らであつたが、もうすぐ日没と  
いうところで飛行場や哨戒機、レーダー設備などの複数の哨戒設備が  
いきなり爆発したのだ。

当初は事故という線も考えられたのだが、断続的に続く爆発、更に  
は運悪く敵と遭遇して殺られたであろう仲間の死体を見ってしまうと、  
そんな現実逃避じみた考えも簡単に否定されてしまう。

そして、更にもう一つ、彼らにとって不幸な出来事が発生していた。

「司令部との通信はどうだ?」

「駄目です！繋がりません!!」

そう、彼らにとつての最高司令部である連隊司令部との通信が全て  
途絶してしまつていたので。

こういつた軍事基地には無線通信だけでなく、ミノフスキー粒子の

干渉を受けない有線通信も存在している。

それが繋がらないというのはどういうことなのか？

そんなことは少し考えれば子供でも分かることだった。

「司令部もやられたのか！くそっ！どうすりゃ良いんだ!?!」

ここまで派手な工作を仕掛けてきたということは、近いうちに敵がここに攻めてくる可能性が高いということでもある。

しかし、肝心の哨戒設備は先程爆破されてしまったし、そもそも司令部が吹っ飛ばされてしまったので、状況の把握にすら時間が掛かるだろう。

その間に敵が攻めてきたらどうするのか？

彼はそこを危惧していた。

だが、彼は知らない。

ジオン側にこの基地を今すぐどうこうする意図は無いという事を。

◇ノーフォーク島近海 海中

「よくやったぞ、コズン。これでこの哨戒基地はしばらく機能しない」

ノーフォーク島近海に潜む戦略海洋軍所属のジオン軍潜水艦に待機していたランバ・ラル少佐はノーフォーク島への破壊工作を終えて戻ってきたコズン少尉に労いの言葉を掛ける。

「ありがとうございます、少佐。しかし、何故このタイミングで我々に破壊工作を命じてきたんでしょうかね？」

コズンは1つ疑問に思ったことを口にする。

先程自分達が襲撃したノーフォーク島、そして、本命であるニューカレドニア島攻略作戦は今から1週間後に行われる予定の作戦だ。

普通に考えれば、破壊工作による襲撃によって混乱しているところを上陸して、攻略を行った方が良い筈なのだが、一週間前のこのタイミングで襲撃を指示してきた上の考えが分からず、コズンは首を傾げていた。

「たぶん襲撃された後にしばらく間を置いて、こちらの本格的な攻撃はないと向こうが油断したところで攻略を行うんだらうよ。そう考えれば辻褄が合う」

「へえ、なかなか考えられていますね」

「まあ、本当のところは分からんがな。だが、この作戦を立てたダグラス大佐は有能な男だ。なんの意味もない作戦を立てると思えん」

そう言いながら、ランバはこの作戦を指示してきた男——ダグラス・ローデン大佐の事を頭に思い浮かべる。

ダグラス・ローデン大佐はダイクン派の穏健派に属するであり、ランバもよく知っている会ったことがあり、その人柄と実力は知っていた。

もつとも、最近はカーウィン家の令嬢庇護の為にザビ派に鞍替えしつつあったが、だからと言って繋がりが完全に絶たれたわけではない。

まあ、徐々に公に接するわけにはいかなくなっていくだろうが。

「それよりお前のところに預けたシロー・アマダ准尉の実力はどうか？役に立ちそうか？」

ランバは先程まで考えた思考を一旦打ち切って話題を変え、今回の破壊工作に際してコズンの部下として活動させた元義勇軍の兵士——シロー・アマダ准尉の実力を尋ねる。

「はい、なかなか優秀な奴でした。少々青臭いところがありますが、これから鍛えていけばパイロットとしてはそこそこでも、士官としては優秀な奴となるでしょう」

「そうか。ワシも奴の人柄は気に入っているからな。しっかりと鍛えてやってくれ」

「分かりました。しかし——」

「ん？」

「いえ、あの男は少佐が連れてきたと伺いましたが、どういう経緯で連れてきたのですか？」

コズンは前から気になっていたことをランバに尋ねることにした。元々、シロー・アマダはオーストラリア方面軍の義勇軍に所属していた人物であり、ランバはそこからスカウトしてきたという事はコズンも聞いていたが、詳しい経緯までは知らなかったのだ。

「ああ、そう言えば言っていなかったな。まあ、帰還したら皆に言おうと思っていたが、先の任務の褒美だ。お前には先に知らせておこう。実は奴は元々は連邦の士官候補生だったのだ」

「えっ?」

コズンは驚く。

義勇兵にしてはやけに指揮官としての技量を持っているとは思っていたが、まさか連邦の士官候補生だったとは思わなかったからだ。

「なんでもサイド2に里帰りしていた時に戦争が始まって捕虜になったらしくてな。士官とはいえ、あくまで候補生であって正式な連邦軍兵士ではないということで捕虜とは認定されず、調書を取った後は適当な施設に軟禁されていたようなのだが、その後どうあつてか義勇軍として参加したらしい」

そう、シロー・アマダは連邦の士官候補生であり、クリスマスと年末年始を家族で過ごすために故郷のサイド2に偶々里帰りしていたのだが、そのタイミングで今回の戦争が始まってしまい、ジオンがサイド2を占領した際に捕虜となってしまうのだ。

しかし、まだ正式な軍属にはなっていなかったことから捕虜として扱うのは難しく、かといって連邦に返すわけにもいかなかった為、捕虜収容所とは違う適当な施設に監視付きで軟禁されていた。

もつとも、捕虜ではないということを手紙などの検閲はされるものの、家族との面会は許されていて、シローはサイド2が故郷であるこ

ともあり、週に2、3度くらいの配分で家族との面会をしていたのだが、そこで自分の家族がサイド2の住民から白い目で見られている事を知ってしまう。

実はサイド2では元々親連邦派が6割、親ジオン派が4割といった感じで存在していたのだが、今回の占領によってジオン派が台頭してきており、親連邦派の中には親ジオン派に鞍替えする者も出てきていた。

シローの家族もその煽りを受ける形で、親ジオン派の人間から迫害を受けており、非常に肩身の狭い思いをしていたのだ。

まあ、それでも自分が連邦軍士官候補生であるという自負があったし、それを裏切るのは自分の信念に反するという事で、心苦しく思いながらも見て見ぬふりをしていたのだが、日に日に衰弱していく家族を見るとそうもいけなくなり、家族を食わせる目的もあつて遂に義勇軍に参加する決意をして、こうしてオーストラリアへとやって来ていた。

だが、元連邦軍士官候補生ということでもスパイかもしれないという疑いを掛けられており、同じ義勇兵からも距離を置かれていたのだが、そこでランバ・ラルと偶々知り合い、彼に気に入られて部下となったのだ。

「なるほど、そんなことが有ったんですか。 奴も不運ですな」

コズンはあまりにも不運続きなシローの事を哀れむ。

偶々休暇で帰ったところに戦争が始まってしまい、何がなんだか分からぬままジオン軍に拘束されてしまったこともそうだが（まあ、これは見方によっては死なずに済んだとも取れるが）、シローの義理高さから見ると、家族を養うために連邦からジオンに寝返らざるを得なかったことも相当な苦痛だった事は容易に想像できるからだ。

（ゲリラ戦の厳しさを教えるために少し手荒に扱ってしまったが・・・次からはもう少し優しくしてやるか？）

コズンはそんなことすら考えた。  
もつとも、そんな考えは次のランバの言葉によって覆ることになるが。

「いや、そんなこともないと思うぞ。 奴もオーストラリアに来たことで女が出来たらしいからな。 確か・・・アイナ・サハリンとか言ったか？ 没落していたが、例のアプサラスの開発によって持ち直した名家の令嬢らしいぞ」

「ちよつとアマダ准尉を教育してきます」

コズンはそう言いながら、あつさりと先程心の中で思ったことを撤回し、全力でアマダ准尉を殴る算段を立てる。

そう、指揮官である少佐は別として、ランバ・ラル隊の人間が女にうつつを（それも名家の令嬢と）抜かす事は許されないことなのだ。ちなみにこれは断じて女が居ない男の僻みなどではない（とコズンは思っている）。

「艦の連中に迷惑が掛かるから程々にしておけよ」

そんなコズンをランバは半ば笑いながら見送っていた。

——そして、その後、とある潜水艦の艦内で女の話を持ち出してじやれ合う少尉と准尉が居たと言うが、それはまた別の話。

U C 0 0 7 9 年 3 月 2 2 日 中欧侵攻作戦

宇宙世紀<sup>U.C.</sup>0079年 3月22日 旧ドイツ ベルリン

「あれがベルリンか」

赤いガンダムを駆る男——シャア・アズナブル少佐はベルリンの街並みを見ながらそう呟く。

3月21日深夜より開始された中欧侵攻作戦。

それはバルカン半島から出撃したヨーロッパ方面軍（つい最近、新設された）によって行われる主に2つの地域に向けての侵攻作戦だった。

1つはヨーロッパ方面軍本隊によってアドリア海を通過し、イタリア半島に向けて侵攻する作戦。

こちらは最終的にローマの占領を目指しており、ここを占領すれば地中海の制海権掌握が大分楽となる。

ただし、ジオン軍情報部が掴んだ報告によると、連邦軍はシチリア島に戦力を集中しているらしいので、そちらの動きによってはイタリア半島は諦めることになるかもしれないが。

そして、もう1つはヨーロッパ方面軍別動隊によって、ウィーンとプラハを北に突っ切り、ベルリンを占領する作戦だった。

1ヶ月前にワルシャワ攻略が失敗した後、ジオン軍は旧ポーランドから撤退しており、再び旧ポーランドを取り戻した連邦軍と睨み合っている状態だ。

今回の作戦はその後方拠点となっているベルリンを占領し、旧ポーランドを孤立させるのが狙いだった。

そして、シャアもまたこの任務に就いており、彼は切り込み隊として部下と共に先陣を切る形で真っ先にベルリンに到達していたのだ。

「この前みたいな事がないと良いがな・・・」



シヤアは1ヶ月前のワルシヤワの事を思い出す。

あの時はシヤアは郊外に居たので巻き込まれないで済んだが、もしワルシヤワ市内に突入する部隊に配属されていたら、間違いなく巻き込まれて死んでいただろう。

それを思い返せば、市街に突入するのに少し腰が引けるのも当然の話だった。

もつとも、それは他の将兵も同じだろうし、自分がそんなことは考えていないという事を例えポーズであっても見せておかねば部下の士気が下がるのは明白なので、そのようなことはおくびにも出さなかったが。

「だが、今回は向こうの市民も居るし、南極条約だってある。連邦がそのようなことをするとは思えないが・・・」

そう、ベルリンは民間人の避難が済んでおらず、まだ沢山の民間人が取り残されている。

まあ、ベルリンは元々後方拠点であったし、僅か半日の間にジオン軍がウイーンとプラハの防衛ラインを突破してベルリンにやって来ると考えていた連邦側の人間は誰もいなかったので、避難が遅れるのも当然と言えば当然の話だったのだが。

そういうわけで、ベルリンには多数の民間人が取り残されており、そんな中で連邦軍が核を使ってくるとは考えづらかった。

加えて、ワルシヤワの時とは違い、現在のジオンは連邦との間で南極条約を結んでおり、核兵器の使用禁止が条約によって決まっていたのだから尚更だ。

しかし、それでも絶対無いとは言いが切れないのが戦場だ。

偶々ベルリンに有るかもしれない核が、追い詰められてとち狂った向こうの司令官によって発射されるといったケースも十分考えられる（実際、シヤアは当然知らないが、原作のオデッサ作戦でのマ・クベがそのようなことをやっている）。

シヤアはそう思い、突入は慎重に進めることにした。

しかし、後方拠点と言つても、重要都市に分類されるベルリン市内には当然の事ながら連邦軍の守備隊が配置されている。

それらの部隊がシヤアの部隊が近づいた途端、一斉に市内から攻撃を開始した。

「おっと。撃ってきたか」

シヤアはそう呟きながらも、持っていた105ミリマシンガンをビルの屋上に据え付けられている200ミリ速射砲に向けて発射し、人員共々スクラップへと変える。

その際、一部のビルの破片が飛び散り、下に居た市民を殺傷している。

「・・・上からはなるべく市街には損害を出さないように言われているのだが・・・これでは難しいだろうな」

第一、今さら市街戦を避けようにももう遅い。

既にシヤアの部下達は次々とベルリン市街に入っていくっているし、そもそもの話、連邦軍が街から出てこない以上はどうしようもないのだ。

「だが、せめて被害を最小限にしよう」

シヤアがそう言いながら、自らも市街の奥深くに突入しようとした時、1発のミサイルがシヤアの向かおうとした先から発射された。

「むっ！まさか!？」

見るからに大型のミサイルだったので、シヤアはそのミサイルが核ではないかと疑う。

そして、すぐさま手頃な建物に隠れつつ、数瞬後に訪れるであろう

衝撃に備える。

一方、そのミサイルはベルリンから少し離れた場所に居たシャアの率いている大隊の1つ——第33歩兵大隊（900人）の頭上でその力を解放し、部隊を纏めて吹き飛ばした。

「これは・・・核ではないだろうが、かなり威力が高いな。気化爆弾か？」

そう、この時使われたのは、ベルリン守備隊に配備されていた燃料気化爆弾だった。

空気中の酸素を急速燃焼させ、強力な爆風で相手を吹き飛ばすといった主旨の兵器であり、核ほどではないがその威力はとても高い。

しかも、周囲一帯の酸素が一気に奪われるために、爆発範囲に居れば、どうにか爆風を免れても酸欠になる危険性が高いという恐ろしい代物だ。

もつとも、気密性が高く、多少の衝撃ではびくともしないモビルスーツ相手には相性が悪く、よほどの至近距離で爆発させなければダメージを与えることは難しいだろうが、不幸なことに今回の攻撃を喰らった部隊は装甲車と随伴歩兵で編成されていた部隊だった。

その為、装甲車などはその強烈な爆風によって吹き飛ばされて軒並みスクラップ。

外に出ていた歩兵は更に悲惨であり、爆風で吹き飛ばされるか、酸欠状態になって意識が混濁していく。

更にこの時、第33歩兵大隊の指揮官であるティール大尉も戦死していたが、仮に生きていたとしても手足となる部隊がこの有り様では大して変わらないだろう。

（ちっ！やってくれたな、連邦）

シャアはミサイルが発射されたであろうベルリン中央へ向け、文字通りの意味で機体を走らせながら、内心で大きく舌打ちをする。

この作戦で預かったシャアの部隊は4つの大隊で構成された1個連隊（3500人）。

その内の1つが事実上壊滅してしまったとなると、ベルリン占領は些か手間取ることになってしまうのだ。

（だが、本隊はもう少しで来る。それまでの辛抱だ）

シャアがそう思い直した直後、先程のミサイルが発射されたであろうミサイル発射施設を視認し、105ミリマシンガンを発砲、そのミサイル施設を撃破する。

ミサイルの弾頭は既に空になっていたので、あまり意味のない攻撃ではあったのだが、新たに装填される可能性も否定できないので、後顧の憂いを絶つという意味では意味の有る行動だった。

（よし、これ以後はベルリンを占領するだけだ）

あのサーモバリック爆弾は予想外だったが、他は当初の想定より抵抗が少ない。

このまま行けば予定より楽に作戦が完遂できそうだ。

シャアはそう考えるが、残念なことにそうは問屋が卸さなかった。

『シャア少佐！』

「どうした？」

『緊急事態です！東の方角から1個旅団程の連邦軍が接近中です！』

「・・・そうか」

どうやら楽に終わらせてはくれないらしい。

シャアはそう思いながら、この状況を上手く切り抜けるために部下

達に指示を送った。

◇イタリア半島　ローマ

「シチリア島の連邦軍に動きなし、か」

シヤア少佐がベルリン攻略を行っていた頃、ヨーロッパ方面軍の司令官——ユーリ・ケラーネ准将はそう呟きながら、若干拍子抜けしたような表情を作る。

現在進行形で激しい戦闘が続いている旧ドイツとは違い、ここイタリア半島は一度上陸した後はかなり楽な戦いが続いており、ユーリが思っていたよりも楽にローマを陥落させることに成功していた。

「シチリア島の連邦軍が出てくれば、散々に打撃を与えた後に撤退するという手筈だったんだがなあ」

「仕方ありません。どうやら連邦軍は島に閉じ籠って防備を集中する事を選択したようですから」

ユーリの眩きに、秘書官であるシンシア中尉はそう答える。

実際、島に閉じ籠って防備を固めるといふ連邦の選択肢は意外と間違っていない。

何故なら、狭い場所に兵力を密集すればそれだけ火力は集中して防備は固くなる（ただし、絶大な貫通力と火力の有る攻撃をされれば纏めて粉碎される危険性もある）のだから。

更にイタリア半島を失っても、シチリア島さえ確保していれば、アドリア海を除いた地中海の制海権を保持できるという見方も存在する。

「それで厄介な占領地をまた抱え込む結果になったと。しかも、手放したら手放したで後々の我々の脅威となると来てる。まったく、地球というのは厄介な土地だな」

ユーリは不機嫌そうにそう言う。

元々、ユーリは地球に降りて以来、地球侵攻作戦そのものに懐疑的な立場になっていた。

思い通りにならない気候に慣れない重力、果ては地の利は向こうに有ると来ている。

こんなことをして兵力を磨り潰すくらいなら、宇宙で連邦軍を待ち構えて、出てきたところを叩けば良いとユーリは考えていた。

もつとも、転生者であるザビ家の人間からしてみれば、この時代の資源は地球頼りな部分が多いので、この時期に戦争が行われるとなると、地球侵攻作戦はどうしても避けられない要素だったのだが、その事をユーリはあまり認識していなかったのだ。

「仕方ありません。この地球でしか取れない資源も確かにありますか

ら」

「ふん、まあいいさ。それよりシチリア島の連邦軍が動かないなら、今のうちに俺達でシチリア島を占領したい」

「しかし、あそこには5万人の連邦軍が籠っております。我々は9万人程ですが、旧スイスや旧フランス方面の連邦軍への警戒なども考えると、動かせるのは精々が3万人。さすがに攻略は無理があるかと」

「いや、問題はない。我々には撤退戦術を想定して多く配備された気化爆弾が数発有る。あれを使う」

「あれですか？確かに元々シチリア方面からやって来る敵に向けて使うことを想定していたので、使う分には問題ないでしょうが、ここで使つてよろしいのですか？」

「構わんよ。1つ景気良くやつちまおう」

ユーリはニヤリと笑いながらそう言った。

——そして、この数時間後、シチリア島攻略が開始され、翌日には駐留していた連邦軍は壊滅し、同島は陥落してジオン軍の占領下に置かれることとなる。

更にシチリア島攻略作戦が開始されたのとはほぼ同時刻。

ベルリンがジオンと連邦の激しい攻防の末にジオン軍の手に落ち、旧ポーランドの連邦軍は孤立。

そこにオデッサ方面軍司令のシーマ・ガラハウ中佐が旧ポーランドに本格的な攻勢をかけたことによつて、旧ポーランドの連邦軍は、どうにかバルト海を渡つてスカンジナビア半島に逃げる事に成功した一部の将兵を除いて撃滅されることとなり、これにて中欧は完全にジオンの占領下に置かれることとなった。

UC0079年 3月26日 ニューカレドニア島  
上陸作戦

宇宙世紀0079年 3月26日 ニューカレドニア島  
ニューカレドニア島。

それは四国程の大きさの島であり、ニッケルを産出する鉱業島である一方、観光地としても有名な島でもある。

またの異名を「天国に一番近い島」。

そう呼ばれるようになったのは、旧世紀に森村桂という作家が自らの旅行記となったベストセラー作品「天国に一番近い島」にニューカレドニアが選ばれたからだと言われている。

そして、その島には現在、8万人の連邦軍の部隊が集結しており、その攻略に来たジオン軍と激しい戦いを繰り広げ、「天国に一番近い島」は「地獄に一番近い島」へと移り変わりつつあった。



◇ニューカレドニア島 沿岸

(攻撃が激しすぎて全然動けない)

つい先日、ジムⅡ改から乗り換えた量産型ガンダムの機体を連邦軍の沿岸砲台の死角に入れながら、のび太は連邦軍の激しい砲撃に対してそのような感想を抱く。

のび太が実戦に参加するのは、オーストラリア降下、タスマニア島上陸に続いて、これで三度目だが、中でもものび太はこのニューカレドニア島上陸が一番困難な実戦だとはっきりと断言出来る。

何故なら、一度目の実戦であるオーストラリア降下の時は確かに激しい対空砲火に晒されたが、曲がりなりにも空という逃げ場があったし、タスマニア島の時は相手となる連邦軍がそもそも少なかった。

しかし、このニューカレドニア島は違う。

逃げる空もなければ、敵の兵力も多い。

そして、統制された大規模な軍隊の攻撃が厄介だというのは、のび太も大冒険時代の海魚族や鉄人兵団との戦いから理解していた。

加えて――

(こんな時、メイが居ればなあ)

そう、この戦いにメイ・カーウインは同乗していない。

彼女とはのび太が機体をジムⅡ改から量産型ガンダムに乗り換える際に、別々の隊に配属される形で別れてしまったのだ。

のび太はそこに心細さを感じたが、だからと言って泣き言を言うほど弱くもない。

伊達に大冒険を潜り抜けてきたわけではないのだ。

(もう少ししたら、砲火も多少は弱まる筈だ。そこに出ていくしかない……ないんだけど——)

のび太は若干不安を感じた。

なにしろ、今、のび太が乗っている量産型ガンダムが装着しているのは水中用装備だ。

これは今回の作戦で、のび太の機体は水中から上陸することになっていた為に用意され、この装備は水中ではかなりの機動性を発揮する。

しかし、この水中用装備、実はかなり重いのだ。

その為、陸上では完全に重りとなっており、ガンダム自慢の機動性が殆ど失われている。

おまけに構造上の問題で外す手段も外側からしかなく、本来の予定では橋頭堡を築いた後に整備員によって外される予定となっていたのだが、残念なことなのび太と共に上陸した味方のジオン軍は、のび太のように砲台の死角に入り込むことが出来た極一部のものを除いて、現在進行形で激しい砲火に晒されており、何時上陸地点から叩き出されても可笑しくない有り様だった。

(ボタン一つで外せるようにしてよ、まったく)

のび太はこの水中用装備を開発した研究者相手に内心でそのような愚痴を溢しつつ、どう動くか思案していたが、次の瞬間、目に入ってきたその光景にその思考は一時中断される。

「あつ……」

その目線の先に在ったのは、車輪を撃ち抜かれて動けないでいる味方の装甲車だった。

しかも、よく見ると敵の砲撃が苛烈な為に、車輛の中の人間は脱出

しようにも出来ないような状況になっている。

(助けないとー！)

もう迷っている暇はなかった。

のび太は腹を括ると、量産型ガンダムの機体をその装甲車と敵の間に移動させつつ、持っていた150ミリ対艦ライフルを敵の陣地へと撃ち込む。

150ミリ対艦ライフル。

それはジオンで標準配備されている135ミリ対艦ライフルの大口徑バージョンだ。

まだ開発が完了したばかりの最新装備だったが、のび太は射撃の腕が飛び抜けて高かった為に、特別に優先配備されていた。

そして、戦艦の装甲ですら余裕でぶち抜く150ミリ弾にただの沿岸砲台やトーチカが耐えられるわけもなく、そこにのび太の正確な射撃が上乘せされる形で、連邦軍の陣地に築かれた砲台や銃座は次々と沈黙していく。

「今のうちに早く脱出してくれ！」

のび太は悲鳴のような声を上げながら、150ミリ対艦ライフルを撃ち続け、連邦の陣地を次々と制圧する。

しかし、今の状況はかなり不味い。

量産型ガンダムはルナ・チタニウム合金で出来ており、120ミリマシンガンの直撃にも耐えるが、沿岸砲台のような大口徑の大砲の砲撃には流石に耐えられないし、そうじゃなくともモビルスーツの足の駆動部に弾が直撃してしまえば動かなくなる危険がある。

だが、一度助けに来た以上、装甲車の中に居た人間たちには助かって欲しいという思いもあり、のび太はそのリスクを認識しながらもその場に粘り続けていた。

そして、数十秒後、装甲車の中の人間たちが車両を捨てる形で、敵

の攻撃の死角へと移動したのをのび太は確認する。

「よし！撤退だ！」

のび太はそう言いながら、この場から撤退しようとする。未だのび太の方に砲火を向けてくる連邦軍の陣地に向けて150ミリ対艦ライフルの銃口を向け、引き金を引く。

が――

「あれ？弾切れ？」

そのタイミングで150ミリ対艦ライフルのマガジンに存在した弾丸が尽きたのだ。

しかも、大口径のライフルだった為に予備のマガジンも携帯しておらず、のび太はそのライフルを捨てる以外の選択肢を取ることが出来なかった。

そして、それを好機と見たのか、連邦軍の陣地から再び激しい銃火がのび太の乗る量産型ガンダムへと集中してくる。

「くそお！調子に乗るな!!」

のび太は一応念のためという形で装備していた90ミリマシンガンを取り出すと、それをフルオートで撃つ。

すると、その銃口から発射された大量の90ミリ弾によって、敵の銃火は次々と沈黙していき、やがてのび太に向かってきていた銃火の殆どを沈黙させることに成功した。

そして、この隙にのび太は先程の砲台の死角へと機体を移動させ、敵の銃火から身を隠す。

「……ふう。生きた心地がしなかったよ」

のび太は取り敢えず安全になったことを確認し、大きく安堵の吐息を漏らした。

◇ニューカレドニア沖

「ノリス少佐！第一陣から入電！『我が第一陣は橋頭堡を確保するも被害甚大。至急、援軍を求む』とのことですよ」

「そうか。では、第二陣を速やかに発進させ、第一陣の支援を行うように伝達しろ！」

部下からの報告を受け、上陸部隊の指揮官であるノリス・パツカード少佐はそう指示する。

予定では第二陣はもう少し後に発進させる手筈になっていたが、この状況では致し方ないとノリスは判断していた。

「はっ！了解しました」

そうやって他の部隊に命令を伝えるために部屋を出ていく部下。そして、その数分後、別の人物が新たにノリスが居る部屋へと入っ

てきた。

「ノリス少佐、私も行きます」

「アイナ様!？」

そう、それはアプサラスのパイロット——アイナ・サハリン少尉だった。

普通、軍隊の階級では少佐と少尉では当然の事ながら少佐の方が偉く、幾ら彼女の兄がノリスより上の准将だからと言って少佐であるノリスが少尉であるアイナに様付けをするのは可笑しいし、部下であるアイナが上官であるノリスを呼び捨てにするなど以ての外だ。

しかし、彼女のサハリン家とノリスのパツカード家は主従関係にあり、ノリスもうっかり普段の癖でそう呼んでしまっていた。

「し、しかし、アプサラス改はまだ完成品としては程遠いとギニアス様から聞いておりますが……」

そう、アプサラス改（後にアプサラスI改と呼ばれる）はタスマニア島の時から改良されてIフィールド発生装置が積まれており、対ビーム防御に関しては格段に上がっているが、実弾での攻撃はタスマニア島の時と大差無い。

そして、ここはタスマニア島の時とは比較にすらならない激戦地。万が一、撃墜されて捕虜にでもなったらと考えると、ノリスとしても出撃の指示を出すことに躊躇してしまう。

だが、そんな葛藤を当のアイナは切って捨てる。

「ノリス少佐、前線では多大な犠牲を出しながらも進撃を行っていただいています。そんな中で強大な火力を持つアプサラスを休ませておくなどという贅沢が許されるとは到底思えません」

「それは・・・」

「それにアップサラスであれば連邦の防衛陣地に穴を空けることも可能です」

道理だった。

一見するだけでは大言壮語にも聞こえる彼女の言葉だが、アップサラスには現実にそれを可能とするだけの火力が有る。

しかも、ここは激戦地。

強大な火力を持つ戦力をわざわざ持つてきているのに、それを遊ばせておく余裕などないのだ。

「・・・分かりました。出撃を許可致します。しかし、危険な状況に陥った場合、すぐに下がって頂きますようお願いします」

「分かっています」

アイナは凜とした佇まいではつきりとそう告げた。

UC0079年 3月29日 闇夜の襲撃

◇宇宙世紀0079年 3月29日 ニューカレドニア島

「お前が灰色の死神か？」

上陸から3日が経過した3月29日の夜。

後方拠点となっていたその場所で、のび太にそう話しかけてきたのは、ジオン軍の灰色の軍服（この世界のジオン軍は連邦軍が母体という形となっているため、軍服などは全く同じ。連邦との識別は左胸の胸ポケットの部分に着けられた国旗で分かるようになっていて）を身に纏い、伍長の階級章を襟元に着けた1人の20代半ばの男だった。

「えっ？それって僕のことですか？」

「ああ。格納庫に有った灰色の機体は君のだろうか？」

「そうですけど・・・その・・・死神というのはどういう？」

確かにのび太の量産型ガンダムは宇宙の色に溶け込みやすく、地上でも目立ちにくい灰色で塗装されている。

ちなみにこの塗装がされているのは今回投入された量産型ガンダムののび太の機体だけである事もあって、のび太の機体特有の塗装となっており、灰色のモビルスーツというのはのび太の機体を意味しているのだが、それで何故“灰色の死神”と呼ばれることになるのか分からず、のび太は首を傾げていた。

「おや、知らないのかい？連邦の捕虜が震えながら言っていたんだよ。君の機体のことを“灰色の死神”だとね」

「ええ!？」



のび太はその言葉に驚いた。

まさか、敵にそのような渾名で呼ばれているとは思わなかったからだ。

しかし、連邦軍からすれば、のび太のガンダムは上陸以来、その火力とその脅威的な射撃（水中用装備が取り外されてからはここに高い機動性の要素も加わる）によって次々と自分達を陣地諸共地獄に送り込んでいく死神のような存在であり、更にのび太の機体が目にした部隊が極端に生存率が低いこともあつて（これはのび太がニュータイプ能力を駆使して隠れている敵などを駆逐しているため）、連邦軍ではのび太の事を灰色の死神という異名で呼び始めていた。

「凄いじゃないか。連邦から異名で呼ばれるジオンの人間なんてあまり居ないんだぜ」

「そうなんですか？」

「ああ、ジオンのパイロットそのものは沢山居るが、その中でも異名で呼ばれているのは黒い三連星に赤い彗星、真紅の稲妻、青き巨星、ソロモンの白狼、あとは・・・そう言えば最近には白き流星なんてのもよく聞かれるが、精々そのくらいだからな」

「へえ・・・」

「なんだ。あまり嬉しそうじゃないな」

「実感があまり無くて。・・・それになんとも喜べないんですよね」

「・・・そうか。だが、戦場では殺し殺されが当たり前だ。平和な世の中と違って、それを誇ってもバチは当たらないぞ？」

伍長の男はのび太が人を殺しているという実感に吞まれつつあることを見抜き、のび太に対してそのような励ましの言葉を掛ける。

だが、のび太の表情はあまり変わらない。

理屈では納得しているようだが、理解が追いついていないようだ。のび太が纏う雰囲気から、それを悟った伍長の男は内心で少し溜め息をつきながらも、話題を変えてここに来た本来の目的を果たすことにした。

「・・・まあ、それはともかく。今こうして話し掛けたのは君に一言礼を言いたかったからなんだよ」

「礼、ですか？」

「ああ。3日前の上陸初日。俺たちを助けてくれたのは君だろうか？」

そう言われてのび太は記憶を掘り起こし、上陸初日にとある装甲車に乗っていた味方を助けたことを思い出した。

「・・・ああ、そう言えばそんなことがありましたね。とすると、あなたはあの時、装甲車に乗っていた人ですか？」

「そうだ。あの時はありがとう」

そう言って伍長の男は頭を下げる。

「いえ、礼を言うほどではないですよ。仲間として当然の事をしたままでですので」

「そうか。でも、俺たちにとっては命の恩人だ。お礼ぐらいはしたい。今度食事でも奢らせてくれないか？」

「ええ、それくらいなら別に良いですけど・・・」

「本当か？じゃあ、また今度何処かの基地で会うことがあったら話しかけてくれ。その時は飯を奢るさ」

「はい、ありがとうございます！」

「ははっ、礼を言うのはこっちの方だって。まあいい。とにかくそういうことだ」

そう言つてのび太の前から立ち去ろうとする伍長。

しかし、それは次の瞬間に聞こえてきたとある音によって取り止められることとなる。

ドドドドドドド

「!？」

突如、耳に響いてきた聞き慣れた騒音。

それに2人は反応し、その音が聞こえてきた方向に同時に振り向く。

「銃声。もしかして・・・」

「ああ、おそらく敵襲だ。坊主、銃は持つてるか？」

「あつ、はい。拳銃を1つ持たされています」

「それじゃ心許ないな・・・」

伍長は苦い顔をする。

もし連邦の襲撃だとしたら、向こうはアサルトライフルなどを持っている可能性が高く、拳銃ではとてもではないが火力的に対抗は不可能だ。

勿論、拳銃にも携帯性や取り回しの良さといった利点はあるのだが、接近戦ならともかく、中距離や遠距離単位での銃撃戦となった場合は、火力の高いアサルトライフルの方が必然的に優位となる。

「坊主、あっちの装甲車にライフルなどの大型の武器がある。それを使え！俺は先に行つて味方を救援する!!」

「それは・・・分かりました！それを取つて僕もすぐに行きます！それまで無事で居てください!!」

のび太は1人で行かせることに少しか躊躇うが、既に襲撃してきた敵に対して応戦している味方の為にも伍長を先行させた方が良いと考え直した。

「ああ、分かっているよー!」

その伍長の言葉を最後に、2人はそれぞれ味方の救援と武器の入手のために別々の場所へと向かう。

だが、のび太は知らない。

——これが伍長との今生の別れであつたということ。

「くそっ！奴ら、よりにもよって格納庫に」

◇

アサルトライフルを格納庫内に居る敵に向けて撃ちながら、状況の不味さに伍長は思わず舌打ちをしたくなる。

この臨時格納庫には通常のモビルスーツであるジムⅡは勿論、のび太の量産型ガンダムも収納されており、それが持ち出されると非常に不味いことになってしまう。

まあ、ジムⅡはともかく、ガンダムの場合はその機密性の問題から嚴重なプロテクトが掛けられており、元のパイロット以外には扱えないようになっていいる。

もつとも、本格的な設備でプロテクト排除を行えばそのロックは解除されてしまうが、逆に言えばそうでもない限りは解除はほぼ不可能だ。

しかし、これらの事実を伍長は知らないため、のび太の機体が盗まれるのではないかと気が気ではなかった。

(まさか、あの機体を盗むために来た連邦の特殊部隊か?)

伍長はそう疑うが、実際はただ前線からはぐれた部隊がたまたまここにやって来て襲撃を掛けていただけだった。

もつとも、モビルスーツの格納庫であることは途中で気づき、モビルスーツを強奪しようとしていたので、盗み出そうしているという伍長の考えもあながち間違っただけではなかったが。

「まあ、なんにせよ、早くこいつらを排除しなきゃな。・・・ここいらに居た他の連中はやられちゃまっているみたいだし、坊主もいずれここにやって来る」

伍長は近くに在る味方の死体を見ながらそう呟く。

既にこの格納庫は敵味方の死体が散乱しており、この中に居るのは連邦軍の数人と伍長だけになっていた。

ここはジオン軍陣地のご真ん中であるので、いずれ増援もやって来るだろうが、距離の関係でのび太の方がおそらく先に来る。

あの時は咄嗟にやることを許可してしまったが、幾らモビルスーツパイロットとしての腕が良いとはいえ、あの時の様子では白兵戦などほぼ無理で足手まといになってしまう可能性が高い。

その為、伍長はのび太が来る前に敵を全て排除してしまう必要があった。

しかし、問題なのは伍長自身に障害物に隠れた数名の敵兵をあっという間に制圧できるまでの技量がないことだ。

ちなみに伍長は知らないことだが、皮肉なことこれがのび太なら問題なかった。

確かに伍長の見なした通り、覚悟は若干足りていないが、過去の経験や射撃の才能から、数名程度ならニュータイプ能力抜きでも十分に制圧できるほどの技量を持っていたのだから。

だが、現実は今居るのは伍長であり、尚且つ彼はのび太を戦闘に参加させる前に敵を排除するという考えに縛られており、冷静さが若干欠けていた。

しかし、それでも冷静さを完全に失ったわけではない。

彼も実戦経験者であるので、冷静さを保つことの重要性は本能でよく理解していたのだから。

しかし、ある光景を目にした時、その冷静さは吹き飛んでしまった。

「!? 不味い!!」

それは一体のモビルスーツに2名程の敵兵が乗り込もうとしている姿だった。

あれを奪われてしまったら終わりだ。

そう考えた伍長は咄嗟に身を乗り出し、アサルトライフルをフルオートで撃つてその2名を射殺する。

——だが、同時にそれが致命的な隙となった。

「がつー!」

そう、身を乗り出して被害範囲を大きくしたことで、伍長は残った敵兵に撃たれてしまったのだ。

しかも、致命的な部位に。

倒れながら、徐々に暗転していく伍長の視界。

——そして、そんな彼が人生の最後に見たのは、自分を撃った敵兵を伍長に言われた通り、装甲車から取ってきたであろうアサルトライフルで射殺していくのび太の姿だった。

UCC0079年 4月1日 懸念

◇宇宙世紀0079年 4月1日 サイド3 ズムシティ 総帥府

「やれやれ、戦局はひとまず落ち着きを見せたか」

ギレンは報告書を見ながら、大きな安堵の吐息を漏らす。

開戦から3ヶ月。

ジオンと連邦の戦いは落ち着きを見せていた。

もつとも、それは原作のような膠着状態になっているという訳ではなく、すぐに延期されていた中東侵攻作戦や北米やオセアニアでの再度の攻勢が始まる予定だ。

だが、整理された戦線はギレンに計画を見直す余裕を与えていた。

「欧州方面軍はイベリア半島と旧フランス方面に侵攻予定。北米方面軍はハワイ、オーストラリア方面軍はインドネシアに勢力を拡大する予定か」

正直、どれも理に叶っている話だ。

イベリア半島と旧フランスを占領すれば、ジオン軍はヨーロッパ大陸を事実上制圧したことになり、今後のヨーロッパで脅威となるのはブリテン島、アイルランド島、スカンジナビア半島のみとなり、これで更にスエズを占領すれば地中海は完全にジオンの内海となる。

それはいずれ発動される中東侵攻作戦にも大きな助力となる事だろう。

次に北米方面軍が提案しているハワイ攻略。

これは今後、東海岸を奪還する過程で後背を突かれない保険としては重要であるし、占領に成功すれば戦略海洋軍の本格的な拠点として運用することも可能であるというメリットもある。

なので、ハワイの占領は絶対に必要という訳ではないが、占領を許



可するだけの価値はあると見て良い。

最後に旧インドネシア。

ここを確保することは、万が一、中東侵攻作戦が頓挫した場合、その代わりとなる化石燃料を得ることに繋がるので、これも占領を行うだけの価値がある。

が、問題なのは南方特有のジャングルだ。

ジャングルという空間は基本的に地球の環境に慣れているアースノイドでさえ過酷な空間であり、地球の環境に慣れていないスペースノイドが無闇に手を出せば、手痛い消耗を被るのは目に見えている。更にそこに08小隊で出てきたような連邦側ゲリラが現れれば、面倒なことになるのは間違いない。

「・・・旧インドネシア侵攻についてはもう少し考えて結論を出そう。オセアニア方面はしばらくそのままだな」

ギレンはそう結論付けると、次いで兵器関係の開発報告書に目を通す。

「ジムシリーズの最終型であるジムⅢは5月にロールアウト予定。ジムシリーズの後継機であるザムは8月までに完成する。これにベテランパイロットなどの要素も加われば、どうにか一年戦争は乗りきれるか？」

ジムⅢは原作のゲルググと比べると、若干性能は劣るが、気になるほどではない。

旧世紀の第二次世界大戦の戦闘機で例えるならば、500キロの速度を出せる戦闘機と470〜480キロを出せる戦闘機くらいの差でしかなく、技量が多少優越していれば十分補える範囲だ。

そして、ジムに代わる量産型MSとして期待されているザムは原作ゲルググの性能を（圧倒的という程ではないが）明らかに上回っている。

これで仮に連邦が原作ほどの力であったならば、例え向こうに  
天<sup>アムロ・レイ</sup>パが居たとしても、戦局に問題はないと断言できただろう。

しかし、現実にはコロニー落としをしていないことで連邦の力は有り  
余っているし、ミノフスキー物理学を応用した小型核融合炉について  
は、ミノフスキー博士が亡命していないこともあって原作より開発が  
遅れているが、それも涵獲されたジムのエンジンを調べることで解析  
は可能だ。

もともと、OSの開発については簡単にはいかないだろうが、原作  
のように学習型コンピューターを投入してくることは十分考えられ  
る。

となると、原作通り今年中には連邦もMSを投入してくる可能性が  
高い。

「そういうえば、原作ではこの頃にV作戦が開始されていたな。とな  
ると、連邦もガンダムを出してくるのか?」

原作ファーストガンダムの切っ掛けになったV作戦。

その象徴であるガンダムは、この世界ではジオンが開発した兵器と  
なっている。

その為、連邦がガンダムを出してくる可能性は低いが、原作の修正  
力が働いて登場する可能性が無いでもない。

もともと、原作でガンダムを開発したテム・レイはジオンに居るし、  
仮にガンダムを作ったとしても天パがこちらの陣営についている以  
上、この世界でホワイトベースとガンダムが脅威となる可能性は限り  
なく低い。

：：低いのだが、何故か不安になってしまふのはやはり原作を知っ  
ているが故だろう。

「しかし、何処でやるつもりだ? さすがに原作通りにサイド7でやる  
ということはないだろうが、やはりジャブローか、アフリカ、ロシア、  
あとはアジアくらいなものだろうか」

ギレンは原作通りにサイド7でV作戦が行われる可能性は低いと見ていた。

なにしろ、サイド7は連邦側のコロニーとはいえ、その近くに存在するルナツーをジオンが確保しているため、半強制的に中立的な立場へと追いやられている。

しかも、ルナツーがジオンの手に落ちているので、サイド7に翻意の感情が有るとジオンに見なされた場合、すぐさま宣戦布告からのサイド7占領となってしまう以上、仮に連邦側が原作通りサイド7でV作戦を行いたくともサイド7側がそれを拒否するだろう。

となると、地球でやる可能性が高い訳だが、問題はそれが何処になるかだ。

ぶつちやけどの大陸でやるにしても、連邦に地の利がある以上、その気になれば幾らでも隠し通せる。

こちらの諜報部も一応頑張ってはいるが、スペースノイドの庭である宇宙と違い、アースノイドの庭である地球での情報収集はなかなか困難であり、何処かの秘密基地が何かでV作戦をやっていたとしても特定することは難しい。

「やれやれ、厄介なことだな」

ため息をつきながら、ギレンはひとまずV作戦の事を頭の隅へと置き、次にアップサラス計画の資料を手取る。

「アップサラス計画は小型の拡散メガ粒子砲が完成して今のところ第二段階に来てる。これでマルチロックオンシステムを搭載できればアップサラスは完成だな」

そう、アップサラスは現在、拡散メガ粒子砲についての開発を終え、同機に搭載している（ちなみにこのアップサラスはアップサラスIIと呼ばれている）

これでマルチロックオンシステムを搭載できれば、原作のアプサラスの完成型だったアプサラスⅢは完成し、計画は成功。

あとはギレンの野望に出てきたようなアプサラスⅢをコストダウンさせた量産型アプサラスが完成すれば、アプサラス計画は成就したことになる。

「あれは原作でもチートだったからな。あんなのが量産されて襲い掛かってくるとすれば、それは悪夢そのものだ」

ギレンは複数のアプサラスに襲い掛かられる連邦兵を頭の中で想像して若干だが気の毒に思った。

実際、原作08小隊に登場したアプサラスⅢはたった一機でイーサン・ライヤー大佐が率いていたMS部隊をほぼ一掃している。

一機である有り様となると、複数の機体だったらどうなるかは想像もしたくない。

そして、アプサラスの攻撃を防ぐには、ありったけのビーム攪乱幕を空間一帯にばら蒔きまくるしかないが、それは連邦のビーム兵器も同時に使えなくなることを意味している。

「まあ、アプサラスの事は良い。問題なのはビーム攪乱幕下でどうやって火力を発揮するかだな」

ギレンはそれを悩んでいた。

基本的にガンダム世界では実弾よりビーム兵器の方が威力が大きい。

だが、このビーム兵器はビーム攪乱幕下ではほぼ使えなくなってしまう。

そうなると思えるのは実弾しかないのだが、仮にガンダムと同等の頑丈な機体を向こうが投入してきた時、実弾では破壊できるか怪しくなってくる。

小型サイズのヨルムンガンドでも投入すれば面白い結果になるか

もしれないとギレンは考えたことがあり、開発部に研究をさせていたが、返ってきたのは今年度中での開発は不可能という報告だった。となると、別の手段を用意する必要がある。

「・・・いや、待てよ。確か宇宙戦艦ヤマトにはあの兵器があったな」

その時、ギレンの頭にはガンダムとは全く違う作品である宇宙戦艦ヤマトに登場する「ある兵器」が頭に浮かんできた。

波動カートリッジ弾。

これは弾丸の火薬の部分に波動エネルギーを込める（具体的には波動砲のエネルギーの1パーセント程）という兵器であるが、これによつてヤマトはデザリアム帝国のゴルバを粉砕（まあ、これは波動融合反応も有ったが）し、ヤマトIIIではスカラゲック海峡でボラー連邦の第一、第二主力艦隊を一掃するという戦果を挙げている。

まあ、実弾ゆえに射程が短いという欠点はあったが、それを抜きにすれば主砲よりも威力が大きかったので、その欠点は使い方次第ではどうとでも補うことが出来るだろう。

「二応、ダメもとでやらせてみるか。案外、良い結果が返ってくるかもしれない」

ギレンはそう思いながら、開発部に連絡を取った。

U C 0 0 7 9 年 4 月 2 日 V 作戦

◇宇宙世紀<sup>u.c.</sup>0079年 4月2日 南米 ジャブロー

「ところで、将軍。我々のMS開発計画……確かV作戦と言ったか？その進捗状況はどうなっている？」

南米・ジャブローの地下に築かれた一室。

そこでは地球連邦の大統領である男が地球連邦軍総司令であるヨハン・イブラヒム・レビル大将を呼び出し、連邦軍のMS開発計画であるV作戦の進捗状況を尋ねていた。

「はい。我々はこれまでの戦いで数機のジムを鹵獲しており、現在、それを基にMS開発を行っております」

レビルはそう説明を始める。

ジオンのMSは確かに強力な兵器ではあったが、完全に鹵獲数を0にすることなど出来るわけもなく、この3ヶ月の戦いで数機のジムが連邦に鹵獲されており、連邦はそれを基にV作戦を立てていた。

しかし、それには幾つかの問題点も存在する。

「ですが、幾つかの問題があり、その1つがエンジンで、これは例のミノフスキー物理学を応用した全くの新しい理論を基にしたもので、我々はその集大成たるミノフスキー粒子の解析にこそ成功していませんが、これを応用したエンジンとなると、ほぼ1から作らねばならず、今年度中に完成するかどうかは非常に微妙です」

そう、この世界ではザビ家の手によってミノフスキー物理学の研究論文が回収されたり、抹消されたりした為に連邦は開戦時の段階でミノフスキー粒子どころか、メガ粒子砲ですら保有していない有り様だった。

そんな状況でジムの小型核融合炉を解析したとしても、簡単に製造が出来るわけもなく、原作では9月に成就したV作戦だったが、この世界では今年度中に達成できるかどうかとも怪しいという状況になっていたのだ。

「それは大問題だ！どう対策を取るつもりかね?!」

大統領は怒鳴る。

この大統領は軍事兵器についての知識は素人そのものだが、エンジンが完成しないというのが不味いということくらいは分かるし、今年度中に完成するかどうか分からないとなると、開発が終わるよりも先にジオンがここに攻めてくる可能性の方が高いと見るだけの観察眼は持っており、早急な対策の提案をレベルに求めていた。

そして、それに対して、レベルはこう答える。

「・・・我が軍の結論としては小型核融合炉については開発を続けますが、今年度中にMSを確実に完成させるために代用として核分裂炉の搭載を行いたいと考えています」

「核分裂炉・・・核融合炉が使用される前の旧世代の遺物か。それできんとかなるのかね?」

大統領は懐疑的だった。

核分裂炉は核融合炉が出てくる前に使用されていた旧式の技術であり、核融合炉と比べると出力も安全性も低い。

そんなものを切り札となる兵器に搭載するなどと言われれば、不安となるのも当然と言えば当然だった。

「今年中に確実に間に合わせるとなればやるしかありません」

「・・・良いだろう。だが、核分裂炉となると、地上では使えないぞ?」

核分裂炉は前述したように核融合炉より安全性が低いので、仮にこちらのMSが破壊された場合、放射能が漏れ出る可能性が大となる。これが放射能などがあつという間に拡散してしまう宇宙空間ならば問題ないのだが、地上では放射能が残り続けてしまうため、とてもではないがそんな危ない兵器は使えないのだ。

・・・普通に考えるならば。

「ええ、分かっております」

そう言いながらも、レビル將軍はいざとなれば地球上で使うことも考えていた。

なにしろ、まず地球上の敵を叩かなければ、宇宙への反抗などほぼ不可能なのだから。

だが、そんなことを大統領の前で言うわけにもいかないのです、今のところそれはレビルの頭の中だけに秘められたものとなっていた。

「・・・まあいい。ところで、君は先程「幾つかの問題点がある」と言っただが、エンジン以外にも何か問題点が有るのかね？」

「はい。実は機体を動作させるOSなのですが、これもまた問題です」

そう、機体を動作させるOS。

この開発もまた連邦軍のMS開発部の課題となっていた。

勿論、滷獲したジムからもOSそのものは入手しているのだが、ジオン軍も馬鹿ではなく、そういった事態も想定して、OSには嚴重なプロテクトが掛けられており、なかなか解析が進んでいない。

しかも、仮に解析できたとしても、ジオン軍のOSは当然の事ながら小型核融合炉の使用を前提としたもののため、現在、レビルが企画している核分裂炉搭載のMSにはほとんど反映させることは出来ないというのが現状だった。



「ですので、学習型コンピューターによるデータ収集を考えています」  
「あの高級品か。しかし、話を聞くに並の機体とパイロットではデータ収集をする前に撃破されてしまうのではないか？」

その通りだ。

実際、原作ではガンダムによるデータ収集が成功し、マチルダ隊によつてガンダムのデータがジャブローに送られ、それがジムに反映される形となった事でV作戦は成功したが、それはガンダムが高性能だったのと偶々ガンダムに乗ったアムロ・レイが宇宙世紀最強のパイロットだったというミラクルの連続によつて成り立つたと言つても良い。

つまり、裏を返せば、ガンダムとアムロ・レイ、どちらかが欠けていればV作戦は失敗した可能性が高いという事でもある。

勿論、大統領は原作など知らないが、かなり失敗する可能性の高いことを行うという事はなんとなく理解出来たので、不安を抱くのも当然と言えば当然だった。

「分かっております。しかし、我々も同じ土俵に立たなければ勝機は有りません」

レベルはキツパリとそう言ったが、実際、その言葉は正しい。

何故ならば、地上戦ならばMSの力が制限される関係上、ジオンのMSの優位は連邦の物量で強引に押せるかもしれないが、宇宙では流石にそうはいかないので、MSを開発しない限り、連邦は負けないことは出来ても勝つことは出来ないのだ。

そして、そんなレベルの表情を見た大統領は遂に根負けしたのか、許可の言葉を口にした。

「……良いだろう。そこまで言うならばやってみたまえ」

「ありがとうございます」

「それで、そのV作戦というのは何処で行う予定なのだ？ジャブローここか？」

宇宙を全てジオンに抑えられている以上、宇宙でMS計画を行うという選択肢は自殺行為に等しい。

となれば、やるのは必然的に地上となるのだが、一番安全に開発が出来るのは間違いなくこのジャブローだろう。

そう推測しての大統領の発言だったが、次にレビルから返ってきたのは思わず耳を疑ってしまふような内容だった。

「いえ、サイド7です」

「……もう一度、言ってくれないか？将軍」

「ですから、サイド7です。V作戦は宇宙で行っています」

「な、何を言っているのだ！君は正気か!？」

とてもではないが正気とは思えない内容に、大統領は思わず取り乱してしまふ。

当然だ。

宇宙はもはやジオンの庭であり、おまけにサイド7とさえも、近くにルナツーが有るが、これも開戦初頭にジオンの手に落ちている。

そんなところでMS開発を行うなど、『計画を潰してください』と自分から言うようなものだった。

「ええ、正気です。向こうもわざわざ敵地の近くで今後の戦局に重要な兵器を開発しているとは思わないでしょう。今回はその裏を掻きました」

「・・・なるほど。一応、納得はしたが、本当に大丈夫か？サイド7は思いつきりジオンの領域内だぞ？」

「元々何処でやったとしてもリスクのある作戦です。ならば、いつそのこと敵の裏を掻いた方が良いと愚考しました」

「ふむ。・・・しかし、よくサイド7政府が納得したな」

大統領はどうやってサイド7政府を言いくるめたのか非常に気になった。

なにしろ、近くにはルナツーというジオンの基地があり、おまけに建設中であつたこともあり、ジオンからすれば吹けば飛ぶほどの存在ではない。

しかも、この段階で連邦に与しているとなれば、幾らスペースノイドの独立を吟い、開戦時に連邦側に付いたサイドに対しても首脳陣拘束だけで許したジオンと言えど、流石に容赦はしないだろう。

いや、下手をすればスペースノイドへの裏切り行為として、ジオンどころか、サイド共栄圏全体でサイド7への宣戦布告が行われる可能性すらある。

常識的に考えれば、そんなあまりにもリスクが有りすぎる話にサイド7政府が乗ってくるとは到底思えない。

「ええ、向こうも簡単には乗ってくれませんでした。ですが、ある条件を提示したら乗ってくれましたよ」

「その条件とは？」

「サイド7の高官の一部をジャブローに連れていくこと。まあ、ありたいに言えば避難ですかな」

「なるほど、サイド7の住民たちを見捨てた上にリスクを背負わせ、自分達は安全なところに逃げたということか」

「はい、全くもってその通りです」

レベルは内心で苦虫を噛み潰すような感情を抱きながらそう言う。

まあ、当然だろう。

政府高官ともあろうものが、守るべき民間人を見捨てただけに留まらず、自分達だけが逃げるために残ったサイド7の住民の命を危険に晒すという愚劣な行為を行っているのだ。

軍人としての使命感に燃えるレベルからすれば、色々と思うところはある。

（まあ、それを非難する資格は私には無いがな）

だが、レベルにその高官達の行為を非難する資格はない。なにしろ、この提案をしたのはレベル自身なのだから。

（勝つためとはいえ、民間人を直接危険に晒すような事までしているのだ。V作戦、必ず成功させねばならんな）

レベルは改めてそう決意した。

U C 0 0 7 9 年 4 月 3 日 アフリカの惨劇

◇宇宙世紀<sup>u.c.</sup>0079年 4月3日 グラナダ

「V作戦の実行場所は未だ分からず、か」

フォン・ブラウンと並ぶ月面の都市グラナダ。

そこにはジオンの戦略諜報軍の本拠地があり、その長であるキシリア・ザビ少将もまたそこに滞在していた。

そんな彼女が気にしていることは幾つかある。

その1つがV作戦の実行場所だった。

「申し訳ありません。なにぶん、数ヶ月前まであまり地球に諜報拠点を設けておりませんでしたので」

キシリアの副官であるマ・クベ中佐は謝罪の言葉を口にする。

そう、ジオンの諜報網は基本的に宇宙を中心に展開されており、地球に敷かれるのはもう少し後となる予定だったが、想定より半年も早く戦争が始まってしまい、諜報網を敷くのが間に合わなかった上に、戦争によつて規制が厳しくなっていたことで地球に諜報網を築く計画は半ば頓挫していた。

その為、V作戦に関しても大した情報は集まっておらず、原作同様にV作戦というMS開発計画が存在するということは分かっているが、その場所については特定できていなかったのだ。

「貴様のせいではないさ。連邦の隠蔽技術が優れていたということだろう」

キシリアはそう言って励ます。

原作でもそうだったが、連邦はジャブローという超巨大要塞を隠匿できるほどの技術を持っている。

その隠蔽技術には見るべき点があり、そんな連邦に秘匿された計画の場所が簡単に特定できないのも、ある意味では仕方のないことであるとキシリアは思っていた。

「まあいい。連邦のMS開発計画については引き続き調査を行え」

「はっ」

「それと話は変わるが、『例の箱』の交渉はどうだ？」

キシリアは話題を変え、現在、ビスト財団との間で行われている例の箱——ラプラスの箱譲渡の交渉について尋ねる。

開戦以降、大して期待を抱いていなかったラプラスの箱に関しての交渉はキシリアに一任されていた。

そして、その効果を疑っていたギレンとは違い、キシリアはそのラプラスの箱に期待を抱いており、未だにビスト財団とラプラスの箱譲渡についての交渉をマ・クベを介して行わせていたのだ。

「あまり良い返事は・・・場合によっては特殊部隊を使って奪取することも考えた方がよろしいかと」

「それは最後の手段だ。まだ追い詰められているわけでもないし、向こうが自棄になって箱を砕いたりしたら目も当てられない。・・・それに焦った挙げ句、何かの間違いでシヤアに箱が渡ることが有ってはならないしな」

そう、キシリアが一番憂慮していたこと。

それはシヤア・アズナブルことキャスバル・レム・ダイクンにラプラスの箱が渡ってしまうことだった。

既存の人間で箱を一番上手く使えるのは、やはりジオン・ズム・ダイクンの遺児であるキャスバル、もしくはジャブローに居るであろう

アルテイシアなのは間違いなく、彼らが罷り間違つてこれを使ってしまえばスペースノイドの団結は強固となるだろうが、同時にジオンが内紛状態に陥ってしまう事は確実だ。

そうなるくらいなら、いつそのこと箱など砕かれてしまった方が良いとさえキシリアは思っている。

しかし、それでもキシリアがラプラスの箱入手に拘っていたのは、タイミングを計って使いさえすれば絶大な効果を発揮するものだと考えていたからだった。

(まあ、とは言っても使いどころは考えなければならぬがな)

ラプラスの箱は使いどころが非常に難しい。

例えば、この戦争でジオンが連邦に勝ったとしよう。

その場合、戦後の地球圏の主導権はジオンが握るわけだが、元々の人口という分母が違うジオンが地球圏を掌握するのは不可能に近い。

その為、正直言つて連邦が無条件降伏を行つてくるのは、ジオンにとつても困つたことになってしまうので、出来ることならば講和という形で勝利するのがジオンにとつても一番望ましい展開だ。

まあ、その内容がどのようなものにするのかは今後の課題となるだろうが、どう転ぶにせよ戦後の地球圏の安定を図るためには連邦は存続は必要不可欠だった。

しかし、そこでラプラスの箱を公開してしまった場合、間違いなくスペースノイド達は激昂し講和は破綻する。

いや、これだけならまだ良い方であり、最悪、ガンダムSEEDのコーディネーターとナチュラルのような絶滅戦争が、この世界ではアースノイドとスペースノイドという形で勃発しかねない。

そんなことはキシリアも望んでいないので、ジオンが連邦に勝つた場合は、そのとんでもない火種となるラプラスの箱を完全に消すために、どんな強引な手段を用いても箱は徹底的に粉微塵にして破壊するつもりだった。

逆に原作のようにジオンが負けてきた場合は、頃合いを見計らつて

ビスト財団からどうにか手に入れて公開するつもりだ。

そうすれば、仮にジオンが負けたとしても、その残党を匿ってくれるスペースノイドなど幾らでも存在するようになる。

「ともかくそういうことだ。今のところは焦らず交渉を続けろ」

「はっ、分かりました。引き続き交渉いたします。・・・ところで、話題が変わるのですが、1つキシリア様にお耳に入れておきたいことがあります」

「ん？なんだ？」

「アフリカ戦線のことです」

「アフリカ戦線？」

思っても見なかった地名に彼女は首を傾げる。

なにしろ、アフリカ戦線はジオンが反ジオン感情が強いサイドを弱体化させるために展開させた戦線だ。

ジオンはほとんどノータッチであり、重要度も低いために仮にその戦線が崩壊したとしても、ジオンにとっては痛くも痒くもない。

そして、その事はマ・クベもよく知っている筈なので、わざわざそんな場所の報告を耳に入れようとしてくるのか、非常に気になった。

「アフリカ戦線がどうした？もう崩壊したのか？」

「いえ、そうではありません。いや、いつそのことそちらの報告の方がまだまじだったかもしれませんな」

「と言つとっ。」



「実は――」

この時、マ・クベが告げてきた報告はキシリアが思わず目を大きく見開いてしまうほどのとんでもないものだった。

◇中央アフリカ

「・・・ひでえ」

連邦兵はとある村の惨状を見ながらそう呟く。

そして、そのような言葉を吐くのも無理はなかった。

彼らが見ていたのは、義勇軍によるこの村の住人へのれっきとした虐殺の跡だったのだから。

ここは中央アフリカ。

スペースノイドが展開した第4の重力戦線の舞台だ。

だが、この戦線は基本的にジオンはノータッチであり、サイド共栄圏、その中でも取り分けサイド1、2、4の義勇兵で構成された義勇軍を中心に展開されている。

しかし、この義勇兵というのが曲者だった。

そもそも中央アフリカに降下した義勇軍はジオン軍とは違って軍隊教育を受けたものは少なく、大半が武器を持ってそれを使えるだけの訓練を受けた兵士で構成されている。

そして、軍隊教育を受けていないということは、軍人としての自衛心などの理性的な感情の統制はほぼ期待出来ないという事（もつとも、中には軍隊教育を受けた者でもそれが期待できないものも居るが）でもある。

そこに戦前のアースノイドへの劣等感も合わさって、各地で暴行や虐殺などが起こっており、この村もその1つとなっていた。

「くそっ！宇宙人共め!!」

アースノイドである連邦兵の1人がそのような悪態をつく。

だが、それも無理はないだろう。

ここは地球であり、彼らの故郷。

そんな故郷がこのような残虐な形で荒らされているのだ。

怒らない筈がない。

「やつら、自分達は被害者面しときながらやってることはこれかよ。ふざけんな！」

「ああ、まったくだ。これなら、連邦政府がサイド3の鎮圧を宣言した理由がわかるってもんだぜ」

アースノイド出身の連邦兵達はそのような会話を交わし合う。

その一方で、スペースノイド出身の連邦兵は肩身の狭い思いをしていた。

なにしろ、自分達の同胞がこのような蛮行をしているのだ。

こんな状況で何か言ったとしても、ろくなことにならないのは目に見えていたし、そもそもこの世界ではスペースノイドとアースノイドの連邦兵の仲は良くない。

原作ではジオンが同胞のスペースノイドに対しても大虐殺を行ったことから、一年戦争はスペースノイド対アースノイドではなく、ジオン対連邦という形になり、曲がりなりにも連邦のアースノイドとスペースノイドは協調して戦っていた。

だが、この世界ではジオンは別に各サイドに虐殺など行っていないかつたし、戦前の外交やサイド共栄圏の発足などの積極的な協調政策によつて、スペースノイド対アースノイドの戦いに持ち込むことに成功していた為、故郷を敵に回した形となった連邦のスペースノイドの士気は原作よりも低くなっていたのだ。

当然そうになると、アースノイドの連邦兵もスペースノイドの連邦兵に対して疑心を抱くために、協調性は下がる。

しかも、一部ではアースノイドの兵士がスペースノイドの兵士に暴行を行うといった事態も発生しており、それが更に協調性を下げるといふ負のスパイラルに陥っていた。

そして、そんな時に起きたのがこの虐殺劇なのだ。

これからアースノイドとスペースノイドの溝はどんどんと深まっていくであろうことは、子供でも想像が容易な未来だった。

——こうして、アースノイドとスペースノイドの溝は徐々に蓄積されていき、その関係に暗い影を落としていく。

そして、後にこの溝がとんでもない事態を引き起こすことになることを彼らはまだ知らない。

## UCC0079年 4月5日 ハワイ攻略戦

◇宇宙世紀<sup>u.c.</sup>0079年 4月5日 ハワイ 連邦軍 沿岸監視所

「ふう。腹へったなあ」

ハワイの沿岸監視所に勤務する兵士は言いながら、腹の音を鳴らす。

ここハワイは北米より約3800キロ程離れた位置に存在する島々で、その位置上、連邦軍による西海岸上陸作戦が行われる可能性のある場所ということで、戦略海洋軍による通商破壊攻撃が常に行われている。

更に制宙権もジオンに握られている為に補給線は空路しかなく、おまけに通商破壊戦によって出ていくこともままならない住民にも食料を配らなくてはならない関係上、この島に居る連邦軍の食事は1日2食に制限されていた。

そして、『腹が減っては戦はできぬ』と言われるように、腹が減った状態でまともに勤務などが出来るわけもなく、この兵士を含めたハワイの連邦兵は徐々にだが士気を下げしており、彼らは戦わずして既に半ば無力化されたような状態となっていたのだ。

「本当にここにジオンが来るのか？」

連邦兵はそのような疑問を抱く。

ジオンが北米に降下してから既に2ヶ月が経過しているが、その間にこのハワイに本格的な侵攻を行ってきたことは一度たりともない。そうである以上、ここにジオンが来ることはないのではないか？

彼はそのようなことを考える。

が、普通に考えれば北米に近く尚且つ太平洋での戦略海洋軍の展開に丁度良い位置に存在するこのハワイを狙わない理由はない。

しかし、腹が空いたことで頭の回転が鈍った思考ではそのようなこ

とを考える余裕すら失われており、彼の心の中ではこのような「意味のない」警戒行動への不満が徐々に吹き出し始めていた。

「たくつ。やってられねえぜ」

連邦兵はそのような悪態をつく。

だが、その直後――

「……ん？」

連邦兵は沖合いから浜辺に向かって、徐々に浮き上がってくる巨大な物体を発見する。

「なんだ？ あれは」

連邦兵は首を傾げるが、もしこの時、彼の頭が働いていたならば、即座にすぐ近くにある警報装置を鳴らしていたことだろう。

何故ならば、その徐々に姿を露にした巨大な物体は紛れもない人工物――もつと言えばジオン軍の水陸両用モビルスーツ・アッグ（ただし、原作とは違う）だったのだから。

そして、アッグは浜辺にその巨体を現すと、ようやく我に返ったのか、慌てて警報装置を鳴らそうとする連邦兵に、腕に装着されていた3連装バルカン砲の銃口を向けて発砲した。

◇ハワイ沖 海中 水陸両用強襲揚陸艦『ビスマルク』

「上手くいったな」

ビスマルクの艦長は潜望鏡で複数のアツグが暴れまわる光景を目にしながらニヤリと笑う。

そう、現在進行形でハワイを襲撃しているアツグを運んだのはこの艦であり、尚且つ彼らは全ての戦力を吐き出したわけではない。

格納庫にはまだハワイを占領する予定の陸上部隊が待機しており、頃合いを見計らって上陸させる予定だった。

（しかし、この艦を押し付けられた時はいったいどうなることかと思っただが・・・案外使えるもんだな）

当初、この艦の艦長になると知らされた時、自分は貧乏くじを引かされたと感じた。

何故なら、艦の形状からしてどう見ても海中向けの艦体ではなかったため、水中用ソナーを使えば例え旧型だったとしても容易に探知さ

れてしまうのは目に見えていたからだ。

それは『防御力Ⅱ静粛性』の潜水艦にとっては、あまりにも致命的な欠点だった。

しかし、それもその筈だ。

そもそもこのビスマルクは潜水艦として設計されてはいなかったのだから。

(まさか、宇宙船として設計された強襲揚陸艦を改造して潜水揚陸艦として編入するとはな。戦略海洋軍うちの上層部は頭がイカれているんじゃないのか?)

元々このビスマルクはMSを運用し、連邦と戦えばいずれ出てくるであろうホワイトベース対策(一応、建前上は敵地に単独で殴り込める軍艦として建造されている)として建造された強襲揚陸艦だ。

当然、ホワイトベースに対抗するためにその構造は宇宙戦艦の仕様となっており、間違っても海中で運用するような代物ではなかった。しかし、連邦がジオンの戦争準備が完全に整う半年前に宣戦布告をしてきたことで状況が変わってしまう。

開戦後、宇宙攻撃軍は量産のしやすい従来の戦艦、巡洋艦、MS母艦などに絞り、量産を進めている。

そして、色々な最新技術や高い素材を使って造られたビスマルクはコストが非常に高く、一時は廃艦も囁かれていたのだが、そんな状況のビスマルクに目を付けたのが意外なことに戦略海洋軍だった。

彼らはこの艦を改造して、島などを確保するためのMSや歩兵を搭載した水中揚陸艦として運用することを考えたのだ。

そして、些か無理のあるこの計画は、どういうわけかギレンによって承認され、こうして戦略海洋軍で運用されていた。

(いったいどうやって説得したんだ?)

艦長はそれを疑問に思ったが、なんだか突っ込んではいけない気が

した為、嫌な予感がしたのと作戦中であることもあって、それ以上の疑問の追求を止めることにした。

そして、潜望鏡から目を離し、後ろに居た副長に向き直ると、こう指示する。

「よし。副長、どうやら奇襲は成功しているようだ。このまま敵の混乱に乗じて揚陸部隊を上陸させる」

「了解しました」

艦長の言葉に副長は艦内電話の受話器を取ると、格納庫に向けてその命令を通達した。

◇北米 キヤリフォルニア・ベース

「そうか。ハワイの攻略に成功したか」

副官であるダロタ中尉が持ってきた報告に、ガルマ・ザビ大佐は少しだけ顔を綻ばせる。

この時点でハワイを確保できた点は大きい。



戦略海洋軍の拠点に出来るということもあるが、なにより、このキヤリフォルニア・ベースが西側から攻められる危険性は皆無となったのだから。

「これで西からの脅威は無くなったか。・・・しかし、問題は我々が今後、どのような方針を取るかだな」

「？ 東海岸を奪還されるのでは無かったですか？」

「そのプランも確かにある。が、それだけではないよ」

ガルマはそう言つて、ダロタ中尉に自分の考えを披露する。

実はこの時、ガルマは3つの攻勢プランを考えていた。

1つ目は従来の作戦通り、東海岸を奪還する東進案。

2つ目は旧カナダを通り、アラスカへと至る北進案。

そして、3つ目が旧メキシコを通り中南米へと進行する南進案だ。

しかし、このうち真つ先に除外したのは2つ目の北進案だった。

理由は一番メリットがないからだ。

確かにアラスカには資源が有るが、それは他でも代用できるものであるし、ガンダムSEEDのように敵の本部が置かれているという訳でもない。

むしろ、南米のジャブローから一番遠ざかるということ、やはりその行動が無駄となる可能性が高く、とてもではないがそんな無駄な行動を取っている余裕はジオンにはない。

となると、1つ目か3つ目となるわけだが、これが悩ましいところだ。

前者は成功すれば、北米の政治の中心であるニューヤークを確保できるため、北米の主導権を再びジオンの手中に治められるというメリットがあり、後者はジャブローに更なる圧力を掛けられるというメリットがある。

まあ、どちらにしても連邦軍が数十万単位で張り付いているので、

それなりの準備は必要であったが。

「・・・なるほど」

「まあ、第4の案として太平洋を南進してオセアニア方面軍との合流を目指すという手もあるんだが、あまりメリットがないからね」

現状、兵力は足りているし、補給もちやんと宇宙から届いている。

確かにオセアニア方面軍との合流が成功すれば、万が一の時に宇宙を介さずに援軍を送って貰えるかもしれないが、連邦もそれを許すほどバカではないだろうし、別に陸続きで支援できるという訳でもないので、妨害の手段など幾らでもあるのだ。

それを考えれば、オセアニア方面軍と合流できるメリットは小さくなってしまう。

「そうでしたか。しかし、このまま我々がこのキャリフォルニア・ベースの防備を固めて籠城するという手もあるのでは?」

「魅力的な提案だが、それは不味い」

「何故でしょうか?」

「近々、欧州方面軍が西欧侵攻作戦を行う予定でな。その時に我々も同時に攻勢を開始しろと総帥府から命令されているんだ。まあ、伝えられた作戦の場所は東海岸だけど、侵攻場所は途中で変更しても構わないらしいから、何処を攻めるかはこちらに任されているんだが、攻勢そのものは確実にやらなくてはならない」

「そうですか」

「ああ。ちなみにオセアニア方面軍はしばらく本格的な攻勢はやらな

いらしい。まったく、休みが取れて羨ましいことだよ」

ガルマはそう言いながら、机の上に置かれていたコーヒーを口に含んだ。

U C 0 0 7 9 年 4 月 8 日 交流

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 4月8日 オーストラリア シドニー近郊

「へえ。じゃあ、ヨナの両親はその会社のかなり偉い人なんだ」

のび太はそう言いながら、ヨナの両親のことを褒め称える。

ニューカレドニア島攻略後、オーストラリアへと戻ってきたのび太はリタと再会し、以前言った通り彼女の友達を紹介された。

無論、最初は年上ゆえに警戒されたが、今ではそこそ仲良くやれており、特にヨナとは男同士ということもあって気軽に話せている。

「はい」

「良いなあ。僕のパパもそこそ偉い立場に居るんだけど、いつも家計はひいひい言っていたから」

そう言いながら、のび太はもう3ヶ月近く会っていない両親の顔を思い出す。

だが、どういうわけか寂しいという感情は特にない。

それが自分が戦争という狂気に首を突っ込んでしまった故に身に付けた薄情さなのか、それとも急速に大人になったからなのか、のび太自身にも分からなかった。

「そうなんですか？」

「うん。まあ、あんまり自分の家の恥を晒すのもあれなんだけどね」

「あはは。あの・・・ところで、少し聞きたいことがあるんですが・・・」

「なに？」

「何か悩みごとがあるんですか？」

「え？」

のび太はその言葉に驚き、少しだけ目を大きく見開く。

「いえ、その。なんとなく、会った時から暗い感じがあるというか、そんな感じがしたので」

ヨナは遠慮がちにそう言う。

このヨナの言い分は聞きようによつては彼がニュータイプであるかのように思われるが、実際は彼はニュータイプではない。

いや、正確には“本物のニュータイプではない”と言うべきだろうか？

原作では彼と少し離れたところでリタと遊んでいるミシエルは、リタのニュータイプ能力によるコロニー落としの予言を脳裏に刻み込んでいる。

それはニュータイプによる共鳴と言われる現象であるのは、原作でも判明しているのだが、実のところ詳しいことは原作でもよく分かっていない。

しかし、相手のニュータイプ能力を享受する能力を持っていることは確かであり、それによりヨナはニュータイプであるのび太が何か悩んでいるということを察知していたのだ。

「・・・」

「ああ、いや、すいません。失礼な質問でしたか？」

「・・・そんなことはないよ。まあ、悩みと言うよりはどちらかと言う

と戸惑い、かな？」

「戸惑い、ですか？」

「うん。少し前に人が目の前で死ぬ光景に遭遇しちゃってね。人ってあんなにあっさり死んじゃうんだなって」

のび太はそう言って、先月下旬にニューカレドニア島で死んだ伍長の顔を脳裏に思い浮かべる。

今まで共に戦った人間の死に直面することはあった。

人魚族と海魚族の戦いでの人魚族の兵士の死がそうであったし、デマオンとの戦いで的美夜子の母の死もそれに数えられる。

しかし、実のところ、その2つは味方とはいえ、のび太にとってあまり関わり合いが無かった。

味方とはいえ、所詮は赤の他人に近い立場だったのだから。

だが、あの伍長は違う。

ほんの短い間ではあったが、語り合った仲であるし、気休めであったかもしれないが食事を奢って貰う約束までしてくれた多少なりとも縁のある人物だったのだ。

しかし、そんな男はあのニューカレドニアの地であっさりと死んでしまい、のび太はその事に大きくショックを受けていた。

「・・・そうだったんですか。それは災難でしたね」

ヨナは少し罰が悪そうにしていた。

実はヨナもミシエルものび太が軍人であることは知らない。

軍服を着ていない上に、事情をある程度知っているリタも何も言わなかったし、のび太も話して威圧させることはないと敢えて喋らなかつたからだ。

なので、のび太やその死んだ人物が戦争に巻き込まれたのではなく、戦争をやっている当事者だということは想像もしていない。

もつとも、一見、普通の少年な人物を兵士として見るのも無理のある話なのだが。

まあ、そういうわけでヨナはのび太やその死んだ人物を戦争か、何らかの事件に巻き込まれた人物だと見ており、配慮の欠けた言動をしてしまったことに罪悪感を感じていた。

無論、その勘違いにはのび太も気づいていたが、流石に自分より年下の相手に本当のことを言うわけにもいかないため、適当にお茶を濁すような発言をする。

「ああ、災難だったよ。．．．ところで、話は変わるんだけど、君は生まれ変わりって信じるかい？」

「えっ？」

「いや、前話した時にリタが君に言ったと聞いてね。あまり良い反応をしてくれなかったと聞いて、本当のところはどうかかなと聞いてみたくて」

「そ、そうなんですか。でも、実のところ、俺もそれについてはよく分からなくて。死んだ後の事を考えても仕方ないし」

それは当然と言えば当然の話だった。

そもそもヨナは今年でまだ8歳。

とてもではないが、死んだ後の事を考える年齢ではない。

「だよね。まあ、それも僕も同じなんだけどさ。人の死を前にすると考えてしまうんだよ」

「何をですか？」

「死んだあの人は生まれ変わって幸せに暮らしているのかなって」

そう言つてのび太はリタの方に視線を戻す。

だが、その瞳は若干だが光を無くしており、それを見たヨナはのび太に対して、ほんの僅かではあるが恐怖を感じざるを得なくなつていた。

◇オーストラリア ダーウィン基地

のび太がヨナと会話を行つていた頃、オーストラリア大陸北西部に存在するダーウィン基地ではメイ・カーウィン特務少尉が空を見上げていた。

「ノビタ、大丈夫かな？」

メイは心配そうな顔をしていた。

彼女は自分の整備したのび太の量産型ガンダムについては絶対の自身を持っている。

が、のび太はまだ10歳の少年。

加えて、確かに射撃の腕は天才的だが、操縦はそれほど上手くはなく、良くて中の上といった感じだ。



幾ら機体の性能が良くても、それでは生きてられない可能性も存在する。

実際のところ、ニューカレドニア島での戦いによってのび太は持ち前の射撃技術を生かして大活躍をしていた（ついでに「灰色の死神」という異名も貰った）し、操縦技術もベテラン一步手前というところまで上がっており、メイの心配はほとんど杞憂となっているのだが、ニューカレドニアの戦いに参加していない彼女はその事を知らない。

「どうしたの？メイ」

そんな心配そうな顔をしたメイに声を掛けてきた女性。

彼女の名はユウキ・ナカサト。

ランバ・ラル隊に編入されたシロー・アマダと同じサイド2の出身の義勇兵だ。

ただし、シロー・アマダとは違い、士官教育を受けていたわけではないので、階級は伍長であったが。

彼女は原作ではサイド3に旅行で訪れていたところに戦争が始まってしまい、更に故郷が無くなってしまい、生きるために故郷を破壊したジオン軍に志願。

その後は外人部隊に編入され、最終的にメイを庇って死亡するという悲劇的な結末を辿った。

しかし、この世界では事情が若干違う。

サイド3に旅行に来ていたところで戦争が始まってしまったというところまでは一緒だが、別に故郷が無くなってしまったわけではなく、開戦から暫くして彼女はサイド2に帰った。

だが、両親が連邦派の人間であったことが災いしてしまい、彼女は非常に肩身の狭い思いをしてしまい、それから逃げるために義勇軍に志願して、このオーストラリアへとやって来たのだ。

そして、どういう因果か、原作の外人部隊の同僚だった人物たちと一緒に、彼女はこの地で軍務に就いていた。

ちなみにメイとは原作通り友人関係を築いている。

「ユウキ・・・ううん、なんでもないよ」

「そう？ずいぶん落ち込んでいたみたいだけど・・・」

「本当に何でもないの。ただ、ちよつと心配だなあって思つて」

「心配つて？」

「私がオーストラリア大陸に降下した時から組んでいた男の子。まだ幼いから、ちゃんとやれるかなつて」

「幼いつて・・・まさかメイより年下とか？」

「うん。確か今年で11つて言つてたかな」

「11・・・」

その年齢の低さに流石にユウキは絶句する。

ちなみにユウキは今年で20、メイは今年で14だ。

通常の戦争では、ユウキはともかくとして、メイの年齢は十分に少年兵に数えられる。

しかし、それより低い年齢となる少年がこの戦争に参加しているとすると、他人事とはいえ、ついこの前までは大学生だったユウキも流石に眉をしかめざるを得ない。

「・・・今の戦況はそんな子を戦争に行かせなければ苦しいくらいになつてるの？」

「ううん。そんなことはないよ。だけど、私の居たところでは15歳に達していなくとも志願すれば戦争に出られるつて規則があるの」

「へ、へえ。じゃあ、その子もかつこいいヒーローみたいな活躍をしてみたいっていう気持ちでここに来たの？でも、それだったらその子には悪いけど、自業自得じゃ」

「そんなんじゃないよ!!」

メイはユウキの言葉に思わず叫びながら反論する。

そう、のび太は決してヒーロー願望の強い人間ではない。

まあ、大冒険の際にそういうことを行ったケースもないではない（新宇宙開拓史、宇宙英雄記など）のだが、基本的に戦争にそんな軽率な考えで自分から首を突っ込むほど無謀な人間ではない。

現にこの世界に来てこの戦争に参加する際もかなり悩んでいた。

だが、結局、メイの言葉が後押ししてしまう形となったので、その事をメイは物凄く気にしていたのだ。

そして、そのメイの気にしている点を幾ら友人とはいえ、間違った解釈で指摘されれば怒るのも当然と言えた。

「あの子はそんな子じゃない!!何も知らないくせに勝手なこと言わないで!!」

「お、落ち着いて。メイ」

ユウキは先程の言葉が失言だったことに気づき、慌ててメイを宥めようとする。

周りを見れば、今のメイの叫びで何人かの近くに居た人物が何事かと2人の様子を見ていた。

一通り叫んだメイは我に返ると、ユウキに叫んでしまったことへの謝罪を行う。

「あつ。ごめん」

「う、うん、別に大丈夫だよ。それよりごめんね。その子の事を悪く言っちゃって」

「・・・うん、私も叫んじゃってごめん。でも、本当にあの子は良い子だから。今後はあんなこと言わないでね」

「分かった。気を付けるよ」

「うん。じゃあ、私は作業に戻るよ。仕上げなきやいけないこともまだ有るし」

「そうなんだ。じゃあ、また後で」

「うん。じゃあね」

メイはそう言いながら、作業を再開するためか、格納庫の方へと戻っていく。

そして、それを見送ったユウキは思わず大きな息を吐いた。

「・・・ふう。驚いたな。まさかメイちゃんがあそこまで怒る子だったなんて」

ユウキは驚いていた。

何故なら、彼女の中でのメイの印象は笑顔で朗らかな少女であり、基本的に怒る事はなく、また童顔なのも合間合間で怒ったとしてもあまり怖くはないと思っていたのだ。

だが、先程の形相を見るに、その印象は速やかに撤回しなければならぬかもしれない。

（いや、違うか。もしかしたら、メイの言っていた子限定であそこまで

怒るのかもしれないね。だったら、その子の話は今後しない方が良くも)

ユウキはそう思いながらも、おとなしいメイにあそこまで言わせた少年がどのような子供なのか、一目見てみたくなっていた。

UCC0079年 4月12日 東海岸奪還戦

◇宇宙世紀0079年 4月12日 キャリフォルニア・ベース司令部

「ふむ、順調だな」

ガルマ・ザビ大佐はそう言いながら、戦況の様子が映し出されたスクリーンを見つめる。

北米攻勢においてガルマが選んだのは東海岸の奪還だった。

ジャブローへの圧力も捨てがたがったのだが、やはり北米の政治の主導権を再び握る方に気持ちが傾いたのだ。

更に東海岸を取ることで北米を完全に分断することが出来るといった利点も、ガルマがこちらの侵攻を選んだ理由の1つだった。

しかし、ここで問題になるのは投入する兵力だ。

ハワイからのこちらへの攻勢は無くなったが未だに北米方面のジョン軍は、北（旧カナダ）、南（旧メキシコ）、東（旧アメリカ東海岸）と3つの戦線を抱えており、あまり多くの兵力を東海岸に回すと、残った北と南から逆侵攻されかねない状況となっていた。

その為、投入できる兵力は30万程（この時、北米方面軍全兵力は50万程になっていた）となっているが、対する連邦の東海岸の戦力は50万人。

幾らモビルスーツの優位があるとは言えど油断できない兵力数であり、更に噂ではモビルスーツを確実に撃破するための大型口径砲も各所に据えられているという。

となると、こちらが選べる手はただ1つ。

兵力を一点に集中させてそこを突破口とすることだ。

50万の兵力と言っても、それは東海岸全体の兵力であり、1つの区域に絞れば精々10万人程の兵力にすぎない。

そして、ガルマが選んだ突破口は東海岸中央部。

ここを突破して大西洋に出れば、敵は南北で分断されることにな

る。

これはあまり追い詰めてしまうと、死兵となって逆に猛烈な抵抗をしてくる可能性も有るので、敢えて逃げ道を作るとというのが狙いだっ  
た。

もつとも、それは逆に言えば向こうがいざとなれば南北に撤退でき  
るということでもあるのだが、そうなるとジオンの東海岸占領という  
戦略的目標は達成できるので、ジオンの戦略的な勝利が決まる。

(そうならば、旧アメリカ地域は完全にジオンのものになる。そして、  
この作戦が終われば旧メキシコに向けて南下という筋書きだが・・・  
こちらはそう簡単にはいかないだろうな)

なにしろ、北米と南米は陸続きだ。

いや、一応、パナマ運河という境目が有るので、厳密には陸続きと  
いうわけではないのだが、誤差の範囲内でしかなく、向こうが北米か  
らの圧力をかわすためにジャブローから旧メキシコに続々と兵力を  
積み上げるのは想像に難くない。

(加えて、旧メキシコに南下したとしても、パナマが限界でそれ以上の  
南下は危険だからなあ)

そう、南米のジャブローは出入り口が隠蔽された巨大な要塞で、そ  
の中には数百万人の兵士が居ると言われている。

そんな数の兵力が地下に籠っている場所の地上を要塞の入り口を  
探しながら動き回るなど正気の沙汰ではなく、現実的に考えれば今の  
ところ北米方面軍の南下限界地点はパナマだろう。

まあ、逆に言えば入り口さえ見つかれば援軍を送って貫つての攻略  
が可能かもしれないが。

(まあ、どちらにしてもこの作戦が終わった後のことだ)

ガルマはそう思いながら、スクリーンへと意識を戻す。  
そして、その直後、部下から遂に待望の報告が入る。

「ガルマ様！先鋒の部隊が大西洋に到達しました!!」

「よし。では、作戦は第2段階へと移行する。軌道上に待機している艦隊にこう伝えろ。『雨を降らせろ』、とな」

ガルマは作戦を第2段階へと移すべく、次の指示を部下へと出した。

◇ニューヤーク 連邦軍司令部

「分断されたか。不味い状況になったな」

ヨーゼフ・シユインベルク中将は戦力が二分されてしまったことに



少しばかり焦る。

かつてヨーロッパからどうにか逃げ帰ったヨーゼフは敗戦の責任を取らされて閑職に回されることも覚悟していた。

ああ宣言したは良いが、現実にはかなり厳しいこともよく理解していたからだ。

しかし、状況は彼に味方した。

帰還した彼を連邦軍の最高司令官であるレビル將軍が重宝したからだ。

そして、彼はコリニー中將が奪還に成功したこの旧アメリカ東海岸の防衛部隊の司令官に着任したわけだったが、現在の状況はかなりよろしくない。

何故なら、分断されたことで兵力は二分しつつあったし、向こうの進撃路を絶って逆包囲するほどの戦力も彼の手元にはないからだ。

「くそっ！またモビルスーツか!!我が軍にもあれがあれば・・・」

ヨーゼフは自軍にモビルスーツが無い現状に大きく憤っていた。

なにしろ、あの兵器が現在のジオン有利な戦況を作り出しているのは疑いようのない事実であり、味方にもそれがあればこの戦況を大きく覆せる可能性が高いのだから。

ちなみにV作戦の事はヨーゼフには知らされていない。

あれは開発されている場所が場所なので、極一部の人間以外には厳重に秘匿されている情報だったからだ。

(ここは撤退するしかないか?いや、しかし・・・)

一度分断された以上、その分断された線を速やかに繋げない限り各個撃破されるのは確実だ。

だが、今のヨーゼフにはその分断された線を無理矢理繋げるほどの戦力は手元がない。

となると、今のうちに撤退するのが得策なのだが、それではヨーゼ

フの今後の軍隊生活が大きく危うくなってしまおう。

そうなれば彼の目標であるオデッサ奪還の任務など夢のまた夢となる。

(それだけは駄目だ。なんとしてもこの場を切り抜けなければ・・・)

そう思うヨーゼフであったが、悪いことというのは続くもので、直後にオペレーターからとんでもない報告が入ってきた。

「し、司令！軌道上に存在する艦隊が砲撃してきました!!」

「な、なに!?!」

そう、彼らの軌道上に居たジオン艦隊が砲撃を行ってきたのだ。

しかも、その砲弾はメガ粒子砲ではなく、耐熱コーティングが施された実弾だった。

「ば、バカな!?!奴等、味方ごと吹き飛ばすつもりか!?!」

だが、ヨーゼフからしてみればこの行為は正気の沙汰ではなかった。

何故なら、軌道上からの砲撃ということは引力などが作用するので、大まかな精密度の砲撃しか出来ないし、重力の加速によって砲弾の威力が増加するので味方をも吹き飛ばしてしまう可能性すらあるからだ。

「ええい！迎撃しろ!!」

流石に黙って受けるわけにもいかず、ヨーゼフはオペレーターに弾丸の迎撃を指示する。

そして、その指示を受けて発射されたミサイルはミノフスキー粒子

が無いこともあつて見事に幾つかの砲弾に着弾するが、その時、奇妙なことが起こった。

「……………ん？変です。迎撃した空域からレーダーにノイズが……いや、あれ」

「どうしたあ!？」

「は、はい！それが迎撃しきれなかつた弾丸が次々と爆発しました。そして、その直後にノイズが発生しています!!」

「なにい!？」

「お、おそらくは砲弾にミノフスキー粒子を詰めていたのではないかと思われます！」

そう、砲弾の中に詰まっていたのは大量のミノフスキー粒子。

そして、このとき散布された高濃度のミノフスキー粒子は連邦軍の目と耳を一時的ではあるものの、完全に奪い取っていた。

「作戦は成功のようすな」

◇

ガルマの横に控えていたダロタ中尉はそう言ってスクリーンに移される戦況図を見ながら、作戦の勝利を確信する。

連邦軍は突如降ってきた高濃度のミノフスキー粒子に完全に統率を取ることが出来なくなり、完全に混乱していた。

しかし、一方のジオン軍は多少統率が悪くなつてはいたが、それでも完全に混乱して動けないでいる連邦軍とは比べ物にならないほどの統率を維持しており、一方的に連邦軍をボコっている。

「しかし、考えましたな。信号弾や信煙弾による行軍指示など」

「なに、皆がこの為の訓練を頑張ってくれたからできた事だよ。私がやったのはアイデアを出したことくらいだ」

ガルマはそう言いながら、コーヒーを口に含む。

そう、この高濃度のミノフスキー粒子散布下でジオンが統率を取っていた理由は信号弾や信煙弾によって行軍指示を行っていたからだった。

ちなみにこの戦法のモデルとなったのは進撃の巨人で調査兵団が行っていた長距離索敵陣形だ。

煙弾の色によって、状況を周囲の部隊に報告し、煙弾を飛ばした方角によって進む場所を決め、隣の煙弾が見えたら、更に隣の部隊にその煙弾の指示や状況が伝わるように煙弾を打ち上げる。

このような原始的な方法によって、ジオン軍はミノフスキー粒子下でも、ある程度統率を保つことに成功していた。

勿論、調査兵団のように1000人単位ではなく、その10000倍の単位で行わなくてはならないので、専門的な訓練と連携が必要であったし、本番となる今であっても指示が上手く伝わらずにはぐれてしまう部隊が出てきたり、同士討ちをしたりといった惨状（ちなみにジオンと連邦で軍服が似ているということも、この惨状を招いた1つの要因であったりする）はあったが、それでも連邦軍に比べれば大分ましな状況であったのは言うまでもない。

「ともかく、後は現場に任せよう。こうなってしまうては我々に来ることは前線の部隊の吉報を待つことくらいしかない」

ミノフスキー粒子の濃度が大分濃くなっている現状では無線はほとんど通じないので、遠く離れたキャリフォルニア・ベースからでは細かい指示などは出来ない。

その為、ガルマ達北米方面軍司令部に出来ることは前線部隊からの吉報を待つことくらいであり、ガルマはじつとその時を待つ。

——そして、ニューヤーク占領が成功したという報告が入るのは、それから3時間後の事だった。

UC0079年 4月17日 ジブラルタル炎上

◇宇宙世紀0079年 4月17日 ヨーロッパ

東海岸の奪還作戦が行われてから5日後の今日。

ユーリ・ケラーネ准将率いるヨーロッパ方面軍により、西歐侵攻作戦は開始されようとしていた。

「やはり、最初に陥落させるべきはジブラルタルか」

ユーリはヨーロッパの地図を見ながらそう考える。

現在、西ヨーロッパの連邦軍はベネルクス、マジノ、アルプスの3つに強固な要塞線を築きつつあり、その強度は例えMSをもつてしても大損害を受けることは間違いない程のものだった。

となると、イベリア半島から迂回して反対側から攻めるのが妥当なのだが、この際に邪魔になるのがジブラルタルだ。

ここには連邦海軍の強力な艦船が存在しており、イベリア半島に侵攻する際の障害となっている。

戦略海洋軍の潜水艦で襲撃しようにも、ここには対潜機雷が充満しているので、危険が大きすぎた。

「そうになると、ジブラルタルに居る連邦海軍に対する破壊工作を行いたいんだが・・・それが出来る闇夜のフェンリル隊はいま中東だしな」

闇夜のフェンリル隊はジオン軍が幾つか保有している特殊部隊の1つで、こういった破壊活動にはうってつけの部隊だ。

しかし、彼らは近々オアデッサ方面軍によって行われる中東侵攻作戦の為にアラビア半島に潜入しており、ヨーロッパには居ない。

「・・・いや、待てよ。そう言えば、先日、オセアニアからこっちに来たあの部隊が有ったな」

ユーリは先日、オセアニアから回されてきた部隊——ランバ・ラル隊の存在を思い出す。

ランバ・ラル隊。

それが青い巨星ことランバ・ラル少佐が率いているゲリラ戦の達人集団なのはジオン軍の中でも有名な話であり、ユーリも当然知っていた。

「奴等なら出来るか？ いや、でもな・・・」

ユーリはランバ・ラル隊を使うかどうか少し迷った。

彼らが特殊部隊並みにこういった破壊工作も得意としており、今回の任務にも彼らの部隊をあてるのは適切なのはユーリもよく分かっている。

しかし、問題なのは彼らがダイクン派ということだ。

今のジオンを率いているのは当然の事ながらザビ派であり、ダイクン派はその敵対派閥だ。

もつとも、ザビ派の首魁であるザビ家からすれば、そこまで頑張つて完全に排除してしまいたい勢力ではなかった。

思想的にはちよつとあれだが、優秀な人間も数多く、連邦との開戦に備えて少しでも優秀な軍人を手元に入れておきたいジオンとしてはダイクン派との融和は必要不可欠であると考えていたからだ。

——そう、開戦前までは。

（開戦時の“あれ”が無ければ、奴等ももう少しまともな扱いだっただろうに。担いだ奴の遺児があんな行動を取ってしまったちゃあな）

開戦時のあの演説により、中立だった派閥はザビ派について当然だろう。

彼らからしてみれば、確かにジオン・ズム・ダイクンは今をもってして尊敬に値する人物であるが、それ以上に連邦への敵対心が強かった（勿論、そうじゃない奴も居るが）のだから。

途中でザビ家が慌てて止めていなければ、ダイクン派は政界からの追放どころか、表をまともに歩けないような身になっていたかもしれない。

そして、ユーリの実家であるケラーネ家もザビ派なので、ダイクン派の扱いには注意しなければならなかった。

ユーリ自身は良くとも、周りの連中が煩いのだ。

しかし、このままやっても戦局が進まないことは明らかなので、ここでランバ・ラル隊を使ってみるのも1つの手かもしれないとユーリは考えていた。

彼らを使っているのがバレたらザビ派の過激派が煩く言ってくるだろうが、逆に言えばバレなければどうということはないのだ。

「このままじゃ戦況も進まねえし、西欧侵攻作戦も失敗しちまう。ここは1つやらせてみるか」

ユーリはそう言いながら、ランバ・ラル隊の指揮官であるランバ・ラル少佐に連絡を取る為に目の前に置かれていた電話の受話器を手にとった。

◇旧フランス   パリ   地球連邦   西欧方面軍司令部

「各戦線のジオン軍、後退していきます」



「よし、早急に各防衛ラインの陣地修復と兵力補充にあたれ。おそろく次はまだ来る」

部下のオペレーターへの報告に対して、西欧方面軍司令官であるカール・ガーデラー中将はそう指示する。

夜明けと同時にベネルクス、マジノ、アルプスの3つのラインに同時に攻めてきたジオン軍はその3つに築かれた連邦軍の強固な要塞に阻まれ、第一派の攻勢はものの見事に失敗することとなったが、カール中将はおそらく第二派がやって来ることを確信していた。

何故なら、現在のところ、この3つのラインで出ているジオン軍の死傷者は連邦が確認したところ、3万人程度にすぎなかったからだ。勿論、それでも多いと言えば多いのだが、欧州方面軍全体から見れば数日で補充なくらいの兵力にすぎない。

(まあ、痛い目に遭った以上、第二派は何か作戦を練ってくるんだろうが、問題はそれがなんなのかだな)

ジオンの指揮官がよっぽどの馬鹿でない限りは、一度目の攻勢が全く通用しなかったとなれば、今度は別の方法で攻めてくるだろう。

まあ、もう一回様子見として攻めてくる可能性もなくはないが、一番可能性が高いのはイベリア半島を迂回して進撃してくるルートだろう。

そして、そちらに向かわれると、連邦にとってはかなり不味い状況になる。

何故なら、先の3つのラインに兵力を集中しているせいで、イベリア半島の護りは手薄になっているからだ。

カールもその不味さを認識しているのだが、だからと言って3つのラインから兵力を割くつもりはない。

当然だ。

イベリア半島に兵力を割いて、肝心の3つのラインが抜かれたりし

たら元も子もないのだから。

しかし、イベリア半島と陸続きの場所は全て連邦が抑えているので、侵攻してくるには海を渡ってこなくてはならないが、その海にはジブラルタルの連邦海軍が展開しており、その突破は容易ではない。

(まあ、時間を掛ければ抜かれるかもしれないが、その頃にはこちらも更なる援軍が到着している筈だ。そうなれば、防備は更に固まり、奴等の西欧侵攻は失敗する)

カールはそのような算段を立てる。

実際、その算段は間違いではなかった。

幾らジオンがMSをもつていても、地球には重力という縛りがある以上、その優位性は宇宙に居る時ほど生かしている訳ではない。

となれば、数と火力さえ揃えば、ジオンの侵攻を頓挫させることは連邦にだって出来るし、それはこの西欧でさえも例外ではない。

・・・そう、短期間でその前提が引っくり返されるような「何か」が無ければ。

「——な、なに!?!それは本当か!!」

突如、オペレーターの1人が叫び出した。

そして、ここは司令部なので、当然、その声はカールの耳にも入る。

「どうした!?!」

「い、いえ、その・・・」

「はつきり答えんかあ!!」

「は、はい!ジブラルタルが・・・ジブラルタルに停泊していた艦隊が壊滅したとの報告がいま」

「なんだと!？」

その突然の凶報に、カールは目を大きく見開いた。

◇ジブラルタル周辺

「意外とザルな防備だったな」

青いカラーリングをしたジムⅡ改を駆る男——ランバ・ラル少佐はそう言つて、闇夜に照らされながら既に港湾部で沈むか、骸を曝すかしている連邦艦隊を見る。

ユーリ・ケラーネ准将から彼に与えられた命令。

それはジブラルタルの連邦艦隊に対して破壊仕事を仕掛けて、これを壊滅、あるいはしばらく機能不能な状態にさせることだった。

当初、ランバ・ラルはイベリア半島を通過して潜入しなければならぬ関係上、破壊工作までの時間は数日掛かると試算し、ユーリ准将にもその旨を報告して了承を得ていたのだが、意外にもイベリア半島の防備がザルであった事に気づき、作戦決行を早める事にしたのだ。

勿論、イベリア半島は兵力が少ないとはいえ、その警備網は決してザルではなく、少なくとも並の部隊が潜入していれば、十分発見・排除が出来ていた筈だった。

しかし、彼らにとって不幸だったのはランバ・ラル隊が歴戦の精鋭部隊であったことだろう。

彼らにとってイベリア半島に敷いてあった連邦軍のザルそのものであり、簡単にイベリア半島を通過されてジブラルタルに潜入。

そのまま艦艇の底に爆弾を仕掛け、爆発させた結果、高い金を掛けて作られた鋼鉄の軍艦は、あっさりと巨大な鉄屑へとその姿を変えてしまった。

「これで任務は終了だ。全機急いで帰還するぞ。直にイベリア半島中の連邦軍が駆け付けてくる」

用は済んだ以上、長居は無用。

ランバは部下達に撤収を指示すると、合流ポイントに向けて機体を走らせた。

UC0079年 4月21日 アフリカ戦線崩壊

◇宇宙世紀0079年 4月21日 旧トルコ

「えっ？それは本当かい？」

シーマ・ガラハウ中佐はそう言って、部下に確認を取る。

4月20日にヨーロッパ方面軍がイベリア半島を経由しての西欧侵攻作戦を成功させた直後、シーマ・ガラハウ中佐率いるオデッサ方面軍は遅れに遅れていた中東侵攻作戦を開始した。

そして、その指揮官であるシーマ自身も、数時間前に確保して、現在は最前線となっている旧トルコにこうして出てきた訳であるが、その途中でとんでもない報告が入って来たのだ。

「はい、本国からの通信ですから間違いありません。アフリカ戦線は崩壊しました」

そう、ほんのつい先程、中央アフリカに展開していたアフリカ方面軍（と言っても、ジオン軍の兵士はほとんど居ないが）が壊滅し、アフリカ戦線は事実上崩壊してしまったのだ。

（ずいぶんあっさりと崩壊してくれたねえ。まあ、質が悪いって噂だったから無理もないか）

シーマはアフリカ戦線の事についてはほとんど知らない。

当然、中央アフリカに降下した義勇軍が連邦軍どころか、連邦市民相手に盛大にやらかしてくれているということも。

辛うじて知っているのは、1ヶ月ほど前に展開された戦線であるということと、兵の質が悪いという噂くらいなものだ。

実際はどうだか分からなかったが、1ヶ月で崩壊したところからすると、それは本当だったのかもしれない。

(しかし、このタイミングは不味い)

アフリカ戦線という場所は今回、シーマ率いる軍団が攻略しようとしている中東に近い場所にある。

そこが崩壊したとなると、このままでは作戦の途中でアフリカから連邦軍の増援が来てしまう可能性があった。

(選択肢は2つ。ここで一旦進撃を止めて次の機会のために兵力増強を計るか、それとも逆に進撃してアフリカからの増援が来る前にけりを着けるか)

シーマは少し迷うが、すぐに結論は出た。

「——このまま前進する。アフリカから連邦の増援が出る前に決着を着けるよ!!急ぎな!」

「はっ!」

こうして、シーマ率いるオデッサ方面軍は前進を再開した。

◇サイド3 ズム・シテイ 総帥府

「そうか。アフリカが遂に落ちたか」

アフリカ戦線崩壊の情報は前線に居るシーマだけではなく、総帥であるギレンの元にも届く。

しかし、ギレンに対して動じた様子はない。当然だろう。

元々大した兵力を送っていなかったし、ジオンの兵士が居るわけではないので、ジオンにとっては痛くも痒くも無かったのだから。

もつとも、キシリアから報告してきた“あの問題”については流石に予想外であり、その解決の事を考えると少し頭は痛かったが。

「・・・予定されていた中東侵攻作戦の方はどうだ？シーマ中佐はなんと言っている？」

ギレンはセシリアに中東侵攻作戦の進捗状況について尋ねる。

アフリカ戦線が崩壊した情報は既に前線にも届いているだろう。

そうになると、中東で作戦を展開しているシーマとしては、アフリカから敵の増援が来ることも考慮しなければならないので、ここは一旦撤退するか、逆に進撃して向こうの増援が来る前に決着を着けるかを選択肢がない。

「はい、旧トルコまで占領した後、一旦は進撃を停止しましたが、その後はそのまま予定通りに作戦を進めています」

「そうか」

どうやらシーマは進むことを選んだようだ。

ギレンはそう思いながら、この作戦の後の事について思案する。

(アフリカ戦線が崩壊したとなると、連邦は中東に戦力を集中するだろう。となると、幾らシーマ中佐が頑張っても途中で進撃する可能性が高いな)

ギレンはそう考える。

この中東侵攻作戦の最終目標はアラビア半島であるが、その中でも特に大きい旧サウジアラビアは大半の領土が砂漠であり、まともな陸地を進むには紅海沿岸付近を通っていくしかない。

しかし、アフリカ戦線が崩壊した今、手が空いたアフリカの連邦軍に横合いから襲撃される危険が出てきた以上、シーマ中佐もそこでの進撃は慎重にやらざるを得ないだろう。

まあ、砂漠の中を突き進むという選択肢もあるが、砂漠という場所はアースノイドですら手こずることもあるので、幾らシーマ中佐が有能でもスペースノイドである彼女らがそこで手こずってしまう可能性は非常に高い。

(まあ、まだ決まった訳じゃないし、そこら辺は様子見をするしかないが、もし万が一アラビア半島の攻略に手こずるようだったら、こちらから作戦中止命令を出すしかない)

ギレンはそう思いながら、その視線を地球の地図の東南アジアの部分へと向ける。

(・・・この際だ。仕方がない。封印されていた東南アジア侵攻についても再度練り直そう。ああ、そう言えば――)

そこでギレンはあることを思い出してセシリアに尋ねる。

「現在の南太平洋の情勢はどうなっている?」



ギレンが気にしていたのは南太平洋の情勢だ。

こちらの方はニューカレドニア島攻略後にジオンが進撃を停止したことで、実質的に戦局は膠着状態となっている。

しかし、ニューギニア島のポートモレスビーにはそれなりの規模の連邦軍が居てオーストラリアのジオン軍と睨み合っていたし、最近ではそのポートモレスビーの後方支援基地として、ニューブリデン島のラバウルに連邦軍の戦力が増強されつつあるという情報も入っており、予断ならない状況が続いていた。

「はい。現在、南太平洋の連邦軍の主要基地はポートモレスビーとラバウルに集中しています。他にも基地は有りますが、脅威になるほどではありません。そして、その2つの基地もハワイに進出した戦略海洋軍の通商破壊によって補給が滞り始めています」

「ふむ。では、ポートモレスビーの脅威は事実上喪失したと見て良いのか？」

そう、これが肝心なのだ。

ポートモレスビーはその位置関係上、旧インドネシア侵攻の際に多少なりとも障害になってくる可能性は高い場所だ。

ならば、占領してしまえば良いとも考えられるのだが、それをやってしまうと旧世紀の大日本帝国の如く泥沼のジャングル戦に突入してしまうことになる。

「いえ、必ずしもそうは言い切れません。補給が滞り始めているにも関わらず、後方拠点のラバウルが未だに増強され続けているところを見ると、連邦側も本気でここを確保しようという気概が伺えます。更に言えば、補給が滞っていると言っても、それは戦略海洋軍が沈めた輸送船の数から分析されたものですので、必ずしも正しいとは言い切れません」

「・・・そうか。となると、厄介だな」

ギレンは苦い顔をする。

なにしろ、連邦軍のポートモレスビー基地はジオン軍の旧インドネシア侵攻の障害になるかもしれない場所だ。

ここが機能しているかしていないかで、話は大きく変わってくる。

(しかも、障害を排除するためにポートモレスビーを確保するとなると、今度は旧インドネシア侵攻が遅れてしまうしな)

前述したように、ポートモレスビーの存在するニューギニア島はジャングルだらけの島だ。

ここを占領するとなると、かなりの兵士が必要になるので、結果的に旧インドネシア侵攻は遅れてしまうことになるだろう。

では、ポートモレスビーだけを占領すれば良いかと言われるとそうではない。

陸続きではないが、ラバウルという一大後方拠点があるし、それにニューギニア島全体に散らばっている連邦軍が破壊仕事を仕掛けてくる可能性も有るのだから。

(まあ、いつそのことポートモレスビーを旧インドネシア侵攻の期間だけに限定して占領して、その後は撤退して放置というのも有りなんだがな。だが、また再建されて拠点到されてもそれはそれで困るしな)

こうなつてくると邪魔になるのがラバウル基地だ。

現在のポートモレスビーへの補給はここを経由してやって来るのだから。

だが、2つの拠点を同時に占領するとなると、益々旧インドネシア侵攻が遅れてしまう。

さて、どうするべきか？

ギレンがそう思い悩んでいた時、セシリアがこんな提案をしてきた。

「ギレン閣下。1つ、私から提案があります」

「ほう、君から提案とは珍しいな」

ギレンは珍しいものを見たといった感じな視線でセシリアを見る。彼女が軍事で口を出してくる機会はほとんどなく、そういう軍事的な親衛隊の司令官であるエギーユ・デラーズ大佐が担ってきたからだ。

「言ってみたまえ」

「はい。しかし、その前にまずギレン閣下のお考えをご確認致します。閣下は旧インドネシア侵攻を考えているということでしょうか？」

「その通りだ」

「では、それを前提としてご説明します。旧インドネシア侵攻の過程で邪魔になってくるのがこのポートモレスビー基地並びにこの後方拠点であるラバウル。とすれば、我々が取るべきはこの両基地の牽制かと考えます」

「牽制、か」

それは納得できる理屈だった。

要は旧インドネシア侵攻の過程とその後の統治で邪魔になってこなければ良いのだ。

それならば、無理に無力化や占領に拘るのではなく、牽制という選択肢も正直言っておりだった。

「それで牽制とは具体的にどうするのだ？」

「はい。まず我が軍はこのラバウル基地とポートモレスビー基地の均等な距離にある島に進出し、基地を建設。ここを基点として両基地を牽制します」

「なるほど。で、その島とは？」

「色々と検討を行いました、やはりここかと」

そうやってセシリアは地図のある部分を示す。

「!？」

だが、彼女が示した島を見てギレンは驚いて思わず息を呑んでしまった。

何故なら、そこは前世の故郷である日本がまだ大日本帝国という国名を名乗っていた頃、2万人の死者（しかも、このうち1万5000人が餓死者）を出し、戦死者よりも餓死者が圧倒的に多かった事から餓島とも言われたソロモン諸島の南部の島

——ガダルカナル島だったのだから。

UC0079年 4月25日 暗躍の開始

◇宇宙世紀0079年 4月25日 ガダルカナル島  
熱い。

それがのび太が抱いたこの島に対する感想だった。

4月24日の深夜にガダルカナル島を制圧したジオン軍は翌日には部隊を素早く展開させ、この島にMSを始めとした有力な部隊を送り込んだ。

そして、その中にはのび太も含まれており、つい1時間前にこの島に上陸した。

「ニューカレドニアよりは北だから少しは涼しいって思ったんだけどなあ」

北に行くほど寒くなり、南に行くほど暑くなる。

そのくらいの事はのび太も知っていたので、ガダルカナル島の位置を聞いた時、ニューカレドニアよりは涼しい空間だと思っていたのだ。

しかし、実のところ、南に行けば暑くなり、北に行けば涼しくなるというこの理屈は正確には間違っている。

正しくは『赤道に近い地域ほど暑くなる』だ。

赤道という空間は南極という氷の大地の環境と丸つきり反対であり、一年中灼熱の暑さが続く。

勿論、季節によってその温度は変わってくるが、北半球に生きてきた人間からすれば、どの季節も然して変わらないと答えるのは間違いない。

まあ、そんなことをのび太が知るよしも無かったのだが、ただ1つのび太が分かっていたのは、このくそ暑い空間で敵と戦わなくてはならないということだった。

「暑いねえ」

そんなのび太に同調する形で、そのような言葉を吐く明らかに東洋人といった感じの顔立ちをした少女。

のび太はその人物の名前をよく知っていた。

「タリア、そんな格好してると流石に目のやり場に困るよ」

のび太は上にワイシャツのみといった目のやり場に困る格好をしている少女——タリア・ロウラン特務准尉（オリキャラ）に対してそう言う。

彼女は今年で12歳でのび太より1つ上の年齢だが、のび太と同じニュータイプ研究所出身者であり、志願してこのオセアニア戦線へとやって来ていて、のび太程ではないが、MSパイロットとしてそれなりの戦果を挙げている。

身体の方はその年には少し不相応なほど育っており、そういった性的なことがまだ分からない年頃ののび太でも、その顔を赤らめさせるには十分な要素となっていた。

「ええー。ノビタはこんなか弱い私に欲情しちゃうのお?」

そう言ってニヤニヤと笑うタリア。

このようなあざといところもある彼女であったが、のび太は決して彼女の事は嫌いではなかった。

メイを思い出させる性格をしているというのも有るが、現在の部隊で一番仲良くやれているのは彼女であるし、なんだかんだ言っただけの付き合いは楽しいからだ。

「欲情って・・・よく分からないけど、タリアも女の子だし、可愛いんだから、そんな格好で居るのは良くないよ」

「えっ・・・あ、うん」

のび太のストレートな誉め言葉に、タリアは顔を赤くする。ちなみにのび太は決してお世辞を言ったつもりはない。

タリアは宇宙世紀の中では珍しくない欧州系と中華系の両親を持つハーフであり、その整った顔立ちは美少女と言っても差し支えはなかった。

だが、こうも真っ直ぐ言われると、普段、のび太をからかっているタリアとしても照れてしまう。

「・・・ノビタ、そのうち女の子に刺されそうな気がするよ」

「刺されるって・・・包丁かなにかで？そんな暴力的な女の子は居ないと思うけどなあ」

タリアの言葉に対して、検討違いな答えを返すのび太。

だが、彼は知らない。

後にこの時の彼女の予言が当たってしまった、のび太は女性問題に四苦八苦するということを。

「ふふふ。ノビタって面白いね」

「そ、そうかな？」

「うん。でも、何故かお兄ちゃんには嫌われているみたいなんだよね。本心から言っているんじゃないと思うんだけど、なんであんなこと言うんだろう？」

タリアにそう言われて、のび太はこの前話した彼女の3つ年上でアムロと同年の兄——トイ・ロウラン少尉（4月の初めが誕生日な為に既に15歳となっており、それに伴って正式な軍の階級が与えられた）の顔を思い出す。



正直、のび太の感想としては彼は悪い人間ではないように感じた。確かに多少、脅すようなことを言われたが、それは妹の事を思っていることであつたし、そんなシスコンの兄はのび太も元の世界で見た覚えがあるので、のび太は然程気にしてはいない。

「まあ、お兄さんも色々心配なんだよ。こうして、妹が戦場に出ているんだからね」

「そうかな？」

「うん。基本的に妹を心配しないお兄ちゃんは居ないからね」

「ふーん」

「それと、あんまりあの人を邪険にしちゃダメだよ。君を大切に思っている人だからね」

「はーい」

タリアはそう返事をするが、よく意味が分かっていないのは明白であり、のび太はその態度に内心で溜め息をつく。

（全然分かってないか。僕自身も最近まで分かってなかったんだから人の事は言えないけど、タリアには僕と同じ過ちはして欲しくないしなあ）

そう思ったのび太だったが、今何かを言ったところで彼女は分かってくれないと感じて、それ以上注意するのを止める事にした。

「・・・まあ、今は分かってくれなくて良いよ。そのうち嫌でもわかるようになるだろうから」

のび太はそう言ったが、それがこの戦争で分かるようになるのか、それとも戦争が終わって平和になってから分かるようになるのかはのび太自身にも分からない。

そして、そんな中で彼に出来ることは彼女が後者の立場に立てるように、出来る範囲でバックアップすることだけだった。

◇オーストラリア シドニー近郊 ジオン軍駐屯地

「これは本当なのか？」

ダグラス・ローデン大佐はある写真を見ながら、部下であるジェーン・コンティ中尉にそう尋ねる。

ちなみにその写真には金髪に青い目をした一人の青年が写し出されており、それをローデンが持っているのを知ったら、ザビ家（と本人）の面々はさぞ苦々しい顔をするのは間違いなかった。

なにしろ、そこに写っていたのは紛れもなく彼らが崇拝している対象の遺児である男——キャスバル・レム・ダイクンがだったのだから。

「はい、様々な情報を精査した結果、彼がキャスバル様であるということとは確実です」

「そうか。生きていてくださったか」

ダグラスは安心した表情でそう言う。

ジオン・ズム・ダイクン暗殺後、ダイクン一家はザビ家の手によって幽閉され、ダイクン派から引き離された。

もつとも、これはあくまでダグラス達の主観であり、実際はザビ家は確かにダイクン派の地球への逃走の為に支援を手伝ったりはしたが、その後はほとんど干渉していなかったし、ダイクン派のランバ・ラルやその配下の人間（タチ中尉など）も地球に逃れたダイクン一家とはザビ家の許可を得て連絡を取り合っていたのだ。

しかし、ザビ家の面々がダイクン派がキャスバル達を担ぎ上げるのを恐れていたのも確かだったので、他のダイクン派にはこの事は全く言っていなかったし、ランバ・ラルも同様なことを思っており、またタチ中尉を初めとした彼の配下もランバ・ラルの意向を受けて他のダイクン派には全くその事を言っていなかった。

その為、ザビ家の手によって地球へと逃れたことしか知らないダグラス達はダイクン一家がザビ家によって幽閉されたと思っていたし、今回の戦争の演説もザビ家の手から逃れたアルテイシアが自分の意思で連邦の手を借りたと思っている。

まあ、連邦の手を借りるといふ行為はダイクン派の面々の中にも眉をしかめている者も居り、ダグラスもその1人であったが、ザビ家の弾圧（これに関しては半分自業自得だとも思っているが）を苦々しく思っているのも事実であったので、複雑な思いを持っていた。

しかし、ジオンの英雄の1人である赤い彗星がキャスバル・レム・ダイクンとなると、話は大幅に違ってくる。

もしかしたら彼の手を借りることで、今のジオンをザビ家の支配から解放することは可能かもしれないとダグラスは考えていた。

もつとも、この考えをキャスバルが聞いたら、ダイクン派を完全に

見限り、連邦によって拐われたアストライアやアルテイシアを探す駒としてしか見なくなるだろう。

Zガンダムや逆襲のシャアを見れば分かるが、彼は自分が担ぎ上げられることをかなり嫌っているのだから。

ザビ家への復讐にしても同じで、仮にジンバ・ラルが言うように父親が彼らによって謀殺されたとしても、その彼らがジオン・ズム・ダイクンの跡を継ぐに相応しい存在であれば、彼はそれほど気にしない。

何故なら、彼にとって一番重要な存在は母親であるアストライアや妹のアルテイシアであり、あまり愛情を注いでくれなかった父親は彼にとつてそれほど重要な存在ではなかったからだ。

まあ、そんなキャスバルの心情や性格をダグラス達が知っている筈も無かったのだが、その事を敵対者である筈のザビ家の面々が一番よく分かっていたのは、皮肉以外の何者でもない。

「彼とは接触が可能か？」

「おそらくは。ただ今はヨーロッパに居るらしいので、少々時間は掛かると思いますが」

「構わない。やってくれ」

「はっ、かしこまりました」

——こうして、彼らは本来のジオンを取り戻すために暗躍を始めた。

UC0079年 4月30日 危険人物

◇宇宙世紀0079年 4月30日 サイド3 ズム・シティ

「そうか。中東侵攻作戦は成功か。・・・ギリギリだったな」

ギレンはそう呟きながら、報告者を見ている。

中東侵攻作戦は途中でアフリカからやって来た連邦軍の増援によつて一時泥沼になりかけた。

このまま5月1日までに状況が改善しなければ撤退命令を出そうかとも考えていたが、シーマ・ガラハウ中佐がギリギリのところで態勢を建て直して、アラビア半島の占領に成功したことでその考えを改める。

「流石は原作の名指揮官といったところか。となると、旧インドネシア侵攻作戦は中止か？」

元々、オセアニア方面軍による旧インドネシア侵攻作戦は中東侵攻作戦が失敗した場合に備えて準備された予備作戦だ。

その中東侵攻作戦が成功した今、旧インドネシア侵攻の必要性は無くなっていた。

「下手に戦線を拡大すると面倒なことになるしな。旧インドネシア侵攻作戦はやはり中止しよう。しかし、そうなるとガタルカナルを占領した意味がなくなるな」

そう、ガタルカナルを占領したのは旧インドネシアに侵攻する過程で邪魔になってくるポートモレスビーとその後方拠点であるラバウルを牽制するためだ。

しかし、旧インドネシア侵攻作戦が中止となると、ここを占領した意味は無くなってしまう。

・・・いや、厳密には意味はある。

ポートモレスビーやラバウルは依然として有力な基地であり、そこを拠点としていざれ連邦軍がオーストラリアへと攻めてくる危険が有るので、それを牽制するという目的では意味があるのだ。

ただ、旧インドネシア侵攻作戦が中止される以上、兵力に余力が出るので、それを使って両基地を占領してしまうという手も無くはなく、ガタルカナル島の重要度は以前より低くなっているのも確かだった。

（いや、兵力は多少余らせた方が良いか。いずれオーストラリアへとやって来るかもしれないしな。その予備戦力として投入するのも有りだ。となると、ガタルカナル島占領は継続だな）

ギレンはそう結論を出し、次に遂に完成したある兵器についての報告書を見る。

「アップサラスⅢも遂に完成した。あとは量産型アップサラスの開発と量産を計るだけだ」

そう、原作のアップサラスの完成型であるアップサラスⅢは遂に完成し、後は量産型の設計と量産を計るだけとなっていた。

まあ、ものが巨大なだけにその生産が始まるのは6月頃からとなるだろうが、それでもこの時期にアップサラスが完成できたのは大きい。そして、もし量産されたアップサラスの群れがこの世界でもあるかもしれないオデッサ作戦に投入されれば、連邦軍はさぞかし愉快な目に遭うこととなるだろう。

「アップサラスの設計は終わったことだし、ギニアス准将を少将に昇進させて本国に戻そう。療養もさせなければいけないしな」

ギレンはそう考えつつ、次の報告書に目を移そうとする。

だが、その時、室内のモニターにセシリアの顔が映し出された。

『失礼します、ギレン閣下。キシリア様から報告したいことがあると  
のことで、通信が入っております』

「なに？分かった。繋いでくれ」

『はっ』

そう言った直後、セシリアの姿はスクリーンから消え、その数秒後  
にキシリアの顔が映し出される。

「どうした？キシリア」

『はい。実は中東侵攻作戦が成功したとの報告を受けまして、今後の  
地球方面軍の指揮官配置の事で提案がござります』

「ほう。言ってみろ」

『はい。まず今回の中東侵攻作戦を成功させたシーマ・ガラハウ中佐  
ですが、此度の功績を理由に大佐に昇進させ、ルナツールの司令に就か  
せるべきです』

「宇宙に、か」

そう言いながら、ギレンは考える。

元々、シーマ・ガラハウ中佐は原作では主に宇宙で活躍していた人  
物だ。

この世界では地上でも同様の働きを見せてくれることを期待して  
地球方面軍に就けたが、今回の中東侵攻作戦を除けば、意外とその機  
会は少なく、はつきり言って宝の持ち腐れ状態だった。

確かにそれくらいなら今後宇宙の最前線となる可能性の高いソロモンやルナツーに配属させた方が良いでしょう。

「・・・分かった。そうすることにしよう。だが、オデッサ方面軍の後任はどうする？」

『はい、その事ですが、まずオデッサ基地についてはマ・クベ中佐を大佐に昇進させて基地司令にさせたいと考えています』

「マ・クベ・・・」

ギレンはその名前を聞いてあまり良い顔をしなかった。

原作では彼は軍人というよりは謀略家といったタイプの人間であり、決して無能ではなかったが、それでもオデッサ基地を任せるには不安の多い人間だ。

特に原作のオデッサ作戦では南極条約を破って水爆を使っており（まあ、この点はユーリ・ケラーネも似たようなものだが）、それと同じようなことを地球でされては非常に困る。

『兄上の言いたいことは分かります。原作と同じようにマ・クベが水爆を使うのではないかとお思いいなっているのですね？』

「まあな」

『それでしたら問題ないでしょう。オデッサ基地には核を決して持ち込まないようによしますし、私からマ・クベに言って聞かせます』

「ふむ・・・だが、そこまでしてマ・クベを推薦する理由はなんだ？」

ギレンはその点を疑問に思った。

原作のキシリアだったらギレンを政争で追い落とすためだっただ



ろうが、この世界ではキシリアはそういつた点には拘っていない（まあ、それ相応のポストは欲していたが）。

その為、なぜオデツサ基地の司令にキシリアの配下であるマ・クベをわざわざ推薦するのが分からなかったのだ。

そして、そのギレンの疑問に対して、キシリアはこう答えた。

『来月、あるいは2ヶ月後には我が軍の進撃が停止して戦線が膠着状態に陥ると思われれますので、連邦に政治的な揺さぶりを掛けようと思ひまして』

「なるほど。確かにマ・クベはそういつたことが得意だったか」

そう、マ・クベは軍人としては今一つだが、政治家としては有能だ。そうでなければ原作の南極会談でジオン側の代表の席に座ることなど許されなかっただろう。

更に言えば、確かにキシリアの言う通り、戦線は膠着する見込みなので、いずれジャブローは攻める予定であるとはいえ、今のうちに政治的な圧力を掛けるのも有りかもしれない。

「・・・良いだろう、許可しよう」

『ありがとうございます。・・・ああ、それと今回占領した中東方面の司令官はノリス・パツカード少佐を指名したいのですが、よろしいでしょうか？』

「ノリス・パツカード少佐か。悪くないな」

ノリス・パツカード少佐は原作08小隊で登場した凄腕のMS乗りとして知られているが、大佐という階級になっていただけあって指揮官としても有能なのは間違いない。

『最後に・・・その・・・』

「なんだ？」

『は、はい。実はシヤア・アズナブル少佐を一旦ヨーロッパ方面軍の所属から外して、インド亜大陸に潜入させたいと考えているのですが・・・』

「・・・」

ギレンは沈黙する。

キシリアの狙いは分かる。

おそらく、ララア・スンとシヤア・アズナブルを接触させ、彼女を枷にする形でシヤア・アズナブルという人物が万が一にも暴走することがないようにすることだろう。

ちなみにララアとシヤアの出会いとはアニメとorigin版で時期も拾った経緯も大分異なる。

例えば、アニメでシヤアとララアが出会った時期はガルマの暗殺後であるし、拾った経緯は娼婦として客を取っていた彼女を身請けしたとなつているが、origin版では出会った時期は開戦前である暁の蜂起の後で、拾った経緯もカジノ荒し達に狙われた彼女を助けて宇宙に連れてきたという形となっていた。

この世界ではララアは娼婦なのか、それともカジノ荒しの手伝いさせられているのかは分からないが、少なくとも暁の蜂起後にシヤアは地球に行っていないなかったので、この時点でララアとシヤアに面識がないのは確実だ。

「しかし・・・」

ギレンは先程のマ・クベの時以上に嫌そうな顔をした。

ララア・スンはギレンからしてみれば、正直言って危険人物だ。

別に彼女自身が何かしたという訳ではないのだが、原作では彼女はシヤアやアムロといった人間に大きく影響を与えており、アムロは彼女の一件で心に大きく傷を負うことになったし、シヤアに至っては彼女が死んだことを引き摺ったまま新たな心の拠り所としてニュータイプ思想を求めてZ時代を過ごし、そこで地球連邦に絶望した結果、アクシズ落としという凶行をやらかす事となっている。

逆に言えば、彼女とさえ出会っていないければ、シヤアはアクシズ落としまではやらなかっただろうし、ニュータイプ思想にそこまで深くのめり込む事は無かっただろう。

それを考えれば、彼女の存在は本当にとんでもない厄介な存在だったと言える。

「・・・いや、やはり駄目だ。ララアとシヤアを接触させるのは危険すぎる。それは却下だ」

『そうですか。分かりました』

最後の件に関してはキシリアもその危険性を認識していたのか、ギレンの言葉を受けてあっさりと引き下がる。

『では、私はこれで失礼します』

「うむ、ではな」

ギレンがそう言った直後、キシリアの姿はモニターから消えた。

「・・・ふう」

それを確認すると、ギレンは椅子に寄り掛かりながら大きく息を吐きながら、顔にたぎっていた冷や汗を拭う。

(ララア・スン、か。奴は絶対に我々に災いをもたらすだろう。決して接触してはならないな)

ギレンはそう直感しながら、改めてララア・スンとは絶対に接触しないことを誓った。

UCC0079年 5月2日 1と7の裏

◇宇宙世紀0079年 5月2日 サイド1（ザーン）  
サイド1。

この世界の人類が宇宙移民が開始された最初の宙域であり、原作では一週間戦争の際にジオン軍の攻撃を受けて大被害を受けたコロニー郡であるが、この世界では連邦軍が壊滅した事以外は大した被害は出ておらず、政治機構なども普通に機能していた。

もともと、ジオン軍が侵攻してきた際に親連邦派と分かる政治家や高級職員は拘束してサイド3のとあるホテルへと連行してしまったので、それらの穴埋めをやらされている人間たちは地獄のようなオーバークを行う羽目になっていたが。

さて、そんなサイド1のとあるコロニーのある建物では数人の男達が集まり会合を行っていた。

「連邦軍は何をやっているのだ!？」

男の1人がそう怒鳴る。

実はこの場に集まっている男達は親連邦派の人間であり、ジオン軍の身柄拘束からなんとか逃れた高級職員達だった。

無論、ジオン軍も居場所こそ特定はしていなかったが、彼らの存在そのものは知っている。

しかし、肝心のジオン軍は予想以上に早い開戦によって戦争の準備が今一つであった為、今は戦争に集中したいという思惑から、彼らを敢えて搜索はせずに放置しており、今のところは元の職場にさえ戻らなければ問題ないと考えていた。

まあ、余力が出てきたら変なことを起こされないためにも改めて彼らを拘束するように行動を起こすつもりではあったが。

「仕方あるまい。宇宙を全てジオンに掌握され、地上も奴等によって侵攻されている。そして、連邦として自分の領土の奪還を優先するだろ

うからな。宇宙は後回しさ」

別の男がそう言って肩を竦める。

そう、あのルウム沖の戦いから4ヶ月。

その間、連邦の宇宙軍が消極的な行動に留まっているのは、単純に宇宙艦隊が壊滅して動けないということも理由や再建中の艦隊を温存したいという思惑もあるが、やはり連邦の自領である地上の奪還を優先したいという思惑が大きい。

レビル將軍は地上を無視してすぐにも宇宙へ反抗すべきだと考えていたが、政治家がそれを許さないのだ。

「だが、このままでは我らの資産は奴等によって全て没収されてしまうぞ」

男は忌々しげな顔で言う。

そう、ジオンは彼らを始めた連邦派の資産の没収を進めていた。

と言っても、ジオン自身がその利益を取っている訳ではない。

一度接收して、その利益を親ジオン派の人間に分け与えていたのだ。

これはジオンがそのまま接收してしまうと、後々の禍根となる可能性があるのです、親連邦派の恨みの矛先を親ジオン派の人間に引き受けて貰おうという思惑からだった。

『不幸というのはみんな分ち合うものだろうか?』

というのが、各サイドの統治を任されているサスロ・ザビの方針だ。しかし、資産を没収されている彼らからすれば忌々しいことに変わりはなく、なんとか隠し財産を使って生活しているもの、それもジオン軍諜報部が次々と発見し、親ジオン派に通報していることで彼らはどんどん貧乏になっていた。

とは言え、親ジオン派の方も例のアフリカでの失敗によって若干だが支持を失っており、そのお蔭で彼らは今現在も親ジオン派に潜伏場所を知られずに済んでいる。

「連邦軍が頼りにならないとなると・・・我々で行動を起こせないか？」

「どうやって？」

「例えば、ジオンが我々に売っているモビルスーツを奪ってジオンの連中を追い出すとか」

「正気か？そんなことが出来る訳がない」

そう、確かに各サイドに駐留しているジオン軍は少数だ。

住民が力を合わせれば追い落とせるかもしれないが、そうなたたところでジオンにとっては痛くも痒くもない。

何故なら、直接的な武力では近くにソロモン要塞が有るし、そもそもサイド1自体にまともな宇宙戦艦が無い以上、宇宙の宙路をジオン艦隊が封鎖してしまえば各サイドは干上がってしまうのだ。

「しかし・・・」

「ここは黙って耐えるしか有るまい。なに、連邦だって地上でジオンを片付ければ、宇宙に打って出てくるさ」

「・・・そうだな。今しばらく辛抱するしかないか」

男達はそう言いながら、連邦軍がサイド1を解放してくれるその時を待つことを決意した。

◇サイド7（ノア）

「しかし、あんなところで何やってんのかねえ？」

少年——カイ・シデンはそう言いながら、疑惑の目を開発区へと向ける。

ここはサイド7。

ジオン公国の存在するサイド3から一番遠い位置に存在するコロニーであり、原作では4ヶ月後にファーストガンダム開始の舞台となった場所でもある。

しかし、そのサイド7の開発区では最近怪しげな建設が行われていることを一部の住民はいぶかしんでおり、カイもまたその1人だった。

「ただの建設作業では？元々、ここは未完成のコロニーですしね」

カイの友人であるハヤト・コバヤシはそう言う。

ハヤトの言った通り、今彼らが居るこのコロニー（後にグリーン・ノアと呼ばれる）は2年前から建造が始まっているが、未だに完成は



しておらず、更に戦争が始まったことで建造が進んでいない状況となっていた。

それ故に、開発区での作業は単に遅れた事業を再開させているだけでも取れる。

だが――

「いや、それにしてもこっさりやりすぎじゃねえか？まるで秘密兵器でも開発してそんな雰囲気だぜ」

そう、ただの建設作業にしてはあまりにもこそこそしすぎているのだ。

あれでは何か秘密兵器を開発していると言った方がよっぽど説得力があった。

もともと、普通の人間ならば触らぬ神に祟りなしと、気づいても覚えて突っ込まないようにしていただろう。

しかし、カイ・シデンはその例外である突っ込みを入れる人間だった。

「秘密兵器って・・・ジオンのですか？」

「まあ、その可能性は高い。が、それはちと可笑しい」

「何がですか？」

「よく考えてみる。ジオンが秘密兵器をこんな辺鄙な場所のコロニーじゃなくて、それこそソロモンやらルナツーやらで開発した方がよっぽど安全だろうが」

カイはそう言って疑問点を挙げる。

戦艦の砲撃で崩壊する可能性のあるコロニーとソーラー・システムのような大量破壊兵器でも崩れない小惑星の要塞。

どちらが安全に開発できるかなど言うまでもないし、そもそも宇宙の全てを掌握しているジオンがそんなこそこそとした行動を取るとも思えない。

「しかし、そうなると連邦ということになりますよ？その方があり得ないのでは？」

ハヤトはそう指摘する。

このサイド7は開戦以来、ジオンの侵攻を受けたことはない。

ルナツーが陥落した時点でサイド7は中立を宣言していたし、ジオンも地球侵攻作戦が控えていたこともあって、わざわざなんの用もないサイド7に軍隊を派遣するほど暇ではなかったからだ。

そういうわけで、このサイド7はジオン軍は開戦以来全く入っていない訳だが、それでも連邦がこっそり秘密兵器をここで造っているとは考えづらい。

何故なら、サイド7の目と鼻の先に存在するルナツーは既にジオンの支配下であるので、その気になればジオン軍はすぐにもこのサイド7に攻めることが出来るので、常識的に考えればそんなところで連邦が秘密兵器を作っている可能性は限りなく低い。

「・・・だよなあ。流石にこんなところで連邦が新兵器なんか作る訳ねえか」

流石にあり得ないと思ったのか、カイもまたハヤトの言葉を肯定する。

「そもそも秘密兵器なんて、アニメや漫画の見すぎですよ。そんなものがこんなところに有るわけ無いでしょう」

「いや、わかんないぜえ。今はあちこちで戦争をやってるから、何が起きてても可笑しくねえからな」

「それはそうですけど・・・」

「ひよつとしたら、俺達が巻き込まれて兵隊として戦わされるなんてことも有るかもな」

「・・・怖いこと言わないでくださいよ」

「冗談だよ、冗談。まったく、冗談が通じないねえ、ハヤト君は」

カイはへらへらと笑いながらそう言う。

——だが、彼は知らない。

この時の発言が盛大なフラグであったということ。

運命の“その時”は、あと4ヶ月というところまで迫っていた。

UC0079年 5月4日 新兵器・ビームライフル

◇宇宙世紀0079年 5月4日 ガダルカナル島

「これが新兵器ですか」

ガダルカナル島に築かれたMS格納庫の一つ。

そこではのび太が今度、自分の量産型ガンダムに配られる新兵器を見ていた。

「ビームライフル。試作だが、これが本格的に実戦投入されれば、連邦など簡単に蹴散らせる」

のび太の横に居たいかにも技術者といった感じの風貌の男は自信を持ってそう言った。

そう、遂にジオンでもビームライフルが完成し、試験的に運用することになり、その配属先としてのび太の機体選ばれたのだ。

ちなみにこのビームライフルはあくまで巡洋艦の主砲と同程度であり、戦艦の主砲と同等だった原作ファーストガンダムのビームライフルよりは威力が劣るのだが、これはジオン軍上層部が暫くは地上戦が主役である以上、威力よりも弾数を優先すべきだと考えた結果だった。

「ビームライフル？ということは、ビームがビューンって出るんですか？」

「ああ、その通りさ。こいつのビームはジムを簡単に貫通してしまう程の威力がある。お前さんのガンダムでも至近距離で撃たれれば危ういだろっな」

「そ、それは凄いですね。でも、奪われたりしたら大変では？」

のび太の機体は量産型とは言え、ジオンではトップクラスに入るほどの装甲を持っており、それを至近距離からとは言え貫通できるということは、ジムではあつという間にやられてしまうということでもある。

となると、それを万が一にも奪われたりすればどのような事になるかは想像もしたくない。

「それは心配ない。上層部の命令で特定の機体にしか撃てないようにプログラミングされているし、もし無理に撃とうとすれば自爆するようにもなっているからな」

男はそう説明した。

ちなみに特定の機体にしか撃てないようにするプログラミングは確かに上層部の命令によるものだが、自爆の方に関しては『男のロマン』として男が勝手に着けたプログラムだったりする。

しかし、のび太は当然それを知るよしも無い。

「そうですか。なら、安心ですね。ちなみに具体的にどれくらい撃てるんですか？」

「二応、スペック上は18発(ちなみに原作ファーストガンダムのビームライフルは15発)となっているが、これは銃身が耐えきれぬ安全性が確保された場合のもので、無理をすれば20発は撃てる」

「へえ。じゃあ、弾切れになって改めて弾を込めるときは？」

そう、それが肝心だ。

のび太は射撃が得意であるが、途中で弾切れになってはその強みが0になってしまうので、銃の弾丸の数については何時も注意を払っている。

「残念ながら無い。エネルギーCAPマガジンはまだ未完成で、このビームライフルはエネルギーCAPを内蔵しているから、一旦撃ち尽くした後は基地に戻らないと補給できない」

「え、ええ!?それはちよつと困りますよー!」

基地に戻らなければ再装填出来ない銃など、ちよつと大きい戦いであれば却って負担になる可能性が高い。

その事をよく知っているのび太からすれば、使い捨ての装備というのは非常に困ってしまう存在だった。

「分かっている。こちらもエネルギーCAPマガジンの開発は急いでいるが、完成は今年の末頃になりそうなんだ」

「じゃあ、それまでの間は弾切れになったらいちいち基地に戻らなきゃならないんですか?」

冗談じゃない。

のび太はそう思う。

なにしろ、のび太はオーストラリア、タスマニア、ニューカレドニア、そして、このガダルカナル島の実戦経験の過程で操縦技術こそベテラン並みになった。

しかし、近接格闘能力に関しては依然として大した能力は持っていない。

一応、ヒートソードは近接戦闘装備としてパックパックに積まれていたのだが、これを使う機会は今までに無かったので、のび太はこれを外して90ミリマシンガンのマガジンをより多く積めないかを真剣に考えていた程だ。

それほどのび太にとって銃という存在は重要なものであり、それが制限されるとなると、戦闘に際してかなりの問題となってくる。

「まあ、そうなるが・・・この島限定で使う分には問題ないだろう。他の場所に攻める時には通常のマシンガンを持っていけば良い」

技術者はそう言う。

確かにガダルカナル島だけという局地的な場所で使うのなら問題にはならない。

弾を装填するための施設もここに有るのだから。

しかし、これはあくまで技術者としての視点であり、実際に使うのび太の視点から見ると話は変わってくる。

「しかし、敵の攻撃か何かを受ければのんびり補給している時間は無いのでは？」

そう、一旦敵の攻撃を受ければいちいち施設に戻って再装填している暇など無い。

加えて、ここガダルカナル島は正に最前線であり、のび太はこの島に来てまだ10日も経っていないが、既に20回以上の空襲を受けている。

その中には空襲が終わったと思ったら、またすぐ空襲が来たなどという展開もあり、のんびり空襲下で施設に戻って弾薬を補給する機会など全く無かった。

更にのび太達も必死に迎撃していたものの、それでも吹っ飛ばされたガダルカナルのジオン軍施設は多く、空襲を受ければそのビームライフルのエネルギー補給施設も吹っ飛ばされてしまうのではないかという恐れもある。

「ムムムツ・・・」

「まあ、実弾の代わりにビームを使う点は良いと思いますけどね。実弾はあまり好かないし」

それは正直なのび太の感想だった。

散々使っておいてなんだが、のび太はマシンガンなどの実弾兵器があまり好きではない。

撃つ度に銃を使って人を殺している実感を味わってしまうからだ。

それに対して、ビーム兵器の方は人を傷つけないショックガンを思い起こさせるので、あまり抵抗が無かった。

まあ、このビームライフルは直撃すれば人を傷つけるどころか、文字通りの意味で蒸発させてしまう威力があるのだが、そこを突っ込んでも仕方がないだろう。

そして、この言葉を聞いた男は何を勘違いしたのか、先程とは打って変わって目をキラキラさせながらこう言った。

「そうだろう、そうだろう。いやあ、君は分かってくれるか!!ビーム兵器の良さを!」

「え、ええ。まあ」

急に態度を変化させた技術者(後で分かったことだが、彼はM I P社から派遣されていた)に、のび太は戸惑いつつも賛同する。

もともと、男の賛同とのび太の賛同は意味が違ったのだが、そんなことはニュータイプでもない男に分かるわけもなかった。

「これにはねえ、男のロマンが詰まっているんだよ!」

「ロマン、ですか?」

「うん、そう!君だって、人を殺すという現実さえ無視すれば、ロマンを感じる兵器だってたくさん有るだろう?」

「それは・・・まあ、有りますけど・・・」



のび太は律儀にそれに同意する。

のび太だってまだ小学生の男の子だ。

戦闘機や戦車、戦艦やモビルスーツなどの兵器に憧れたし、そのプラモデルだって造ったことがある。

そういった戦う為の兵器の代表というのは、のび太に限らずたいいの男の子の憧れとなるケースが多い。

まあ、大人になるつれて現実を知って子供っぽいとか、危険と考えることも多くなってくるが、それでも心の奥底では「戦いの象徴」に憧れを抱くのが男という種族なのだ。

「私にとってそれはビーム兵器だったんだよ。だからMIP社に入っただんだ」

「なるほど・・・」

「うむ。だが、現実というのは厳しくてな。思うように完成はしないのだ。その証拠に私はあんな未成品を君に渡してしまうことになっっている」

技術者は無念といった感じにそう言う。

技術者であることに誇りを持つ彼からしてみれば、未成品（厳密には完成品だが、装填機構に欠陥がある）を渡してしまうことに悔しい思いがあるのだ。

しかし、そんな彼に対してのび太はこう言った。

「これ、ちゃんと撃てますか？」

「なに？」

「これはちゃんとビームが出て撃てますか？」

「あ、ああ。それは勿論だ。だが・・・」

「だったら、今はそれで良いじゃないですか」

のび太はそう言って励ます。

思い出したのだ。

かつての大冒険で秘密道具を発明していたクルトの事を。

彼の道具は色々と癖が多く、それがそのまま欠点となってしまうていたが、それもあの人工太陽制御の場面では大活躍していた。

要は道具というのは、場面と使い手の使い方次第なのだ。

であれば、今回のビームライフルも自分が使いこなせれば問題ないのではないか？

そのようにのび太は考えを改めていたのだ。

「えっ?」

「確かに再装填できないというのは痛いですが、だからといって戦えない訳じゃないですし、いずれ再装填出来るようにもするつもりなのでしょう?」

「・・・ああ」

「だったら、それまで僕が使いこなしてみせますよ。だから、なるべく早くそれを開発してくださいね」

技術者はその言葉に大きな感動を覚える。

未完成品を与えた立場であるにも関わらず、欠点も含めて自分の技術を認めつつ、それを使いこなして見せると宣言し、将来的な自分の技術を信じているという発言まで貰っていたからだ。

ここまで言える人間は実はなかなか居ない。

兵士というものは、使いにくい武器を与えられた時、必ず技術者のせいにしてくるからだ。

まあ、戦場で使いにくい武器を渡されても兵士としては困るので、そういった人間達の言い分ももつともなのだが、それでも頭ごなしに否定されると作った技術者として思うところがある。

だが、のび太はそれらの人間とは違い、使いこなしてみせると言ってくれた。

ならば、その信頼に答えなければならぬだろう。

技術者はそう考える。

そう、こののび太の人格と人望、そして、優しさこそ、今まで大冒険を潜り抜けてきたのび太の武器の1つだった。

大冒険の過程で普通な人間がやれば、拗れるような場面も幾つかあったが、それを潜り抜けられたのはのび太が居たからに他ならない。

それを考えれば、のび太にも人の上に立つ者の才が有るのかもしれない。

戦いの際に味方の士気をスムーズに上げるのには、その指揮官に人望があることが大前提なのだから。

「分かった。必ず今年中にやり遂げよう」

そして、そんなのび太の言葉に心を打たれた技術者は、改めてそう宣言し、今年中に再装填型のビームライフルを完成させることを誓った。

UC0079年 5月5日 新兵器・ビームサーベル

◇宇宙世紀0079年 5月5日 オーストラリア ダーウィン  
基地

「これがビームサーベル、か。ヒートソードに比べると威力は桁違いだ」

アムロ・レイ特務少尉はそう言いながら、ビームサーベルの威力を絶賛していた。

今までにも近接用装備としてヒートソードは持たされていたのだが、ビームサーベルはそれより遥かに威力が大きく、モビルスーツですら簡単に両断してしまう威力があるのだ。

これさえ有れば、戦艦も近接攻撃で倒すことが出来る（今までのヒートソードでは戦艦を相手にするには威力不足だった）かもしれない。

「・・・そう言えば、ビームサーベルの他にもビームライフルという新兵器が有ったと聞いたんだけど、なんでそれはこっちに回ってきてないんだ？メイ」

アムロは隣に居た技術者——メイ・カーウィン技術少尉に向かってそう尋ねた。

最近開発されたビーム兵器の中にはビームサーベルの他にもビームライフルが有ることをアムロは知っており、それが何故こちらに回されてこないのか不思議に思っていたのだ。

それに対して、メイの返答は物凄く簡単なものだった。

「なんでもアムロよりも凄い射撃の名手がガダルカナルに居るから、そっちの方がデータを取りやすいとかで、回されていったみたいだよ」

「へえ・・・」

アムロはその答えを聞いて考える。

(自分で言うのもなんだけど、僕より優れている射撃の名手なんてそう多くはない。更にここは義勇兵も多いオセアニア戦線・・・となると、ノビタか)

アムロはそこでオセアニア東部に居るといふ少年の事を思い出した。

ノビタ・ノビという人物はMSの操縦技術に関してはそこそこの腕だ。

と言っても、それはアムロと比べてであって普通の人間に比べれば十分に才能があると言えるのだが、少なくともアムロには劣る。

だが、唯一、射撃技術だけはアムロは逆立ちしてものび太には勝てなかったのだ。

これは元々の才能もあるが、アムロはこの一年戦争が初めての実戦の場だが、のび太は大冒険で幾度となく戦場という舞台を経験したので、その実戦経験の差もまた露骨に出ているからだった。

もともと、そんなことを知っているのは転生者であるザビ家の人間くらいであり、アムロは全く知らなかったのだが。

「まあ、それなら仕方ないか。今はこのビームサーベルをこっちに寄越してくれただけでも良いと思わなきゃならないかな」

アムロは敢えてのび太の話題にせず、メイに向かってそう言った。何故かは知らないが、のび太の話題がメイにとって禁句であることはアムロとて察していたからだ。

「うん、そうだね」

「・・・それにしても、ここは位置的に最前線の筈なのに、えらい静かだね」

アムロは半ば強引に話題を変える。

そう、このオーストラリア大陸北西部に存在するダーウィン基地は位置的に連邦領である旧インドネシアがすぐ近くに存在するのだが、占領以来1度も空襲や襲撃を受けていない。

のび太達の居るガダルカナル島が今現在も空襲を受けていることを考えれば、正に天と地ほどの環境の差だった。

「そうだね。でも、平和なのは良いことだと思うよ」

「まあ、そうなんだけどね」

呑気な事を言い合う2人だったが、もしこの光景を激戦地であるガダルカナル島に居るのび太が見たらこう言うだろう。

『油断しすぎ！最前線なんだから、もっと危機感持つて!!』、と。

◇旧インドネシア ジャワ島 ジャカルタ  
独立機械化連隊。

それは原作08小隊で極東方面に配属されていた部隊であり、原作の0079年6月にはこの部隊が連邦軍初のジオン軍のモビルスーツに対して初勝利という戦果を挙げている。

しかし、この世界ではまだ5月であるのと、ジオン軍がアジア方面に進軍していないこともあって、極東方面ではなく、東南アジア方面に配置されることとなっており、コジマ大隊の部隊正式名称である地球連邦極東方面軍機械化混成大隊という名称も、この世界では地球連邦東南アジア方面軍機械化混成大隊という名称に変わっていた。

そして、このジャカルタに駐留する独立機械化連隊の司令部では2人の軍人がある会話を交わしていた。

「8日後の5月13日にオーストラリア大陸への上陸作戦を行うですと!？」

東南アジア方面軍機械化混成大隊の大隊長であるコジマ中佐は作戦指令書を読みながら、半ば叫ぶような声でそう言った。

アポリジニ作戦。

そう表紙に書かれた作戦指令書には、8日後に行われる予定のオーストラリア大陸に対する上陸作戦についてのことが書かれていた。

「まあ、そうカッカするな」

動揺するコジマ中佐を宥める人物。

彼の名はイーサン・ライヤー。

階級は大佐であり、この独立機械化連隊の連隊長を勤める人物でもある。

「ですが、いきなりこんな指令を出されても困りますな」

コジマがそんな苦言を漏らす。

そう、この指令はあまりにも突然なものであり、たった8日ではオーストラリア大陸に上陸させるだけの兵力を揃えるのは到底不可能だった。

しかも、旧インドネシアの兵力を使ってやれと言うのだから尚更だ。

一応、この旧インドネシアには最前線という場所だけあって50万もの兵力が張り付いているが、それらの兵力は旧インドネシアの各島に散らばっているし、使用されている装備はこの独立機械化連隊のような例外を除けば、旧式兵器ばかり。

その兵力で既にジオンの手に落ちたオーストラリア大陸に攻め入れというのが無理のありすぎる注文だった。

「ああ、分かっているさ。だが、ジャブローの連中は数字しか見ないからな。加えて、アフリカ戦線が上手くいったから少し調子に乗っている。別にモビルスーツが無くともジオンには勝てるからね」

この作戦が無謀であるのは、イーサンとて百も承知だ。

イーサンはジャブローの仲間入りをしたいという思惑を持った俗物的な部分な心情こそ持っているが、決して無能な指揮官ではなかったのだから。

「だが、ジャブローが認可した作戦な以上、なんとしてもやり遂げるしか有るまい」



「・・・ジャブローは我々を殺したがっているのはよく分かりました。それで兵力は旧インドネシアのものでやれとの事ですが、装備は新しく支給されるのですかな?」

「ああ、アフリカで鹵獲したというMSが支給される予定だよ。パイロットもな」

「そうですか。しかし、鹵獲した物ということはそれほど数が多くないのでは?」

「その通りだ。13機。それが今度我々の部隊に配属される予定のMS戦力だよ」

「・・・少なすぎますな」

連邦の情報部の報告によれば、オーストラリアに居るジオン軍のMSはダーウィン基地に配属されている機体だけで20機、オーストラリア大陸全体では100機をゆうに越えるとのことだ。

その情報は何処まで本当なのかは当事者であるジオン軍にしか分からないが、少なくともそれより少ないという事は絶対ないと東南アジア方面軍司令部は判断しているし、コジマやイーサンもまたそのように考えている。

そんなところに13機のMSが加わったところで、戦局に大きな影響を与えられるとは到底思えなかった。

「それと今回投入する兵力は30万との事だ」

「30万!?旧インドネシアの6割もの戦力ですよ!!」

コジマは目を剥いて驚く。

30万という兵力はこの旧インドネシアに配置されている兵力の

6割に値する。

もしこれらの兵力が今回の上陸作戦で掃り潰されてしまえば、旧インドネシアの防衛は不可能とまでは言わないが、確実に困難となるだろう。

「そうなるな」

「そうだとするならば、あまりにも無謀で無意味です。こちらから反対はしなかったんですか？」

「したさ。だが、どうやらジャブローの……特に政治家連中が騒いでいるらしくてな。自分達の国土に敵が居るのが我慢ならぬらしい」

「次の選挙に落ちるのが怖いだけでは？」

コジマがそんな皮肉を言う。

何度も言うようにこの戦争を始めたのは連邦であり、しかも地球に侵攻されるという開戦前の政治家が予想していなかった事態にまでなっているのが現状だ。

もし万が一にもジオンに負けたりすれば、現在の政治首脳部は失脚するだろうし、だからだと戦争を続けたりすれば国民の中で厭戦気分が巻き起こってやはり失脚する。

つまり、現在の連邦の政治家首脳部が生き残るには短期決戦でジオンに勝つ他には無いのだ。

それでもどうにかピンソン計画とV作戦の成就を待つ予定だったようだが、アフリカで連邦軍が勝利したことで、もっと短期に戦争が終結できるのではないかと勘違いしたらしい。

確かに短期に戦争が終結すれば政治家の傷も浅くなるが、そんな政治家の事情に付き合わされる軍人からしてみれば堪ったものではなかった。

もつとも、民主主義の軍隊という事情もあるので、仕方のない部分

もあるのだが、少なくともこのような事情を将兵が知れば確実にキレるのは間違いない。

「しかし、先程ライヤー大佐が仰ったようにジャブローが認可した以上はやるしかありませんが・・・将兵のためにも出来る限りの事はやらねばなりませんな」

「・・・」

イーサンはコジマの言葉に沈黙を以て返した。

U C 0 0 7 9 年 5 月 9 日 風邪

◇宇宙世紀<sup>u.c.</sup>0079年 5月9日 ガダルカナル島 病室  
激戦の続くガダルカナル島。

のび太達が進出してから既に2週間が経過していたが、依然としてラバウル（時にはポートモレスビーからも）から激しい空襲を日夜間わずに受けており、パイロットやこの島に進出した1万人ものジオン軍将兵は忙しい日々を送っていた。

だが、この島はラバウル程ではないが、赤道に近いためにこの時期でも蒸し暑く、更に南洋特有の環境によって将兵達の体力をどんどん削っていく。

特にコロニー内の調節された環境に住んでいたスペースノイドにとって、この環境に慣れることは実戦以上に過酷なことであり、次々と体調不良者が続出する結果となっていた。

地球の環境に普段から慣れ親しんだアースノイドはそれよりは大方ましであったが、それでもこの南洋特有の灼熱地獄に慣れていない人間はスペースノイド同様に体調を崩していく。

そして、その中にはのび太の姿もあった。

「あーあ。見事に風邪引いちゃったなあ」

ベッドに横たわり、点滴を打たれながらのび太はそう呟く。

油断していた。

実はこのような赤道近くの場所に来たのは今回が初めてではない。

以前、ペコの一件で中央アフリカを100キロ程歩いた時にこの赤道付近の蒸し暑い空間は経験していた。

しかしだからこそ、のび太は大丈夫だと勝手に錯覚してしまい、体調管理を怠ってしまったのだ。

まあ、仮にアフリカの一件が無かったとしても、防げたかどうかは分からないし、もしかしたら慣れなかつた分、今の状況より更に悪化していたかもしれないが、それでも体調管理を怠ったという事実を変

わらない。

(こんなときに敵が攻めてきたりなんかすれば最悪だな)

のび太は普段より働かない頭で最悪な展開を思い浮かべる。

この施設は一応、赤十字の紋章を屋上に掲げているが、だからと言って攻撃されない保証など無い。

何故なら、頭に血が上った人間や柄の悪い人間などは平然とそういった施設も爆撃したりすることはするし、現にこの前そのようなことをされている。

更に言えば、仮にわざとじゃなくとも流れ弾かなにかで吹っ飛ぶことも十分考えられるのだ。

しかも、ここは最前線であり、いつ空襲されるか分からない上に、これまで何十回もの空襲を実際に受けており、とてもではないがのんびり寝てなどいられない。

しかし、風邪で上手く体が動かないというのも確かであり、のび太はどうしようか非常に迷う。

そんな時、病室の入り口にドアにノックの音が鳴り響く。

「どうぞ」

のび太が入室を促すと、同僚である少女——タリア・ロウラン特務准尉とその兄——トイ・ロウラン少尉が入室してきた。

「やっほー、のび太！元気にしてるう？」

「少しうるさいぞ、タリア。ここには他の患者も居るんだ。静かにしろ」

トイはタリアに注意をしつつ、のび太に向かってこう言う。

「元氣・・・ではなさそうだな」

「ええ。迷惑を掛けて本当にすいません」

「いや、構わん。空襲があつたら俺達でなんとかしよう。だから、お前は安静にして体を休めてろ」

「・・・ありがとうございます」

「では、俺はこれで失礼する。行くぞ、タリア」

「え〜！まだ私、ノビタとなにも話してないよ〜」

「馬鹿。お前が騒いだりなんかしたら、ノビタの症状が悪化しちまうだろうが。ほら、さっさと来い」

「そんなあ」

タリアの軽い悲鳴を聞き流しつつ、トイはタリアを連れて退室していった。

「あはは・・・」

のび太はそれを苦笑しながら見ていたが、同時にこの一時の平穏が何処まで続くか不安に思っていた。

（出来ればもう少し続いて欲しいけど、無理なんだろうなあ）

戦争で平穏が続くということはほとんどない。

有ったとしても、それはまやかしの物となるだろう。

加えて、ここは最前線なのだから尚更だ。

しかし、例えまやかしであったとしても、平穩というものは長く続いて欲しいものだとのび太は思う。

戦争という狂気な空間の中では、平穩なのとそうじゃない空間では、ほとんどの人間が前者を望むであろうから。

(まあ、今はトイさんの言う通り、今はゆっくり休もう。退院できな  
きや元も子も無いし)

のび太はそう思いながら、眠りへと着いた。

◇ニューブリデン島 ラバウル 地球連邦南太平洋方面軍司令部  
ニューブリデン島ラバウル。

その場所は旧世紀の太平洋戦争で激戦地となったソロモン諸島の  
一島であり、日本軍の一大要塞となった場所だ。

有名なラバウル航空隊もこの島に配属され、太平洋戦争前半期は事実上、日本軍でも最強の航空隊となっていた。

そして、太平洋戦争が終わると、日本軍は撤退し、その後は西暦はおろか、宇宙世紀という新たな時代が到来した後も放置気味だったラバウルだったが、この一年戦争によって状況が変わる。

もつとも、開戦序盤の時点ではラバウルが重要になることはなかった。

戦場の舞台は宇宙であつたし、オーストラリアに敵が降下した後もオーストラリア大陸に配置された連邦軍でなんとか出来るかと連邦の陸海空軍は考えていたからだ。

しかし、そのオーストラリア大陸は陥落し、次に重要拠点として急ぎ整備したニューカレドニア島やポートモレスビーも、前者は陥落、後者はまだ陥落していないが、それも時間の問題というところまで迫ってしまった。

その為、連邦軍はポートモレスビーの後方拠点としてラバウルを整備することになり、今に至るといふ訳である。

さて、そのラバウルの存在するニューブリデン島には2万人の連邦兵が籠っており、日々ガダルカナル島に進出したジオン軍とソロモン諸島を舞台に激戦を繰り広げていた。

「ジオンの連中め!!よくも派手にやってくれたな!!」

ラバウル基地の司令官であるコウサク大佐は破壊された航空機を見ながらそのような罵声を溢す。

この基地からは日々航空機が発進して、ガダルカナル島のジオン軍に対して空爆を行っていた。

が、ガダルカナル島のジオン軍も別に対空戦闘だけを行っているとはいふ訳ではない。

反撃としてこのラバウル基地にも空襲を行っていたし、実際にこうして連邦軍に被害も出ていた。



「まあ、落ち着きましよう」

のんびりとした口調でそう言ったのは、シマダ中佐。

このラバウル基地に駐留する艦隊の司令官だったが、偶々艦隊から離れている間に空襲が起きたことで、コウサク大佐が居る防空壕へと避難していたのだ。

元から何処かのんびりとした感じのある人間であったが、そのような口調は当然の事ながら気が立っているコウサク大佐の反感を買う。

「他人事だと思つて調子に乗りおつて!!だいたい海軍がガダルカナル島のジオン軍の補給路を絶つてくれれば、こんなことにはならなかつただろうが!!」

コウサク大佐は怒鳴る。

同じ連邦軍と言っても、コウサクは陸軍で、シマダは海軍。

幾ら階級が上とはいえ、組織が違う以上、コウサクはシマダを殴り付けるわけにはいかないのだ。

その事が癪に触り、そのような暴言を吐いてしまっていた。

もつとも、海軍がガダルカナル島の補給路を絶てば、ラバウルへの空襲を防ぐことは出来るだろうし、上手く行けば太平洋戦争同様にあの島を（ジオン軍にとつての）餓島に変えられるかもしれないというのも確かなので、コウサクの言い分もそれほど間違つてはいない。

が――

「無茶を言わないで頂きたいですな。向こうは海路ではなく、空路を選んでいるのです。そして、その空路が敵の制空権内な以上、それを遮断することは我々海軍には不可能です」

そう、今は旧世紀と違って空路でも補給は可能なのだ。

もつとも、最初はオセアニアのジオン軍も補給に貴重な自前の航空機を使うのをケチつて、貧乏国家特有の『もつたない精神』を發揮

し、シドニーに残っていた船を補給に使っていたが、それが連邦海軍の潜水艦によつて沈められたりしたことにより、慌てて空路へと補給路を変えたという経緯があるのだが。

まあ、それはともかく、補給が空路に移つてからは連邦海軍が出来ることはほぼ全く無かつたと言つても良い。

なにしろ、敵の制空権下で堂々と艦船を航行などさせたら沈められることは確実だし、潜水艦には航空機の撃墜手段などないのだから。

「それでも文句を言われるのであれば、空軍に言つていただきたい」

「・・・ちっ」

コウサク大佐は盛大な舌打ちをしながら、その場を去る。

そして、それを見たシマダは溜め息をつきながら艦隊の無事を確かめるために港へと戻つていった。

UC0079年 5月13日 ダーウィン基地陥落

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 5月13日 オーストラリア大陸 ダーウィン近郊 沿岸レーダー施設

ダーウィン基地の近郊には占領後に据え付けられたジオン軍のレーダー施設が存在する。

宇宙世紀時代のレーダーは当然の事ながら旧世紀のものより高性能であり、その気になれば無人で運用することも出来るが、それだと何らかの妨害手段を施されれば、危機を察知しにくいとのことで人員が配置されている。

もつとも、ミノフスキー粒子の登場によってレーダーの性能がダウンさせられるケースが多くなった為にレーダーそのものの重要性は戦前よりも落ちていたが、それでも有効な探知手段であるのは間違いないためにレーダーは依然として運用されていた。

「・・・あれ？」

このレーダー施設の要員の1人であるジオン軍兵士はモニターに映った違和感に気づき、声をあげる。

「どうした？」

その声を不審に思ったのか、その兵士の上官が声をかけてきた。

「いや、いまレーダーに何か映ったような気がしまして・・・」

「なに？」

その兵士の報告に、上官はその兵士が見ていたモニターを覗き込む。

だが、そこには何も不審な点は映っていない。

「ミノフスキー粒子は確認できないな。となれば、レーダーの性能が下がっているということもない。本当にこの状態で何か映ったのか？」

「いえ、もしかしたら見間違いだったのかも・・・」

兵士は自信なさげにそう言う。

まあ、実際、モニターに映った光点はほんの一瞬で消えたので、そういう反応をするのも無理はなかった。

「はつきりしないな」

上官は眉をしかめる。

通常、こういった僅かな異常は上に報告する決まりとなっているのだが、誤作動だったとなると余計な混乱をもたらした者として司令部から睨まれてしまうケースも多々あるのだ。

だからこそ、上官は上に報告するかどうかを迷ってしまった。

「すいません。それで上の方に報告はしましょうか？」

「そうだな・・・」

その上官は少し考え込むような仕草をするが、これが致命的な失敗だったと気づくのは、その直後のことだった。

「!? レーダーに反応!!」

レーダーが物凄い勢いでこちらに接近する物体を捉えたのだ。

その数はどう見ても30は越えており、しかも何個かはこちらへと向かってくる。

「この速度と反応・・・これはミサイルです!!」

「迎撃しろー!」

このレーダー施設の周辺には自衛手段として迎撃用の小型ミサイルが配備されており、上官はそれを発射するように命じる。

だが――

「間に合いません!」

そして、その直後、飛び込んできたミサイルが起爆し、この場に居た者達は軒並み吹き飛ばされた。

◇ダーウィン基地 周辺

「不味いな! 戦況は完全に遅れてる!!」

そう言いながら、アムロは愛機であるトリコロール色のガンダムを駆り、120ミリマシンガンを使って連邦の61式戦車を2両程沈黙

させる。

あの初撃によってリーダー施設やMS格納庫などを破壊され、しかも使われたのがサーモバリック爆弾だったということもあって、MS格納庫に収容されていたMSはほとんど戦闘機能を焼失してしまう。

そして、その後、連邦軍は第二派の攻撃隊を差し向けて、ミノフスキー粒子をこの辺り一帯にばら蒔いて通信手段を妨害しながら、爆撃を行って戦力を削いでいき、その空襲の1時間後には何万人もの連邦軍が強襲上陸を行ってきた。

幸い、アムロの機体はどうか無事であり、アムロ自身も空襲の被害をなんとか逃れたことから、直後にやって来た連邦軍を迎え撃つことに成功したが、あまりにも数が多すぎてアムロと言えども後退せざるを得なくなっている。

しかも、上陸前の空爆によってダーウィン基地所属の2万人のジオン軍将兵達はその戦闘能力を半減させており、上陸してきた連邦軍に対してまともな反撃を行えている部隊は全体の3分の1程という惨状もまたアムロへの負担を大きくする要因となっていた。

「!? 弾切れか!」

持っていた120ミリマシンガンの弾が切れる。

しかも、予備のマガジンは既に使いきってしまったっており、再装填するにはMS用の弾薬庫に直接向かうしかないのだが、この状況でそんなことをするのは自殺行為だった。

何故なら、生き残った少数のMSということもあるのか、敵は執拗にこちらに攻撃を掛けていたのだから。

幾らガンダムが通常のジムより遥かに頑丈とはいえ、これだけの砲火の直撃を喰らったりしては堪らない。

一旦、近くに存在した窪みに隠れて連邦の砲火の射軸から外れつつ、アムロは考える。

(さて、どうするっ…もうやれることは少ないぞ)

この戦場の敗色は濃厚だ。

アムロがこの状況下でやれることなど、ビームサーベルを持って尚も敵と戦うか、それとも撤退するぐらいしかない。

(司令部ともミノフスキー粒子のせいで通信は途絶しちやったし補給も無理。となると、撤退するしかないか)

もうこの状況では戦況の建て直しは不可能。  
そう考えたアムロの思考は撤退へと傾いた。

(もし建て直すことが出来たら僕は敵前逃亡の罪で銃殺刑だけど、その時はその時だ)

アムロは2日前にシドニーに帰ってしまい、メイと彼女についていった何人かの兵士達を羨ましく思いながら、後退するために敵の砲火を掻い潜ながら南下を始める。

——ダーウィン基地が連邦軍によって占領されたのは、それから2時間後の事だった。

◇ダーウィン基地近郊

その日の夜。

占領したダーウィン基地の近くで独立機械化連隊は野営を行いながら休息を取っていた。

「くそっ！白い悪魔め!!」

だが、その連隊長の司令室ではイーサン・ライヤー大佐が被害報告書を見ながら罵声を溢す。

この独立機械化連隊は上陸後、敵のMSが暴れているとの報告を向けてそのMSと戦うこととなったのだが、それが彼らにとっての最大の不幸と言えた。

何故なら、その暴れているMSというのが、よりにもよって白い悪魔（連邦側の呼称）ことアムロ・レイのガンダムだったのだから。

そして、交戦した結果、彼の率いる独立機械化連隊は6割強の戦力を消失、しかも与えられたMSに至ってはビーム状の剣（ビームサーベルのこと）によって全機を喪失するというとんでもない損害を被ってしまったのだ。

このたった一機によって与えられた被害は、ジャブローの仲間入りを果たしたい彼からすれば、かなり大きな失点だと言える。

「まさか、これほどの損害を被るとは・・・勝利の代償にしてはあまりにも大きすぎました」

コジマ中佐もまた苦い顔をしながらそう言う。

ちなみに彼の指揮するコジマ大隊は、連隊の中でも一番被害が少なかったのだが、それでも大隊の3割の戦力を消失しており、軽微な損害とはとても言えない状態となっていた。

「しかし、結果としてあの白い機体を撃退することは出来ました。これは連隊にとっても大きな戦果と呼べるのでは?」



「・・・前にも言ったが、ジャブローの連中は数字しか見ない。奴等からすれば、今の私は最新鋭の装備を与えられながらたった一機のMSによって大損害を出した無能な人間だろう」

コジマの言葉に、イーサンはそう返す。

そもそもコジマとイーサンでは戦争の見方が異なる。

コジマは純軍事的な観点から物事を見ており、そもそもエアコンが嫌いなこともあつてジャブロー入りなどはなから考えてもおおらず、純粹にこの戦争に勝つことを目指している。

まあ、その為に汚いことをやるのはお断りだったが。

一方、イーサンは戦果を挙げてジャブローの仲間入りを目指しており、例え勝利を得てもそれに見合わない程の損害が出てしまえばそれは彼にとっての勝利とは言えない。

それでも普段ならば勝利を得さえすれば、イーサンも多少大きな損害が出たとしても問題ないと考えていただろう。

ジャブローの人間にとって勝利という事実はなによりも重いのだから。

しかし、たった一機のMSを撃退したという結果と戦力の6割喪失という結果では、書類だけを見れば明らかに後者の結果の方が重いので、イーサンのジャブロー入りは事実上遠のいたことになるのだ。

「・・・」

「・・・まあいい。過ぎたことを言っても仕方があるまい。失点はいずれ取り返せるだろう。それより今後のことだが、我々は急ぎ戦力を回復させなければならぬ」

「・・・そうですね。しかし、MSは今回の上陸戦で全て失いました。受け取るとしたら、従来の戦車や装甲車になります」

イーサンの言葉にコジマはそう返す。

勿論、それだけではない。

連隊の戦力6割喪失という損害はあまりにも多すぎるために、如何に国力が大きい連邦といえども再建には多少の時間が掛かる。

少なくとも1週間は再建のために全く動けないだろう。

しかも、補充戦力の中にはMSは当然無く、上陸前より戦力がダウンするのは明らかだ。

「そういうことだ。これからも厳しい戦いになるだろう。だが、我々はそのような犠牲を払ったとしても、ジオンに勝利しなくてはならない」

「・・・はい」

コジマは一瞬の沈黙の後、イーサンの言葉を肯定した。

UC0079年 5月16日 不満

◇宇宙世紀0079年 5月16日 ソロモン諸島 ガダルカナ  
ル島

「また空襲が激しくなりましたね」

のび太は隣に居たトイ・ロウラン少尉にそう話す。

風邪を引いて入院したあの日から1週間が経過し、のび太は既に退院して戦列に加わっていた。

しかし、その頃には空襲は以前よりも激しくなっており、相変わらずのび太達は忙しい命懸けの日々を送っている。

「ああ、まったくだ。以前は1日に多くても3回。日によっては1回も来なかったのが、今では当然のように1日に3回来ているからな」

トイは疲れたような表情で空を見上げる。

ここ連日の空襲の迎撃によって、彼と彼の機体はかなり疲れていた。

幸い、補給は今のところ滞りなく来ていることから、機体は万全に機能しているが、人員の補充はほとんど来ず、進出した当時は1万人程居たジオン兵は今や8000人にまで減っている。

「これだけ激しい攻撃を行ってくるということは・・・来るんですかね？ここに敵が」

「分からん。だが、オーストラリアに敵が上陸したと聞いてるから、ついでに攻めてくるということは十分有りうるな」

「・・・それは不味いですね。こっちは疲れてますし」

のび太は不安げな表情をしながらそう言った。

ただでさえ過酷な環境なのに加えて、前述したようにガダルカナル島のジオン軍は空襲によって消耗しており、兵隊はかなり疲れている。

おまけに敵の攻撃が以前より激しさを増している上に増援もほとんど来ないことで士気も下がり始めている。

ここで何万もの敵が上陸したりしてくれば、とても耐えきれないだろう。

のび太は一パイロットにすぎないが、それでも兵士達の様子を見ればそれくらいのは簡単に分かった。

「ああ、みんな疲れてる。だからこそ、せめて人員の補充はして欲しいんだがな」

人員の補充が出来れば、今の過酷なローテーションも多少はなんとか出来るかもしれないし、増援が来たとなれば士気も多少なりとも上がるだろう。

だが、現在は無理だ。

何故なら、オセアニア方面軍のお膝元であるオーストラリア大陸に敵が攻めて来ているのだから。

おそらく、兵力はそちらに取られるので、こちらに回す余裕などない。

「・・・それと、あまり大声で言いたくはないが、今後は補給も満足に届かないかもしれない」

「ええ！どうしてですか!?!」

「声が大きいぞ。・・・簡単だよ。俺達の拠点の大元がそれどころではないからさ」

このガダルカナル島はオーストラリア大陸から補給を受けており、宇宙から直接補給されているわけではない。

これはガダルカナル島が位置的に最前線であるので、HLVが撃墜される危険性があり、一旦オーストラリアに下ろしてそこを経由して補給した方が安全だと考えられていたからだ。

しかし、逆に言えばオーストラリアに何かあればガダルカナル島に補給が届かない危険性が高いという事でもある。

そして、現在、オーストラリア大陸には連邦の大部隊が上陸しており、もしこちらに更に物資が必要になればガダルカナルへの補給は後回しにされる可能性が高い。

「な、なるほど。でも、どうするんですか？人が来ないどころか、弾も食べ物も来ないなんてことになったら、みんなやる気が無くなっちゃいますよ?」

そう、ただでさえ蒸し暑いこの環境の中で兵員の補充もなく、激しい空襲を凌ぐなんてことをやっているのだ。

そんなときに補給も来ないなんてことになれば、ガダルカナル島の兵士達の士気は更に落ちるだろう。

いや、それだけならまだ良い。

最悪なのが、食料や医薬品がともに届かずにジオン軍の兵士達が次々と戦病や飢餓で倒れてしまうことだ。

そうなったら、この島は旧世紀の太平洋戦争の時みたく餓島と化してしまう。

「そんなことは上の方だって分かっているさ。俺達が不安に思うから口に出さないだけでな」

「でも、ここにだって最前線なのに・・・」

のび太は若干の不満を口にする。

何度も言うようだが、ガダルカナル島は最前線なので激しい攻撃が行われることも多い。

そんな島に進出してから既に3週間が経過したが、一向に兵員の補充は来ず、更にはのび太にしても風邪で入院した以外はまともな休みを取ったことが無かったのだ。

それでもこの島に居る人間が頑張っていた事は知っていたので、その事に対して不満を抱くことは無かったが、この島に進出させておきながら一向に増援を寄せないオーストラリア大陸に居る上層部には僅かながら怒りを覚えていた。

だが、そんなのび太の不満をトイはこう切って捨てる。

「お前の気持ちは分かる。だが、それを周囲に溢すのだけは止めておけ。さつきも言ったように味方が不安に思うだろうし、短気な上官なら殴ってくるからな」

「・・・はい」

「よし。じゃあ、今のうちに英気を養っておけ。今日の空襲は終わらだろうが、明日から更に激しい空襲が行われるかもしれないからな」

「分かりました」

のび太はそう言いながらトイに対して敬礼し、兵舎へと戻っていった。

◇宇宙要塞『ソロモン』

「連邦はオーストラリアに橋頭堡を築きつつある、か」

宇宙要塞『ソロモン』の一室。

ここでは宇宙攻撃軍の司令官ドズル・ザビ中將が地球方面軍から寄せられてきた報告書を読んでいた。

オーストラリアに上陸した連邦軍は占領したダーウィン基地を基点として橋頭堡を築きつつある。

今は小さい範囲で大人しくしているが、橋頭堡が磐石になれば内陸に向けて進撃を開始するだろう。

ドズルはそう判断していたが、一番大事なことはそれでは無かった。

「思ったより早くにMSの優位が無くなってきているな」

原作で連邦軍がジオン軍に対して初めて戦略的勝利を納めたのは6月の事だ。

この世界ではコロニー落としが無い分、連邦にも国力・戦力的に余裕があり、既に何度か戦略的勝利を納めている戦いはあったが、ここ

まではつきりした戦略・戦術的敗北は無かった。

ということとは、これ以降の地球侵攻作戦はかなり厳しいものになることを意味している。

もつとも、残ってる侵攻作戦など北米方面軍の中南米侵攻やジャブロー侵攻作戦くらいなものなので、厳しくなると言っても、多少難易度が上がる程度かもしれないが。

「となると、早めに決着を着けた方が良いが、ジャブローの位置が分からない以上は難しいな」

ドズルはそう言いながら、最近開発され、ロールアウトされたという新型MSについての資料を見る。

「新型機のジムⅢは既にロールアウト。配属先は主に北米だが、こちらにも少し回してくれないと制宙権を握り続けることは難しいぞ」

そう、最近前線に投入されたジムシリーズの最終型であるジムⅢは既に開発が完了して生産も開始されているが、その配属先は主に北米だ。

これは中南米侵攻作戦に使用するためだが、ドズルはそれをこちらにも回してくれる事を希望していた。

情報によると、連邦のビンソン計画は完熟訓練も含めて7月一杯で完了し、更には新型宇宙戦闘機であるセイバーフィッシュⅡが開発され、ビンソン計画によって造られた空母に載せられているとの事だ。

レビル派閥を中心とした宇宙軍はおそらくV作戦成就を待つて宇宙に侵攻するつもりだろうが、政治家によってV作戦が完了する前に宇宙侵攻を強いられる可能性も十分存在する。

そして、仮にそうなった場合、ビンソン計画が完了した直後である8月に攻めてくる可能性が非常に高く、特に宇宙戦線で最前線地帯となっているここソロモンやルナツーが狙われる可能性は高い。

更に連邦の新型宇宙戦闘機セイバーフィッシュⅡは原作に無かつ



た宇宙戦闘機なので、この戦闘機がどのような性能か分からない以上、こちらも最新鋭のMSを持って事にあたりたいというのが本音だった。

しかし、その要請はギレン・ザビによって却下される。

『確かにソロモンは要衝だが、今のところ最前線になっていない。ならば、ジムⅢは最前線であり、尚且つ近々の作戦でMSが多く必要な北米への配置を優先する』

というのがギレンの解答だが、別にそれが間違いなどとはドズルも言わない。

最新鋭機は最前線である場所に配置されるべきという考え方は、軍人ならばどんな馬鹿でも分かる理屈であったからだ。

しかし、ドズルも宇宙要塞『ソロモン』の司令官であり、分かるからと言って簡単に引き下がるわけにもいかない。

「6月に入ったらもう1回兄貴にジムⅢの配備を頼んでみよう。その頃には中南米侵攻作戦も終わっているだろう。それに・・・仮に8月にこのソロモン要塞に侵攻してきたとしても、MSが無い以上は内部の占領は困難だろう」

そう、原作ではチェンバロ作戦でソーラ・システム発動後に連邦軍のモビルスーツ隊がソロモン要塞内部に突入して占領を計った。

しかし、逆に言えばMS抜きにはこのソロモン要塞陥落は困難なのだ。

なにしろ、ソーラ・システムですら焼くことが出来ないソロモン要塞内部にはMS部隊が大量に潜んでいるのだから。

まあ、MS以外には歩兵が一応は突撃できるだろうが、それは言うまでもなく自殺行為だ。

なので、もし万が一、連邦の艦隊がソロモンに接近して、いざソロモンに突入して攻略するといった事態になったとしても、その時は要

塞内部に籠ってしまえば良い。  
ドズルはそう考えていた。

UC0079年 5月21日 見えない危険

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 5月21日 オーストラリア大陸 オセアニア方面軍司令部

「オーストラリア大陸西部は捨てる」

オセアニア方面軍の司令官ダグラス・ローデン大佐は戦況図を見て開口一番そう結論付ける。

それを聞いて参謀達は当然ざわめいた。

「放棄、ということですか？」

「そうだ。急ぎ西部に残っている味方を撤収させろ」

「しかし、西部の連中はまだ十分戦力を残しております」

「西部と東部の間の中央を突破されたらどうする？敵は北西部一帯を確保しているんだぞ」

そう、オーストラリア北西部はダーウィン基地以外にほとんど障害は存在せず、連邦軍はダーウィン基地に橋頭堡を築いた後、無人の荒野を駆けるかのごとく、あつという間に北西部一帯を占領した。

無論、ジオン軍とて黙って見ていた訳ではなく、ゲリラ戦で連邦軍に出血を強いていたが、それでも圧倒的な物量を持つ連邦をどうにか出来る程ではない。

加えて、ドズルの見立て通り、ジオンのMSの優位は徐々に無くなってきており、更にこのオーストラリアはジムⅢの配備は行われていないので、撃破されるMSの数も段々多くなってきた。

もつとも、アムロに配備されたガンダムやのび太に配備された量産型ガンダムのような機体は性能もあつて依然として敵を蹂躪し続け

ていたが、元々これらの機体は少数生産であり、局地戦では勝てても戦略的にはどうにもならない。

「それに連邦と我々の戦力差も問題だ。大尉、そこら辺を説明してくれ」

「はい」

ダグラスに促されたジェーン・コンティ大尉はそう言いながら、現在のジオンと連邦の戦力差についての説明を始める。

「現在、オセアニア方面軍は全て合わせて30万人居りますが、このうちオーストラリア大陸に居るのは25万人。対して、連邦は増援を含めて約40万人居ります」

25万人対40万人。

一見して、頑張ればなんとかかなりそうな戦力差ではあったが、事はそう簡単ではない。

なにしろ、ジオンの兵力は広い範囲に散らばっているが、連邦は狭い範囲に密集しているのだから。

「そして、連邦はこの北西部一帯に密集しているため、我が軍では撃滅は困難です」

そう、狭い範囲に大量の兵力が密集しているということは、それだけその限定された範囲での戦力が高いということだ。

まあ、逆に言えばこれら一帯をまとめて吹き飛ばせるような大量破壊兵器でも使用すれば一網打尽にされてしまうのだが、あいにくそんな兵器はオセアニアどころか、地球方面軍の何処にもない。

よって、広い範囲に散らばっており、しかも数的劣勢なジオン軍では撃滅は困難なのだ。

「しかし、ドズル中將が後退を許可なさるでしょうか？」

参謀の一人が懸念を示す。

この地球方面軍は宇宙攻撃軍の傘下に存在する組織であり、大幅な戦略の変更はドズル中將の許可を得なければならぬのだ。

だが、これについては既にダグラスは手を打っていた。

「それについては問題はない。既にドズル中將からは許可を得ている」

「そうでしたか。しかし、そう簡単に占領した場所を明け渡すというのも・・・MSを使ってなんとか出来ないのですか？」

「無理だ。元々、このオセアニア戦線には全部合わせてもMSは150機程しか居ないからな。数の暴力で押し潰される可能性が高い。それに最近は連邦も対策を立てているみたいだしな」

「・・・」

「閣下。オーストラリア大陸についてはそれで良いとして、ガダルカナル島はどうしますか？」

そのやり取りを見かねた別の参謀が話題を変えてきた。

「既に増援の催促が山のように届いておりますが」

「ガダルカナル島、か」

ダグラスはその島の名前を聞いて嫌な顔をする。

なにしろ、その島の守備隊の隊長はロック・ホールデン少佐なのだ

が、彼はザビ派の人間でありダグラスの政敵だ。

それでもダグラスは私情を挟むような性格ではないので、補給はちゃんと送っていたが、兵員については全く送っていなかった。

兵力を使い潰されるのを恐れたからだ。

もつとも、これをガダルカナル島の将兵が聞いたらロック少佐でなくとも怒り狂うだろう。

なにしろ、彼らは現在進行形で地獄のような日々を送っているのだから。

「それは現状維持だ。ただし、最前線であるのは確かだから補給はちゃんと送ってやれ」

「いえ、しかし、ロック少佐はこうも言っています。『今度、増援要請を却下したら、宇宙攻撃軍に直談判する』、と」

これは事実上の最後通牒だった。

ロック少佐を始めとしたガダルカナル島守備隊の重鎮は一向に増援を送ってこないオーストラリア大陸司令部に痺れを切らしており、今度の増援要請を拒んだ場合、直接宇宙攻撃軍に増援を訴えるつもりだったのだ。

とんでもない越権行為だが、それほどガダルカナル島の将兵はオーストラリア大陸司令部に対して怒りの感情を抱いており、ロック少佐自身も『訴えた後に処罰されても構わない』と完全に開き直っていた。

「……」

ダグラスは冷めた目線をする。

『そこまでしてこっちの貴重な兵力を削りたいのか!!』、と。

だが、彼もまた分かっていなかった。

ガダルカナル島の将兵がどれだけ過酷な環境の中で戦っているのかを。

同じ南半球に存在していても、赤道に近いガダルカナル島と遠いシドニー付近では、気温が全く違う。

例えば今の時期、シドニーは晩秋で緯度的に日本の晩秋とほぼ変わらない気温だが、ガダルカナル島はこの時期でもかなり蒸し暑く、ただそこに居るといっただけで将兵に負担を強いるのだ。

そんな中で戦争をするとなれば、どれだけ過酷かは現地に居れば容易に想像できるのだが、元々スペースノイドで地球の気候に疎くシドニー付近の秋の空気に慣れきってしまったダグラスにそれを想像するのは困難と言えた。

いや、そもそもダグラスの判断には増援を要請する相手がザビ派ということで、かなりの偏見が混じっている。

だが、これは仕方がない。

全くの偏見無しで相手を見る人間など居ないのだから。

百歩譲ってそれが出来るのはニュータイプくらいなものだろうが、残念なことにダグラスはオールドタイプだった。

「どういたしましょうか？」

参謀にそう尋ねられてダグラスは考える。

(ここで無視をするという選択肢は無いな。向こうが訴えるというのが本気がどうかは分からないが、もし本当だったら不味いことになる)

もし仮に訴えられた場合、比較的後方に居るダイクン派の自分が最前線に居るザビ派の人間に全く人員の増員を送らなかつたことがバレてしまうので、そうなれば自分は更迭されるかもしれないし、ザビ派がダイクン派を攻撃する材料にもなってしまう。

なにしろ、ザビ派の少佐の居るガダルカナル島が最前線であり、自分が後方に居ることは、地図を見れる人間であれば軍人でなくとも分かるのだから。

しかも、現在は中立派閥でからさえダイクン派は厳しい目を向けられているのだ。

もしそういった派閥が自分が戦場に政争という名の私情を持ち込んだと見なせば、中立派閥は完全に反ダイクン派となってしまうかもしれない。

(そうなれば、他のダイクン派にも迷惑が掛かって距離を置かれてしまうかもしれない)

それは不味い。

ダグラスには自分の掴んだ情報(シャア・アズナブルがキャスバル・レム・ダイクンであること)を他のダイクン派に伝える義務があるのだ。

そうなる前に距離を置かれてしまつては、苦し紛れの戯れ言と見られてしまうかもしれない(もつとも、ダイクン派は追い詰められているので、藁にもすがる思いでその情報に飛び付く可能性が高かったのだが、ダグラスはそう考えてはいなかった)。

ちなみに彼らがキャスバルに辿り着いたことはキシリア機関やジオンの諜報部はまだ掴んでいない。

キシリア機関はV作戦や「箱」の件を突き止めるのに忙しかったし、諜報部の方は開戦時の混乱を沈めるのに奔走していたからだ。

加えて、キャスバル本人が立つ気がないのとダグラスが穏健派なのもあつて、仮に気づいたとしても過激な行動を起こす可能性は低いという楽観も存在していた。

まあ、ダグラス個人に関しては確かにその通りであり、キャスバルを立てるのもあくまでダイクン派の政治的な復権の為だったので、そこまで過激な方法を取る予定はない。

しかし、それがダイクン派に伝わるとなるとクーデターを起こしてもザビ派の人間を排除しようとする人間もダイクン派の中には確かに居る(その筆頭がアンリ・シュレッツァー)ので、その楽観はかなり危険なものでもあつた。



だが、この事にはザビ家は当然の事として、ダグラス本人ですら気づいてはいない（正確には気づいているが、自分の信頼のおける人物だけに話せば大丈夫だと思っている）。

「大佐？」

「・・・ああ、すまない。少し考えていてな。ところで、ガダルカナル島の増援の話に戻るが、そうだな。1個連隊（3000人）程を送つてやれ」

「よろしいのですか？」

「そこまで言われてしまつては仕方があるまい。ただし、『我々の地域も最前線になってしまつているので、これ以降の増援は不可能』。そうも伝えておけ」

「はっ。承知しました」

「それでは大陸西部の放棄。それをすぐに行動に移したまえ。以上だ、解散」

ダグラスはそう言って作戦会議の解散を告げた。

UCC0079年 5月23日 不審

◇宇宙世紀0079年 5月23日 ガダルカナル島

「ふん、やっと増援かと思ったら、あれだけか」

この島にやって来た1個連隊(3000人)の兵力を見ながら、ロック・ホールデン少佐(前話で書き忘れたが、オリキヤラ)はそのような冷めた言葉を溢す。

1個連隊が来たことよって総兵力は1万1000人となり、元の兵力である1万人よりは多少増えたものの、この程度ではどうにもならないとロック少佐は考えていた。

何故なら、ここ連日の激しくなった空襲の事を考えれば、1個連隊程度の増援など焼け石に水なのだから。

おまけにこの連隊は通常の歩兵連隊であり、ロック少佐が希望していた高射部隊ではないことも彼が不満に思う理由の1つとなっていた。

「まあ、オーストラリア大陸に敵が上陸したという話ですし、司令部の送れる増援もこれが手一杯なのではないでしょうか？」

「ふん。では、オーストラリア大陸上陸前に増援を送らなかった理由はなんだ？」

「それは・・・」

大尉の階級を着けた副官は言葉に詰まる。  
理由は簡単だ。

目の前に居る少佐がザビ派で、オーストラリア大陸の司令部の大佐はダイクン派だったから。

どう理由付けしたにしても、結局のところはそれが原因だ。

しかし、それを口に出す訳にもいかず、大尉は口を紡ぐしかなかった。

そんな大尉の様子に鼻を『ふん!』と鳴らしながら、ロック少佐はこう言った。

「俺もそうかもしれないが、結局のところ大佐も戦争中に政争にかまける俗物なんだよ」

そう吐き捨てつつ、ロック少佐はあることを大尉に尋ねる。

「ところで、北米方面軍に例の話は通してくれたかね？」

「はい。了承したとの事です。もつとも、近いうちに攻勢に出る予定なので、それが終わってからとの事です」

「そう言えば、そんな話もあつたな。まあいい、とにかく別の補給源が確保できれば良いのだ」

実はロック少佐は前々からオーストラリア大陸の司令部に見切りをつけており、北米方面軍から増援を送ってくれないかという交渉を大尉に頼んでいたのだ。

いきなりの話に驚いた北米方面軍だったが、こちらの事情を説明するとある程度は理解してくれ、中南米侵攻後で兵力に余裕が出てくれば、ビスマルクを使って出来るだけそちらに戦力を輸送すると約束してくれた。

「しかし、よろしいのでしょうか？一応、このガダルカナル島はオセアニア方面軍の所属ですよ？これは越権行為になります」

「なにを今さら。一向に戦力を送ってくれない以上は仕方ないだろう。そもそも私は宇宙攻撃軍に訴えるのを止めただけで、地球方面軍

司令部に訴えないとは一言も言っていないしな。それとも君は現状の戦力で、いま我々が置かれている事態をなんとかできる術を持っているとでも言うのかね？」

「いえ、そういうわけではありませんが・・・」

「だったら、黙って命令に従いたまえ。ああ、責任については心配要らんよ。万が一の場合は私が責任を取るからな」

ロツクはそう言いながら、部屋にあったソファアームにどっかりと座り、くつろぎ始めた。

◇北米 旧アメリカ キヤリフォルニア・ベース  
北米戦線。

そこは先月の東海岸奪還戦以来、膠着状態を見せている戦線であったが、ジオン軍は中南米侵攻のための準備を急速に進めており、既にその攻勢は数日後というところまで迫っていた。

「またやられたか・・・」

ガルマ・ザビ大佐は報告書を読み、苦い顔をしながらそう言った。そう、中南米侵攻の準備を進めていたジオン軍だったが、これに対して連邦も何もしなかったわけではない。

原作のセモベンテ隊のようなゲリラ部隊を送り込んで、こちらの補給物資集積所を破壊し続けていたのだ。

お蔭で今月の下旬に始められる筈だった中南米侵攻作戦は延期を余儀なくされ、数日後にようやく発動できるといった事態になった。

「まったく。ゲリラの数が多すぎるぞ。おまけに連中、こちらに似せたモビルスーツを積極的に使っているから、何がなんだか分からないし」

原作ではセモベンテ隊だけだった連邦のゲリラ部隊だったが、この世界では複数のゲリラ部隊が用意されており、しかも1つ部隊を叩き潰してもまた別な部隊が派遣されてくるというもぐら叩きのような戦いが延々と続いている。

しかし、それだけが問題なのではない。

一番の問題はそのゲリラ部隊にモビルスーツが着いているということだ。

当初は鹵獲品を応用しているのかと考えたが、それにしても数が多すぎるし、そもそも今回ゲリラ部隊が運用しているモビルスーツはジムⅡ（擬き）だ。

アフリカで大量に鹵獲されたジムⅠなら分かるが、主力MSであるジムⅡがそれほど鹵獲されている訳はない。

となると、次に考えられるのは連邦がこちらのジムⅡをコピーして運用しているという可能性だ。

これは有り得る話だった。

なにしろ、この世界の連邦はコロニー落としが起きていないために原作ほど疲れてはいない。

そうである以上、こちらから鹵獲したジムⅡを解析してコピーし、

実戦に投入してきたという事は十分に考えられる。

だが、ガルマはその推測を何か不自然に思っていた。

(幾らなんでもコピーするのが早すぎる。まだ5月で開戦から4ヶ月しか経っていないんだぞ)

そう、幾らコピーしたにしても、コピーして実際に生産するまでの動作があまりにも早すぎるのが気になる。

しかも、向こうはミノフスキー粒子の技術を今まで全く持っていないかったのだ。

中でも核融合炉の小型化に重要なIフィールド技術は試行錯誤の連続であり、実戦に投入できるレベルになるまでジオンでは数年の間が掛かっている。

幾ら鹵獲MSという参考になるものが有る上に、戦時ということでは技術開発速度が速まっているとは言え、Iフィールド技術がそんな短期間で完成出来るとはとても思えない。

実際、ミノフスキー粒子関係の技術があつた原作でもガンダムやガンタンク、ガンキャノンなどの試作機の完成は7月になってからだった。

(それに報告ではジムの動きが嫌に悪いとの事だが、これはコピーの過程で駆動面やOSに問題があるからだとしても、毎回毎回自爆して放射能を撒き散らすって可笑しくないか?)

ガルマはそう思う。

あまりにも不自然だったので、鹵獲して調べてみようと考えたことは何度かあつた。

だが、そのMSは軽い攻撃を加えただけであつという間に自爆していたし、物理的に取り抑えようとしてもやはり自爆して取り抑えようとしたMSに被害が出たりしたので、それは断念している。

おまけにその際に撒き散らされた放射能の処理を行う羽目になり、

幾らこの世界が宇宙世紀で放射能に関する医療技術が発展しているとは言え、その処理には一定の手間が掛かってしまい、その事も中南米侵攻作戦を遅らせる原因になっていたのだ。

「ワルシャワの件といい、連中、何を考えてる？こんな放射能を撒き散らすなんて事をしたら連中にとってもマイナスだろうに」

占領している自分達が言うのもなんだが、ここは連邦の領土だ。

そして、放射能に関する意識の低いスペースノイドと違い、アースノイドは旧世紀のように放射能を危険視する。

そこでこんなに放射能を撒き散らす真似などしたら、例え奪回しても住民の支持など得られなくなるだろう。

実際、そのようなプロパガンダをジオンは行っており、それが北米の更なる安定に繋がるという連邦にとっては皮肉な形となっている。

「もしかして、故意に自爆しているのではなく、本当に攻撃を受けて放射能が撒き散らされているのか？」

ガルマはそんな疑惑を持つ。

彼は今まで連邦が故意に自爆をしているのではないかと思っていた。

なにしろ、今まで遭遇した全機が自爆など、故意でもない限り、考えにくいからだ。

しかし、もしかしたら故意ではなく、本当に攻撃を受けて放射能を撒き散らしていたのかもしれないと一瞬考える。

が――

「いや、それはないな。この時代の動力炉は普通、安全装置がつけられている筈だし」

そう、MSには万が一撃破された際に放射能を撒き散らさないよう

に安全装置が組み込まれているのだ。

もつとも、これは宇宙世紀の第一期MSの話であり、0111以降のモビルスーツの小型化が進んだ時代になると、それらもおざなりになってくるのだが、今は第一期MSの時代であり、そういった安全装置が組み込まれている筈だった。

第一、ちよつとの攻撃を受けて簡単に爆発するような欠陥MSを連邦が投入してくるとは考えづらい。

「いや、待てよ。連邦のミノフスキー粒子技術が未熟なためにそのような事が起きてるとも考えられるか」

しかし、逆の見方もある。

この世界では連邦はミノフスキー粒子技術について（ザビ家の謀略によって）大したものを持っておらず、未熟そのものだ。

なにしろ、ルウム沖会戦まで連邦はメガ粒子砲ですら影も形もなかったのだから。

そうであるとするならば、コピーしてIフィールド技術が未熟なせいで、ちよつとの攻撃で自爆しているとも考えられるのだ。

「まあ、どちらにせよ、こういった調査はキシリア姉さんが専門だ。後でこの事は連絡するとして、僕は中南米侵攻作戦に集中しよう」

ガルマはそう言いながら、数日後に行われる中南米侵攻作戦案の最終確認を始めた。



U C 0 0 7 9 年 5 月 2 7 日 連邦の悲哀

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 5月27日 旧メキシコ

「くそっ！上の連中め!!こんなとんでもない欠陥品を寄越しやがって!!」

旧メキシコの山中。

そこでは1人の連邦兵がジムⅡ（擬き）に乗りながら盛大な悪態をついていた。

5月26日から始まったジオン軍の中南米侵攻作戦。

それは旧メキシコとカリブ海方面の同時攻勢によって始まった。

当然、旧メキシコの部隊は迎撃するわけだが、その中には彼のように連邦がジオンのジムⅡをコピーする形で作り上げたMSに乗る兵士も存在しており、ジオン軍のMSに対抗できる戦力として期待されていたのだ。

が、とある致命的な問題が存在していたことでそれは一気に変わってしまう。

そもそも連邦もジムⅡの全ての部分をコピー出来ていた訳ではない。

駆動部や装甲などの表面上のものはコピー出来ていたが、そうじゃないものも存在しており、その筆頭がOSと動力炉だった。

まずOSについてはプロテクトが掛けてある（ただし、簡単な調整ならばプロテクトを解除しなくとも出来る）のもそうだが、実を言うともう1つ仕掛けが有る。

それは正規の方法以外でこじ開けると、ウイルスが発動してOSのプログラムそのものが消えてしまう仕組みだ。

そして、その正規の方法というのはパイロットですら分からない仕組みになっている。

その為、連邦は鹵獲したジオンのOSの解析に四苦八苦しており、結局、ほぼ一からOSを作り出すという結論に達していた。

その為の学習型コンピュータだったが、これは高価な物の為、とある試作機にしか搭載されておらず、現状のジム（擬き）は連邦の技術者が急場で作り上げたOSで動いていたのだが、当然の事ながら動きは物凄く悪い。

だが、それだけならばまだ手はあった。

モビルスーツは戦車砲（150ミリ）の直撃を受けてもびくともしない造りになっているので、トーチカとして運用することも出来たのだから。

しかし、もう1つの動力炉の欠点がそれを不可能にしていた。

実はこのジム（擬き）の動力炉はIフィールドを応用したミノフスキー核融合炉ではなく、核分裂炉で動いていたのだ。

当然、これでは例えOSが万全であったとしてもジオンのMS程の出力、ひいては機動性は出せないだろう。

核分裂炉は核融合炉の前の世代の動力炉であり、核融合炉に比べると出力は明らかに劣るのだから。

そして、一番の問題だったのは核分裂炉の安全性だった。

知つての通り、核分裂炉はその構造上、核融合炉より出力もそうだが、安全性も低い。

具体的には核融合炉は確かに出力は核分裂炉より高いが、何か不具合があると、その反応が停止してしまうデリケートな存在だ。

これはこれである意味欠点ではあるのだが、少なくとも放射能を撒き散らす危険性は無いために地球にはとっても優しい。

一方、核分裂炉は核融合炉と違って連鎖反応というものがあり、何か不具合が有った時に暴走しやすい仕組みとなっている。

そして、ジム（擬き）はそれを動力炉に使っており、しかもそれを制御する筈のOSは間に合わせものでとても完成品とは言えなかった結果、攻撃を受けた際に核分裂炉を上手く制御することが出来ず、ちよつと大きな攻撃を受けたら簡単に暴走して自爆し、周囲に放射能を撒き散らす迷惑な存在になっていたのだ。

しかし、連邦はこの欠点に今まで気づかなかつた。

既にセモベンテ隊を始めとした旧アメリカに対するゲリラ部隊で

試験運用していたにも関わらず、だ。

何故か？

その理由は簡単だった。

誰も生きて帰らなかった為にその弱点が露呈しなかったのだ。

そして、その欠点が露呈しないまま彼にもMSが配られた訳だが、いざ実戦となり周りに居る仲間達が簡単な攻撃で盛大に散つていくのを見て、彼を始めとした生き残った兵士は自分達がとんでもない兵器に乗せられているのだと、やっと気づいた。

仮に今、MSが配られた事に喜んでいた過去の自分に会いに行けるのであれば、彼はその自分を思いつきりぶん殴っていただろう。

(こんな兵器で戦争が出来るか!?俺は降りるぞ!!)

その連邦兵はコクピットから外に出ることを試みる。

欠点があった以上、簡単な攻撃で爆発の起きる(しかも、放射能付き)棺桶兵器に誰も乗りたくはないし、ましてやこんな前線で乗るなど正気の沙汰ではないので、彼の行動は当たり前と言えば当たり前の行動だった。

しかし――

「あれ?なんで開かないんだよ!!」

そう、コクピットの入り口が開かなくなっていたのだ。

実は連邦はこのMSを早く実戦投入するために脱出機構を削除させていた。

その為、脱出には普通に入り口を開けるしか無いわけなのだが、運悪く直撃していた銃弾(流石に重機関銃程度ならば耐えられた)によって、その入り口は変形しており、全く開く様子がなかったのだ。

「不味いぞ!敵がきちまう!!」

彼はそう思つて無理矢理こじ開けようとする。

だが、彼は最後まで運が無かった。

何故なら、その直後に彼の機体はジオンのジムⅢに発見され、90ミリ弾を撃ち込まれた結果、彼は何が起きたのかも分からぬまま、先に死んだ仲間同様に汚い花火となつて散つてしまつたのだから。

#### ◇キャリフォルニア・ベース

「どうやら連邦は自分達の領土を守る気は無いらしいな」

ガルマは報告書を読みながら皮肉げにそう言った。

連邦のMS撃破による放射能漏れ。

それは連邦のみならず、ジオンにとつても思わぬ誤算を生み出していた。

前述したようにこの宇宙世紀には放射能に関する除染技術は確かにある。

だが、それには多少の時間が掛かるために、そうポンポンと放射能

など漏らして欲しくないというのが本当のところだ。

そして、連邦のMSの撃破による放射能漏れはジオンの攻勢を結果として遅らせる原因になっていた。

何故かと言えばそれは簡単で、MSは確かに気密性が高く、その気になれば宇宙服など装備していなくとも放射能まみれにされた場所を歩くことが可能だ。

そう、例えば宇宙戦艦ヤマトに出てくるガミラスの遊星爆弾で放射能まみれにされた地球の地上だったとしても問題なく運用することが出来る。

そして、今回、連邦のMSによって汚染された地域もジオンのMSのみならば平然と進むことが出来るだろう。

しかし、その他の兵はそうはいかない。

装甲車や戦車などは宇宙空間で運用することを考えていないので、MS程の気密性は無かったし、歩兵に至っては通常の戦闘の邪魔になるということで宇宙服すら着けていないのだ。

そんな状態で放射能まみれにされた場所に行かせればどうなるかは容易に想像がつく。

よって、流星にここで兵を放射能に汚染させるわけにはいかないがルマは旧メキシコ北部を占領した時点で進撃停止命令を出さざるを得なくなり、結果的に連邦は放射能による焦土戦術によってジオンの攻勢を止めることに成功していた。

「またプロパガンダを行いますか？」

副官のダロタ中尉がそのようなことを聞いてくる。

以前、旧アメリカに対して行った連邦のMSが放射能を撒き散らしたというプロパガンダ。

これは旧アメリカの市民にかなり有効で、この件で更に旧アメリカの市民がジオンに協力的になった程だ。

だが、今回の一件で同じようなことをしても、必ずしも旧メキシコの住民に対して同じ効果を発揮するとは限らない。

「それはその流すプロパガンダ次第だな。確かに放射能を垂れ流しているのは連邦のMSが原因だが、それはこちらが攻めてこなければそうはならなかったと言われればそれまでだからな。いや、待てよ」

そこでガルマは考え直す。

確かにこちらが連邦MSが放射能を垂れ流しているという事実を宣伝しても、連邦が『ジオンが攻撃を仕掛けなければ起きなかった問題』と言えば、旧メキシコの民衆に然したる連邦への敵対心を与えることは難しい。

何故なら、旧メキシコの住民にとってジオンは疫病神な存在と映るかもしれないからだ。

しかし、連邦のMSを危険だとは思うのではないだろうか？  
よく考えてみよう。

自分達の住宅の近くにいつ放射能を垂れ流すか分からない存在が近づいてくればどう思うか？

おそらく不安に思うだろうし、仮にガルマがその住民の立場だったら間違いなく思う。

そうなれば、今後、連邦のMSが何処かの都市に近づいた場合、その住民と少なからず揉める可能性があるということだ。

そして、それは連邦に対する嫌がらせにもなる。

(となれば、如何に連邦のMSが危険な存在か。そこを重点的に強調して旧メキシコや今後進撃する予定の中南米の民衆に伝える必要があるな)

ガルマはそう考え、ダロタに対してこう言った。

「ダロタ中尉。プロパガンダの方針が決まった。すぐに広報部に伝えてくれ」

UC0079年 5月31日 無謀な潜入案

◇宇宙世紀0079年 5月31日 宇宙要塞『ソロモン』

「ランバ・ラル少佐。入ります!」

そうやってドズルの私室へと入ってきた恰幅の良い男。

彼の名はランバ・ラル。

ゲリラ戦の達人であり、つい数日前まで重力戦線で戦い抜いてきた男である。

「おお、来たか」

「はい。重要な任務だとお聞きして地球から参った次第です」

「ああ、その通りだ」

ドズルはランバの言葉を肯定する。

実際、これから話す内容はジオンの今後に関わる・・・とまではい  
かなくとも、この戦争の終結に大きく関わる問題であった。

「単刀直入に言うぞ。ジャブローに潜入してくれ」

「ジャブローに、ですか?」

いきなり言われた重大案件にランバは目を丸くする。

それはそうだ。

ジャブローと言えば、連邦の本部であるが、その入り口はまだ見つ  
かっておらず、その入り口さえ見つかればジオンの勝利は確実だと見  
なされている程の場所なのだから。

「そうだ」

「入り口が見つかったのですか？」

「いや、入り口は見つかっていない」

「は？」

ランバは再び目を丸くする。

それはそうだろう。

ジャブローは地下に存在しており、入り口以外から入ることは不可能と言っても良い。

なので、入り口が見つからない場所に潜入しろと言われても訳が分からないのだ。

「・・・失礼ながら、入り口すら見つからない状態で私にどうしろと？」

「まあ、これを見ろ」

そう言うと、ドズルはあるMSについての資料をランバに渡す。

そして、ランバはその資料を閲覧する。

「地中掘削型MS『アツグ改』、ですか？」

「そうだ。貴様の部隊にはこれを使ってジャブローに直接入り口を作って潜入して貰う」

ドズルの考えた案はこうだ。

まずランバ・ラル隊をアツグ改と共に強襲揚陸艦『ビスマルク』にて南米の旧ブラジルにの海岸に上陸させる。

次にジャブローまでの道程に存在する地面を掘削し、地中から直接



ジャブローへと潜入する。

無茶苦茶だ。

それを聞いた時、ランバはそう思ってしまった。

そもそもジャブローは曲がりなりにも連邦軍の本部であり、幾ら地下に存在すると言っても地上が無防備となつてゐる訳もない。

つまり、ドズル中将は敵の警戒が厳しい中を上陸し、そこから地中用ソナー搭載のアツグ改を使って地面を掘り、手探りでジャブローの位置を特定して潜入しろと言つてゐるのだ。

あまりと言えばあんまりな無茶ぶり案件に内心で少々怒りを覚えつつ、表面上はそれを出さずに口を開こうとする。

だが、それを見透かしたようにドズルがランバが何かを言う前にこう言う。

「お前の言いたいことは分かるぞ。この作戦はあまりに無謀で無計画すぎる。こんな作戦に自分と部下の命は預けられない。そう言いたいのだろうか?」

「・・・ええ」

「その通りだ。自分で立案しておいてなんだが、こんな作戦は無謀だ。だから、この件については断つて貰つても構わない」

だが、とドズルは一旦言葉を切りながら、更に言葉を紡ぐ。

「そうすると、おそらくジャブローに居るダイクン母娘が危険になる」

「どういうことですか!?!」

「落ち着けと言つてる!!」

「!?!・・・申し訳ありません」

「うむ。では、続きを話そう。ああ、ここからは独り言だ。誰にも言わないように」

「はい」

「我々は月でジャブロー攻略のための武器を製造している。だが、これがかなり強力な代物でな。この武器を使う場合、ジャブローに強引に穴を開けることになるから、中に居る人間の命は当然の事ながら保証できない」

ジオン軍上層部は元々ジャブロー攻略について2つの案を立てていた。

1つは宇宙から直接南米に降下し、ジャブローに侵攻する案。

もう1つが北米から南下して陸路で南米に侵攻し、ジャブローを攻略する案だ。

しかし、後者については中南米侵攻作戦の失敗で事実上頓挫してしまい、廃案とまではいかないが、ひとまず凍結という形となり、必然的に前者の案が重要視されることになった。

だが、こちらもまた難題だ。

知つての通り、ジャブローは連邦の本部であり、当然の事ながらその防備は他の場所より桁違いに固く、対空砲火もかなり激しい。

しかも、ジャブローは地下奥深くに存在するので、激しい対空砲火を突破してジャブローの入り口を探さなくてはならないことを考えると、とんでもない労力と犠牲を強いることとなるだろう。

その為、まともに攻略する事はジオン軍も鼻から諦めており、当初はサイド7を占領して住民を強制退去させ、ギレンの野望で存在した第二次ブリティッシュ作戦（サイド7を使用したコロニー落とし）をこの世界で行うことすら考えた。

しかし、先月にギレンが考えたある兵器を参考にする形でジャブロー攻略の為の兵器が作られることになり、サイド7のコロニー落とし

しもまた廃案になったのだが、いずれにしてもジャブローに強引に入り口を作ることは変わりないために、中に居る人間の命までは考慮されていなかったのだ。

「それで私にそうなる前にジャブローに潜入してアストライア様とアルテイシア様を救出しろと？」

「まあ、そういうことだ」

「・・・私でもし断ったら？」

「その場合は彼女たちがジャブローと運命を共にすることになるかもしれない」

ドズルはそんな脅しを掛けるが、これはあくまでブラフだ。

もし彼に断られたら、闇夜のフェンリル隊か、サイクロプス隊などの特殊部隊にジャブローに潜入するように命令するつもりだった。

なにしろ、2人を確保しさえすれば、連邦はこの戦争での大義名分を失うのだ。

そうなれば、ジャブローを攻略するまでもなく戦争を終結させることが可能かもしれないという狙いがあった。

もつとも、最大の理由はそれではない。

ドズルを始めとした転生者達が一番恐れていたのはシヤアという存在であり、もしアストライアとアルテイシアの2人を幾ら不幸な事故とはいえ殺したりすれば、シヤアが原作通りにこちらを恨む可能性がある。

そして、そうなった時のシヤアの恐ろしさは原作を見ればよく分かるので、絶対にそれは避けたかったのだ。

だが、そんなことをランバ・ラルが知るよしもない。

「分かりました。その任務、お受けしましょう」

「そうか。必要なものがあれば言ってくれ。俺が出来る限り用意しよう。ただし、期限は11月までだ。それ以降の場合、任務を継続するかどうかはそちらの自由だが、味方に吹き飛ばされるかもしれないということは覚悟しておいてくれ」

「はい。ところで、先程はアストライア様とアルテイシア様がジャブロー内部に居ること前提の話でしたが、それ以外に居た場合は？」

「ああ、それならシヤアに部隊を預けて搜索させているから問題ない」

そう、実はヨーロッパ戦線が膠着してから暫くした頃、ドズルはシヤアに地球各地を回ってアストライアとアルテイシアの情報について集めるように命じていた。

これはランバの言った通り、ジャブロー以外の場所に2人が居る可能性も否定できないと考えていたからだ。

ちなみにこの命令によって、ダグラスの命令でシヤアと接触を図ろうとしていたジェーンは、シヤアの行方を見失うこととなっていたのだが、ドズルはそんな事を知るよしも無かった。

「もしジャブローに居ないという事が確定した場合、撤退してシヤアの部隊と合流して搜索してくれ」

「了解しました」

「ああ、それともう1つ。もし2人を避難させるのであればサイド3と地球は避けてくれ。また揉め事の種になりかねないからな」

「・・・失礼します」

そう言うと、ランバ・ラルはドズルの部屋から退室していった。

それを見たドズルはそれを見届けると、思わず溜め息を吐く。

「やれやれ嫌われたものだな」

正直、あんなことはしたくなかった。

しかし、あそこまで言わなければランバ・ラルは承知しなかっただろう。

なにしろ、前述したようにこのジャブロー潜入案は明らかに無謀な行為なのだから。

「まあ、それもこれも奴の父であるジンバ・ラルが元凶なのだがな」

そもそもジンバ・ラルが連邦にダイクン母娘を売るなどという真似を行わなければこんなことをする必要もなかった。

加えて、あの男のせいでダイクン派とザビ派の亀裂は修復不可能一步手前などころまで行ってしまっているのだから、あの男の罪はなによりも重い。

仮に今、ドズルの前に出てくれば、ドズルはその男を問答無用で処刑していただろう。

いや、ドズルじゃなくとも、ザビ家の人間ならば誰だってそうする筈だ。

だが、そこまで考えたところでドズルはあることに気づいた。

（あれ？そう言えば、あの男は今、何処に居るんだ？ジャブローか？）

ドズルは今更ながらジンバ・ラルがどうなっているかが気になった。

よくよく考えれば、あの時の家族会議の話題に出て以来、さっぱり音沙汰が無い人物であったからだ。

（ギレン兄貴やキシリアなら何か知っているか？今度、聞いてみよう）

ドズルはそう思いながら、ランバ・ラルに送る物資の補給について書かれた書類に判を押した。

UC0079年 6月1日 ジオンの内情

◇宇宙世紀0079年 6月1日 サイド3 ズム・シティ 総帥府

「・・・これがV作戦で量産される予定の機体か？」

ギレンはキシリアから送られてきた資料を見ながら、思わず顔をひきつらせた。

V作戦。

作戦と名が付いてはいるが、要するに連邦のモビルスーツ開発計画の名称だ。

先日、その内容をキシリア機関が掴んだのだが、流石にその内容を見て吹き出しそうになってしまった。

ガンキャノンとガンタンク。

ここら辺は原作と同じだからまだ良い。

だが、ガンダムにあたる機体と原作のジムにあたる機体が問題だった。

「これどう見てもグフとザクだよな？なにがどうしてこうなったんだ？」

そう、ガンダムにあたる機体には原作でランバ・ラルが乗っていた機体であるグフが、ジムにあたる機体には原作のジオンの主力だったザクがそれぞれ開発されているとの事だった。

勿論、ご丁寧に名称だけではなく、頭部の部分は原作と同じモノアイ式になっている。

「やっぱり転生者が居るのか？いや、それはないな」

あまりにも斜め上すぎる形で起きた原作補正にギレンは思わず転

生者が居るのではないかと疑うが、それはないと思ひ直す。

何故なら――

「動力源が核分裂炉とか、何処のSEEDだ」

そう、V作戦で開発されているモビルスーツは全て動力源が核分裂炉となっていたのだ。

もし転生者ならば、戦前にミノフスキー核融合炉が無いことに気づき、それを手に入れるために積極的に手を打っていた筈だが、そんな気配は微塵もなかった。

ということは、これらが生まれたのはあくまで歴史的偶然ということになる。

「ということは、ガルマから報告があったあのジム擬きも同じ動力炉で動いているのか？だとしたら、不味いぞ」

前述したように、核分裂炉は核融合炉と違い、何か不具合があれば暴走する仕組みになっている。

となれば、撃破されて爆発した時点で放射能を周囲に振り撒くことは確実だ。

実際、北米ではそうになっていた。

ガンダムSEEDではこのような問題は然して起きていなかったが、これは核分裂炉搭載のMSがフリーダムやジャスティスなど、限られた機体にしか搭載されていなかったからにすぎない。

だが、この世界ではどうやらその危険な核分裂炉搭載のMSはたんまりとあるようであり、今後、ジオン軍はその点にも配慮しなければならなくなる。

周囲の住民の感情を抜きにしても、兵士が放射能汚染される危険性が有るのだから。

「下手すりゃこの世界の地球がどっかの世紀末のような世界になって



しまうな。しかも、これは動力源としての活用だから南極条約も適用されない」

ここで恐ろしいのはこのとんでもない放射能汚染付きの欠陥MSが南極条約で規制できないことだ。

南極条約には核兵器の使用の禁止の項目が確かにあるが、これは爆弾としての運用が禁止されているだけであり、動力源としての運用について規制されている訳ではない。

まあ、動力源としての運用が規制されていたら、ジオンの方もMSを活用できなくなって非常に困るので、この件に関してはジオンにどうこう言える筋合いは無いのだが。

「しかし、連邦のお偉いさんもよくこんな兵器の開発を許可したな」

この件で一番迷惑を被っているのは、ジオン軍ではなく、おそらく連邦軍やアースノイド達だろう。

既にこちらから連邦に嫌がらせをするために連邦のMSについての喧伝を行っており、連邦がそれに対してカウンタープロパガンダを行っているが、どう言い繕ったところで連邦のMSから放射能が漏れ出ているという現実は変わらないのだ。

そして、アースノイドの放射能に対する危機意識はギレンの前世と然して変わらず、しかも宇宙世紀だけあって前世よりもマスメディアは進化している。

今頃、アースノイドの連邦に対する感情はさぞかし愉快なことになっていいるだろう。

「まあ、何処で開発されているかは未だに分からないが、もし地球上で開発されているならこのモビルスーツの開発は中止される可能性が高いな」

なにしろ、ちよつと大きな攻撃をされたら放射能付きの棺桶となる

兵器だ。

あのプロパガンダがされているのと、連邦のMS乗りにも生き残った兵士が居るので、それらの人物の言葉から連邦の兵士は今後そのMSには乗りたがらないだろうし、そもそもこれだけの無様な惨状を晒したとなると、MSの開発が継続されるかも分からない。

いや、仮にあの老人レベルが継続することを試みたとしても、政治家がそれを許さないだろう。

なにしろ、この状況下でこれ以上核分裂炉搭載MSの開発を続けるという行為は、彼らの政治生命を盛大に自殺させるようなものなのだから。

加えて、現状の重力戦線はMS抜きでもなんとか出来るということには既にフリカヤオーストラリアで証明されている。

となると、爆発する度に自分の政治生命が削られる兵器を政治家が無理に開発させるとも思えないので、ほぼ確実に連邦のMSは開発中止となるだろう。

そうなれば、地上はともかく、宇宙でのジオンの優位は確立することになる。

「だが、現在の状況はこちらにとっても苦しい。なんとかしなければ」

現在進行形で無様な惨状を晒している連邦だが、実はジオンにとってもかなり結構厳しい状況に置かれている。

そもそもジオンにとって重力戦線は転生者を除いたジオン軍上層部が考えている以上に重要な戦場だ。

仮に重力戦線が突破されて、ソロモンが陥落した場合、その時点でスペースノイドの自治独立というジオンの大義名分の1つが失われる。

なにしろ、ソロモンが陥落すれば他のサイドや月面都市は丸裸も同然の状態になってしまうのだから。

そうなれば、他のサイド（特に1、2、4）は再び連邦に靡く可能性が大だ。

ア・バオア・クーが有るには有るが、あれはあくまでサイド3の最終防衛ラインであり、連邦から他のサイドを守る盾にはならない。

つまり、ソロモンが陥落するか、否か。

これがこの戦争を大きく左右する要因となる。

そして、そのソロモンが陥落しないための保険が重力戦線なのだが、頭の痛いことにその重力戦線の重要性を認識していないジオンの将官は結構多く、重力戦線が崩壊したなら宇宙で戦えば良いと考えている人間が大半なのが現状だった。

まあ、原作みたいに各サイドを吹っ飛ばしてしまえば、ア・バオア・クーに防衛線を下げても問題なかったのだが、あいにくこの世界ではそういうわけにもいかない。

「問題なのはやはりオセアニア戦線か」

ギレンは苦い顔をした。

現在、ジオンの抱えている戦線は4つ存在する。

ヨーロッパ戦線、中東戦線、北米戦線、オセアニア戦線だ。

この内、ヨーロッパ戦線と中東戦線は膠着状態が続いており、北米戦線も旧メキシコ北部を占領した後は進撃を停止している。

これだけならば問題ない。

いずれ問題になってくるにしても、それは「今」ではないのだから。

しかし、現在進行形で問題なのはオセアニア戦線、特にオーストラリア大陸だ。

西部を放棄したことで戦線は大陸中央部で膠着した状態となっているが、どうやら連邦はこの機会にオーストラリア大陸を解放するチャンスと見ているらしく、続々と増援を送り込んでおり、その数は50万人。

オーストラリア大陸のジオン軍が25万人なので、ちょうど倍だ。おそらく6月中に本格的にオーストラリア東部に攻勢を掛ける。

ジオン軍情報部はそう分析していた。

「さて、どうするかね」

ここで取れる手は少ない。

増援を送るか、あるいはいつそのこと引き上げるかくらいだろう。しかし、オーストラリア大陸から撤退するとなると、オセアニア戦線は事実上崩壊することになる。

そうなったら他の戦線の負担が高まるので、安易には取れない選択肢だ。

「増援を送ると言っても、まともな兵隊はもう少ないし」

開戦以来、大した消耗をしていない宇宙軍とは違ってジオン地上軍の兵力は既に枯渇寸前だ。

いや、厳密には頭数だけは本国にずらりと揃っているのだが、その中身は徴兵されたものが大半であり、質はとてもではないが期待できない。

それもこれも開戦時期が半年も早まり、兵士の教育や訓練を行う時間が削られたのが原因だった。

「くそっ！ やっぱり腹が立つな。ジンバ・ラルめ！ 今度見つけたら絶対くびり殺してやる!!」

ギレンは改めてジンバ・ラルを何がなんでもこの世から抹殺することを誓った。

U C 0 0 7 9 年 6 月 3 日 政治生命

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 6月3日 南米 ジャブロー

「さて、将軍。私の言いたいことが分かるかな？」

地球連邦大統領は盛大にひきつった顔をしながら、レビルに向かつてそう言った。

「V作戦の中止、でしょうか？」

「正確には地球上での運用の一切の禁止だ。理由は……まあ、言うまでもないな」

「……」

レビルは大統領の言葉に対して沈黙という選択肢以外を選ぶことが出来なかった。

なにしろ、彼の推進したMSが簡単に撃破された上に、放射能を撒き散らすなどという醜態を晒したのだ。

しかも、その一件で政治家達の政治生命は危うくなっている。

ここで口答えなどすれば、更迭される可能性が高い。

「しかし、君の言う通り、宇宙の反抗にはモビルスーツが必要だということも確かだ。よって、サイド7での開発は継続して構わない。だが、そこで開発されたモビルスーツを地球に持ち込むことは許さない」

「！ お言葉ですが、それでは宇宙での反抗作戦は不可能です!!」

だが、これには流石にレビルも反応せざるを得なかった。

なにしろ、宇宙のほとんどは既にジオンによって占領されており、

連邦の拠点は1つも無い。

ジオンの影響下に無い（厳密にはサイド共栄圏という形で関わってはいるが）中立のフォン・ブラウンやサイド6は連邦への協力を拒否しており、宛にはならず、唯一連邦に協力している形となっているサイド7についても表向きはジオンに対して中立の態度を取っているし、そもそもコロニー1基しかないので拠点にはなり得ない。

そんな中でMSを地上に持ち込む事が禁止となったら、MSを使った反抗作戦を練ることはどうやっても不可能になるのだ。

だが、大統領の言葉は冷たかった。

「確か君は小型核融合炉のMSも設計していると言ったね。だったら、その完成を待てば良い」

「しかし、どう頑張ってもあと半年は掛かると以前申し上げた筈です」

そう、連邦でも確かに鹵獲したMSからミノフスキー核融合炉を分析して開発を行ってはいる。

しかし、今まで持っていなかった技術をほぼ一からやる形になっているので、どんなに頑張っても完成は今年の末。

量産となると、翌年になってからになると見込まれていた。

だからこそ、短期で投入できる見込みのある核分裂炉を動力とするMSを造ったのだ。

まあ、結果はこの醜態であったが。

「だから、その半年を待てば良い。ついでに核分裂炉搭載のMSも開発を中止して、そちらに集中したらどうかね？」

「・・・一理有りますな」

その意見にはレベルも一理有ると言わざるを得なかった。

なにしろ、核分裂炉搭載MSがあれだけの醜態を晒した後なのだ。

サイド7に居る開発者に放射能漏れの改善について問い合わせたところ、改良は行えるものの、核分裂炉の構造上根本的な解決は不可能だという答えが返ってきている。

であれば、いつそのこと核分裂炉搭載MSの完成を諦めて核融合炉搭載MSに絞るというのも手だ。

もつとも、そうなる現実投入が遅れるというデメリットも存在するが。

「ですが、仮に核分裂炉搭載MSの開発を中止して核融合炉搭載MSにリソースを全て注ぎ込んでも完成を一月早めるのが手一杯。そうになると、完成は11月。8月初めに予定されている月号作戦には到底間に合いませんが・・・」

「構わない。その為にセイバーフィッシュIIを開発したのだからな」

「・・・まさかMS抜きで月号作戦を行う予定なのですか？」

「そうだ。ビンソン計画によって回復した宇宙艦隊。そして、その中にはルウム戦役の時よりも多い数の宇宙空母も含まれていることも君も当然知っているだろう？」

知っている。

当たり前だ。

現在でこそ、レベルは連邦軍全体の司令官であるが、元々は宇宙軍の最高司令官だったのだから。

「つまり、新型宇宙戦闘機の物量で押すと？」

「その通りだ」

「・・・」

無謀だ。

セイバーフィッシュⅡの性能はレベルの耳にも入っているが、確かにセイバーフィッシュの時よりは向上しているし、ミノフスキー粒子下でも使用できるという点も大きい。

だが、所詮は戦闘機であり、モビルスーツのような変幻自在な動きは出来ず、機動性ではどう頑張ってもMSには及ばない。

おまけにスピードで圧倒しようにも、ジオンのMSも当然の事ながらエンジン、あるいは機体そのものを更新してきており、はつきり言ってそれほど差はない。

スピードに差がなければ艦載機戦では必然的に機動性が高いモビルスーツが有利となるだろう。

そして、物量で圧倒することのだが、これもぶっちゃけ何処まで有効かは疑問だったし、仮に成功したにしてもとんでもない犠牲が出ることは確実だった。

「それにモビルスーツ以外にも機動兵器は有るらしいじゃないか？」

「ボールの事ですか？しかし、あれは・・・」

そう、連邦にはモビルスーツ以外の機動兵器は確かにある。

その名はボール。

それは原作でジムの補助兵器として使われ、意外に活躍した機動兵器。

『量産性が高く、小型なので艦船に多く積み、モビルスーツが撃破できる』というのが売りだった。

ここまで聞けばとんでもない優れた兵器に聞こえるが、3つ目のモビルスーツが撃破できるという項目には少々語弊があり、正確には『(至近距離ならば)モビルスーツが撃破できる』というのが正しい。

当然、一定の距離でモビルスーツとボールが戦えばモビルスーツが有利だし、そもそもボールの装甲はモビルスーツと比べても薄く、更



に質量の小ささもあって、モビルスーツが殴ったり蹴ったりしただけで撃破されてしまう可能性もあるという乗る側からすればとんでもない棺桶兵器だと言えるのだ。

だが、このボールの強みは第二次世界大戦の戦車で表すところのシャーマン戦車であり、前述したように量産性が高いので数を多く投入できるし、(宇宙戦闘機よりは)機動性も高い。

更に曲がりなりにモビルスーツを撃破できるので、数の暴力でジオンのMS部隊を圧倒することも出来る。

実際、原作の一年戦争でもこのボールはジムと並ぶ形で活躍しており、その後もZ時代になってモビルスーツが急進化するようになるまでは、連邦宇宙軍の主力兵器として使用されていた。

しかし、レビルは当然そんなことを知らないのです、あまりにも見た目が弱そうなボールの実力を懐疑的に思っていたのだ。

「数が多くてモビルスーツが撃破できる。物量に勝る我々地球連邦にとってはピッタリな兵器ではないかね？」

「・・・実際運用してみないことには有用性は分かりません」

レビルは苦し紛れにそのような反論をする。

しかし、これには一理存在する。

かつてのモビルスーツもそうだったが、そういった有用と思われる兵器は実際に使ってみないことにはなんとも言えないのだ。

現に核分裂炉搭載型MSも実際に使ってみるまではその欠点からなかった。

まあ、あれは極端すぎる例だが、今回のボールにしても実際に使ってみないことには分からないのだ。

もつとも、原作知識でボールのことを知っている転生者達は違う結論を出すだろうが。

「なるほど。だが、例のモビルスーツが登場するまでの繋ぎにはなる

のではないか？」

「仰ることは分かります。ですが、モビルスーツが登場してから宇宙への反抗を開始した方が勝利は確実ですし、兵も多く死なせずに済みます。月号作戦はお考え直し頂けませんか？」

「君の言うことは叶えてあげたいのだがな。残念ながらそれは不可能だ。そこまで待つと我々の政治生命が危ない。下手をすれば、戦争中に和平派の政権に交代する事になる」

そう、これが大統領の本音だった。

実は今、議会では長引き始めた戦争によって和平派が勢い付き始めている。

アフリカやオーストラリアでの成功を見て少しかり支持は回復しているが、それも例の核分裂炉MSの一件でまた低迷し始めていた。

原作のようにジオンからの宣戦布告であればこうはならなかったのだろうが、残念なことに今回の戦争は連邦政府が始めたことであり、連邦市民は勝手に始めた挙げ句に犠牲者を増やし続けているこの現状に不満を溜め込んでいたのだ。

仮にアフリカでのスペースノイドの行為が報道されなければ、もしかしたら今の首脳陣は軒並み首をすげ替えられていたかもしれない。

そういう意味ではアフリカ降下作戦はとんだ藪蛇行為だったと言えるのだが、どちらにしろ大統領を中心とした主戦派の派閥の政治生命が危ういのは確かであり、更には民主主義の政治というのは幾ら大層な理想を述べたところで支持されなければ政治に関わることは許されないのです、ここで政治生命が絶たれないためにも何かしらの「結果」を短期間で示す必要があった。

それも短期間で決着を着けられそうにない地上ではなく、宇宙というジオンの庭で。

つまり、月号作戦というのは多分に政治的要素が絡んだ作戦なの

だ。

「・・・分かりました」

そして、将兵が数多く犠牲になりそうなこの作戦に反対することもレベルには出来ない。

何故なら、大統領達が失脚すればレベルの後ろ楯は無くなり、自分もまた失脚してしまうのだから。

——かくして、この日、核分裂炉搭載のMS開発の中止と月号作戦の強行が決定付けられることとなった。

UCC0079年 6月7日 困難な任務

◇宇宙世紀0079年 6月7日 アラビア半島 中東方面軍司令部

「助かりました」

「いや、なに。偶々貴官がこちらに逃げてきたから保護しただけだよ。まさか赤い彗星がこんなところに居るとは思わなかったがな」

シャア・アズナブル少佐の発した礼の言葉に、中東方面軍司令官ノリス・パツカード中佐はそう返した。

欧州方面軍の所属を一旦解かれたシャアはドズルの命令通り、シャア自身の部下と何人かの情報機関の人員と共に各地を回って母親と妹の情報を集めていたのだが、そんなときに回ったインドで、ある「ゴタゴタ」を起こしてしまい、連邦軍に追われていたのだ。

そして、逃げる途中で救難信号を発して、インド洋上でノリス・パツカード中佐傘下の中東方面軍に助けられたという訳である。

「ところで、そちらの女性は誰だ？」

そこでノリスはシャアが連れていた褐色肌をした少女——ララア・スンを見る。

「ああ、彼女はインドで保護した少女です」

「保護、か。まあ良いだろう、ところで何故あんなところに居たかは教えてくれんか？」

保護という言葉に少々疑いの目を持ったが、それに敢えて突っ込みは入れず、ノリスはヨーロッパ方面軍所属の筈の彼がインド洋上に居

た理由を尋ねることにした。

しかし、シヤアはノリスの言葉に首を横に振る。

「申し訳ありませんが、お話しできません。ですが、インドに居たのは任務で間違いありません。お疑いならドズル中将に尋ねて頂きたい」

「・・・分かった。まあ、今日くらいはゆっくり休んでいくと良い。それでお前はこれからどうするつもりだ？」

「任務を続行します。ですが、1つお願いがあります」

「なんだ？」

「この少女を中東方面軍で預かって欲しいのです。いずれ私が宇宙に連れていきますので」

「それは構わないが、安全は保証できないぞ？なにしろ、ここは最前線だからな」

ノリス・パツカード中佐の言う通り、このアラビア半島に居るジオン軍はアフリカ方面の連邦軍とにらみ合いを続けており、空襲も時折受けている。

このララアという少女を軍で保護するとなると、女性用の兵舎に入れるしかないが、兵舎というのは当然の事ながら爆撃対象にもなるし、地下に潜ったとしても向こうが地中型貫通爆弾を持ち出してくれば終わりだ。

故に、保護すると言っても安全など全く保証できないというのが現状だった。

「むしろ、オデッサに行くか、宇宙に行かせたりした方が良いのではないか？」

「いや、それは……」

シヤアも1度はそれも考えた。

しかし、オデツサの方は前司令官であるシーマ・ガラハウ中佐（今は大佐だが）ならともかく、現司令官であるマ・クベ大佐は胡散臭くてどうも信用出来なかったのだ。

そして、自分はまだ地球でやることがあるので、宇宙に連れていくにしても、ララー1人きりで行かせることになる。

だからこそ、シヤアはどちらの選択肢も選ぶことが出来なかった。

「まあ、今はどこもかしこも戦場だからな。安全な場所など無いか。良からう、分かった。その少女はここに置いていけ。基地に居る女性兵に世話をさせよう」

「……よろしくお願いします。すぐに迎えに来ますので」

シヤアはそう言って頭を下げた。

◇南米 ジャブロー 地上

「思ったより上手く行くものだな」

ランバ・ラルはそう言いながら、部下がアツグ改を駆使して岩盤を掘り進める姿を見ていた。

あのとんでもない潜入命令が出されてから1週間。

ランバ・ラル隊は戦略海洋軍の強襲揚陸艦『ビスマルク』によって、南米東部（具体的にはアマゾン川付近）に上陸し、予定通りアツグ改を使つての穴掘り作業を開始した。

勿論、いきなり穴掘り作業を行ったわけではない。

地中探索ソナーによつて探索を行い、慎重に中の様子を探つて掘つても敵に見つからない場所を探し出し、それから穴を掘り始めたのだ。

また懸念されていた南米の連邦軍だったが、こちらは北米方面軍と戦略海洋軍が大規模な陽動を行ったお蔭で、連邦の南米陸軍の意識はそちらに集まつており、ランバ・ラル隊は上手く南米に潜り込むことに成功していた。

・・・もつとも、その為の犠牲は大きかったが。

「しかし、未だに問題は色々あるな」

ここまで来ておいてなんだが、問題はまだ他にもあった。

まず潜入する際に敵に遭遇しないかということ。

ジャブローは全長280キロもある巨大要塞であるが、中には数百

万人の兵士が居ると言われている。

もつとも、本当のところはどうかは知らない。

何故なら、誰もそれを確かめたことは無いのだから。

しかし、もしそれが本当ならば、掘った矢先に敵に遭遇するなどという事態が起きかねず、そうなれば敵がランバ・ラル隊に殺到し、良くて大損害を出した挙げ句に撤退、悪ければ部隊が全滅するという憂き目に遭う。

だが、それを避けるために地中ソナーを使いすぎると、今度は掘る過程で敵に感付かれかねないので、どうやってもこればかりは運頼みになってしまうのだ。

そして、潜入してからも問題だった。

一応、潜入のために連邦軍の制服は用意してあるが、手引きする人間が居る訳でもないので手探りで対象の人物（アストライア、アルテイシア）を探さなければならぬ。

おまけにIDも無いので、偶々出会った連邦軍の士官か何かに『貴様の所属は何処だ？』と尋ねられてしまえば、答える術を持たないのだ。

まあ、仮に用意していたとしても、所属部隊に照会されたりすれば終わりなのだが。

（それを防ぐためにも怪しまれないような行動を取らなければならぬが、そうすると行動範囲が狭くなって見つけるのに時間が掛かるな）

そもそも全長280キロもある場所を探らなくてはならないだけでも相当な無理をしなければならぬのだ。

その上で行動が制限されるなど、これだけでも難易度が高すぎる任務と言える。

まあ、だからこそランバ・ラル隊にこの任務が与えられたのだろうが。

更に問題はまだある。



それは――

(仮に見つけたとしても、連れ出すまでが問題だな。アストライア様とアルテイシア様は連邦にとっても重要人物だ。居なくなつたとなれば大騒ぎになる)

そう、アストライアとアルテイシア――特にダイクンの遺児であるアルテイシアは、連邦にとっては“超”が着くほどの重要人物だ。なにしろ、この戦争の連邦の大義名分そのものなのだから。

閉じ込められている場所には見張りや監視の人間は当然居るだろうし、監視カメラやもしかしたら盗聴機なんかも存在するかもしれない。

それら全てを無力化して連れ出すのはそれこそ不可能に近いための、必ず連邦軍の追跡が有ると見て良い。

そして、そんな中で部隊とアストライア達が脱出するためには退路も確保しておかなければならないが、その経路は念のために複数用意する必要がある。

まあ、それでも脱出が成功する保証など無いが。

――つまり、纏め上げると、この作戦には以下の難題をクリアしなくてはならなかった。

- ・連邦の警備隊やら地上軍が何時やって来るか分からないまま、穴堀をする(ただし、これには北米方面軍と戦略海洋軍の陽動あり)。
- ・地中ソナーをあまり頻繁に使うわけにはいかないため、ジャブローの洞窟のどの部分に繋がるかは完全に運任せであり、指揮官の運の良さが必要。

- ・全長280キロの要塞内を手探りで探って対象の人物を見つける。なお、内部に居る人間に怪しまれないように行動には慎重を期さなければならず、必然的に行動は制限される。

- ・脱出する際に備えて複数の脱出経路を準備する。なお、その際に脱出用の出口と救出する人物の居る部屋との距離にも留意しなければならぬ。

・アストライアとアルテイシアに対する連邦の監視の目を盗んで救出するのはほぼ不可能なため、脱出する際にはほぼ間違いなく連邦軍の追跡有り。

・・・正直言つて、本場の特殊部隊ですら困難な難題のオンパレードだった。

これなら新米パイロットが乗るモビルスーツ一機を100隻の艦隊と数百機のMSの中に突っ込ませて戦艦1隻を撃沈させるという任務を与えた方がよっぽど難易度が低い。

(だが、それでもこの任務はなんとしても成功させなければならぬ)

ランバ・ラルは改めてそう決意する。

そうしなければ、敬愛するアストライアとアルテイシアがこの馬鹿馬鹿しい戦争の犠牲者となってしまうのだから。

U C 0 0 7 9 年 6 月 1 0 日 正念場

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 6月10日 オーストラリア大陸 バー  
ス 地球連邦軍 オーストラリア方面軍司令部

「やれやれ上も無茶を言うな」

地球連邦軍のオーストラリア大陸方面軍司令官パウエル・フーパ中将はそう言いながらため息をつく。

オーストラリア大陸西部を奪還した連邦軍だったが、その後の戦局はジオン軍側の指揮官――ダグラス・ローデン大佐の巧みな指揮によって、大陸中央部を境に戦線は膠着していた。

しかし、今日、ジャブローの司令部から5日後に攻勢を開始せよと指示を受けたことで、オーストラリア大陸方面軍は東部への攻勢準備を始めていたのだ。

（そもそもモビルスーツへの対策は今のところ数で押すしか手はないのだ。上の連中はそこを分かっていない）

そう、緒戦程の活躍ぶりは無いにしろ、実のところジオンのモビルスーツは未だに連邦にとってかなりの脅威となっており、このオーストラリア大陸での戦いで連邦軍が有利に立てていたのは、あくまで火力と数で強引に圧していたからにすぎず、根本的な解決をしている訳ではなかったのだ。

現に細かな遭遇戦などでは、依然として連邦側が負けるケースの方が圧倒的に多いし、特に白い悪魔と遭遇した部隊などは、必ずと言っても良いほど部隊壊滅といった憂き目に遭っている。

（例の核分裂炉搭載のMSとかいうのは開発中止になったと聞いたしな。まあ、あれはそうなって正解だが、MS自体はやはり欲しい）

パウエルは自軍のMSの必要性を痛感していた。

確かに敵のMSを撃破する方法はMS以外にも存在するのだが、コストパフォーマンス費用対効果が一番良いのは、やはりこちらがMSを持って向こうのMSを撃破することなのだ。

このパウエルの考え方は他の陸軍上層部も抱いており、連邦陸軍でも宇宙軍と同様にMSの開発が進められていた。

もつとも、あの核分裂炉搭載MSの騒ぎによって陸軍での開発は凍結となってしまうが、宇宙軍はまだ開発を諦めていないらしいという話は、パウエルの耳にも入っており、出来ればそれをこちらにも分けて欲しいと思っている。

まあ、無理な話ではあったが。

「・・・まあ、贅沢を言っても仕方がないか。取り敢えず、今はオーストラリア東部の攻略について考えよう」

パウエルはそう言いながら、オーストラリア大陸の地図を机の上に広げる。

(・・・やはり、広いな。これで1度膠着した前線を動かすのは容易ではない)

そう、パウエルの思っている通り、実は戦場において1度膠着してしまった戦線を動かすというのは非常に難しい。

特にオーストラリアのような広い場所に展開される戦線ならば尚更で、こういう場合、互いに一定の防御陣地が構築されており、無理に攻めたりしたら、攻めた側が大損害を負うなどというケースが多いからだ。

そして、今回の場合もそれが当て嵌まっている。

これを突破するとなると、方法は2つ。

1つは圧倒的な機動力を以て戦線の一点突破を計り、それを突破口にして敵の陣地を蹂躪すること。

しかし、これは言うまでもなく不可能だ。

仮に1つの戦線を突破したとしても、モビルスーツがすぐに出てきて、敵の陣地を蹂躪するどころか、突破した部隊の方が逆に蹂躪されてしまう可能性が高い。

第一、そんなことが出来るのであれば、とっくの昔にやっている。

そして、もう1つが火力で強引に敵の陣地を吹き飛ばして戦線を押し上げてしまう方法だ。

オーストラリアに上陸して以来、連邦軍はこの方法でジオン軍を蹴散らしてきた。

もつとも、前述したようにそれが活かせない戦場では負けるケースが多かったが。

そして、今回もこの火力の優勢によってオーストラリア東部へと仕掛けることになるだろう。

「・・・これは大勢の犠牲者が出るな。ましてや、最終到着地点がシドニーに設定されているとなると尚更だ」

パウエルはそんな感想を抱く。

今回の作戦の最終占領目標はシドニーとなっており、一見1つの都市を占領すれば良い簡単な目標であるかのように聞こえてくるが、少し空気の読める人間ならば、暗に『これを機にオーストラリア全土を解放しろ』と言っていることくらいは分かるだろう。

なにしろ、シドニーはオーストラリア大陸の東海岸に位置する都市であり、これをオーストラリア大陸の西側に居る連邦軍が確実に確保するためには、オーストラリア大陸の東半分を制圧しなければならぬのだから。

そして、その困難さは想像に難くなく、まともに攻勢を行えば、犠牲者が万単位で出るのはまず間違いない。

「だが、オーストラリアを攻略すればオセアニアのジオン軍は撤退せざるを得なくなるだろう」

それは事実だった。

何故なら、オセアニア戦線はオーストラリア大陸の他にも、ニューカレドニアなどの南太平洋の島々に広がってはいるが、大元はオーストラリアであり、ここを占領さえすれば他のオセアニア戦線に居るジョン軍は孤立せざるを得ず、撤退かゲリラ戦以外の選択肢を無くしてしまう。

つまり、オーストラリア大陸さえ完全に奪還できれば、連邦のオセアニア戦線での勝利は確実なものとなる。

そう考えれば、この作戦に万単位の犠牲者を出す価値は有るとも言えるのだ。

「ここが正念場だ」

パウエルはそう言いながら、味方の被害を少しでも少なくするべく頭の中で作戦を練り始めた。

◇ガダルカナル島

オーストラリア大陸西部でパウエル中將が上の無茶に振り回されようとしていた頃、ガダルカナル島でもまたロツク・ホールデン少佐が上司が言ってきた無茶に振り回されようとしていた。

「ポートモレスビー攻略、か。ダグラス大佐もまた無茶を言ってきているな」

ロツクは副官の大尉に向かってそう言った。

そう、この時点でダグラス・ローデン大佐は近日中に連邦軍がオーストラリア東部への攻勢に出るのを掴んでおり、その為の備えの1つとしてポートモレスビーを攻略して北側の脅威を完全に排除し、オーストラリア西部からの連邦軍の攻勢を食い止めることに全力を注ぎたいという思惑があったのだ。

その理屈は分からないでもないのだが、戦力の乏しい最前線基地にまで戦力供出の命令を出すのは止めて欲しいとロツクは心底思っていた。

「しかし、今回の作戦は我々にも利があります。ポートモレスビーの脅威が排除されれば我々の戦場はソロモン1つに絞ることが出来ます」

「それはそうだがな」

ロツクは少々苦い顔をしながらそう返す。

現在、このガダルカナル島はラバウルとポートモレスビーの双方から圧力を掛けられており、今回の作戦でポートモレスビーを攻略できれば、敵はラバウル1つとなり、大きな負担軽減に繋がる。

確かにそういう意味では十分にやる価値が有るのだろう。

だが――

「どの戦力を回すというのだ？MSの兵力は既に一桁台なんだぞ」

そう、4月下旬に進出した当初は20機ものMSが居たガダルカナル島守備隊だったが、現在はたったの7機しか存在していない。

幸い、現在まで補給が滞りなく行われたお蔭で全機が稼働状態にはあるが、ここで戦力を供出されたらその戦力は大きくダウンしてしまう。

「ここが最前線基地だということも考えると、それはあまりにも致命的な問題だった。」

「・・・1、2機で十分でしょう。こちらの戦力に余裕がないことを説明すれば向オセアニア司令部こうも強くは言えない筈です」

「そうだが・・・となると、回すのはあのニュータイプ部隊か？」

「そうなりますね。ただ、ノビタ・ノビ特務准尉が抜けるのはあまりに痛すぎるので、候補となるのはトイ・ロウラン少尉かタリア・ロウラン特務准尉でしょう。あるいはいつそのこと両人を送ってしまうという手もありますが・・・」

「・・・トイ・ロウラン少尉だけを送ろう。こんな最前線に來させておいてあれだが、なるべく女子供には地獄を見せたくないからな」

ロツクはそう言いながら、トイ・ロウラン少尉をポートモレスビー攻略に送る旨を大尉に告げる。

そもそもロツクは少年兵が戦場に出てくることをあまりよく思っていないかった。

戦争は大人がやるべきものであると思っていたし、本職の軍人としてのプライドも存在していたからだ。

まあ、それでも開戦準備が整わないまま開戦してしまったことで、ジオンにはまともな兵が足りないというのも事実であり、加えてニュータイプという存在の能力の高さから、そこら辺の徴兵された兵



士を戦場に放り込むよりはましだとは思っていたが、それはあくまで妥協した考え方をしたただけであって、理解はしても納得したわけではない。

「では、そのようにいたします」

「頼んだ。まったく、ニュータイプだかなんだかは知らないが、能力が高いとはいえ女子供を戦場に投入しなければならぬとは、寒い時代になったものだな」

ロックは原作の9月に何処ワツケのルナイツン司大佐令が言ったような台詞を吐いた。

UC0079年 6月14日 違和感

◇宇宙世紀0079年 6月14日 ニューギニア島 ポートモレスビー

「・・・可笑しいな。何か違和感がある」

トイ・ロウラン少尉はそう呟く。

彼がいま参加しているポートモレスビー攻略作戦は連邦軍の激しい抵抗に遭いながらも順調に進んでおり、あと数時間で陥落するところまで来ていた。

そして、抵抗の激しさから何かしらの罠が仕掛けられているという可能性も低く、攻略部隊の司令部では既に残敵掃討を考え始めている。

だが、その段階まで来ていても、トイは説明できない妙な違和感を感じていた。

「いや、気のせいなのか？俺はニュータイプ能力が低いからよく分かんない」

トイはそう言っつて、自分の勘を疑い始める。

元々トイはニュータイプ能力はそれほど高くはなく、精々戦場で相手の殺気を数キロ先ぐらいから感知できる程度の能力しかなかった。その為、今現在、ニュータイプ研究所で作成中のサイコミュ兵器である「ビット」も操れるのは1機か2機程度だと見なされており、それもあって彼は自分の勘——ひいてはニュータイプとしての能力を今一つ信用出来ておらず、その違和感を気のせいだとも考え始めていたのだ。

「・・・いや、ここは戦場だ。念のために「アレ」をやってみるか」

トイはそう言うのと、手と手を合わせながら祈るようなポーズを取る。

これはニュータイプ研究所でやるニュータイプ能力トレーニングの1つで、こうすることで頭の「気」を集中させ、ニュータイプ能力を一時的に高めるといふものだ。

逆襲のシヤアでクエス・パラヤがインドでヨガの修行をしたことでニュータイプ能力が使えるようになったという経緯から転生者達がやらせていることで、主にニュータイプ能力の低い者に課せられるトレーニングだったが、実のところ当初はやらせた転生者達ですら少々胡散臭いと思っており、半ばダメ元でやらせていた方法だったのだが、予想以上に効果があったことからこのトレーニングは継続されており、中には戦場で行う者すら居り、トイもその一人だった。

「………ッ!? 2時の方向か!!」

暫しの瞑想の後、正面からやや右の方向に何か存在することにトイは感づく。

——だが、その時には既に遅かった。

何故なら、その直後にトイの搭乗するジムⅡ改のコクピットは光に包まれ、トイの身体はその光が発した高温の熱によって跡形もなく蒸発してしまったのだから。

「ふん、やったか」

◇

ジャングルの中から、コクピットに大穴が空いて操っていた糸が切れるかのように倒れ込むジムⅡ改の姿を見ながら、ジーク・マイアー中尉（オリキヤラ）は一言そう呟く。

10センチビームカノン砲。

それはポートモレスビー郊外の施設で作られていた連邦の秘密兵器だった。

その名の通り、砲弾の代わりにビームを発射する大砲であり、対ビームコーティングを施されていないジムⅡクラスのモビルスーツならば、5キロの距離から（天候などの条件にもよるが）その装甲を容易に貫通できるほどの威力が秘められている。

そして、それは期待通りの威力を発揮し、見事ジークが狙っていたジムⅡ改に搭乗していたトイ・ロウラン少尉の命を狩り取った。

「隊長、やりましたね！敵のモビルスーツの破壊に成功しました!!」

「ああ、だが、これ以上は無理だ。急いでこいつに爆弾を仕掛けろ。そして、こいつの資料を持ち出せ。撤退する」

「えっ、なんでですか？たぶん、まだこっちの位置はバレていませんよ

？このまま再充電を行ってもっと敵をやっつけた方が良いのでは？」

ジークの部下はそう言いながら空を見る。

こういったビームは宇宙空間のような真っ暗闇な空間や夜の時間帯、更には天候が曇や雨だったりすると、はつきりとその光が見える。

だが、今は昼を少し過ぎた時間帯であり、天候も快晴そのもの。

この条件が揃っていた場合は、ビームというのは発射されても非常に見ずらく、はつきりと自分に向けて照射されていなければ分からないのだ。

現にこちらの存在はバレていない。

いや、厳密には倒されたジムⅡ改を見たジムⅡの何機かが周辺を警戒している様子から、何かが起きたことは感じているのだろう。

しかし、同時にその様子から自分達の存在が感づかれていないことは明らかだった。

だから、バレないうちに再充電を行ってもっと敵をやっつけよう。

その考え方は軍人としてはある意味当然の思考だった。

が――

「馬鹿！ 忘れたのか？ こいつは再充電に10分も掛かるんだよ!! その間に敵が来たらどうすんだ!!」

そう、この10センチビームカノン砲には欠点があり、1度撃ってしまうと次に発射するまでに10分もの時間が掛かってしまうのだ。

エネルギーCAPがあればこの問題も多少は解決するのだが、あいく連邦はまだ開発に成功しておらず、登場するのはもっと先の話だった。

加えて、ジオン軍も馬鹿ではない。

仮にこのまま攻撃を続行して次から次へと味方がやられれば、当然の事ながら不審に思い、付近の本格的な探索を始めるだろう。

そして、見つかって攻撃を受ければ、こんなまともな防備も施していない設備などひとたまりもなくやられてしまうだろうし、自分達の

姿が挽き肉へと変えられてしまうのは想像に難くない。

「で、でも……」

「でももなにもない！死にたくなかったら早くしろ!!」

「は、はい！」

そう言っつてジークの言ったことを行動に移していく部下達。

そして、彼らがこの10センチビームカノン砲を破壊して撤退したのはその5分後の事だった。

◇ガダルカナル島 北側 海岸

「あれ？タリア。こんなところで何してるの？」

ポートモレスビーで激戦が行われていた頃。

ガダルカナル島では第二種警戒配置が取られながらも、常日頃からオーバーワークを敷いているパイロット達には交代で休みを取る旨が通達されていた。

そして、のび太もそれを利用して海岸で遊ぶ（と言っても、泳げはしないのもっぱら砂遊びだが）べく砂浜へとやって来ていたのだが、そこで体育座りをしているタリアを発見して声を掛けたのだ。

「あつ、ノビタ」

「どうしたの？元気がないみたいだけど・・・」

「ううん。ただ、お兄ちゃんが心配だなんて思ってた」

「ああ、そう言えば別の戦場へ行っちゃったんだよね」

のび太は今朝方基地内に知らされたポートモレスビー攻略作戦発動の事を思い出す。

のび太にはトイがこの作戦に参加しているかどうかは知らされていない。

そういうのは軍機に当たるので、パイロットであるのび太には知らされないからだ。

しかし、それでものび太はなんとなくその作戦に参加していると直感していた。

「でも、作戦が終わったら帰ってくるって言ってたし、それにトイさんはなんだかんだで凄いパイロットなんだし」

これは本心からののび太が抱いている感想だ。

確かにトイはニュータイプ能力はのび太には劣る。

しかし、それを抜いたとしてもMSの操縦者としてはのび太より何段か上のレベルに居るのだ。

だからこそ、トイはポートモレスビーから帰ってくるとのび太は思っていたのだが、不安要素が1つだけあった。

(とは言え、あんなこと言われちゃやっぱり不安になっちゃうんだよなあ)

そう思いながら、のび太はガダルカナルを出ていく前にトイに言われた事を思い出す。

『俺が万が一死んだら、タリアの事は頼んだぞ』

物凄く縁起でもない言葉だった。

もし転生者がこれを聞いたなら、間違いなくこう言うだろう。

死亡フラグ、と。

(あの時は上手く言えなかったんだけど、今考えるともう少し何か言っておくべきだったかな?)

勿論、それで何かが変わるわけでもないとは思う。

だが、同時に言葉1つで運命が変わることも有りうるのが現実でもあるのを、のび太はよく知っていた。

「・・・うん。そうなんだけど、なんとなく兄さんにはもう会えない気がするの」

「そんなこと言うもんじゃないよ。兄妹なんだから、ちゃんとお兄ちゃんのこと信じなきゃ」



縁起でもないことを言うタリアに、慌ててそう注意するのび太。  
だが、その言葉には重みがない。  
何故なら、のび太も同じような思いを抱いていたのだから。

(僕ってこんな冷たい性格だったっけ?)

内心でそんな自分の心の冷たさに首を傾げながらも、のび太は次にタリアに掛ける言葉を探していく。

だが、見つからない。

そもそも自分でさえもう帰ってこないのではないかという疑念を  
持っているのに、身内であるタリアが同じような思いを抱いているの  
では、幾ら励ましの言葉を掛けたところで心に響かないだろう。

(はあ・・・くそっ、なんでこんな達観しているんだ、僕は!!)

自分であって自分ではないような心の感覚にのび太は苛ついた。

しかし、結局、タリアに掛ける言葉は見つからず、2人の間に気ま  
ずい雰囲気の流れていく。

——そして、2人にトイ・ロウラン少尉の戦死が通告されるのは、そ  
れから2時間後の事だった。

U C 0 0 7 9 年 6 月 1 7 日 攻 防

◇宇宙世紀0079年 6月17日 オーストラリア大陸 シド  
ニー近郊

「連邦も派手にやってくれるな」

シドニー近郊に存在するジオン軍基地の司令室の中で、ダグラス・ローデン大佐はそう言いながら戦況図が映されたスクリーンを睨み付けるように見ていた。

2日前の6月15日より始まった連邦軍のオーストラリア大陸の東進。

それは2日経った今、防御する側のジオン軍にとって極めて不利な状況となっていた。

連邦は緊急増産されたサーモバリック爆弾をありつただけこの戦いに投入していたのだ。

流星にMSやヒルドルブなどの重戦車であれば、よほどの至近距離で喰らわない限り損害はなかったが、それ以外の装甲車などは大破してしまおうし、歩兵に至っては高確率で死亡してしまう。

更に前線の防御陣地がサーモバリック爆弾の強力な爆風によって吹き飛ばされてしまったことで、前線の所々に穴が空いてしまいい、そこに連邦軍の大部隊が殺到していき、ジオン軍の部隊を次々と包囲殲滅していく。

もしこれでジオン軍の指揮官の指揮レベルが『並』であれば、これだけで戦線が崩壊していただろうが、連邦軍にとっては残念なことにダグラスは『並』の指揮官ではなく、更にはポートモレスビーが陥落した事で北に目を向ける必要がなくなったことも合わせり、なんとか戦線を建て直して敵を押し留めている。

しかし、このまま行けばオーストラリア東部の陥落は時間の問題であり、ダグラスはなんとか打開策を打たなくてはならなかった。

「例のアプサラスは？」

「量産機はあと2日で到着との事ですが、アプサラスの完成型試作機であるアプサラスⅢなら、今日のうちにもパースを強襲するとの事です」

そう、今回の戦いにはダグラスの事前の嘆願によって、ロールアウトしたばかりの量産型アプサラス4機とアプサラスⅢが戦線に投入されることになっていたので。

アプサラスは月で開発されている対ジャブロー用の兵器の登場によってジャブロー攻略という当初のコンセプトを変更され、原作のオデッサ作戦にあたる連邦軍の大規模反攻作戦の際に敵の戦線を強引に分断する秘密兵器として運用される予定となっていた。

その為、ここで投入してその存在を大々的に露呈させてしまうことにギレンはかなり渋ったのだが、ここで負けてしまうとオセアニア戦線が崩壊してしまうという事も明らかであるので、仕方なく投入を決定したので。

ちなみにアプサラスⅢだが、原作と違って早期に完成したことで量産型アプサラスの設計が終わって暇を持って余っていたギニアスによって、折角の実験機ということに魔改造が施されており、原作には無かった大気圏突入機構やIフィールド発生装置、更には試作品で色々と不安要素もあったが、フェイズシフト装甲という明らかにこの時代どころか、宇宙世紀そのものの世界にはない装備まで付与されていた。

こちらは量産型アプサラスとは違って、戦場での実証試験という形で投入が許可されているが、万が一にも鹵獲されることを防ぐために、遠隔・手動の2つの自爆装置も設置されていたりする。

『これで負ければ、お前は懲罰部隊行きだ』

というのはアプサラスを預ける際にギレンがダグラスに対して

言った脅し文句であったが、それだけジオン軍上層部がアプサラスに期待しているということでもある。

まあ、ダグラスが例の事——シヤアがキャスバルであることを知っていると分かっていたら、懲罰部隊の代わりに死刑台送りとなるだろうが。

「そうか。ならば、この2日が山場だな。我々にとっても、連邦にとっても」

ダグラスはそう言いながら、じつとアプサラスⅢがパースを強襲してくれるその時を待つことにした。

◇パース 連邦軍司令部

「被害はそれなりに大きいが、順調だな」

パウエル中将はそう言ってスクリーンに映される戦況図を見つめる。

この作戦の為にパウエル中将が集めたサーモバリック爆弾の嵐によって進軍初頭にジオン軍側の防衛陣地に大きく穴を開けた。

些か乱暴な戦術ではあったが、これによって連邦軍は順調にジオン軍を撃破していつており、このまま行けばあと数日でオーストラリア大陸は連邦軍の手によって奪還されることとなるだろう。

「しかし、これだけやられてもジオン軍の戦線が崩壊しないとな。ジオンの指揮官も優秀だな」

パウエルはそう褒め称える。

実際、元々の数の不利に加えて、緒戦で防衛陣地を吹っ飛ばし、師団規模の敵を幾つか包囲殲滅し、万単位の捕虜を既に取っているにも関わらず、戦線が崩壊しないだけでもダグラス・ローデン大佐という人物の優秀さは分かるだろう。

普通の指揮官ならば、それだけの要素が重なればとつくの昔に戦線崩壊している筈だ。

「だが、既に大勢は決している。戦いの流れそのものを動かすことはできぬな」

その通りだ。

そもそも寡兵で大兵をやっつけるといえるのは、歴史上では派手に喧伝されているが、あれはあくまで奇跡的な事をやってのけるからこそ歴史の教科書に乗るのであって、その奇跡的な事をやってのけるには如何なる名将でもよほどの幸運と事象が重ならなければ出来ない。

例えば、旧世紀の桶狭間の戦いでは信長は10倍の戦力差を引っくり返して勝利したと言われているが、あれは雨が降って信長軍の進行の音を消し、敵方の将である今川義元が側面をほぼがら空きにしていなければ、その勝利は立ち消えていただろうし、もっと言えば相手が今川義元がやられた後も進撃を続行していれば尾張は落ちていただろう。

原作オリジンのルウム会戦も同じだ。

ミノフスキー粒子とモビルスーツを組み合わせた新しい戦術によってレビルの本隊である第一、第三連合艦隊を撃滅したは良いが、ティアンム中將が率いる第二艦隊は損害が軽微であり、もし肉を切らせて骨を断つような戦法を取ってきた場合、グレートデギンは轟沈、デギンとガルマは戦死、サイド3も陥落というジオンにとって最悪な展開が待っていただろう。

この世界のルウム会戦においては拡散大型メガ粒子砲やベースジャバーなどの原作になかった兵器を幾つか投入することによって完勝を納めたが、あれは原作知識を持つという反則的なチート特典があったからこそ出来た芸当であり、更には1度その手札を見せてしまった以上、2度目は通用しなくなる。

この事から分かるように、寡兵で大兵を引っくり返すというのは非常に困難であり、尚且つその手段は1度やってしまえば2度目は通用しないものがほとんどなのだ。

よって、今回の戦いもそうなり、多少の損害は負うものの、連邦軍はオーストラリアにて勝利を納める事が出来る。

パウエルはそう信じていたし、実際それが現実であるのは疑いようのない事実だ。

しかし、彼は1つだけ忘れていた。

確かに大兵と寡兵で、尚且つ大勢が決している戦局では99パーセントの確率で大兵が勝つ。

だが、逆に言えば1パーセントは常に寡兵側が勝つ可能性があるのだということ。

そして、それはすぐに証明されることになる。

「！パウエル中將、上空から何か巨大なものが降下してきます!!」

「なに?！」

突如としてオペレーターが報告してきた不安要素に、早くも勝利の

余韻に浸ってしまったっていたパウエル中将は思わず叫んでしまう。

「何故、今まで発見できなかったのだ!? ミノフスキー粒子は散布されていない筈だぞ!」

「そ、それが・・・宇宙から直接降下してきたようです!!」

「な、なんだと!」

そう言われてパウエル中将は思い出した。

ジオンの第三次降下作戦の際にジオンの一部のMS部隊がMSで直接降下してきたことを。

(しまった! ジオンの奴等、これが狙いか!!)

総司令の首を獲る。

それは単純にして有効な作戦だ。

何故ならば、そうすれば指揮系統は混乱し、次期指揮官に指揮が委ねられるまで、連邦軍の指揮系統は機能不全となるのだから。

(不味い! ここにはMSに対抗できる部隊は居ない!)

そう、今回の作戦で兵力はほとんど前線に注ぎ込んでおり、このパスには僅か1個大隊(1000人)の兵力が駐留するのみだ。

この作戦がジオンが苦し紛れでやって来たものなのか、それとも計画的にやったものなのかは分からないが、どちらにしてもパウエルの命がピンチであることに変わりはない。

「・・・敵の数は?」

「一機のみです」

「そうか」

それを聞いてパウエルは少し安堵した。

幾らMSが強力とは言え、1機のみならばこちらの手持ちの戦力の火力だけでも押しきれられるかもしれないと思ったからだ。

とは言え、1個大隊しかいないので、なかなか困難ではあるが、それほど絶望的ではない。

パウエルはそう考えていたが、実はこの時、彼は1つ思い違いをしていた。

それはパウエルは降下してきたものをMSと判断していたのだが、実際はアップサラスⅢというとんでもなく恐ろしいものであったことだ。

この点は『巨大なもの』という曖昧な言い方で報告をしたオペレーターが悪かったのだが、どちらにしても結果は変わらなかっただろう。

何故なら、アップサラスⅢが降下してきた時点で、彼らは悲惨な運命を辿るといふ未来しか存在しなかったのだから。

「よし、迎撃準備を行え！ここが踏ん張りどころだ!!」

そうとは知らずにパウエルは部下達に迎撃を指示する。

——そして、彼らに破滅の時が訪れるのは、それから数分後の事だった。



UC0079年 6月19日 連邦軍撤退

◇宇宙世紀0079年 6月19日 オーストラリア大陸 中東部

「負けだな」

オーストラリア東部侵攻作戦に参加している部隊の1つである独立機械化連隊を率いる男——イーサン・ライヤー大佐はそう言いながら、この戦いは負けだと悟り始める。

今より2日前の6月17日に行われたアプサラスIIIによるパース強襲は、パウエル中将の戦死と彼を護衛していた大隊の壊滅という形に終わり、当然の事ながら最高司令官であるパウエルの戦死は前線に混乱を与えた。

その間にジオン軍は態勢を建て直し、一部では反攻にも出たが、連邦軍もさるもので翌日の6月18日にはコール・ヴィッター少将（オリキヤラ）が指揮権を引き継ぐ形で防衛線を再構築して戦線は膠着する。

しかし、19日の今日。

先日、パースを強襲したアプサラスIIIと量産型アプサラス4機の計5機のアプサラスが戦線に現れた事で戦局は一気に動く。

拡散メガ粒子砲とマルチロックオンシステムというチート攻撃兵器によって、連邦軍の機械化兵力は付近に居た歩兵共々吹き飛ばされていき、連邦軍は僅か1時間で3個師団（4万人）が壊滅することとなった。

その後、残っていたサーモバリック爆弾を駆使することで2機の量産型アプサラスを叩き落としたものの、そこでサーモバリック爆弾は弾切れとなる。

その後は通常兵器での撃墜を試みる連邦軍だったが、量産型アプサラスは実弾では簡単に落ちないように頑丈に設計されていたし、アプサラスIIIに至っては不完全だがPS装甲まで搭載されており、更には

そもそもメガ粒子砲によって攻撃する前に機械化兵力が蒸発してしまう上に、ミサイルもミノフスキー粒子によって妨害されており、全く相手になっていないというのが現状だった。

おまけに指揮を引き継いだコール少将も既に戦死しており、指揮系統は再び混乱している。

そして、イーサン・ライヤー大佐の率いる独立機械化連隊も既に2個大隊が全滅していて、なんとか生き残っているのはコジマ大隊だけという有り様であり、とてもではないが戦闘続行は不可能だった。

「これで私のジャブローの仲間入りも立ち消えた訳か。……まったく、とんでもない連中が現れたものだ」

イーサンはそう呟きながら、自分の最後の配下の部隊となったコジマ大隊に撤退の指示を出す。

最低限の指揮官としての役割を果たすために。

◇オーストラリア大陸 シドニー近郊

「敵軍、撤退していきます」

「ふう、なんとかギリギリのところで持ったか」

ダグラス・ローデン大佐はそう言いながら、安堵した表情を浮かべつつ、どつかりと椅子へと座る。

今回の戦いは物凄くギリギリの戦いだった。

アップサラスの参戦と敵指揮官の抹殺。

どちらか一つでも欠けていたらオーストラリア東部は失陥していただろうし、もつと言えばオーストラリア方面軍が粘らなければ今日のうちにもシドニーは占領されていた筈だ。

そして、オーストラリア方面軍が粘れたのは紛れもないダグラスの功績であったのだが、それ故に彼は疲れきってしまっていた。

当然だろう。

ただでさえ数的劣勢な上に防御陣地は初っぱなに吹き飛ばされ、更に戦線に穴が開いた状態を建て直すために必死に頭を捻り続けたのだから。

「追撃を行いますか？」

「止めておけ。こっちの兵力もギリギリだ。そんな余力はない」

参謀の進言に対して、ダグラスはそう答える。

今回の戦いは確かに勝ったものの、オーストラリア東部侵攻開始時

に22万人（残りの3万人はポートモレスビー攻略に参加した）居た  
ジオン軍は既にその半数にまで減らされており、対して連邦軍は未だ  
に40万人弱もの兵力を残している。

とてもではないが、追撃など不可能であり、無理に行えば返り討ち  
に遭いかねなかった。

「それより撃墜されたアプサラス2機を急いで回収するか、それが無  
理なら破壊しろ。あれが連邦に渡ったら不味い」

ダグラスはそう指示する。

彼は今回の戦いで大軍をケーキを切るかのように蹂躪するアプサ  
ラスの強さにそれ恐ろしいものを感じており、あれが連邦に鹵獲され  
たらとんでもないことになると考えていた。

その為、連邦の手に渡さないためにも撃墜された機体を回収する  
か、あるいはいつそのこと破壊した方が良いと判断していたのだ。

「了解」

「では、ジェーン。後は頼む。私は少し仮眠を取る。何かあったら起  
こしてくれ」

「分かりました」

ダグラスはそう言い残すと、宣言通りに仮眠を取る為に司令室を出  
ていった。

◇宇宙要塞『ソロモン』

「勝ったか。これで連邦はしばらく大人しくなるだろう」

ドズルは地球方面軍から寄せられてきた報告書を読みながらそう言う。

「だが、これでアップサラスという切り札が敵にバレてしまった。これは不味い」

しかし、同時に今回の戦いでアップサラスを使ってしまったのは今後の戦略に差し支えるかもしれないとドズルは思っている。

なにしろ、ジオンにとってアップサラスは切り札の1つであり、本来は秘密兵器としてここぞという時に連邦を思いつきり叩くのを使う予定だった。

だが、1度使ってしまった以上は次から使うときに効果が薄くなることは間違いない。

加えて、アップサラスは強力ではあるが、対策方法が無いわけでは無かった。

その根拠として挙げられるのはアップサラスの武装であり、攻撃方法がメガ粒子砲に偏重しているため、ビーム攪乱幕やIフィールド発生装置を使えば防がれてしまうのだ。

もつとも、その防御手段にも欠点は存在する。

まずIフィールド発生装置だが、そもそもIフィールド発生装置は結構大型の機械であり、そのサイズからMSにはまず搭載できず、搭載できるとしたらアップサラスそのものかビグ・ザム程の大きさの機体となってしまうのだ。

まあ、逆襲のシャアではアムロ・レイの乗るレガンダムが3つのフィン・ファンネルにIフィールド（正確にはフィン・ファンネル・フィールド）を発生させることでネオ・ジオンのビーム攻撃から逃れていたが、あれはサイコフレームとニュータイプであるアムロ・レイが組み合わさったからこそ出来た芸当であり、普通の人間にはまず不可能だった。

ビーム攪乱幕の方も同じで、こちらはミノフスキー粒子と同じく撒けば撒くだけ効果を発揮し、濃度が高ければメガ粒子砲すら拡散できるが、逆に言えば撒く側もビーム兵器は使えない。

このようにアップサラスの攻撃を防ぐ手段は既存の技術（とは言っても、Iフィールド発生装置の方は連邦は未だに完成させていないが）でも存在するのだ。

更にもしかしたら原作に出なかっただけで、もっと別なやり方も存在するかもしれない、そうなるとアップサラスによる敵戦力の蹂躞は益々困難になってしまう。

「いや、アップサラスだけじゃない。こっちのカードもどんどん尽きてきてる。早いとこ決着をつけないと不味いんだが……」

ドズルはそう言いながら、ランバ・ラルの事を思い出す。

ジャブローに潜入する命令を与えられたランバ・ラル隊であるが、南米に入るのを確認して後は無線封鎖をしているので今どうなっているのかはドズルにも分からない。

下手をしたら全滅している可能性もあったが、どちらにしても対ジャブロー用の“あの兵器”はまだ完成していないので、仮にランバ・ラル隊がジャブローの入り口を見つけたとしても、今のところジャブローを攻めるつもりはなかった。

ランバ・ラル隊を巻き添えにしてしまうかもしれないし、そもそも入り口を見つけたとしても原作の描写からその入り口の大きさはたかが知れており、大軍が殺到することは困難だ。

むしろ、ふん詰まりになって各個撃破されてしまう可能性すらあり、そうするくらいならグレンの野望であった第二次ブリティッシュ作戦のようにこちらから強引に入り口を作ってしまった、そこを攻めた方が確実だし手っ取り早いとドズルは考えていた。

「・・・まあいい。11月まで待つと言ったのだ。今はその通りにするしかない」

ドズルはジャブローの問題についてはそう判断し、目下の問題であるオセアニア戦線について考える。

(ジェーン大尉から送られてきた報告ではオーストラリア方面軍は今回の戦いで半数の戦力を喪失。そろそろ兵員の補充を行わないと不味いんだがな)

ドズルは眉をしかめながら、どうするか必死に頭を捻る。

なにしろ、今回の戦いでオーストラリア方面軍は戦力の半数を喪失しているのだ。

これは早急に増援を送らないと不味いのだが、既にジオン地上軍の常備軍のほとんどは地球侵攻作戦に費やされており、本国には最近徴兵(ただし、学徒動員はされていない)された新兵くらいしか居らず、義勇軍の方も最近では志願者も少なくなってきたり、アフリカでの失敗もあるのであまり期待は出来なかった。

(・・・やむを得ないか。少々不安もあるが、やはりオセアニア戦線は限界だ。新兵でも送るしかない。兄貴にはそう進言しておこう)

この際、多少の質には目を瞑って数を揃えるしかない。

ドズルはそう判断し、本国に居る新兵を地球方面に送るようにギレンに進言することを決めた。



UC0079年 6月22日 ホバークラフト

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 6月22日 ガダルカナル島

「やあ、久しぶりだね」

ガダルカナル島の格納庫で機体のチェックを行っていたのび太に  
そう声を掛けてきたのは1ヶ月以上前に会ったMIPの技術者の男  
(後から聞いたが、名前はカール・イーストン(ちなみにオリキャラ)  
だった。

「お久しぶりです。カールさん」

「うん。元気そうでなによりだよ。それよりちよつと時間を作れない  
かな?君に支給される新兵器について説明を行いたいんだ」

「新兵器?もしかして、例の――」

「あはは。そっちはまだなんだ。まあ、あと1ヶ月程で完成するところ  
まで漕ぎ着けてはいるんだけどね」

「そうでしたか。・・・分かりました。この機体のチェックが終わった  
らすぐにでも」

「分かった。それまで待っているよ」

「これが新兵器ですか？」

◇

あれからのび太は機体のチェックを終え、カールにとある格納庫に連れてこられたのだが、そこにはベースジャバーの形状をした1つの巨大な兵器が置かれてあった。

「これってベースジャバーじゃないんですか？」

「いや、違う。これはホバークラフトだよ」

「ホバークラフト？」

「まあ、簡単に言えば水面を走る事が出来る兵器だ。その気になれば陸上も滑走することも出来る」

「へえ」

のび太はそう言いながら、興味深げにホバークラフトを見る。  
実はホバークラフトという兵器そのものはのび太の居た世界（もっ

と言えば21世紀の時代)にも有ったのだが、のび太はそれを知らず、始めてみる兵器に目をキラキラさせていた。

「あれ?でも、これって空を飛べるんですか?」

「いや、飛べないよ。あくまで地上や海上を走る兵装だからね」

「そ、そうなんですか。でも、空を飛んでいった方がやっぱり早いんじゃない?」

「確かにそうだ。でもね。空を飛ぶ兵器というのはレーダーに引っ掛かりやすい。だから、水上から近づこうと考えたのだよ」

そう、ミノフスキー粒子登場によって大きく変わったこの戦争だったが、あくまでミノフスキー粒子はレーダーなどの電子機器をダウンさせる性質を持っているというだけで、濃度によっては高速の標的は探知されることもある。

その為、高速で飛ぶことの多い航空機は探知されやすいことが多く、秘密裏に目標に近づける可能性は低いため、ホバークラフトによって海上から秘密裏に接近しようという考え方が生まれたのだ。

が――

「まあ、とは言っても、水上レーダーがある以上は意味がないんだけど、本国の人間はそこら辺を分かっていなくてね」

カールの言った通り、この水上から近づくという考え方には穴がある。

それはホバークラフトもまた水上レーダーに引っ掛かってしまうということであり、それを誤魔化しようとミノフスキー粒子を撒けば、敵が近くに居ることを教えるようなものなのだ。

このホバークラフトを設計した技術本部は水上レーダーの存在を

すつかりと忘れており、ホバークラフトならばミノフスキー粒子無しでも近づけると思っていた。

何故か？

それは簡単だった。

コロニー内ではそもそも海など無かったので、水上レーダーなど存在しておらず、その存在を想像することが出来ていなかったからだ。

まあ、地球方面軍所属の技術者であればそのくらいは気づいたのだろうが、あいにくこれを設計したのは本国に引きこもっている技術本部の技術者達だった為、その点に気づくことが出来なかった。

その為、このようなアホみたいな兵装が前線に送られてきたという訳だ。

「ということとは、これはあまり役に立たない兵器なんですか？」

「いや、そんなことはない。現にロック少佐は別の方法で活用することを考え出した」

そう、実を言うところの兵装は全く無駄な代物という訳ではなかった。

当初のコンセプトである海上からの敵地への侵攻という点では全く使えない兵装ではあったが、MSを水上滑走させるという構想そのものは面白く、MSを島の警備艇や敵の沿岸通商路の襲撃艇代わりとして使えるのではないかと考えたのだ。

幸い、このホバークラフトは水上で攻撃することも考え、姿勢制御システムが搭載されており、そのような運用も可能だったこともその考えを後押ししていた。

「へえ、そんな応用も考えているんですか。やっぱり出来る偉い人は考えることも違うなあ」

のび太はそのような感想を抱く。

もつとも、こういう道具の応用は普段から持ち主であるドラえもん以上に秘密道具を扱いこなしているのび太の得意分野でもあったのだが、普段から自らに劣等感を抱いているのび太がそれに気づくことは無かった。

「ところで、これはどうやって使うんです？ ベースジャバーと同じ感じでモバイルスーツが操作するんですか？」

「まあ、だいたいはそんな感じだね。ただし、3次元の空間である空と2次元の海では感覚が違うから、そこら辺は新たに取り入れられたシュミレーションで対応してくれ」

「なるほど。じゃあ、早速やってみたいんですけど・・・」

「ああ。では、すぐにセッティングを行おう。少し待っててくれ」

カールはそう言いながら、近くに在ったシュミレーションルームの方に向けて歩いていった。

◇南米 ジャブロー

「そうか。再度のオーストラリア東部侵攻が決定されてしまったか」

レベルは残念そうに報告書を持ってきた男——ブレックス・フォーラー中佐に向かってそう言った。

「はい。どうやら陸軍はオーストラリア東部奪還の失敗に動揺しているようで、戦果を獲得するのに躍起になっています」

「まあ、無理もないか。この作戦のために陸軍は保有しているサーモバリック爆弾のほとんどを使用して挑んだ訳であるし、ポートモレスビーまで切り捨てた訳だからな」

レベルは陸軍の心情を察しながらそう言う。

そう、今回のオーストラリアの戦いでは各戦線でのMSに対する有効手段の1つであったサーモバリック爆弾のほとんどを費やし、更にはニューギニア島の最大の拠点であるポートモレスビーを切り捨ててまで作戦を強行したにも関わらず敗北してしまい、陸軍の面子は丸潰れになってしまったのだ。

まあ、これは実質的に陸軍だけの事情なので、今回の作戦に失敗したからと言って別に他の空海や宇宙軍に対する発言権が下がるわけではないが、それでも作戦が失敗したということとで政治家は煩く言ってくるし、サーモバリック爆弾を強引に取り上げられた各戦線の指揮官からの抗議の声も大きくなっている。

つまり、現在の陸軍上層部は早めに何らかの大戦果を挙げないと陸軍内部の政敵によって、首をすげ替えられかねない状況へと陥っていたのだ。

「流石にこれは悲惨すぎますよ。閣下のお力でなんとかありませんか

？」

「難しいな。1月前までなら可能だったが、今の私は核分裂炉搭載MSの件で発言力が下がっている。それに敵に時間を与えない内に攻めるというのも悪い手ではない。まあ、オーストラリア大陸で猛威を振るったあの兵器の事を考えなければ、だけどね」

オーストラリアで目撃された新兵器。

勿論、アプサラスの事ではあったが、この兵器の存在は連邦軍全体（特に実際に被害を受けた陸軍）に衝撃を与えていた。

この兵器の存在がある以上、再攻勢は延期するべきだという意見も陸軍内部に出ていたのだが、情報部が解析したある情報によって対抗策はすぐに見つかる事になる。

それはアプサラスがビーム兵器しか使えないのではないかというもの。

実際、アプサラスに遭遇した兵士に総動員で聞き取り調査を行ったが、その結果、ビーム兵器しか使用していなかったことと実弾兵器らしい兵装が見当たらなかったことが判明する。

だとすれば、ビーム攪乱幕を使ってビーム兵器さえ無力化してしまえばアプサラスは恐れるに足らないのではないか？

例えばビーム兵器を無力化されたことでミサイルなどの兵装を後着けてしても、後になって慌てて着けられた兵装など大したものではない。

そのように情報部は解析していたのだ。

些か楽観的なものも有るとはいえ、アプサラスが出現してから僅か3日で、これだけの情報を解析してのけた連邦軍情報部の者達は間違いないく優秀だと言える。

「まったくです。あんな不確定な情報を基に再攻勢を強いられるオーストラリアの将兵達はたまったものではありませんな」

「うむ。まあ、それもあがるが将兵達の心理的な部分も心配だな。おそらく、あのアップサラスとかいう兵器に恐れを植え付けさせられてしまっただろうからな」

これはモビルスーツに遭遇した宇宙軍の将兵にも言えることなのだが、圧倒的にこちらを蹴散らしてくる兵器には蹴散らされる方は大きな恐怖を抱いてしまうのだ。

そして、あくまでレベルの想像であるが、今回のアップサラスの一件でもオーストラリア大陸の将兵達はアップサラスに対する恐怖を植えつけさせられてしまっているのではないかと考えていた。

「これを完全に払拭するには将兵全てを入れ換えさせるしか無さそうだが、そんな兵力も時間も無さそうなのが現状だ。・・・ああ、時間と言えば、何時になったのだ？その再攻勢の日とやらは」

「4日後の6月26日です」

「そうか。ということは攻勢失敗から僅か1週間で攻めさせられるのか。陸軍の将兵達があまりに気の毒だな」

レベルは4日後に訪れるであろうオーストラリアの連邦軍将兵の苦難の感情を想いながら、静かにその幸運を祈った。



U C 0 0 7 9 年 6 月 2 6 日 再攻勢

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 6月26日 オーストラリア大陸 シド  
ニー近郊

「1週間しか時間を稼げなかったか」

ダグラス・ローデン大佐は言いながら、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

連邦軍の再攻勢。

情報部から上げられたその報告には耳を疑った。

当然だろう。

残存兵力の多さからいずれは再攻勢を掛けるだろうとは予想していたが、僅か1週間でそうしてくるとは流石に思わなかったのだから。

しかも――

「敵はビーム攪乱幕を展開しています。おそらく、アップサラスの弱点に気づいたものかと」

そう、連邦軍はビーム攪乱幕を展開しながら進軍を続けており、この事から「ビーム攻撃しか使えない」というアップサラスの弱点を看破していることはすぐに分かった。

いや、例え偶然だとしてもビーム攪乱幕を展開していれば、アップサラスが無力化出来る」という結果は同じとなるのだが。

「あまり聞きたくなかった報告だな」

「・・・申し訳ありません」

「いや、少し現実逃避したかっただけさ。こっちこそすまないな。・・・

しかし、これは不味いな」

ダグラスが一番問題にしているのは兵力差だ。

幸いにして、連邦軍は兵力の再編成こそされているものの、戦力の補充は行われておらず兵力は40万弱のままだが、ジオン軍の方は先の戦いで残った11万人に加えてポートモレスビーから引つ張ってきた2万人の兵力と本国からの2個師団(1万9000人)の増援、合わせて15万人弱だった。

しかも、このうち本国から来た2個師団は新兵で編成されているので、まともな戦場に出してしまえばあっという間にやられてしまう。

その為、比較的難易度の低い前線に出さなければならぬのだが、はつきり言つてこの戦力比では難易度の低い戦場など存在しない。

むしろ、新兵の師団が弱点と見なされれば、積極的にそこに殺到していくだろう。

「頭の痛い現実だな。新兵の師団は錬度に不安があつて、切り札のアプサラスは無力化され、おまけに戦力比は2、5倍。・・・ジエーン、一応聞いておきたいんだが、これ以上の増援は来ないのか？」

「おそらく不可能です。例え来たとしても、それは先日本国からやつて来た新兵師団と同じになるでしょう」

「・・・やはり撤退するしかないか」

ダグラスはこの戦局はもう無理だと判断した。

一応、再攻勢が始まる前にドズル中将から『無理そうな場合は宇宙、あるいはニューカレドニア辺りに撤退するように』と言われているので、撤退命令を出す分には問題はない。

しかし、こちらが撤退するのを連邦がただ黙って見過ごすというのは絶対にあり得ないので、何らかの手を打たなければならぬ。

そう考えたダグラスは矢継ぎ早に指示を出す。

「まず全部隊をシドニー付近にまで後退させろ。そして、その後、殿部隊を編成してその部隊が時間を稼いでいる間に残りの部隊をHLVで宇宙に打ち上げ、撤退が終わった後に殿部隊は戦略海洋軍の潜水艦を使ってニューカレドニア島に撤退させる。そして、俺は殿部隊の指揮官として残る」

「えっ!?!、しかし、殿は危険です!閣下はここで朽ち果てる人では・・・」

「私が残らないで、殿部隊が真面目に戦ってくれると思うか?」

ダグラスはジェーンを睨み付けながらそう言う。

そして、それは道理だ。

総大将が真っ先に逃げ出しては、殿として危険な役割を担わされる部隊の士気は間違いなく落ち、場合によっては殿役として成立しなくなる。

それはそうだろう。

兵士という存在は後方でふんぞり返っている指揮官よりも、前線で自分達のすぐ傍で戦ってくれる指揮官の方に共感を抱くのだから。

よく指揮官先頭が味方の指揮を上げると言われるのは、こういう心理的な要素が絡んでいる。

まあ、指揮官は部隊の頭脳としての役割を最後まで果たさなくてはならないので、指揮官としての行動の観点からすれば後方でふんぞり返っている指揮官の方が正しいのだが、前線で命を賭けて戦っている兵士達はその正しさを理解してくれるかと言われれば、答えはNOだ。

いや、その指揮官によつばどの人望が有れば理解してくれるのだろうが、そんな指揮官は滅多に居ない。

そして、今回の撤退の際の殿という役割は、ある意味で攻勢の際に先陣で突っ切らせる部隊よりも危険な役割となる(そもそも攻勢と守

勢では前者の方が自然と士気が高まり、逆に後者は士気が低くなる）ので、自分が真つ先に逃げ出しては殿部隊の兵士達の士気は落ち、あつという間に瓦解してしまう可能性がある」とダグラスは考えていた。

「そ、それは……いえ、そうでしたね。出過ぎたことを申しました」

「いや、構わない。……と言いたところだが、これからも軍人を続けるようであれば、言葉には気をつけたまえ。君は秘書官やMSのパイロットという認識だったからこそ分からなかったかもしれないが、兵士は真つ先に逃げ出す指揮官にはついてきてくれないし、理屈で必ず動いてくれるとも限らない」

ダグラスはそんな忠告をジェーンに入れながら、その評価をほんの少しだが下げる。

彼女はザビ家をよく思っていない。

先程の言葉もザビ家の敵対者であるダイクン派の自分がここで終わってしまうことを危惧したからこそ、そう言ったのだろう。

それはダグラスとて同じだ。

しかし、だからと言って自分に付き従う兵士達を虚にする理由にはならない。

それをしてしまえば、自分は政争にかまけるばかりの俗物だ。

ダグラスはそのような思いを抱いていた。

……もつとも、それはあくまで主観的な観点からものを見た場合であり、ロツク少佐のような人物から見れば、ダグラスも政争にかまける俗物の仲間なのだが。

「まあ、時間もないことだし、説教はここまでだ。急いで全軍に後退命令を出してくれ。それと殿部隊の編成もな。……ああ、それとニュータイプ部隊の中でも年少の兵とメイ・カーウィン技術少尉を真つ先に

宇宙に上げてくれ。彼らのような子供に殿をやらせるわけにはいかないからな」

殿部隊とは云わば後退する部隊の為の盾だ。

そして、幾ら強力な力を持っているとはいえ、大人を守る盾に子供を使うわけにはいかない。

その程度の良心はダグラスにも存在していた。

「分かりました」

ジェーンはダグラスに対して敬礼を行った後、彼の命令を伝えるために各部隊に後退命令の通達を始めた。

◇サイド3 ズムシテイ 総帥府

「撤退、か。まあ、この戦局では妥当だが、これでオセアニア戦線もいよいよ崩壊するな」

オセアニア戦線の大元はオーストラリアだ。

故に、オーストラリアが陥落すればオセアニア戦線全体は維持できなくなる。

ギレンはそう分析しており、既に頭の中では今後のオセアニア戦略を「維持」から「撤退」へと変更していた。

「しかし、連邦もただ黙って撤退させてくれる訳もなし。となると、何処かで一泡ふかせて連邦に「ジオンはオーストラリア撤退後もオセアニア戦線を維持する」と思い込ませなければならぬ」

ギレンはそう言いつつ、ガダルカナル島守備隊指揮官であるロック・ホールデンから直接送られてきたある作戦企画書を思い出す。

「こちらについてはロック・ホールデン少佐が考案したホバークラフトを使ったラバウル奇襲案を利用すれば良い。・・・だが、問題はもう一つの方だな」

「そう、今ギレンを悩ませている最大の問題。」

それは『どうやって撤退するか?』ということだ。

知っての通り、オセアニアにはオーストラリア以外にもジオン軍の

兵力が居る。

具体的にはポートモレスビーとガダルカナル島にそれぞれ1万人、ニューカレドニアに2万人、その他にも旧ニュージージーランド、タスマニア島合わせて1万人。

その合計は5万人となり、これだけの兵力を一斉に撤退させるのはなかなか骨となる。

「戦略海洋軍にはビスマルクが居るが、1隻だけだし、運べるのは精々数千人だしな。ピストン輸送でハワイまで往復するなんて、のんびりしたことをやるわけにもいかん」

そうになると、オーストラリアの時と同じくHLVで宇宙に打ち上げるのが手っ取り早いのだが、大陸のような広い場所とは違う小さな島や場所にHLVを下ろすとなると、かなり高度で緻密な計算が必要になり、不確実性が高くなってしまふのだ。

「うくん。．．いや、待てよ。確か宇宙攻撃軍にはミノフスキークラフトを使用したファイリピン級輸送艦が配備されていたな。それを使って太平洋戦争の時のガダルカナルやキスカの真似事が出来ないか？」

ギレンはそこでミノフスキークラフトを使用した輸送艦——ファイリピン級輸送艦の存在を思い出す。

この艦はまだ8隻しか竣工していないが、輸送に特化した設計となっているため、1隻で最大1万人の完全武装の歩兵が運べる設計となっている。

ギレンはこれを使って太平洋戦争の時のガダルカナル島やキスカ島の撤退のような無傷（厳密にはガダルカナル撤退の際には駆逐艦1隻が沈んでいるが）での撤退を演出できないかと考えた。

「あれは最新鋭の船だから少々惜しいが．．．将兵の命には変えられない

いか。よし！出し惜しみは無しで行こう！沈められたらその時はその時だ」

ギレンは些か楽観的に事を考えながら、オセアニア戦線撤退作戦に向けて、具体的な案を練り始めた。



UC0079年 6月29日 ラバウル沖海戦

◇宇宙世紀0079年 6月29日 夜 ラバウル沖

「真つ暗だ・・・」

灰色という暗闇に夜や宇宙の暗闇に一番溶け込む塗装をした量産型ガンダムとそれを乗せるホバークラフトを操る少年——野比のび太はそう言いながら、辺りを見回す。

現在はレーザー頼りで周囲を見ているため、メインカメラやサブカメラ越しで見る周囲の光景はのび太の言った通り真つ暗ではあったが、暗視スコープは搭載されており、それを通して見た場合、周囲には自分以外の5機のMSとそれを乗せるホバークラフトが自機と同じく海上を走る姿がはつきりと見ることが出来る。

そして、今回ののび太達の任務。

それはガダルカナル島に居る全6機のMSを以てラバウル港を強襲し、ここに駐留する連邦海軍の艦船を撃沈しろというものだった。

(そう言えば、オーストラリアは陥落したって聞いたんだけど、リタ達どうなっちゃったのかなあ)

のび太は今朝方、シドニーが陥落したという情報を聞いたことを思い出し、リタ達の安否を心配する。

オーストラリアに居た訳ではないのび太にはシドニー陥落時の詳しい経緯は知らないが、もし激しくドンパチやりあったのであれば、リタ達も巻き込まれてしまった可能性があるのだ。

(いや、今は任務に集中しよう。どのみち今さらどうこう言ったところで何も変わらない)

リタ達がどうなっているにしろ、既に事が終わった後では何もかも

遅い。

そう思ったのび太はそこで思考を切り換えて、任務に集中することにした。

ほんの数ヶ月前ののび太なら動揺していただろうが、戦場を幾度となく経験した今ののび太はかなり冷静に振る舞うことが出来ていたのだ。

勿論、それだけではないのかもしれないが。

「あつ」

のび太は小さく声を漏らす。

レーダーに異常ノイズが出始めたのだ。

実を言うと、ラバウル近海は事前にポートモレスビーとガダルカナルから行った空襲によってミノフスキー粒子がばら蒔かれており、のび太を含めた6機の襲撃隊はこれを隠れ蓑にして敵を襲撃することになっていた。

技術本部が提示したコンセプトとは少々違ったが、ホバークラフトは当初のコンセプトに近い運用が成されることとなったのだ。

「暗視スコープに切り換えてつと。ここからは無線も使えなくなるから、はぐれないように味方の動きもちやんと見とかないと」

カメラのモニターを暗視スコープに変更しつつ、のび太は周囲の味方の位置を確かめる。

ミノフスキー粒子の散布範囲は限定されているので、帰るだけならその散布範囲を抜けた後、モニターに帰還指示装置を使えば出来るのだが、何処に敵が居るか分からない以上は味方に引っ付いていた方が良いとのび太は考えていた。

そして、程なくして味方の位置を確認できたのび太だったが、そこで不自然な点に気づく。

「あれ?」

味方である5機のMSの中の1機——タリアの機体が他の機体から距離を置き始めたのだ。

「タリア? 何してるんだ?」

のび太はいぶかしむ。

何も知らない人間が見れば、タリアの機体は何らかの異常によって操縦をミスリ、味方から離れてしまい始めたようにも思えるだろう。しかし、ニュータイプであるのび太の勘はこう言う。

あれは意図的なものである、と。

とは言っても、裏切ったとかそのような気配はない。

どちらかと言うと、微かな憎しみの感情を感じ取れる。

「憎しみ? まさか!?!」

のび太はそこで思い至る。

しかも、今頃気づいたことであるが、タリアの向かう先には連邦海軍の哨戒艇が1隻居た。

本来はのび太の方がタリアよりニュータイプの感知能力が高いので、タリアがのび太より先に敵を感知するということはあり得ない筈なのだが、どうやら憎しみによってニュータイプ能力が一時的にのび太を上回っていたらしい。

「と、止めなくっちゃ!!」

良くも悪くも思い至ったらすぐ行動するのび太は慌ててタリアの方に機体を動かす。

事前のブリーフィングでは連邦海軍の哨戒艇は例えこちらが見つかったとしても無視することになっていた。

なにしろ、周囲はミノフスキー粒子で無線が妨害されている。

とすると、哨戒艇は信号弾を打ち上げるか、港に戻って直接報告するしかないが、ラバウルより遠くだと信号弾を打ち上げられても分からないし、近くだった場合や直接報告する場合はこちらが攻撃する方が早い。

だが、撃沈してしまうと弾の無駄になるし、撃沈された際に舞う激しい炎が周囲に照らされることで敵が感付く可能性があった。

しかし、ここでタリアが勝手に船を沈めてしまうと、その方針はぶち壊しになり、味方に迷惑がかかってしまうことになる。

しかも、ミノフスキー粒子がばら蒔かれているせいで無線も通じないため、接触通信で連絡を取るしかない。

その為、のび太は機体をタリアの機体に接触させ、慌てて説得した。

「タリア！何やってるの!!」

「のび太・・・でも、こいつらはお兄ちゃんを！」

「悔しいのは僕だって同じだ!!でも、君が今やろうとしていることは、僕はおろか、他の人達まで危険に晒す行為なんだよ!!」

「！」

そう言われてタリアはようやく思い出した。

事前のブリーフィングで何を言われていたのかを。

ここで『そんなこと知ったこつちやねえ!』という自分の感情を抑止出来ない人間や味方の事をなんとも思っていない人間であれば、のび太の言葉は一蹴されて終わっただろう。

だが、タリアはそういう性格ではない。

仲間の事はちゃんと想っていたし、ここ数ヶ月の軍隊生活は自分の感情を抑止させるに十分な効果を発揮していた。

『ご、ごめん、のび太。すぐ戦列に戻るよ』

のび太の言葉で我に返ったタリアは急いで元の戦列へと戻ろうとする。

だが、その行動は少し遅かった。

パーン！

『あっ』

先程、タリアが襲おうとした哨戒艇がこちらを発見して、敵襲を知らせる赤い信号弾を打ち上がった。

◇地球連邦軍 ラバウル基地

「敵襲！」

突如として基地にけたたましく鳴る警報音。

それに対して、歴戦の将兵達は素早く各々の配置に着き、港に停泊していた艦船は慌てて出港していく。

「敵は何処だ!？」

見張り員を中心とした者達が懸命に敵の姿を探す。

ミノフスキー粒子下でレーダーの機能がダウンしている状況では唯一の有効的な索敵方法であったが、ここで一つ問題が起きた。

それは見張り員が警戒していた方向だ。

ラバウルはニューブリデン島の東に存在する場所。

そして、海の方角から信号弾が打ち上がったということは、襲撃してきた対象は海か空だ。

だが、この時、見張り員が一齐に向いたのは空だった。

実はこの赤の信号弾は敵襲のサインではあるのだが、それはあくまで敵襲そのものを知らせる代物であって、何処から敵が来るかを知らせる代物ではないのだ。

更に今まで海から襲撃が来なかったのもあって、今回も空襲であると思い込んでしまい、空を真っ先に警戒したという訳だった。

だが、それだけではない。

今が夜で思考が低下していた事も災いしていた。

人間というのは、思考が低下すると考え方が簡素になりがちだ。

そして、この場合、『さつき空襲が来たのだから、今度もまた空襲だろう』と見張り員を始めとした基地の要員達は勝手に思い込んでいた。

まあ、レーダーが機能していればこのようなことは無かったのだろうが、残念なことにレーダーは先程の空襲の際にばら蒔かれたミノフスキー粒子によって性能を大きく低下させており、のび太達が近くまで来ていることも気づいていない有り様だったのだ。

それ故に基地の対応は遅れる。

「!? 隊長、出港していた海軍の船が被弾しています!!」

そして、のび太達が出港した連邦海軍の艦船に攻撃を加え始めたところで、ようやく連邦軍は事態に気づき始める。

「なんだと!? しまった! 敵の狙いは基地ではなく船だったか!!」

「ど、何処から・・・」

見張り員達は懸命に敵の姿を探す。  
すると――

「あっ! 海上で何かが走っています!!」

「なに!?!」

そこで隊長と言われた男は暗視スコープ付きの双眼鏡越しに部下が指を指した方角を見る。

始めは何か水飛沫が走っていることしか分からなかったが、ズームを上げて見てみると、そこには巨大なホバークラフトに乗せられたモビルスーツが連邦海軍の艦船を襲っている光景があった。

「くそっ! 宇宙人どもめ!! MSをホバークラフトに乗せてやって来やがった!!」

「ええっ!?!」

「おい! すぐに航空隊・・・はさっきの空襲で無理か。なら、沿岸砲台担当の部隊に伝えろ!! 海軍を援護しろとな!!」

「無理ですよ！そんなことをしたら同士討ちになります!!」

「やってみなきや分からんだろうが!!良いからとつととやれ!!」

「り、了解!」

隊長にそう言われた部下は有線通信を使ってラバウルの沿岸砲台部隊へと連絡した。

——だが、時は既に遅く、後にラバウル沖海戦と呼ばれることになる本海戦において連邦軍が完全に後手に回ってしまったことで、連邦海軍は巡洋艦4隻、駆逐艦5隻を失うことになる。

そして、一方のジオン軍の損害は部隊が早々に引き上げたこともあって、損失は0だった。



## UCC0079年 7月1日 ガダルカナル島撤退

◇宇宙世紀0079年 7月1日 ガダルカナル島

「撤退、か」

のび太は先程、上官に言われた言葉を小さな声で反芻する。

上官に呼び出され、機体ごと海岸までやって来たのび太達。

彼らは船が来た時、何時もの通り補給の船だと思い、その積み荷を下ろす作業を手伝えという事かと思ったのだが、そこで待っていたのは宇宙軍の駆逐艦であり、上官はそれに乗って撤退しろと言ってきたのだ。

しかし、のび太は下された撤退という指示に驚いていた。

なにしろ、2日前にラバウルの連邦海軍に打撃を与えたばかりであったので、ガダルカナルでの戦いはまだ続くと思っていたからだ。

もつとも、だからと言って撤退という指示自体にはあまり不満はない。

確かにガダルカナル島は暫く居て思い入れのある場所ではあったが、逆に言えばその程度。

更に言えば、のび太は良くも悪くもあまり考え込む性格ではなく、そういう指示が出たということは何か上の方にも何か考えがあるのだろうと思っており、そこら辺は深く突っ込まないようにしていた。

が――

(でも、僕の機体だけ乗せて、他は全て爆破っていうのは酷い気がするなあ)

のび太はそう言いながら、自分の機体の前方に存在するミノフスキークラフトを搭載した最新鋭巡洋艦――センダイ級巡洋艦の二番艦『ナミカゼ』の姿を見る。

この巡洋艦は全長220メートル。

連邦のサラミス級より少し小さい大ききな船ではあったが、内部の格納庫にサラミス級と同じ4機のMSを積むことが可能なように設計されている上に量産性が高く、国力の少ないジオンとしては非常に有り難い存在だった。

だが、今回、この船に積むのはのび太の量産型ガンダム1機であり、他のジムIIやジムII改などは破壊し、パイロットだけを艦に乗せることとなっていたのだ。

こういった撤退戦の場合、重い装備は置いていった方が良く、そういう意味では量産型ガンダムも破壊して放棄した方が良いのだが、それでもこの措置が取られたのは、ジオンの厳しい台所事情が絡んでいる。

のび太の乗る量産型ガンダムは来月にロールアウトする予定の量産MS『ザム』より性能は劣るが、それでも原作ゲルググと性能面では互角という一年戦争前期に出てくるMSとしては破格の性能を持っていた。

しかし、量産型ガンダムはガンダリウム合金を部分的にとは言え、使っているだけあって価格も高く、確かにこの世界のジオンは原作の三倍の国力はあったが、未だに連邦と比べれば10倍の差を付けられているし、国力が増大しているだけあって国家予算も増額していたものの、それでも量産型とは言え、高価なガンダムを爆破して放棄するなどという贅沢なことをする余裕はジオンには無い。

そういった事情から、せめて量産型ガンダムだけでも回収することをジオン軍上層部は画策していた。

しかし、それはあくまでジオン軍上層部の都合を考慮しただけであり、現場に居る人間からすれば速やかな撤退を行う上で量産型ガンダムは邪魔な要素であったし、のび太にしても自分の機体だけ残して他の機体を爆破するという処置は余計なやつかみを生んでしまうので止めて欲しいというのが本音だ。

だが、如何にのび太がそう思っていようと、あるいは下の人間が量産型ガンダムを捨てることが戦略的に見て正しいと思っていようと、軍隊という組織は基本的に上の命令には逆らえない。

「・・・まあ、良いや。なるようになるしかないか」

のび太はそう思いながら、機体をナミカゼの格納庫に入れるために機体を移動させていった。

◇サイド3 ズムシテイ 総帥府

「上手くいったか」

ギレンはそう言いながら内心安堵していた。

なにしろ、今回の作戦は正直言って賭けの要素も大きく、下手をすればこちらの意図に感づいた連邦軍によって兵士達を回収した艦艇共々全滅させられる可能性もあったのだから。

だからこそ、先程、旧ニュージューランドのロケット打ち上げ施設から救出部隊の艦艇が打ち上げられ、作戦は結果的に成功したと聞いてギレンが安堵したのも無理のない話だった。

「いずれにせよ、ここでオセアニア戦線は完全に消滅。残るは北米とヨーロッパ、中東か」

これは不味い。

ギレンはそう感じた。

一見、戦線が縮小されたことでこちらの兵力が集中できるとも取れるかもしれないが、これは連邦の兵力も集中されることを意味しており、同じ兵力を集中するのであれば人的資源や国力の大きい連邦が圧倒的に有利なのだ。

しかも、今回のオセアニア奪還によって連邦軍も士気を上げているであろうから、下手をすれば原作のオデッサ作戦が早まった時期で発動される可能性もある。

「こちらの補給物資はまだ余裕があるんだがな」

そう、原作よりも戦線の縮小がされたこと、更には国力が三倍になったことと開戦が半年程早まったとは言え、戦争に備えて備蓄を行っていたことによってジオンの補給物資は原作よりも余裕があった。

しかし、その補給物資が届く先となる肝心な戦線がこれではあまり意味がない。

「こうなったら今のうちに宇宙に戦力がある程度結集させた方が良さ

「そうだな」

ギレンはそう考える。

その候補としては今のところソロモンやルナツーだ。

宇宙での戦いでソロモンを落とされてしまえばサイド共栄圏は崩壊してしまうだろうし、ルナツーを落とされればそれはそれで連邦に宇宙での活動拠点を築かれることになり、軌道上での制宙権を完全に確保できなくなる。

「いや、待てよ。そういうえば核パルスエンジンの燃料はまだ余っていたな。ならば、ア・バオア・クーを前線に移動させるというのも有りか」

そう、原作と違い、各サイドを核兵器で吹っ飛ばさなかったこの世界のジオンは核燃料を余らせている状態であり、その気になればア・バオア・クーを前線に移動させることも可能だった。

更にア・バオア・クーはソロモンと同じく戦前から要塞化されていた（原作ではソロモンは急造の要塞だったが、この世界では戦前に少しずつこつそり要塞化された）だけあって、要塞としての完成度は高い。

ならば、前線に移動させてソロモンと並ぶサイド共栄圏の最終防衛ラインとする選択肢も有りだ。

ギレンはそう考えたが、この考えには穴があることも気づいていた。

「しかし、それをやってしまうとサイド3の最終防衛ラインがグラナダのみとなってしまう、ジオン本国が手薄になる。その隙を突いて連邦の艦艇がこちらにやって来れば厄介だな」

原作ではサイド3の最終防衛ラインはグラナダとア・バオア・クーだった。

そして、より本国に近いということでもア・バオア・クーが狙われ、その攻略作戦である星一号作戦が行われたが、ここでア・バオア・クーを前線に移動させた場合、グラナダを迂回すればジオン本国侵攻が可能になってしまいうだろう。

勿論、こういう見方も出来る。

ソロモンや前線に移動させたア・バオア・クーが落とされなければ大丈夫、と。

だが、そもいかなのが現実なのだ。

「部隊のほとんどが前線に出ている隙に本国が襲われればジオンは終わりだ」

ジオンの主力部隊が前線に出ている隙に連邦軍がジオン本国を強襲する。

これだけ聞いたら、まずこう思うだろう。

そんなことは現実には不可能、出来るとしたら某大戦略なゲームの世界だけ。

また100歩譲って成功したとしても、主力部隊が残っている以上は本国が襲われたとしてもジオンは戦争を諦めない、と。

確かに通常の国家ならばそうだろう。

しかし、残念なことにジオンはこの「通常の国家」には当てはまらない。

何故かというところ、ジオン公国という国はコロニーの集まりで出来ている国家であり、仮に連邦軍がその一部でもジオン本国へ侵攻し、コロニーへ砲撃を加えてくればジオンの領土は文字通りの意味で宇宙の塵となってしまいうからだ。

なので、この戦略ゲームでしか通用しないような笑い話のような戦術は、ジオンにとっては笑い話では全然なかったりする。

実際、原作オリジンのルウム会戦でもそうなりかけているのだから。

その為、ア・バオア・クーを前線に移動させるといふ戦略方針は、ギ

レンといえどもあまり賛同できるものではなく、廃案とすることを既に内心で決定していた。

「まあいい。取り敢えず、今回宇宙に引き上げたMSパイロット達はソロモンとルナツーに振り分けよう。後は——」

ギレンはある資料を取る。

その資料には原作ではかなり終盤に登場したある兵器の詳細が書かれていた。

「あまり賛成は出来ないが、こいつも正式採用するしかないか。まあ、連邦のボールと同じくMSの補助兵器としては使えるだろう」

ギレンはそう言いながら、史実でオツゴと名付けられた機体に正式採用のサインの判子を押した。

UC0079年 7月5日 ルナツー着任

◇宇宙世紀0079年 7月5日 ルナツー  
ルナツー。

それは全幅180キロの巨大隕石であり、それは同じ宇宙要塞であるソロモンやア・バオア・クーが全幅30キロ前後であることを考えれば、なんと6倍もの大きさを誇っている。

原作ではジオン軍はこの要塞を落とすことを試みていたものの、ルウム会戦での連邦宇宙軍壊滅の後ではあまり重要な場所だと見ていなかった事から本気で落とそうとはしておらず、結局、開戦から終戦まで連邦軍が保持することとなった拠点だった。

しかし、この世界ではルウム沖会戦にて連邦艦隊の9割が撃沈された直後にジオン軍が攻略に掛かり、その際にヨルムンガンドやソーラ・システムなどで要塞の外側の迎撃システムを事前に潰した事によってあっさり陥落し、現在はジオン軍の拠点となっている。

この要塞には守備隊員だけで2万5000人、駐留している艦隊要員も含めると3万人ものジオン軍兵士が居り、指揮官はシーマ・ガラハウ大佐という女性将校だ。

そして、今、彼女の下に2人のニュータイプが部下として着任しようとしていた。

「ノビタ・ノビ特務准尉であります！ただいまルナツーに着任いたしました!!」

「同じくタリア・ロウラン特務准尉です！よろしくお願ひします!!」

その2人の紹介を聞きつつ、地球方面軍ではそこそそ有名だった“灰色の死神”が配属されるという情報を聞いて直々に出迎えたルナツー司令官シーマ・ガラハウ大佐は目を丸くしていた。

（なんだい？こいつら。どう見ても子供じゃないか。こいつらが精銳



なのかい?)

現実逃避気味にそう思うシーマ。

確かにそれなりに使えるということのはのび太達の実戦経験をしてきた人間特有の眼光を見ればよく分かる。

少なくとも、本国で養成されているという新兵よりは使えるだろう。

しかし、だ。

目の前の人物はどう見ても二桁に達しているかどうかといった感じ(実際はタリアは今年12歳でのび太も今年11歳であるが、東洋人は白人に比べると数歳若く見える)であり、こんな人間達が最前線を経験してきたとはとても思えなかった。

「…着任ご苦労。念のため聞いておくけど、あんた達実戦経験は?」

「有ります」

「そうかい。じゃあ、後で実力は見せて貰うとして、先に荷物を部屋に置いてきな」

「はい!」

そう言つて2人はシーマの前から去っていく。

それを見送っていたシーマであったが、それと入れ替わりにある人物がシーマに話し掛けてきた。

「まだ子供でしたが、本当に役に立つんでしょかねえ」

そう言う海賊然とした風貌をした男の名はデトローフ・コッセル。

階級は大尉で、立ち位置としてはシーマの副官にあたり、彼女の乗艦——ミヨウコウ改型巡洋艦(ミノフスキークラフト搭載)『リリー・

マルレーン』の艦長でもある人物だった。

「さあね。そんなことは実力を見てみないと分かりはしないよ」

「そうですね。しかし、なんであんな子供が前線に？今の戦局はそこまで逼迫している訳ではないでしょうに」

デトローフはそんな疑問を口にする。

現在の戦局はジオンが重力戦線でやや押されている戦況だったが、完全に戦線が崩壊している訳ではなかったし、ジオンが敗色濃厚という訳でもない。

そんな状況で何故あんな子供が前線に投入されるのか、デトローフには理由がよく分からなかった。

「まあ、それについては後で説明するけど、簡潔に言えばあの子供達は特別だから目を付けられたというべきだろうねえ」

シーマはデトローフとは違い、彼らが前線に投入される理由を知っていた。

ニュータイプ。

シーマもあまりよくは知らないが、要するに普通とは違う特別な力を持っている人間だ。

だが、それ故に目を付けられたのだろうとシーマは推測している。そして、それはほとんど間違っていない推測だった。

実際、彼らにニュータイプという能力が無ければ、ザビ家の面々も仮に彼らが前線に行くことを志願したとしても、絶対に認めなかったであろうし、もしくは国力にもつと余裕があれば、研究そのものとしても、彼らを実戦に投入することは考えもしなかっただろう。

そういう意味では、シーマの言葉は正に的を射た発言だったと言える。

「そうなんですか？」

「簡潔に言えばそうさ。まあ、あたし達に出来ることは精々宇宙空間で死なないように徹底的に鍛えてやるだけさね。書類を見る限りでは地上戦の経験はかなり有るみたいだけど、宇宙での戦いはまた勝手が違うからね」

「そうですね。では、徹底的に鍛えてやりましょう」

そう言いながらデトローフはニヤリと笑い、シーマもまたそれを見て苦笑しながら賛同する。

——かくして、ルナツにてシーマ・ガラハウと野比のび太は出会った。

しかし、彼らは知らない。

これが上司と部下としての長い付き合いの始まりであったということ。

◇西暦20XX年 10月28日 東京 練馬区 ススキケ原  
西暦。

それは宇宙世紀時代の人間からしてみれば、宇宙世紀以前に使われていた歴となる。

宇宙世紀のガンダム世界では、21世紀半ばの西暦2045年にコロニー建造が開始され、その後は22世紀を迎えることもなく宇宙世紀へと移行している。

だが、この世界では違う。

この世界では22世紀を無事に迎え、高度な文明を築き、人間とロボットが共存する社会となっている。

また21世紀後半に発明されたフルメタルを主軸とした秘密道具によって理不尽としか思えない科学現象を起こすことも可能だ。

そして、その世界の名を仮にザビ家の転生者達に聞いたらこう言うだろう。

ドラえもん世界、と。

「のび太君、何処行っちゃったのかなあ」

そう言うのは青い狸にも見える高性能（笑）な猫型ロボット。

彼の名はドラえもん。

転生者達から言わせれば、この世界の主人公だ。

そして、そんな彼の親友であり、この世界の副主人公である野比のび太が行方不明になった8月6日のあの日から、もうすぐ3ヶ月が経つ。

結局、誕生日の前日に姿を消してしまったことで、この世界でののび太の11歳の誕生日は本人不在のまま迎えることになってしまっ

た。

だが、ドラえもんにとってなによりも問題であるのは、のび太が無事であるかどうかということだ。

仮にのび太が地球に居らず、異世界や他の惑星に居たとして、そこで幸せになつてくれれば言うことなしだった。

・・・しかし、ここでドラえもんを知っている者なら疑問に思うだろう。

なぜのび太を連れ帰ることを考えないのか、と。

だが、実はこの時、ドラえもんには帰つてきて欲しくないある事情があつた。

それは――

(まさか帰つてきたらパパとママが既に死んでいるなんてこと、のび太君には知って欲しくないしね)

そう、実はのび太が行方不明になつた数日後にとある時空犯罪者の手よつてのび太の両親は殺されてしまつていたのだ。

本人はのび太を狙つたつもりだったが、不在だったことから代わりにその両親を狙つたらしく、そんな理由であつさりと命を奪われたのび太の両親の事を考えると怒りが再燃しそうになるが、そんなことをしても両親の命が蘇る訳ではない。

いや、厳密に言えばタイムふろしきを使えば蘇るが、それは時空法で禁止されており、またタイムふろしきそのものもその用途で使えないようになつている。

何故かと言えば、命は1つであるからこそ尊く、無限に命を回帰できるようになればその尊さを認識しなくなるとタイムふろしきを作つた人間は考え、その考えに未来の人々が賛同した結果、その為の法律も作られ、以後タイムふろしきが作られる時は必ずそのような設計にするように法律で決められていた。

ちなみにピー助やキューとミューの時に命の回帰が許されたのは、未来ではそういった古代生物の研究などでタイムふろしきが使われ

ることもあり、そういった用途での使用は許可されていたからだ。

では、タイムマシンを使えば良いのではという考えもあったが、それも無理だった。

何故なら、のび太が行方不明になった直後に使ったタイムマシンは何故か過去に行けないようになっていたからだ。

まあ、そういったわけで両親の死はどうやっても覆せないものとなっており、こんな状態で無理に帰ってこられてものび太にショックを与えてしまう事は明白であったので、ジャイアン、スネオ、そして、のび太の好きな少女であるしずかには悪いが、のび太には両親の死を知らないまま何処かで幸せになって欲しかった。

しかし、のび太がどうなっているか分からない状態で捜索を放棄するほど、ドラえもんも無責任ではない。

なんとかしてのび太の居場所を探りたかったのだが、そういった捜索系の秘密道具もまたあまり機能しているとは言いつらい状態になっており、一向にのび太の行方は掴めないままとなっていた。

「・・・はあ」

ドラえもんは大きな溜め息を吐きながら、今日もなんの成果も無いまま家路へと着いていく。

——だが、彼は知らない。

そう遠くないうちに、自分もまたのび太の居る世界へと行くことを。

UC0079年 7月8日 不穏な音

◇宇宙世紀0079年 7月8日 ルナツー周辺宙域

『こらあ!! 貴様、そんなへなちよこな動きをして恥ずかしくないのか!!』

スピーカーから響いてくる自分の上官であるクルト少尉の言葉に、のび太は必死で機体を操作しながらこう思う。

無茶言うな、と。

ルナツーに来てから3日。

のび太は宇宙戦に耐えるための訓練を続けていたが、あまり芳しいものではなかった。

その理由としては主に2つの点が挙げられる。

まず1つ目はのび太の操作している機体は従来の量産型ガンダムではなく、ガンダムを改良した機体——ガンダム改である（ちなみにのび太の乗っていた量産型ガンダムはタリアが受領した）こと。

これは戦闘慣れしてきたニュータイプの使用に耐えるために、原作で問題になった駆動系部分を従来のガンダムより根本から強化した作りになっていた。

これだけでも既に原作ガンダムアレックスよりちよつと下程度の性能になっていたのだが、ここから更にツイマッド社のエンジンが搭載されたことでガンダムアレックスを越えるところでもないじやじや馬な機体となってしまうっており、のび太も慣れるのに苦労していたのだ。

そして、もう1つの点はそもそもこのび太が宇宙で機体を動かすのはこれが初めてだということ。

言うまでもなく今までのび太が活躍してきたのは地上であり、地上では重力と足場があったのだが、この宇宙でそんなものはない。

しかも、歩き回る戦いから飛び回る戦いへと突然変わるのだ。

たった数日ぽつちで慣れる筈もなかったのだが、そんな泣き言をあ

の海賊面をした少尉に堂々と言う度胸などのび太は持ち合わせていなかった。怒鳴られながらも必死で頑張るしかなかった。

「ほう。あの坊やもなかなかやるねえ」

一方、その訓練を見ていたシーマは感嘆の言葉を口にしていった。

あのガンダム改という機体はシーマも乗ってみたから分かるのだが、相当な癖があり、結局、シーマですらも1週間かけて性能を7割くらいしか活かせていなかったし、のび太の訓練を見ているクルト少尉に至っては5割活かせていたかどうかとも怪しいほどだったのだ。

しかし、見た感じのび太はこの基地に来てから僅か3日である機体の8割前後の性能を活かしている。

まだ性能に振り回されている感はあるが、それを言ったらシーマも同じであったし、少なくともこのまま機体転換訓練を続ければ、シーマを始めとした海兵隊の誰よりも早くあの機体に慣れるだろう。

しかし、シーマはその事をのび太の前では口にしない。  
調子に乗ってモチベーションを下げられたら困るからだ。

「あの機体は坊やにあげることは決定だね。他に適任者は居そうにない」

そう言いつつ、シーマはこの基地に居るもう1人のニュータイプ——  
タリア・ロウランについて考える。

（あの娘はそこそこの腕はあるが、それでもうちの連中海兵隊の中で代用できる人間が居ない訳じゃない）

シーマはこのままタリアに量産型ガンダムを預けるか迷っていた。  
量産型ガンダムは前述したように貴重な機体だ。

だからこそ、パイロットは腕利きにやらせるのが一番なのだが、タリアにそれだけの技量が有るかと言われれば正直言って微妙だった。



確かに腕は良い。

その中にはニュータイプ能力も含まれているのかもしれないが、それでも今年12歳の少女という事を考えれば、破格の腕を持っている。

だが、それはあくまでその年にしては腕が良いというだけで、単純な技量だけならシーマ配下の海兵隊にも代わりのパイロットは居なくもなかったのだ。

(困ったねえ。今から機体に見合うように鍛え上げるにしても、連邦の宇宙反攻も近いって聞いているし……)

連邦が8月の始め辺りに宇宙への反攻を計画しているという情報は、既にシーマの耳にも入っている。

その反攻先の正確な場所は分かっていないが、可能性として高いのはソロモン、あるいはこのルナツーであることは明白であり、シーマ達はそれに備えなくてはならない。

更に――

(宇宙攻撃軍の主力はソロモンにほぼ吸い上げられている状態だから、こっちは戦力があまり回ってこないんだよねえ)

そう、実は宇宙攻撃軍の主力はほとんどがソロモンに居り、ルナツーには2線級とまでは言わないが、あまり大した戦力は回ってきていなかった。

その理由は非常に簡単で、ソロモンが落とされるとジオンはとつても困るが、ルナツーが落とされてもジオンはすぐには困らないからだ。

その理屈はシーマもよく理解できるが、実際にルナツーを守る身からしてみれば堪ったものではない。

しかも、近々連邦の反攻作戦が有るとなれば尚更だ。

(せめてア・バオア・クーの親衛隊を回してくれれば良いんだけどねえ。流星にそれは無理か)

この時点でア・バオア・クーにはギレン・ザビ直轄のエギーユ・デラーズ大佐率いる親衛隊が駐留しており、かなりの戦力を持っていた。

しかし、これらの部隊はあくまで親衛隊であり、ルナツーというサイド3とほぼ正反対な場所に着任する可能性はほぼ0だとシーマも見なしており、要請したとしてもあまり期待はできない。

つまり、シーマ達は現状の戦力でルナツーを守るしかないのだ。

しかも、連邦の反攻が近いとなると、とてもではないがタリアが成長するのをのんびり待つてなどいられなかった。

「・・・まあ、数日ばかり様子を見てみるか。それで合格点が出なければ取り上げれば良い」

シーマはそう言いながら、もしそうなった場合、誰に託すか思案していた。

ここは内務省。

主に政治部門を統括する部署であり、警察や秘密警察関係などもここに所属する。

そして、この省の大臣の名はサスロ・ザビ。

ザビ家の次男である男であった。

「なに!? アンリ・シュレッツサー元准将が居なくなっただと!？」

サスロは報告を持ってきた2人の部下に向かってそう叫ぶ。

アンリ・シュレッツサー元准将。

原作では首都防衛大隊の大隊長であり、終戦間近にクーデターを行つた人物だ。

それを知っていた転生者達は開戦前からこの男の排除を計っていたのだが、意外なことに戦前はダイクン派の中でも穏健派に属する人物という立ち位置であり、ダイクン派との融和を計る過程で排除するに排除できなかつた人物でもあつた。

しかし、開戦時の一件で排除する口実が出来たことから、問答無用に退役に追い込み、その後は内務省の人間による監視が行われていたのだ。

だが、それが行方を眩ましたとなると、非常に厄介なことになる。

何故なら、アンリ・シュレッツサーは原作でも首都防衛師団を率いてギレンやデラーズなどの主だった将が居なかつたにしても未だに数的有利にあつた親衛隊に対して終始優位に戦局を進めた名指揮官であつたのだから。

「どうしてそうなった!!あの男には常に5人以上の体制で監視を付けるように言い渡した筈だぞ!？」

そういつた「超」が着くほどの危険人物であることから、監視も厳重にするように言い渡しており、いざという時には応援も呼ぶように通達していた。

にも関わらず、居なくなっただとはどういうことなのか？

そう問い詰めるサスロであったが、目の前の部下達は冷や汗を掻きながらもこう説明する。

「そ、それが監視にあたっていた人間は全て殺されていまして。定時連絡が一向に届かない事に気づいた交代の人間が現場に来たことでようやく気づいたんです」

「なに？」

サスロは眉をしかめる。

前述したように、アンリ・シュレッツァーは常に5人以上の体制で監視をされている。

更にこの5人はそれぞれ別の位置に配置されている上に、その配置場所も10個以上が用意されており、どの監視場所を選ぶかはその現地の人員に委ねられているので、実質ランダムだ。

しかも、コロニー内なので当然ミノフスキー粒子はなく、別々の場所に居る5人の人間が連絡する暇もなく一斉に命を絶たれるなど、通常ではあり得ない現象だった。

(内通者でも居たのか?)

サスロはそう思ったが、今はそれより先に確認しておくことがあり、そちらを尋ねるのを優先することにした。

「・・・それは掴んでいるのか？」

「いえ・・・」

「そうか。では、急いで探してくれ。それと各重要施設への警備を強化しろ。何かテロを画策してくるかもしれない」

「はい！」

「では、下がってくれ」

サスロがそう言うと、2人の部下は下がっていく。

それを見届けながら、サスロはあることを考えていた。

(今さら奴が脱走したところで何かが出来るとも思えないが……念のために色々と手を打っておくか)

アンリ・シュレッツァー准将が率いていた首都防衛師団は既に丸ごと人員を入れ替えており、元の人員は重力戦線に放り込んでいる。

なので、今さらアンリ・シュレッツァー准将が首都防衛師団に接触したところで何か出来るわけではないのだが、見張りの人間が一斉に殺されたという情報はやはり気になった。

そして、戦争中の状況下で本国に何かあればそれは一大事となる。

そうならないように、サスロは今のうちに色々と手を打っておくことを決意した。

UC0079年 7月11日 ハワイ失陥

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 7月11日 北米 キヤリフォルニア・ベース

「なに!? ハワイが占領された!!」

ガルマ・ザビ大佐はその凶報を持ってきたダロタ中尉に思わず怒鳴り声をあげてしまう。

そう、実は戦略海洋軍の本拠地のあるハワイがパルミラ島からやって来た連邦空軍の大編隊によって空襲され、更には何処からともなく現れた連邦軍の陸上部隊によって、あつという間に占領されてしまったのだ。

空襲はともかく、流石にいきなり占領されるというのは予想外だっただけに、ガルマがそんな反応をしてしまうのも無理はなかった。

「は、はい」

「どういうことだ!? 空襲で大損害を負っただけならまだしも、占領されるなんて!!」

「い、生き残って脱出した部隊によると、海中からいきなり歩兵を搭載した上陸艇と巨大な潜水艦が現れたようです」

それを聞いたガルマは思わず固まってしまう。  
連邦のやったことが分かってしまったからだ。

「……やられたな」

「はっ」

「簡単だよ。敵はこっちがハワイ占領の際に使った手を真似してきたんだ。しかも、連邦のことだから複数の強襲揚陸潜水艦か、輸送潜水艦でも投入したんだろう」

ガルマの推測は合っていた。

実はビスマルクの存在を知った連邦海軍は、強襲揚陸潜水艦を投入して敵地に奇襲上陸を掛けるというこのジオンの戦術に興味を示し、その豊富な国力を使って短期間で複数の強襲揚陸潜水艦を造り上げ、今回のハワイ占領作戦に投入していたのだ。

「真似をしてくるとは・・・なんと卑怯な」

「それは僕達にもブーメランになるから止めておけ。それより太平洋に展開している戦略海洋軍の状況はどうなっているんだ？まさか、全部失われた訳ではあるまい」

ガルマはそう言って太平洋に展開している戦略海洋軍の現状について尋ねる。

ハワイは確かに戦略海洋軍の本拠地であり、多数の潜水艦が常駐していたが、全体的に見れば外洋に出て任務に出ている艦船の方が多いのだ。

その為、ガルマは今後のためにもまず太平洋展開の戦略海洋軍の現状を把握しておこうと考えていた。

「はい、今回のハワイ襲撃によって戦略海洋軍太平洋方面艦隊司令長官であるビア・レッター少将（オリキヤラ）は戦死し、太平洋方面艦隊は一時的に混乱しましたが、外洋に出ていた艦艇についてはほとんど無事で、現在は一旦太平洋での活動を中止してサンディエゴに向かうと通達を受けています」

「分かった。サンディエゴについたらそれらの艦艇には補給を行って

やれ。今後の活動についてはそこで追って伝える。ちなみにハワイ襲撃で失われた潜水艦の数は？」

「・・・全体の3割です。幸い、貴重な強襲揚陸潜水艦であるビスマルクはどうかハワイより脱出しましたが、損傷を負っており、サンデイエゴのドックで修理させる必要があるかと」

3割。

決して軽くはないその損害にガルマは顔をひきつらせるが、どうか持ち直すとダロタに向かってこう言う。

「そうか。では、そうしてくれ。他には何か報告はないか？」

「いえ、なにも」

「では、下がってくれ。少し一人で考えたいことがあるんだ」

「はっー！」

ダロタはそう言って敬礼をすると、部屋から退出していく。そして、それを見届けたガルマは今後の戦略について考える。

（不味いな。ハワイが占領されたことで西海岸が何時攻撃されても可笑しくなくなってしまうた）

元々、ハワイ占領は西海岸防衛のための保険だった。

それが無くなったとなると、西海岸は何時敵の上陸を受けてもおかしくないことになる。

ただでさえ、今の重力戦前はオセアニア戦線が消滅したことで厳しくなっているのだ。

これ以上追い詰められるとかなりヤバイことになる。



(それに進撃が打ち止めになったことで将兵の士気も徐々に下がっている。ここは一回攻勢に出るしかないな。となると、この作戦を発動するしかないか)

ガルマはそう思いながら、ある書類を取り出す。

その表紙にはこう書かれてあった。

カリブ海侵攻作戦、と。

(元々は中南米侵攻を完了させた後に発動する作戦だったんだがな。まあ、この状況下では仕方ないか)

そう、このカリブ海侵攻作戦は元々中南米を攻略した後、その支配を確固たるものとするために発動される予定の作戦だった。

しかし、例の核分裂炉搭載MSの一件によって中南米侵攻作戦そのものが旧メキシコ北部を占領したところでストップした事と、こちらが占領地域の放射能除去作業をしている間に連邦軍がメキシコシティ周辺をガチガチに固めたことによって、作戦そのものが自然消滅した形になってしまったのだ。

だが、今の状況下ではこの作戦を引っ張り出すのもやむ無しとガルマは考えていた。

(これが成功すれば、北米方面軍の士気は高くなる。だが、西海岸防衛の根本的な解決にはなっていないな)

特にガルマが一番気にしているのが強襲揚陸潜水艦だ。

今ある情報だけではどれ程の性能なのかは分からないが、後から建造されただけあって、ビスマルクより洗練されている艦である可能性がある。

まあ、ビスマルクのように建造中の艦艇や既存の艦艇を改造したという可能性も有るので一概には言えないが、どちらにしろいきなり海

中から現れる陸上兵力というのは非常に厄介だ。

(くそっ！強襲揚陸潜水艦は使ってみるとかなり使い勝手は良かったが、敵に回るとこうも厄介だったのか。こうなると分かっていたなら、もつと秘匿に気を払うべきだったな)

ガルマはビスマルクを秘匿に気を払っていなかったことを後悔したが、もう起きてしまったものは仕方ないと考え直す。

まあ、仮に秘匿に気を払っていたとしても、あんな大きな潜水艦を何時までも隠し通すことは不可能だっただろうが。

「まあいい。問題はどうかやってこの船を撃沈するかだな」

ビスマルクを運用してきたから分かるが、こういった船はよっぽどの局面か、補給任務といった場面でしか出てこない。

何故なら、どう誤魔化してもその巨体から水中ソナーで探知されてしまう可能性が高いからだ。

もつとも、それはビスマルクの場合なので、連邦の強襲揚陸潜水艦にそれが適応されるかどうかは分からないが、少なくとも某後世日本に出てくる潜水艦のような理不尽な静粛性や機動性は無いだろうと推測していた。

「となると、普通の潜水艦を相手にするように撃沈するのが無難だな。・・・しかし、さつき複数と言っていたが、この船は何隻居るんだ？それによって取るべき選択肢も大幅に変わってくるんだが・・・」

ガルマはこの船が何隻居るのかを推測する。

10隻以上居ればかなり厄介であるが、流石の連邦もこれだけの短期間でそれだけの強襲揚陸潜水艦をポンポン作れるとも思えない。

となれば、「今のところは」ハワイに出てきた数が全てと考えるべきだろう。

まあ、もう1ヶ月もすれば10隻以上が揃うかもしれないので油断はできない。

ガルマはそう考えていたが、実のところこの推測は間違っていた。そもそも地球連邦という組織は国力こそあるが、だからといって財源が無限に湧き出る訳ではない。

しかも、開戦初頭にその重要な財源であるコロニーが奪われているので、地球連邦が頼れるのは主にアースノイドからの財源のみ。

そして、その限られた国家予算の半分程は現在、軍事費に注ぎ込まれていたが、その軍事費のうち宇宙軍が使用している予算は半分程（国家予算の4分の1）であり、残りの半分を陸海空軍に分配されているが、優先されている順番としては陸空海となり、海軍の予算が一番少ないのだ。

しかも、海軍という組織は巨大な船を扱うため、予算がないとなると必然的に建造できる艦船の数は限られてくる。

その為、今回のハワイ攻略に使われた連邦海軍のセンチネル級強襲揚陸潜水艦は今回投入された4隻で打ち止めとされており、来年度まで戦争が続かない限りはそれ以上建造される見込みは全く無かった。

しかし、この事をガルマは当然知らないのです、連邦がいずれこの強襲揚陸潜水艦を大規模運用してくるのは間違いないと見なしていたのだ。

「・・・まあ、なんにせよ、これからは哨戒機を増やす必要がありそうだな。早速、キャリフォルニア・ベースの工場で生産しておこう。それからさつき届いたこれも兄上達に報告しておかないと」

ガルマはそう言って、先日、地球方面軍所属の情報部が掴んだある情報の報告書を取り出す。

そこにはこのような分析結果が書かれてあった。

ジンバ・ラルが宇宙に上がった可能性有り、と。

「あの老人が何をするつもりかは分からないが、ろくでもない事は確

実だ。まさかサイド3に入ったりはしないだろうが、他のサイドか、月面都市。特にフォン・ブラウンなんかに入ってアナハイムなんかをバックに付けられたら堪ったもんじゃないからな」

アナハイム・エレクトロニクスはこの時点でも大企業ではあったものの、MSの開発会社としては大した実績は残していない。

原作でアナハイムが作ったMSの代表作であるガンダムやジムが登場したのはもう少し先であったし、原作では一年戦争後に買収したジオンの三大MS会社（MIP、ツイマッド、ジオニック）を吸収していないからだ。

だが、その経済力は紛れもない脅威であり、ジンバ・ラルに何かしらの価値を見いだしてスポンサーにでもならねば厄介なことになる。

ガルマはそう考えていたが、彼は知らない。

ジンバ・ラルがガルマの予想の斜め上に行く行動を取ろうとしていたことを。

UC0079年 7月15日 慰め

◇サイド3 某所

サイド3の某所に存在するビルの一室。

そこでは複数の男達が何やら怪しげな会談を行っていた。

「——これでもいいの予定は終了だな」

男達の中のリーダー格の男はそう言って目標は達成したと宣言する。

だが、それに対して別の男がこう言った。

「あとは最後の任務であるギレン・ザビの暗殺ですが・・・」

「どう考えても無理があるな。このバンチに忍び込むのはあの老人の手によってなんとかなったが、首都バンチとなるとそうはいかない。おまけに今のダイクン派の現状では、な」

そもそも老人——ジンバ・ラルの協力者はこのサイド3にはほとんど居ない。

ザビ家の憂さ晴らしを兼ねた喧伝により、この一連の戦争の背後に居るのはアルテイシア・ソム・ダイクンではなく、ジンバ・ラルだのご丁寧に顔写真付きで説明されていたからだ。

しかも、この喧伝によって既に同じダイクン派のほとんどからもジンバ・ラルは裏切り者と見なされており、彼は同じダイクン派からも孤立している状況だった。

このバンチに忍び込めたのも、あくまでこのバンチの管理者がジンバ・ラル個人に恩義を感じた者という奇跡的な事象にあやかったからにすぎない。

だが、首都バンチであるズム・シテイではこうもいかないだろう。まず間違いなく気づかれて追われることになる筈だ。

そうなれば、奇跡的に任務に成功したとしても生きて帰ることは不可能に近くなる。

しかも、先日、アンリ・シュレッツァーを連れ去った際に見張りの人間を5人も撃ち殺しているのだから尚更（しかも、彼らは知らないが、ザビ家の人間はアンリ・シュレッツァーをかなり危険視しており、行方が分からなくなった直後に重要施設の警備を従来よりも更にガチガチに固めている）だ。

「そうなんですよね。コロニーごと吹っ飛ばせれば楽なんですけど」

男はそれが出来ないことに苦虫を噛み潰したような表情をする。

その言葉は公式の場で言ったらかなりの問題発言だったのだが、男は気にしない。

何故なら、彼にとってスペースノイドは人間ではなかったし、自分達に逆らおうとするジオンの人間など駆除する害虫でしかなかったのだから。

「まあ、そう言うな。どのみちこの戦争は我々が勝つんだ。スペースノイドには短い夢でも見させてやれば良いのさ」

「そうですね。しかし、これからどうするんですか？やはり任務は続行ですか？」

「いや、このまま撤退しよう。上は煩いだろうが、今はあの2人をこのサイド3から出すだけで満足するべきだ。あとはあのマハラジャ・カーンとやらに任せよう」

「了解」

そうして男達はサイド3からの脱出のための話し合いを行った後、足早にこのビルをあとにした。

◇ルナツィ

「よし！今日の訓練はこれで終わりだ!!」

クルト少尉はのび太に対して今日の訓練の終了を告げる。

そして、それを聞いたのび太はその場にへたり込んでしまった。

(き、キツい)

連日の訓練の半端でないキツさに、のび太は参ってしまった。

重力戦線に居た時も訓練は行っていたのだが、ここまで厳しいものではなく、のび太はなんとかついていけたのだが、ここはそれ以上のキツさだったのだ。

まあ、考えてみれば当たり前だ。

のび太が現在所属している海兵隊は云わば現代の斬り込み隊であり、事が起これば敵が居る場所に真っ先に飛び込む専門の部隊という主旨で組織が成立している。

そして、先陣に立つ以上は隊員は精鋭でなければ成り立たず、必然的に訓練も通常の部隊よりも厳しいものとなるのだ。

加えて、幾ら軍隊式の訓練に慣れてきたとは言っても、のび太は元々運動音痴な少年であり、そんなにポンと体力が上がるわけではない。

まあ、それでもこの世界に来た当初である半年前とは比べ物にならない程向上してはいるが。

「はあ。お腹減った。早くご飯食べよう」

のび太はそう呟きながら夕食を食べるために食堂へと向かおうとする。

だが、そんなのび太をクルトは呼び止めた。

「おい、ちよつと待て」

「はい？」

「最近あの嬢ちゃんはどうしたんだ？全く出てこねえが？」

「・・・」

それを聞かれたのび太は答えに窮した。

クルトの言う「嬢ちゃん」とは言うまでもなくタリア・ロウランであったが、実は最近彼女は部屋に引きこもったまま出てきていなかったのだ。

子供の上に機体を取り上げられたばかり、更には多少加減しているとはいえ海兵隊の訓練は通常の訓練よりも厳しいものが有ったから



こそ見逃していたが、それでもここは軍隊。  
何時までも甘い対応をするのにも限度があった。

「ごめんなさい。毎日、呼びに行ってはいるんですが・・・」

のび太はそう言って頭を下げる。

しかし、のび太は何故彼女が訓練をサボっているのか、理由が分かるだけにタリアに対してあまり強くは言えていなかったのだ。

「・・・まあいい。だが、何時までも軍という組織を甘く見ているようだったら、ここから荷物を纏めて出ていけ。・・・嬢ちゃんにはそう伝えろ」

クルトは少々冷たい声でそう言うと、のび太の前から立ち去っていく。

それを見届けながら、のび太はこう思った。

(一度、タリアとは腹を割って話す必要が有りそうだね)

◇

コン、コン

「・・・誰？」

2回のノックの音に反応した少女——タリア・ロウランはノックをした人物に向かってそう言う。

「タリア？入っても良いかな」

「のび太？うん、良いよ」

「じゃあ、失礼します」

のび太はそう言ってドアを開けると、部屋の中へと入っていく。そして、のび太が入ったその部屋は女の子の部屋らしい装飾こそ無かったが、綺麗に片付いており、彼女のしつかりぶりを感じさせられる。

「どうしたの？」

「うん、クルト少尉が出てこいってさ。かなりカンカンに怒ってたよ」

「・・・そっか。ごめんね、迷惑かけて」

「いや、良いよ。それより何か悩みがあるんだったら、打ち明けて欲しいな。このまま解決せずにダラダラ部屋に閉じ籠っていたら本当に追い出されるよ」

のび太は珍しく相手の心に思いつき踏み込む。

普段ののび太ならこういう行動はよっぽどの土壇場か、ここぞという時にしか行わないのだが、今の状況はそんな瞬間を待ってはもらえないのだ。

軍隊は決して甘い組織ではない。

このままタリアが役に立たないと見なされれば、ルナツィーから追い出されて別の基地に配属されるか、最悪、軍そのものから除籍されてサイド3に戻されるだろう。

そして、タリアがルナツィーから追い出されれば、今後タリアと友達でいるのは色々な意味で難しくなる。

そう考えたからこそ、無理をしても踏み込むべきとのび太は判断したので。

そして、一方のタリアの方も迷惑をかけているという負い目があるのか、ぽつりぽつりと言葉を溢していく。

「私ね。お兄ちゃんが死んじゃったことで連邦を憎んでた」

「うん」

「でも、ノビタがラバウルの時に声を掛けてくれたお蔭で改めて軍人としての本分を思い出したの。そして、思ったの。それに殉ずる事がお兄ちゃんへの弔いにもなるって」

「・・・それに関しては止めても良かったんだよ。トイさんだってタリアが戦争から遠ざかった生活をして欲しいって思っていただろうし」

それはのび太の本心だ。

兄が死んで今さら引けないという気持ちは分かる。

しかし、あそこで戦争そのものに愛想をつかして戦争から逃げるといふ選択肢は有りだった筈だ。

何故なら、15歳未満の人間には戦争中でも兵役からの離脱が認められているのだから。

「ううん、そうもいかないの。だって、今さら引けないから。・・・でも、ガタルカナル島で私の愛機が廃棄されちゃって、しかもものび太から預かった量産型ガンダムを取り上げられてから自信なくしちゃった」

そう、実は数日前にシーマはタリアの量産型ガンダムを取り上げて別の人間に預けていた。

それに関して文句を言う気はない。

シーマがタリアから量産型ガンダムを取り上げる際に言ったように、彼女の実力が足りていないという事は尤もだったし、それにシーマも別に悪意を込めて取り上げた訳ではないというのは、なんとなく分かっていたからだ。

だが、それによつてショックを受けたタリアはこうして塞ぎ込んでしまっていた。

「そうなんだ。でも、それならタリアが一人前の腕になるまで、僕がタリアを守ってあげるよ。僕だって男の子だからね」

そこで『帰った方が良いんじゃない？』とは言わない。

戦士が一度決めたことに水を差すのは無粋であるし、戦意を完全に失っていたのならともかく、不貞腐されているだけの人間にそんなことを言うのは侮辱でしかない。

これは実戦経験のある人間にしか分からない感情だ。

そして、これは大冒険を含めた実戦経験が多々有るのび太だからこそそう言ったが、仮に出木杉がここに居たら『帰った方が良いんじゃないか？』という言葉の方を言つてしまい、タリアの意地と反発を買うだけで終わってしまったらどうだろう。

まあ、それはそれで有効な場合もあるのだが、少なくともこういった状況では逆効果だ。

「だから、もう一度頑張ってみよう」

何処か温かみを込められた声でそう言うのび太に、タリアは遂に折れた。

「・・・そうだね。もう一度頑張ってみるよ。今まで迷惑かけてごめんなさい」

「謝るならクルトさんにした方がよいよ。あの人、なんだかんだで心配してたから」

「うん。早速行ってくるね」

「僕も行くよ。流石に女の子を1人で行かせられないし、軍隊では連帯責任らしいからね」

「ありがとう。でも、のび太。そういう女の子を慰める行為は程々にした方がよいよ。特にのび太は本当に刺されるから」

「ええ!?!どういう意味!?!」

「ふふっ。今は分からなくて良いの。じゃあ、行こう」

「あっ!待って!」

そう言いながら、のび太は先に出たタリアを追う形でその部屋を出ていった。

## U C 0 0 7 9 年 7 月 1 7 日 キューバの戦い

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 7月17日 キューバ島  
カリブ海。

そこは旧世紀である西暦だった時代の頃、17世紀中期から18世紀前期にかけて海賊の黄金時代が築かれ、それによって「カリブの海賊」という存在は現代でもかなり有名であり、海賊劇の主要舞台となっている程だ。

しかし、宇宙世紀に入って人類が次々と未開の宇宙に出ていき、スペースノイドやルナリアンによって旧世紀の大航海時代の海同様未開であったが故か、宇宙空間での海賊行為が現実の脅威として横行していた為、それを取り締まる連邦政府によってスペースノイドやルナリアンに対する海賊劇の公開禁止が行われてからは、あまり宇宙に住む人間の間では半ば禁忌のものとして扱われていた。

だが、スペースノイドの間ではそういった劇の公開は禁止されておらず、彼らからしてみれば旧世紀の21世紀同様、カリブ海は一種の憧れの海となっている。

さて、そんな島々だが、現在はジオン軍によるカリブ海侵攻作戦の舞台となっており、そこを守備していた連邦軍は苦戦していた。

連邦軍カリブ海方面軍の兵力は30万程。

対して、攻めてきたジオン軍の兵力は10万人程なのだが、かつての旧インドネシアに配備されていた連邦軍同様にこの30万の兵力はカリブ海の各所に散らばっている。

そして、攻める側であるジオン軍の兵力はたった10万ではあるが、その代わりに攻める場所を選べるといって攻める側特有の利点があった。

更にラバウル沖海戦で活躍したモビルスーツを乗せたホバークラフトと空爆によるミノフスキー粒子散布戦術を組み合わせた運用によって、各島の守備兵力は次々と奇襲を受けて大損害を負う。

しかし、連邦軍もただ黙って殴られている訳ではない。

特にキューバ島では、後にカリブ海最大の戦いと言われる「キュー

バの戦い”が始まっていた。

◇キューバ島 ハバナ周辺

「手こずらせやがって・・・」

ジムⅢに乗るジオン軍のパイロットはそう言いながら、90ミリマシンガンの猛射を受けて残骸と化した数両の敵戦車——61式戦車改の姿を見る。

61式戦車改。

それは原作でガンキャノンやボールに装備された120ミリ低反動キャノンを装備した車輛だ。

口径は61式戦車の元の砲塔である150ミリキャノンよりは劣るが、原作でザクを撃破していることから分かるように、その威力

は高く、現にこの戦場に現れたのは僅か6両であったが、その全てを撃破したものの、代償としてこちらのジムも3機が失われている。

しかし、この砲にはある欠点が存在した。

「前にしか撃てないから助かったぜ。これが通常の旋回砲塔だったら俺もヤバかったかもしれねえ」

そう、このジオン軍パイロット——タグ准尉が言っているように、61式戦車改の主砲である120ミリ低反動キャノンには前にしか撃てないのだ。

その為、旧世紀の第二次世界大戦に存在した突撃砲と対して変わらず、射線上に居ない敵相手に砲を向ける際は車体そのものを動かさなくてはならない。

まあ、それを言ってしまうえばヒルドルブも同じなのだが。

「しかし、完全に貧乏クジ引いちゃったな、俺達。敵の新兵器がわんさか出てきやがる」

タグは今の現状に対してそんな感想を抱く。

ホバークラフトとMSによって奇襲攻撃を行い、敵の沿岸防衛施設を事前に潰し、キューバ島に上陸してハバナを占領したまでは良かったのだが、その後は連邦軍の激しい抵抗によって進撃は思うように進んでいない。

元々、このキューバに配置されていた連邦軍は6万人、対して上陸したジオン軍は5万人で兵力はほぼ拮抗している。

しかし、モビルスーツの優位は未だに健在であったし、ホバークラフト及びビームライフル、ビームサーベルなどの新兵器の投入によって、キューバの占領は比較的楽に進むだろうと見なされており、事実、タグも上陸前はそう思っていた。

だが、現実としては連邦もまたこのキューバに61式戦車改やガンタンク（ただし、動力はバッテリーな為に原作のものより機動力は低



く、稼働時間の制限がある)、更にはその他にも様々な新兵器を装備した部隊を配置しており、それによってキューバの地は血で血を洗う凄惨な戦場となってしまうている。

そして、タグ自身もついさつきまで共に居た戦友の戦死を目撃してしまっており、日頃の訓練によってなんとか動揺を表に出さずに心の奥底に押し留めていたものの、その内心ではいつ自分が戦死する番が来るのかとビクビクしている有り様だった。

(くそっ！情けねえな)

そんな自分の心の弱さに苛立ちながら、タグは別の戦場で戦っているであろう味方の元へと向かおうとする。

——だが、彼が味方の元へ辿り着くことはなかった。

何故なら、その直後に近くに潜んでいた連邦軍の10センチビームカノン砲から放たれた光線が、タグの乗っているジムⅢの動力炉に直撃し、彼の体はその時に起きた爆発によって機体もろともバラバラとなってしまうただから。

◇キャリフォルニア・ベース

「・・・失敗だな」

「は？」

ダロタ中尉からカリブ海の戦況について報告を聞いたガルマはそのような言葉を呟く。

しかし、そのガルマの言葉に対して、ダロタは首を傾げざるを得なかった。

当然だろう。

言っている意味が分からなかったのだから。

「言葉通りだ。今回のカリブ海侵攻作戦は失敗した」

「な、何故ですか!?確かにキューバ攻略にこそ手間取っています、他の島は順調に攻略しています!!」

そう、ダロタの言う通り、連邦軍はキューバ島に新兵器の配置を集中させており、他の島には従来の兵器しか配備されていなかった。

その為、キューバを除く他の島々に攻めたジオン軍は順調に攻略を進めており、中には攻略を既に完了させて別の島の攻略に移っている部隊もある。

しかし――

「この作戦は1島でも攻略に手間取れば失敗なんだよ。なんせカリブ海の位置が位置だからね」

ガルマはカリブ海侵攻作戦が失敗と見なした理由を淡々と述べる。

カリブ海は地図を見れば一発で分かるだろうが、ジャブローの存在する南米の目と鼻の先に存在する島々だ。

それ故に南米からの増援が来ることも容易であり、だからこそ、ガルマはここを急速に占領して急ぎ拠点を作り上げる事を目論んでいた。

しかし、攻略に手間取ったとなると、こちらが完全占領を行って本格的な拠点を作る前に向こうの増援がやって来ることになる。

そうならば良くて泥沼、悪ければこちらがあつという間にカリブ海から叩き出されるのは目に見えている事だった。

「・・・な、なるほど。しかし、だからと言ってこの状況で撤退させるとなると、兵士たちの士気が・・・」

「いや、撤退させるつもりはない。このままカリブ海侵攻作戦は続行するつもりだ」

「は？いや、しかし。先程、ガルマ様は・・・」

「ああ、作戦は失敗だと言ったな、だから、予定を変更して攻略から連邦の兵力吸引に戦略目的を変えるんだよ」

要するにプランBという奴だ。

そもそもガルマはこのカリブ海侵攻作戦が上手くいくとはあまり考えていなかった。

攻略に使う兵力はカリブ海に居る連邦軍の3分の1程であったし、開戦当初にあったMSの優位も今ではそれほどはなくなっている。

これでは上手くいく可能性の方が低く、ガルマは最初からこのカリブ海に連邦軍を引き付けて、いずれ行われるであろうジャブロー攻略のために南米の連邦軍に対して消耗戦を強いる算段だった。

カリブ海は前述したように南米とは目と鼻の先。

これは逆に言えば、ここにジオン軍が居座るということは連邦軍本

部にとっては目の上のたん瘤的な存在になるので、食い付いてくる可能性は非常に高い。

しかし、ガルマはそれを将兵達に敢えて言わなかった。

何故なら、このようなことを言つては久々の攻勢による士気向上に水を差すだろうと思つたからだ。

(とは言つても、例の兵器の完成が11月だからな。ということはジャブロー攻略まで最低あと4ヶ月有るわけだが、その間、ずっとカリブ海で連邦軍と激戦を演じなくてはいけないわけか。将兵達には苦勞を掛けるな)

そう思いながらも、ガルマはこの作戦を中止するつもりは毛頭なかった。

もう戦争も後半に入り掛けている。

幾ら動きの鈍い連邦と言えど、そろそろ物量チートが活かされてくる頃であり、向こうが本格的な反攻に出ればこちらは受け身に回らざるを得ない。

現に原作ではファーストガンダムが始まつた9月から12月までの僅か3ヶ月でア・バオア・クーが陥落するところまで追い詰められており、ここからは一時も油断できない戦いが続く。

そして、連邦に勝つためにはジャブローを攻略せねばならず、その為の陽動の1つがこの作戦なので、どうしてもやらなくてはならないのだ。

それこそ多少の犠牲を容認しても。

(やれやれ。早く終わって欲しいものだ。こんな戦争は)

ガルマは心からそう思いつつ、ダロタに対し、プラン変更を伝えるために幕僚達を召集するように命じた。

UC0079年 7月20日 マハラジャからの提案

◇宇宙世紀0079年 7月20日 サイド3 総帥府

「第5次降下作戦だど？」

ギレンは目の前の男——マハラジャ・カーン大佐が言ってきた提案に眉をしかめる。

今朝方、マハラジャから急に今後の作戦についての提案があると言われ、会うことにしたギレンだったが、その話をしてきた当初はかなり警戒した。

当然だろう。

マハラジャは紛れもないダイクン派であり、ザビ家の事実上の頂点である自分を暗殺してくる可能性も無くはなかったのだから。

しかし、作戦案が有って直接話したいと言われては総帥として会わないという訳にもいかないので、結局、会うことにしたのだが、念のためにセシリアと2名の親衛隊の兵士がギレンのすぐ後ろに控えており、何時でもマハラジャを撃ち殺せるように準備している。

更には部屋のすぐ外にも十数人の親衛隊員が待機している上に、マハラジャがこっそり設置しているかもしれない盗聴機対策用にミノフスキー粒子が室内にばら蒔かれており、この時点でマハラジャは外部との連絡手段を一切喪失していた。

だが、一方のマハラジャはそんな自分に対するあからさまな警戒を目にしても顔色ひとつ変えてはいない。

伊達に長年ジオンの独立運動に身を投じてきた訳ではないのだ。

「ええ、現在のジオンの戦線は実質2つ。これによって重力戦線は身動きが取れずに膠着している状態です。ならば、ここで1ヶ月前と同じ戦線を3つの状態にするのが得策かと考えました」

マハラジャはそう説明する。

現在、ジオンの抱えている戦線は北米、オデッサ、ヨーロッパ、中東だが、この内オデッサ、ヨーロッパ、中東は繋がっているのので、実質的な戦線は2つだ。

しかも、オセアニアが陥落したことによってそちらに対峙していた連邦軍がこれらの戦線の最前線に現れてきており、戦線はカリブ海などの一部を除いて完全に膠着してしまっている。

そして、連邦軍の物量の事を考えると、いずれ2つの戦線も崩壊してしまうことは明白であったので、ギレンはなんとかしたかったのだが、具体的な策が見つからずに放置されていた。

ちなみにマハラジャの言う重力戦線をもう一度3つにするとという案はギレンは一度は考えたのだが、降下した後の具体的なビジョンが見つからなかったのので、その案は見送っていたのだ。

「なるほど。理屈は分かった。だが、具体的には何処に降下して、どれだけの兵力を投入するのだ？」

そう、これが問題だった。

先月末から今月初めまでに引き上げられたオセアニア方面軍の兵力は、一部はソロモンやルナツーに配属されたものの、大半の兵力は休暇として本国に戻っているし、各サイドの義勇軍も一時的な休暇としてそれぞれの故郷へと一旦戻っている。

なので、ほんの少し前の新兵ばかりといった状況は多少なりとも改善されているのだが、それでももう一度降下作戦を行って成功するかどうかを考えると、非常に微妙なところだった。

「私は東アジア、具体的には中国大陸への降下。兵力は50万程を考えています」

「・・・無理だな。そんな兵力はない」

ギレンはそう判断する。

厳密にはその兵力を揃えるだけなら出来るのだが、その兵力の大半は新兵になるだろうし、そうなれば練度の関係などから降下を成功させても戦線を構築する事は難しい。

しかし、だからと言って他の2つの戦線から熟練の兵士を引き抜けば、その2つの戦線が苦しくなり、下手をすればアフリカやオセアニア同様に崩壊する危険性もある。

そう考えたギレンだったが、そんなギレンに対して、マハラジャはこう答えた。

「いえ、兵力なら宛があります。将校もダイクン派を中心にしようかと考えています」

「ダイクン派を？」

「ええ、閣下らの厄介払いには丁度良いでしょう？また第5次降下作戦の指揮は私が直々に行おうかと思っています」

それを聞いてギレンは考える。

(なるほど、そう来たか)

ギレンはマハラジャの狙いについてだいたい察していた。

おそらく降下した先の土地でダイクン派を中心とした新たな国を誕生させようとしているのだろう。

(これは厄介だな)

だが、それはギレンにとっても、ジオン公国にとっても非常に困る。その50万の兵力の内容がどういふものなのかは知らないが、仮に

それが本国の新兵だったとしたら、それが裏切られるのはジオン軍にとって単純にダメージにもなるし、義勇兵だったとしても、各サイドから兵力を借りているという手前、それはそれでジオンの面子が丸潰れになってしまう。

加えて、ダイクン派を排斥するというのも問題がある。

今のザビ派の中には反ダイクンという立場だからこそ、ザビ派に居るといふ者も居るのだ。

ここでダイクン派という「敵」が居なくなると、それらの人間がザビ派から離脱してしまう可能性がある。

(いや、それはそれでありか)

ギレンはそう考え直す。

そもそもギレンとしても今の独裁体制を長く続けるつもりはない。

この戦争が仮にジオンの勝利に終わったとしても、ギレンはジオン公国をジオン共和国に戻す予定だった。

なにしろ、独裁制という立場は独裁者の好きに出来るといふイメージはあるし、実際にその通りな事もある。

だが、同時に政治が独裁者に依存する以上、どうしても独裁者にとつては負担が大きくなってしまふのだ。

これが北朝鮮などの小国ならまだ問題ないのだが、あいにくジオンは人口2億人の巨大国家。

とてもではないが、いつまでも統制できるとは思えない。

だからこそ、従来の民主主義(今のジオンも一応は民主主義だが)体制に戻したかったのだが、そうなるとダイクン派の存在が邪魔になる。

原作では綺麗なイメージの存在するダイクン派であるが、実のところその実態はザビ派と然して変わらない。

ただジオン・ズム・ダイクンとザビ家という感じに、崇拜する対象が違うだけだ。

更には言えば、ダイクン派の指導者クラスの人間にしてもジンバ・ラ



ルやローゼルシアといった感じにろくな人間が居らず、これだったらまだ中立派閥に政権を譲り渡した方がよほど安心できる。

つまり、総じて言えばザビ家の事を抜きにしても、ジオンの今後を考えるのであれば、ダイクン派という存在は非常に邪魔なのだ。

ダイクン派を追放すれば、反ダイクン派の人間がザビ派を抜けてザビ派の影響力が減衰するかもしれないが、それを覚悟してもダイクン派を排除するのは1つの手かもしれないとギレンは考えたのだ。

「・・・1つだけ聞くが、兵力はどうするのだ？あいにくだが、この状況下でお前を信用することは出来ない。だから、将校はともかく、本国の兵士や義勇兵は貸せない。それでも可能なのか？」

ギレンはきつぱりとそう言った。

まあ、仮に実際に裏切られてそれらの兵力が敵に回った場合、勝つても負けてもジオンの損失になるのだから当たり前だが。

そして、あからさまに信用していないと言われたマハラジャだが、それでも顔色1つ変えることなくこう答えた。

「ええ、それで結構ですよ」



「どう思うっ？」

マハラジャが部屋を去った後、ギレンはセシリアにそう尋ねる。

「カーン大佐の調達する兵力と呼べるものが分からなければなんとも……」

「まあ、そうだろうな。私だって分からん。50万もの兵力を本国や各サイドの義勇軍以外でどうやって調達するのかがね」

「調べましようか？」

「ああ、是非そうしてくれ」

「分かりました。しかし、よろしかったのですか？条件付きとはいえ、例の作戦を許可してしまつて」

そう、マハラジャの提案した第5次降下作戦は先程ギレンによつて承認された。

もつとも、近々行われる連邦軍の反攻を跳ね返した後という条件こそ着いていたが。

「構わない。ここでダイクン派を一掃するチャンスだからな」

「しかし、カーン大佐がもしジオン公国からの独立を宣言などしたら……」

「それでも構わん。どうせ地球上で独立したところで我々には一切の損はない。仮に講和の際に連邦が奴等を追い出せと要求してきても、別の国だから問題起こしたとしてもこちらは知りませんと主張する

「ことも出来るしな」

「しかし、もし連邦と組まれたら・・・」

セシリアが懸念を示す。

確かに仮にマハラジャの提案通りに東アジアに降下して連邦軍と組まれてもしたらジオン正統自治体に物理的な力が着いてしまい、非常に厄介なことになる。

だが――

「流石にないだろう。そんなことをしたらサイド3の住民を完全に敵に回すことになるし、反連邦派のスペースノイドも黙っていない。それに仮にそれで成功したとしても今度は連邦に頭が上がらなくなる」

ギレンはその可能性を否定する。

連邦と組むという選択肢は確かに有りかもしれないが、当然、それ相応にデメリットは存在するのだ。

それに連邦からの完全独立というジオン・ズム・ダイクンの悲願にも反してしまう以上、マハラジャがその選択肢を取るとは考えづらい。

「まあ、万が一の時は色々理由をつけて降下作戦を許可しなければ良い。最終的な決定権は私にあるからな。それより8月初めに始まるという連邦の反攻作戦についての対策を今のうちに考えよう」

ギレンはそう言いながら、マハラジャの事を一旦頭から追い出し、連邦の反攻作戦への対策に思考を移した。

――しかし、この時、マハラジャの提案を軽く考えてしまったことを、ギレンは後に後悔することとなる。

U C 0 0 7 9 年 7 月 2 3 日 再会

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 7月23日 ルナツー

「あれ？ノビタ？」

「えっ？」

今日の訓練を終え、タリアと共に食堂に向かっていたのび太だったが、そこで聞き覚えのある声で自分に話し掛けてきた少女に気づき、そちらに向かって振り向く。

すると、そこには数ヶ月前に別れた少女——メイ・カーウィン技術少尉と彼女の友人であるユウキ・ナカサト伍長が居た。

「あれ？メイ。久しぶりだね」

久々に会えた事が嬉しいのか、ニッコリと笑いながらのび太はそう言う。

だが、のび太の今の風貌は普段から会っているタリアには普通に感じられたが、数ヶ月振りに会うメイにとっては全く違うように感じられ、メイは物凄く驚いていた。

(な、なに？なんだかのび太、凄く格好よくなったような・・・)

メイは思わず顔を赤くしてしまう。

そう、数ヶ月前と比べてのび太は非常に洗練された顔付きとなっており、ありたいに言えば格好よくなっていたのだ。

もつとも、それが良いことであるかと言われると非常に微妙であったが。

「う、うん。久しぶり」

「うん、久しぶり。でも、驚いたなあ。何時からルナツに居たの？」

「今朝方に着いたの。まあ、ノビタが居るなんて思わなかったけど」

「ガダルカナル島から撤退した後にここに来たんだ」

「へ、へえ」

メイは少しばつが悪そうな顔をする。

ガダルカナル島の事は以前知り合いのダグラス・ローデン大佐から聞いたことがあったが、あまり評判は良くなく、増援も大して送っていなかったと聞いた。

その時は戦略的な知識に疎いのもあってメイはなんとも思っていなかったが、実際にその場に居た人を前にすると、やはり罪悪感がわき出てしまう。

それがメイが気にしているのび太なら尚更だ。

「ねえ、ノビタ。その子、誰？」

そこで2人の会話にタリアが割って入ってくる。

「どうやら2人の関係が面白く無いらしく、メイに少々敵意を込めた視線を送っていた。」

「ああ。ごめん、タリア。ほったらかしにしちゃって。それとこの人はメイ。メイ・カーウィン。一応、技術少尉で上官だから敬意は払って」

「・・・タリア・ロウラン特務准尉です」

「メイ・カーウィン技術少尉だよ。よろしくね」

タリアからの敵意の視線を受けながらも、メイは何時ものような笑顔でそう言った。

しかし、それもタリアからすれば気に入らなかつたらしく、彼女は無然とした顔つきをする。

「・・・行こう、ノビタ。明日も早いんだから」

「えっ、ち、ちよつと。タリア!?!」

のび太はそのままタリアに引き摺られていき、メイの前から去っていった。

当のメイは暫しの間、ポカンとした表情でそれを見ていたが、2人の姿が完全に見えなくなる頃には我に返り、次の瞬間には先程のタリアのような面白くなさそうな顔をする。

(むく！なんなのあの子!!)

メイは頬を膨らませながら、内心でそんなことを思う。

特に気に入らないのが胸だ。

自分も平均並みにあるとは思っている(実際は14歳の平均よりも少し下)が、タリアは明らかに自分より年下にも関わらず、自分より大きいものを持っている。

別に胸で人が決まるわけではないが、彼女が自分の気になる人と親しげな関係を築いているというのであれば話は別だ。

・・・とどのつまり、この瞬間からメイとタリアは不倶戴天の敵同士となっていた。

「ねえ、メイ。あの子がメイの言っていた子?」

そんな彼女にユウキが声を掛けてくる。

ユウキは以前、のび太の事をメイからよく聞いていたが、その印象は漠然としてよく分からなかった。

しかし、灰色の死神という異名を付けられている人物であることは軍内での噂で知っていたので、もっとキリツとした感じの少年かと思っていたのだ。

だが、今日、実際に会ったみてユウキは少し驚いた。

何故なら、のび太をパット見た感じの印象は、キリツとしているところか、どこにでも居る普通の少年といった感じの風貌であり、とても灰色の死神と呼ばれるような人間には見えなかったからだ。

「・・・」

だが、そのユウキの掛けてきた言葉を無視する形で、メイはユウキのある部分をじっと見た。

それは言うまでもなく胸。

ユウキは今年20歳の成人女性であったが、その胸は間違いなく同年代から見ても「巨乳」と言える程の大きさだったので、先程のタリアの一件で自らの胸が小コンプレックスを刺激されたメイは自然とそこに視線を釘付けにされた。

しかし、そんな視線をしていれば当然ユウキの方も気づく。

「ど、どうしたの?」

「・・・ねえ、どうしたらそこまで胸を大きく出来るの?」

「へ?」

メイの純粹（些か邪心が混じっているが）な質問に、ユウキはポカんとした表情をしながら固まることになった。

◇サイド4<sup>ムーア</sup> とある別荘  
サイド4。

それは原作では一週間戦争によってサイド1、2と共に壊滅させられたコロニー群であったが、この世界では健在であり、政治機構も多少ジオンの干渉を受けてはいるものの、ちゃんと機能している。

だが、元々親連邦派の多いサイドであったこともあって、占領者であるジオンに対して内心で反感を持っている人間も多く存在しているというのも事実であり、現に原作ではムーア同胞団という武装勢力が連邦につく形でジオンに敵対しており、それはこの世界でも同じだった。

そして、ムーア同胞団という直接的な反抗勢力の他にも、サイド4内部に反ジオン勢力は存在しているのだが、当然、そんな勢力をジオンが黙ってみている筈もなく、表立っては活動していないものの、サイド4の治安機関を裏から支援する形で反ジオン勢力を摘発を行っている。

当然、反ジオン勢力はそれに抵抗するが、ジオンの支援を受けている治安機関に敵う筈もなく、また現政権が反ジオン勢力の資産を次々と接収していることもあって、日に日に反ジオン勢力はその組織力を



減衰させられていく。

追い詰められた環境下にあったサイド4の反ジオン勢力であったが、そんな彼らに今日、1つの選択肢がある男によってもたらされようとしていた。

「本当か？それは？」

サイド4の反ジオン勢力組織のリーダー格の男はそう言いながら、対面する男に確認を行う。

「ええ。先程言ったことに協力してくれれば、皆さんを地球に送ってムーア同胞団に合流させてみせましょう」

男が持ってきた話。

それは自分達をジオンの第5次降下作戦に便乗させる形で地球に送り、ムーア同胞団に合流させるという話だった。

正直、この提案は魅力的だ。

サイド4は既に占領から半年も経っているにも関わらず、一向に連邦軍が来ないことによって親ジオン派が徐々に勢力を拡大してきている。

しかし、それに反比例するように自分達のような反ジオン勢力はどんどんと縮小してきており、このままではいずれ活動できなくなってしまう。当局に逮捕されるのは時間の問題だったので、男の提案は正に渡りに船だった。

「・・・しかし、本当に大丈夫なのか？」

同じ部屋に居た反ジオン勢力の男の1人が疑わしげな視線でその男を見る。

警戒するのは当然だ。

なにしろ、話が上手すぎるので、これが自分達を誘き出して一気に

叩こうとするジオンの策略でも決して可笑しくはないと男は考えていた。

だが、そんな視線を向けられた男は気分を害した様子もなく、不敵な笑みでこう言う。

「ええ、問題ありません。なにしろ、ジオンはマハラジャ・カーン大佐主導の下、第5次降下作戦に備えて傭兵を続々と雇っています。必要な兵力が多いので身分を問わずにやっているため、IDカードを偽造すれば、その中に紛れ込むのは非常に簡単です」

それは事実だった。

マハラジャは第5次降下作戦に備えて様々なサイドから色んな人材を身分を問わずに（それこそテロリストであつたとしても）集めており、男が所属している組織の偽造技術を以てすれば、反ジオン勢力派の男たちをその中に紛れ込ませることなど容易に出来る。

「しかし、降下の際に連邦軍に誤って撃たれば・・・」

「そこも問題はありません。連邦政府には既に話を通してありますし、その為の敵味方識別装置もこちらで用意します。まあ、一応、不自然に思われない程度に迎撃は行うとのことですが、大したものではないかと」

「うむむ」

それを聞いて反ジオン勢力のリーダーの男は迷う。

この話に乗るかどうかを。

乗った場合は上手くすればムーア同胞団に合流できるが、この話が罠だった場合は組織が完全に壊滅する。

しかし、乗らなければこのままじり貧となって組織は緩やかな死を迎えるだけになってしまう。

「・・・分かった。乗ろう」

暫しの思考の末、リーダーの男はそう答えた。

「よろしいのですか？」

「ああ。どのみちこのままやつても、俺たちの組織は潰されるだけだからな。だったら、一か八かに賭けてみるのも手だ。それにあんた個人にも借りがあるからな」

「そりやどうも。しかし、まだジオンの中でも第5次降下作戦は確定となったわけではありませんので、この話が破棄される可能性があるということも十分留意しておいてください」

「分かった」

「では、私はこれで失敬します」

男はそう言いながら、その別荘から去っていった。

UC0079年 7月27日 有線式ビット

◇宇宙世紀0079年 7月27日 ルナツー

「有線式ビット？」

ルナツーのMS格納庫の1つ。

そこには30機以上のMSが収納されており、のび太のガンダム改もそこに収納されている。

基本的にルナツーは海兵隊が主導の基地であるので、MSや艦艇は海兵隊カラーであるカーキ色に統一されているのだが、のび太の機体は今までの戦功もあって例外的に灰色となっており、非常に目立つ。

さて、そんなガンダム改の前では、メイがのび太に対してガンダム改に装着される新装備についての説明を行っていた。

「そう。サイコミュ兵器の1つで、あの砲口からレーザービームを発射できるの」

「へえー。あれ？確かこれってニュータイプ研究所の時もやったけど、あの時は線なんて無かったような・・・」

のび太はニュータイプ研究所に居た時にやったシュミレーションを思い出す。

あの時、仮装空間ではあったものの、確かにのび太はサイコミュ兵器を動かしたが、その時に動かしたビットには線なんて無かった筈だ。

そう指摘するのび太に、メイはこう説明する。

「ああ、あれはちよつと間に合わなかったみたい。なにぶん、まだ試作の段階だったから」

そう、実を言うと無線式ビツトはまだ完成したばかりであり、ソロモンで試験運用している最中でルナツーには回ってきていなかった。しかし、反攻が近いということもあり、ルナツーの戦力強化も必要と考えた上層部によって、この有線式ビツトが送り込まれたのだ。

「そうなんだ。でも、線で繋がっているとすると、使い勝手は悪そうだなあ」

のび太はそんな感想を抱く。

そして、それは間違っていない。

この有線式ビツトは無線式と違って遠くに飛ばすことが出来ないし、複数のビツトを同時に使う際に線と別の線が絡まったりすることもある。もたまにあるので、のび太の言うように使い勝手は悪かったのだから。

もつとも、有線式であるがゆえにニュータイプ能力への負担は少なく、ニュータイプ能力の低いものでも簡単に使えるというメリットもちゃんと存在するのだが。

「今回ノビタの機体に積まれるのは5本らしいけど、ノビタならこれだけで5隻の船を同時に沈められると思うよ」

冗談のような台詞を吐くメイだが、実のところ、あながち冗談ではなかったりする。

実際、ニュータイプ研究所でシミュレーションをやっていた時、のび太は6個の無線式ビツトを動かす、それを6個全てを別々の戦艦に向けて発砲し、これを全て命中させるといふ神業じみた事をやってのけており、それを見たミノフスキー博士は思わず目を剥いてしまった程だ。

もつとも、こんな神業じみた芸当は他のニュータイプには——それこそアムロ・レイにすら——出来ず、結局、出来るのは後にも先にものび太だけだったのだが。

「まあ、射撃には自信があるからね」

「ふふっ。あつ、射撃と言えばMIPからノビタ宛に届いた物があるよ」

「えっ?なに?」

「なんでもマガジン式のビームライフルらしいよ。遂に完成したんだって」

「ああ、あれか。カールさん、遂にやったんだな」

のび太はそう言いながら、内心でカールに感謝していた。

今まで支給されていたビームライフルはエネルギーが内蔵式であったので、再装填するためにはいちいち基地に戻らなければならなかったのだが、マガジン式であればその必要はなくなるからだ。

もつとも、良いことばかりではなかった。

「でも、1度に装填できる数は10発に減っちゃったんだけどね」

そう、マガジン式に変える場合、どうしてもそのマガジンに込められるエネルギー量の事を考えて、ビームライフルが発砲する際に放つエネルギーの配分を考えなくてはならなかったのだが、これが難航した。

威力を高めると装填数が減ってしまうし、装填数を重視すると逆に威力が減ってしまう。

そこで色々開発者達は悩んだのだが、最終的な結論としては威力を重視することとなり、代わりに一度の装填数が大幅に減らされることになった。

その結果、前の内蔵式のビームライフルは1度の装填で18発を撃

てたのだが、今回届いたビームライフルは10発しか撃てなくなっていたのだ。

まあ、その代わりに威力は原作ファーストガンダムでガンダムが使っていたビームライフルと同等になっていたのだが。

「問題ないよ。ビームライフルの他にマシンガンをわざわざ持っていったり、再装填しにわざわざ基地に戻ったりしなくて済むんだから」

銃に込められる弾数は減ったものの、それでものび太は旧型のものよりは良いと考えている。

何故なら、再装填のためにいちいち基地に戻る必要が無くなり、戦場で再装填出来るのは装填数が減ったのを上回るメリットであると思っていたからだ。

「そう？なら良いんだけど・・・」

「何か気になることでもあるの？」

「あつ、いや。なんか使用する兵器がビーム兵器に片寄っているから」

「えっ？」

そう言えば、とのび太は思い返す。

このガンダム改に乗せられている武装はシールドが1つとビームライフル1丁、ビームサーベル2丁、そして、今回搭載された有線式ビット5本。

確かに攻撃武器に限定すれば、全てビームに片寄っている。

「まあ、そうだね。でも、何か問題があるの？ビーム兵器は基本的に実弾兵器より威力が高いと聞いているけど」

ビーム兵器と実弾兵器。

どちらが優れているのかと聞かれると、非常に返答に困る。

何故なら、使用する武器や弾薬、更には場所や環境などによって大きく違ってくるからだ。

更に言えば、実弾兵器への防御は装甲やシールド、PS装甲で防げるし、対ビームにしてもIフィールドや対ビームコーティング装甲、ビーム攪乱幕などの防御手段も存在するので、仮にどちらが優れているのかを軍事の専門家に聞いた場合、ほぼ間違いなく『時と場合による』という解答が返ってくるだろう。

しかし、基本的にビーム兵器の方が威力もある上に弾速も速いため、少なくとも重力の影響を受けづらい宇宙空間であれば、ビーム兵器の方が有効というのも確かな事実だ。

加えて、前にも述べたが、のび太はどうにも実体の伴った攻撃に抵抗があり、ビーム兵器を使えるならば、そちらを進んで使いたいという思いもあった。

「いや、基本的に問題はないと思うんだけど、ビーム攪乱幕っていうのもあるから」

「・・・ああ、そう言えばそんなのもあったね」

のび太はメイに言われて、ビーム攪乱幕の存在を思い出す。

実際にのび太が関わった戦場で投入されたことはなかったのですが、詳細はよく知らなかったのだが、ビームを消失、あるいは大きく減衰させる効果が有るといふことはのび太も耳にしていた。

「でも、それは確かばら蒔かれた領域にしか効果が無いんだろう？」

「それはそうだけど・・・」



「だったら問題ないさ。そんな領域で戦わなければ良い」

のび太はそう言ってメイの懸念を一蹴する。

だが、この時、のび太は珍しく簡単に答えを出してしまった。

確かにのび太は元々物事を深く考える性格ではないが、自分の持つ装備については自分の命に関わってくるだけあつて何時もならそれなりに深く考える。

だが、前述した実弾兵器への忌避感によって、その事について深く考えるのを拒絶しまつていたのだ。

もつとも、こういつた「都合の悪い部分をカットする」という思考は何も珍しいものではない。

太平洋戦争時代の日本軍も戦争後半（具体的には1944年頃）になると、敵軍の進路を予想する際に都合の悪い可能性には敢えて目を瞑り、都合の良い可能性を前提に作戦を練ったりしたことがあるし、現代日本でも自衛隊はどう見ても軍隊であるにも関わらず、憲法に照らし合わせると軍隊という存在では都合が悪いということ、軍隊ではない」という詭弁を押し通そうとしている。

軍隊や国単位の組織でこれなのだ。

ならば、個人単位でそんな考え方をする者が現れても不思議ではないし、そもそも幾ら何度も世界を救った英雄であると言つてもものび太も人間であり、都合の悪い事に耳を塞ぎたくなる時もある。

だが、はつきり言つてこれは一種の現実逃避というものであり、現実がそれに合わせてくれるわけではない。

——そして、のび太がこの時、メイの懸念を一蹴してしまったことを一生後悔する事になるのは少し後の話。

U C 0 0 7 9 年 7 月 3 1 日 攻勢前夜

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 7月31日 南米 ジャブロー

「・・・行ってしまったか」

ジャブローの宇宙港から打ち上げられる戦艦や巡洋艦、空母などの姿を見ながら、レビルはそう言った。

月号作戦。

一見、月面都市であるフォン・ブラウンか、グラナダに対する攻略作戦のように感じられる作戦名であるが、実際は月の反対に存在する地球にとって2つ目となる月——ルナツールの攻略作戦だった。

この作戦に投入される艦艇は全部で300隻。

その内50隻は陽動としてソロモンへと向かい、宇宙攻撃軍本隊を牽制する役割を担っており、指揮官はロドニー・カニンガン少将（原作ではルウム会戦で死亡しているが、この世界では生き残った）だ。そして、残り250隻はルナツールを占領する本隊であり、こちらはグリーン・ワイアット中將が率いている。

「こんな無謀な作戦、やはり職を賭けてでも反対するべきだったか？」

レビルは今更ながらそう思った。

今回の月号作戦は正直言って無謀な要素が多い。

なにしろ、ソロモンへ向かった陽動部隊は全滅する可能性が高かったし、ルナツールを攻略する本隊の方は一見大丈夫なように見えるが、モビルスーツは無い上にジオン側が新兵器を用意している可能性もある。

唯一、ソーラ・システムだけは完成してルナツール攻略のために本隊と共に運ばれていたが、元々ジオン側が使っていた兵器であるし、原理も簡単なのでジオン側もこちらが猿真似をしてくると読んでいるかもしれない。

そう考えると、今回の作戦はあまりに博打要素が大きすぎるとレビルは考えていた。

「せめてこちらのモビルスーツ開発を待つてくれればな。・・・いや、それではその前に私が更迭されてしまうか」

今のレビルの立場は危うい。

まあ、ルウムでの敗戦からなんの戦功も挙げていないので、当然と言えば当然であったが。

しかも、陸軍が曲がりなりにも結果を出している中で年内ギリギリに完成すると見込まれているモビルスーツの開発を待つなどという悠長なことをしていれば、宇宙での反攻前に更迭される可能性が非常に高い。

「なんとか作戦が成功してくれば良いが・・・」

レビルは半ば祈るようにそう呟いた。

◇宇宙要塞『ソロモン』

「打ち上げられた連邦の宇宙艦隊を真つ先に感知したのは、一番前線に近い宇宙要塞『ソロモン』だった。

「遂に連邦の反攻が行われたか」

ラコック大佐からの報告を聞き、ドズルはそう言った。

原作では連邦の宇宙での反攻は12月の事であったが、この世界ではコロニー落としをやっていないお蔭で連邦の国力もまだまだ元気一杯だ。

早まったとしてもなんの不思議もない。

・・・無いのだが、本当に早く来られるとこれからの戦争の先行きに不安を感じてしまうのもまた確かだった。

「それで目標地点は？このソロモンか、それともルナツーか？」

ドズルはラコックに尋ねる。

元々、ソロモンカルナツーが目標であるということは既にジオン軍でも予測されていた。

と言うより、そこしかない。

何故なら、ほとんどのサイドと月面都市がある月方向に行くとしてもソロモンがどうしても邪魔になるし、その反対のサイド7に行くとしてもそれはそれでルナツーが邪魔になるからだ。

「はっ。敵艦隊は大気圏離脱後に分離し、一部はこのソロモンへ、大半はルナツーに向かったようです」

「なるほど、そう来たか」

ドズルはそう言いながら、敵の意図を察した。

おそらく、こちらに向かっている艦隊は増援をルナツーに向かわせないための陽動、本命はルナツーの攻略だろう。

ルナツーはジオンからもかなり遠いし、落とされたとしても失うものはほとんど無い。

強いて言えばサイド7だが、なにぶん建設途中で人口の少ないコロニーだ。

そんな戦略的価値の低い要塞をジオンがガチガチに防備を固めて守っているとは思えない。

ならば、その防備の薄い要塞を落としてまず宇宙に自分達の拠点を作ろう。

そう連邦が考えたとしても不思議ではないし、実際にそれは正しい。

ルナツーには艦艇が20隻程しか配備されていないし、守備隊はそれなりの数が居るが、それでも数百隻単位の攻勢に耐えられるほどの規模が居るわけではないからだ。

まあ、その代わりに要塞砲としてヨルムンガンドが優先的に配備されていたし、まだ100パーセント完成してはいないが、超大型拡散メガ粒子砲も一応撃てるようになってる。

少なくとも簡単には落とせないだろう。

が――

「問題となるのはソーラ・システムだな」

「ソーラ・システム？我が方がルナツー攻略の時に使った奴ですか？」

「そうだ。おそらくそれを連邦は使ってくる」

「連邦が？それは本当ですか？」

「ソーラ・システムは威力こそでかいが、所詮は虫眼鏡だからな。原理は物凄く簡単だ。連邦が真似してきたとしても不思議はない」

ドズルは今回のルナツー攻略にソーラ・システムが使われると読んでいた。

原作ではソロモン攻略に使われたソーラ・システムであるが、この世界ではルナツーの攻略でジオンが一度使っているし、原理も簡単で猿真似は容易だ。

連邦が今の時点で完成させて実戦投入したとしても不思議ではない。

まあ、ソーラ・システムは大量の鏡を運ばなくてはならないし、なによりそのエネルギーを操作するコントロール艦を狙われたら終わりなのだが、そこは戦い方次第だ。

「なるほど。では、ルナツーのシーマ大佐にその事を伝えますか？」

「ああ、そうしてくれ。シーマ大佐なら気づいているとは思いますが、念のためにな。それと話を戻すが、こちらに来る連邦の陽動部隊については全力で撃滅する。その上でルナツーには増援を送る」

陽動部隊はそれなりの規模であるとはいえ、宇宙攻撃軍の主力が集まっているソロモン艦隊であれば撃滅してお釣りが来る。

なので、陽動部隊を撃滅しながら増援を送ることは可能だ。

戦力分散にはなるが、ここで万が一にもルナツーを落とされて連邦に拠点を築かせるのは不味い。

（待てよ。幾ら宇宙はジオンの手に有るとはいえ、連邦もそのくらいのことには分かっている筈だ。だったら、何故こんな無謀で意味の無い陽動を・・・）

ドズルはそう考えるが、その疑問の答えは直後にやって来た兵士によってもたらされることとなる。

「ドズル中将、大変です！」

「何事か！ドズル中将の御前だぞ!!」

「すみません！ですが、緊急事態なんです!!」

突然やって来た兵士にラコックは叱責するが、兵士も重要な案件を持ってきているという自負があるためか、怯みもせずに報告を伝えようとする。

それを見たドズルは嫌な予感を感じながらも、その兵士を聞くことにした。

「なんだ？その報告とは」

「はい！コンスコン少将からです。サイド1及びサイド4にて駐留艦隊が襲撃されたとのことですよ」

「なにい!？」

ドズルはその報告に驚愕する。

各サイド——具体的には1、2、4、5にはそれぞれ数隻ずつのジオン軍の駐留艦隊が滞在しており、各サイドの動向を監視していた。

その中でも特に親連邦派の多かった1、2、4に駐留する艦隊には常にテロに警戒しておくように通達していたのだが、まさかこのタイミングでそれが起こると思わず、ドズルも驚いていた。

「いったい、何が起きたのだ!？」

「は、はい！それが各サイドに売却していたジムIによって襲撃されたとのことですよ!!」

「なに!?!では、義勇軍が裏切ったのか!?!」

それを聞いたドズルはジムIの売却先であるサイド1とサイド4の義勇軍が裏切ったのかと思っただが、その直後に兵士が口にした報告はその斜め上に行くものだった。

「そ、それが・・・潜り込んでいた連邦軍によって襲撃されたと・・・」

「ば、馬鹿な!?!」

その兵士の報告に、先程までどうにか平静を保っていたラコックは思わず叫んでしまう。

そう、実はサイド1とサイド4には少数の連邦軍がいつのまにか潜り込んでおり、更には両政府の連邦シンパがその潜り込んだ連邦軍にジオンから売却されたMSの一部を横流ししてしまっていた。

そして、潜り込んだ連邦軍はそれを駆使して駐留艦隊を襲撃したのだ。

ちなみにサイド2でも同様の動きはあったのだが、こちらは事前に異常を察知したガタルカナルから転任した駐留艦隊の司令官であるロック・ホールデン少佐によって事前に防がれていた。

「・・・やられたな」

ドズルはまんまと食わされたことを悟った。

おそらく今回の両サイドでの一件は連邦軍の攻勢に合わせるために事前に準備されていたものなのだろう。

まあ、偶然という可能性も0ではないが、どちらにしろこのタイミ



ングで動き出したことがジオンにとって最悪なものであることに変わりはない。

「それで両サイドの駐留艦隊は？」

「……1隻が沈みました。残った艦艇も大なり小なり損傷を負っており、両サイドから撤退しました」

「では、両サイドは実質、ジオンの手から離れたのだな？」

「は、はい」

「……ラコック、予定を変更する。ルナツーへの増援は無しだ。全部隊を一旦、陽動部隊の撃滅へと向かわせる」

仮に陽動部隊を取り逃がして両サイドに逃げ込まれたりしたら厄介なことになる。

そう感じたドズルはすぐさまルナツーへの増援を止めて全部隊を陽動部隊の撃滅に向かわせることを決意した。

「はっ。しかし、それではルナツーは……」

「遺憾だが、ルナツーには今しばらく独力で耐えてもらう。そして、シーマ大佐にこちらの事情を伝えてこう言っておけ。健闘を祈る、とな」

ドズルはそう言いながら、連邦の策略にしてやられた自分を不甲斐なく思い、内心で盛大な舌打ちをした。

UC0079年 8月1日 ルナツー防衛戦

◇宇宙世紀0079年 8月1日 ルナツー周辺宙域

「駄目だ！数が多すぎる!!」

のび太はそう叫びながら、途方もない連邦の物量に辟易していた。グリーン・ワイアット中将率いる連邦軍のルナツー攻略艦隊250隻の攻勢を受けることになったジオン軍ルナツー基地。

これに対してシーマ大佐が取った戦術はルナツー外壁付近での決戦だった。

ある意味要塞としてのルナツーを最大限に活かした戦術であったが、当然、そのままやってはソーラ・システムによって戦力が一掃されてしまう。

そこら辺はシーマも考えており、ルナツーに駐留していた艦隊を全て（と言っても、20隻程しか居なかったが）使ってコントロール艦の破壊に望んだ。

そして、結果的に作戦は成功し、コントロール艦の破壊に成功したジオン軍だったが、次に待っていたのは連邦艦隊本隊による物量戦だった。

この作戦には最新鋭の宇宙戦闘機であるセイバーフィッシュIIや新たに開発されたMPのボールが投入されている上に、開戦初頭の時とは違い、連邦もミノフスキー粒子散布下での戦闘に慣れてきており、未だ性能ではモビルスーツには及ばないものの、モビルスーツを撃破できる性能を持つという点は大きく、更に数の暴力という要素も合わさったことで、迎撃に出たルナツーのモビルスーツ部隊は次々と磨り減らされていく。

そして、のび太もまたその迎撃部隊に配置されており、ビームライフルと有線式ビットを上手く使った結果、既にこの戦いだけでセイバーフィッシュIIを22機、ボールを12機、サラミス級巡洋艦を5隻、マゼラン級戦艦2隻を撃沈破するという膨大な戦果を挙げていた

のだが、それでも全体の戦況からすれば与えられる影響などほんの少しというのが現状だった。

「まったく！あの大きな大砲である程度相手の数を減らしてから戦うって話だったのに!!」

そう、今回の戦いでは超大型拡散メガ粒子砲によって、ルナツー基地に寄ってきた敵艦隊に大打撃を加え、それからのび太達の出番が来ることになっていた。

ところが、当の超大型拡散メガ粒子砲はよりにもよって発射直前で故障してしまい、おまけにでかい砲門であった為に脅威と見なされたのか、戦線を突破した連邦軍のボールによって優先的に狙われてしまい、結果としてなんの役にも立つことなく撃破されてしまったのだ。

もう1つの切り札であったヨルムンガンドは一定の戦果こそ挙げていたものの、それ故にこれまた優先的に狙われ、ルナツーに配置されていた13門の内5門までが既に撃破されてしまっている。

「……こうなったら、大元を叩くしかないな」

このままではキリがないと見たのび太は、大元である空母部隊を叩くことを考えた。

幸い、上記した戦果は全て百発百中で挙げていたので、まだエネルギーに余裕（ビームライフルに至ってはマガジンを再装填してすらいない）はあったし、上手い具合に連邦の空母艦隊は近くに居る。

対空砲火は激しそうだが、このまま延々とキリがない戦いをやるよりはやってみる価値はあると判断し、のび太はガンダム改のバーニアを吹かし、連邦の空母艦隊へと向かった。

◇地球連邦軍 ルナツー攻略艦隊旗艦『ブリデン』  
連邦の物量に苦戦するジオン軍。

そして、その物量戦を仕掛けている当の連邦軍はといえば、こちらは然程焦った様子は無かった。

が、実のところ内実はかなり厳しいものだ。

現在、ルナツー攻略艦隊はヨルムンガンドによって43隻、MSやジオン艦隊の襲撃によって27隻（これには上記したのび太の戦果も含まれている）の合計70隻が沈められており、残存艦は180隻。かなりの数が残っているように思えるが、失われた艦艇の数をパーセンテージに直すと、全体の28パーセントが失われている計算となるのだ。

これは決して軽い損害ではない。

それでも動揺していないのはこのまま行けばルナツーはいずれ落ちるといふ確信が将兵達の間にあるからだ。

人間というのは希望を持っていれば、多少の都合の悪いことには目を瞑れる。

（少し不味いな）

だが、司令官であるグリーン・ワイアット中将は内心で焦りを感じていた。

元々、この作戦に失敗してしまえば帰り道など無いに等しい。

別動隊による作戦ではサイド1、2、4に潜入していた連邦軍がそれらに存在する宇宙港を確保、そこに陽動部隊が滑り込んでそれらのサイドに居るスペースノイドを実質的な人質として宇宙港の保持を継続。

そして、そうすることでそれらのサイドの宇宙港を、万が一、自分達がルナツー攻略に失敗した時の退路として活用することだったが、正直言ってそんな作戦が成功するとはグリーンも思っていなかったし、おそらくそれは陽動部隊の司令官であるカニングラム少将も同様の考えだろう。

つまり、自分達がルナツーを攻略できなければ、艦隊は路頭に迷ってしまう可能性が高いのだ。

まあ、カニングラム少将の方は路頭に迷う前にソロモンの艦隊によって蹂躪されるだろうが。

(だが、このまま行けば大丈夫だ。ギリギリだろうがな)

既に損害は3割に近い。

だが、未だにこちらの方が物量的には優位にあるし、ボールの一部がルナツーの表面に取り付き掛けている。

もつとも、すぐさま対応しているところから見ると、敵の指揮官もかなり優秀らしいが、それでもこの圧倒的な物量を覆せるほどではない。

まあ、こちらの指揮官がよっぽどの無能であったなら話は別だっただろうが、自分はそのままで無能ではないくらい自信はある。

その為、グリーンは他の将兵達よりは危機感を抱いているとはいえ、既に勝利を確信しているという点は変わらずにいた。

しかし、その予測は次の報告によって呆気なく覆される。

「ワ、ワイアット司令!!」

「どうしたのかね?」

「今、接触通信を行ってきたボールより伝達が入りました。く、空母部隊が全滅したとのことです!!」

「な、なに?!」

グリーンは何時もの冷静な様子をかなぐり捨てて思わず叫んでしまった。

それはそうだろう。

空母部隊は護衛艦艇も含めて30隻も居るのだ。

幾らミノフスキー粒子によって通信が阻害されていると言っても、それがいきなり全滅するなどということは信じがたい。

いや、厳密に言えば短期間で全滅させることは不可能ではないだろう。しかし、それはあくまでソーラ・システムのような広域破壊兵器を使った場合だ。

そんな兵器を使えば、当然の事ながらグリーンだけでなく、艦隊将兵全てが気づく。

しかし、自分を始めとした将兵達は今、オペレーターから報告を寄せられる形で気づいた。

(どういうことだ?)

何が起きているとグリーンは考えるが、それを考える時間はあまり与えられなかった。

——何故なら、空母部隊の居た方角から突然桃色の光が発生し、直後、その光がグリーンの率いる艦隊に向けて直進してきたのだから。

◇少し前

「ふう、これで全部だ」

のび太は少し息を吐きながら、既に残骸と化した連邦の空母艦隊を見る。

グリーン中將が異常を察知する少し前。

のび太は空母部隊を襲撃し、艦隊を全滅させていた。

そう、全滅である。

とは言っても、本当の意味で全滅したわけではない。

あくまで艦隊を全滅させただけで、未だセイバーフィッシュIIは元気に飛び回っているし、ボールのうち何機かは仲間の仇を取ろうとこちらに襲い掛かってきている。

そもそも無数に飛び回るセイバーフィッシュIIやボールを全滅させるにはとてもではないがガンダム改に装備されたエネルギーでは足りない。

だからこそ、艦隊だけをピンポイントに狙うことにしたのだ。

まあ、それでも空母艦隊の数は多かつたし、途中で邪魔してきたボールも落としたりしたので、30隻全てを撃沈した頃にはのび太の

機体のエネルギー量も大分損耗しており、有線式ビットのエネルギーに至っては既に空になっていた。

加えて――

（まだビームライフルの弾丸とビームサーベルが残っているけど……これ以上は無理そうだな）

向かってきたボールの一機をビームライフルで叩き落としながら、のび太はそう判断した。

この辺りは徐々にではあるが、ビーム攪乱幕の濃度が濃くなり始めている。

元は自分の攻撃を逃れようとした空母部隊が四方八方に撒いたものだったのだが、完全に効果を発揮する前に空母部隊は全て沈められてしまったのだ。

だが、ばら蒔かれた時と撃沈された際に漏れ出したビーム攪乱幕によつてこの辺のビーム攪乱幕濃度は高くなってきており、ビーム兵器を主力にしているのび太の機体ではこれ以上長く留まるのは危険だった。

そう思ったのび太はバーニアを吹かして撤退しようとするが、その時にある機体のがび太の目に映る。

「――えっ?」

それはタリアアの乗るジムⅢに連邦のセイバーフィッシュⅡが突入しようとする光景だった。



「これは参ったねえ」

◇

セイバーフィッシュIIに登場するパイロット——スレッガー・ロウ中尉はそう言いながら、半ば諦めたように笑う。

既に自分の母艦も沈み、帰る場所も無くなってしまった。

おまけに先程少し被弾したせいで、機体に異常が出ており、このまま行けばただの的となってしまう可能性が大だ。

もつとも、旧世紀の戦闘機とは違って宇宙空間で活動する宇宙戦闘機は重力が働いていないだけあって比較的脱出が容易だったが、この激しい戦闘の混乱の中で脱出したところで、戦闘に巻き込まれて戦死するか、酸素切れで死ぬかの運命しか残っていない。

更に——

「脱出装置も故障しちゃったしな」

そう、脱出装置が故障しており、既に脱出が出来ない状態になっていた。

しかし、だからこそ、この瞬間、スレッガーは覚悟を決める。

自分の命を以て1人でも敵を道連れにすると。

そして、彼の視線の先には海兵隊特有のカーキ色のカラーをしたジムⅢの姿があった。

「お前さんに恨みは無い。でも、悲しいけど、これ戦争なのよね」

スレッガーはそう言いながら、機体に残された全ての出力を振り絞  
り、そのジムⅢへと特攻していった。

◇

「凄い」

カーキ色のジムⅢに乗るタリアはそう言いながら、空母部隊を全滅  
させたのび太の戦いぶりに見とれていた。

元から何時も彼を弟のように見ていたタリアだったが、まさかここ  
まで成長するとは思っていなかったのだ。

もつとも、これは有線式ビットと再装填型のビームライフルを支給  
されたからここまで出来たのであり、従来の装備であればのび太もこ  
こまで戦果を挙げることは出来なかつただろうが。

「私も負けてられないな」

そう思い、獲物を探すタリア。

しかし、そんな彼女に一機のセイバーフィッシュⅡがエンジンを無理に絞ったせいで発生した炎に包まれながら、タリアの乗るジムⅢへと突っ込もうとしてきた。

「!? っの!!」

だが、彼女もニュータイプ。

おまけにパイロットの死ぬ気でこちらを撃破しようという気概は、ニュータイプ相手には容易に伝わりやすく、すぐさまその存在に気づいたタリアは対応してビームライフルを撃つ。

だが――

「えっ!？」

発射されたビームはセイバーフィッシュⅡに向かう途中で減衰して消滅してしまう。

彼女は気づかなかったが、この辺りはビーム攪乱幕の濃度が特に濃い宙域であり、ビームライフルの火力はほとんど機能しないような場所だった。

そして、ビームライフルは機能しないと考えた彼女は慌てて回避に移ろうとするが、その時にはセイバーフィッシュⅡはすぐ目前まで迫っており、どう考えても回避は間に合わない。

「ごめん。ノビ――」

死期を悟った彼女は何かを言い残そうとするが、それを言い切る前にスレッガーの乗ったセイバーフィッシュⅡはタリアの乗るジムⅢへと激突。

両者の機体は大爆発を引き起こした。

「あ．．．ああ．．．．．」

◇

のび太は目の前の現実が信じられなかった。

タリアの乗るジムⅢにセイバーフィッシュⅡが突っ込もうとしていた時、のび太も何もせず傍観していた訳ではない。

ビームライフルを使って激突前にセイバーフィッシュⅡを撃墜しようとした。

しかし、タリアの居た宙域は前述したようにビーム攪乱幕の濃い場所。

のび太の放ったビームもあっという間に消えてしまった。

ここに至り、のび太は自分の装備をビーム兵器に偏重させ過ぎた事を後悔したが、もう遅く、セイバーフィッシュⅡはジムⅢに突入してしまう。

そして、直後にニュータイプ特有の思念がのび太の中に入ってきたことで、のび太は否応なしに彼女が戦死した事を自覚してしまった。

「くそお!!」

のび太は怒りの叫びを上げながら、連邦艦隊の本隊が居る方向を睨

み付ける。

「お前らが居たから!!」

そう言いながら、のび太の脳裏にタリアとの思い出が過っていく。自分の事を日頃から散々からかっていたタリアだったが、決して彼女の存在を鬱陶しく思っていた訳ではない。

むしろ、好意的に思っており、彼女の事を姉のように慕っていたし、彼女の兄が死んでからは、彼女自身が自分に甘えてきたこともあった。

だが、彼女はもう戻ってこない。

死んだのだ。

兄を殺した存在と同じ連邦の手によって。

何時もなら、戦っている以上は仕方の無いことと割り切っていたかもしれないが、今回は死んだ相手が悪すぎ、感情が理性を上回ってしまった。

更にその感情の高まりによってのび太のニュータイプ能力は増幅され、のび太の体の回りをピンク色のオーラが覆い、それは彼の乗るガンダム改の機体にも浸透していく。

「このおおおおおおお!!!」

——そして、そのままビームライフルの銃口を連邦艦隊へと向けると、その銃口から先程まで撃っていたビームとは比較にならない量のエネルギーの奔流が迸り、その銃口の先である連邦艦隊へと一直線に向かっていった。

U C 0 0 7 9 年 8 月 2 日 処置

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 8月2日 サイド3 ズムシティ 総帥  
府

「・・・」

ギレンは呆然としていた。

ルナツー防衛戦の結果報告をシーマ大佐から寄せられた光学通信にて聞いていたのだが、ここで見せられたのはのび太のビームライフルから放たれた巨大な光の奔流が連邦艦隊を一掃するところだった。

(まさかここでニュータイプ能力が覚醒するとは・・・)

国民的アニメの主人公だけあって、土壇場で何か引き起こすのではないかと感じていたのだが、まさかこのような形でニュータイプ能力に覚醒するとまではギレンも読んでいなかったのだ。

だが、そもそもニュータイプ能力は原作では閃光のハサウェイ後に急速にその研究が衰退しており、コスモ貴族主義が台頭するU C 0 1 2 0 年代には「MSパイロットのスペシャリスト」という認識になっっていた。

もつとも、ニュータイプそのものはそれ以降も何人か出現していたが、結局、ジオンと連邦が対立していた頃のような哲学的な問題になるほどではなく、はつきり言えば原作を知っているギレンもニュータイプ能力者が何処までの事が出来るのかは知らないのだ。

ギレンはその事に改めて気づかされた。

(だが、サイコショックには及ばないな)

映像で見た感じ、のび太が放ったピンク色の巨大な光線はソーラ・システム程の破壊力が有りそうだったが、それもギレンにとっては予

想の範囲内ではない。

何故なら、原作の逆襲のシヤアではアクシズの後ろ半分を押し返すために、ソーラ・システムより威力の高いソーラ・レイの200万日分というとんでもないエネルギー量を発したのだ。

それと比べれば、今回、のび太がやったことは大したことではないとも言えるのだが、あくまでそれは比較すればであって、とんでもない事を行ったということに変わりはない。

もつとも、逆襲のシヤアの時に存在したサイコフレイムは今の時点では存在しないので、それが有ればあの時と同じか、それ以上の事が出来たのかもしれないが。

「・・・シーマ大佐」

『はっ』

画面の向こうから緊張したシーマの声が聞こえるが、ギレンはそれを敢えて気にせず、次の言葉を発する。

「この件に関しての処置だが・・・これは我が軍の新兵器によるものであり、ノビタ・ノビ特務准尉はそのパイロットだったにすぎない」

『は?』

「そういうことにはしておけということだ。あとはニュータイプ能力とは関係がないとも付け加えてな」

ここで本人がやったということになれば、今後、色々な意味で軍に居づらくなってしまいうだろう。

加えて、これがニュータイプの能力の効果であると分かれば、良くも悪くもニュータイプは特別視される。

良い意味で捉えられればオリジンのシヤアが唱えたようなニュー

タイプ至上主義も生まれてしまうかもしれないし、最悪、ニュータイプを崇める宗教みたいなのも出てくるかもしれない。

悪い意味で捉えられれば、原作の連邦がアムロに対して行ったように軟禁しろとか言ってくる輩が出るだろうし、最悪、クルスト・モーゼスのように抹殺しろと言ってくる輩も出てくるだろう。

どっちにしても悲惨なのは間違いなく、かといって隠し通すことが出来そうにない以上、この事はどうにか誤魔化すべきだとギレンは考えていた。

「それと彼が今回出した戦果だが、本人には本当に申し訳ないが全部取り上げる」

『し、しかし・・・それでは辻褃が合わなくなりませんが・・・』

「だから君の部下達で戦果を分配しておいてくれ。配分は君に任せる」

『・・・』

「まあ、言いたいことは分かる。人の戦果を勝手に他の奴のものにするというやり方が気に入らないのだろうか？だが、これは本人のためだ。今回は叩き出した戦果が大きすぎる。もしこれをそのままノビ特務准尉の力によるものにした場合、彼が仲間から化け物扱いされることは避けられない」

戦果が大きすぎると他の人間から悪意の視線も向けられる。

ましてや、今回は本人の戦果が大きすぎるため、他の人間から余計なやつかみや畏怖の視線を向けられないためにも情報は出来るだけ秘匿するべきだとギレンは考えていた。

これで敵将を討ち取ったとかなら、まだ話は別だった。

むしろ、その場合は積極的に称賛するべきだとギレンも考えていた



だろう。

しかし、今回の敵将であるグリーン・ワイアットはどうやら原作よりも悪運が強かったらしく、のび太の攻撃をギリギリで凌ぎきり、その後は残存艦共々ルナツ守備隊に投降して捕虜となっているので、残念ながらその宣伝はできない。

だからこそ、今回の連邦艦隊の撃滅は“のび太の戦果”ではなく、“兵器の戦果”にしておく必要がある。

「それを避けるためでもある。なんとかやってくれないか？」

『・・・分かりました。なんとかやってみます』

「ああ、頼んだ」

『では、失礼します』

そう言った直後、通信は途切れる。

ギレンはそれを見届けながら、大きく息を吐く。

「・・・まったく。問題は山積みだな」

1つ問題が問題が片付いたと思ったら、また新たに出てきた問題にギレンは頭を抱えた。

今回の件、漏れれば本当にヤバイものになる。

世間に知られているニュータイプ論がジオンが唱えたものとデギンが唱えたものの2つ有るのは前述した通りだが、この事が漏れればデギンの唱えたニュータイプ論は完全に否定されることになる。

何故なら、デギンの唱えたニュータイプ論は“第六感が異常発達した人間”という普通の人間の延長線上にあるものとされているからだ。

しかし、今回起こした現象は明らかに普通の人間ではできない。

となれば、自然とジオンの言ったニュータイプ論が正しかったという理屈になってしまう。

「そうになったら、ダイクン派が息を吹き返してしまう。この状況でそれは不味い」

ギレンはそう考えつつ、例の第五次降下作戦を近々行うことに決める。

幸い、連邦の宇宙軍はしばらくは動けない。

なにしろ、ルナツーを攻略しようとした本隊は前述したように壊滅し、指揮官であるグリーン・ワイアット中將は捕虜となった。

しかも陽動部隊に至っては全滅し、陽動部隊の指揮官であるロドニー・カニンガン少將は戦死。

更にサイド1とサイド4に潜入していた連邦軍の特殊部隊だが、こちらは連邦艦隊の壊滅を知った後は大人しく投降した。

ここまで大打撃を受けた以上、どんなに早くとも次に連邦が宇宙に来るのは12月といったところだろう。

やるなら今だ。

「しかし・・・よくこんな面子を集めたもんだな」

ギレンはそう言いながら、セシリアから寄せられた第五次降下作戦に使われる兵力についての報告書を見る。

将校クラスはマハラジャ・カーンやダグラス・ローデンなどを始めとしたダイクン派で固められているが、兵士については傭兵や親連邦派の人間が集められていた。

よく50万人も集められたものだと思うが、スペースノイド（トルナリアン）の人口は90億人。

その気になれば、集められなくはない。

まあ、傭兵に関しては当然金を使うのだが、どうやらダイクン派は自身の財産を傭兵を雇うのに使っているらしく、ダイクン派の今作戦

に関する意気込みが伺える。

「連中、本気だな」

反ジオンの兵士や自身の財産を使って傭兵を集めたということは、どう考えても地球に降りて何かする気満々だ。

もしかしたらセシリアが懸念した「連邦と組む」という可能性はあながち冗談ではないのかもしれない。

「まあ、そうだとしても問題はない。連中に配るMSのOSには細工が施してあるからな」

ギレンもマハラジャを完全に信用していたわけではない。

あんな話をいきなり持ってきた以上、何かあるとは考えていたし、それが自分達に利があるものではなさそうなのはなんとなく察することが出来た。

だからこそ、今回の第五次降下作戦に使われるMSのOSに、ある細工を施したのだ。

「MSと言えば・・・もう少しでザムがロールアウトするな」

新鋭機ザム。

これは原作のゲルググを上回る機体であり、仮に原作0083の戦いに投入しても十分にやっていける（流石にZ時代となるとキツいが）だけの性能を持っている。

これが有れば、終戦まで連邦を圧倒することが可能だろう。

ただ、それは連邦のMS開発が原作通りであった場合であり、もし連邦も原作以上にMS開発が進んでいればザムでもギリギリになる。

「今のうちにザムの発展型、あるいは改良型を設計させておく必要がありそうだな」

ギレンの見立てでは、この戦争はおそらく原作と同じ12月には終わる。

あと4ヶ月しかない以上、後継機を一から作っている余裕はない。その為、ザムの発展型や改良型に集中してリソースを振り分けるべきだ。

「やれやれ。本当にやることは山積みだな」

この戦争が終わったら、総帥を辞任できないだろうか？  
そんなことを考えながら、ギレンは執務へと戻った。

UC0079年 8月6日 崩壊の足音

◇宇宙世紀0079年 8月6日 南米 ジャブロー

「では、君は講和に賛同という立場なのだな？レビル將軍」

ジャブローの一室。

そこではレビル將軍とある派閥に属する有力議員達が会合を行っていた。

上記の会話から聞けば分かると思うが、これは講和派による会合であり、本来ならここにレビルが居ることは場違いだ。

だが、それを自覚しながらも、レビルは敢えてこの会合に参加していた。

「はい」

レビルははっきりとそう答える。

そもそもレビル本人はこの戦争に乗り気ではなかった。

しかし、連邦軍の最高司令官という立場から、戦争に反対するわけにはいかず、ここまで講和に向けた活動を積極的には行ってこなかったのだが、先日の月号作戦失敗の責任を取らされる形でレビルは壊滅した宇宙軍司令長官に格下げ（降格ではない）させられてフットワークが軽くなった（なにしろ、率いるべき部下がほぼ壊滅状態）事で講和へと動き出すことにしたのだ。

「しかし、君は主戦派だったと思ったのだが」

「それは連邦軍の最高司令官という立場だったからです。軍の最高司令官が戦争に消極的だという態度を示す訳にはいきませんから」

これは当然の理屈だ。

なにしろ、最高司令官自らが『戦争を積極的にやる気はありません』などと言えば、全軍の士気が下がってしまうのだから。

しかし、それは軍人としての理屈なので、軍人ではない議員達にはあまり理解は得られず、自身の軍生命のためにこちらにすり寄ってきたかのように思えた。

「なるほど。で、具体的に君はどういった方法での講和を考えているのかね？」

レビルに冷たい目を向けながら、議員の1人がそう尋ねる。

今現在、国民の間では厭戦気分が広がっており、今この場に居る議員達が政権を握る日は近いが、それは連邦側の事情であって相手であるジオン軍がそれを呑んでくれるかどうかは分からない。

なにしろ、連邦はジオンの呼び掛けてきた講和に挑発じみた態度で応じてジオンの面目を潰しているのだ。

更に今回の月号作戦でもジオンは（かなりギリギリではあったが）大勝している。

余程の譲歩を行わなければ講和は行わないだろうと議員達は見なしていた。

「はい。手っ取り早い手段としてはアストラライア・ソム・ダイクン及びアルテイシア・ソム・ダイクンの両名をジオン側に引き渡すのが良いでしょう。そして、それを切っ掛けにして講和を打診すれば講和は十分可能かと」

レビルはそう主張する。

この戦争で連邦が大義名分として立てているのがアルテイシアだ。この戦争でこちらから講和を打診したとしても、彼女が連邦に居れば、ジオンとしては自分達の政権の基盤が覆される材料を連邦が持つことになるので、講和に頷く可能性が低くなってしまふ。

だからこそ、彼女をジオンに引き渡し、向こうの信頼を得た後、そ

れを切っ掛けにして講和を行うべきだとレビルは主張したのだ。

「なるほど、それは良いかもしれないな」

「だが、切っ掛けはそれで良いとしても、肝心の講和内容が不味ければジオンは領くまい。そのところはどうか考えているのだ？」

「サイド3の独立は致し方ないでしょう。サイド共栄圏については交渉次第になるかと。例えば、コロニーに掛かった建設費用をジオンが払う代わりに共栄圏の存在を認めるとか」

レビルはそう提案するが、議員達はその案にはかなり懐疑的だ。確かに戦争が始まった当初、つまり、ルナツー占領後であれば、その条件を出すことも可能だったかもしれない。

しかし、現在は開戦から7ヶ月も経ってしまっており、ジオンも戦費をかなり多く使っている。

当然、そんな状況で財政的余裕があるわけもないので、ジオンがその条件を領く可能性は限りなく低い。

「レビル將軍。流石にそれは——」

無理がある。

そう言おうとした議員の言葉は室内に響いたサイレンの音によって掻き消された。

「な、なんだ!？」

「緊急警報・・・ジャブローの中で何か起こったようだな」

レビルはそう言いながらも、何か嫌な予感がした。

レビルは戦闘に使えるレベルではないものの、ニュータイプ能力の

適性が備わっており、普通の人間よりは勘が良い。

そして、その勘はこう囁く。

「今すぐここから逃げろ、と。」

しかし、その勘を信じきれるかと言えば、それは別問題。

加えて、ここは戦場ではない安全な後方。

彼は自分の勘を完全に信じることができなかつた。

だからこそ、悲劇は起きる。

「!?」

レビルは何かを感じ取ったのか、咄嗟に上を向く。

——そして、その直後、突如として部屋天井の天井が崩れ落ち、凄まじい風と瓦礫の山が彼と和平派の議員達の身を襲った。



◇軌道上 『ペガサス』艦橋

「なんとか逃げられたな」

ランバ・ラル少佐はそう言いながら、無事にジャブローを脱出できなかったことに安堵する。

ジャブローに潜入してから1月半程が経ち、どうにかアルテイシア達を見つけることに成功したランバだったが、ここで問題になったのがやはり脱出方法だった。

当初は来た時と同じ海からの脱出が計画されていたのだが、潜入口の位置とアルテイシア達の居る距離が遠かったことから、それはほとんど不可能だったのだ。

なので、計画を変更し、宇宙船を盗んで宇宙に上がること考えたが、当然、そういった場所は警備が厳しいし、中に人員も居るのでその排除を考えると現実的ではない。

そこで考えたのが、中に居る乗員が居らず、宇宙に上がることの出来る竣工直前の艦船を盗み出すという案だった。

しかも、都合よく竣工直前の船の中にMS搭載を前提にしている艦（ランバは知らなかったが、ペガサス級強襲揚陸艦一番艦ペガサス）が居り、ランバはまんまとそれを盗み出し、こうして救助したアルテイシア達と共に脱出に成功していたのだ。

「上手く行きましたな」

ランバの副官であるグランブ大尉がそう言う。

「ああ、脱出の際に何人が失ってしまったがな」

「全滅しなかったただけましですよ。正直、最初はこの作戦が上手く行くとは思いませんでしたから」

「・・・確かにな」

「ところで、やっておいて今さら言うのもなんですが、良かったんですか？爆弾を設置した場所には民間人らしき人間が使う場所も有りましたが・・・」

実はランバ達は脱出する際に連邦軍を混乱させるため、ジャブロー内の幾つかの施設や部屋に爆弾を仕掛け、それを爆発させていた。

その中にはジャブロー内に逃げ込んだであろう要人が使用するであろう施設や部屋もあったのだが、幾ら連邦の要人が使用するとは言え、明らかに民間施設のそこを爆破させて良かったのか、グランブは今更ながら疑問に思っていたのだ。

「構わんよ。連中も殺される覚悟は出来ていただろうからな」

ランバは冷たくそう言い切った。

ランバも軍人としての自負はあり、ただの民間人が使う施設ならば爆破を行わなかっただろう。

しかし、ランバは既にジャブロー内の要人——特に政治家——を民間人とは見なししていなかった。

そもそも彼らがアルテイシア達を拐って宣戦布告など行わなければ、今回の戦争も起きなかったのだ。

その原因となった彼らをランバは許す気にはなれなかった。

「それに地球連邦では政治家は軍人の上位に立つ存在だ。別に奴らを殺しても、民間人を殺したことにはならんよ」

ランバはそう主張する。

言うまでもないことだが、地球連邦は民主主義だ。

文民統制が敷かれており、政治家は軍人の上位に立つ存在となっている。

しかし、軍人の上位に立つという立場だからこそ、政治家も軍人の一員と見なすというランバの一見無茶苦茶な理論も一応は成り立つのだ。

「・・・そうですね。そう考えることにしましょう。それはそうと、シロー達はいつ降ろしますか？」

グランブはそれ以上考えても仕方ないと考えたのか、話題を変えてシロー達を船から降ろすタイミングを尋ねる。

そう、実を言うとランバ達はアルテイシア達と共にジオン軍から抜けて姿を消すつもりだった。

このままジオンに戻れば、ザビ家を抜きに考えてもアルテイシア達が迫害されるのは免れないと考えていたからだ。

だが、流石に無関係のシロー達を巻き込むわけにはいかないし、もしこの事をシローに話して彼が自分達に着いていくなどと言ってしまえば、それより下の下士官や兵が抜きたいなどは言い出しづらくなってしまう。

よって、この話はシロー達には内緒で進められていた。

「そうだな。確かシローの故郷はサイド2だったから、そこで降ろそう」

「分かりました。それでキャスバル様には？」

「後で連絡する。こうなった以上、キャスバル様もジオン軍を抜けることを決めるだろうし、ドズル閣下も許してくれるだろう」

なにしろ、キャスバル・レム・ダイクンという存在はザビ家の人間

達にとっては爆弾も同然だ。

何故か暗殺などの行為は一切行わなかったが、これからもそうであるという保証はない。

そうであれば、軍を抜けさせて何処かで静かに暮らした方が良く、それくらいならば許してくれるだろうとランバは考えていた。

「で、サイド2の後は何処に向かいますか？」

「サイド6やフォン・ブラウンというのもありだが、あそこは戦場になりやすい位置にあるし、ピリピリしているから静かに暮らせんだろう。なので、サイド7に向かう。確かあそこには建設用のコロニーが有った筈だ。ジオンからも遠く離れているし、近くにルナツーがあるから連邦も来ない。正に絶好な場所だ」

ランバはそう考え、サイド7でアルテイシアや自分に着いてきてくれる部下達と共に静かに暮らすことに思いを馳せる。

——だが、彼は知らなかった。

そこで連邦がモビルスーツ開発を行っており、1ヶ月あまり後にそこが戦場と化すということを。

UC0079年 8月7日 青い狸の来訪

◇宇宙世紀0079年 8月7日 ルナツー

「えっ？休暇ですか？」

シーマ大佐に呼び出されたのび太は、彼女から突然言い渡された休暇という言葉に首を傾げた。

あのルナツーの戦いから6日。

のび太はルナツー内のジオン軍人の間で、半ば英雄的な扱いになっていた。

当然だろう。

彼らからすれば、不利な戦況を一気に打開してくれた存在なのだから。

のび太はその扱いにくすぐったい思いを感じながらも、不快には思わなかった。

こういう事は過去の大冒険の時にも有ったからだ。

そして、のび太は今日も訓練に励もうとしていたのだが、その前にシーマから呼び出されて休暇を言い渡されることになっていたという訳だった。

「そうだよ。聞けばあんた。今日、誕生日だそうだね？」

「あっ」

そう言えば、そうだった。

シーマに言われて、ようやく今日が自分の誕生日であったことを思い出す。

（そっか。今日は誕生日か。そう言えば、誕生日を迎える前日にこの世界に来ちやっただっけ？）

そう、のび太は元の世界で11歳の誕生日を迎える前日にこの世界にきた。

ということは、11歳の誕生日はこの世界で迎えたということになる。

のび太はそれに感慨深さを感じていた。

「・・・そうですね。今日で11歳の誕生日となりますね」

「11、か」

その年齢の幼さに、シーマは少し哀れみを込めた視線を向ける。

シーマはのび太が何故この戦争に参加したのかは知らない。

だが、本人が選んだものであることは目を見れば分かった。

しかし、戦争というのは本来子供が来て良い場所ではないのだ。

「でも、良いんですか？言っちゃなんですけど、基地の人達は毎日忙しそうにしていますか・・・」

先日のルナツー防衛戦ではルナツーのジオン軍は全体の2割の戦力を失った。

もともと、あの連邦の攻勢の規模を考えれば、損害が2割というのは逆に少なすぎるくらいだが、これはシーマ大佐が有能で簡単に戦線の突破を許さなかったことと、戦線が崩壊する前にのび太のあの攻撃が連邦の艦隊を襲ったからであり、もしどちらかが欠けていればルナツーはとっくに陥落していただろう。

だが、2割と言えど損害が大きいことに変わりはなく、現在はその建て直しを行っている最中であり、のび太は誕生日とはいえ、そんな状況で休暇を取ることに引け目を感じていた。

「まあ、本来なら他の将兵の目もある手前、ダメなんだけどね。こつち

にもこの前、あんたが挙げた戦果を取り上げてしまった後ろめたさがあるし、今日だけは特別だよ」

「別に気にしなくても良いんですけど……」

「そういうわけにもいかないよ。信賞必罰はきっちりやらないとね。まあ、何か言ってくる奴が居たら言いな。私がいじめてやるから」

「……分かりました。じゃあ、今日だけ休ませて貰います」

「ああ。それとメイ・カーウィン技術少尉が自分の部屋でお前の誕生日を祝いたって言っていたよ。後で行ってやんな」

「はい」

「では、解散。下がって良い」

「失礼します」

そう言つてのび太は敬礼をし、シーマの部屋を出ていこうとする。だが、のび太がドアへ向かう途中で、シーマの副官であるデトローフ・コッセル少佐が部屋へと入ってきた。

「何事だい？」

「はっ。ルナツの基地内を彷徨っていた青い狸を捕らえました」

「青い狸？」

シーマは首を傾げる。

それはそうだろう。

青い狸なんて存在が普通は居るわけないのだから。

(も、もしかして……)

だが、のび太の方は違った。

その青い狸と呼ばれる存在に物凄く心当たりがあったのだ。

そして――

「僕は狸じゃない!!!」

運ばれてきた檻に入れられながら、そう叫んでいたのは、紛れもないのび太の親友である猫型ロボット――ドラえもんだった。





「ふん！僕は22世紀の最高級猫型ロボットだぞ！！青い狸じゃない！！」

あれからどうにか事情を（少々の嘘を交えたが）説明してドラえもんは釈放されたのだが、ドラえもんは青い狸と間違えられたのが不快なのか、未だに憤慨している。

まあ、何時ものことなので、のび太はあまり気にしていなかったが。ちなみにこの世界は前述したように西暦は21世紀で終わっているため、22世紀は存在しないのだが、その事をドラえもんは知らない。

「でも、驚いたよ。ドラえもんがこの世界に来てるなんて」

ルナツー内の通路をドラえもんと共に歩きながら、のび太はそう言った。

「うん。なんか気がついたら、ここに居てね。それでここ何処なの？のび太くん」

ドラえもんはそう言っただけで現在地を尋ねる。

なにしろ、いきなり訳の分からぬままここに居て、居場所を確かめようと道具を出そうとした時に基地内のジオン兵に見つかって拘束されてしまったのだ。

幾らドラえもんでも道具もなしに現在地を探るといった真似は出来ない（もつとも、無重力地帯が有ることから、宇宙船か、かつてのコーヤコーヤのような重力が小さい惑星であるということは察していたが）。

「ここはルナツー。まあ、一言で言っただけでいえば、宇宙要塞かな」

「宇宙要塞？」

「そう。元々は地球連邦軍っていう軍隊の軍事基地だったらいいんだけど、僕がこの世界に来る少し前にシーマさん達が占領したみたいだよ」

「地球連邦・・・」

聞いたことのない名前だ。

ドラえもんはそう思った。

名前からするに、地球の組織であるということは明らかだが、そんな組織は22世紀でもない。

ということは、この世界はドラえもん達が居た世界ではない平行世界か、あるいは偶然地球という名前を使っている異星ということになる。

そして、何よりも気になるのは――

「さつき占領って言うていたけど、もしかしてここって戦争をやっているの?」

「うん。同じ地球人同士でね。まあ、ジオンの人達はスペースノイドとアースノイドの戦いだとか言うてるけど」

のび太はそう説明する。

非常にややこしい話なのだが、のび太の世界の地球人、宇宙人としての世界の地球人、宇宙人は定義が異なる。

例えば、のび太の世界では地球に住んでいる人、あるいは地球から宇宙に出てそこに住んでいる人も地球人と呼び、宇宙人とは異星人のことを表す。

その為、のび太から見れば、この戦いは地球人同士の戦いとなっている。

だが、この世界では地球人と呼ばれるのはアースノイドと言われる

地球に住んでいる人々のみであり、宇宙人とは地球以外に住んでいる人々、すなわちスペースノイドやルナリアンを表しており（ちなみに宇宙人という言い方はスペースノイドには不評）、地球人同士の戦いとは見ておらず、それぞれの陣営が全く違う存在として認識しているのが現状だった。

「あと独立がどうか言ってたね」

「独立、か」

そう言われてほしいドラえもんは察した。

おそらく、この基地に居る人間は元々その地球連邦という組織の一部分であり、何らかの事情で独立戦争を仕掛けたのだろう、と。

その推測は前者については正しいが、後者については間違っている。

確かに原作の世界ならば仕掛けたのがジオンの方である以上、その推測は全面的に合っているのだが、この世界では連邦の宣戦布告同然な宣言によって戦争は始まってしまったので、先制攻撃を行ったのはジオンなもの、仕掛けたのは連邦の方というややこしい事情があったのだ。

まあ、それを加味したとしても、ドラえもんの意見は変わらなかつただろう。

なにしろ、ドラえもんはどっちも自分が正しいと思っているからこそ戦争というのは起きるのだという持論を持っていたのだから。

そして、これは合っている。

例えば、原作のジオンが行った一年戦争。

これはジオンが開戦初頭に大量虐殺を行ったがゆえにジオンを全面的に責めるという見方もあるが、そもそもジオンを産み出した原因は元々は連邦にあるので、連邦の自業自得という見方も出来るのだ。

要は戦争というものは、どんな時も両方に非があるのが現実であり、その非を互いに突くことによって“正義”というものを成り立た

せ、勝ち負けによってどちらが善でどちらが悪だったのかが決まる（まあ、中には引き分け、あるいはそれも同然な辛勝や惜敗などによって決まらない場合もあるが）。

「でも、なんでそんな戦争にのび太くんは参加したの？」

ドラえもんはふとそんなことを聞いた。

見た限りだが、このジオンという国は追い詰められている様子はない。

ということとは、のび太が強制的に徴兵されたという可能性は低く（そもそも身分が分からない者を徴兵するとは思えないが）、のび太が自分で参加した可能性が高いということになる。

「ああ・・・それは・・・まあ、後で説明するよ。と言うより、これから行く場所に答えがあると思う」

理由が理由だけにドラえもんの問いの答えを言い出しづらいのび太はそう言って恥ずかしさを誤魔化すように先を急ぐ。

そして、ドラえもんはその様子に首を傾げながらも、メイの部屋へと向かうのび太の後についていった。

UC0079年 8月11日 拠点移動

◇宇宙世紀0079年 8月11日 南米 ジャブロー

「今日は集まって貰って感謝する」

ジョン・コーウエン少将はそう言って、集まって貰ったブレックス・フォーラー大佐を始めとした宇宙軍の幕僚達に感謝の言葉を述べる。

「だが、そんな君たちに残念なことを言わねばならない。はつきり言って我々の今の状況は非常に不味い」

コーウエンは先程とは一転して厳しい顔でそう言ったが、それは事実だった。

開戦以来、宇宙軍は大打撃を受け続けている。

艦艇面もそうだが、人的被害においてもティアンム中将、カニンガン少将が戦死、ワイアット中将が捕虜となり、つい5日前にはジオンの特殊部隊（ランバ・ラル隊のこと）の破壊工作によってレビル大将が重症を負って意識不明という状態になってしまった。

今はコーウエン少将が指揮を取っているが、大将の代理が中将ではなく少将の時点で、連邦宇宙軍の将官クラスの消耗が相当なものになっているのが分かる。

しかも、これだけの損害を出しながらなんら目立った成果を挙げているいない為に、宇宙軍は連邦軍の中でかなり肩身の狭い思いをすることになっていった。

「しかも最近では陸軍の連中は我々の予算の削減を叫んでいる。そして、我々にこれを完全に拒否するという事はもう出来ない」

そう、宇宙軍とは違い、陸軍はオセアニア、アフリカ奪還といった目立った戦果を挙げており、彼らは自分達の予算を増額し、役立たず

である宇宙軍の予算を削減するように主張していたのだ。

そして、宇宙軍としては悔しいことに、これに反論するだけの材料は存在しない。

なにしろ、明確な戦果を挙げていないというのは事実だったのだから。

結局、完全な削減はなかったものの、これによって宇宙軍の予算は月号作戦前の8割にまで減らされてしまい、宇宙への反攻が今年中に行えないのは確実になってしまった。

「・・・V作戦はどうなるのですか？」

ブレックスは気になったことをコーウエンに聞く。

V作戦。

それは宇宙軍が主導で行っているMS開発計画だ。

仮にそれが取り上げられるか、中止されてしまえば連邦はジオンに勝つことは絶対に不可能になる。

少なくとも、宇宙軍の上層部はそうのように考えており、その高官の1人としてブレックスもその計画の行方が気になっていた。

「安心したまえ。V作戦は継続だ。そして、なにぶんやっている場所が場所だからな。宇宙軍以外に行うことは出来んよ」

「そうですか。それは安心ですな」

「ああ。だが、今、我々が最大の問題にしているのは人だよ。これが無ければジオンへの反攻など不可能だ」

そう、コーウエン少将が言った通り、現在、連邦が最大の問題にしているのは人だった。

基本的に宇宙軍の兵隊というのはスペースノイドが多い。

これは彼らが宇宙という空間に慣れているからだが、現在はそのス

ペースノイドの兵士が減っている状態となっていた。

原作では4つのサイド（1、2、4、5）が壊滅したことで、生き残ったそれらのサイドに居たスペースノイドは反ジオンを掲げて連邦側についたが、この世界では占領されているだけであるし、なまじ家族が人質同然になっていたので、それがプレツシャーとなり、原作と違って連邦にスペースノイドの兵隊が集う事はなく、更には元から居る連邦のスペースノイドの士気を下げていたのだ。

無論、宇宙軍にアースノイドの兵隊も居ないわけではないが、スペースノイドと比べれば少ないし、そもそも宇宙では宇宙に慣れているスペースノイドの方がよく戦えるケースが多く、はつきり言っているアースノイドではよっぽどの数を揃えないと代用にはならないというのがコーウエン達の意見だった。

そして、その貴重なスペースノイドの兵士もルウム沖会戦や月号作戦などでバタバタと死んでおり、連邦宇宙軍は将官クラスどころか、兵単位でも絶賛人手不足という笑えない状況になっている。

「人ですか。難しい問題ですな」

「ああ、本当に厄介な問題だよ」

幕僚の中の1人の発言に、コーウエン少将は吐き捨てるようにそう言くと、続けて自嘲ぎみにこう話す。

「だが、もつと厄介な問題がある。聞きたいか？」

「・・・聞きたくはないですが、嫌でも聞かなくてはならないのでしょうか？」

「そういうことだ。まあ、簡潔に言おう。ジャブローの位置がバレた」

コーウエンがそれを言った途端、周囲の空気が凍り付く。

その問題はみんな分かっていたのだ。

なにしろ、ジオンの特殊部隊が破壊工作をすることが出来たということは、ジャブローの位置がバレていたという可能性しかあり得ない。

なぜ今すぐ攻めて来ないかは知らないが、位置がバレた以上、敵は好きなタイミングでここを攻めることが出来る。

しかし、今、コーウエンに言われるまで、ここに居る幕僚達は敢えてその事実から目を逸らしていた。

なにしろ、このジャブローを落とされるということは連邦の負けを意味するのだから。

要は現実逃避がしたかったのだ。

「困ったことに政府の連中は俺たち以上に現実を見ていなくてな。この前の破壊工作で和平派の議員連中が死んだことを良いことに、徹底抗戦を訴えてる」

そう、今、連邦は先日の破壊工作により和平派議員が死亡してしまい、強硬派議員が生き残るという最悪な展開を迎えていた。

当然、こうなれば政府が徹底抗戦を唱えるようになるのは至極当然のものだったのだが、問題だったのは閣僚達が願としてジャブローを動かさなかったことだ。

先日、破壊工作が有ったにも関わらず。

まあ、戦争をやっている今の時代ではジャブロー以上に安全なところもないのは確かであるが、せめて政府機能が各地に分散してくれば、少なくとも「ジャブローが落ちたら終わり」という展開は免れる。

しかし、もはや何処が戦場になるか分からない地上に行こうという勇気があるものは政治家には居らず、それどころか先日、コーウエンがそのようなことを具申した時は『ジャブローは堅牢な地下要塞だ。ジオンが来ても落ちはしない』と返される始末だった。

もつとも、堅牢な地下要塞というのは合ってはいるのだが、人が



作った施設である以上、絶対に落ちないという事はないのだ。

そこら辺の現実を政治家達は見ていなかった。

そう、現実が見えていないのではなく、見ていないのだ。

「では、戦争はまだ続くか？」

ブレックスはそれを聞いて複雑な表情をする。

宇宙軍は人員の消耗、予算の削減などでもうボロボロだ。

出来ることなら、ここで講和なり休戦なりしてゆつくりと戦力を回復したい。

だが、ジオンが敵であり、政治家が戦えと言う以上は戦わなければならぬという現実にはブレックスは複雑な想いを抱いていた。

「ああ、そうだ。まあ、ジオンが今すぐジャブローを落とすのであれば話は違うのだろうが、そうでない限りは戦争は続く。そこで1つ提案があるのだが、我々の本部をジャブローから移してみないか？」

そのコーウエンの言葉に、幕僚達はざわめく。

まさかそのような大胆なことを言ってくるとは思わなかったからだ。

「そのような事が可能なのですか？」

「可能だ。先日、大統領に直談判してOKを貰ったからな。・・・驚くほどあっさりとな」

最後の部分の言葉に首を傾げる幕僚達であったが、政治家も兼任しているブレックスにはその言葉の意味がよく分かった。

おそらく、上は自分達宇宙軍にはほとんど期待しなくなっているのだ。

だからこそ、簡単にジャブローから手放すことを許している。

だが、それは同時に宇宙軍にとっては好都合でもあった。  
なにしろ、ジャブローから離れられるということは、政治家が自分達の行動にほとんど干渉してこなくなるということでもあるのだから。

「賛成ですな。なにより、政治家の楔から抜けられるところが良い」

コーウエンの提案にブレックスはそう言って賛同する。

そして、それに異論を挟む者は居ない。

皆、政治家の介入を鬱陶しいと思っていたのだ。

シビリアンコントロールからは半ば外れるが、この状況下でそんな小さいことを気にする馬鹿が居るわけがなかった。

「それで次の拠点は何処となるんです?」

「オーストラリアのシドニーにしようと考えている」

「なるほど。あそこなら設備も整っていますから良いかもしれませんな。それでレビル將軍はどういたしますか?」

「このままジャブローに残す。ここが一番病院設備が整っているからな。まあ、目を覚ました時のために連絡員は残すがな」

「では、そうしましょう。・・・しかし、上に期待されていないとなると、来年度の我々の予算は0かもしれませんな」

「来年度があれば、な」

そんな何処かで聞いたようなジョークを言い合いながら、コーウエンとブレックスは幕僚達と共に拠点移動のための会議を進める。

——だが、コーウエンは知らない。

この時の拠点移動が後に起こるある騒乱を助長してしまうということ。

UC0079年 8月14日 情けない思い

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 8月14日 ルナツー

「じゃあね。のび太」

そう言っつてメイ・カーウィン技術少尉は3日後に行われる第五次降下作戦に参加するため、ルナツーから発進する宇宙船へと乗り込んでいく。

それを見ていたドラえもんとのび太の2人だったが、ふとドラえもんはこのようなことをのび太に尋ねる。

「ねえ、良かったの？あの子と離れて」

「うん、またきつと会えるからね」

ドラえもんの問いにのび太はそう返答する。

「でも、戦争だからもしかしたら死んじゃうかもしれないよ？」

「分かってるよ。でも、戦争している以上は何処に居たって危険なのは変わらない。おまけに僕とメイじゃ立場が違うからね。何時も張り付いている訳にはいかないよ」

そう、のび太とメイの立場はパイロットと整備員であり、戦う場所は前線と後方でそれぞれ違うため、張り付いて守ることは出来ない。いや、両者が全く同じ立場だったとしても守れるかどうかはかなり怪しい。

現にのび太は同じパイロットだったタリア・ロウランを目の前で失っているのだから。

あれがもしメイだったら？

そんなことを考えただけで、のび太は恐ろしい思いを抱いてしま  
う。

そうなるくらいだったら、自分の目の前に居てくれない方が良い。

(くそっ！情けない!!)

のび太はそんな情けない言い訳じみた考え方をしている自分に対  
して内心で悪態をつく。

本当は分かっている。

これが臆病な考えであることくらいは。

ニュータイプ部隊は基本的にギレン・ザビの直轄であり、勝手な配  
置転換は許可されていない。

だからこそ、メイに着いていつて第五次降下作戦に参加することは  
出来ないが、自分がメイの引き留めを強く主張すればメイをルナツー  
に留めることくらいはやろうと思えば出来た筈なのだ。

そのような我が儘が許されて良いくらいの戦果をのび太は挙げて  
いたのだから。

だが、のび太はそれをしなかった。

タリアを失った時に芽生えてしまった自分の臆病な心ゆえに。

「・・・そっか」

そんな自分でも気づかないうちに悔しげな顔をしているのび太に、  
ドラえもんはこれ以上その事に対してしつこく言うのを止めた。

こういう時は多少の時間を置いて思考を落ち着かせた方が良く  
考えたからだ。

もつとも、それでもダメであれば、荒療治で説教をするつもりだっ  
たが。

「・・・そう言えば、ドラえもん。プチモビのパイロットをするつ  
て話は本当？」

のび太は自分の情けない思考を振り払うように、半ば無理矢理話題を変える。

「ああ、うん。戦争に参加するつもりはないけど、修復作業くらいは手伝っても良いかなって思って。以前にザンダクロスの時に使ったサイコントローラーもまだ残っていたし」

「あのロボットを思い通りに動かせる奴？」

「そうだよ。しかし、驚いたね。のび太くんやこの人たちがモバイルスーツっていうのは。明らかにザンダクロスよりも大きい」

そう、実を言うとザンダクロスはドラえもん達が前に居た世界では巨大ロボットとされているが、その全長は14、4メートルと意外に小さく、これは後に登場する第二期MSの小型モバイルスーツ（15メートル）を下回る大きさだ。

ちなみにドラえもん達は当然知らないが、ザンダクロスは機動戦士Zガンダムに登場する百式（クワトロが乗っていた機体）がモデルとなっていたりする。

「そうだね。加えて言うなら戦闘能力は明らかにモバイルスーツの方が上だよ」

のび太はそう言うが、ザンダクロスは元々鉄人兵団の中でも作業用ロボットであり、この世界で言うならモバイルワーカーやプチモビに後付けで兵器を取り付けたような物だ。

最初から戦闘を想定して設計されたモバイルスーツに勝てるわけがない。

まあ、とは言っても絶対に撃破できないという訳ではなく、あの高層ビルをも一撃で倒壊させられる目から出るビームが直撃すればそ

れなりにヤバイかもしれないが。

加えて、ザンダクロスが作業用ということはもちろん、戦闘用の巨大ロボットも鉄人兵団の中に存在すると思われるので、それと比べればモビルスーツが何処まで通用するかは未知数なのだが、それを考えても仕方ないだろう。

なにしろ、メカトピアの歴史はしずかとリルルの手によって変えられてしまったので、その際に戦闘用巨大ロボットも消滅してしまったであろうからだ。

「そうなんだ」

「うん。まあ、ピッポを悪く言う訳じゃないけど、あいつが居たら驚いたんじゃないかな」

のび太は前の世界で生まれ変わって天使のようになっていたであろうかつての友人に思いを馳せる。

歴史が変わってしまった以上、当然の事ながらのび太達と出会った思い出も消滅しているのだ、おそらく本人達はのび太達の事を何も覚えていないだろう。

だが、メカトピアの歴史が変わってリルル達が記憶を失っても、地球に居るのび太達の記憶は変わらない。

故に、忘れない。

のび太達が忘れれば、あの身を犠牲にして地球の事を助けてくれたリルル達の存在は完全に消滅してしまうであろうから。

「・・・のび太君」

「ごめんね、暗い話をしちゃって」

「いや、良いんだよ。時には過去を振り返ることも必要だからね。それにあのリルル達の事は絶対に忘れてはいけない記憶だしね」

「うん、本当に」

ドラえものの言葉にのび太はそう返答した。

◇宇宙船 船内

「ねえ、良かったの？」

ユウキ・ナカサト伍長は偶然にも先程、ドラえもんがのび太にした質問と同じ質問をメイに対して行う。

「何が？」

「ルナツーに残らなくて。心配なんでしょう？あの子の事が」

「・・・」

ユウキの言葉に、メイは沈黙を以て返す。

それを肯定のサインだと判断したユウキは更にこう言った。



「その気になれば残れたんじゃない？あくまでメイに来たのは要請だったんだし」

そう、実は第五次降下作戦の準備の過程で、マハラジャ・カーン准将はルナツに居たダイクン派の有力者の一人でもあるメイに招集の通告を出していた。

しかし、メイの所属はルナツとなっていて、ルナツは戦力再建の途上であり、司令官であるシーマ大佐はメイという有力な戦力が引き抜かれるのを渋っていた上に、ギレンから無理に他から引き抜くなど釘を刺されてもいたために命令は出来ず、結局、メイに出されたのは招集の要請のみとなっていたのだ。

そして、命令とは違い、一応、要請ならば拒否は可能だ。

まあ、要請した相手の心象が悪くなることは確実であるが、少なくとも命令違反として罰せられることはない。

しかし、メイは大人しく受け入れ、わざわざ危険地帯となる地球に赴こうとしている。

ユウキにはその理由がよく分からなかった。

「・・・そうだね。もしかしたら残ることも出来たのかもしれないね」

「だったら、なんで？」

「カーン准将は私の知り合いだから。それに――」

「それに？」

「ダイクン派の私が居ると、ノビタの立場が悪くなるからだよ」

ユウキの疑問にメイはそう答える。

そして、これは事実だ。

実際、サイド3ではダイクン派は白い目で見られており、メイの家もダイクン派なので、そんな人物と仲良くしていればのび太が白い目で見られる可能性がある。

だが、それはあくまで理由の1つにすぎないという事はそれなりに付き合いの深いユウキもよく理解していた。

「それだけじゃないんでしょう?」

「・・・」

「まあ、メイがあの子にどういう感情を抱いているのかは正確には分からないけど、戦争をやっている以上はさつき会ったのが今生の別れっていうことも有るんだよ? いや、もしかしたら、敵味方で対立するなんて事になるかも」

「えっ? それどういうことなの?」

同じ味方である筈ののび太と敵味方で対立する可能性がある。

そのあまりに穏やかでない不穏な話に、メイはユウキに思わず尋ねた。

「うん。この前の通信でね。ソロモンに居るケン隊長とダグラス大佐から聞いた話っていうのを伝えてきたんだ。このまま戦争がジオン勝利で終わればザビ派とダイクン派で内紛が起こるかもしれないって」

「それは・・・」

あり得そうな話だ。

メイはそう思ってしまった。

もうザビ派とダイクン派の仲は修復不可能なところまで来ている

のはメイも知っている。

それでも両者が今、曲がりなりにも手を組んでいるのは、ジオンの独立達成という目標が共通しているのと連邦という敵が居るからだ。

これは逆に言えば、その2つが無くなってしまうえば、ザビ派とダイクン派の対立は決定的となる事を意味している。

「ダグラス大佐はメイがザビ家の手に落ちる事を懸念していたけど、あの子は確かザビ家に伝があるって前にメイが言ってたでしょ？ だったら、それを使ってメイはザビ派につくことも可能だったんじゃない・・・」

「うん、そうだね。でも、今さら言っても仕方ないよ。それにのび太に頼ることで私が絶対安全であるという保証も成り立つ訳じゃないから」

そう、幾らのび太がザビ家に伝があつたとしても、それでメイの身の保証が成り立つわけではなく、ザビ家がメイを脅威と思つて何らかの手段で処分しようとすればそれまでなのだ。

もつとも、のび太がメイに強く残つて欲しいと言えば、メイの考えも少しは変わったのかもしれないが、先日 của タリアを失つた一件でのび太の精神も消耗しており、のび太の方にそんなことを言い出す気力は無かつた。

加えて、ザビ家の方はメイがのび太と共に歩んでいくことも計算済みであり、それに手出しするつもりは全く無かつたのだが、そんなことをメイが知るよしもない。

「あつ、それと気になつていたんだけど、ユウキはどうしてそんなことが分かつているのにこの第五次降下作戦に参加するの?」

「そ、それは・・・」

ユウキはそこで言葉を詰まらせる。  
よく見れば、顔も若干赤くなっている。  
メイはその顔を見てニヤリと笑う。

「あー！もしかして、ケン少尉の事を——」

「わー！ち、ちよつとそれだけは言わないで!!」

真つ赤になりながらそう言うユウキ。

そんな様子に、メイは親友の恋を応援したいと思うのと同時に、ケ  
ンが既婚者であることを残念に思った。

U C 0 0 7 9 年 8 月 1 7 日 第五次降下作戦

◇宇宙世紀0079年 8月17日 軌道上 巡洋艦『キシナミ』  
艦橋

「・・・」

マハラジャ・カーン准将は厳しい顔をしながら、巡洋艦のメインスクリーンに移される戦況図を見つめていた。

今のところ、作戦は順調だ。

第五次降下作戦の降下ポイントは東アジア、具体的には満州、ペキンを中心とした華東北部、旧モンゴル東部であったが、いずれも連邦軍の抵抗は少なく、無事に部隊の展開を完了させている。

あとは橋頭堡を築き、頃合いを見計らってジオン正統自治体に合流するだけだ。

自分達の思惑に感ずいている様子が有りながらも、あっさりとその作戦の許可を出したギレン・ザビが何を考えているのかは知らないが連邦軍や自治体に合流してしまえばこっちのものであり、ジオンも容易に手出しはしにくくなる。

あとは自分達が持っているMS技術を連邦に提供し、ジオン公国を降伏へと追い込んでもらう。

そうして独立すれば、ダイクン派の悲願は叶う。

まあ、多少は連邦の干渉を受けるだろうが、そこは上に立つ者の手腕次第だ。

・・・だが、懸念事項は確かにあった。

(何時になったら、アルテイシア様のお顔を拝謁することが出来るのだ?)

事前の連邦との約束では、この降下開始直後辺りに秘匿回線を使って自治体の代表であるアルテイシアと会話を交わせるということに

なっていた。

ところが、約束の時間になると代理だという者が出てきて、アルテイシアは今体調が優れないので通信には出られないと言ってきたのだ。

それなら仕方ないとも思うのだが、マハラジャはどうも嫌な予感があった。

(もしかして、アルテイシア様に何かあったのではないか?)

マハラジャはアルテイシアの身に何か起こったのではないかと推測する。

そして、その推測はある意味合っていたのだが、さすがのマハラジャもランバ・ラルによって彼女が救出されているとは思っていなかった。

何故なら、ランバ・ラルとマハラジャは同じダイクン派でも険悪な関係になっていたし、静かに暮らしていたという思いがあったので、同じダイクン派には何も通達していなかったからだ。

ついでに言えば、そもそもマハラジャはこの作戦があったことすら知らないし、仮に知っていたとしても、入り口の分からない巨大要塞の入口をほぼ自力で見つけ、そこから連邦軍の将兵がわんさか居るなかで何処に居るかも分からない人物を独自に探しだし、更に救出して脱出することに成功するなどとは誰も思わないだろう。

なにしろ、命令したドズルですら、その報を聞いた時は『マジかよ』という感じに驚いていたのだから。

(いや、こんなことを今考えても仕方がない。今は作戦を成功させることに集中しよう)

マハラジャは若干の不安を抱えながらも、作戦指揮を継続する。

既に彼のシナリオは根本から破壊され、完全にギレンの掌で踊らされる事になっているとは知りもせず。

◇サイド3 ズムシテイ 総帥府

「やれやれマハラジャ准将もなんだか可哀想になつてきたな」

総帥府の一室で第五次降下作戦の報告をセシリアから聞いたギレンはそのような感想を抱く。

「可哀想、ですか？」

「ああ。本人は地球に降りさえすればこちらの影響を抜け出すことが出来ると考えているようだが、奴等に渡したMS用のOSが我々によつて細工されている以上、我々の掌で踊らされるしか選択肢が無くなっていくからな。更にそこに来て象徴の喪失だ。これが可哀想でなくて、なんと表現する？」

そう、前述したようにマハラジャに渡したMS用のOSはギレンの手によって2つの細工が行われている。

1つは遠隔式の緊急停止プログラム。

これを使うことで、万が一、マハラジャが反乱を起こしたときに彼らのMSを機能停止状態にすることが出来る。

つまり、動かないただの的と化すということだ。

もう1つは浸透プログラム。

これは特定のコンピューター以外でOSを起動させた際に発動する浸透型のコンピューターウイルスであり、浸透したタイミングでこちらがウイルスをコントロールすることで、連邦のコンピューターシステムを大混乱に陥れることが出来る。

まあ、だからと言ってマハラジャも馬鹿ではない。

敵対者である自分達にMSを配ったということは、何かMSに仕掛けがあるのではないかという疑惑を抱いているだろうし、OSの調査も行うだろう。

だが、このウイルスはプログラムの中に巧妙に隠してあるので、それを見つけるには時間がかかり掛かるのだ。

ちなみにこのウイルスを仕込んだ制作者は、ウイルスの事を知らない状態で調査すれば見つけるのに半年は掛かると太鼓判を押している。

その半年の間に反乱を起こせば良し、起こさなかったとしてもその時には既に戦争は終結しているので、それ以後の反乱はタイミング遅れとなってしまう、ジオンがわざわざ手を下さなくても、連邦によってあつという間に鎮圧されるだろう。

そして、更に象徴であるアルテイシアは既に連邦の手を離れている。

何処に行ったのかは知らないが、わざわざ救助したのに今さら連邦に戻るなどということはあり得ないし、一部とはいえランバ・ラル隊（と何時の間にか居なくなっていたシャア）が護衛についているのだ。

連邦に拐われる可能性はもう無くなったと言っても良い。

しかも、その象徴が既にあることをマハラジャは知らないのだ。



最後のアルテイシアの部分だけは少々計算外であったが、概ねギレンの思惑通り、マハラジャはギレンの掌で踊らされている状態になっていた。

「それはそうですが・・・」

「どうかしたのかね？」

「いえ、あまりにも上手く行きすぎな気がしまして」

セシリアはあまりにも事態が都合よく行きすぎたせいか、却って不安を感じており、何かとんでもない事態が起きるのではないかと内心で思ってしまったのだ。

「まあ、それはそうだが、気にしすぎだろう。仮に予想の斜め上の行く事態が起こったとしても、ジオン本国には何も影響はない」

ギレンはキツパリとそう言った。

確かにギレンもセシリア同様にあまりに事態が上手く行きすぎていることに多少の不安を覚えてはいる。

なにしろ、ここは主人公クラスの人間が不遇な扱いを受けたり、名前ありのキャラがバンバン死んでいくガンダム世界。

ちよつとの油断が死に繋がったりするので、決して油断はできないのだ。

だが、その事を考慮しても、今回は流石に何も起きないだろうとギレンは見なしている。

なにしろ、連邦の宇宙軍は大きく動くどころか、しばらく宇宙にすら出てこれない状態。

ジオン国内の不穏分子であったダイクン派も今回行われる第五次降下作戦でほぼ全員が地球に降りる筈なので、クーデターが起きる可能性は全くと言ってても良いほど無い。

唯一、気になるのはキャスバルの動向だが、こちらはどうか（転生者達にとつてはある意味不幸なことに）ララアと出会ってしまったらしいが、そのララアはまだ死んでいないし、彼自身はもうジオンとは手を切っている。

加えて、母親も無事なためにザビ家に対する復讐心も無く、このまま終戦まで大人しくして貰えば特に問題はない。

他にもギレンの頭の中では考えうる限りの不測の事態が考えられたが、そのいずれもが重力戦線のものであり、どう頑張ってもこのサイド3に影響を及ぼせそうなものはなく、これ以上は考えるだけ無駄だとギレンは思っていた。

（他の懸念と言えばドラえもん達だが・・・まあ、こちらはこつちから何かしなければ問題はあまい）

ギレンはそう考える。

ドラえもん達が大冒険で敵を撃退するのは、毎度、自分や知り合った友人が危機に陥った時や助けを求めている時であるが、逆に言えばそうでもなければ動かないのだ。

少なくとも、何処ぞの鋼鉄の弓兵のように「正義の味方ごっこ」をするために戦争に介入するということはない。

しかし、そこまで考えたところであることに気づく。

（あれ？待てよ。確かのび太がこの戦争に介入した理由って・・・）

そこでギレンはセシリアにあることを尋ねる。

「セシリア、メイ・カーウィン技術少尉はいま何処に居るか分かるか？」

「メイ・カーウィン？あのダイクン派のカーウィン議員の一人娘ですか？」

「そうだ」

「確か第五次降下作戦に参加するために今は軌道上の宇宙船に乗船している」と記憶していますが・・・いえ、もう降下しているかもしれない」

「・・・」

それを聞いたギレンは懸念事項が一つ増えた事を確信し、内心で頭を抱えた。

UC0079年 8月21日 嫌悪

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 8月21日 グラナダ

「なに？サイアム・ビスト氏が殺害された？」

諜報機関の男から報告を受け取ったキシリアはその報告に目を丸くした。

サイアム・ビスト。

旧暦の時代から生きている男であり、UC0001年の1月1日に起きた宇宙ステーション・ラプラスの破壊をしたテロリストの最後の生き残り。

そして、偶然拾ったラプラスの箱を使い、ビスト財団を築いた男でもあり、キシリアは彼とラプラスの箱譲渡についての交渉を続けたが、それ故に彼が殺害されたと聞いた時は驚いた。

なにしろ、原作ではガンダムUC（宇宙世紀0096年）以降も生きていた男なのだ。

この段階で死ぬことなど、転生者である彼女は全く予想もしていなかった。

「何が起きたのだ？」

「はい、どうやら爆弾テロが起きたようで、それで亡くなったようです」

「爆弾テロ、か」

どうにもきな臭い。

何か裏があると見て間違いはないとキシリアは確信する。

「それで私が交渉していた石牌は？」

「はっ。サイアム・ビストの死後、マーサ・ビスト・カーバインに引き継がれたそうです」

「なに？」

キシリアはそこで眉をしかめる。

仮に本当にサイアム・ビストが死んでいた場合、ラプラスの箱はカーディアス・ビストに引き継がれるものだと思っていたからだ。

しかし、実際に引き継いだのはその妹であるマーサ。

もうこの時点で裏があるのは確定的だった。

(・・・そういうことか)

キシリアは暫しの考えの後、何が起こったかを察した。

おそらく、ラプラスの箱を開示しようと考えたサイアムを現状維持を望んだマーサが殺害したといったところだろう。

元々、マーサにとってサイアムは自分の父を殺した憎むべき相手であり、加えて、この一件で女性至上主義的な考え方も持ってしまったので、男性である上に憎んでいる存在であるサイアムの殺害には躊躇がない。

ただ今までは殺してしまうと不利益になるから殺さなかっただけだ。

そして、サイアムを謀殺した後、どうやってかは知らないが、カーディアスを押し退けてラプラスの箱を手にしたというのがキシリアの推測だった。

(余計なこと・・・)

キシリアも女性だ。

前世での男性優位な社会には思うところはあがあるが、別に男の力を認

めていない訳じゃないし、男を排斥する事など全くと言ってても良いほど考えていなかった。

どちらかと言うと、実力もないくせに威張り散らす女を同じ女として嫌悪しており、特にインフィニット・ストラトスのような女性優位社会は反面教師にしようと真剣に考えていた程だ。

加えて、今世では曲がりなりにも男女は平等で扱われており、それでも男性が軍人に多いのは、力が強いのもあるが、単に軍人に憧れてなろうとする存在が男の方が圧倒的に多いからだろうとキシリアは考えている。

実際、戦乙女という存在に憧れるのも、同性である女性より実は異性である男性の方が多かったりするのだから。

そんな世界の中で、先程述べたマーサやZでのシロツコが唱えたような女性優位社会は女性にとって却って毒になり、自分が反面教師にしようと考えているインフィニット・ストラトスの世界が現実なものとなってしまうのではないかという危機感をキシリアは抱いていた。

「・・・闇夜のフェンリル隊は確かグラナダに戻っていたな？」

「はい。箱の奪取を命じますか？」

「いや、私が命令するのは石牌の破壊だ」

「はっ」

それを聞いた男は目を丸くした。

それはそうだろう。

今まで欲しいと言っていた物を、いきなり破壊しろと言われたのだから。

「もう用済みだ。むしろ、あの女に箱を預ける方が危険だ」

マーサに箱が渡った以上、交渉したとしてもこちらに箱を渡すとは思えないし、仮に渡すにしてもおそらくマーサが作る女性優位社会への協力を要求されることとなるだろう。

それはキシリアとしても真つ平御免であるし、そうでなかったにしてもラプラスの箱をマーサに持ったままにさせれば、どんな事態が起きるのかわかったものではない。

そうなるくらいならば、箱を破壊した方がマシだ。

そして、更に言うならば箱は必ずしも本物である必要はない。

大事なのは中身であり、最悪、それらしい石牌を造って本物と同じ文面を書いて公開すれば、本物と同等の効果を得られる。

ただし、そうなると本物の箱の存在が邪魔になってくるので、本物を手に入れて公開した方が確実だと思っていたのだが、こうなってしまうとは破壊するより他に手はない。

「分かりました。ゲラート少佐にはそう伝えます」

「頼んだ」

キシリアはそう答えながら、新たに作るラプラスの箱の石牌を誰に作らせるかを検討し始めた。

◇ニホン チュウゴク地方

「あれか？例の研究所というのは？」

第8特殊小隊の指揮官であるシロー・アマダ少尉はそう言いながら、双眼鏡で件の施設を除き込む。

ランバ・ラル隊解散後、シロー・アマダは少尉に昇進し、新たに結成された第8特殊小隊の隊長を命じられ、東洋の島国である日本に潜入し、連邦のニュータイプ研究施設であるムラサメ研究所へ襲撃を行うように命令されていた。

ムラサメ研究所。

原作では一年戦争後に設立されたニュータイプ研究所であったが、この世界では原作一年戦争時の連邦のニュータイプ研究施設であったオーガスタ研究所の存在していたオーガスタ基地周辺がジオンによって早期に占領されたり奪還されたりしたことによって、そもそも設立されなかった為、その代わりとしてムラサメ研究所が原作より早期に設立されることとなっていた。

そして、今回のシロー達の任務。

それはニュータイプ研究に関わる連邦の技術者達を殺し、ニュータイプの被験者を確保することだ。

正直言つて戦うことがあまり出来るとは思えない技術者達を殺すのはシローとしても気が引けるが、戦争に関わる技術を開発しているということは確かであったので、その点は乗り気でなくとも納得するしかなかった。

「確か連邦のニュータイプというのを研究している施設と聞いたが、予想通り警戒は厳重だ」



だが、潜入が不可能なわけではなかった。

このムラサメ研究所は同じ連邦軍からも秘匿されている存在であり、すぐ近くに連邦の基地はないし、そもそもこのニホンはい4日前の第五次降下作戦によって最前線に近い戦略上重要な地域にもなったにも関わらず、何故か連邦軍の数が少ない。

これはマハラジャと連邦軍との間で裏取引があり、第五次降下作戦で投下されたジオン軍がいずれ裏切るのを見越して、東アジアに向ける連邦軍戦力を他の戦線に投入しているからだのだが、そんな事情をシローが知るよしも無かった。

「これは予定通り、夜に襲撃するしかなさそうだな」

「そうですね」

「ん？」

自分の言葉に返してきた聞き覚えのある女の声に、シローはそちらを向く。

すると、そこには今回の任務に際して自分に付けられた副官であるシロー・ニールソン准尉（オリキヤラ）が居た。

まだ17歳の少女と言える年齢の彼女はその虹色という変わった髪色を靡かせ、先程までシローが見ていたムラサメ研究所の方角を見ている。

「なんだ、シロー准尉か」

「ええ」

シローの言葉にシローは素っ気なく返す。

その上官に対するものとは思えない行動に、軍人としての教育を受けてきたシローは眉をしかめるが、流星にその程度で大声で注意する

ほど、シローも器は小さくない。

「准尉。上官に対するそういう態度は反感を買いやすい。俺だからそう強くは注意しないが、気の短い上官なら態度を咎められて、もしかしたら殴られるかもしれないぞ?」

「ごめんなさい」

それを聞いたシローはそう言ってシローに頭を下げる。

だが、それも先程の素っ気ない態度を取った時と同じく相変わらず感情を感じさせない声であり、シローはどうしたものかと考えていた。

元々、この准尉がニュータイプであり、ニュータイプは同胞であるニュータイプを感じ取れる能力があるからとシローの部下としてつけられたのだ。

しかし、ニュータイプは大半が気難しい性格をしている。

原作のアムロ・レイやカミーユ・ビダン、ハサウェイ・ノア、クエス・パラヤはそうだったし、それとはベクトルは違うが、ララア・スン、ハマーン・カーン、パプテマス・シロッコ、シャア・アズナブルなどもそうだった。

勿論、ジウドー・アーシタやバナージ・リンクス、そして、この世界に来たのび太などの例外も居るが、それはあくまで例外であり、全体的に見れば少数派だ。

まあ、結論から言えばそもそもまともな感性をしている人間でニュータイプになれる人間はほとんど居ないと言っても良く、それ故にシローも彼女の扱いに困っていた。

そして、シローが問題にしている事柄はもう一つある。

それは髪色だ。

普段ならとやかく言わない。

地毛である以上、他人であるシローがどうこう言ったところでしょうがないのだから。

しかし、それが任務に差し支えるとなれば話は別だ。  
彼女の髪色はとにかく目立ち、潜入にはどうしても向かない。

(とは言え、髪を染めるものなんて手元にはないしな。・・・上手くやる  
しかないか)

彼女の事を含めて、今回の任務の達成は極めて難しい。  
だが、ジャブローの時に比べればマシだ。

シローはそう思いながら、ムラサメ研究所に潜入する方法を考え始  
めた。

U C 0 0 7 9 年 8 月 2 4 日 支持

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 8月24日 サイド3 ズムシティ

「そうか。サイド5が遂にジオン支持を表明したか」

ギレンはセシリアからの報告を聞きながら、今後の方針を考える。ジオンは開戦後、各サイドや月に対して自分達の味方になるように外交努力を行ってきた。

だが、何処のサイドも政府が親ジオン派になった後も人や物は出すが、ジオンの明確な味方にはならないという煮え切らない態度を取っていたのだ。

しかし、ついさつき月と地球の間にあるサイド——サイド5・ルウムがジオン支持を正式に表明した。

開戦直後の時点では親ジオン派と親連邦派が半々ずつだったこのサイドだが、どうやら連邦の月号作戦の失敗によって正式にジオン側に着くことに腹を決めたらしい。

「その判断は有り難いが、問題は位置だな」

そう、問題なのはサイド5の位置。

前述したように、サイド5は地球と月の間にあるサイドであり、言い換えれば地球に最も近いサイドと言える。

故に連邦が攻めてきた時、このサイドを守るのがなかなか難しいのだ。

まあ、あれだけやられた以上、今年中の反攻は考えづらいので、来年度を迎える前にこちらが先にジャブローを占領すれば良いだけの話なのかもしれないが、連邦の物量はやはり侮れず、万が一のために今年中に侵攻してきたケースを考えておく必要がある。

「・・・セシリア、サイド5の他には味方になりそうなサイドはあるか

「？」

「はい、サイド2がジオン支持を検討しているとの情報が入っています。他にも月面都市グラナダにその動きがあります」

「サイド2、か」

セシリアの返答を聞いて、ギレンは意外といった感じの顔を見せる。

グラナダは元々親ジオン派が多かったから分かるが、サイド2は親連邦派のサイドの筈であったからだ。

(いったいどういう心境の変化が有ったんだ?)

ギレンはそう考えるが、今はそれは重要ではないと思いつす。

どのみち一度ジオン支持を表明してしまえば、どんな思惑があつたとしても連邦に寝返ることは出来ない。

もししてしまえば蝙蝠野郎と見られて、戦勝国からは冷たい目で見られ、敗戦国からは恨みの籠った視線を向けられるのだから。

(・・・まあいい。それよりサイド5だな。支持を明確にした以上は優先的に守らなきゃならん)

支持を明確にした以上、ジオンは守る義務がある。

と言うより、守らないとジオンを支持しても自分達を護ってくれないと思われて、各サイドのジオン支持の流れは絶ちきられるだろうし、下手をすればそのまま連邦に走られる可能性もあるのだ。

それは戦後の事を考えると、非常に宜しくない。

(となると、旧式となったジムIIの販売やサイド5駐留艦隊を増強した方が良いな。あとはサイド5にこちらから教官を派遣して軍事交

流を行うのもありだ)

駐留艦隊を増強すると言っても、国力が圧倒的に大きい連邦と戦争している以上、このまま各サイドをジオンが面倒を見るのは非常に負担もリスクも大きすぎる。

幸い、今回、サイド5はジオン支持を明確にしたので、大っぴらに軍事交流を行うことが可能だ。

そして、今一つ信用できなかったことから、各サイドに売却していなかったジムⅡをサイド5に売却することで、ジオンとサイド5の結束を高めることが可能であり、他サイドにもジオンに味方することのメリットを示せる。

(各サイドの対応はこれで良いだろう。まあ、アナハイムの動きはちよつと気になるが・・・)

月の大企業——アナハイム・エレクトロニクス。

主にフォン・ブラウンを中心にして活動する企業だが、最近の動きはかなり妙だ。

何故かは知らないが、独自の私兵集団を結成しようとする派閥が有ったり、それに反発する派閥がジオンの諜報員に接触してきて、その私兵集団を持つ派閥を退治して欲しいという要請を出してきている。

一言で言えば、大きく迷走している状態であり、社内で何か大きな混乱が起きていることを示唆していた。

実はこれはラプラスの箱が大きく関わっているのだが、基本的に箱の事をキシリアに任せっぱなしにしてあるギレンはそこまでの事は知らない。

(まあ、問題はないだろう。それより問題は重力戦線だな)

ギレンはそう思いながら、セシリアにあることを聞く。

「セシリア、重力戦線の連邦軍の展開状況はどうなっている？」

「はい、アジア方面は正直言って手薄です。その代わりにアフリカ、ウラル、スカンジナビア、そして、ベルファストに戦力が集中しつつあるという情報を入手しました」

セシリアはギレンの問いにそう答えた。

そう、アジア方面はどうやらマハラジャと連邦軍との間で裏取引があるらしく手薄となっている。

もつとも、そのお蔭で3日前にシロー・アマダ率いる第8特殊小隊がムラサメ研究所を破壊することに成功したので、一概に悪いことだとも言えなかったが。

(例のムラサメ研究所を破壊したお蔭で連邦のニュータイプ研究は間違いなく立ち遅れた。これでこの戦争の間に連邦側にニュータイプ兵器が登場することは確実に無くなったと見て良いだろう。だが、ヨーロッパに隣接した地域にこれだけの戦力が集まりつつあるということは、やはり目標はオデッサか?)

ギレンは原作知識から、ベルファストは囹で本命はスカンジナビア、アフリカ、ウラルの三方向からオデッサを攻略することではないかと予測する。

そして、連邦にとってオデッサを攻略するメリットは大きい。

何故なら、ここにはジオンの資源採掘場やジオンが現地に建設した工場があり、ここを占領すればジオンの国力を一部でも削ぎ落とすことが出来る上に、ジオン本国に送られる鉱物資源を無くす事が出来る。

更にはヨーロッパと中東を分断することも可能だ。

少なくとも、自分が連邦側の指揮官ならば、確実にここを攻める。

「・・・ちなみにだが、それらの戦力が動くとしたら、それはいつ頃になる？」

「情報部の報告では9月上旬から下旬にかけて。つまり、9月中には来ると」

「早いな」

原作のオデッサ作戦が11月上旬だったので、この世界では2ヶ月も早まった事になる。

まあ、考えてみれば当然の事だろう。

連邦の陸軍は宇宙軍とは違い、コロニー落としも無かった上にオーストラリアや旧アメリカ以外にこれといった大打撃は負っていないのだから。

(だが、我々もなんの準備をしてこなかった訳ではない)

しかし、この事態に対してギレンは全く焦っていないなかった。

いずれ連邦がオデッサに来ることを予測して様々な新兵器を開発していたからだ。

まあ、その内の1つであったアプサラスはオーストラリアで使って存在がバレたことで連邦がビーム攪乱幕を展開するようになってしまい、そのチート効果が大きい薄れてしまったが、それについては別の策を急遽用意したので問題はない。

ただ、懸念はある。

上記した対策はあくまで連邦の目標がオデッサだけだった場合であり、もし連邦の目標がオデッサだけではなく、中東、ヨーロッパ、オデッサと満遍なく攻めてきたら、この戦略は破綻しかねないのだ。

まあ、もし満遍なく攻めてくるのであれば中央アジアにも戦力を集中してくるだろうし、今のところその兆候はないので、満遍なく攻めてくる可能性は低いのだろうが、やはり不安材料にはなる。



「引き続き、重力戦線の情報を重視するように情報部に伝えてくれ。それと政治工作の方はどうだ？」

ギレンは重力戦線での政治工作の状況をセシリアへと尋ねる。

そう、ジオンが政治工作を行っているのは、何も宇宙だけではない。地上においても、連邦の切り崩しのために政治工作を仕掛けていたのだ。

しかし、地球は元々、地球連邦の本国と言つても良く、加えてアースノイドがスペースノイドを見下すといった風潮（もつとも、ガンダムSEEDのコーデインイターとナチュラルの関係よりは大分マシだが）もあつて、なかなかその政治工作は成功していなかったのだが、マ・クベ大佐が赴任してからは徐々にではあるが成功し始めていた。

「北米については例の核分裂炉MSの一件もあり、こちらよりの態度を示しています。ですが、ヨーロッパについてはレジスタンスが所々に発生しており、あまり良好とは言えません」

「・・・だろうな」

ヨーロッパ人はプライドが高い。

それ故に連邦に核で街が吹っ飛ばされるなどという仕打ちをされながらも、侵略者であるジオンに抵抗する人々も多く、ジオンもその統治に苦勞している。

もつとも、全部の地域がそうではなく、レジスタンスが主に発生しているのは西欧であり、東欧の方はそうでもない。

まあ、東欧の民衆からしてみれば身近に存在した都市であるワルシャワがいきなり連邦によって核で吹っ飛ばされたのだ。

連邦に非協力的な態度を取るのもある意味では当然と言えた。

（とは言え、西欧の民衆が反抗的なのは問題だな。ユーリ少将が上手

くやってくれば良いが・・・)

ギレンはそう思いながら、西欧に居るユーリ・ケラーネ少将が上手くやってくれることを祈った。

U C 0 0 7 9 年 8 月 3 0 日 スパイ

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0 0 7 9 年 8 月 3 0 日 南米 ジャブロー

「何度見てもずいぶんと大博打な作戦だが、大丈夫なのかね？」

地球連邦大統領は軍部から提出された作戦計画書を見ながら、レビル將軍に代わって連邦軍總司令官の座へと就任したジーン・コリニー大將とその隣に座るエルラン中將に向かってそう尋ねる。

大統領が見ていた作戦計画書。

そこには5日後の9月4日に発動されるオデッサ作戦について書かれていた。

原作では連邦陸軍全体の3分の1の兵力を用いて行ったこの作戦だが、その配分はこの世界でも概ね変わらない。

ただ原作とこの世界では連邦軍全体の兵力の分母が違うので、この世界で投入される兵力は正面戦力だけで600万人(原作では400万人)、後方支援の500万人(原作では370万人)を含めると1100万人(原作では770万人)という膨大な戦力が投入される予定だ。

転生者達が聞いたら羨ましきあまり卒倒しそうになる程の物量であったが、これがコロニー落としをされていなかった場合の連邦の物量だった。

「はい、問題ありません。我が軍はジオン軍に勝利するでしょう」

ジーンは自信満々にそう言った。

このオデッサ作戦はベルファストからの西欧に対する大規模空爆を陽動とする形で、スカンジナビア↓旧ポーランド↓オデッサ、北アフリカ↓旧トルコ↓オデッサ、ウラル↓モスクワ↓キエフ↓オデッサの三方向から進撃し、いずれの軍もオデッサを目指し、攻略するという形となっている。

そして、オデッサを攻略することでジオンの中東戦線とヨーロッパ戦線を分断し、あとでそれらの戦線を各個撃破しようという魂胆だった。

つまり、6日前にギレンがした予想はほとんど当たっていたのである。

「しかし、この作戦がもし失敗したら・・・」

大統領は失敗を懸念する。

なにしろ、地上兵力の3分の1を投入するのだ。

もし万が一にも負けて兵力を大きく喪失するなどということになれば、致命傷にはならないだろうが、膠着している現在の重力戦線の戦局は再びジオン側に傾くことになるだろう。

いや、それ以前に1000万以上もの兵力を損失すれば、厭戦気分が高まるのは目に見えていた。

もつとも、1000万人の兵力で無理だったならそれ未満の兵力ではもつとオデッサ攻略は無理なのだろうが。

「仰ることは分かります。ですが、政府としてもそうならだと戦争を続けるわけにはいかないのでは？」

「・・・」

エルラン中将が放ったその言葉に、大統領は沈黙せざるをえなかった。

ジオンに比べて国力に余裕がある連邦であったが、財源は無限ではないし、宇宙が占領されている以上、スペースノイドからの徴収も出来ないのも、必然的にアースノイドから納められる税金内でしかその国力を発揮できない。

つまり、今の状態で戦い続けければ、時間が経てば経つほど連邦の発揮できる国力は経済的な観点から制限されてくるのだ。

増税という手もあるにはあるが、それをした場合、ほぼ間違いなくアースノイドの反感を買って厭戦気分が蔓延してしまうだろう。

ジオンがとんでもない大量虐殺でもやらかしていれば話は違ったかもしれないが、今のところそういうわけでもない。

「・・・なるほど、それは認めよう。だが、最後に敢えて聞くが、この作戦、本当に成功させる自信が有るのだろうか？」

「ご心配なく。この作戦、私はベルファストから、ここに居るエルラン君がウラルから、それぞれ指揮を取る予定です。更にジオンの戦力はどんなに頑張っても我々の1割強程度。例のアップサラスという兵器への対策も既に出来ております。失敗要素はなにもありません」

ジーンはきつぱりとそう言う。

これは転生者が聞けば、明らかな失敗フラグであったが、常識的に考えれば相手側の10倍弱の兵力で攻め込んで敗けを想像しろという方が難しいというのもまた事実だった。

それが出来るのは転生者のように後の展開をだいたい知っている未来人や転生者、あるいは逆によつほど精神が弱い臆病者くらいなものだろう。

だが、良くも悪くもそのような存在は連邦には居ない。

「・・・良からう。作戦を許可しよう。存分にやってくれたまえ」

その自信ありげなジーンの状態に大統領は腹を決め、オデッサ作戦を承認することとなった。

#### ◇オデツサ

連邦軍上層部が大統領の作戦正式承認を得てオデツサ作戦の準備に邁進し始めた一方、連邦軍のオデツサ作戦の目標とされたオデツサ基地では、マ・クベ大佐がウラガン少尉から、ある報告を聞いていた。

「そうか。やはりここに来るか」

マ・クベはそう言いながら、何かを考えるような仕草をする。

先程マ・クベがウラガンより聞いた報告。

それはジオンのスパイであり、現在はエルラン中将の側近として活動中のシュダック中佐よりもたらされた連邦のオデツサ作戦についての情報だった。

原作でもそうだったが、連邦は自軍の中将クラスに堂々とスパイされて情報を敵に流されているという間抜けな様を晒しており、それはこの世界でも同様だ。

だが、この世界では原作と違い、エルランのスパイ活動はあまり活発ではない。

と言うのも、幾らそんな馬鹿な様を晒している連邦と言えども、情報を流そうと動く回数が増えればそれだけ気づかれやすくなり、怪しむ人間も増える（実際、原作ではレビルが怪しんでいた）からだ。

そうでなくとも、原作のセイラとアムロに発見されたような偶然に

よってバレる可能性も有るので、まだエルランに退場されては困るジオンとしてはあまり大きく動かれるのは困る。

その為、多少効率落ちるものの、この世界ではジオンは自前の情報機関によって地球における情報の大半を収集していた。

しかし、それでも敵の攻勢目標など、どうしても分からないところは存在するので、そのような要点だけはエルランからの情報で得ていたのだ。

「では、ウラガン。予定通り、エルラン中将には前線から大分離れた後方の位置に居るようにシュダック中佐を介して伝えろ」

「はい。ですが、よろしいのですか？前線に居ないと向こうが連邦軍の兵士をコントロール出来なくなるのでは？」

そう、幾ら中將という階級であつても前線から遠く離れていれば指揮も行き届きにくくなり、彼の指揮下にある連邦軍がこちらの意図せぬ行動を取る可能性があるのだ。

原作で普段前線に出ようとしないうエルランが無理にでも前線に出ようとしたのも、そこら辺の事情に関係がある。

だが――

「私もそう進言したのだがな。キシリア様はこう言っておられた。普段前線に出ない人間が今回のような大作戦に限って出ようとするとならば、怪しまれる、とな」

原作ではそのエルランの不自然な行動によってレビルに怪しまれており、密かに内偵まで行われたのだ。

前述したように、ジオンとしてはまだエルランに失脚されては困る。

それ故になるべく似合わない行動はさせずに、スパイだとバレるリスクを最小限にしようと転生者達は考えていた。

「どうやらキシリア様はまだ奴に利用価値を見出だしているようだ」

「しかし、私はどうもエルラン中將が信用できませんが・・・」

ウラガンが懸念を示す。

まあ、それは当然だろう。

裏切り者を容易に信じるのは、よっぽど頭がお花畑な馬鹿だけなのだから。

「まあ、本人からもたらされたのなら二重スパイの可能性も否めないのだろうが、送ってくるのはシュダックだ。奴が裏切らん限りは問題はあるまい。それより問題は迎撃に関してだ。連邦は今回の作戦に後方支援も含めて1000万人を越える兵力を投入するらしいからな」

「相変わらず凄い物量ですな」

「そうだ。もつとも、それに対する対策は万全だがな」

そう言いながら、マ・クベはつい先日にも本国から送られてきた連邦に対する迎撃方針を思い出す。

（それにしても、あんな方法で迎撃される連邦軍が少し気の毒になってくるな）

マ・クベはそう思いながらも、本国の迎撃策に反対するつもりは毛頭なかった。

対案など自分には提示できないし、そもそも圧倒的な戦力差を核兵器などの禁止兵器無しで覆すにはこれしか手がないと思っていたからだ。



加えて、マ・クベは元々軍人より政治家といった気質が強く、おまけに原作で水爆を平然と使っていることから分かる通り、勝つためには手段を手段を選ばない性格であり、一方的な蹂躪はむしろ望むところだった。

(精々私の出世とキシリア様への栄光を捧げるために踊ってくれよ。  
連邦の兵士諸君)

マ・クベは厭らしい笑みを浮かべていた。

UC0079年 9月2日 行方知れず

◇宇宙世紀0079年 9月2日 ルナツー

「そう言えば、ずっと聞いてなかったけど、しずかちゃん達は元気にしてる?」

何時ものように訓練を終えたのび太はふと前の世界に居る仲間達の事を思い出し、隣に座っているドラえもんに皆の様子を聞く。

「えっ、ああ、元気だよ。ただ君が居なくなってみんな落ち込んでるのは確かだね」

ドラえもんはいきなり元の世界の事を聞いてきたのび太に若干戸惑いながらも、そう答える。

ちなみに今ドラえもんが言ったことはお世辞でもなんでもない。

何時も遅刻したり0点を取ったりと色々と生徒として問題のある事を起こしまくっているのび太ではあるが、なんだかんだ言っただけでスマート達には慕われている。

そんな人間が居なくなつて全く影響がない筈もなく、特に大冒険などで深く関わっていたジャイアン、スネオ、しずかなどは未だに心配しているのがその証拠だ。

「・・・そっか。みんな心配してる、か」

のび太はそう呟きながらも迷っていた。

元の世界に帰るかどうかを。

いまドラえもんが言ったように心配してくれている者達も居るので、帰らなきゃいけないのかもしれないという意識はあるのだが、どうしても帰った後のビジョンがしっくり来ないのだ。

加えて――

(パパとママも死んじやったからなあ)

この前ドラえもんに聞いた両親の死の事もある。

のび太は両親の事をあまり信用はしていなかったが、それでも愛情はあったので、死んだと聞いた時は悲しく思った。

だが、それだけだ。

むしろ、自分でも驚くべきことに、帰る口実のひとつが減って良かったとすら心の奥底では思っている。

「このままこの世界に・・・」

「えっ?」

「あつ。いや、なんでもないよ。それより話は変わるけど、明日はドラえもんの誕生日だったよね?」

「うん。でも、こんなときだし、別にお祝いしてくれなくても良いよ」

「そういうわけにはいかないよ。僕の誕生日の時もお祝いしてくれたし。まあ、メイが居ないからケーキは無理だけど、プレゼントは一応用意してあるから」

「そう?じゃあ、明日、ありがたく貰っておくよ」

「うん。楽しみにしといてね」

のび太はドラえもんの反応を嬉しく思いながらそう言った。

## ◇グラナダ

「不味いな・・・」

キシリアは珍しく焦っていた。

10日前から闇夜のフェンリル隊を用いてアナハイムのマーサとラプラスの箱を巡る攻防を繰り返してきたのだが、マーサはなんと自らの私兵団を組織して対抗してきたのだ。

と言っても、本物の軍隊の特殊部隊とまともにぶつかり合って勝てる筈もなく（おまけに闇夜のフェンリル隊を始めとした特殊部隊はキシリアの手によって原作よりも戦力が増強されている）、おまけに闇夜のフェンリル隊からすれば箱を壊せば良い為に戦闘面での縛りも特に無かったので、その私兵団は最終的に壊滅させられたのだが、その間に稼いだ時間によってマーサに箱を持ち逃げされてしまい、任務は失敗という結果に終わってしまった。

更に不味いのが、マーサの行方が分からなくなってしまったことだ。

これである箱をいつ発動させるのかがマーサの手に委ねられてしまったことになる。

「幸い、アナハイムからの抗議は問題ないが・・・」

この一連の騒乱に対して、アナハイムからは当然の事ながら抗議が来たが、アナハイムも一枚岩ではなく、マーサに反抗する勢力も存在する。

そういった勢力からしてみれば、マーサが居なくなったのは正に行幸であり、嬉々として彼女の派閥を切り崩そうとするだろう。

そうすればジオンに構っている余裕はなくなるだろうし、連邦と武器の売買をしているという後ろ暗い事実も存在しているので、そこを突けばあまりジオンを強く攻めることは出来なくなる。

まあ、ここでアナハイムを本格的に敵に回すと、もしジオンが負けるような事になれば、原作よりもジオンの戦後は大変なことになるかもしれないが、それはあくまで負けた場合の未来であり、今そんなことを考えてもどうしようもない。

「あの女、本当に何処に行った？」

キシリアはマーサの行く先を予測する。

色々な可能性を考慮するが、その中で一番可能性が低いのはやはり連邦だろう。

元々、ラプラスの箱は連邦にとって最大の爆弾だ。

それを連邦に引き渡すことで恩を売るという手もあるが、箱を渡した後には口封じとして殺される可能性が高い。

かつてのサイアムのように上手く揺すれば話は別かもしれないが、原作を見る限りマーサにそれが出来るとは思えなかった。

まあ、それはキシリアのような第三者から見た意見であるので、本

人に上手く揺する自信があれば連邦に行く可能性は無くはない。

もつとも、それでマーサが殺されて箱が碎かれるのであれば、それはそれで構わなかったが、やはり確実に箱を破壊したいというのも確かだった。

「何処かのサイドに身を隠しているのか？それとも——」

考えられる可能性は残り2つ。

1つが何処かのサイドか、あるいは別の月面都市に身を隠しているということ。

幾ら追われる身となったとはいえ、マーサはアナハイムの社長夫人だ。

夫となる存在が匿っている可能性もあるし、そうでなくともアナハイムではそれなりに強い力を持つていたようなので、部下、あるいは協力者などが匿っている可能性も存在する。

そうなると非常に面倒だ。

下手をすれば、アナハイムと全面戦争になる可能性があるのだから。

だが、もつと最悪なのがもう1つ目の可能性であるダイクン派との接触だ。

はつきり言ってこれが一番不味い。

(ジオン・ズム・ダイクンはサイド3のみならず、他のサイドにとつてもある程度は影響力のある存在だ。そのダイクンの支持者とも言えるダイクン派が箱を公開したりすれば面倒なことになる。特にシヤアやアルテイシアが公開した時などはな)

意外なことであるが、ジオン・ズム・ダイクンの威光はサイド3に留まらず、宇宙移民全体に影響力を持つている。

勿論、その威光は人によって大小はあり、ジオン・ズム・ダイクンの影響力が一番強いサイド3にしても、全員が全員、ジオン・ズム・

ダイクンの信者という訳ではない。

そして、それは逆も然りで、比較的影響力が薄い他のサイドにもジオン・ズム・ダイクンの信者は居る。

もつとも、信者ばかりではなく逆に連邦に真つ向から反発するジオン・ズム・ダイクンを危険視している人間も居るが、そういった主張はスペースノイドの中ではあまりウケない。

何故かと言われればそれは簡単で、地球連邦がスペースノイドに参政権を認めておらず、旧世紀の植民地扱いをされているのは事実であつたからだ。

どんな理想も事実の前には打ち消されてしまうだけであり、この場合は「連邦に逆らわずに協力していこう」という理想が「連邦から植民地扱いされている」という事実の前に打ち消されてしまい、その結果、スペースノイドがジオン・ズム・ダイクンを信奉する事となつてしまったというだけの話だつた。

つまり、ジオン・ズム・ダイクンという存在を生み出したのは連邦と言つても過言ではないのだ。

さて、そんな良くも悪くもスペースノイドに多大な影響力を持つジオン・ズム・ダイクンの支持者とも言えるダイクン派がこの箱の事を公開したらどうなるだろうか？

ましてや、シャアやセイラは言うまでもなくダイクンの遺児だ。

それらの人間が箱を使ってしまえば、ガンダムSEEDのプラントと地球連合の如く、アースノイドとスペースノイドで盛大な絶滅戦争をやるような事になつても決して可笑しくはない。

まあ、それは最悪の場合であり、どれだけ影響力が有るのかは公開するタイミング次第だし、今さらシャアやセイラがダイクン派に積極的に協力するとも思えないので、その心配は杞憂かもしれないが、この半ば原作が崩壊した世界では何が起こつても可笑しくはない。

(本当の最悪は考えうる最悪の斜め上を行くとも言つてからな。決して油断はできない。まして、このガンダム世界では)

キシリアはそう思いながら、自前の諜報機関を用いたありとあらゆる手を使ってダイクン派とマーサを接触させないことに決めた。

もつとも、この手を使うと諜報員の大半をそちらの工作に差し向ける関係上、他のサイドに潜伏していたりした場合は発見できない可能性が大だが、その時はきっぱり諦めた方が良いでしょう。

二兎を追うものは一兎をも得ず。

今は最悪の可能性を確実に除去することが重要だ。

(さて、もうすぐオデッサか。それが終わればマ・クベを一旦宇宙に戻してこの件に携わさせるか)

キシリアはそう考えたが、彼女は知らない。

オデッサでとんでもない事態が引き起こされ、ラプラスの箱の行方を追うどころではなくなるということを。



UC0079年 9月4日 第二次オデッサ攻防戦  
前編

ト  
◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 9月4日 アイルランド島 ベルファースト

「ベルファースト航空隊、旧フランスに対する陽動爆撃を開始しました！！」

オペレーターの報告に、『うむ』と頷きながら、ジーン・コリニー大將はヨーロッパ全体の戦況図が映されたスクリーンを見る。

いまオペレーターが言ったように、今回の作戦ではベルファーストからの航空爆撃は陽動だ。

とは言っても、1000機以上のセイバーフィッシュシリーズを投入した大規模爆撃なので、ジオン軍の方も必死に迎撃しなければ大打撃を受けてしまうのだが。

そして、肝心のオデッサを攻める戦力だが、こちらはスカンジナビアとアフリカにそれぞれ300万ずつの計600万人、ウラルに500万人という配分になっており、現在はスカンジナビアとアフリカの戦力がバルト海、地中海を渡り、海軍の護衛の下に旧ポーランド、旧トルコに向かっていた。

（投入する兵力は1000万人を越えるのに対して、オデッサの戦力は情報では40万人程。負ける要素はない）

ジーンは勝利を確信していた。

なにしろ、今回の戦いには1000万人を越える兵力の中には10センチビームカノン砲を搭載した自走砲ま大量に準備しており、MSの撃破は可能だ。

もつとも、その口径は小さいので、よっぽど近づかないとダメージ

は与えられないし、連射性も低いのだが、それでもMSが撃破できる兵器があるのは部下にとつて励みになるだろう。

まあ、アプサラスが出てくればビーム攪乱幕を展開する関係上、使えなくなってしまうのだが。

更に言えば、仮にビームカノン砲が役に立たなかったとしても、100万人という膨大な兵力の前にたった40万ぽっちの兵力が何か出来るとも思えない。

例え情報が間違っていて、実際の敵軍戦力がその数倍だったとしても物量の差で問題なく捻り潰せるだろう。

(これでオデッサを制圧。あとは中東とヨーロッパを片付ければ私の地位は安泰だ。あとは北米戦線が残っているが、こちらはこっちの戦線が片付いた後にゆっくりと料理してやれば良い)

ジーンはそんな算段を立てながらほくそ笑むが、その目論みは直後に崩れ始めることとなる。

「將軍！大変です!!」

「どうした?」

「はっ！海軍に護衛されて旧ポーランドに向かっていたスカンジナビア方面軍が大打撃を受けたとのことですよ!!」

「なにい!？」

そのオペレーターの報告に、ジーンは思わず叫んでしまう。

——そして、このバルト海方面での戦闘を皮切りに、後に“地獄のオデッサ戦”と呼ばれる戦いが幕を開けることとなる。

◇少し前 バルト海 イージス艦『マルタ』 艦橋

「壮観な眺めだな」

イージス艦『マルタ』の艦長はそう言いながら、自分の周囲を囲んでいる大艦隊の姿を見回す。

イージス艦。

旧世紀から存在するイージスシステムを搭載した艦。

勿論、その性能は時代を経ているだけあって旧世紀のものに比べて格段に進化しているし、この宇宙世紀の時代では比較的安価に取り揃えることも可能なシステムだ。

もつとも、ミノフスキー粒子の登場によって艦に搭載されたイージスシステムとミサイルを主軸とした兵装の大半はごみ屑と化してしまったが、海軍は陸軍や宇宙軍などと比べると予算が少なく、代替艦を建造する余裕はなかったため、陸軍が開発したというビームカノン砲を主砲に取り付けることで取り敢えずお茶を濁している。

だが、潜水艦に対しては別だ。

水中にはミノフスキー粒子が作用しないので、これまで通りの性能

を發揮することが可能であり、実際にこれまでにジオンの戦略海洋軍に所属するジオンの潜水艦を何隻も血祭りに挙げている。

もつとも、潜水艦に搭載された水中MSによって返り討ちに遭うケースもあったが、対策として旧世紀の第二次世界大戦に存在したヘッジホッグも準備されてあつたし、これだけの数とこれまでにない哨戒網が有れば、水中MSの母艦である潜水艦が接近する前に撃沈することは可能だろうと見なされていた。

しかし――

「艦長、大量のスクリー音を探知しました」

「なに？ジオンの潜水艦か？それとも水中MSか？」

艦長はソナーを担当するヘッドホンを耳に掛けた乗組員に向かってそう尋ねる。

もつとも、それほど焦ってはいない。

大量のスクリー音ということは、潜水艦にしろ、MSにしろ、それなりの数を揃えてきたのだろうが、この規模の艦隊を相手にしては多少の損害は与えられたとしても、最終的には駆逐される程度の存在ではない。

そう思っていた艦長だったが、次の乗組員の言葉にその思考は大きく凍り付くことになる。

「こ、これは魚雷です!!その数、少なくとも400本以上!!」

「なんだと!?!」

艦長はその報告を聞いて大きく目を剥く。

魚雷の数もそうだが、敵潜水艦の姿が影も形もないうちにこうして攻撃を受けることになるとは思わなかったのだ。

(敵潜水艦が待ち伏せていたのか!?)

艦長はそう考えたが、実際は全く違い、この近海にはジオンの潜水艦やMSは1つも居なかつた。

では、どうやって魚雷攻撃を行ったのか?

それは言葉にすると物凄く簡単で、あらかじめ海底に大量の魚雷を埋めておき、その上を通つたことを魚雷が感知、目標に向かっていく。ただそれだけだ。

勿論、普通の魚雷にはそんなことは不可能だが、ジオンが開発した新兵器である海底着地式魚雷ならそれが可能だった。

ちなみにこの兵器のモデルとなったのは、言うまでもなく某紺碧の艦隊だったりする。

そして、この海域に埋めてある魚雷の数はなんと合計で2500本。

稀に海底に引っ掛かったりする例もあったが、それでも2000本以上の魚雷が艦隊へと向かつていった。

「デコイを発射しろ!!」

艦長はそう命じるが、この数の魚雷を全て誤魔化すことが出来る筈もなく、彼の乗る『マルタ』はこの2分後に3本の魚雷を喰らって撃沈されることとなる。

——そして、この惨劇はバルト海だけで繰り広げられていたわけではない。

地中海を進んでいたアフリカ方面軍もまたバルト海と同様の罠によつて大打撃を被ることとなつていた。

◇ウラル

バルト海と地中海で惨劇の嵐が吹き荒れていた頃、ウラルの連邦軍もまた第一占領地点であるモスクワに向けて進撃を開始していた。

「シユダツク中佐、本当にこの処置で良かったのかね？」

ウラルの一室でエルラン中将は改めてシユダツク中佐にそう聞く。今回の戦いではエルラン中将は手持ちの500万人の兵隊のうち、100万人を予備戦力とし、8割にあたる400万人を一気に前線に投入している。

勿論、それは連邦軍の将校としては正しいことであるが、それと言ってきたのがジオンのスパイであるシユダツク中佐だった事がエルランを驚かせていた。

「構いませんよ。マ・クベ大佐からはなるべく怪しまれない限りで出来るだけの戦力を一気に前線に投入するように言われていますから」

「しかし、君たちからしてみればこれだけの戦力を一気にぶつけられることは却って都合が悪いのではないか？まさか、核でも使うつもりか？」

そう、戦力を一気にぶつけられるというのは敵にとって相当都合が悪い。

ましてや、エルランは前線から遠く離れているため、既に進撃を始めた400万人の兵力を半ばコントロール下から外しているのだ。

そして、その兵力だけでもオデッサの兵力の10倍。

これを覆すにはサーモバリック爆弾の大量使用だけではならず、それこそアプサラスの大量投入や核兵器の使用が必要になってしまいうレベルだった。

しかし、アプサラスはビーム攪乱幕という対抗手段があるし、核兵器は南極条約違反になってしまい、今後のジオンの地球での活動に支障が出てしまう可能性が高い。

そう指摘するエルランであったが、それを聞いたシユダックは笑いながらこう否定する。

「あはは、それは南極条約違反になりますから違いますよ。私も詳しくは知らされていませんが、敵を一網打尽に出来る方法があるとの事でした」

「ほう？それを私に伝えないのは私が信頼できないということだからかね？」

「・・・申し訳ありません」

「いや、裏切り者を容易に信じられないのは当たり前だ。もし君達がそんな間抜けだったら、私は二重スパイになっていたかもしれないな」

シユダックの謝罪の言葉に対して、エルラン中将は気を悪くした様子もなくそう言う。

だが、実際、エルランはジオンがそのような間抜けなのであれば自分に送られてきたジオンの情報を連邦に売ろうと考えていた。

上手い具合に、そういった事に理解を示してくれる上司ゴッブが居るため、情報は高く売れて自分の出世は確実だと見なしていたのだ。

もつとも、ジオンに降ったのは連邦の有り様に失望を覚えたからであつたので、ジオンが自分の求める存在である限りはジオンに全面協力する算段であつたが。

「しかし、そんな大量破壊兵器があるというのは気になるのも事実だな」

「それについては後に分かることとなるでしょう。閣下は今の中に敗戦の後の連邦高官に対する言い訳を考える事をお薦めします」

「ははっ。言ってくれるな」

そう言いながら、エルランはこの分なら大丈夫そうだと見なし、シユダツクの言つた通り、この戦いが敗戦で終わった後の連邦高官に対する言い訳を今のうちに考え始めることにした。

——そして、この1時間後、空から盛大な流星が吹き荒れ、連邦のウラル方面軍を襲うこととなる。



UC0079年 9月5日 第二次オデッサ攻防戦  
後編

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 9月5日 アイルランド島 ベルファースト

「……………」

ジーン・コリニー大將は報告書を見ながら震えていた。

昨日の戦闘によって、スカンジナビア・アフリカ方面の両軍はそれぞれバルト海・地中海に設置された海底着地式魚雷に引っかけ、船団の周りを囲んでいたほとんどの護衛艦と一部の兵員を運んでいた輸送船を撃沈され、両軍の攻勢は初っぱなから躓く。

しかも、被害はそれだけに留まらず、混乱する船団に空から空襲（ちなみにその空爆した戦闘機にはミノフスキー粒子の影響を受けるミサイルは搭載されておらず、代わりに誘導魚雷が多数装備されていた）が開始され、防備が穴だらけとなっていた船団を襲い、追い撃ちを掛ける。

その後、ジーンの作戦続行強行命令によってどうにか作戦目標である旧ポーランド、旧トルコへの上陸は成功したものの、その時にはスカンジナビア方面軍は100万、アフリカ方面軍は80万人を喪失するという大損害を負うこととなっていた。

だが、大損害を被ったのはこれらの戦線だけではない。

いや、むしろ、陸路を進んでいたウラル方面軍の方がよっぽど酷い惨状となっていた。

（くそつ、宇宙人共め！まさか隕石落としをしてくるとは!!）

そう、モスクワに進撃していたウラル方面軍400万人を迎撃するに辺り、ジオン軍は隕石落としを行った。

と言つても、逆襲のシヤアであつたようなアクシズクラスの巨大隕石を落としたわけではない。

使つたのは掘削されて耐熱コーティングが施された人間大の隕石であり、これを大量に揃えて軌道上から進撃していたウラル方面軍に向かつて次々と落とされたのだ。

そして、軌道上の高さから落とされた人間大の隕石は直撃すればその先にある物体など容易に押し潰されてしまうし、仮に直撃しなくとも地面に激突した時に発した衝撃波によつて数十トンの質量があるモビルスーツや戦車などは容易に吹き飛ばされてしまう。

ましてや、それより軽い装甲車や歩兵など一溜まりもある筈もなく、木の葉のように舞いながら次々と死傷していき、最終的に進撃してきた400万人の兵力の内、その半数にあたる200万人の兵力が死傷することとなった。

つまり、前述したスカンジナビアとアフリカ方面軍の被害を合わせて、連邦は僅か1日で380万人の兵力を失ってしまったのである。

「・・・各方面の軍の状況はどうなっている？」

「はっ。スカンジナビア方面軍とアフリカ方面軍は多少混乱したものの、再編成を完了。何時でも進撃できるとの事です」

「ウラル方面軍は？」

「・・・まだ部隊の状況把握が終わっていないらしく、進撃は困難かと」

「ちっ」

ジーンは副官からの報告に舌打ちをする。

ウラル方面軍が動けないということは、当初の予定であつた三方向からの進撃の内、東側からのオデッサ侵攻が出来なくなる事を意味していたからだ。

とは言え、いきなり味方の半数を失った上に、指揮官クラスも多数吹き飛び、誰が何処に居るか分からなくなっているという現状を前にしては仕方の無いところもある。

前線指揮官であるアレックス少将（オリキャラ）こそ生き残ったものの、部隊の把握すら出来ていない状況では出来ることなど限られているし、そもそも仮に奇跡的に短期間で態勢が整ったとしても隕石の落下によって地形の一部が変わってしまった為に、事実上、一から進撃路を模索しなければならないのだ。

つまり、どう上手くやっても、ウラル方面軍は今すぐ進撃など不可能な状況下にあるのだが、現場に居ないジーンにそこまでの事が分かる筈がなかった。

「スカンジナビア方面軍とアフリカ方面軍だけで攻撃させますか？」

「・・・」

ジーンは少し考える。

元よりここで引くという選択肢はない。

そんなことをすれば、自分は失脚してしまうのは確実だからだ。

しかし、現在の残存兵力は720万人。

その内、ウラル方面の300万人はすぐには動かせない状況下にあるので、すぐに動かせるのはスカンジナビア方面軍200万人とアフリカ方面軍220万人の計420万人の兵力だ。

昨日の戦闘でオデッサのジオン軍戦力は全く減っていないものの、元々オデッサに配置されている兵力が40万人であることを考えれば、まだ10倍以上の兵力を有していることになる。

だが、実働戦力が僅か1日で半数以下に減ってしまった現実を鑑みれば、このままオデッサに突っ込ませて良いものかどうか迷ってしまう。

（・・・もはやあれしかないか）

何かを決意したジーンは副官に対してこう言った。

「アフリカ方面軍に伝える。A―5作戦を行えとな」

「！　そ、それは・・・」

副官はジーンの言葉を聞いて盛大な冷や汗を流しながら動揺した表情を見せる。

A―5作戦。

それは核ミサイルによるオデッサ攻撃命令を意味している。

ミノフスキー粒子下では基本的にミサイルなどの誘導システムはダウンしてしまうのだが、それはあくまで誘導装置だけであり、あらかじめミサイルそのものにプログラミングされた目標に正確に飛ばすといった真似は可能だ。

もつとも、こんな方法では常に動き回っている標的に当たる確率はほぼ0だが、陸上の基地は動かない。

故に、例えばジオンがミノフスキー粒子を撒いていたとしても、ジオンのオデッサ基地を破壊することはできる。

いや、むしろ、その場合、ミノフスキー粒子を撒いている分、ミサイルやレーザー射撃などが使えないので、ほとんどなんの妨害もなく核ミサイルはオデッサ基地の頭上で炸裂することとなるだろう。

「何を躊躇っている？　もはやスペースノイドどもを完全に倒すにはそれしかない」

「しかし、それは南極条約違反になります」

そう、この世界でも核兵器の使用は明確な南極条約違反となっており、使用は厳禁となっている。

もつとも、原作でもそうだったが、追い詰められるとほとんど守ら

れはしない。

勝たなければ意味がないと何処の勢力も考えるからだ。

が、だからと言って使って良いわけではなく、もし使えば国際的に厳しい立場に立たされるし、勝ったとしても戦後に禍根を残す可能性もある。

それを指摘する副官だったが、ジーンは全く意に返さず、それどころか銃を副官に突き付けながらこう言った。

「良いから早くやれ。これは命令だ」

「は、はい」

そのジーンの狂気的な行動と視線に、副官は首を縦に振る以外の選択肢を取ることが出来なかった。

#### ◇オデッサ基地 指揮所

「思ったよりスカンジナビア方面とアフリカ方面の連邦軍の被害が少なかったな」

先程、ウラガン少尉が持ってきた情報部からの報告書を読みなが

ら、マ・クベ大佐はそんな不満を口にする。

当初の予定では1日目の攻撃で敵の戦力の半数程を減らす予定だった。

だが、現実にはウルル方面こそ上手くいったものの、スカンジナビアとアフリカについては3分の1程を減らしたのみで留まってしまっている。

「全部が全部、上手くいくわけではないか。まあ、問題はないがな」

しかし、マ・クベに焦りの色はない。

まだまだ策はあったし、そもそもスカンジナビアとアフリカ方面の連邦軍は海や空を介してしか補給が出来ないのだ。

しかも、上陸したのはそれぞれ200万人という膨大な兵力であり、これを支えるほどの補給となるとんでもない数の輸送船と輸送機が使われることになるので、その到着をこちらで妨害してしまえば、敵はやがて干上がる。

まあ、それでもダメだった場合はもう一度あの隕石落としを行えば良い。

マ・クベはそう考えていたが、1つだけ懸念材料があった。

「このA-5というのはいったい何を意味するのだ？」

それはベルファストからアフリカ方面に向けて送られた連邦軍の暗号を情報部が一部解読した際に偶々出てきた文字だった。

どうやら何かしらの命令か作戦らしいが、マ・クベにはその意味が分からない。

それもその筈で、このA-5作戦というのはエルランにすら内緒に進められていた計画であり、地球に展開するジオン軍諜報部もこの計画については全く掴んでいなかった。

そして、彼らが知らない情報をマ・クベが知っているわけもなく、それ故にマ・クベは困惑していたのだ。

(何かしらの極秘作戦か何かか？まあ、なんにしても今は目前の連邦軍に対処するのが先だな)

マ・クベはそう思いながら、次の策を発動するための命令を下そうとする。

が――

「！ マ・クベ司令！ ミサイルが5発、オデッサ基地に向けて接近してきます!!」

「なに？ では、迎撃しろ」

「それがこの辺は昨日の空爆で敵戦闘機がばら蒔いたミノフスキー粒子が未だ濃く残っておりまして・・・」

「では、何故敵ミサイルは真っ直ぐ飛んでくるのだ？」

「おそらく、接近しているミサイルはあらかじめオデッサ基地周辺に飛ぶようにプログラムされたミサイルではないかと」

「弾道ミサイルか・・・」

マ・クベは苦々しい顔をするが、次いで恐ろしい想像をしてしまう。

(ま、まさか。核か？)

そう、接近しているミサイルが核ミサイルではないかと疑っていたのだ。

(い、いや、幾らなんでも連邦からそんなことはすまい。ここは奴等の

領土なのだからな。それに南極条約違反にもなる。そうだ、サーモバリックに違いない)

あれこれと現実逃避ぎみに理由をつけて核ミサイルである可能性を否定しようとするマ・クベ。

だが、接近する5発のミサイルがマ・クベが危惧した通りに核ミサイルであったということは、数分後にマ・クベ自身と副官のウラガン、そして、オデッサ周辺を護っていたジオン軍将兵12万人の命の犠牲と共に証明されることとなる。

——そして、この翌日の9月6日。

5発の核ミサイルによって消滅したオデッサ基地周辺は、マ・クベが戦死したことにより指揮系統の混乱したジオン軍オデッサ方面軍を蹂躪しつつ急速に南下してきた連邦軍のスカンジナビア方面軍によって制圧され、これをもってジオン軍の欧州方面軍と中東方面軍は完全に分断された。

しかし、ここで核ミサイルを使ったという事実はジオン軍にある決断を促させ、それが新たな悲劇を呼び起こすこととなる。



U C 0 0 7 9 年 9 月 9 日 報復核攻撃

◇宇宙世紀0079年 9月9日 サイド3 ズムシティ 総帥府

(・・・さて、どうするべきかな)

総帥府の執務室でギレンはじつと頭を悩ませていた。

そして、IQ240の彼の頭を悩ませている問題。

それは第二次オデッサ攻防戦で使われた核攻撃に関してだった。

(連邦はこの事態をどうにか誤魔化そうとしているが、流星に誤魔化しきれてはいないみたいだな)

連邦政府はこの事態に関して記者会見を開いたが、その主張はかなり迷走していた。

それこそ『ジオンが使おうとして自爆した』と主張する者から『大量の気化爆弾が使用された』というかなり無理のある主張をする者まで居る。

このような混乱ぶりを晒すということは、どうやら核を使ったのは連邦政府にとっても予想外なものであったのだろうとギレンは思ったが、今はそんな連邦の醜態などどうでも良い。

大事なのは報復核攻撃を行うか否かだ。

(ここで核攻撃を行わなければ舐められる可能性もあるが、かといって本格的な核戦争になれば地球は汚染されてしまう)

ギレンは核攻撃を躊躇っている訳ではない。

20世紀半ば頃を生きた日本人であれば核兵器にたいして悲劇の兵器という認識を大きく持つており、例えば相手が先に使ったのだとしてもこちらが使用することは躊躇ったのだろうか、良くも悪くもそう

いった考えの薄れた21世紀を生きた日本人であるギレンからすれば核兵器はただの戦略兵器の1つ。

加えて言えば、そもそもの話、核兵器が他の兵器に比べて特段に悲惨だというのは、あくまで生きている人間の感想であり、死んだ人間からすれば、その原因が銃弾か核兵器かなど些細な問題だろう。

どっちにしる命を奪われたという現実には変わり無いのだから。

更に言えば、この宇宙世紀世界では放射能除去技術もある程度発達しているし、そもそも宇宙では放射能があつという間に拡散してしまうため、スペースノイドの放射能に対する危機意識はかなり薄い。

が、それでも重力に縛られるアースノイドにとっては核兵器に対する危機意識は旧世紀のものとはほぼ変わらなかつたし、スペースノイドにとつても「大量殺戮兵器」という認識くらいはある。

それ故に今回の事件はアースノイド・スペースノイド問わず注目を集めており、ギレンは核攻撃による報復を行うか行わないかの選択を強いられていたのだ。

だが、この核兵器を使用の可否はそれぞれにメリット・デメリットが存在する。

まず使用した場合のメリットだが、ジオンが連邦の核にやられているばかりではないと示すことができ、様々な勢力からジオンが舐められるのを阻止できるが、その反面、全面核戦争に発展してしまい、地球が汚染されてしまう可能性があった。

もう少し時代を経てならともかく、いま地球の資源を採掘できないようになればスペースノイドとしても死活問題となるし、地球が滅んだ後で今度はスペースノイド同士で資源の奪い合いのための戦争をするという笑えない展開になりかねない。

更に言えば、地球が汚染されたことで地球連邦という存在が無くなってしまうのも困る。

ジオンのように独立のための準備を進めていたのならともかく、そうでない勢力がすぐさま独立した場合、ガンダムVの宇宙戦国時代のようなスペースノイド同士で争う展開になりかねないので、そういった独立準備が出来ていない勢力を保護するためにも地球連邦という

存在が必要だった。

要するに、ジオンにとって連邦という存在は滅んでは困る勢力なのだ。

しかし、だからと言って今回の事を表面上は水に流してこちらが核兵器を使用しなかったとしても、今度はこちらが舐められる。

ヤクザではないが、戦争をしている国というのは舐められたらいけないのだ。

舐められれば、今後も連邦が使ってもジオンは核戦争を恐れて報復してこないと連邦側に思われて、連邦がここぞという時に再度核兵器を使ってくる可能性があるのだから。

博愛主義者や人道主義者から見れば信じられない思考のように思えるだろうが、戦争をやっている軍の上層部（特に強硬派の大半）とこのはどうしても思考が暴力的になってしまうのだ。

だからこそ、核兵器か、あるいはそれに代わる何らかの報復は確実にしなければならぬ。

（難しいな。だいたい連邦も連邦だ。核兵器なんてとんでもない爆弾を物理的にも社会的にもぶつけてきやがって。これは判断を間違えると、ジオンどころか地球圏全体が大変なことになるぞ）

ギレンは改めて自分の判断の重さに冷や汗を流す。

おそらくここでギレンが報復をするかしないかで、今後の地球圏の未来の進路が変わると言っても良い。

もつとも、どちらの決断の方が良い未来が築けるのか、I Q 2 4 0 のギレンにも全くその先が見えていない有り様なので、判断は慎重に行わなければならぬだろう。

ギレンは今この時だけはこのジオンという国が独裁制で本当に良かったと感じる。

現在、ジオン国内では連邦に対して核で報復しろと主張するデモが起きており、もし民主主義国家であればその意見に押される形でありと核攻撃命令の書名にサインしてしまったかもしれないし、仮に

ギレンがしなかった場合、やはり民主主義によってジオンの指導者の座を引き摺り下ろされ、その代わりに指導者の座に着いた者によってやはり核攻撃命令の署名にサインがなされることになっただろう。

(民主主義はベターではあっても、ベストではない、か。何処の誰が言ったかは知らないが、正に的を射ているな)

ギレンはそう思った。

なにしろ、この戦争ではその民主主義国家(と言っても、人口の大半であるスペースノイドには参政権が認められていないので、本当の意味で民主主義かどうかはかなり怪しいが)である地球連邦が積極的に核を使っているのだ。

これでベストだと言う奴は極度の民主主義至上主義者くらいの者だろう。

(さて、それはともかくとして肝心の報復をするかどうかを考えなければな)

思考を一旦戻し、ギレンは改めて核攻撃を行うかどうかを考える。

「.....」

ギレンはたつぷりと思考を回し、そして――

「.....やはり、やるしかないか」

遂に核兵器を使用しての報復を決意した。

◇旧スイス ベルン ジオン軍欧州方面軍司令部  
ジオン軍欧州方面軍の司令部は旧スイスの首都ベルンに置かれて  
いる。

これは海側からの司令部への奇襲を避けるための措置だ。  
そして、その欧州方面軍の司令官であるユーリ・ケラーネ少将はつ  
いさつき送られてきた命令について思い返していた。

「核攻撃を実行せよ、か」

そう、それは欧州方面軍が保有している核を使つての攻撃命令だつ  
た。

目標も既に設定されており、後はそこに撃ち込むだけだ。  
だが、ユーリはどうもその攻撃目標について気に入らなかった。  
別に核攻撃そのものに関しては何も構わない。

むしろ、連邦が使っていた以上、こつちもやり返すべきだろうとす  
ら思っている。

しかし、問題なのは今回の核攻撃の目標が軍やその基地ではなく、  
都市であることだ。

都市であるということは、当然、軍人だけではなく民間人も多数犠  
牲になってしまう。

まあ、与える被害を調整しづらい核攻撃の本来の使い方と言つてし  
まえばそれまでだが、それでも気に入らないというのは確かだった。

だが、それでも軍人にとって命令は絶対であり、基本的に逆らうことは許されない。

「仕方ないか・・・」

ユーリはため息をつきながらそう言うと、近くでユーリの方を見ていたオペレーターに対してこう言った。

「おい。予定通り、発射しろ」

「・・・よろしいのですか？」

ユーリの副官であるシンシア大尉はそう言って再度の確認を行う。

「仕方ねえだろう。俺だって軍の命令には逆らえないんだ」

「・・・了解しました」

シンシアはそう言うと、自分の意見を引っ込める。

そして、ユーリはそんな彼女に後で慰めて貰おうと考えながら、司令部にてこう宣言した。

「目標はアイルランド島・ベルファスト。ここに存在する連邦軍ヨーロッパ方面軍司令部を叩き潰す」

——かくして、この号令の直後、旧フランスから2発の核ミサイルが発射され、目標である北アイルランドへと向けて飛行していく。

連邦軍もそれを確認して必死に迎撃を行うが、欧州方面軍はミサイルの進路上に事前にミノフスキー粒子をばら蒔いており、その迎撃はオデッサのジオン軍の時同様に全く上手くいかない。

そして、2発の核ミサイルがベルファストの上空に到達した直後、

その破壊力が解放され、地球連邦欧州方面軍司令部はベルファストに居た民間人共々吹き飛ばされる。

その民間人の犠牲者の中には、ミハルやその弟と妹であるジルとミリーの姿もあった。

UCC0079年 9月12日 第三次南極会談

◇宇宙世紀0079年 9月12日 南極

「・・・」

「・・・」

南極の施設に存在する一室。

そこでは連邦とジオンの人間が激しく睨み合う。

3日前のベルファストへの核攻撃を受けて、連邦は慌ててジオンに講和交渉を持ち掛け、このまま泥沼になることを危惧したジオンもそれに応じた結果、南極で三度目の会談が行われることになったのだが、両代表は会った途端に険悪な雰囲気を感じ出していった。

それはそうだろう。

ジオンからすればワルシャワの件に続いて2度目の連邦による核攻撃であり、更に言えば今回は南極条約がキチンと締結された後での核使用だ。

非難したい気持ちは大いにあった。

だが、一方で連邦側からしてみてもベルファストへの核攻撃は<sup>アイズライド</sup>民間人を多数犠牲にしており、それによる怒りの感情は当然存在する。

だが、だからと言って非難しているばかりでは会談を持ち掛けた意味も応じた意味もない。

しかし、感情的な面から両代表団は自分から言葉を発する気にならず、会談の筈なのにただひたすら睨み合うという珍妙な光景がそこに出現していたのだ。

もつとも、それでは話が進まないということ、まずキシリアが泥を被る形で口火を切った。

「まずそちらから会談を持ち掛けた理由について改めて伺いたい」



キシリアは連邦側の代表に向かって初っぱなから言葉のボールを投げる。

もつとも、その内心では連邦に対してかなり怒っていた。

マーサの行方を追わなければならぬこの忙しいときに、とんでもないことを起こしてくれたせいで余計な仕事が増えてしまったからだ。

「はい、まず我々の要求はこの戦争の休戦です」

「休戦か・・・」

休戦。

それは一言で言えば、戦いを止めることだ。

ただ停戦と違うのは、停戦が講和交渉などで戦争を終結させることを前提に戦いを止めるのに対して、休戦は戦争を再開させることを前提として戦いを一時的に止める事だった。

(冷却期間を設けるという意味では悪くはないが・・・)

確かに双方の核攻撃によって色々な意味で加熱した双方の世論を冷ますには一時的であっても平和な時間を作るのが一番だ。

キシリアもそれを分かっているが、だからと言って容易に休戦など呑めない。

何故なら、そもそも休戦協定というのは内容にもよるが、基本的に休戦期間の間は戦力の回復がOKなのだ。

当然、そうなれば国力の大きい連邦に大きく利してしまうので、国力の小さいジオンとしてはそれは避けたかった。

「・・・ちなみにだが、休戦期間はどれ程だ？」

「こちらは1ヶ月程と考えています」

「ふむ・・・」

キシリアは考える。

1ヶ月ということは10月の中旬に戦争再開となるが、そのくらいの時間があれば各サイドへの更なる工作が可能だ。

もしかしたら、ジオン支持を明確にするかどうかを迷っているサイド2を正式にこちらに着けることが出来るかもしれない。

ただ前述したように、1ヶ月の間は連邦に戦力回復の機会を与えてしまうことになる。

迷うキシリアであったが、そんな彼女に連邦の代表は更なる言葉を投げ掛けた。

「それから、貴国がウラル方面軍に対して使った質量攻撃ですが、今後はあれを禁止していただきたいのですが・・・」

「それは出来ない」

男の言葉をキシリアは一刀両断と言わんばかりに切り捨てる。

なにしろ、あの隕石攻撃は核兵器を除いて重力戦線における連邦との戦力差を引っくり返す重要な手段なのだ。

一方的に禁止しろと言われて呑める筈もない。

だが、男はそれも分かっていたのか、その対価となるある提案を行う。

「この提案を飲んでくれれば、我々はジーン・コリニー元大将の身柄を貴国に引き渡す用意が有ります」

そう、あのオデッサの一件以来、ジーン・コリニー大将は政治家達から見限られ、即座に更迭されていた。

幾ら現政権が強硬派と言っても、核兵器を自分達の領土で使ったという事実は次の選挙に大きく影響すると思っただからだ。

もつとも、彼らの対抗馬たる和平派議員は先月の破壊工作で全滅しているが、それでも同じ強硬派においても自分が上に立つために足を引つ張ろうとする者も居るので、なるべくそういった者達に弱みを見せたくない。

その為、今回の南極会談ではあの軌道上からの質量攻撃を禁止させるための交渉材料としてジーンの身柄を大いに利用するつもりであり、同時に彼の身柄をジオンに引き渡すことで、地球上で核を使ったという地球連邦の汚点を無かったことにしたいという思惑があった。

「それが本当なら興味深いが・・・それが本人であるという証拠は？」

確かに核兵器を使った主犯であるジーン・コリニーの身柄をこちらが手にすれば、彼に核兵器を使った罪を全て被ってもらうことで、連邦に対する憎悪を彼一人に集中でき、国内の強硬論をある程度抑えることが可能だ。

しかし、それは本人であったらの話。

引き渡された人物が影武者だったり、あるいは無いとは思いますが同姓同名の別人を大将に強引に上げたジーン本人の代わりの生け贄だったりすれば、ジオンはいい笑い者になってしまうのだ。

「お疑いになるのであれば、引き渡し前にDNA鑑定でもなんでも、検査をしていただいて結構です。ただ、その為には先に言った休戦を受け入れて頂くことが必要ですが」

「・・・なるほど」

キシリアは納得する。

おそらく、連邦の狙いは休戦協定を結ぶこと、厄介者となったジオンをジオンに引き取らせること、そして、質量攻撃の禁止を取り付け

ることの三点。

それを考えれば、連邦の提案は大きく連邦に利するが、逆に言えばジオンも1ヶ月の時間が作れるし、核攻撃によって半ば手綱が外れかけた世論操作が可能だ。

「・・・良いでしょう。そちらの提案を受け入れましょう」

暫しの考えの後、キシリアは提案を受け入れることを決めた。

「貴女の決断に感謝します」

連邦の代表はそう言ってキシリアと握手を交わす。

——この会談により、1ヶ月の休戦とジーン・コリニー元大将のジオンへの引き渡し、そして、南極条約の新たな項目として『大質量天体落下攻撃の禁止』が盛り込まれることとなった。

しかし、彼らは知らない。

1ヶ月と定めた休戦期間が1週間と経たないうちに破られてしまうということ。

「ふむ。1ヶ月の休戦期間が設けられた、か」

ギレンは報告書を見てそう呟きながら、あることを考える。

1ヶ月の休戦。

そのメリット・デメリットについては上記した通りであるが、ギレンはこの時、もう1つメリットを見出だしていた。

それはソーラ・レイの開発についてだ。

原作でア・バオア・クーに攻め寄せた連邦艦隊の3割（実際はもつと撃沈できたが、ギレンがデギンを暗殺することを優先した為、その被害で治まった）を消滅させたこの兵器は、ソーラ・システム以上の射程と破壊力を誇っており、対連邦戦における切り札とも目されていた。

ただ戦前はコロニー1個丸々を兵器に改造するような真似は流石に無理があった上に、ソーラ・システムの開発が優先されたことでこの兵器の開発はされていなかったのだが、それでも基礎研究くらいはさせており、その気になればその辺のコロニーを1週間でソーラ・レイへと生まれ変わらせることもできる。

もつとも、適当なコロニーが無いことと艦船の建造にリソースが割かれた為、ソーラ・レイの建造は不可能だったが、この1ヶ月でどうか適当なコロニーを探し出して建造することも、もしかしたら可能かもしれないとギレンは思っていた。

「…そう考えると、休戦期間を設けたのは場合によつては好都合だったかもしれないな」

ギレンはそう考える。

そもそもソーラ・レイは使わなくても良い。

ソーラ・レイ無しで戦いが終わればそれに越したことはないし、戦争が終わった後でも抑止力くらいにはなる。

まあ、前述したようにそもそも使用するコロニーを何処から持つてくるか考えなくてはならないが、それはこれから考えれば良い。

あるいはいつそのことソーラ・レイ専門のコロニーを一から造ると  
いうのもありだろう。

もつとも、それをやったら確実にこの戦争には間に合わなくなるだ  
ろうが。

「やれやれ戦いは休めても私は休むことは出来そうにないか。まあ、  
こればかりは仕方ない。この休戦期間の間はとんでもない報告が  
入ってきそうにないだけ、良いと思うしかない」

ギレンはそう言ったが、この時の台詞が盛大なフラグであったとい  
うことを、彼は1週間も経たずに思い知らされることとなる。

UC0079年 9月16日 不吉な前兆

◇宇宙世紀0079年 9月16日 サイド7周辺宙域 ホワイ  
トベース 艦橋

ホワイトベース。

それはペガサス級強襲揚陸艦の二番艦であり、原作では伝説的な働きをした艦だ。

ちなみにスペックは原作と全く同じで、先月に盗まれたペガサスには無かったミノフスキークラフトが搭載されている。

原作と違って連邦にミノフスキー関連技術があまり無かった為、この世界の当初の計画ではペガサス同様にホワイトベースにはミノフスキークラフトを搭載する予定はなかったのだが、マハラジャから提供された技術情報と原作よりも多額の予算を掛けたことにより、ミノフスキークラフトが完成して搭載された結果、ホワイトベースは原作通りのスペックで誕生することになった。

もしこの全貌を転生者達が知っていたら、マハラジャを即刻サイド3に呼び出して軍法会議抜きでの銃殺刑を行っていただろう。

それほど転生者達にとってホワイトベースという存在は恐るべきものなのだから。

さて、そんなホワイトベースではあったが、現在とはある任務のために地球を出て、サイド7へと向かっていた。

「艦長、もうすぐサイド7です」

まだ19歳の若い青年士官——ブライト・ノア少尉は艦長であるパオロ・カシアス中佐に向けてそう報告する。

「そうか」

「しかし、改めて思いますが、この状況下でこんな拙速な行動を取ってもよろしかったんでしょうか？」

ブライトは懸念を口にする。

今回のホワイトベースの任務はサイド7で開発されている技術スタッフと関連資料並びに研究のために現地の研究施設に運び込まれた涵獲したジオンのMSを回収すること。

これは最近、宇宙での政治工作を強めているジオンにサイド7で開発している連邦のMSの事を察知されることを恐れ、連邦軍上層部がそれらの回収を命じた為だった。

行動が今さら過ぎる気もするが、今さらそれを攻めてもどうにもならない。

だが、ブライトは言いたいのはそのうちのことではない。

休戦協定が成されたこの時期にジオンを刺激するような行動を取るの是不味いのではないか？

そうブライトは言いたかったのだ。

「お前の言いたいことは分かるが、軍の命令だ。仕方あるまい」

パオロはブライトに対してそう答えた。

もつとも、ブライトと同じ懸念はパオロとて持っている。

宇宙は言うまでもなくジオンの庭だ。

例えV作戦の事が無かったとしても、休戦期間中にその庭である宇宙で敵国の軍艦が堂々と航行などしていれば、それだけでジオンを刺激してしまうだろう。

下手をすれば、休戦協定破棄だと判断されて休戦期間が期限より早く終わる可能性すらある。

それを考えれば、いま軍艦を宇宙に飛ばして航行させるのは大変危険な行為であったが、上の命令ならパオロは黙って従うしかないのだ。

「はっ。申し訳ありません」



「うむ。それと今回の作戦は連邦の今後を左右するだろう」

これはあながち嘘でもない。

原作と違ってこの世界では9月になっても連邦はMSの試作機ですら出来上がっていない（原作では7月には試作機が完成していた）有り様であり、ここでサイド7の資料が焼かれたり奪われたりすれば、それだけでは連邦のMS開発計画は頓挫してしまい、連邦のMSが今年中に完成する可能性は皆無になってしまうのだ。

もつとも、パオロはそこまで意図して言ったわけではなかったが、部下の気を引き締めるために敢えてそのような言葉を言っていた。

「心して任務にあたるように」

「はっ」

艦橋でそのようなやり取りをしながら、ホワイトベースはサイド7へと近づいていく。

そして、サイド7の港に入港するのはそれから3時間後の事だった。

## ◇ソロモン

「ふむ、こいつの改造は順調だな」

ドズルはそう言いながら、今現在、ソロモンで改造中のペガサス級強襲揚陸艦のネームシッパ——ペガサスの姿が描かれた資料を見る。

1ヶ月程前にランバ・ラル隊によってジャブローから奪われたその艦だったが、流石のランバ・ラルもなんの手土産も無しに軍から勝手に抜けるのは悪いと思ったのか、手切れ金代わりとして奪ったペガサスをシロー達と共にサイド2へと置いていったのだ。

そして、基本的に同様の艦体をしているこの艦は改造を行えばミノフスキークラフト搭載が可能なように造られており、ドズルはこれを使ってホワイトベース隊ならぬペガサス隊を結成して連邦相手に大いに暴れ回させる予定だった。

(だが、問題なのは丁度良い艦長が居ないことだな)

そう、ジオンにはホワイトベース隊のアムロに代わる役であるエースパイロット(この世界ではアムロ本人も居る)や指揮官レベルの名将は数多く居るのだが、何故かブライト・ノアのような艦を上手く指揮できる艦長クラスの名将があまり居ないのだ。

いや、一応、イグルーでヨーツンヘイムの艦長だったマルティン・プロホノウが候補には挙がっている。

彼は原作ではジオン公国に愛国心は有るものの、一年戦争については懐疑的に見ていたというある意味理性的な人物だ。

正に単艦行動が多くなるであろうペガサス級を任せるにはうってつけの人物で、彼ならばブライト・ノアにも対抗できるかもしれない。が、彼は基本的に民間の人間であり、イグルーでのあれはヨーツン

ヘイムという技術スタッフが大半だった艦だから上手い指揮が出来たのかもしれない、本来の軍人を扱いこなせるかは分からない。

ましてや、ジオンの軍人というのは精鋭ではあるが、その分、癖が強いのだ。

上手く噛み合わせないと、なんの戦果も挙げないうちに折角手に入れたペガサスを失うだけになってしまいうだろう。

そのことから、ドズルも彼のペガサス艦長への登用を躊躇っていた。

(まあ、このまま適任者が見つからなければ奴に任せるしかないか。となると、良いスタッフを見つけなければならんな)

だが、この良いスタッフというのなかなか難しい。

原作のホワイトベースは大半の正規軍人が序盤で戦死して、民間人が代わりに乗組員として登用されるといふ特殊な環境下にあったが、まさかそれを再現するわけにもいかないだろう。

イグルーのヨーツンヘイムの乗員をそのまま使うという手もあるが、それではカスペン大佐との関係の例からも分かる通り、正規軍人との折り合いが悪くなってしまう可能性が高い。

(他に良い指揮官は・・・シロー・アマダくらいか?)

だが、それは難しい。

彼は間違いなく有能な指揮官ではあるが、それはブライトとは別質なものであり、とてもではないが艦長など務まらないだろう。

まあ、戦闘隊長としてはうってつけなのでペガサスのMS隊の隊長にするという手もあるが、彼は今、特殊部隊の指揮官であり、地球方面軍の所属だ。

それを勝手に引き抜いたりすれば、ガルマが煩く言ってくるだろうし、現地の特種活動に支障が出る可能性がある。

(となると、艦長をマルティンにして戦闘隊長を・・・そうだな、ジョニー・ライデンにでもするか?)

ジョニー・ライデン。

言わずと知れたジオンのエースの1人であり、堅物な軍人が多いジオンの中では珍しく気さくな性格をした人物だ。

彼ならば、マルティンとの折り合いを上手く付けられるかもしれない。

ちなみに同じエースでもアムロをペガサスに乗せるつもりはない。何故かは知らないが、とんでもないことを引き起こしてしまう気がするからだ。

「あとはオリヴァー・マイ技術中尉も乗せるべきだな。奴なら咄嗟の戦況で技術分析も可能だろう」

オリヴァー・マイ技術中尉。

原作イグルーの主人公であるが、この世界では技術本部に籠ったまま実戦には出ていない。

技術屋としての気質が強く、色々と頭でっかちなところはあがあるが、実戦において冷静に状況を見極めるなど、分析官としてもかなり有能な人物でもある(その先が無いのが残念だが)。

指揮官としての才能は全く無いが、取り敢えず乗せておけば色々と役に立つこともあるだろう。

(まったく。色々と人選が難しいな。原作のホワイトベースは本当に運が良かったんだろうな。まあ、主人公補正が大きいんだろうが)

ドズルは改めてホワイトベースの主人公補正を恐ろしく思った。

乗員が民間人がほとんどという状況にも関わらず、エースクラスとジオンの精鋭が多数襲い掛かってくる中での敵中突破、更にはレビル將軍の無茶かつ鬼畜な命令(単艦で敵の戦力を引き付けろ。ちなみに

人員の補充はしない）を見事遂行する。

そして、再び宇宙に出ると相手がエースだろうと大軍だろうとポンポン葬っていくチートレベルな活躍をする化け物集団と化しているという正にジオンにとっては疫病神的な存在だった。

（もつとも、この世界では流石にそんなフラグはないだろう。そもそもアムロはこちらに居るしな）

そう思いながら安心したような表情をするドズル。

だが、そんな彼の執務室に突如ノックの音が鳴り響く。

「入れ」

「失礼します」

そう言っに入ってきたのは、副官であるラコック大佐だった。

「どうした？」

「はっ。キシリア閣下からです」

「キシリアから？で、内容は？」

「はっ。連邦のMS開発計画。V作戦の事ですが、サイド7で行われている可能性が高いという情報が送られてきました」

「・・・はっ」

ドズルは思わず、持っていた資料を取り落とした。

UC0079年 9月18日 (量産型)ガンダム、大地に立つ

◇宇宙世紀0079年 9月18日 サイド7 グリーンノア

「まさか、本当にあるとはな」

ジムⅡに乗るデニム曹長は言いながら、連邦の研究施設らしき建物を見る。

V作戦がサイド7で行われていることが分かった後、ドズルは慌てて偵察隊を派遣したが、急に言われたのであまり整った戦力は準備できず、結局、たまたま次の部隊への配置を待っていたドレン少尉の指揮する巡洋艦『ファルメル』とデニム曹長、スレンダー軍曹、ジーン伍長がパイロットを勤めるジムⅡ一個小隊(3機)がサイド7へと送られることとなった。

そして、現在、ジムⅡ3機全てがサイド7へと侵入し、スレンダー軍曹機が退路の確保を勤め、デニム曹長機とジーン伍長機によって本命である偵察が行われている。

ちなみにその偵察隊の名簿を見た時、ドズルは『これが原作補正なのか・・・』と訳の分からない事を言いながら膝から崩れ落ちそうになったのだが、今はどうでも良い話だ。

「おい、ジーン。分かっていると思うが、勝手に発砲はするなよ」

『分かっていますよ。そんなにしつこく言わなくとも』

その不遜な態度に、デニムは本当に分かっているのかと内心で頭を抱えた。

このジーン伍長という男は最近入った新兵で、そこそこMSの腕はあるのだが、それ故に少し増長している。

もつとも、今回はドズル中将直々に偵察に留めるように強く釘を刺されているので、不満ながらも命令を守る気は有るようだが、逆に言えばそうでなければMSを確認した途端に発砲、という行為をやらかす可能性すらあったのだ。

今後部下として使うのであれば、早く“修正”しておいた方が良い。

そう考えながら、再び連邦の施設の存在する方角を見る。

「ん？」

そこでデニムは見た。

なにやら施設の連邦軍らしき人間たちが慌ただしく動くのを。

「感付かれたか？」

ジムIIは全長が18メートルもある。

隠れているとは言え、そんな巨大な存在が施設の近くに居れば何かの拍子に気づいても可笑しくはない。

だが、デニムに焦りの感情は全く無かった。

(まあ、慌てることはないか)

現在、連邦とジオンが休戦期間中であるということとはデニムのような下士官どころか、末端の兵ですら知るところだ。

連邦側も当然知っている筈なので、仮に本当に発見されたとしても攻撃されることはないだろう。

むしろ、こちらのジオンが慌てて発砲しないかどうか心配だ。

そう思い、改めてジオンに注意を促そうとするデニム。

だが――

『で、デニム曹長！や、奴等、こっちにミサイルを撃つてきました!!』

「なに?！」

デニムが慌ててそちらを見ると、そこにあっただのは連邦の陣地から有線ミサイルが発射され、こちらに飛んでくる光景だった。

◇

「母さん、早く!!」

サイド7のコロニー内をセイラことアルテイシアは母親であるアストライアの手を引きながら、避難民と共に必死で逃げ回る。

サイド7は戦場と化していた。

ジオンのMSが2機確認されたことで、秘密施設の存在を悟られたと焦った連邦の施設警備隊の指揮官が焦って有線ミサイルを発射してしまったのだ。

その様子を見たパオロ中佐が慌ててその指揮官を宥めるが、その時には既に遅く、ジーンが応戦して120ミリマシンガンを発砲したことによって本格的な戦闘が始まってしまった。

この瞬間、1ヶ月の予定だった休戦期間は僅か6日で破られることになったのである。

だが、そんな事情など、こうして逃げ回っている民間人達には関係



のないことだ。

「アルテイシア、あなただけでも先に逃げなさい！」

「な、なに言っているの!?!」

突然の母の発言に、アルテイシアは思わず叫んでしまう。

だが、この時、アストライアは精神的にかなり疲れていた。

それはそうだろう。

自分が人質になったせいでアルテイシアはあんな宣言をさせられ、彼女のこれからの人生はほぼ壊れてしまったも同然になった上に、昔からの馴染みであるランバ・ラルとその部下達には苦勞を掛けさせてしまい、その上こうしてサイド7に移り住んで戦場となった時でも足を引つ張り続けている。

母としての責任感が強いアストライアにはそれらの事実が何よりも強い重圧となつてのし掛かっていた。

「もうこれ以上・・・あなたに迷惑は・・・」

「バカなことを言わないで!!ほら早く!!」

アルテイシアはそう怒鳴りながら、尚もアストライアを連れていくとする。

この場で先に行つて置いていくなどという行動を取れば、アストライアがどうなるかなど自明の理だ。

そもそもシヤアと同じくらいに母親に愛情を持つアルテイシアにそんな行動が取れる筈もなかった。

(でも、このままじゃちょっと不味いわね)

セイラは少し焦っていた。

戦闘をしているのが暴徒、あるいは歩兵クラスの戦闘程度ならシエルトターに入れば取り敢えずは一安心となるだろう。

だが、現実に暴れているのはモビルスーツだ。

そして、モビルスーツの120ミリマシンガンの直撃を受ければ、流石にコロニーに穴が開くことは無いだろうが、シエルトターは跡形もなく吹っ飛ぶ。

「何処か安全な場所は・・・」

そう言っただけを見回すセイラ。

すると、その視線の先に白い目立つ見覚えのある形状をした軍艦らしきものが見えた。

（あれが確かランバが連邦から奪った艦・・・でも、微妙に細部が違う気がする）

セイラはそう思ったが、今はとにかく生き残ることが優先と、あの軍艦に乗ることを考える。

「母さん、ちよつと待ってて。私、あの軍艦に乗せて貰えるように頼んでみるから」

セイラはそう言っただけその軍艦——ホワイトベースの方に向かって走っていく。

乗せて貰えるかどうかは分からない。

だが、それをしなければ自分も母も死ぬ可能性が高い以上、やるしかないだろう。

そう思いながら、アストライアが制止する声も聞かずにセイラはホワイトベースへと向かう。

しかし、その時——

「きゃあー！」

近くに120ミリ砲弾が炸裂したことで、セイラの体は宙を舞う。だが、着弾した場所からある程度離れていたことと着地した先が土であったことで、どうにかセイラは重傷を負うことなく態勢を建て直す。そこで彼女は恐ろしい光景を目にしてしまった。

「えっ……かあ……さん？」

そう、先程の120ミリ弾が着弾した位置は丁度自分の母が居た位置だったのだ。

当然、120ミリ弾の直撃を受けて人体が無事である筈もなく、アストライアの身体は先程の爆発によって跡形もなく無くなっていった。

まどろこっしいので、単刀直入に言おう。

アストライア・ソム・ダイクンは死んだのだ。

だが、セイラはその現実を受け入れられず呆然としている。

しかし、未だ聞こえてくる戦闘音によって慌てて我に返ると、今の状況をどうにかしようと慌てて辺りを見回す。

もつとも、母が殺された動揺が抜けきっていなかったために、思考が定まらず、その冷静な行動もほとんど無駄になっていた。

だが――

「あれは……」

そこで目にしたのは、連邦の輸送車にその巨大な体を横たわらせている瀕獲されたジオンの量産型ガンダムだった。

「あれに乗ればー！」

母の仇を取れるかもしれない。

そう思いながらそちらに走り出そうとするが、その視線の先にフラ

フラと歩いている15歳くらいの少女を見る。

「何しているの！早く逃げなさい!!」

「お父さんとお母さんが・・・」

そう言う少女——フラウ・ボウの視線の先をセイラは見る。

そして、その先にあった死体だらけの状況を見て理解した。

フラウの両親は先程の爆発によってセイラの母同様に死んだのだ、と。

「・・・今は逃げるのが先よ。そうしないと考えることも許されないうちに死ぬわ」

「で、でも・・・」

それでも躊躇うフラウだったが、セイラはそんな彼女を頬をひっぱたく。

「甘えるんじゃないの！この際だから言うけど、私も今の攻撃で母を亡くしたわ!!」

「・・・あなたも?」

「そうよ！でも、私たちが生きていないと悲しむことも許されないのよ!!だから、今はとにかく生きなさい!!」

セイラはそう言いながら、先程見えたホワイトベースの存在する位置を指差す。

「あつちに連邦軍らしき軍艦があるから、そこに助けを求めなさい!!」

そう言うと、セイラは再び量産型ガンダムの方へと向かって走っていった。



「・・・」

巡洋艦『ファルメル』の艦長であるドレン少尉はスレンダー軍曹からの報告に思いつき顔をひきつらせる。

あれから量産型ガンダムが起動した後、動き的に素人と見て真っ先に襲い掛かったジーン伍長は最初は優勢だったものの、量産型ガンダムが搭載していたビームサーベルを使用したことで最終的に返り討ちに遭って戦死。

その仇を討とうとしたデニム曹長も続けて戦死した為、残ったスレンダー軍曹はそれを見て撤退し、こうして報告を行っていた。

しかし、その戦闘よりもドレンが重要視していたのは自分の任務によって連邦との休戦が破棄されてしまったことだ。

無論、連邦が発砲してきたのならばそれは正しい対処方法なのだが、それを上に報告しなければならぬ立場としては頭が痛い。

(それよりもどうしようか?このまま敵が出てきたところを襲撃するか?)

休戦が破棄された以上、休戦協定を守ることに意味はない。

ならば、スレンダーが目撃した連邦の戦艦(実際は強襲揚陸艦)と  
いうのを襲撃してみるのもありなのかもしれないとドレンは考える。  
が――

(流石にジムⅡ機じゃ無理だな。それに戦艦ならば、巡洋艦のこの艦では撃ち負ける可能性が高い。ここは撤退するべきだな)

元々、この艦に搭載されていたMSはジムⅡが3機。

しかし、その内、2機は先の戦闘で失われてしまった。

そして、2機でもダメだったものが1機でどうこうなるとも思えない(まあ、1機がシャアレベルであれば話は別だが)ので、ここは素直に引こうとドレンは考えた。

「よし、撤退だ。まずはドズル閣下にこの事を伝えることを最優先とする」

――こうして、ファルメルは原作と違い、その後に出てくるホワイトベースを襲撃することもなく撤退した。

U C 0 0 7 9 年 9 月 2 2 日 新部隊の結成

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 9月22日 ソロモン  
サイド7での1件から4日。

のび太とドラえもんは宇宙攻撃軍司令部に呼び出される形でソロモンへとやって来ていた。

「これが僕が乗る戦艦かな？」

のび太はそう言いながら、目の前に存在する巨大な艦艇——ペガサスの姿を見る。

ソロモンに到着した後、のび太はこのドッグで待機するように言い渡されたのだが、その先で待っていたのはこの艦艇だった。

「翼が有るなんて変わった艦だな。まるでSF映画に出てくる船みたいだ」

「本当だね」

のび太の言葉にドラえもんは同意する。

のび太も戦争に参加してから軍艦は何隻も見してきたし、ドラえもんもルナツーで宇宙戦艦を見ていたのだが、ペガサスのような奇抜な形状をしている艦は見てこなかった。

その為、ペガサスのはのび太とドラえもんから存在そのものがSFチックだという感想を抱かれていたのだ。

まあ、転生者から言わせればのび太の世界やこの世界そのものがSFの世界なのだが。

「あれ？なんでこんなところにガキが居るんだ？」

そう言っつてのび太達に声を掛けてきたのは今年19歳の若い金髪

の男。

彼の名はバーナード・ワイズマン。

階級は伍長で、今月に高校を卒業して徴兵されて軍に入隊してきたばかりの男だ。

彼もまたペガサスの乗員としてここに招かれていた。

「あの・・・あなたは？」

「そりゃこっちの台詞だよ。・・・まあ、良いけどよ。俺はバーナード・ワイズマン。お前は？」

「僕は野比ノビのび太ビタ特務准尉です」

「なに？お前、軍人だったのか!?しかも、准尉って・・・」

バーニイは2つの意味で驚いた。

のび太が軍人であったということと、自分より3階級も上の上官であるということにだ。

まあ、そもそもソロモンは宇宙要塞であり、軍属じゃない人間などそれこそドズルの妻であるゼナ・ラオ・ザビと最近産まれた娘であるミネバくらいなものなので、のび太が軍属じゃない立場という事はスパイでもない限り有り得ないのだが。

「なんの騒ぎだ？」

そんな2人のやり取りの間に入ってきた1人の男。

そして、その男が着けている大尉の階級章を目にしたバーニイとのび太は慌てて敬礼を行う。

「す、すいません。大尉」



「いや、良い。・・・ところで、お前がノビタ・ノビか？」

「は、はい。そうですが・・・」

「そうか。シーマ大佐から話は聞いてるぜ」

「シーマ大佐から、ですか？」

「少し縁があつてな。それより、後でMSの腕前を見せてくれないか？灰色の死神とやらの実力がどれ程のものか見たいんだ」

「は、はあ。分かりました」

「頼むぞ」

男——ジヨニー・ライデンはそう言いながら、その場から立ち去っていった。

「えっと・・・あの大尉の人、結局誰だったんだろう？」

「さあ」

のび太の言葉にドラえもんも反応に困ったが、それに答えたのはバーニイだった。

「お前、知らないのかよ!?あの人は真紅の稲妻ジヨニー・ライデン大尉。ジオンのスーパーエースの1人だぞ!!」

「ぞ、そうなんですか?」

のび太は少々引き気味にそう言うが、真紅の稲妻という異名はのび

太も聞いたことがあった。

半年前に死んでしまった伍長から聞いたジオンのエースの1人。

「ああーて言うか、お前も異名持ちかよ!!」

「ええ。まあ・・・」

少々複雑な表情をしながら、のび太はそう答える。

灰色の死神の異名は地球方面軍ではかなり有名だが、宇宙ではルナツーを除けばそれほどでもない。

これはルナツー防衛戦でののび太の戦果が隠匿されているからだ。

「じゃあ、俺も負けてらんねえな」

「・・・そうですか。まあ、それはともかくこれからよろしくお願いします」

「ああ」

のび太が差し出した手をバーニイはがっしりと掴み、2人は握手を交わした。

◇ソロモン 周辺宙域

「……まあまあだな」

ジョニーはのび太のMSの腕を見ながらそう評した。少しキツイ言葉ではあるが、別にジョニーにはのび太に失望したわけではない。

あの操縦技術は紛れもなく精鋭部隊に配属されてもやっていけるレベルであるし、のび太の年齢を考えればまだまだ腕が上がる要素は存在する。

だが、エースレベルとしては少し物足りず、思っていた程の技量ではなかったというのが本当のところだ。

「まあ、あいつの強みはあの射撃技術だからな。それを含めれば充分エースにはなりうるだろう。問題は——」

ジョニーはそこでワイズマンの機体を見る。

「ガンダムではないとはいえ、あれは丸つきり新兵の動きだ」

そう、ある程度洗練された動きをしているのび太とは違い、ワイズマンの方は丸つきり新兵の動きだった。

まあ、それも当然だ。

バーニイは今月に入隊したばかりの正真正銘の新兵だったのだから。

それでも普通なら問題ないのだが、これから配属される部隊でそれは困るのだ。

(単艦航行をする少数精鋭の強襲部隊の設立。やりたいことは何となく分かるが、なんで上層部はこいつを指名したんだ?)

ジョニーはそんな疑問を持ったが、その疑問を転生者達が聞けばこう答えただろう。

『兵士としてのポテンシャルが非常に高いため』、と。

実際、バーニイは原作では入隊3ヶ月にも関わらず、補充兵とは言え、特殊部隊であるサイクロプス隊の隊員に配置される程の人物だ。

この事から、兵士としてのポテンシャルは非常に高いことが伺える。

更に言えば、彼は原作では宇宙世紀に3人しか居ない『ザクでガンダムを撃破した人物』の1人だ。

まあ、バーニイの場合は他の2人(ゲラート・シユマイザー、ダリル・ローレンツ)と違ってガンダムが万全の状態で戦った訳ではなかったし、劇中の描写からするに最終的に中破止まりであったが、それでもジオンの軍人の大半が出来なかった偉業を成し遂げているということに変わりはない。

だが、そんなことをジョニーが知るわけもなく、彼は新兵とも言つて良い人物がこのような過酷な運用をされる部隊に配属されたことを疑問に思っていた。

(もしかして、この部隊は使い捨てか?)

そうも考えるジョニーだったが、同時にその可能性は低いとも考えていた。

なにしろ、ジョニーの機体は最新鋭の量産型MSであるザムだし、のび太の機体に至っては少数精鋭機のガンダム、それもオリジナルの改良型の機体だ。

基本的にガンダムはオリジナルと量産型の種類があり、オリジナルは採算度外視で作られている。

その為、当然のことながらオリジナルの方が量産型より性能が良いが、同時にコストも高く、そんな機体を使い捨てる人材に与えるという事はあり得ない。

まあ、バーニイの機体だけは旧式のジムⅡ改であるが、あれは本人の技量が未熟なのでしようがないだろう。

(他の連中はちよつと古いが、それでもジムシリーズの最新版であるジムⅢが配備されているしな。益々分からね)

考えれば考えるほど、上層部が何を考えているのか分からない。使い捨てにするのか、それとも逆に重宝するのか。

まあ、前者は論外だが、後者もそれはそれで戦場に出る機会は多くなるので、戦争があまり好きではないジョニーとしては困るのだが。

(そもそもあの強襲揚陸艦ペガサスだったか？連邦から奪った最新鋭艦と聞いたが、なんであれを単艦で運用するんだ？)

あれが最新鋭艦というのは嘘ではないだろう。

見た感じ、艦の造りは出来立てホヤホヤといった感じだったのだから。

しかし、強襲揚陸艦というのはあくまで上陸作戦の際に戦場となる場所に部隊を上陸させる艦種であり、間違っても単艦で運用するものではない。

幾ら少数精鋭の部隊と言っても2、3隻の護衛は付いてしかるべきだ。

ジョニーはそう考えていたが、それはあくまで、ペガサス級の性能をよく知らないからこそ出来た指摘とも言える。

ペガサス級は原作のホワイトベースからも分かる通り、防御力が物凄く、たいていの戦場には適応可能だ。

でなければ、原作のア・バオア・クー戦で沈む前に何処かの戦場でやられていただろう。

そして、だからこそ、無茶な単艦行動も行えるし、敵地に浸透させて大暴れさせるなんてことも出来る。

とは言え、このペガサスはかなり貴重な艦だ。

連邦から滲獲したは良いものの、設計図は無い上に調べたところかなりコストも掛かり、とてもじゃないがジオンの国力で真似して量産することなど出来ない。

つまり、ペガサスは一度失われればそれっきりになってしまうと言ってもよく、本来ならばもう少し慎重に運用するべきだっただろう。

だが、そうもいかない事態が起きてしまったのだ。

ホワイトベース。

ペガサス級の二番艦であり、言うなれば彼らの母艦となるペガサスの妹艦。

あんな高級艦の同型艦という点も脅威なのだが、それ以上に恐ろしいのがこの艦が持つ主人公補正だ。

おまけにどういうわけか、量産型とはいえガンダムまで運用している。

これを聞いた時の転生者の反応は、ある者は不吉な予感に冷や汗を流し、ある者は顔をひきつらせ、ある者は胃薬を準備し始め、ある者は頭痛によって頭を抱え、ある者は意識を失って卒倒しそうになり、ある者は口から泡を吹いて倒れるなど、いずれも散々な反応をしていた。

それほどホワイトベースという存在は彼らにとって恐ろしい存在であったのだ。

が、それでも彼らは指導者としてジオン人としての敢闘果敢な精神(笑)を発揮し、更にはアムロが向こうには居ないという事実によって自分を慰めて持ち直すと、すぐさま対策に移った。

そして、その結果、ペガサスとそれに搭載される部隊の編成を急ぎ、ホワイトベース足止め部隊として運用することを急ぎ決めたのだ。

だが、急いで編成されたことによって乗せるパイロットの機体の更新が間に合わず、ザムにジムⅢ、ジムⅡ改、ガンダム改の四種類のM

Sが混在するというチグハグな状態になってしまったのだが、こんな何も知らない人間が聞けば情けないと思える転生者の事情などジョニーや他の将兵は知らない（と言うか、知ったら大変だ）。

（・・・まあいい。取り敢えず、上の目的がなんであれ、俺の役目はあのひよっこ共を生きて帰らせる事だ）

ジョニーはそう考えることにした。

U C 0 0 7 9 年 9 月 2 3 日 大気圏降下

◇宇宙世紀0079年 9月23日 軌道上

「くそっ！なんて硬さだよ!!」

ジムⅢに搭乗するパイロットは90ミリ弾を山程撃ち込んでも全く効果が無いように思えるホワイトベースの頑丈さに辟易していた。サイド7をホワイトベースから出てから5日。

ルナツーがジオンの手にあるため、多少遠回りをしながら地球に向かって進んだホワイトベースは、幸いにしてジオンの追撃が一度もなかった為に奇しくも原作と同じ23日に大気圏降下を行おうとした。

だが、そこで襲い掛かってきたのはセンダイ級巡洋艦4隻とそれに搭載されたMS16機、更には別動隊である量産型アプサラス3機。特にアプサラスを目にした時、ホワイトベースは咄嗟にビーム攪乱幕を撒いた。

しかし、これこそがジオン軍側の狙い。

今回、MSが装備しているのは全て実弾装備の90ミリマシンガンだ。

これなら敵がビーム攪乱幕を撒いていたとしても普通に攻撃が通る。

その上、ホワイトベースの方もビーム攪乱幕を撒いている影響でメガ粒子砲が使えない。

通常の砲や機銃を使うにしても、ミノフスキー粒子が撒かれていてはレーザー管制も出来ず、手動で当てるしかなく、おまけにサイド7のパイロットを投入するような状況に置かれているということとは原作同様に正規乗員のほとんどが戦死している可能性が高く、民間人が登用されていることになる。

だが、この時点での彼らは地球連邦軍のモブ新兵とさして錬度面で変わりはなく（それでも訓練抜きで新米とはいえ、兵士に並び立つレベルなのは凄いが）、宇宙でのモビルスーツの機動にはついていけない



い。

おそらくほぼ一方的に撃たれることになる。

もつとも、そこまでしてもホワイトベースは撃沈できないだろう。

何故なら、実弾を山程喰らったくらいで撃沈できるのなら、原作のジオン軍がやっている筈だからだ。

いや、それどころか、アプサラスや巡洋艦の砲撃でも少々のダメー  
ジしか通らないだろう。

だからこそ、今回の狙いはホワイトベースではない。

狙いは迎撃に出てくるであろうホワイトベースに搭載されたガン  
ダム。

スレンダーの報告が正しければ、ガンダムの動きは素人。

相手がどういいうパイロットかは知らないが、サイド7で遭遇した時  
点で素人だったとすれば、初期のアムロと同様のレベルか、それより  
少し下だろう。

であれば、まだ勝ち目はある。

そう考えたギレンは仮に向こうが迎撃のMSを出してきた場合、そ  
ちらを優先的に撃破するように伝えていた。

加えて言えば、別に無理に撃破する必要もない。

スレンダーの報告ではその機体には耐熱コーティングは施されて  
いないので、大気圏に突入してしまえば、地球の重力に掴まって勝手  
にお星様に変わってくれる。

ギレンはそう目論んだ。

そして、この推測は間違っではいなかった。

実際、ホワイトベースは原作同様に正規乗員のほとんどが戦死して  
いた(ちなみにパオロ中佐は18日の戦闘で重傷を負い、その傷が元  
で20日には亡くなっており、指揮はブライト・ノア少尉が引き継い  
でいる)し、乗員の不足を補うために民間人が登用されているという  
のも事実。

おまけに原作と違ってサイド7からここまで一切戦闘を経験して  
ない為に、民間人たちの戦闘は今回が初めて。

もし転生者達がこの場に居れば、『勝ったな』と思わず慢心してしま

うくらいの有利な状態はほとんど揃っている。

が、ここで1つ誤算があった。

それは――

「落ちろー!」

男――ランバ・ラルの言葉と共に量産型ガンダムが構えるビームライフルから発射されたエネルギー弾は的確にホワイトベースを攻撃していたジムⅢのエンジンを貫き、パイロット共々葬り去る。

あのサイド7の戦いの後、ランバ・ラルはアルテイシアと合流してホワイトベースに乗り込んだ。

幸い、ランバ・ラル隊の面々もセイラ・マスも偽名と偽IDを使っていたり、髪の色を変えたりして別人になり済ましていた為に正体がバレることはなく、一民間人としてホワイトベースに乗り込むことが出来た。

が、そこで問題になったのは前述した民間人の登用だ。

正規乗員が足りない為、それを補う形で民間人を登用するという考えは理解出来る（納得は別だが）。

だが、それでセイラが登用されると聞けば流石に黙っていることはできず、結局、ランバがMSに乗ることになってしまった。

そして、ここで面倒なのは自分の実力を完全に出さずにやらなければならぬことだ。

冷静に考えてみよう。

MSの操縦がジオンのエースと渡り合えるほどの技量があり、尚且つ軍人っぽい恰幅の良いオッサン。

・・・どう見ても怪しく、スパイを疑われるのはまず間違いない。その為、何時ものランバの技量なら5機を撃墜している今の段階でも、彼はわざと3機しか撃墜していなかった。

ぶっちゃけこれでも出来すぎだと思われるだろうが、相手もこのような軌道上での襲撃という危険行為に手をつ突っ込んでくるだけあってそれなりの技量があり、おまけに数も多く、これ以上手加減をして

撃墜のペースを遅めると今度は自分の身が危ない。

「……ここまでだな」

ランバはホワイトベースの位置を確認し、ジオンの阻止限界点を越えたと判断すると、ホワイトベースに帰投を行う。

相変わらずミノフスキー粒子によってあまり無線は機能せず、ブライトの言葉もほとんど聞こえないが、それでも帰還を望んでいるだけは何となく分かった。

まあ、そうでなくともランバとしてはここで死ぬつもりなど更々無いので、勝手に帰るつもりだったが。

そして、ランバは追跡してくるジオン軍を適当に牽制しながら、母艦であるホワイトベースへと帰投した。

(なんとか逃げられたか)

ブライトはそう思いながら、戦闘の緊張が急速に解れた為か、艦長席へどっかりと体を沈める。

ランバ・ラルの帰投後、ホワイトベースはビーム攪乱幕の放出を止めて大気圏へ突入し、ジオン艦隊とMS部隊の追跡を振り切った。

かなり危ない場面ではあったが、このまま軌道で行けばやがてジャブローに到着するだろう。

そして、大気圏へ突入しさえすればジオン艦隊も容易には追ってこないし、万が一、追ってきたとしてもジャブローの上空まで行けばジャブローの連邦軍の支援も得られる。

そうすれば自分の任務は完了だ。

ブライトはそう考えた。

——しかし、警戒を解いてそういう思考に移るのはまだ少し早かったということを、彼は直後に思い知らされる事になる。

ドツゴオオオン

突如、ホワイトベースから爆発音が鳴り響き、その衝撃がホワイトベースを揺らす。

「きゃあ!?!」

「なんだ!?!どうしたんだ!?!」

ブライトは慌ててオペレーターに再度の状況確認を指示する。

「た、大気圏内から例のアプサラスという機体が攻撃を仕掛けてきました!!」

そう、実は今回のホワイトベース襲撃に準備された量産型アプサラ

スには耐熱コーティングがあらかじめ施されており、そこからメガ粒子砲（収束モード）がホワイトベースを直撃したのだ。

本来ならビーム攪乱幕で防げたのだが、大気圏突入直前にビーム攪乱幕の放出を止めてしまった上に効果範囲から抜けてしまったことで、全く効果を発揮せず、ホワイトベースは直撃すればMSですら跡形もなくなる収束版メガ粒子砲の攻撃をもろに受けてしまう形となった。

ちなみに本来なら、この時戦場に投入された3機のアプサラスは、万が一、量産型ガンダムがお星様に成り損ねた場合に備えて、大気圏内で量産型ガンダムを捕捉して撃滅することが求められていたのだが、乗っていたのがランバ・ラルで冷静に状況を見極めた結果、大気圏突入直前に量産型ガンダムが収容されたことでホワイトベース本体を代わりに襲撃していたのだ。

そして、更に追撃を加えようとする量産型アプサラスだったが、直後にホワイトが素早く全速前進を指示したことでホワイトベースは追跡していた量産型アプサラスの群れを振り切った。

が――

「ブライト。今の爆発でホワイトベースが予定の軌道から外れているわ」

「なにい!？」

ブライトはその報告に大きく目を見開く。

軌道が外れたということは、まず間違いなくジャブローへの降下が不可能になったことを意味するからだ。

いや、それだけならまだ良く、最悪の場合はジオンの勢力圏に突っ込んでしまう可能性もある。

もつとも、ジオン（特に転生者達）からすれば、ホワイトベースがこちらの勢力圏にやって来るのは、死亡フラグの乱立を意味するので、もしかしたらむしろ彼らの方が『こつちに降りてこないでくれ!!』

と祈る立場かもしれないが。

「どうするの!?!」

「・・・いや、構わん。そのまま降下しろ。どうせ今から修正はできない」

「分かったわ」

舵を握る民間人の女性——ミライ・ヤシマはそう言いながらホワイトベースの舵を握り、どうにか地上に向けて降下させようとする。

それを見ながら、ブライトは当初のジャブロー降下という目的が失敗したことを悟り、頭を抱えることになった。

——こうして、ホワイトベースは当初の軌道を外れ、北米・旧カナダに降下することとなる。

UC0079年 9月28日 ガルマの苦悩

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 9月28日 北米 キヤリフォルニア・ベース

「木馬は本当に何処行つたんだ？」

ガルマ・ザビ大佐は胃が痛い思いをしながらも、ホワイトベースの行き先について思考を回す。

ホワイトベースが地球に降下してから既に5日が経ったが、依然として何処に居るかが分からない。

いや、厳密には旧カナダに降下したということは分かっていたのだが、その後の消息がバツタリと途絶えているのだ。

これで完全に墜落して艦体が粉々にされているのなら有り難いのだが、原作補正を見るにそんな理想は期待するだけ無駄だろう。

「しかし、旧カナダか。・・・データは間違いなく回収されているだろうな」

旧カナダは言うまでもなく連邦の勢力圏内だ。

とすると、原作のジム開発にも貢献したホワイトベース隊の戦闘データは間違いなく回収されていると見て良い。

もつとも、この世界ではホワイトベース隊とジオンの戦闘はサイド7内と軌道上の2つしか行われていないので、原作よりも戦闘データが少なく、連邦のMS開発に貢献することは間違いないのだろうが、その貢献度は原作よりも劣るものとなるだろう（それでもジオンにとっては十分な打撃だが）。

「しかし、アプサラスのメガ粒子砲喰らっても無事とか、こんな化け物をいったい何をどうすれば良いんだ？」

アプサラスのメガ粒子砲は拡散モードで発せられる1つの光線ですら、MSを撃破できるほどの火力がある。

ましてや、一点集中の収束モードとなると戦艦ですらただでは済まない火力である筈なのだが、報告によればその直撃を喰らってもホワイトベースは少々の穴が空く程度の損害で済ませたらしい。

となると、戦艦を投入でもしない限りは火力的に勝てないという事になる。

「・・・原作のガルマやランバ・ラルも惜しいところまで行つたし、案外撃破できない敵でもないのか？」

ガルマはそう思い直す。

原作でホワイトベースはア・バオア・クーで沈んだが、それまでも結構惜しいところはあった。

そして、その惜しいところまでいったのが、いまガルマが言った原作のガルマ・ザビとランバ・ラルだ。

ただ、この2人の共通の敗因はやはり味方に足を引っ張られてしまったという点だろう。

それが無ければホワイトベースはどちらかの戦いで沈んでいた可能性が高い。

「・・・まあいい。欲を出すのは良くないし、仮に味方の足の引っ張りがなかったとしても、主人公補正で引っ繰り返されてしまう可能性もあるからな」

ガルマはそう言いながらホワイトベース討伐という欲を引っ込め、再びホワイトベースの行方について考える。

全く動きが掴めず、尚且つアプサラスに攻撃された影響を考えれば、おそらくホワイトベースは味方の基地に回収され、修理中といったところなのだろう。

原作ではジオンの勢力圏真つ只中に降りてしまったことで、修理の



間も無く追い回される事になったが、この世界で降りた場所は連邦の勢力圏内だ。

その可能性は非常に高い。

「とすると、しばらくは出てこないか。しかし、その後の進路が問題だな」

現在、木馬が取ると思われる進路は3つ有る。

1つ目は西進して太平洋に向かうルート。

原作ではこれだったが、これはガルマに追い回されたのと降下した場所がジオンの勢力圏内という事情があったからだ。

だが、この世界でホワイトベースが降りた場所は連邦の勢力圏内。

可能性はなくはないが、確実にこれだという保証はない。

2つ目は逆に東進して大西洋に出るルート。

これも一応、可能性はなくはない。

流石に北大西洋のど真ん中を突っ切って南大西洋に出てジャブローに向かうということはない（と言うか、そうするくらいだったら北太平洋から南太平洋を通るルートの方がよっぽど安全）だろうが、原作の描写から見るにホワイトベース隊は疎まれている可能性がある。なので、ブリテン島などの北大西洋の最前線基地に送るといふ指示を連邦軍上層部が出しても可笑しくはないからだ。

そして、3つ目。

それは旧アメリカというジオンの勢力圏内ど真ん中を突っ切ってカリブ海、あるいは南米のジャブローに向かうルートであり、同時にガルマが尤も来て欲しくない可能性だった。

もつとも、普通ならここを突っ切るといふ選択肢はあり得ないだろう。

単艦で敵の勢力圏を突っ切るといふのはどれ程無謀なのかは子供でも分かるからだ。

・・・そう、普通なら。

(なにしろ、相手はホワイトベースだからな。予想外な行動を取ってくる可能性が高い)

残念ながら相手は普通の敵ではない。

主人公補正を持つとんでもなく厄介なジオンの敵なのだ。

あり得ないであろう行動を取ってくる可能性も当然の事ながら存在する。

(とは言え、流石にブライトがそんな指揮を取るとは考えづらいな)

ブライト・ノアは初期こそミスも多かったが、基本的に無難な指揮を執る有能な指揮官だ。

単艦の状況下でそんなことをしてくるとは思えない。

「……どちらにしろ、向こうが動くのを待つしかないか」

そう思うガルマであったが、数時間後、彼はホワイトベースらしき艦艇が北部戦線で目撃されたと聞き、『フラグなんか立てるんじゃないかな』と後悔する事になる。

「えっ！乗組員の補充はできない!？」

ブライト・ノア少尉は思わず叫んでしまった。

旧カナダに不時着してから5日。

ホワイトベースはガルマの予想通りに連邦軍によって回収されており、この秘密ドッグで修理を行っていた。

そして、今日、マチルダ・アジャン中尉率いる補給隊がやって来て、ホワイトベースに補給を行っていたのだが、そこで人員の増員は出せないと言われてしまったのだ。

「はい」

マチルダは事務的な声でそう言ったが、ブライトからしてみればそれは全く洒落にならない凶報だった。

何度も言うように、ホワイトベースの正規要員は既に大半が戦死して民間人を代用として登用している始末なのだ。

ここで乗員が補充されないということは、ホワイトベースの大幅に減った戦力は回復しないままという事になる。

もつとも、これだけならば多少不満はあるものの、なんとか感情を抑えて承諾しただろう。

しかし、実はホワイトベースには修理後に北米を突っ切って直接ジャブローに向かうように命令が出されており、このような困難な任務が出されるからには正規要員の補充くらいはされるだろうとブライトは思っていたのだが、そのような甘い考えはマチルダの言葉によって切って捨てられることになった。

「な、何故ですか!?! ホワイトベースの戦力は見てもの通りなんですよ!!」

「それはごちからも承知しています。しかし、エルラン大将が兵員の補充を許可しないのです」

そう、エルラン大將はジーン・コリニー元大將に代わって連邦軍最高司令官の席に着いた人物だが、原作通りと言うべきか、彼はホワイトベースの存在を好ましく思っていなかった。

それ故に彼はホワイトベース単艦でジオン軍に突っ込ませてジオン軍に処理させようとしていたのだ。

もつとも、そんなエルランの指示は相手となるジオン軍にとっても迷惑以外の何者でも無かったりするのだが。

「レビル將軍だったら、このようなことは無かったのでしょうか……」

マチルダは未だに昏睡状態から目覚めないレビルの事を口に出しながら悔しげに歯噛みする。

もつとも、彼女は知らないことだが、仮にレビルが生きていたとしてもホワイトベースに人員の補充はやらなかっただろう。

なにしろ、現在の連邦宇宙軍はルウム沖会戦と月号作戦の消耗によって原作以上の人手不足に陥っていたのだから。

加えて、今回のV作戦で一番重要なのはホワイトベースそのものではなく、量産型ガンダムの学習型コンピューターに記録された戦闘データなのだ。

ぶつちやけこれさえあれば、ホワイトベースに固執する必要はない。

「し、しかし……」

ブライトは尚も何か言おうとする。  
当然だ。

このままでは大勢の民間人を乗員にしたまま、ジオン勢力圏を突っ切るといふ無茶ぶりを強いられるしまうのだから。

だが、そんなブライトに対して、マチルダは冷たくこう言い放った。

「民間人の避難民の方についてはこちらでお引き取りをします。ですが、登用した乗員についてはそのままにした方がよろしいです」

それがマチルダが出来る最後の譲歩。

そう理解してしまったブライトは大きく肩を落とした。

——そして、一時間後、補給と修理を終えたホワイトベースはジャブローに向かうため、その最短の道である旧アメリカに向かうこととなる。

UC0079年 10月1日 重力戦線の戦況悪化

◇宇宙世紀0079年 10月1日 南米 ジャブロー

「中東侵攻作戦か・・・」

大統領はエルラン大将が持ってきた中東（厳密にはアラビア半島）侵攻作戦についての書類を見ながら、そう呟く。

オデッサ作戦によって中東と西ヨーロッパのジオン軍は分断されることになった。

そして、今回の中東侵攻作戦は分断されたその2つの戦線の1つを片付けようという目的の作戦であり、一応、道理には叶っている。

ただ問題なのは――

「ジオンがもう一度、あの隕石落としをしてくる可能性はないかね？」

そう、そこが問題だった。

先月の第三次南極会談によって南極条約には『大質量天体落下戦術の禁止』という条項が盛り込まれたが、それはあの破られてしまった休戦条約の締結によって盛り込まれたものだ。

しかも、戦争が6日という短期間で再開してしまったことにより、ジオン側に約束したジーン・コリニー元大将の引き渡しも結局行われなかった。

更にこの休戦条約を持ち出したのが連邦であり、その連邦から条約を破ってしまった以上、ジオン側が『条約は無効である』と判断して隕石を再び落とし始めるかもしれない。

もつとも、一度盛り込まれた以上、条約を護る義務は生じるので、もし本当に再び隕石落としをされたら非難することも可能だ。

だが、こう返すことも出来る。

『この条約の締結そのものが連邦の卑劣な策略である。現に今回の条約は連邦から持ち出してきたにも関わらず、連邦から破っている』

・・・暴論のようにも聞こえるが、一応、筋は通っており、連邦としては反論は行いづらい。

なにしろ、連邦側は何一つ約束を守っていないのだから。

「それについては分かりません。彼らは一度、条約を破って報復を行っていますから。しかし——」

「しかし？」

「このまま戦争を長引かせるのは得策ではないというのも確かです」

そう、この戦争はあまり長くは続かない。

前述した経済の問題もあるが、先月からはそれに加えて反戦運動まで起こっており、特に2回も連邦に核を撃ち込まれて無茶苦茶にされた東欧では既に連邦軍に対するゲリラ活動すら始まっている始末だ。

おまけに東欧出身の将兵の士気も低くなっており、中には脱走しようとする兵士すら居る。

更に核を使ったせいで『自分のところにも核が撃ち込まれるのではないか?』と考える者達も増えてきていることも反戦運動を加速させていた。

もつとも、全部の地域が反戦派ばかりではない。

ジオンに核を撃ち込まれてベルファストを壊滅させられたアイルランド出身の将兵はジオン憎しの方針で固まっているし、それは故郷を凌辱されたアフリカ出身の将兵やアフリカ方面軍もそれは同じだ。

だが、全体的に見れば徐々に反戦の声が大きくなっていくということは確かであり、それは主戦派である大統領等にとって非常に都合が悪かった。

「・・・それは否定しない。が、だからと言って成功する保証がない作戦を承認するわけにはいかん。また隕石落としをされたら終わりだからな」

大統領はやはり作戦に消極的だった。

先のオデッサ作戦では東側から進撃したウラル方面軍は隕石落としによって4割の戦力を僅か1日で消耗した。

結局、核を使った事でオデッサの制圧という戦略目標を達成することに成功しているが、もうこの手は使えない。

なにしろ、これ以上核を使えば、益々反戦運動を活発化させるだろうし、それどころか将兵達が離反しかねないのだから。

よつて、一方的に隕石落としをされたら中東侵攻作戦も失敗する可能性が高く、そうなれば将兵の損害も多くなり、反戦運動が益々激化する。

つまり、中東侵攻作戦を成功させるには、ジオン側が連邦から破った条約を順守して貰う事を前提に作戦を立てる事になるのだ。

とてもではないが、そんな都合の良い話が現実的だとは思えない。

「しかし、南極条約の条項にはキチンと大質量天体落下戦術の禁止が盛り込まれているわけです。もしジオンがそれを破れば、我々が核を使う大義名分くらいにはなります」

勿論、前述したように隕石を使うときとなれば、ジオンは大義名分として先に連邦が休戦条約を破ったことを持ち出すだろう。

しかし、それは連邦も同じだ。

その時は連邦もジオンの南極条約違反を持ち出す形で核を使えば良い。

要するにジオンが隕石落としをした時点で連邦にも大義名分が発生するのだ。

それを利用してやれば良い。

エルランはそう主張するが、大統領はこう言う。

「それはそうだろうがな。民衆がそれで納得してくれるとは思えん」



「勝てば良いのですよ。勝てば、核兵器の使用も正当化出来ます」

「その通りだ。だが、その勝つのは何時のことだ？まだ我々は宇宙に拠点を築けていないのだぞ？」

「・・・では、再び休戦を持ち出すのは如何でしょう？今回はこちらの不手際ということでも休戦期間を延長すれば・・・」

「無理だ。もうこちらから休戦を提案することは出来ない」

大統領はエルランにそう返す。

一度、こちらが休戦を提案して破ってしまった以上、もうジオンはよつぽど戦況がギリギリまで追い詰められでもしない限り、こちらから出される休戦を飲みはしないだろう。

当然だ。

誰だって、自分で取り付けた相手との約束を自分で破るような人間の言うことを信用しようなどとは思わないのだから。

もしそんな人間が居るとすれば、それはよつぽど頭がお花畑な人間だけだ。

「八方塞がり、というわけですか」

「まあ、そうだな」

「しかし、中東とウラルでは違います。ついでに言えば、奴等の拠点は中東の中でもアラビア半島にしか有りません。なんとかご再考頂けませんか？」

「・・・良いだろう。君が全責任を取ると言うのならそれで構わんよ」

大統領は脅すようにそう言ったが、エルランはそれに対して全く怯

まずにこう言った。

「それで構いません」

例え負けたとしても、私にはジオンでの栄光が約束されていますので。

その言葉を飲み込みつつ、エルランは内心でほくそ笑む。

——かくして、中東侵攻作戦は了承されることとなった。

◇サイド3 ズムシテイ 総帥府

「中東侵攻作戦か」

連邦内で決定された中東侵攻作戦の情報はその日のうちにキシリアを経由してギレンの元まで届けられた。

「作戦開始日は3日後の10月4日か。・・・セシリア、中東から採掘した化石資源はどれ程の量がある？」

「ギレンは傍らに居たセシリアにそう聞く。」

「だいたいです、3年は戦える量があるかと」

セシリアは有能かつ正直だ。

少なくとも、原作でオデッサから逃げた某大佐のように『ジオンはあと10年は戦える』などという大言壮語は吐かないので、セシリアが3年戦えるというのなら本当にそうなのだろう。

まあ、『今までのように使えば』の話であつて、使用量を増やせば1年くらいで無くなるのかもしれないが。

「となると、無理に確保する必要はないか」

ギレンの結論は既に撤退と決まっていた。

と言うより、それしかないと言える。

オデッサ作戦によつて、アラビア半島は三方から囲まれることとなつており、とてもではないが防衛は不可能だ。

まあ、それを言ったら欧州方面も同じなのだが、アラビア半島はそれに加えてルブアルハリ砂漠という過酷な環境が存在しており、維持ですら難しい。

「では、中東方面軍のノリス・パツカード大佐に撤退命令を伝えますか？」

「ああ、そうしてくれ」

「分かりました。一旦、失礼します」

セシリアはそう言って一礼すると、部屋を出ていく。

そして、それを見届けるとギレンは机の中から、『ブリテン・アイルランド攻略作戦』と書かれた書類を取り出す。

「中東から撤退、か。いよいよ不味くなってきたな」

現在の重力戦線の状況は徐々に悪化している。

まあ、元から連邦の庭でコロニー落とし無しに地球降下作戦などを行えばいずれこうなるのは予想できていたが、実際にそうなるってしまふと泥縄式ではあっても新たな対策を打ち出さなくてはならない。

そして、それが1週間後に発令されるブリデン・アイルランド攻略作戦だ。

ここを占領すれば、いずれ来るであろう連邦の欧州奪還作戦で旧フランスに北側から上陸される可能性を無くすことが出来る。

ついでに戦線を拡大して戦いやすくするのも狙いの1つだった。

「問題はペガサスが間に合うかどうかだな」

連邦から鹵獲したペガサス級強襲揚陸艦のネームシップ・ペガサスは9月28日に北米に降下し、予定通り、木馬足止めの任務についており、現在は北米で木馬と交戦状態にあるとの報告も入っている。

戦いがどう転ぶにせよ、あと数日は掛かると見込まれるので、この作戦に参加できるかどうかは正直言って微妙なところだ。

「まあ、参加できなかつたら参加できなかつたで良い。その場合は別のプランも有るしな」

ギレンはそう言いながら、先程出ていったセシリアが帰ってくるのを待っていた。

UC0079年 10月4日 ホワイトベース陥落

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 10月4日 北米 旧アメリカ テキサス

「くそっ！なんて硬さだよ!!」

のび太はそう言いながら、120ミリマシンガンを撃ち続ける。

今回の戦闘はペガサス隊とホワイトベース隊の3度目の戦闘であり、のび太はホワイトベース攻撃の任務を与えられていたが、一向にダメージを受けた様子がないホワイトベースに内心でかなり焦っていた。

本来ならビーム兵器を使いたかったのだが、9月29日に起きた初めてのペガサス隊とホワイトベース隊の戦闘でのび太のガンダム改が何門ものビーム兵器を使ったところを見たからか、相手も警戒しており、周辺にはビーム攪乱幕が充満している。

そして、90ミリマシンガンではダメージを与えられないからと、多少反動は強いものの火力が大きい120ミリマシンガンを持ってきて撃ってみれば、それでも大したダメージを与えられた様子がない。

(こうなったら、やっぱりあのヒルドルブとかいう戦車に任せるしかないか)

そう、今回の戦いでペガサス隊には北米方面軍からわざわざ派遣されたヒルドルブ4両が搭載されており、今回はそれがホワイトベース攻撃のメインになる手筈となっていた。

しかし、ヒルドルブは弾が大きいために自働装填装置を以てしても、再装填までに7、8秒は掛かってしまう。

だからこそ、一撃で仕留めるために一番効果の有りそうな艦後部のエンジンを狙うため、ホワイトベースの背後に回り込んでいる最中で

あり、おまけに他のMSはホワイトベースに搭載されたMSの相手をしているため、ヒルドルフが展開するまでの時間稼ぎはのび太1人で行わなければならない。

出来れば時間稼ぎと言わず、自分で仕留めたいと思っていたのび太だったが、この状況下では仕方がないと割り切り、それまではホワイトベース全体に向けていた砲火を先程から目障りだった機銃や当たったらヤバそうな主砲や副砲へと向ける。

だが、意外に実弾兵器の多いホワイトベース相手に単独で時間稼ぎをするのはジョニーをして『精鋭パイロット並みの練度がある』と言わしめたのび太の腕を以てしても困難だった。

特に厄介なのはミサイルだ。

本来ならミサイルはミノフスキー粒子によって無効化されたに等しい兵器の筈なのだが、この辺はミノフスキー粒子の濃度が薄く、中途半端にしか無効化されていない。

おまけにホワイトベースに搭載されたミサイルランチャーの数は前部に24基、後部に16基の計40基も有るのだ。

原作通りと言えばそれまでであったが、それを避けなければならぬのび太としては堪ったものではない。

だが、もつと堪ったものでない立場に居たのは相手となるホワイトベースだった。

「何やってる!?!早く当てろ!!」

ホワイトベース艦橋の艦内電話にて、ブライト・ノア少尉は機銃手達に対してそう叱咤する。

先程からのガンダム改からの120ミリマシンガンの攻撃はホワイトベースに然したるダメージを与えていない。

しかし、だからと言って問題なくドンと構えられる程、乗員が出来ていたかと言えばそうでもない。

なにしろ、指揮官であるブライト・ノアにしても、ある程度戦闘経験は積んだとは言え、初の実戦からまだ2週間ちよつとしか経ってな

いのだ。

だからこそ、ガンダム改を速やかに撃墜しようとしたのだが、相手は軽やかに避けて（いるように見える）こちらに120ミリマシンガンを叩き込んでいる。

しかも、さつきまでは艦全体に撃っていたのが、途中から機銃群を中心に撃つようになってきており、次々と機銃潰されていき、発せられる砲火が消えていく光景にブライト・ノアはかなり焦っていた。

そして、だからこそ、彼はホワイトベースの背後から近づいてくる存在に気づけない。

「うわっ!!」

「きゃあ!!」

突如、背後から艦全体へと響いてきたその衝撃に、艦橋に居た何人かの人間が悲鳴をあげる。

そして――

「!? ブライト!! 舵が動かないわ!!」

「なんだと!?!」

ミライからの報告に、ブライトは思わず目を剥いた。

そう、ミノフスキー粒子の濃い場所を伝って密かに背後から近づいた4機のヒルドルブが艦後部のエンジンを狙って30センチ砲弾を発射したのだ。

そして、見事エンジンに命中し、8基あるエンジンを全て破壊したという訳である。

「どうにかならないのか!?!」

そう言いながらも、もうどうにもならないことはブライト自身がよく理解していた。

一応、浮くことだけならミノフスキークラフトが生きていれば出来るが、ミノフスキークラフトはあくまで浮くだけの技術であり、艦そのものが動くためにはエンジンの機能がどうしても必要なのだ。

つまり、エンジンが破壊されたということはホワイトベースは空中に浮くだけのただの的になったということになる。

「!? ブライト!! 敵から通信が・・・」

「・・・なんと言ってる?」

おおよそ予想がつく通信の内容だったが、ブライトは敢えてルヴィア（セイラ）にそう尋ねる。

『降伏セヨ』って」

「・・・」

ブライトは一旦沈黙した後、辺りを見回す。

そして、そこには全員が不安そうな目で自分を見てくる光景があった。

（仕方ない、か）

ブライトは大きいため息をつくとき、セイラに向けてこう言う。

「付近のジオン軍に対してこう打電しろ。『降伏スル』と」

そう言いきった後、ブライトは艦長席にどっかりとその身を沈めた。



◇北米 キヤリフォルニア・ベース

「そうか。やっと仕留めたか」

ホワイトベース陥落。

その報告を副官のダロタ中尉から聞いたガルマ・ザビ大佐は内心で小躍りしそうになったが、部下の手前、それは押し留める。

この世界でのホワイトベースはこれまで戦った中で判明する限りでも量産型ガンダム1機にこれまた鹵獲したジムⅢ2機、ジムⅡ1機、そして、連邦製のボール1機、セイバーフィッシュⅡ2機の計7機を搭載していた。

一つ一つの質は兎も角として、全体的な兵力は原作と比べて明らか

に上回っていたが、ジオン軍連邦から鹵獲したペガサスとそれに搭載された12機のMS（ザム1機、ガンダム改1機、ジムIII 9機、ジムII改1機）と北米方面軍から派遣されたヒルドルブ4機を投入する。そして、何度か交戦した結果、ペガサス隊はジムIII 5機を失ったものの、ホワイトベースのジムIIとボール、更にセイバーフィッシュIIを1機撃破し、更には母艦のホワイトベースのエンジン部分にヒルドルブが放った30センチ（300ミリとも言う）砲弾を何発が撃ち込んだことで、ホワイトベースの機関は停止。

その結果、艦長であるブライト・ノア少尉の苦渋の決断によってホワイトベースは降伏、戦いはペガサス隊の勝利で終わる事となった。ちなみに撃破されたホワイトベースのジムIIとボール、セイバーフィッシュII 1機にはそれぞれカイ・シデン、ハヤト・コバヤシ、リュウ・ホセイが搭乗しており、その内、ボールに搭乗していたハヤト・コバヤシを除いたカイ・シデンとリュウ・ホセイの2人が戦死していたが、その事をガルマはまだ知らない。

「しかし・・・随分な損害を受けたな」

原作よりも兵力は多かつたとはいえ、アムロもオリジナル・ガンダムも無しの状態のホワイトベース隊に、搭乗員がモブだったとは言え、ジムIIIが5機も撃破されてしまった。

おまけにそれだけでなく、ペガサス隊とホワイトベース隊が追跡劇を行う中でホワイトベース隊が遭遇した幾つかのジオン軍北米方面軍基地はホワイトベース隊に踏み潰される形で壊滅。

ガルマは改めて原作補正の恐ろしさを思い知ることとなっていた。

「はい。幸い、致命傷ではありませんが、いま連邦に攻めてこられると少し不味い事になるかと」

「まあ、そうならないことを祈るしかない。それよりペガサス隊はそのまま欧州方面に向かわせろ。ああ、それとその前に補給はしてや

れ。あとMSの補充もザムを最優先で回せ」

「よろしいのですか?」

最新鋭機であるザムは基本的に宇宙攻撃軍に回されており、北米方面軍に回されているのは少数だ。

そんな貴重な機体を簡単にあげても良いものかと、ダロタは少々疑問に思っていたが、ガルマとしては一向に構わなかった。

確かに北米方面軍の中ではザムは貴重な機体ではあるが、北米方面軍のMS戦力は全体の半数がジムシリーズの最新バージョンであるジムⅢに更新されてあったし、元々少数のザムが抜けたところであり影響は無い。

それにホワイトベースが陥落した以上、ザムの使いどころもあまり無く、そうであるならいつそのこと礼も兼ねてこれから欧州の戦場に赴くペガサス隊に送ってしまった方が良くとガルマは考えていた。

「構わないよ。景気良く回してやれ。どうせ欧州はこれからかなりの激戦となるだろうからな」

先日、中東から撤退した今、重力戦線は北米と欧州の2戦線しかなくなつた。

幸い、北米は占領範囲が広く、連邦軍も簡単には攻めてこれないだろうが、ヨーロッパの方はそうではない。

となると、次の激戦の舞台は欧州となるのは正に必然だったのだが、そこに配備されている戦力はお寒い限りだった。

一応、MSの数こそ北米方面軍以上ではあったが、配備されている機体は旧式のジムⅡが大半であり、ジムⅢが少数と量産型ガンダムが数機有るのみで、ザムに至っては影も形もないという有り様だ。

まあ、今のところ、連邦はMSの開発は進んでいないし、量産など以ての他な状況なので問題は起きていないのだが、いずれ問題になってくるのは目に見えていた。

(まあ、そうなたら兄さん達も新型機を欧州に投入するだろうけど、その前に欧州戦線が抜かれてしまうと不味い事になる)

仮に欧州戦線が崩壊すれば、いよいよこの北米が最後の重力戦線となる。

出来ればその展開は防ぎたいガルマとしては、なるべくヨーロッパで決着を着けて欲しいという思いがあり、その為に最新鋭機が必要だというのが、遠慮無く回すというのがガルマの方針だった。

「分かりました。では、そのように」

ダロタはそう言うと、命令を伝えるために部屋を出ていった。

UC0079年 10月8日 ブリデン・アイルランド攻略作戦

◇宇宙世紀0079年 10月8日 ブリデン島 南部沿岸 ペガサス 艦橋

「・・・随分と呆気ないな」

ペガサスの艦長マルティン・プロホノウ中佐はそう言いながら、あまりの連邦軍の抵抗の無さに呆れていた。

ブリデン島はかつて存在した大英帝国の本国であり、様々な大きな港も存在する上にロンドンという大都市も存在する島だ。

おまけに旧フランスのジオン軍の最前線に位置付けられており、連邦軍も厚いと見られていたのだが、蓋を開ければそう大した事もなく、メガ粒子砲と主砲である88センチ連装砲や副砲の58センチ連装砲の砲撃を行った後、モビルスーツを投入しただけであっさりとその防備に穴が空いてしまった。

そして、その後は態勢を建て直す間もなくペガサス隊のMSに連邦軍は蹂躪され続け、現在はペガサス隊が暴れている戦域の連邦軍の残存部隊は早くも敗走を始めている始末だ。

しかも、これら一連の状況は僅か一時間の間起きたことだった。

「これならばホワイトベース隊の方がよっぽど歯応えがあつたな」

マルティンはそう口にするが、仮に転生者がこの言葉を聞けばこう言うだろう。

モブと主人公補正持ちの名前有りキャラでは比べる方が間違いだ、と。

そして、この艦には転生者達とはまた違った視線からそれに気づく者が居た。

「たぶん、この艦の戦力が強力すぎるんだと思います」

オリヴァー・マイ技術中尉はそう言いながら、改めて強力すぎるこの船とパイロット達の力にドン引きしていた。

オリヴァー・マイは原作ではルウムが初陣だったが、この世界では先日のホワイトベース戦が初陣だ。

だからこそ、他の艦がペガサスと比べてどれ程のものなのかは分からなかったのだが、それでもこの艦の戦力が異常であるというのはなんとなく気がついていた。

「・・・ふむ。やはり先日配備されたザムが良かったのか？」

「いえ、その・・・」

違う、そうじゃない。

そう言いたかったマイであったが、それを説明することは出来なかった。

何故なら、マイが感じたこの艦の戦力の異常は理論的に説明できるものではなかったからだ。

理論的でないものがあまり好きではないマイとしては、そんな曖昧な発言を口にするには出来ず、言い淀んだ言い方をするしかなかった。

——しかし、この異常さに気づきもしないマルティンやその他の乗員は何かに毒されていると見て間違いない。

まあ、マイが毒されるのも時間の問題なのだろうが。

「まあいい。それより我々は敵の戦線に穴を開けることに成功した訳だが、この後の予定はどうすれば良いと考える？」

この作戦ではペガサス隊が敵の防衛線に穴を開け、その開けた穴に

欧州方面軍の部隊が突撃することになっていたが、その後の指示はない。

これは作戦立案者がペガサス隊はおそらく敵の防衛線に穴を開けるので手一杯になるので、その後の指示は上陸した本隊と合流させてから、ペガサス隊のその時の部隊の状況に応じて新たな命令を下すべきだと考えていたからだ。

まあ、普通は単艦で敵のガツチリとした防衛線を一部とはいえ、味方が合流する前の短期間で崩壊させるなど思いもしないので、この点は作戦立案者を責められないだろう。

むしろ、僅か一時間で大量破壊兵器も無しに待ち構えていた万単位の連邦軍を駆逐してしまうペガサス隊が可笑しいのだ。

しかし、その結果、あまりにもあつさり作戦を完遂してしまったペガサス隊は手持ち無沙汰となってしまうていた。

「ここで味方が上陸するのを待っていたら良いのでは？どうやら腰を据えても大丈夫そうな状況ですし」

副長のエーリツヒ・クリューガー大尉はそう口を挟む。

「それか、いつそのこと他の戦域にも手を出して予定より敵の防衛線の穴を大きくするかな」

マルティンは考える。

どっちの意見も間違っていない。

現在、統制された連邦軍部隊がほとんど駆逐され、周辺は散発的に攻撃を仕掛けている連邦の部隊しか居なくなっている以上、エーリツヒの言った通り、ここでどつしりと構えて味方を待つという選択肢は充分現実的だ。

だが、一方で今のうちに他の敵を叩いておけば、これから上陸する味方の戦いが少しでも楽になるだろうし、結果的に損害も減る。

暫しの間、悩んだマルティンだったが、すぐに結論は出て艦橋の者

達に対してこう宣言した。

「他の戦域に向かう。ここで敵を少しでも叩いて後から来る味方の戦いを楽にする」

——こうして、後に『悪魔の天馬』<sup>ペガサス</sup>と呼ばれることになるペガサス隊の伝説はここから始まることとなった。

#### ◇宇宙要塞『ソロモン』

「まさか、またこうして会うことになるとは思わなかったぞ。ランバ・ラル」

ブリデン島でペガサス隊が連邦軍を可哀想になるくらい蹂躪していた頃、ソロモンではドズル・ザビ中将が捕虜となったランバ・ラル元少佐と対面していた。

ちなみに彼の両手には念のために手錠が嵌められており、護衛の兵士2人がランバの傍らについて万が一、ランバ・ラルが暴れた場合でも容易に取り抑えられるようにしている。



「・・・」

「で、俺に用事があつて面会したいとの事だが、なんのようだ？」

「はっ。閣下に直接お聞きしたいことが有りまして」

「なんだ？」

「アルテイシア様の処遇についてです」

ランバの発言を聞いて、ドズルは苦虫を噛み潰したのような表情を作る。

アルテイシアを確保。

その報告を聞いた時、転生者達は面倒なことになったと頭を抱えた。

なにしろ、開戦演説を行った人物が捕虜になったのだ。

本来ならサイド3に連れて行って政治の道具とするのが良いのだろうが、そうすると内部に火種を引き込むことになる。

なにしろ、第5次降下作戦でだいたいのダイクン派地球に降りていったが、まだサイド3に残っている人間も少数ながら居り、そういった人間達がアルテイシア救出を企み、そして、成功させた場合、ザビ家の面々は眠れない夜を過ごす羽目になるだろう。

では、月、あるいは何処かのサイドに幽閉するかというと、選択肢もなかなか難しいと言わざるをえない。

月はアナハイムが居り、何時アルテイシアの存在を嗅ぎ付けられて特殊部隊を差し向けて奪いに来るか分からないし、各サイドでも存在を知られば反ジオン派として担ぎ上げる動きが出てくるかもしれないからだ。

これが原作であればアルテイシアの顔は知られていないので、月はともかく、各サイドの何処かに連れていく分には問題なかったのかも

しれないが、この世界では盛大に演説をぶちかましてその存在をこれ以上はないという程、知らしめている。

なので、正直言って処遇に困っていたのだ。

「・・・安心しろ。少なくとも、無体に扱うことはない」

と言うか、扱えない。

彼女の身柄そのものが盛大な爆弾である以上、その爆弾が爆発しないように丁寧に扱うしかないのだ。

（出来れば、ペガサス隊との戦いで名誉の戦死をして欲しかったんだがな）

そんな腹黒いことをドズルは考えるが、実際に捕まえてしまった以上は仕方がないと内心で溜め息をつきながらも諦める事にした。

「そうですか。それは良かった」

「・・・ところで、貴様らはどうするのだ？元軍人とはいえ、今は民間人だ。戦闘に参加したとなれば、俺はお前達をゲリラとして扱わなければならんのだが？」

ドズルは鋭い目でそう尋ねる。

まあ、元々ランバ・ラル隊はゲリラ部隊ではあったが、ジオンに居た頃はあくまで『正規軍のゲリラ部隊』という扱いだったからこそ、軍務という形に出来た。

しかし、彼はジャブローでの一件の後にジオン軍を抜けており、元軍人という形になっている。

その状態でホワイトベース隊のパイロットとして登場したとなると、彼を『非正規ゲリラ』として扱う必要が出てくるのだ。

そして、こういった場合、その国の法律で裁かれることになってい

るが、ランバ・ラルは既に何人ものジオン軍兵士の命を奪っており、裁かれれば普通に死刑だろう。

しかも、それは彼だけではなく、彼と共にホワイトベースの乗員として戦っていた部下の何人かも同じ筈だ。

「それについては連邦からも階級を貰っておりますので、一応、連邦の軍人という扱いにして頂きたい」

「ほう、階級はだいたい曹長辺りか？」

「・・・その通りです」

ドズルは少々吹き出しそうになってしまった。

なにしろ、元とはいえ少佐（ちなみにジャブローの任務を成功させた後は中佐に昇進させるつもりだった）の彼が曹長という5階級も下の階級に下げられていたのだから。

「連邦も貴様を安く見積もったものだな。まあいい、取り敢えず了承した。キチンと曹長の捕虜として扱おう」

ドズルは皮肉げにそう言うと、ランバの傍らに立っていた2人に部屋から連れ出すように促す。

そして、2人はその意を汲み、ランバを連れて部屋の外へと出ていった。

UC0079年 10月10日 哀れな存在

◇宇宙世紀0079年 10月10日 サイド3 総帥府

「では、この配置で構わないな。ドズル」

ギレンはそう言いながら、光学通信でスクリーンに映されたドズルに向かって改めて確認する。

ジオン軍がブリテン島上陸に成功した10月8日の日、サイド2が遂にジオン支持を表明したのを機に、ドズル配下の宇宙攻撃軍は各サイドの防衛のための再編成をすることになった。

具体的にはジオン支持をしたサイドであるサイド2、サイド5、そして、ソロモンの3つに宇宙攻撃軍を分割させ、余った戦力で未だジオン支持を表明しないサイド1、サイド4に対する駐留艦隊を置こうと考えたのだ。

『ああ、構わない』

ドズルもまたギレンの言うことに首を縦に振る。

本来なら、戦力分散は戦いの下策ではあるが、差し迫った戦いがあるわけではないし、むしろ、なにもないのに戦力を一点に集中させることはリスク分散の原則にも反するのだ。

ちなみにその戦力の配分は以下の通りになる。

・ソロモン駐留艦隊（ドズル・ザビ中将配下）・・・戦艦24隻、巡洋艦36隻、MS336機（艦隊に配備されている機体のみ。ソロモンに直接配備されている機体は別に数える）。

・サイド5駐留艦隊（コンスコン少将）・・・戦艦18隻、巡洋艦20隻、MS224機。

・サイド2駐留艦隊（ユーリ・ハスラー准将）・・・戦艦12隻、巡洋艦18隻、MS166機。

・サイド1駐留艦隊（アンソン・ショッカー少佐。オリキヤラ）・・・

パトロール艦5隻、MS15機。

・サイド4 駐留艦隊（イーナ・トヘリー中佐。オリキャラ）・・・パトロール艦5隻、MS15機。

以上。

・・・改めて見ると、ジオンはやはりサイド1つにしては可笑しいほどの戦力を持っている。

しかも、これはドズル配下の宇宙攻撃軍だけの数字であり、ルナツーやア・バオア・クー、グラナダ、サイド3本国艦隊は含まれていないのだ。

まあ、この世界では原作よりもジオンの国力が大きくなっているのです、その事もあるのだろうが、それを抜きにしたとしてもやはり可笑しいと言える。

もつとも、今さらそんなことを突っ込んででも仕方ないので、ギレンもあまり気にしないようにしていたが。

「ふむ。ドズルが言うのなら、これで通そう。他に何か言いたいことは有るか?」

『いや、特にはない』

「そうか。では、私も忙しいのでこれで切る。お前の部下たちへの説明は頼んだぞ」

『ああ、分かっているさ。それじゃあな』

その言葉を最後に、ドズルの顔はスクリーンから消える。

「お疲れ様です」

ドズルとの通信が終わった後、そう労いの言葉を掛けながら室内に入ってきたのは秘書のセシリア・アイリーンだった。

彼女には通信が終わるまで部屋の外に控えて貰っていたのだ。

「ああ、ありがとう。休んでいる暇が無いのが残念なのだがな」

ギレンはそう言いながら皮肉げに笑う。

なにしろ、ちよつと目を離れた隙に連邦はとんでもない物量を用意し、大規模攻勢を仕掛けてくるのだ。

油断も隙もあつたものではない。

「しかし、失礼ながら総帥は開戦以来働き詰めでお疲れなのでは？」

「なに、私がしているのは主に書類整理だ。そんな私が休んでは今現在も前線で血を流している将兵達に申し訳が立たん。それより重力戦線の戦況が書かれた書類は持ってきてくれたかね？」

「はい、こちらに」

セシリアはそう言うと、ギレンに向かって持っていた書類を差し出す。

「うむ」

ギレンはそう言うと、受け取った書類を読む。

そこには主にブリテン・アイルランド攻略作戦の状況についてが書かれていた。

まずアイルランド島だが、こちらは昨日の10月9日に攻略部隊が上陸。

現地の連邦軍も抵抗してきたが、既に島の主要基地であつたベルファストは壊滅しており、連邦もこの島に大した価値を見出だせなくなっていたことで部隊があまり置かれておらず、結局、その日のうちにアイルランド島はジオンの手に落ちた。

そして、もう1つの攻略場所であるブリデン島はかなりの連邦軍の戦力が残っていた為か、攻略に手間取っており、制圧まであと2、3日は掛かる見込みとのことだ。

「・・・」

その中でギレンは気になる項目を見つけた。

それはペガサス隊がとんでもない戦果を挙げているというところだ。

(おいおい。これはなんの冗談だ?)

ギレンは冷や汗を流す。

そこには10月8日から今日までの僅か2日間の戦闘で戦車132両、装甲車122両、航空機22機、トーチカ12基、その他の車両224両を撃破したとある。

はつきり言って1隻の強襲揚陸艦が挙げたにしてはとんでもなさすぎる戦果であり、これと同じ戦果を挙げられる部隊があると10個有れば、連邦はとうの昔に降伏していただろう。

しかも、上記の戦果の6割がのび太の個人戦績らしい。

(別作品の筈なのに恐ろしい主人公補正だ。原作で連邦高官がアムロ・レイを軟禁した理由がよく分かる)

なにしろ、ある程度主人公補正に対する心構えをしていたギレンが内心で少し恐ろしいと思ってしまうほどのだ。

そんな心構えなど毛ほどもしていなかった連邦高官はとにかくアムロ・レイという「主人公」が恐ろしくて堪らなかったのだろう。

(まあ、のび太なら無体な扱いをしないうちはこっちの味方で居てくれる。その点は暴走がない分、安心だな)

のび太は良くも悪くも常識人だ。

少なくとも、こちらから無体を働かないうちは、ガンダムから降ろすかもしれないと言われただけで軍の装備であるガンダムを盗み出すような何処ぞの天パのような行動は起こさないだろうし、ニュータイプ至上主義的な考えを抱くことはもつとない。

まあ、家出をして10年近く無人島で暮らす（あるいは七万年前の日本に行く）などということはあったが、天パのように軍の任務に就いていた訳ではないし、普通の小学5年生の年齢を考えればそれからの突発的な行動をしても仕方ないようにも思えるので、十分に許容範囲内だ。

（ニュータイプはどいつもこいつも自我を通しすぎる上に物事を難しく考えすぎるんだよな。だから、同じニュータイプ同士でも拗れてしまう）

これはギレン個人の考えだが、ニュータイプとして一番理想的なのは、のび太のように相手の気持ちや事情もよく汲んでくれるタイプだ。

そもそもニュータイプとは『互いに分かり合え、争わずに済む』人種だと劇中では描写されているが、現実にはニュータイプ同士で争っていたりする。

いや、そもそも『互いに分かり合える』の前提が達成されていたかも怪しい。

何故なら、原作のニュータイプの殆どは自分の気持ちを伝えるばかりで相手の気持ちを理解しようとしなかったり、理解しようとしても相手の事を考慮しなかったりで、はつきり言つてニュータイプの癖にニュータイプとして破綻している有り様だった。

これはおそらく、なまじニュータイプとして相手を理解できるようになったが故に、人間性の成長がそこでストップしてしまった為、だからこそ、ニュータイプ達はお互いに分かり合う努力をしなくなっ



てしまったからだ。

だが、のび太は違う。

藤子・F・不二雄がのび太の唯一の長所について言ったように、のび太は時には自分の行いを反省し、常に良い人間になろうと努力している。

更にしずかの父親ものび太の事を『他人の幸せを喜び、他人の不幸を共に悲しむことの出来る人物』と評したように、のび太は本当のニュータイプとして相応しい素質を備えていると言えた。

ついでに本人の竹の割ったようなさっぱりとした物事を難しく考えない性格も良いように働いたのだろう。

ニュータイプという人種は基本的に物事を難しく考えるゆえに簡単な道理の理解にも苦しみ、短絡的な行動を起こしてしまう人間が多いのだから。

これらの事を鑑みると、これから教育を間違えなければ、のび太はさぞ素晴らしい人間になるに違いない。

(ふつ、皮肉だな。ガンダムとは全く関係のない作品のキャラクターがニュータイプとして一番相応しい人種だとはな。しかし、愚かなことだ。相手と理解し合うと言いながら、相手を理解しようとするせいで理解していると勘違いした挙げ句、分かり合えるという幻想に浸って争いを繰り返すとは・・・)

ギレンはこの時、ニュータイプという存在が実際はかなり哀れな存在だと思った。

まあ、無理もないだろう。

原作でニュータイプを吟っておきながら、その吟った本人達がニュータイプとしての大前提を成していなかったことに気付いてしまったのだから。

「ギレン閣下？」

そこでしばらく考え込んでしまったギレンを心配したのか、セシリアは声を掛けた。

「ああ、すまん。少し考え込んでいてな」

「それは邪魔をして申し訳ありません」

「いや、大丈夫だ。・・・あまりに下らないことだったからな」

ギレンはセシリアにそう言いながらも、内心でこう思う。

(野比のび太。この世界には居なかった筈のお前がもしかしたらニュータイプ最大の救世主となるかもしれない。出来るだけバツクアッパはするからこの世界のニュータイプを救うために頑張ってくれ)

そんな思いを自分勝手と自覚しながらも、ギレンはそう思わざるを得なかった。

UC0079年 10月15日 安っぽい正義

◇宇宙世紀0079年 10月15日 旧イギリス ロンドン  
昨日の10月14日。

ジオン軍は予定よりも少し遅くブリテン島の制圧を成功させ、ペガサス隊もまたブリテン島での戦いを終える。

そして、ペガサスは数時間前にロンドンへと入港し、のび太は休暇によってドラえもんと共にロンドンの町中にやって来ていた。

「・・・酷いな」

のび太は崩壊している時計塔の姿を見て眉をしかめる。

時計塔はのび太でも知っているロンドンの象徴的な建物の1つであり、それは宇宙世紀の時代であっても同じ（流星にのび太の時代より建物の老朽化は進んでいるが）だ。

その姿がこの前起きた戦闘によって倒壊している光景は戦争の悲惨さをのび太に思い知らせていた。

「まっ、戦争なんてこんなもんさ」

そう言うのはのび太と共にロンドンにやって来た青い親友——ドラえもんだった。

「戦いっていろいろは色々理由を付けてやるけど、結局のところ、ただの破壊。正義なんて一欠片もないよ」

「正義、か」

安っぽい言葉だ。

のび太はそう思えてしまう。

のび太も子供で正義の味方には憧れたことがあるし、なってみたい

と思ったこともある。

だが、その正義という言葉はこの目の前の悲惨な破壊の光景よりも重いというのだろうか？

(いや、絶対に違う)

そんな筈はない。

この目の前の光景を正義という言葉の1つで片付けて良い筈がないのだ。

(こうして見ると、平和っていうのは改めて尊く感じるな)

のび太は自分の世界の事を思い出す。

のび太が居た世界の日本は20世紀の太平洋戦争で戦争を終わらせており、その後は21世紀となった時点でも日本は戦争を一度たりとてやらなかった。

だが、これは案外偉大な事であったのではないだろうか？

確かに色々と危機感が足りないなどという批判はあるが、戦争をしないというのは戦争をすることより良いことであるのは確かなのだ。

そう考えると、常日頃から煩いほど戦争反対を叫ぶ左翼の人間言うことも間違いではない。

が――

(まあ、それでもやらなきゃいけないときは有るんだけどね)

幾ら戦争反対を叫ぼうが、それは自分達の都合であり、人を虫けらとしか思っていないような相手には通用しないのだ。

実際、悪魔族も鉄人兵団もそうやって攻めてきている。

特に鉄人兵団に至っては「神がかつて見放した人間はロボットの役に立たなければならぬ」という宗教感も微妙に混じった自分勝手な考え方で地球に攻め込んでいたが、これはメカトピアにしてみれば

ば当然という感覚だったのだろう。

もつとも、のび太達も奴隷にされるなど嫌だったし、彼らの言う「神が見放した人間たち」となんの関係もない地球人がそんなことに付き合う義務も義理もない。

そう考えたからこそ、のび太達も武器を取って鉄人兵団と戦ったのだ。

そして、そこに「正義は在ったか？」と問われれば、のび太は首を傾げざるを得ない。

何故なら、鉄人兵団と自分達の戦いは「人間を奴隷にしたいロボット」と「奴隷にされるのが嫌な人間」の戦いだったのだ。

そして、結果的にだが自分達は鉄人兵団という存在そのものを滅ぼしてしまった。

もつとも、それは悪魔族の時も同じであったが。

それを思い出したのび太は今更ながら過去にやったことにゾツとしてしまう。

(結局、僕たちのやっていたことも実感が沸かなかっただけで破壊だったのか)

のび太は改めてそう感じた。

しかし、だからと言ってそれを否定する気にはなれない。

何故なら、あの自分達の戦いは地球人類を護るために必要な行爲だった事は確かだからだ。

もしも今、あの時に戻れるとしても、のび太は再び戦うという選択肢を選ぶだろう。

(となると、この世界の人たちはなんのために戦っているんだろう)

のび太は政治的な事はよく分からないが、連邦から喧嘩を売ってきてジオンがそれを買ったという流れくらいは理解していた。

しかし、ジオンも全く戦争が予想外だったという訳ではないのだら

う。

いや、むしろ、元々は戦争を仕掛けようとしていた側なのかもしれない。

何故そう思ったのかと言うと、あまりにも初動が早すぎるのだ。

如何に強い軍隊でも戦争が予想外であったのならば、どうしても初動は遅れてしまうもの。

要するに戦いとは事前の準備が一番大事なのだ。

それは実際に何度も戦いを経験してきたのび太が一番よく分かっていた。

しかし、ジオンは遅れることなく、連邦から宣戦布告されたにも関わらず、逆に先制攻撃を行うことに成功している。

この事から分かるのは、ジオンも前々から戦争の準備を進めていたのだろう。

でなければ、こんなに早く行動できる訳はない。

だが、そこまでしてやろうとしていた戦争になんの意味が有るのだろうか？

(・・・いや、それは愚問か)

戦争をする理由などそう多いものではない。

大抵の場合は今の境遇が嫌だからとか、相手が持っているものを奪いたいとかそんなところだろう。

のび太の世界でもそんな感じだったし、おそらくこの世界の戦争も同じだ。

地球連邦もジオンという存在が目障りだったから戦争を仕掛けたのだらうし、ジオンという存在も自分達の領域を踏みにじられるのが嫌だったからこそ、武器を取ってこうして戦っているのだらう。

「戦争・・・早く終わると良いな」

「・・・そうだね」

のび太が呟いた言葉に、ドラえもんは一瞬の沈黙の後、賛同するよううにそう言った。

◇北米 キヤリフォルニア・ベース

「今・・・なんと言った？」

ガルマ・ザビ大佐はダロタ中尉が持ってきた情報に思わず目を大きく見開いた。

そして、一瞬遅れて背筋に物凄い寒気を感じる。

「は、はい。確保したあのアルティ・・・いえ、ルヴィアという女性を収容していたホテルが何者かに襲撃され、警備隊は全滅。本人も拉致されました」

それは最悪の凶報だった。

ホワイトベースを捕らえた後、ブライト・ノアを始めとした乗員の大半が月面のグラナダの捕虜収容所に送られたのだが、唯一、アルティシアだけが処遇が決まらずにこの北米に残されたままとなっていたのだ。

しかし、そこら辺の施設に収容するわけにもいかないの、急遽ロッキー山脈に作った居住施設の中に収容していたが、こちらから派遣した警備隊はアルテイシアの存在を秘匿するために少数となっていた。

どうやら向こうはそこを突いてきたらしい。

「最悪だな・・・」

ジオンにとって彼女を持ち出されるといのは、最悪な事態だ。

なにしろ、現在の彼女は反ジオン勢力が担ぎ出すにはこれ以上ない存在であり、そういう意味ではシヤアよりも利用価値は高い。

（いや、シヤアであれば問題はないか。奴が連れていったのなら少なくともアルテイシアが表舞台に立つことはなくなる）

もし連れていったのなら、シヤアなのであればそれはそれで問題はない。

基本的にシヤアは妹を戦争に巻き込む事を嫌がるからだ。

だが、そうではない可能性もある（というより、むしろそつちの方が高い）ので、搜索は行わなければならない。

「それでルヴィアの行方は特定しているのか？」

「いえ、残念ながら」

それを聞いたガルマは内心で舌打ちをした。

あの施設は嚴重に秘匿されており、基本的にキャリフォルニアベースに居る北米方面軍の高官などの極一部以外には存在すら知らされておらず、外部への連絡方法も旧アメリカの何処かに潜んでいるであろう連邦の諜報員に享受されないように、無線などの電波を使用せず、連絡機などを使った伝令方式にしているという徹底ぶりだ。



だが、今回はそれが裏目に出た。

秘匿を優先して連絡手段を回りくどくしてしまった為に、何かあった際に連絡が入るのが遅れてしまったのだ。

(やられたな。しかし、嚴重に秘匿されている筈の施設が襲撃されたとなると、内通者の存在は確定的だな)

だが、内通者というのが問題だった。

前述したように、アルテイシアは反ジオン派の御輿としてはとても都合の良い存在だ。

しかし、だからこそ、それを欲しがる勢力というのは沢山ある。

連邦はもちろんのこと、ダイクン派、アナハイム、反ジオン派ゲリラ。

パツと思いつくだけでもこんな感じだ。

そして、その内通者というのが何処の勢力に協力をしたのかによって、アルテイシアが運ばれた先も変わってくる。

(しかも、勢力にもよるが、アルテイシアを奪還するためにはすぐはこの内通者を見つけ出さなくてはならないんだよな。まったく頭が痛い)

ガルマは頭の痛い思いをしながらも、早急にアルテイシアを奪還するため、ダロタに指示を出す。

「すぐに彼女の指名手配を行ってくれ。勿論、我が方面軍内部でのみだな」

「よろしいのですか？それでは方面軍全体に彼女の存在を知らしめることになってしまいますが・・・」

北米方面軍全体にアルテイシアの指名手配を行うとなれば、彼女の

顔写真を北米方面軍将兵が全て見ることになる。

当然、北米方面軍に潜んでいるかもしれないダイクン派の者の者にも。

だが、ガルマとしてはそれでも構わなかった。

「構わないよ。人手は多い方が良い。それにダイクン派が確保したにしても、大騒ぎになれば北米から出すことは難しくなる。今はなによりも彼女をこの北米から出さないこと。それが肝心だ」

「分かりました。では、そのように手配いたします」

「頼んだよ」

「はっ」

ダロタはそう言ってガルマに敬礼を行った。

U C 0 0 7 9 年 1 0 月 1 9 日 狂気

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 10月19日 北米 旧アメリカ 西海岸

「・・・まだか」

北米・旧アメリカの西海岸。

ジオン軍の勢力下のその場所で、10人程のジオン軍の制服を着た男達が1人の女性を引き連れながら焦った様子で辺りを見回していた。

「せっかくアルテイシア様をお連れしたのに、ここで捕まったら終わりだぞ・・・」

そう、彼らはジオン軍の中でもダイクン派と呼ばれる派閥に所属する兵士達だった。

そして、4日前にロッキー山脈にあるアルテイシアの軟禁場所を発見し、襲撃を掛けてアルテイシアを拉致(本人たちからすれば救出)したのも彼らであり、そこからこの西海岸で同志が手配した戦略海洋軍の潜水艦に乗せてアルテイシアをアジアへと送れば、彼らの役目は完了する筈だったのだが、ここで彼らにとって思わぬ誤算が起きる。

それはガルマ・ザビによるアルテイシアの指名手配だ。

この計画前の彼らの予想ではアルテイシアの搜索は秘匿されたまま行われると予想していた。

何故なら、アルテイシアがザビ家の人間にとってとんでもない爆弾であり、その存在を全将兵に伝えるような真似は一步間違えれば北米方面軍のサボタージュに繋がる可能性があったからだ。

それを防ぐためにガルマ・ザビはアルテイシアの存在を秘匿したままの搜索を行う。

しかし、そうなるやと当然、搜索人数も必然と少なくなり、搜索範囲

に穴が開いてしまうので、それを利用してアルテイシアを脱出させるというのが彼らの計画だった。

だが、現実には秘匿するどころか、大胆にも北米方面軍全体への指名手配を行い、その結果、搜索範囲が拡大されたことで彼らは動きづらくなってしまう。

そして、本来ならば17日には旧アメリカから脱出していた筈の計画も延期を余儀なくされ、今日、改めて結構されることになったが、実のところこの行為もかなり綱渡りだった。

だが、運命の女神は少なくともこの時は彼らに微笑んだ。

「・・・来ました!!」

1人の男がそう叫んだ時、沖合いから1隻の潜水艦が浮上した。

#### ◇東アジア ペキン

「キャスバル様、戦略海洋軍の同志からいま報告が入り、アルテイシア様を無事迎え入れたとの事です」

「そうか」

マハラジャ・カーン准将の言葉にシャア・アズナブルことキャスバル・レム・ダイクンはそう返答する。

ちなみに彼の隣にはララア・スンの姿もあつた。

「では、こちらに到着次第、妹をサイド6に送る。手配は進めておいてくれ」

「はい。しかし、本当によろしいのですか？アルテイシア様と離れ離れになっても・・・」

「構わん。妹には平穏な暮らしをさせてやりたいのでな」

そう言いながら、シャアは冷たい目をマハラジャへと向ける。

母——アストライアの死は既にシャアにも伝えられていたが、意外にも彼はさほど動揺を示さなかった。

これはその頃には既にララアがシャアの隣に居たからであり、もし彼女が居なければシャアはこの世の全てを憎む悪鬼となっていただろう。

更に言えば、然程動揺を示さなかったと言っても、愛していた母親が亡くなったというショックはそれでも大きく、それ以来、彼は母親や妹を利用しようとする勢力をダイクン派を含めてかなり憎んでいた。

（ふん、ダイクン派には盛大な散り方をしてもらおう。その上で地球連邦共々ジオン公国に倒されて貰う）

シャアの理想はこうだ。

今は拮抗しているが、これから連邦との物量差によつて重力戦線は間違ひなく崩壊し、ジオン軍は宇宙への撤退を強いられるだろう。

その時に合わせてシヤアは演説を行い、ネオ・ジオンを結成し、連邦との同盟をさせる。

すると、追い詰められたジオン軍は形振り構わない手に出てくるのは間違いなく、それこそ条約破りである隕石落としから、なんならコロニー落としなどというのもやるかもしれない。

そして、そうなったら地球に居る連邦軍とネオ・ジオン軍は壊滅するので、頃合いを見計らって自分は両者を見捨て宇宙へと脱出する。

こうして、自分達を利用する者を全て消滅させ、妹と共に今度こそ平穩に暮らしてめでたしめでたしというエンドにするのがシヤアの計画だった。

(ふん、ザビ家の力を借りるといふのは色々と思うところはあるが、今は復讐が優先だ)

原作のように憎むほどではないが、嫌いなザビ家の支配するジオン公国の手を借りる事に、内心では色々と不満はあったが、今はそれよりもこの憎しみを晴らすことが優先だとシヤアは割り切る。

ちなみに仮にザビ家がそこまでやらず、通常のやり方で戦う事を選び、連邦の宇宙艦隊を宇宙で迎え撃つという方針を取ったとしても、その時は自分が協力者を集めてコロニー落としか隕石落としをやるつもりだ。

・・・転生者達が聞いたなら、『逆襲のシヤアとオリジンのシヤアを足して2で割ったような感じ』と評されるであろうほど狂った思考であったが、シヤアは本気だった。

そして、そんな彼の思考を薄々察しながらも、ララアはそれを止めることはしない。

それがシヤアの望みであれば受け入れるべきだと考えたからだ。

「そうでしたか」

「ああ。私も兄として妹の今後の生活の事を考えねばならんからな」

そうすればお前らは用済みだ。

そんな内心を隠しながら、シヤアはマハラジャにそう言った。

——だが、彼は知らない。

数時間後に予想外なことが起こったことにより、彼は妹をも失ってしまうということ。

#### ◇ハワイ沖 上空

ハワイ。

そこは一時期ジオンが占領したものの、3ヶ月前に奪還され、再び連邦軍の基地として機能しており、現在は哨戒機が頻繁に飛び立つてジオンの潜水艦を狩り続けている。

そして、今日、その哨戒網の1つに1隻の潜水艦が網に掛かろうとしていた。

「……これが例のジオンの潜水艦か」

ハワイ沖上空に飛ぶ対潜兵器を満載した連邦軍の哨戒機の機内にて、潜水艦発見を示す対潜ソナーの反応を見た機長の男はそう呟く。

「そうみたいですな」

副機長もまたその事を肯定するかのように頷く。

そして、今日、マハラジャと連邦軍の裏取引によつてこの海域の海中を通るジオンの潜水艦は見逃される手筈となっており、機長にもそのような説明がされていた。

「確かジオンの要人が乗っているんだったな」

「ええ、詳しい説明はされなかつたですけどね。まあ、俺達みたいな下っ端じゃ仕方ありませんが」

「・・・」

副機長はそう苦笑するが、機長はそれに対して沈黙していた。少しふざけすぎたかと思い、副機長は慌てて機長に謝る。

「すいません。少しふざけすぎました」

「いや、それより——」

「どうしました?」

「あの潜水艦は本当に司令の言っていた例の潜水艦か?」

「えっ?」

そう言われてみれば、と副機長は思う。

彼らはこの海域、この時間帯に航行する基地司令の言つた潜水艦を見逃すように言われただけだ。

それが基地司令の言つた潜水艦かどうかなど確認する術はない。  
が——



「でも、司令の言った潜水艦である可能性だつて有りますよ？」

「ない」

「は？」

「そんなものは一切ないんだ。いや、有ったとしてもジオンの要人など決して逃がして良いものではない」

そこまで聞いたところで副機長も機長の異常に気づいた。

「いや、なに言っているんですか？これは司令の命令ですよ」

「そんなことは知ったことか」

副機長の言葉をそう切つて捨てる機長。

絶句する副機長であつたが、そこであることに気づいた。

(そう言えば、機長。アイルランド出身とか言っていたような・・・)

副機長はそこで機長がアイルランド出身だつたことを思い出す。

そう、実を言えばこの機長は副機長が思っていた通り、ジオンによつて核を落とされたアイルランドの出身者だつた。

更に副機長は知らないことであつたが、彼は核を落とされたベルファストに家族と婚約者が居り、その双方を亡くしている。

ジオンに対する憎しみと怒りはアイルランド出身者の中でもかなり高い方だつた。

「機長、お気持ちは分かりますが、流星に撃沈するなんて事は——」

冷や汗を掻きながらも、副機長は機長のやろうとしている事に気づ

き、なんとか説得しようとする。

だが、その返答として返ってきたのは、機長のホルスターに入っていた1発の拳銃の銃弾であり、副機長は眉間にその銃弾を叩き込まれ、そのまま副機長席に寄り掛かるように倒れた。

「ふん、お前なんか俺の苦しみが分かって堪るか」

機長は既にこの世に居ない副機長の遺体に向けて冷たい視線を送る。

当然、こんなことをすれば、基地に帰還した時、機長は軍法会議行きとなるだろう。

だが、それでも構わない。

何故なら、この時、機長は生きて帰るつもりはなかったのだから。

「さて、一丁やりますか」

機長は狂気の宿った視線で舌舐めずりをしながらそう言って機体を潜水艦への攻撃態勢に移行させる。

——そして、この日、1隻のジオンの潜水艦と1機の連邦の哨戒機が行方不明となった。

UC0079年 10月21日 ソロモン防衛への  
懸念

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 10月21日 宇宙要塞『ソロモン』

「そうか。ザムⅡの開発は順調か」

ドズル・ザビはMS開発についての報告を持ってきた技術者の男に向かつてそう言う。

「はい、早ければ12月にはロールアウト可能です」

「12月か・・・」

12月。

それはこの世界が仮に原作を準拠するならば、戦争が終わる月だ。それを知っているがためにドズルは渋い顔をするが、同時に仕方がないとも思えてしまう。

元々、ザムは8月にロールアウトしたものに關しては事前に計画されていたが、このザムⅡについては計画に無かった。

何故なら、開発を許可して時点でザムの性能が原作のゲルググの性能を見なされていた為、これ以上の性能を持つ機体は一年戦争中には必要ないと考えられていたからだ。

そして、ザムが完成した時点でMS開発予算を一時縮小し、ザムの量産に注力して数を揃えるというのが転生者達の方針だった。

まあ、この方針自体が間違いであるとはドズルも思わない。

原作のドズルが言ったように、幾ら性能が良くとも数が揃っていないという意味がないのだから。

だが、その計算が狂ったのはマハラジャ・カーンが連邦に情報を流しているという情報をジオンの情報機関が察知してからだだった。

流している情報に関して全部は掴めていなかったが、少なくとも兵器関係の情報も少なからず流されているという事は確かであり、この事からMSの情報も流されてくる可能性が出てきたのだ。

そして、こうなると11月には連邦製のMSが実戦に投入されるかもしれない、ジオンは更なる質の向上に迫られ、結果、縮小されていたMS開発計画に再び注力することになり、そうして誕生したのがこのザムⅡだった。

ザムⅡは早期に開発するためにザムをベースに仕上がっており、性能的には0083とZの間、丁度30バンチ事件頃の連邦のMSに匹敵する性能を持っている。

Z時代のMSを相手にするには少々キツイが、0083のMSを圧倒する性能はあり、少なくともこの戦争で投入されれば一方的な虐殺に近い戦果を挙げることが可能だった。

「分かった。取り敢えずMSはそれで良いとして、例の“あれ”の開発はどうなっている？」

ドズルが言う例の“あれ”。

それはサイド7内での戦闘によって放棄されたコロニー——グリーン・ノアを改造したコロニーレーザー——ソーラ・レイの事だ。

本来、こういうコロニーの改造作業をする時は原作のマハルのように住民を追い出す必要性があるのだが、幸い、グリーン・ノアは住民の殆どがサイド7内での戦闘で死亡し、生き残りは皆ホワイトベースが持つていってしまったので、そのような事をする必要はない。

更に言えば、サイド7のコロニーはこれ一基しかないので、文句を言うべきサイド7の他のバンチの人間そのものが居らず、その結果、なんの軋轢もなく改造を進行させることができ、現在はルナツーでその作業が行われている。

「そちらについてですが・・・」

「やはり、進んでいないか？」

「はい」

だが、この計画は少しばかり無理があった。

原作では数日で完成したソーラ・レイであるが、それは曲がりなりにも完成品のコロニーであるマハルを使ったからであり、今回改造しているコロニーは元々が未完成だ。

故に、予定通り進まなかったとしても無理はなく、ドズルもそこを責めるつもりはない。

「何時なら完成できる？」

「11月下旬くらいになるかと」

「つまり、あと1ヶ月時間を掛ければ作れるということか？」

「はい、ただ撃つだけの砲台として使うならば、ですが」

これも問題だ。

完成しても運ばなければ、ルナツー近辺でしか使えない。

しかし、ルナツーはサイド3とは月と地球を挟んでほぼ反対の位置にあり、そんな距離からコロニーを丸々運ぶのはそれだけでかなりの時間が掛かる。

(いや、いつそ開き直ってルナツーに設置するというのも有りか)

ルナツーは連邦軍が攻めてきた時、ほぼ孤立無援で向かい撃たなければならぬ場所だ。

そこにソーラ・レイを設置すれば、ソーラ・レイそのものの戦術的価値は下がるかもしれないが、ルナツーが今年度中に落ちる可能性は

ほぼ0になる。

そうなればこちらはルナツターの事を気にすることなく防衛線の構築に邁進出来るというメリットがあった。

「・・・分かった。では、完成後はルナツターにそのまま配備しよう。わざわざこっちに持ってくるのも面倒だしな。それでオツゴの状況についてはどうだ？」

ドズルは話題を変え、MSの支援兵器として量産されているモビルポッド——オツゴの配備状況について尋ねる。

オツゴは連邦軍で言えば、ボールに相当する兵器であり、その性能は原作通り。

しかし、原作のドズルが聞けば『これだ！これが欲しかったんだ!!』と叫ぶであろうほど生産性が良く、また原作を見て分かるように徴兵された学生でもある程度扱えるほど汎用性も良い。

更に言えば、性能はボールよりも上だった。

「はい、現在のところ2000機が量産されており、それぞれ1000機ずつがア・バオア・クーとこのソロモンに配備されています」

男はそう説明する。

オツゴは基本的にMSの支援兵器という位置づけだ。

これは機体の出力や航続距離、更にはパワーや使える装備の汎用性などが機体の大きさからどうしてもMSに勝てない為だったが、量産性は高く、数も揃えやすいために数的にはむしろMSよりも主力となっていた。

「そうか」

「ただ問題なのが運用する母艦が少ないことです。今のところが所属の宇宙要塞が運用しているので問題は起きていませんが・・・」

「万が一、要塞が陥落した時、行き場に困るか」

ドズルは唸る。

オツゴは前述した航続距離の問題から、運用する母艦や拠点が近くに無ければならない。

しかし、オツゴはMSに比べれば小さいしろ、やはり1000機もの数を運用（しかも、これから更に増える見込み）するには宇宙攻撃軍の艦船だけでは母艦の数が足りず、母艦がない機体に関してはソロモンが拠点となって運用していた。

だが、万が一、原作通りソロモンが陥落した場合（そうなるとサイド共栄圏そのものが崩壊するが）、ソロモンを拠点にしているオツゴは他の母艦が上手く拾ってくれば良いが、そうでなければ行き場所に困ることになる。

一応、ソロモンは原作通りL5宙域にあり、近くにはサイド1とサイド4が有るが、ソロモン陥落以後ではそれらのサイドが本格的に連邦に降るのは想像に難くない。

（となると、益々防備を固めるしかないか）

ジオンは連邦と違ってどうやっても艦船を急速に増やすなどという真似は出来ない。

その為、ドズルに出来ることはソロモンの防備を更に固めるしかなかった。

「兵器の開発と配備状況についてはだいたい分かった。ご苦労だった。下がって良いぞ」

「はっ、失礼します」

男はそう言って敬礼し、部屋から出ていく。

それを見届けながら、ドズルはソロモン要塞の防衛について考え、そして、頭を抱えた。

(参ったな。固めると言っても限度があるぞ)

このソロモン要塞は全幅が30キロもあり、戦艦の主砲クラスの砲台やメガ粒子砲など幾らでも揃えられる。

が、原作ではそれらの迎撃システムはソーラ・システムによって吹っ飛ばされており、全くと言っても良いほど役に立たなかった。

一応、この世界ではそれらの無数の砲台の他にもヨルムンガンドが装備されており、それを使えばソーラ・システムを直接攻撃できるかもしれないが、敵も当然それに気づくので真っ先にヨルムンガンドを攻撃しに来るだろうし、そもそもヨルムンガンドそのものの数が少なく、25基しか存在しない。

これはヨルムンガンドの砲弾があまりにも高価であり、あまり数を揃えられなかったからだ。

勿論、コストを安く出来るように色々と試行錯誤を行ってはいるのだが、威力が大幅に減ったり、射程が普通の砲と変わらなくなってしまったりとなかなか上手くいっていない。

まあ、原作と違っていざとなればソーラ・システムが届かない要塞内部に籠城して戦う準備はしているが、出来るならこれはしたくない。

何故なら、それをするとということとは敵が攻めてきた場合、内部に引き込んで戦うことになるので、要塞に設置された火力がほとんど生かせなくなるからだ。

だが、要塞の火力の生かせる要塞外での戦いとなると、ソーラ・システムで戦力が纏めて吹っ飛ばされる危険性がある。

(・・・宇宙要塞というのはこうまでも守るのが大変なのか)

ドズルはそう思いながらも諦めるつもりは毛頭なかった。



何故なら、彼も戦いに勝って妻であるゼナとアニメ版同様に先月の9月2日に生まれた彼の娘であるミネバを守らなくてはならない立場だったのだから。

UC0079年 10月24日 ゴツプ大将

◇宇宙世紀0079年 10月24日 南米 ジャブロー

「やあ、エルラン君。久しぶりだね」

そう言いながら、ジャブローの屋内を歩くエルランに話し掛けてきた連邦軍の制服を着た太った男性。

その襟にはエルランと同じ大将の階級が着けられている。

彼の名はゴツプ。

転生者達から言わせれば、連邦きつての兵站屋であり、大量の物量を持つているが為に複雑となつている連邦の物資を適切な場所にするなど、後方要員としてはかなり有能な人物だ。

また指揮官としてはそれなりに洞察力もあり、前線指揮官としての素質は皆無であるものの、後方指揮官としてはそこそ有能といったところだった。

原作ではジャブローに籠って指揮を執ったことから、一時期無能な人物と評されたこともあったが、別に無能とされるような行動は起こしていないし、将官という存在が本来、後方指揮官であることを考えれば彼の地下豪に籠って指揮を執るといった行動も間違いではない。

「これはこれはゴツプ大将。なんのご用でしょうか？」

同階級ではあるが、大将としては先輩にあたるため、エルランは一応の礼儀をゴツプに対して払った。

「ちよつと気になることがあつてね。少しその部屋で話したいんだけど、良いかね？」

「は、はあ。承知しました」

まさか、自分が裏切り者であることがバレたのか？

エルランはそんな事を思っただけで冷や汗を流しながらも、ゴツプの提案を了承し、ゴツプと共に彼がその部屋へと入っていった。

◇

「すまないね。時間を執らせてしまった」

「いえ、それより御用向きを伺いたいのですが・・・」

エルランは急かすようにそう言った。

それは先輩に当たる人物への態度としては少々無礼ではあったが、ゴツプは気にすることなく涼しい顔でエルランに対してこう返す。

「なに、そろそろジオンとの講和を考えても良い時期かなと思っただけだよ」

「講和、ですか？」

「そう。有るんだらう？ジオンとのパイプが君には」

その言葉を聞き、エルランは今度こそ背筋が凍り付くような思いを抱く。

だが、そんなエルランに対してゴツプは相変わらず涼しい顔でこう言う。

「ああ、誤解しないでくれ。別にその事で摘発しようと考えているわけではないよ。まあ、レビルなら証拠を見つけ次第、即刻摘発といった指示を出しただろうがね」

「・・・閣下は私に何をお望みですか？」

「それはさつきも言っただろう？ ジオンとの講和に向けたパイプ役をお願いしたいんだよ。なにぶん、政治家達は意固地になってて私の言うことを聞いてくれなくてね」

ゴツプからしてみれば、これ以上戦争を続けるのは無謀としか思えなかった。

そもそも連邦軍は未だ肝心の宇宙に拠点を築けておらず、2ヶ月前に行われたルナツーという拠点を奪還するための月号作戦もまた失敗している。

仮にこのまま重力戦線でジオン軍を地上から叩き出したとしても、拠点が無いというこの状況下では宇宙への反攻はリスクが有りすぎる上に、戦争が更に長引くことになるだろう。

更に言えば、例え最終的にジオンに勝利したとしても、既にサイド共栄圏が形だけでも成り立っている現状でスペースノイドが簡単に独立を諦めてくれるだろうか？

答えは否だ。

一度達成しかかった夢を自分達が達成させたいという輩が出てくるのは確実であり、そうなったら戦後に反連邦活動が活性化するのは間違いない。

要はルウム沖会戦とルナツ―陥落によって宇宙から叩き出され、月号作戦に失敗した時点で連邦は戦略的に敗北してしまっているのだ。そう、かつて太平洋戦争で日本に勝利したにも関わらず、戦後に東南アジアの植民地を失ってしまった欧米諸国のように。

（もしかして、サイド共栄圏というのはかつてニホンとやらの国が唱えた大東亜共栄圏が元となっているのか？）

あまりにも太平洋戦争の時と酷似した現在の状況にゴツプはそう思ったが、今は本題ではないと思ひ直す。

「それは・・・返答いたしかねる案件ですな」

「まあ、今は頭の片隅にでも入れておくだけでも良いよ。それより例のヨーロッパ侵攻作戦について聞きたいことがあるのだが」

難色を示すエルランの反応に、ゴツプは話題を変えて、ヨーロッパ侵攻作戦についての事を尋ねることにした。

ヨーロッパ侵攻作戦。

これは11月上旬に予定された連邦軍のヨーロッパに対する攻勢作戦だ。

アイスランド、北アフリカ、スカンジナビア、東ヨーロッパ、バルカン半島の5方向から侵攻し、現在、ジオンが占領しているヨーロッパ全土（中欧、西欧、イベリア半島、イタリア半島、ブリテン島、アイルランド島）を解放しようというかなり野心的な作戦である。

投入される兵力は1000万人。

オデッサ作戦の時よりは少ないが、それでも連邦軍の現戦力の3分の1を集めた超大規模作戦だった。

勿論、これらを動かす兵力の使う物資はゴツプが各所から手配しているのです、決して無関係ではない。

「なんででしょうか？」

「率直に言おう。この作戦、上手く行くのかね？」

ゴツプは真面目な顔でエルランにそう尋ねる。

これは肝心なことだった。

成功すれば、作戦の目的通りヨーロッパ全土からジオンを叩き出せるだろうが、失敗すれば逆に息を吹き返して東ヨーロッパに再侵攻してくる可能性がある。

まあ、彼我の戦力差からするに負けることはないと思われるが、ジオンが条約を破って例の隕石落としを行ってくる可能性もあるので、決して油断は出来ない。

「さあ、それはやってみないと分かりませんな。本来なら、もう少し準備してから行う予定でしたから」

エルランは皮肉げな笑みを浮かべながらそう言う。

実のところ、このヨーロッパ侵攻作戦は作戦そのものについては前々から計画され準備されて来たが、作戦発動についてはもう少し後になる筈だった。

しかし、ブリテン島とアイルランド島が占領されたことで政治家達が慌て始めたことから状況が変わってくる。

連邦軍上層部はこのジオンの行動が悪足掻きであると察していたのだが、連邦政府の方はそうは取らず、早急な作戦の修正と決行を言い渡してきたのだ。

もつとも、急な作戦の繰り上がりの中でもエルランは焦っていないかった。

何故なら、シユダック中佐を通じてジオン側にこの作戦を伝えたところ、連邦政府が言い伝えてきた日程でも構わないという返答が来たからだ。

この余裕のある反応からするに、ジオンには何らかの秘策がある事

は明らかであり、今回も連邦軍は勝つにしろ負けるにしろ大損害を負うことは確実だと感じていた。

だが、それをゴツプに言うつもりは更々ない。

信頼できるかどうか、かなり怪しいからだ。

「そうか。・・・ところで、その作戦の際、君は何処から指揮を執るのかね?」

「? 私の役目は作戦開始を言い渡すだけのつもりですので、ジャブローからするつもりですが、何か不都合なことでも?」

いぶかしみながらも、別に隠す必要はないとエルランは正直に作戦発動時にジャブローに居る旨を伝える。

「いや、そういうわけではないのだが」

「そうですか。・・・ああ、そういえばこちらもゴツプ閣下にお聞きしたいことがあったのですが、よろしいでしょうか?」

「なにかね?」

「ジーン・コリニー元大将の行方について何かご存じではありませんか?」

エルランはいつの間にかジャブローから居なくなっていたジーン・コリニー元大将について尋ねる。

第三次南極会談にてジーン・コリニーはジオン側に引き渡されることが決定されていたのだが、引き渡される前にサイド7での一件によって引き渡しの話そのものが破談となってしまう、結局、ジオンに身柄を引き渡されることはなかった。

そして、その後の消息はエルランも知らなかった為、知っているか

もしれないゴツプに尋ねたのだ。

ちなみに仮にゴツプが知っていて惚けたとしてもそれ以上追求する気はなかった。

ジオンは特にジーン・コリニーの身柄には拘っていない様子であったし、エルランもジオンに降るときの手土産くらいになれば良いという感覚だったからだ。

だが、ゴツプは意外な程にあっさりとその問いの答えを言った。

「ああ、彼かね。彼なら今、アフリカに居るよ」

「アフリカ？」

「そうだ。連邦政府の閣僚達が汚名返上の機会を与えてね」

「そうでしたか。しかし、アフリカの司令官が変わったという話は聞いたことはありませんが・・・」

一応、エルランは連邦軍の最高司令官という立場であり、各方面軍の将官の名前を目にするときは当然ある。

だが、そんな彼でさえアフリカ方面軍の司令官が変わったという話は全く聞いたことがなかった為に、ゴツプの話の信憑性を疑っていた。

「当然だよ。こつそり変えたからね。ジオン側にジーン・コリニーがアフリカ方面軍の司令官に就任したことを知らせれば、連邦軍は約束を最初から守る気はなかったと余計な大義名分を与えてしまうことになる」

「そうでしたか。しかし、そんなことを私に言ってよろしかったのですか？」



「ああ、構わんよ。好きなように漏らしたまえ。ただし、この情報を伝えた場合、その翌日には君の命が亡くなっているかもしれないがな」

「あはは・・・」

エルランは笑顔のまま恐ろしいことを言うゴツプに対して、部屋に入る前と同様に冷や汗を流しながらそう苦笑していた。

UC0079年 10月27日 来るべき時への備え

◇宇宙世紀0079年 10月27日 ブリデン島 リヴァプール港 ペガサス 艦内

「えっ？モビルスーツの操縦を教えてくださいですって」

のび太は目を丸くしながら目の前の人物——バーナード・ワイズマン伍長を見る。

「ああ、頼むよ」

「そう言われても……」

バーニイの申し出にのび太は困ってしまう。

実はこの時、バーニイは腕が上がってきたことで今まで乗っていたジムⅡ改に代わってジムⅢを回されることになり、現在は機体交換訓練の最中だった。

だが、どうせならこの先で生き残るために腕を磨きたいと考えており、のび太にその教官役を頼んでいたのだ。

しかし、頼まれたのび太としてもそれはなかなか困難と言わざるを得ない。

何故なら、のび太はほとんど感覚でモビルスーツを動かしていたからだ。

基本的にパイロットという人種は感覚派と理論派の2つのタイプが居る。

エースと呼ばれる人間達もまた同じで、原作では感覚派の代表的なエースがアムロ・レイ、理論派の代表的なエースがシャア・アズナブルといった感じだった。

そして、のび太はアムロと同じ感覚派に属するタイプのパイロットなのだが、一般的に感覚派の人間というのは自分だけにしかない感覚で動かしているの、教えるのに向いていない人種と言われている。更に言えば、のび太自身、教えるのは上手くないという事は自覚しており、出来ることならば断りたいというのが本音だった。

いや、厳密に言えばニュータイプだったら感覚的な教えも理解できるかもしれないが、ニュータイプの感覚をオールドタイプであるバーニイに言っても分からないだろう。

「その・・・ライデン隊長に教わった方が良いのでは？」

のび太はペガサスの戦闘隊長であるジョニー・ライデン大尉に教わることを薦める。

が――

「隊長は忙しそうだったから、流石に無理だ」

「そう・・・ですか」

のび太は断る口実が無くなったことに肩を落とす。

まあ、よくよく考えれば戦闘隊長という艦内では幹部と言っても良い立場に居る。

訓練だけしていれば良い自分達と違って色々と書類仕事などのやることもあるのだろう。

(僕も偉くなったなら、そんなことをしなきゃいけないのかなあ)

もっとも、戦後も軍に居るかどうかは未定ではあるが。

のび太はそう思いながらも、流石にここまで言ってきたバーニイを無下にするのもどうかと思い、ある提案をした。

「・・・操縦は無理ですけど、シミュレーションでモバイルスーツでの僕の射撃技術を教えることは出来ますよ?」

「本当か!?助かる!!」

バーニイの喜ぶ姿に、のび太は苦笑しながら顔を少しばかり綻ばせていた。

◇サイド3 総帥府

「よく来てくれた。ギニアス少将」

ギレンはそう言つてギニアス・サハリン技術少将を出迎える。  
ちなみにギレンの傍らにはセシリア・アイリーンの姿もあった。

「いえ、お呼びいただけで光栄です」

そう言うギニアスの顔色はかなり良く、宇宙線治療はどうやら上手くいったらしいとギレンは察した。

「実はある頼み事をしたかったのだが、その分だと大丈夫そうだな」

「頼み事、ですか？」

「うむ、実は君にはアクシズに行つて貰いたいのだ」

「アクシズ・・・あの火星圏にあるというあれですか？」

ギニアスはそう聞き返す。

アクシズはアステロイドベルト（小惑星帯の別称。この場合は火星と木星の間に存在する小惑星帯を意味している）に存在していた小惑星の1つであり、原作では一年戦争前から開発が進められ、一年戦争後にはジオン共和国から離反した旧ジオン公国本国艦隊とグラナダのキシリア艦隊の大半が逃げ込んだ場所でもある。

だが、この世界では少し事情が違い、とある理由から転生者達はアクシズに核パルスエンジンを原作よりも早く取り付けて火星圏まで移動させていた。

「そうだ。貴様も噂くらいは知つていようが、アクシズでは様々な先進技術を開発している」

そう、基本的にジオン本国やア・バオア・クーなどではこの戦争に間に合う技術やMSを中心に開発しており、万が一、戦争に負けた場合に備えて、アクシズではこの戦争に間に合わなそうな先進技術を開発していた。

その事はギニアスでも噂程度であれば聞いたことがあり、それが現実に実在していたことを知らされてギニアスは驚く。

「貴様にはそこである新型エンジンの開発を頼みたいのだ」

「エンジン、ですか？」

ギニアスはその言葉に興味を抱く。

現在のエンジンは車などの民生品や一部の兵器を除いて艦艇だろうとMSだろうと戦車（ただし、これはヒルドルフのみ）だろうと核融合炉が使われている。

そして、アクシズという場所で研究されていて、軍の技術者である自分にこの仕事を命令するということは、核融合炉に代わるくらいの強力なエンジンなのだろう。

そのような重要な仕事を任されるとするのは技術者として心が踊る。

「分かりました。しかし、PS装甲の方は・・・」

「ああ、あれはもう良い。短期間でどうにかなりそうにないしな」

PS装甲。

ガンダムSEEDで登場する装甲でこれがあれば実弾兵器を無力化する事が可能な装甲だ。

この世界ではアプサラスⅢに試験的に搭載されていたが、別世界の技術を強引に習得させようと試みたのが祟ったのか、エネルギーが十分な状況であるにも関わらず発動途中で効果が頻繁に切れたり、コストが糞みたいに掛かったりする欠陥品と化していた。

おまけに短期間で解決できそうな問題ではなさそうだった為、これ以上無理に習得する必要はないとギレンは考えており、ギニアスにPS装甲の開発中止を申し渡したのだ。

「そうですか・・・」

「まあ、もし無念だというのであれば、暇があつた時に開発を続行してくれ。資料は持っていつて構わないからな」

「分かりました」

「では、下がって良い」

「はっ」

ギニアスは敬礼をすると、執務室を出ていく。

そして、それを見届けたセシリアはギレンにこう聞いた。

「よろしいのでしょうか？まだ戦争が終わっていないのにギニアス閣下をアクシズに送っても」

「構わんよ。どう転ぶにしてもこの戦争はあと2ヶ月くらいで終わるだろう。ならば、先進技術を今のうちに発展させて連邦との差を付けておきたい」

ギレンはそう言うが、実のところ本音は別にある。

前述したように、現在、アクシズで開発されている物は文字通りの意味で先進技術だ。

閃光のハサウエイで出てくるΞガンダムに搭載されていたMS搭載型のミノフスキークラフトや戦後に出来る艦艇に配備される予定のハイパーメガ粒子砲。

更にはΖガンダムに搭載されたバイオセンサー、サイコフレームやファンネルなどのニュータイプ専用兵器の開発も行われている。

先程ギニアス少将にはああ言ったが、いずれPS装甲の開発もここで行う予定だ。

しかし、部下から上がってきた開発申請書の中で見逃せないものがあり、それが先程ギニアスに言った新型エンジンだった。

(まさか、ブラックホール・エンジンがこの世界で存在していると  
は・・・)

ブラックホール・エンジン。

別名で縮退炉と言われるそれは『トップを狙え!』やスーパーロボット大戦によく出てくるエンジンだ。

ガンダムの作品でも▽ガンダムなどで登場しているが、この宇宙世紀（及び後のリキルド・センチユリー）のガンダムではついで登場はしておらず、全く別世界のエンジンの筈だった。

しかし、もつとも転生者達が重要視したのは、このブラックホール・エンジンはPS装甲のように他のガンダム作品の技術を転生者達がこの世界の人間に開発させるように仕向けたものではなく、この世界の人間が発案し、開発をしようとしているという事実だ。

馬鹿にするわけではないが、この世界に居る人間の発想力では精々が後の宇宙世紀の時代に出てくる技術の先取り程度で、MS以外の他の作品の技術を転生者のヒント抜きですることは不可能だと転生者達は思っていた。

何故かと言えば、もしそれが出来るのであれば原作でやっている筈だからだ。

だが、この世界の人間はこの宇宙世紀やリキルド・センチユリーの時代にはない全くの別世界の技術を発案してきた。

ここで考えられる可能性は2つ。  
1つがこれを発案したのが自分達と同じ転生者であるという可能性。  
だが、これはない。

実際に話してみてもグリップス戦役やネオ・ジオン抗争という単語を然り気無く出してみたが、反応は無かったからだ。

そして、もう1つの可能性。

それはこの世界がスパロボ世界か自分達が生きていた頃には発売されていなかったスパロボ世界、もしくははスパロボに似たクロスオーバー世界なのではないかということ。

だが、これも転生者達は一笑に伏した。

幾ら自分達が転生という普通の人間には体験できないような事を経験したとはいえ、そのような事はあり得ない。



そういう根拠のない楽観論を抱いていた。

・・・いや、正直に言えばみんな怖かったのだ。

スパロボのような多数の悪役勢力と対峙するという修羅の世界を経験することが。

だが、その根拠のない楽観論はのび太がこの世界に来たことよつて木っ端微塵に吹き飛んでしまった。

(既にドラえもんがクロスオーバーした以上、何時かは分からないが、この世界に何らかの異常が起こっても可笑しくはない。その時に備えなければ)

それは転生者の胸の内だけに留められた腹心であるセシリアやデラーズにすら言えない秘密。

それが杞憂であってくれなことをこの時のギレンは切に願っていた。

U C 0 0 7 9 年 1 0 月 3 1 日 不穏な空気

◇宇宙世紀<sup>u.c.</sup>0079年 10月31日 東欧

「居たぞー！こつちだ!!」

東欧の某町。

ヨーロッパ侵攻作戦に向け、兵力の終結を行う連邦軍であったが、そこで待っていたのはゲリラによる襲撃だった。

と言っても、この地に集まっている連邦軍の数は380万人。

全体的な被害は微々たるものであったが、それでも何時何処から襲撃してくるか分からないという事実は彼らに恐怖と激しい怒りを抱かせていた。

「くそっ！裏切り者共め!!」

たったいま射殺したゲリラ兵の遺体を蹴りながら、アフリカ出身の黒人のアースノイド兵士は吐き捨てるようにそう言った。

彼の故郷はジオン軍（厳密に言えば義勇軍だが、彼のようなアースノイドにしてみれば同じようなもの）に荒らされて家族は皆殺しにされており、ジオン軍に対して激しい憎悪を燃やしている。

そして、そんな彼からすれば自分達に反抗してジオンを利する彼らは裏切り者であり、ジオン以上に許せない存在だった。

だが、誰しもが彼のように思っているわけではない。

「おい！てめえ!!なにやってる!!」

そう怒鳴りながら黒人の兵士を殴り倒す白人の連邦軍兵士。

彼はこの東欧の出身者だった。

「いってえ・・・てめえ、何しやがる!!」

殴られて体を倒されながらも、流石に腐っても兵士というべきか、彼はすぐに起き上がり、その殴った白人兵士に向かって文句の言葉を口にす。

「それはこっちの台詞だ!!何してるんだっていつてんだよ!!」

「ああ!?!ゲリラのクソ野郎を蹴っただけじゃねえか!!」

「バカ野郎!!ここには俺みたいな東欧出身の奴も居るんだよ!!少しは考えろ!!」

そう、この場には彼のようなゲリラを憎んでいる兵士だけではない。

反連邦ゲリラの多い（多くなつたのは連邦の自業自得だが）東欧出身という立場で複雑な立場に立たされている兵士も大勢居る。

そんな彼らからしてみれば、自分の故郷の人間が遺体となつてまでぞんざいに扱われるのは我慢ならなかつたのだ。

事実、その場には白人兵士以外にも東欧出身者が居るが、彼らは黒人兵士に対して怒りを込めた視線を向けていた。

だが、元々憎悪の感情によって『ゲリラは死んで当然』だと思つていた上に、殴られて血が上つている黒人兵士がそのような事に納得できず訳もない。

「ふんっ!そんなこと言つて・・・本当はてめえらがスパイなんじゃねえのか?」

「なんだと!?!」

黒人兵士にそう言われていきり立つ白人兵士。  
当たり前だ。

怒っている状態の中で身に覚えの無い言い掛かりを付けられているのだから。

だが、怒っているのは黒人兵士も同じ。

彼は白人兵士達をバカにするかのように鼻を鳴らしながらこう言った。

「おいおい、さっきお前は言ったよなあ。ゲリラのクソ野郎共を擁護するようなことをよお」

「それがどうした?」

「連邦に逆らう奴を擁護するような奴がスパイじゃなくなんだって言うんだあ?」

黒人兵士のバカにするような態度と言葉に、我慢ならなかった白人兵士はもう一度黒人兵士を殴る。

「やりやがったなあ!」

だが、今度は黒人兵士も黙ってはおらず、殴り返す。

そして、この2人の喧嘩は憲兵が出てきて2人を拘束するまで続いたが、この後始末が問題だった。

なんと処罰した憲兵が黒人兵士と同じアフリカ出身で、しかも黒人兵士と同じ家族が被害にあってジオンを憎んでいる立場であったことで、軍法会議にて反連邦的な発言をしていたという理由で白人兵士が重営倉1ヶ月、黒人兵士を無罪とするというあまりにも酷すぎる判決を行ったのだ。

そして、これを切っ掛けに前々から不満が出ていた東欧出身の兵士が脱走してゲリラに加わるという事態が続出。

しかも、それを抑えようとして更に反発されるという悪循環を繰り返す。

——連邦のヨーロッパ解放作戦は始まる前から不穏な空気が漂っていた。

◇南米 ジャブロー

「あまり派手な行動は控えて欲しいのだがな」

エルランは少々頭を抱えながら、そんなことを呟く。

10月28日に起きたジオン軍の攻勢によるカリブ海の陥落。

これによって先のブリテン・アイルランド両島の陥落の時よりも酷く連邦政府は混乱した。

当然だろう。

地図を見れば一発で分かるが、カリブ海はジャブローの存在する南米の目と鼻の先に有るのだから。

そして、こうなつてくると責任の押し付け合いという名の醜い政治闘争が起きるようになり、エルラン大将もその標的となつてつい数時間前まで政治家達から詰問を受けていた。

「まったく暇な連中だ。敵がもう目の前に居るといふのに責任を押し付けてくるとはな」

エルランはそう毒づくが、ここで更迭されるわけにもいかない。もはや連邦軍の地位には全く拘っていないが、ジオン側に自分を更に高く売るためにも今の地位が必要なのだ。

もつとも、ゴツプには完全にバレているみたいなので、何時自分の事を政府閣僚に漏らすのか気が気ではなかったが、少なくとも今は漏らす気はないらしい。

(あの狸め。いったい何を考えている?)

あのような脅し文句を吐いたのだ。

自分がただジオンへのパイプがあるわけではなく、スパイ行為もして情報を買っているということは既に気づいているだろう。

にも関わらず、自分を生かしておくどころか、拘束すらしないゴツプという存在をエルランは不審に思っていた。

(…まあいい。奴が何を考えていようと、今は精々やれることをやっておこう)

少なくとも、ジオンとのパイプが自分だけである限りは拘束されることはないだろう。

そう思いながら、エルランは先日陥落したカリブ海の事について考え始める。

(まさか、このタイミングでカリブ海が陥落するとはな)

7月から行われていたジオンによるカリブ海侵攻作戦はエルランの目から見ても、泥沼の状態だった。

そして、消耗戦となれば物量の多い方——すなわち連邦の方が有利だ。

だからこそ、補給さえ万全にしていれば、いずれジオンは消耗戦に

疲れて撤退すると連邦軍上層部は考えており、それはエルランも同じだった。

だが、9月に入り始めた辺りから状況が大分変わってきて、カリブ海の連邦軍が徐々に押され始める。

「いつたい現地で何が起きたのだ？」

エルランはそう言っただけで首を傾げるが、実はこの時、オデッサが連邦軍の核攻撃を受けたことにより、『これからはジオン軍に占領された地域全てに核が使われるのではないか?』という不安が将兵達に蔓延っていたのだ。

特に実際にジオンに占領されている地域である西ヨーロッパと北米、そして、中東(当時は中東もジオン占領下)出身の将兵達の士気低下は著しかった(ちなみにジオンの場合出身地が宇宙なので、特に士気に支障は出ていない)。

そして、9月12日に休戦条約が締結されるとそれらの地域出身の連邦軍将兵達はホッとす。

少なくとも、この休戦期間中は故郷に核は落とされることはない。

そう思い、彼らは一時的に士気を回復させたのだが、僅か6日で休戦が破られたことによつて、再びその士気はドン底に落ちた。

そして、幾ら補給が有ろうと結局武器を取つて戦うのは人間であり、将兵達の士気が下がっていけば当然戦力も落ちる。

まあ、それでも武器に圧倒的な差があれば問題はないのかもしれないが、あいにくそういうわけでもない。

その結果、1ヶ月以上持たせはしたものの、遂にカリブ海はジオンの手によつて落ちてしまったのだ。

そして、エルランがこの問題に気づけなかったのは彼が前線に出るような人物ではなく、将兵達の気持ちに分からなかったからというものもあるが、問題が表面化する前に一時休戦となつてしまったというのも大きい。

まあ、気づいたとしても問題を解決する気など無かつただらうが。

「・・・まあいい。問題なのはこのカリブ海陥落によって一部の政治家共がジャブローに戦力を戻せと言ってきている事だな」

エルランは一部の政治家達を思い出しながら苦虫を噛み潰したような顔をする。

そう、ジャブローが敵が近づいてきたことにより、一部の政治家がヨーロッパ侵攻作戦を縮小し、ジャブローに戦力を戻せと言ってきたのだ。

しかし、それはエルランにとって都合が悪いため、なんとか根回しを行ってその発言を撤回させたが、普段はあれだけ威勢の良い事を言っている癖に、いざ敵が自分達に近づいた途端、あわてふためく彼らにエルランは益々冷えた視線を向けていた。

まあ、実際、ジャブローが落とされたら連邦は終わりなので、彼らの言っていることも間違いではないのだが、だからと言って無様な自己保身の様を見せられれば心も冷えていくというものだ。

「ふん。まあ、奴等の事はどうでも良い。私にそれを非難する権利もないしな」

どのみちヨーロッパで大損害を被れば自分は更迭されるだろう。

そのタイミングで自分は連邦軍からジオン軍に寝返れば良い。

エルランはそんな算段をつけ始めた。



UC0079年 11月1日 ガルマの嘆き

◇宇宙世紀0079年 11月1日 北米 キヤリフォルニア・ベース

「やはり見つからないか」

ガルマは半月ほど前から行われているアルテイシア搜索の途中経過報告書を見ながら、頭を悩ませる。

内部調査によって内通者の高官の存在は簡単に割り出せたが、その内通者は差し向けた拘束するための部隊が私室に踏み込んだ直後に爆弾を使つて自爆してしまった。

ならばと、その内通者の協力者であろう人物を探してみれば、これもまた簡単に見つかりはしたが、いずれも行方を眩ませており、その行方は不明なままだ。

（連邦に行った可能性は低い。ということとは、ダイクン派の居る東アジアか？）

ガルマはアルテイシアが連邦に行った可能性は低いと見ていた。

何故なら、こちらの内通者であるエルランからはアルテイシアはこちらに来ていないし、少なくとも自分の知る限りでアルテイシア救出作戦なるものの存在も知らないと言ってきたからだ。

正直言つて、こちら側についているとはいえ、*“裏切り者”*であるエルランの言うことを信じるのは癪であったが、ここでアルテイシアの事でしらを切つても彼の身のためにはならないという事実を鑑みて、一応、信用することにした。

しかし、そうなるとアルテイシアが拉致された先は東アジアであり、拉致したのはダイクン派ということになる。

これは内通者である高官が *“隠れダイクン派”* と言われる存在であったことからほぼ確実だ。

(そう言えば、戦略海洋軍の潜水艦が1隻不審な行動を見せて現在は消息不明だと聞いたな)

潜水艦の消息不明というものは珍しいものではない。

実際、撃沈される段階になれば連絡すら送れずに海底に没する場合も多いし、ミノフスキー粒子を連邦側も使ってきてからはそれがより顕著になっている。

だが、この状況で不審な行動を見せた後に消息不明というのは、アルテイシアを乗せて東アジアまで移送させるために敢えて連絡を絶っていると見て良いだろう。

(今はまだ様子見をしているようだが、彼女を手に入れたとなれば、マハラジャは本格的に反旗を翻すだろうな)

アルテイシアという担ぐ対象を手に入れてしまえば、それだけでダイクン派は大義名分を手に入れられる。

なにしろ、彼女はかつて宇宙移民を魅了したジオン・ズム・ダイクンの娘なのだから。

おまけに自分達ザビ家にはジオンの後釜に座ったということ、ジオン・ズム・ダイクン暗殺の疑いが掛けられている。

それも大義名分にすることが可能だろう。

自分達が正当な後継者と名乗る事が出来るのだから。

しかも質が悪いことに暗殺は事実だった。

(仕方なかったんだよ!!だいたいあんなタイミングで連邦に宣戦布告して勝てるわけないじゃないか!?)

ガルマは11年前の事を思い出す。

全てはジオン・ズム・ダイクンという人物が発端だった。

これがアニメ版なら良い。

アニメ版の彼はハト派であり、自分達とも上手く協調することが出来ただろう。

幸い、自分達のUC0079年時の年齢もアニメ版準拠（ギレン35歳、ドズル28歳、キシリア24歳、ガルマ20歳。UC0079年時。ちなみにデギンは原作もオリジンも62歳であり、サスロはオリジンでしか登場しなかったが、現在は32歳となっている）であり、ジオン・ズム・ダイクンもアニメ版のそれであると思った。

いや、思いたかったと言った方が正しい。

だが、現実是非情でジオン・ズム・ダイクンはオリジン準拠のタカ派（と言うか、狂人）だった。

しかも、デギンによる政治とギレンやサスロによる国力邁進が却って彼の自信へと変わってしまった、あわやUC0068年のオリジンでジオンが暗殺された日に連邦への宣戦布告が行われようとしたのだ。

これには流石にデギンも反対し、必死に止めたのだがジオンの決断は覆らなかった。

そして、このままではMSどころか、ミノフスキー粒子散布下戦術もろくに確立されていないUC0068年の時点で連邦との戦争に突入するというハードモードな状態になってしまう。

そうなれば結果は言うまでもなく確実に負けて自分達のやって来たことが無駄になる。

そう考えたデギンは万が一にも子供達に類が及ばないように、自分の判断でジオンを暗殺することに決めた。

原作オリジンのように病死を待っても良かったのだが、それでは不確定すぎるとデギンは考えたのだ。

そして、宣戦布告する前にかジオンを暗殺することに成功し、ザビ家は政権の掌握を行う。

勿論、暗殺したことを疑われないようにアストライアの脱出支援などのダイクン派に対する融和は極力行ったし、シヤアが士官学校に入ってきた時は迷った末に、結局、それを受け入れた。

（・・・思えば、あんな狂った人間についていったのが不幸だったんだ

な。みんな)

そう、不幸だった。

オリジンのジオン・ズム・ダイクンという狂人についていってしまつたこと自体が。

おそらく、それはザビ家、ザビ派、ジオン以外のダイクン家、ダイクン派、中立派、それら全てにおいて同じ。

いや、もしかしたら仮にこれがアニメのジオンだったとしても同じなのかもしれない。

何故なら、ジオンという個人名を国名にしていること自体が自己顕示欲丸出しであるからだ。

これでは他サイドが『サイド3の住民は独立を望んでいるというよりはジオンによつて洗脳されているといった方が正しい』と見なしても無理はない(実際、原作でもこの世界でもサイド2出身のシロー・アマダは連邦軍への入隊理由としてその問題点を挙げていた)。

もし対外的に『サイド3は民主的な考えの結果、連邦からの独立を望んでいる』と主張したかったのであれば、国名をジオン共和国ではなく、ムンゾ共和国とでもするべきだっただろう。

それならば他サイドに多少の理解も得ることも可能だった。

そうしなかつた時点で、アニメ版のジオンはハト派(オリジンのジオンも最初は穏健であつたらしいが)であつても、かなりの危険人物だったとしか言いようがない。

まあ、コントリズム(サイド国家主義思想)とエレズム(地球を聖地とする思想)を融合させたジオニズムなどという思想を唱える時点で危ない人物であるのは確実だったが。

(て言うか、政治家ならむやみやたらに危ない思想を唱えたりするなよ)

それが必要だったのは分かる。

実際、ジオン以外の人間ではサイド3を纏め上げることは不可能

だっただろう。

だが、個人的な崇拜を行わせるのは旧世紀のヒトラーとなんら変わらない。

いや、ヒトラーですら個人名を国名にしたりはしなかったところからするに、ジオンはヒトラーよりも質が悪い存在だ。

しかも、一番最悪だったのが、状況が状況だけに急いで暗殺した結果、ジオンという存在を「殉教者」としてしまったことだろう。

殉教者というのは厄介だ。

それは原作の一年戦争後にギレンに殉ずる形でデラーズ紛争を引き起こしたエギーユ・デラーズやシャアの反乱に感化されてマフティー動乱を引き起こしたハサウェイ・ノアの例を見れば分かる。

そして、ジオンが死んだことによつて、原作通り、『ジオンの悪口を言うことは禁句』という雰囲気サイド3全体に漂ってしまった。

しかも、この流れには現在のジオンの事実上の指導者であるザビ家ですら逆らえないほどだ。

もつとも、口には出さないだけでサイド3の全住民がジオンという人物が唱えたジオニズムに共感しているわけではない。

それは軍人も同じで、2ヶ月前にオデッサで戦死したマ・クベなどは原作（オリジン）通りジオニズムを『壺よりも価値がない代物』と評していたし、士官学校時代にジオンの実の息子であるシャアに聞いたジオニズムの評価はこれまた原作（オリジン）通り『不遇な人たちの負け惜しみ』という酷いものだった。

だが、全体的に見ればサイド3はジオンという人物、いや、宣教師に毒されてしまったと言えるだろう。

それはザビ家がジオンという人物への非難を一度も公的な場でも口に出せないことから明らかだ。

（まったく。僕たちザビ家に着いてくる人物を危険人物って言うなら、こんなジオンに死んでも殉ずるダイクン派の面々だって十分に危険人物じゃないか）

だが、そんなことをダイクン派の面々に言っても通じないだろう。彼らからしてみれば、『ザビ家の思想Ⅱ危険、ジオンの思想Ⅱ神の言葉』なのだから。

しかも、それを本人だけでなく、その子供にまで求めようとする。これを狂信者と言わずして、なんと表現すれば良いのか？

(みんな狂ってる。民主主義を唄っている癖にスペースノイドに参政权を認めない地球連邦も、ジオン・ズム・ダイクンという一個人を死んでからも崇拜するジオン公国も。みんな)

ガルマは内心でそう思いながら、現在のこの狂った状況を嘆いていた。

UC0079年 11月5日 マハラジャの焦り

◇宇宙世紀0079年 11月5日 東アジア ペキン

「今、なんとおっしやいましたか？」

ペキンのジオン・アジア方面軍の司令部にて、マハラジャ・カーン准将は光学通信で映し出されたギレン・ザビから告げられたある言葉に顔色こそは変えなかったが、内心ではほんの少し焦ってしまふ。

『む？聞こえなかったか？近々連邦軍はヨーロッパに大規模な侵攻を行う予定だ。君は連邦軍の攻勢が始まったタイミングで朝鮮半島及び華南に進撃してくれ』

ギレンがマハラジャに命じたのは連邦軍がヨーロッパに侵攻するのと同時に、華南及び朝鮮半島に向けて進撃しろというものだった。だが、これは予想できていたことだ。

幾ら背信行為を働いているとはいえ、一応、このアジア方面軍は地球方面軍の傘下にある組織となっている。

その為、その地球方面軍の上司であるギレンがマハラジャにこのような命令をすることは可笑しな事ではない。

しかし、地球に降下してから2ヶ月半の間、なんの音沙汰も無かったので、いきなり言われたことにマハラジャは驚いてしまったのだ。

しかし、マハラジャも伊達にダイクン派の穏健派を纏め上げてきた訳ではない。

すぐさまこう反論する。

「しかし、ギレン総帥。確かにヨーロッパ方面で連邦軍は大規模な兵力をそちらに使うのかもしれませんが、それでも我々は現在も400万弱もの敵に包囲されています。この兵力が大幅に減らない限りは

進撃は無茶です」

そう、確かにヨーロッパ侵攻作戦に3分の1の兵力が取られるとはいえ、逆に言えば残りの3分の2にあたる2000万人はフリーとなるのだ。

もつとも、その兵力は全てが残りの戦線である北米とアジアに向けられている訳ではない。

敵が居ないということでも完全にスカスカにしてみましたりすると、ジオンがまた降下作戦を行ってきてその手薄な地域を占領されてしまう可能性があるからだ。

しかし、アジア方面軍の場合、390万もの敵に包囲されている状態であり、連邦軍もこちらを恐れている(ということになっている)のか、(裏取引の結果)積極的に手だしはしてこず、膠着状態が続いていた。

だが、ここで攻勢など出来るわけがない。

相手の390万の兵力に対して、こちらは降下作戦後に送られた増援(ジオン・ズム・ダイクンを神聖視するような狂信者を徴兵して送り込んだ)や地球で調達した義勇兵などを含めても、その数は70万人でしかないのだから。

まあ、連邦軍との裏取引の手前、これ以上、進撃は出来ないという事もあるのだが、一応は敵の数が多いということを建前にして進撃を停止している。

だが、ここでマハラジャはあるミスをしてしまった。

それをギレンは見逃さない。

『ほうっ、では、敵の戦力が大幅に減りさえすれば、進撃するのだな?』

「そ、それは・・・」

マハラジャは迂闊な事を言ってしまったことに後悔する。

確かに進撃できない理由を、先程『敵の戦力が多いから』という理



由にした以上、敵の戦力が大幅に減った状態ならば進撃しないという選択肢はない。

どう考えても臆病者の謗りは免れないだろうし、それが命令ならば進撃しないことは言うまでもなく命令違反となる。

「……しかし、いきなり戦力が減るということはあり得ません」

苦し紛れにそう言うが、ギレンは不敵な笑みを溢す。

『では、そのもしもの事が起こったらどうする？』

「その時は命令通り進撃いたします。……ただし、こちらの戦力が減らないことを前提に、ですが」

『ふふっ、言質は取ったぞ』

ギレンはそう言い残した後、通信を切った。

「……最悪だ」

通信画面から消えたギレンの姿を見届けたマハラジャは思わずそう呟いた。

あの口ぶりからするにギレンは本気で東アジアの連邦軍を一気に磨り減らすつもりだ。

条約を破って隕石落としをするのか、それとも全く別の方法を選ぶのかは知らないが、どちらにしてもそれは不味い。

自分達は最早そう思っていないが、連邦軍からすればギレン率いるジオン軍も自分達も同じジオン公国軍だ。

ここで一気に東アジアの連邦軍を蹂躪されたりすれば、当然、連邦軍の敵意はこちらに向くだろうし、もしかしたら連邦上層部もこちらの裏切りと判断するかもしれない。

(そうだったら終わりだ)

ザビ家はこちらの思惑を完全に理解した上で最終的に切り捨てるつもりでいる。

実際、降下作戦時点ではジムⅢなどの比較的新しい機体を配備されたものの、その後の増援はジムⅡなどの旧型機であるし、送ってきた人間も自分ですら危ないと思えるレベルのダイクンを信奉する狂信者。

おまけに某名家の少女によると、OSにMSの行動が停止するウィルスが仕込まれていたらしい。

これだけ見れば、向こうがこちらを切り捨てる気満々であるのはよほどのバカでない限りは分かるだろう。

もつとも、これについては裏切ろうとしていたマハラジャにとやかく言えた義理はないが。

まあ、それはともかく、こんな状況下で残りの頼みの綱である連邦軍に切られれば自分達に待っているのは破滅しかない。

「早く連邦軍に伝えなくてはならんな」

マハラジャはそう決意する。

——もはやその背信行為に罪悪感は無かった。

◇サイド3 総帥府

ギレンはマハラジャとの通信を切った後、ある人物を光学通信にて呼び出す。

『お呼びでしょうか？ギレン閣下』

そう言つて通信画面に映し出されたのはア・バオア・クーの司令であるエギーユ・デラーズ親衛隊大佐だった。

原作ではかなりのギレン信奉者であり、ア・バオア・クーではキシリアがギレンを暗殺したことに気づき、担当戦区だったSフィールドを脱出して敵前逃亡をして後にデラーズ紛争を引き起こすという色々なことをやらかしてくれた人物だが、そういった危険思想を除けば有能な人物であることは間違いないので、ギレンが生きているうちは大丈夫と考えていたことから重宝している。

「デラーズ大佐。予定通り、貴官はア・バオア・クーの司令をノリス・パッカード大佐へと譲り、例の作戦に従事してくれ」

『はっ、承知しました』

「それと分かっているとと思うが、民間居住地帯への投下は出来る限り避ける」

念のためにギレンは釘を差す。

『分かっております。スーパーコンピュータを使って時間を掛けて計算しましたので、目標地点への投下は間違いありません』

「ならいい。民間人を大量に殺害したとなれば敵に余計な大義名分を与える上に後々の禍根になるからな」

アースノイドにはスペースノイドへの蔑視感情が大きい。

いや、元々関心が無かったのが、自分達に直接手を出してきたことで目障りな存在となったと言うべきだろうか？

どちらにしても、地球に降下したスペースノイドに対してアースノイドが良い感情を抱いていないのは間違いなく、ここで大量虐殺などすれば間違いなくその確執は更に大きくなる。

まあ、東欧についてはあまりにも連邦軍のやり方が酷すぎたせいで反連邦、親ジオンとなっているが、あれはあくまで例外だろう。

まあ、勿論、その逆もあり、仮にこの戦争でジオンが敗戦した場合原作のグロブ事件や30バンチ事件のようなことが起こって両者の確執は大きくなるだろうが。

(まあ、ベルファストに核を撃ち込んだ時点で手遅れかとも思うが、あれは必要な措置だったからな)

そう、あれはどうしても必要な措置だった。

あそこで核を撃ち込んで報復しなければ、ジオンは連邦軍から舐められることになっていただろう。

そうすれば、また連邦が条約破りをして核を撃ち込む可能性が高い。

仮に連邦が条約破りのことを自分から強く意識したとしても、原作のジオンがそうであったように追い詰められた国というのは絶対に無茶をするので信用はできないのだ。

「心得ております。しかし、爆発の衝撃波によって多少は巻き込まれ

てしまうかもしれませんが・・・」

「その場合は不幸な事故として処理して構わん」

ギレンはキツパリとそう言った。

敵国の民間人に対する配慮は必要とは言えど、流石に完全に巻き込まないなどということは出来ない事はよく分かっている。

現地の民間人には悪いが、そこら辺は不幸な事故として諦めてもらうしかないだろう。

『分かりました。では、予定通り、連邦の攻勢開始と同時にアイスランドに対する攻撃を行い、その後は作戦を第二段階に移します』

「うむ、頼んだぞ」

こうして、ジオンは連邦の反攻への対策を着々と整える。

——そして、この2日後の11月7日。

原作でオデッサ作戦が開始された正にその日、連邦軍のヨーロッパ解放作戦であるオペレーション・アウステルリッツが発動。

アイスランド、バルカン半島、北アフリカ、東欧、スカンジナビア半島の5方向から1000万人の連邦軍が一斉に動き出した。

UC0079年 11月7日 オペレーション・アウ  
ステルリッツ 前編

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 11月7日 アイスランド島

「ジオンめ。やってくれたな！」

少佐の階級を襟元に着けた連邦軍の軍服（と言っても、ジオン軍とほぼ変わらないが）を着た男はそう言いながら、瓦礫と化した軍の基地から這い出る。

このアイスランド島基地にはオペレーション・アウステルリッツに備えて120万もの兵力が用意されていた。

だが、作戦開始に伴って動き出そうとした途端、ジオンは宇宙から攻撃を行ってきたのだ。

「まさか、爆弾を宇宙から直接降らせてくるとは……」

そう、ジオン軍がやったことは物凄く簡単だ。

第三次南極会談の際に禁止された隕石落としての代わりに、人工の爆弾をアイスランドに向けて落とす。

ただそれだけであり、そして、これは条約に引っ掛からない。

何故ならば、第三次南極会談の時に追加された条約は『大質量天体落下戦術の禁止』であり、人工の爆弾を落としてはいけないとは何処にも書いていないからだ。

しかも、彼は気づいていなかったが、その爆弾には火薬の代わりにメガ粒子砲などを使うエネルギーが込められており、それが地上に着弾した途端に大爆発を引き起こしていた。

……もつとも、その爆発エネルギーは通常の火薬を使った時とほとんど変わらない。

今回落とした爆弾は宇宙戦艦ヤマトの波動カートリッジ弾のよう

な使い方が出来ないかどうかを模索させて技術陣に作らせたものだが、現実には普通の爆弾とあまり破壊力は変わらなかつたのだ。

では、なんの役にも立たなかつたと言えようではない。

例えば今回のように大気圏から爆弾を落とす際に通常の火薬を使用した場合、大気圏突入の際に起こる摩擦熱で引火する危険性を抑えるために耐熱コーティングを嚴重に施さねばならず、コストが凄く掛かるのだが、火薬の代わりにエネルギーを積みれば大気圏突入に耐えるだけの耐熱コーティングを施せば良いので、コストがあまり掛からないのだ。

そして、この爆弾が開発されてから現在までの間でジオン軍が製造した爆弾の数は約800発。

その内、今回使われたのは100発ほどだが、元々作戦に備えて密集していたのに加えて、宇宙からの落下エネルギーは先のオデッサ作戦の時の隕石落としても分かるように膨大なものであり、一発で核兵器並みの爆発エネルギーを引き起こす。

民間人が居る住居近くの基地は爆撃の範囲から外されていたが、それでもアイスランド島に居た総勢120万の連邦軍将兵の内、100万人以上が既に死傷しており、戦闘可能な兵士は20万人を切つていた。

もつとも、これらの事実は一介の少佐の男は知らなかつたが、アイスランドに居た連邦軍が多大な損害を受けたということは一目瞭然であり、オペレーション・アウステルリッツの先行きに不安を感じる。

だが、彼がそんな不安を感じている時間は一時間と無かつた。

何故なら、宇宙からの爆撃が終わった直後、ブリデン島のスコットランドから、このアイスランド島に向けてジオン軍のアイスランド攻略部隊が一直線にやって来ていたのだから。

◇ブリテン島　ロンドン　ジオン軍・欧州方面軍司令部

「アイスランド攻略部隊、アイスランド島に上陸しました」

そのオペレーターからの報告を聞き、ユーリ・ケラーネ少将は作戦の第一段階の成功を確信する。

(これで北西からの脅威は完全に無くなったか)

この作戦の第一段階。

それはアイスランド島に集結し、こちらに向かおうとした連邦軍の撃破とアイスランド島そのものの占領にあった。

連邦軍のオペレーション・アウステルリッツが1000万人の兵力を動員していることは前述した通りであるが、その兵力の配分は5つの地域でそれぞれ違い、バルカン半島が180万人、東欧が200万人、スカンジナビア半島が150万人、北アフリカが350万人、アイスランドが120万人となっている。

その進撃路はそれぞれバルカン半島↓イタリア半島、東欧↓中欧、スカンジナビア半島↓ブリテン島、北アフリカ↓イベリア半島、アイスランド↓アイルランドとなっており、ジオン軍はこの中で真っ先に排除する対象をアイスランド島の連邦軍に絞った。

これはアイスランド島方面は他の4つの連邦軍の進撃ルートに比べると、孤立した位置にあり、しかも投入される兵力は120万人と他の戦線より少ないからだ。

まあ、それでも総勢60万人しか居ない欧州方面軍にとっては2倍



の数が居る相手なので、間違っても自分から攻めて攻略するような扱点ではなかった。

そう、あの新型爆弾を計算に入れなければ。

(これでいざというときの退路は確保できたな。あとは計画を第二段階に進めるだけだ)

第一段階の作戦であるアイスランド島占領は敵戦力の削減という戦術的な意味合いもあるが、戦略的要素としてはこちらが完全敗北した時の退路という要素が強い。

北大西洋を通って北米に逃げるという手もあるのだが、連邦軍も馬鹿ではないので、おそらくそちらの方には艦隊と潜水艦の群れが待ち構えているだろう。

なので、欧州方面軍が自力でアイスランドを占領して退路を確保した方がこちらの新たな退路として機能する上に敵の意表を突けるし、仮に連邦軍が慌てて海上封鎖の為にブリデン島・アイスランド島間に艦隊を割り込ませたとしても、距離的に北大西洋で待ち構えている艦隊から戦力を引き抜くことになる。

そうなると、結果的に戦力分散になってしまい、北大西洋を通って北米に向かう友軍の危険性が低下するのだ。

もともと、これは今回の戦いで完全敗北した際の味方将兵の脱出プランであり、ユーリ自身に負ける気は更々無かったのだが。

「よし、作戦を第二段階に移せ」

作戦の第二段階。

それはアイスランドにした爆撃を北アフリカとスカンジナビア半島にも行うこと。

そして、西欧、中欧、イベリア半島、イタリア半島に居るジオン軍をブリデン島及びアイルランド島へ撤退させることだった。

◇軌道上 ジオン軍・親衛艦隊 旗艦『グワダン』

「デラーズ大佐。ユーリ少将から作戦第二段階を発動せよという通告が来ました」

「よし、では、予定通り、北アフリカとスカンジナビア半島の連邦軍に対して爆撃を開始しろ」

「はっ」

デラーズ大佐がその指示を行った数分後、北アフリカとスカンジナビア半島に対して、残り700発の爆弾が次々と落ちていく。

その光景を見ながら、デラーズはふところ思った。

（しかし、ヨーロッパ大陸を捨てるというのは些かもつたいない気もするな）

この作戦では第一段階でアイスランド島を占領し、第二段階でヨーロッパ大陸の大半を放棄し、ブリデン島やアイルランド島へ撤退する

と聞いている。

それ自体に不満はない。

幾ら精強なジオン軍と言えど、60万人の兵力で5方向からやって来る1000万人の兵力を相手にするというのは流石に無理があるので、戦線を縮小して守りを固めるといふ作戦は十分に理解できるからだ。

しかし、今、自分達が降らせている爆弾を民間人への配慮を無視して敵に満遍なく落とせるのなら、それらの領土を捨てなくても撃退は十分に可能であるし、なんなら小規模な反攻すら可能だろう。

だが、現実には人口密度が高く、反連邦気運が育っている東欧に爆撃することは許されておらず、更には先の爆撃目標であるアイスランドや、現在行っている爆撃の爆撃対象の北アフリカやスカンジナビア半島ですら、民間人の住む町を極力避ける形で撃ち込んでいるため、効果を限定的にさせている。

自分達の同胞であるスペースノイドならいざ知らず、特権階級のアースノイドの民間人に配慮する形で爆撃の効果を限定的にさせるということをしてデラーズは不満に思っていた。

それは転生者達が聞けば、非常に頭を痛めそうな過激思想であったが、実のところ、これはデラーズだけの考え方ではない。

ジオン軍の中で過激派の軍人であれば、大小はあれど誰でも持っている思想だ。

それこそザビ派、ダイクン派、中立派問わずに。

(まあ、ギレン閣下の指示であれば仕方あるまい)

だが、それでもデラーズはギレンに心酔しているだけあって、多少の不満はあれどもギレンの指示には従う。

それは正に忠臣と呼べるべきものではあったが、同時にギレンが居なくなった時に暴走する危険性も孕んでおり、当のギレンも含めた転生者達が頭を悩ませていることを彼は知らない。

UC0079年 11月8日 オペレーション・アウ  
ステルリッツ 中編

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 11月8日 北海  
ブリデン島に駐留していたペガサス隊。

彼らもオペレーション・アウステルリッツ発動と同時に動き出した連邦軍に備えるために戦闘態勢を取っていたが、1日目は結局、なんの出番もないまま港待機で終わった。

だが、2日目。

初日で大打撃を受けたスカンジナビア方面軍の生き残りがブリデン島に向かっているとの情報を受け、のび太達ペガサス隊はその連邦艦隊の迎撃に出るために北海へと進出し、今まさに会敵を果たそうとしていた。

「まずはこれで1隻め！」

MS用ホバークラフトに乗せられたガンダム改の中で野比のび太特務准尉はそう叫びながら、正面に居るイージス艦『ピッツパーク』に対してビームライフルを発砲する。

周辺にビーム攪乱幕は無く、ビームライフルの光線はそのままイージス艦へと命中し、その貧弱な装甲を破壊し、艦前部を蹂躪し、弾薬庫のミサイルや砲弾に命中して大爆発を引き起こし、爆発の影響で艦首と艦中央部が分断された結果、艦は2つに分断される。

そうなつては船が浮く道理など有る筈もなく、ピッツパークは前のめりになりながら沈んでいく。

そして、その艦が抜けた結果、空いた艦隊の防御陣の穴からのび太の乗るガンダム改と数機のMSが突入していく。

その中にはジムⅢを駆るバーナード・ワイズマン伍長の姿もあった。

「畜生!?!なんて激しい砲火だよ!!」

連邦艦隊の内側に潜り込みはしたものの、バーニイはこちら目掛けて撃ってくる砲火の数に思わず悪態をつく。

MSとそれを搭載するホバークラフトが登場して以来、そのミノフスキー粒子の効果とMS用ホバークラフトの優れた機動力に連邦海軍の艦隊は小競り合いの度に翻弄されてきた。

しかし、連邦海軍も無能ではない。

ホバークラフトの機動力に勝てないのであれば、火力で勝とうという発想に思い至り、火力不足だった20ミリCIWSを取り外し、30ミリCIWSを新たに装備。

そして、泥縄式ではあるが、12、7ミリ機銃を取り外して新たに40ミリ機銃を大量増設。

更には主砲も12、7センチ速射砲から、20ミリ砲に換装するなど、有りとあらゆる手段で勝利を拾おうとする。

まあ、その増強した装備を以てしても、主砲以外はMSに直撃しても大したことのない火力ばかりなのだが、それでも機動力の元であるホバークラフトを狙うなどの戦術を考案し、この作戦の前にも何回かの小競り合いで、遭遇したホバークラフト搭載MS数機を血祭りに挙げていた。

更に言えば、ホバークラフトはベースジャバーと違って空を飛べるわけではなく、水上を滑走するだけだ。

水上艦と比べれば機動力は高いが、同じ二次元運動しか出来ないということには変わりはなく、水上艦から狙い撃つのは航空機と比べればよっぽど簡単であり、既に突入したバーニイと同じペガサス隊のMS（ジムⅢ）が1機、ホバークラフトのエンジン部分を撃ち抜かれて落伍していた。

「くそっ!!」

バーニイはそう叫びながら、ビームライフルを発砲する。

だが、当たらない。

実はバーニイはホバークラフトに乗りながらのMSでの銃撃は今回が初めてだった。

無論、訓練は嫌というほどやったのだが、実戦の砲火の中でホバークラフトの操縦と射撃を同時にやるのはなかなか難しいのだ。

そして、それは他に突入した人間も同じであつたが、一人だけ例外が居た。

「ふっ！」

そう、ガンダム改を駆るのび太だ。

のび太は巧みにイージス艦が張る砲火を掻い潜ると、ビームライフルの照準を一つのイージス艦に照準を合わせる。

そして、『弾薬庫が有りそうな場所』に向けて発砲し、そのイージス艦『セモベンテ』に先のピッツパークと同じような運命を辿らせると、すぐに別の艦にビームライフルを発射。

そのイージス艦『カラカス』もまたピッツパーク、セモベンテと同様の運命を辿って沈んでいく。

彼はラバウル沖海戦で1度こういう戦いを経験しており、その時の経験がこうして生きていたのだ。

「化け物だ!!」

それを見た連邦艦隊は恐怖で半ば錯乱してしまったのか、同士討ちの危険性から控えていた20センチ単装砲をガンダム改の方に向けてるが、のび太はそれをニュータイプ能力を駆使して回避。

更に密集体形を取っていたことから、事前の懸念通りに発砲した何発かの20センチ砲弾がフレンドリー・ファイヤーをして味方艦に当たってしまい、それが余計に被害を拡大させる。

そして、ある艦はのび太がビームライフルを使っているのに気づいてビーム攪乱幕を張ろうとするが、それが周囲に充満する前にのび太

は艦隊中央部に居た空母『ロナルド・レーガン』に狙いを定めると、ビームライフルを発砲した。

#### ◇旧フランス北部

「撃てえー！」

指揮官であるデメジエール・ソンネン少佐の掛け声と共に、30両のヒルドルブから放たれた30センチ砲弾が接近する連邦軍へと向かっていく。

旧世紀である20世紀初頭の戦艦の主砲と同じ口径と質量を持つ弾丸は、着弾すると同時にその当時よりもかなり凶悪となった宇宙世紀製の火薬を撒き散らし、辺りの連邦軍を吹き飛ばす。

北海で激闘が繰り広げられていた頃、旧フランス北部でもまたジオン軍が必死の抵抗を続けていた。

初日にイベリア半島、中欧、イタリア半島から撤退したジオン軍だ

が、まだブリテン島やアイルランド島への脱出は完全には間に合っておらず、旧フランス北部やベネルクス地方にそれなりのジオン軍が取り残されている。

更に緒戦の進撃の段階で躓いてしまったアフリカ方面軍とは違い、東欧やバルカン半島の連邦軍は無傷で残っており、初日にジオン軍との会敵が空振ってしまった鬱憤を晴らすかのように、それらの取り残されたジオン軍を撃滅しようとした。

だが、ジオン軍も馬鹿ではない。

撤退が完全には間に合わないということは折り込み済みであり、わざわざ北米方面軍から引つ張ってきたソンネン少佐の指揮するヒルドルブ30両と量産型アプサラス7機を投入する。

量産型アプサラスの方は早々にビーム攪乱幕を張るという対策を取られてしまったが、なにぶん今回の連邦軍はあまりにも部隊数が多すぎて幅広く展開せざるを得ず、ビーム攪乱幕の加護を受けられない部隊も出てきていた。

その隙を突き、量産型アプサラスは拡散メガ粒子砲とマルチロックオンシステムによって哀れにもビーム攪乱幕の加護を受けられなかった連邦軍の部隊を蹂躪していく。

悲惨なその光景に歯噛みをしながらも、なお進撃していく連邦軍であったが、そこで待っていたのはヒルドルブの巨砲だったというわけだ。

そして、今回投入された戦力はそれだけではない。

「II号戦車部隊、ヒルドルブの空けた穴に突撃しろ!!」

そのソンネンの指示と共に、ジオン軍の新鋭主力戦車であるII号戦車部隊が突撃していく。

II号戦車。

それはコロニーでの戦闘を考慮したI号戦車とは違い、地上での戦闘をメインにして生み出された戦車だ。

主砲はヒルドルブがI号戦車と同じ旧世紀の戦車の面影を残す、単



装砲となつているが、その主砲の口径は180ミリであり、連邦の61式戦車の最新バージョンである5型の主砲である155ミリ連装砲の口径を上回っている。

勿論、連装砲と単装砲では一射撃での投射火力が違うので、そういう意味ではII号戦車の火力は61式戦車5型に劣り、しかも10月から製造が開始されているために数も50両とそれほど多くはない。

しかし、一発ずつでの火力という意味でならII号戦車は完全に61式戦車5型の主砲を上回っているし、ヒルドルブ程ではないが図体がでかい割りに機動力も高く(最高速度で130キロ出せる)、更にはヒルドルブの空けた穴が非常に大きかった為にその穴を喰い破る形でII号戦車の群れはその期待通りに連邦軍を蹂躪していった。

(さて、これで暫くは時間が稼げるだろうが、何処まで持つか)

ソンネン少佐はそう思いながら、早く撤退命令が出ることを願う。ソンネンとて伊達に佐官になつたわけではない。

今の状況が戦略的に不味く、今は良くてもいずれは物量によって押し潰されることくらいは分かる。

しかし、現場指揮官である自分には撤退命令が早く来ることを願うしか出来ないため、その事をソンネンはもどかしく思っていた。

だが、そんな彼に対して、副官であるモニク・キャデイラック大尉がある凶報を伝えてくる。

『ソンネン少佐、大変です!!』

「どうした?」

『たつた今、司令部から入った情報ですが、ベネルクス地方の味方が撃滅されました!!』

「なに!?!」

ソンネンは驚き、そして、焦った。

ベネルクス地方はいまソンネン達が居る旧フランス北部より北東で正に目と鼻の先。

そのベネルクス地方を占領されたということは、ドーバー海峡からの脱出が困難になったどころか、イギリス海峡からの脱出が難しくなることを意味していた。

だが、ソンネン達はその報告に慌てながらも、どうにもならない。彼らのやれることは、出来るだけここで粘り、味方を生き残らせることだけなのだから。

——そして、ヨーロッパでの戦闘は中盤に入り、益々激しさを増していった。

UC0079年 11月9日 オペレーション・アウ  
ステルリッツ 後編

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 11月9日 ドーバー海峡  
オペレーション・アウステルリッツ発動から2日。

戦闘3日目に突入し、両軍の戦闘は最終段階へと入る

この時点で連邦軍はアイスランドこそ奪われたものの、中欧、イタ  
リア半島、イベリア半島、そして、旧フランス北部以外の西欧の領土  
を解放していた。

だが、この2日間の戦闘によって受けたあまりに酷い損害に連邦軍  
上層部は顔を青ざめさせており、ブリテン島、アイルランド島、更  
に奪われたアイスランド島の奪還を諦めることを決定している。

しかし、同時に西欧から完全にジオン軍を叩き出し、尚且つあまり  
叩けていなかった兵力を徹底的に叩くため、11月8日の戦いでベネ  
ルクス地方が占領されたことで取り残された旧フランス北部のジオ  
ン軍の撃滅を行うため、連邦軍は兵力の一点集中を行った。

そして、ジオン軍の方も旧フランス北部の友軍を救出するのに全力  
を注いでおり、その撤退を支援するためにドーバー海峡とイギリス海  
峡に戦力を集中させ、両軍は2つの海峡にて激しい攻防を繰り広げて  
いる。

そんな中、ペガサス隊もまたドーバーで戦う味方の支援のために、  
MS隊を先行させる形で現地へと差し向けていた。

「ん？な、なんだ!？」

突然、発せられた警告音と共にガンダム改の速度が明らかに遅く  
なったことにのび太は少し動揺するも、すぐさまシステムチェックを  
行って機体の状況を確認する。

すると――

「あつ、ホバークラフトが・・・」

のび太は『ホバークラフトのエンジンに異常発生』という意味のランプがコクピットの計器に照らされているのを見る。

実はこのホバークラフトは前日の戦闘と今回の戦闘で2度続ける形で使っていた。

だが、被弾は殆ど無かったし、ほんの少し出来た損傷もすぐに修理出来るレベルだったので、本来なら動かす分には問題は無い筈だったのだ。

しかし、あまりにも激しい動きをしすぎたせいか、ホバークラフトに物凄い負担が掛かり、結果、今のような事態に陥っていた。

『大丈夫か？ノビタ』

ペガサス隊の隊長であるジョニー・ライデン大尉もガンダム改のホバークラフトの異常を外から確認し、接触通信でそう呼び掛けてくる。

「あつ、すいません。どうもホバークラフトが壊れ掛けるみたいで」

『そうか。なら、仕方ないな。ワイズマン伍長を着けてやるから、お前は先にペガサスに戻れ』

「いや、でも・・・」

味方を見捨てるようで気が引けるのか、のび太はその指示に従うことを躊躇った。

幸い、会敵はまだであったが、ここで自分とバーニイが抜けければ少々大きい戦力ダウンとなるだろう。

そんな状態で昨日来たような艦隊に突撃するのは非常に厳しいものがある。

しかし、今のままでは文字通りの意味で足手まといになるのは明らかであり、合理的に考えればジョニーの言うことは正しい。

迷うのび太であったが、そんな彼に対してジョニーはキツパリとこう言った。

『ホバークラフトが壊れている以上、今のお前は足手まといだ。ここでお前に来られる方が迷惑なんだよ』

「・・・分かりました」

その言葉にのび太は渋々ではあったが納得する。

幸い、エンジン出力が落ちただけで方向転換は出来るため、のび太のガンダム改は護衛のバーニイと共に元来た道に戻る形で母艦であるペガサスの方へと戻っていく。

『・・・行くぞ』

それを見届けたジョニーは乗機である紅いザムを駆り、のび太とバーニイを除いた仲間と共に、当初の目的である敵艦隊との会敵を目指す。

——だが、彼は知らなかった。

そこには連邦の“ある存在”が待っているということ。

◇ペガサス

「これは・・・今日中の出撃は無理そうだね」

あれからバーニイと共に後方に居たペガサスに戻ってきたのび太のガンダム改。

そこでペガサスにて機体の整備の手伝いをしていたドラえもんにはホバークラフトの様子を見て貰っていたが、結果は今述べた通り、今日中に直るレベルのものではないらしい。

「なんとかならない?」

のび太は戦いを未だに完全に好きにはなれなかったが、それでも現在も命懸けで戦っている味方を見捨てられる程、薄情ではない。

その為、どうにかならないかとドラえもんに言うが、当のドラえもんは難しい顔をしていた。

「うーん。タイムふろしきは有るんだけど、あれはなあ」

タイムふろしき。

それは文字通りの意味で物や人の時間を戻したり進めたり出来る道具というかなり便利な道具だが、同時に欠点もある。

それは時間を調整する事が難しいことだ。

タイムふろしきは基本的に年単位で時間を戻したり進めたりするように設計されているため、月日レベルで戻すのはあまり得意ではない。

仮にこのホバークラフトにタイムふろしきを被せた場合、最悪、加工される前の原材料の状態で出てくる可能性があった。

そうになったら、もう戻すことはできない。

原材料にタイムふろしきを掛けたところで、ただ原材料が古くなるだけなのだから。

「こういう時に復元光線があれば良いんだけどね」

復元光線。

それは例えば、物が碎けた場合、その碎けた部品の大半があれば欠けた部品ごとその物を修復することが出来る秘密道具だ。

正にこういうときにはうってつけの道具なのだが、あいにくドラえもんのポケットの中にはない。

（弱ったな。こうなったら、ワイズマンさんのジムⅢを強引に借りるかな？）

つい最近気づいた事であるが、バーニイよりも自分の方が階級が上だ。

勿論、年上なので敬意は払わなくてはならないが、軍隊的には同じ部隊の所属であるバーニイに命令して機体を借りることも可能と言えれば可能だった。

そんなことを考えていた時、その当のバーニイが格納庫の入り口からのび太達を見つけると、駆け出してきてこう言う。

「おい、今、報告に行ったとき、艦長が言っていたんだが、どうやら旧フランス北部の味方は無事に脱出したらしいぞ!!」

「本当ですか!？」

「ああ」

そのバーニイの返答にのび太は顔を綻ばせる。

今回の自分達の任務は旧フランス北部の味方の脱出のための支援だ。

そして、肝心の味方が脱出したということは、ペガサス隊がここに留まる理由は無くなったことになる。

「だが、気になる情報もあるんだよ。どうやら、先程から隊長達と連絡が取れなくなっているらしい」

「? ミノフスキー粒子が散布されてる所に居るだけなんじゃないですか?」

バーニイの懸念にのび太はそう答える。

ミノフスキー粒子はレーダーやセンサーだけでなく、無線なども遮断する効果があるのだ。

今まででもそれによって遠くに居る味方と連絡が着かなくなるケースは数多くあったので、ジョニーと連絡が着かないのはそのせいではないかとのび太は思っていた。

だが、のび太は心配していない。  
なにしろ、相手はジョニー・ライデンというジオンのエースの1人。  
操縦技術は自分より上なのだ。

加えて、ミノフスキー粒子散布下の戦闘など特段珍しいものではない。  
心配しなくても生きて帰ってくるだろうと見なしていた。

「・・・そうだな」



連絡が着かないと慌てていたバーニーも言われてみればそれもそうかと思ひ直し、ジョニー達が帰ってくるのを素直に待つことにした。

——その懸念が当たっていたとも知らずに。

#### ◇ドーバー海峡 海上

「・・・」

海上に一機のホバークラフトに乗せられた青い塗装をされたジムⅢが居た。

だが、この機体の所属はジオン軍ではない。

いや、正確には元々はジオン軍の機体ではあったが、鹵獲して自分達の装備として使っていたのだ。

連邦海軍は度重なるホバークラフト搭載MSによる損害に、自分達も虎の子であるモビルスーツを投入することに決め、連邦軍がジオン軍のものを模倣（ホバークラフトが手に入らなかった為）して作り上げたホバークラフトと共にこの戦線に投入していた。

そして、先程、ジオン軍のエースらしき機体を撃破したこの機体のパイロットの名はユウ・カジマ少尉。

原作では“蒼い死神”と呼ばれ、オールドタイプにも関わらず、ニュータイプ最強のパイロットであるアムロ・レイにも勝つ可能性があるあると言われた男であるが、この世界でもユウはその技量を遺憾無く発揮していた。

『カジマ少尉、作戦は失敗だ。旧フランス北部のジオン軍は撤退してしまった。お前はすぐに戻れ』

「・・・了解しました」

ユウはそう言つて、近くに居た仲間と共に連邦艦隊の自分の母艦へと戻っていく。

後にはコクピットを貫かれてパイロットを蒸発され、現在は海に沈みかけている“紅いザム”とその部下達と思われる機体の残骸の群れが残される。

——そして、この最終日の戦いによってジオン軍はデメジエール・ソルネン少佐を含めた旧フランス北部の部隊の撤退をどうにか成功させたものの、ジョニー・ライデン大尉を始めとした決して少なくない優秀なパイロットを失った。

以後、両軍はブリデン島と旧フランス北部にて暫しの間、睨み合いを続けることとなる。

UCC0079年 11月11日 第四次南極会談

◇宇宙世紀0079年 11月11日 南極

連邦軍の一大作戦であるオペレーション・アウステルリッツが終了してから2日後。

南極にて4度目の会談が持たれることになった。

ただ今回の会議は先の三度の会議と毛色が違う。

先に三度の会議は明らかに決裂を前提とした交渉や戦時条約締結、更には休戦条約締結だったりしたのだが、今回の会議は両者が本当の意味で真剣に行う講和会議だったのだ。

それ故に両者は相手が吞めるであろう条件を携え、この会議にて講和を行うつもりだった。

だが――

(ふざけているのか?)

キシリアと連邦の代表の男は互いが出した講和条件を見て、奇しくもお互いにそう思った。

ちなみに彼らが互いに提案した条件というのはこうだ。

ジオン

・現在、占領している地球領土の10年間の保障占領。

・ルナツーの連邦への返還。

・ジオン公国の独立承認。

・サイド共栄圏の承認。

・地球連邦軍の宇宙拠点をルナツーに限定し、各サイド及び月への軍駐留はこれを認めない。

連邦

・全地球領土の返還

・サイド3の1年間の保障占領。

・サイド共栄圏構想の破棄。

・宇宙の連邦の戦力配置位置は戦前と同じ状態とする。

以上。

・・・はつきり言つて、全く噛み合っていない。

「これは・・・流石に強欲過ぎるのでは？」

「そちらに言われたくはないな。だいたい、そちらの主張はジオンを戦前の状態よりも危うくするものだ。到底、呑めたものではない」

「それはこちらも同じですな」

そう言つて睨み合う両者。

お互い到底呑める条件ではない。

仮にジオンの要求を呑んだりすれば、富<sup>植</sup>の収奪<sup>民地</sup>先であるサイドを丸々失つてしまい、連邦という組織そのものが瓦解してしまうし、逆に連邦の要求を呑んだ場合のジオンもそれは同じで、保障占領など許せばジオン正統自治体のような連邦に都合の良い傀儡政権を樹立する可能性が高いのだから。

加えて、両者がこうまで強気に出ているのは、お互いがまだ自分達は負けていないと認識しているのも大きい。

連邦は先のオペレーション・アウステルリッツでは連邦はブリデン島とアイルランド島の占領に失敗し、アイスランド島を奪われた上に大損害を被ったものの、曲がりなりにもヨーロッパ大陸からジオン軍を叩き出すことに成功しており、その功績を自信としている。

ジオンの方はと言えば、確かにヨーロッパ大陸から叩き出されはしたが、戦力の温存には成功しているし、今回動員された連邦の戦力の4割近くを消滅させ、連邦陸軍は全体から見ても、2割強の戦力を失うこととなった。

双方ともに戦果を挙げている以上、お互いが強硬な提案をするのも無理はない。

しかし、両軍には決定的に違う部分がある。

それはジオン軍は戦力の温存という戦略目標を達成しており、連邦

軍はその阻止に失敗していたのに対して、連邦は戦略目標であるヨーロッパ全土の解放を中途半端な形でしか達成していないことだ。

しかも、その解放ですらジオン軍の想定内となると、2日前の戦いで最終的にどちらが勝ったのかは言うまでもないことだろう。

だが、「人間は見たいものしか見ない」と言われるように、連邦政府は敢えてその都合の悪い事実を無視してジオンに対してかなり無理のある要求を行っていた。

「仮に我々があなた方の要求を呑んだとして、あなた方が各サイドに出すであろう要求を各サイドが飲むと思っっているのか？」

ジオンが負けた戦後に連邦が各サイドで出す要求などキシリアでなくとも想像がつく。

大方、戦後の復興の為の増税だろう。

だが、その増税が自分達に使われるのならともかく、アースノイドの為に使われるとなれば反発するスペースノイドも出てくるのは間違いない。

原作では開戦初っぱなに各サイドが吹っ飛ばされたことでスペースノイドは同じくコロニー落として大打撃を受けたアースノイドと反ジオンで協調することが出来た。

だが、この世界ではどうだろうか？

原作のコロニー落としより損害は少ないとはいえ、地球が戦場になったことでアースノイドの死者は結構出ている。

対して、スペースノイドはと言えば、ジオン軍が各サイドを占領する際に不幸にも巻き込まれた民間人の犠牲者が少し出たくらいで、現在進行形で住んでいる場所が戦場になっているアースノイドと比べ、はつきり言っただけでほとんど死んでいない。

そんなほとんど被害を受けていないスペースノイドとかなりの被害を受けたアースノイド。

原作のようなジオンの被害者という両者の共感は無いに等しく、それ故に連邦政府もスペースノイドから取り立てることに躊躇はしな

い。

だが、そうすればスペースノイドも当然の事ながら反発するだろう。

当たり前だ。

誰だって増税を課してくる対象に良い感情を持つわけがないのだから。

いや、そもそもスペースノイドが多く死んだ原作でも一年戦争後にスペースノイドによる反連邦運動は起きているのだ。

ほぼ全てが生き残っているこの世界ではなおのこと戦後の反連邦運動もまた過激となるだろう。

そして、その抵抗の激しさから史実のティターンズのような組織が出てくるだろうし、その場合、対抗組織としてエウーゴのような組織も出てくる。

いや、原作よりもスペースノイドが生き残っている分、エウーゴの組織力も強力となるかもしれない、そうなったらティターンズも対抗するように大きくなり、原作よりも激しいグリプス戦役のような戦いが起こる可能性が高い。

そして、そうなればどちらが勝っても連邦が大きく疲弊するのは間違いないのだ。

キシリアはそう睨んでいたが、どうやら連邦側はそこまでの未来を見通していないらしいかった。

「・・・なんのことを言っているかは分かりませんが、おそらくあなたの懸念は外れているでしょう。なにしろ、彼らには余裕がありますから、どんな要求をしたとしても応えてくれる筈です」

その言葉にキシリアは内心でため息をついた。

「どうやらこいつらは自分で自分の首を絞めたらしい、と。」

まあ、財政的に余裕がなく、目先の金を貪るしか能がなくなっている今の連邦政府にそこまでの未来を想像することは無理なのかもしれないが。

(まあ、これで戦争継続は決定だな)

客観的に見てもまだジオンは負けていないし、結局のところジャブローを攻略するか、自分達の経済が完全に困窮した状態にならない限り、連邦はジオンの要求を呑む気はない。

加えて、元々この講和を持ち掛けてきたのは連邦だ。

こちらが出席して会談を行うという最低限の儀礼は果たした以上、ここで蹴つたとしても外交道義には反しない。

そう考えたキシリアは他の交渉団の団員に目配せをして席を立とうとするが、その時、連邦の連絡員の一人が代表の男に耳元で何かを囁き、それに驚いた男は慌てた様子で近くにあったテレビのリモコンを取ってテレビを点ける。

(なんだ?)

いきなり行われた外交儀礼に大きく反する行いにキシリアは眉をしかめるが、次にテレビに映ってきた映像に目を大きく見開いた。

◇アフリカ ダカール

『地球圏の諸君。私の名は地球連邦軍・アフリカ方面軍司令官のジーン・コリニー中将である』

軍服を着た男——ジーン・コリニー中将はまず挨拶の言葉を口にする。

『現在、南極で講和交渉が行われているが、私はこの交渉が無意味だと主張する。何故なら、ジオン公国は篡奪者によって統治されている国ではないからだ』

ジーンはそこで一息つくくと、続けてこう言う。

『では、正当なジオンの交渉人とはどのような存在か？決まっている。それは我々が保護したジオン正統自治体である!!』

ジーンはそう断言する。

本来、軍人である彼にこのようなことを言う権利はないのだが、知ってか知らずか彼は文民統制の原理を完全に無視していた。

『無論、これは連邦の独善的な意見ではない。その証拠にジオン公国からはある勇敢な亡命者がジオン正統自治体“軍”の指揮官として招かれている』

そう言つて、ジーンは壇上にある人物達を招く。

『彼らの名はアンリ・シュレッツァー准将とジンバ・ラル！不遇にも開戦直後にザビ家の謀略により、拘束されていたジオンの不当性を訴える軍人と政治家である!!』

いや、ジンバ・ラルはともかくアンリ・シュレッツァーを拘束することになったのはあんたら<sup>連邦</sup>が行った開戦演説が原因だろう。



演説を見ていた転生者達は一樣にそう思ったが、そんな思いは当然の事ながら演説を続けるジーンには届かない。

まあ、届いたとしても無視するので意味がないだろうが。

『このような良心的な軍人や政治家を排斥する独裁国家を我々は民主主義国家として決して許してはいけない!!そして、我々は先日、ヨーロッパ大陸からジオンを叩き出し、戦局を徐々にだが優位に進めている。もはやジオンに勝ち目は無い。善良なる地球市民の諸君、あと少しだ。あと少し我慢すれば、ベルファストに核を落としたジオンを制裁することが出来るのだ!!』

そこでジーンは演説の締めに入る。

『我々は断言しよう!!決してジオンという暴虐なならず者達には屈しない!!我々は必ず勝つと!!そして、放送を聞いているジオン公国の諸君。我々はこれより君たちからの無条件降伏以外の申し出は受け入れない。その事をくれぐれも留意しておいてくれたまえ』

「……これ、どういうこと?」

いきなりテレビに映し出されたおっさんの演説に意味が分からないとばかりにのび太はドラえもんにそう聞くが、それに対してドラえもんは難しい顔をしながらこう言った。

「さあ、僕にもあまり状況はわからないよ。ただ——」

「ただ?」

「戦争はまだ続くってことは確かだね」

ドラえもんは戦争の継続の予感を感じ取った。

——そして、後に『ダカールの演説』と呼ばれることになるこのジーンズの演説により、ドラえもんの懸念通りに戦争は今暫くの間、継続されることとなる。

UC0079年 11月16日 不信の払拭

◇宇宙世紀0079年 11月16日 東アジア ペキン

『マハラジャ准将。私の言いたいことは分かっているな?』

オペレーション・アウステルリッツから1週間後。

例のダカールの演説の混乱を収集し、ようやく余裕が出来たギレンはあることを通達しようとするマハラジャ・カーン准将に対して通信を行っていた。

『先日の連邦のヨーロッパでの反攻の際、そちらと対峙している東アジアの兵力が大幅に減った時があるな。何故、その時に攻勢を行わなかった?』

そう、実は軌道爆撃が行われた翌日の11月8日。

前日のマハラジャからの通達もあって、東アジアの連邦軍は自分達が爆撃の対象となると思ったのか、兵力を前線から大きく引いたときがあった。

だが、この時にもマハラジャは攻勢を行わなかったのだ。

これは重大な命令違反だとギレンはマハラジャを責め立てる。

「し、しかし、ギレン閣下は敵を撃滅すると・・・」

『ん? 私は敵の数を減らすと言っただけで敵を撃滅するとは一言も言っていないぞ。なのに、貴様は私が敵を減らす方策を行ったのにそれを無為にした。この罪は重い』

然り気無くマハラジャが連邦に通報したことで敵を減らすこととなった結果を自分の功績とするギレン。

物凄いセコい手ではあるが、マハラジャはそれを抗議することはで

きない。

それをするということは連邦に内通していたという何よりの証拠となってしまうのだから。

「・・・」

『ふふつ、軍法会議を楽しみにしているぞ。貴様の後任はダグラス・ローデン大佐を准将に昇格させて行わせる。異論はないな?』

「・・・はい、ありません」

『では、すぐに荷物を纏めてサイド3に来るように。以上だ』

最後にそう言い残した後、通信は切れ、ギレンの姿は画面のスクリーンから消えた。

「・・・くそっ!!」

マハラジャは普段の温厚な態度をかなぐり捨て、通信画面に腕を思いつき叩きつける。

これは完全に失態だった。

おそらく、自分は軍法会議の場に呼び出されて処刑を言い渡されるのだろう。

なにしろ、ヨーロッパの味方が苦しいときにも関わらず、敵が隙を見せておきながらなにもしなかったのだ。

そうなったとしても、擁護する者など居る筈がない。

「・・・どうやら、かなり不味い事態となったようだな」

「!？」

突然、後ろから聞こえてきた声にマハラジヤは驚き、そちらへと振り向く。

そこにはいつの間にか部屋に入ってきていたキヤスバル・レム・ダイクンの姿があった。

「キヤスバル様・・・」

「お邪魔なようであれば退室するが？」

「いえ、結構です。お見苦しいところをお見せしました」

「では、どうしたのか訳を聞かせてくれるかな？」

「はい。実は——」

マハラジヤは自分が軍法会議に掛けられる旨を説明する。

「なるほど・・・」

シヤアはマハラジヤの説明に納得したような言葉を呟き、続けて内心でほくそ笑んだ。

（これはチャンスだな）

シヤアが最終的に目論んでいるのは自分達家族を利用した連邦とダイクン派の粛清だ。

その為にマハラジヤがサイド3に呼ばれたという事実は使えるどころか、もしかしたらザビ家に対して打撃を与えられる切り札となるかもしれないとシヤアは思った。

「よく分かった。だが、マハラジヤ准将。これはおとなしくサイド3

に行った方が良い。でなければ、反逆者と思われて同志共々あの軌道爆撃にやられてしまう」

それっぽく話したシャアだったが、この読みは実は当たっている。ギレンは既にキシリア経由でエルランからマハラジャが連邦と内通していた証拠を掴んでおり、マハラジャが来なかった場合はアジア方面軍を「逆賊」の汚名を着せて（もつとも、実際に裏切っているの）で着せるという表現が正しいかどうかは疑問だが）討伐する予定だった。

まあ、仮に素直にマハラジャが来たとしてもそれはそれで軍法会議に掛けて処刑するつもりなので、マハラジャが助かるにはここで反乱を起こすしかなかったのだが。

「なに、心配するな。特殊部隊を出して救出する。その後はアンリ・シユレツサー准将と合流すれば無下にはされないだろうし、我々も討伐されることはないだろう」

マハラジャがサイド3に向かう途中で救出されて連邦軍に合流したとすれば、マハラジャが勝手に裏切ったことになり、少なくともそれを大義名分にしてアジア方面軍を討伐することはできなくなるだろうし、そうなれば自分達の目的が達成させられる見込みはまだまだ残る。

シャアはそう主張してマハラジャにサイド3に向かうように言う。

「・・・分かりました。私も覚悟を決めましょう」

マハラジャはそう言って覚悟を決めた目をするが、その様子を内心でシャアは益々嘲笑う。

（愚かな男だ。これから私に利用されて死ぬとも知らずに）

——そして、その6時間後、マハラジャの乗ったH L Vは軌道上へと打ち上がった。

◇サイド3 総帥府

「なに？マハラジャの乗ったH L Vが爆破された？」

総帥府でセシリアからその報告を受けたギレンは目を丸くしていた。

そう、つい先程、サイド3に向かうマハラジャが乗ったH L Vが軌道上に待機していた艦隊に回収される前に爆発するという事態が起こっており、准とは言え将官クラスが乗っていただけあって、ジオン軍上層部は大騒ぎになっていた。

「はい」

「いったいどういうことだ？連邦の攻撃か？それとも本当に事故か？」

ギレンはこの時、少し動揺していた。

マハラジャの乗ったH L Vの爆破。

それはギレンの計算には全く存在しない事実だったからだ。

元々、出来レースによって最終的に処刑するつもりではあったが、それはあくまで形式上だけとは言えど軍法会議を通してからするつもりだった。

これは軍法会議などの法を通さないと、マハラジャを処刑したのはザビ家の私情と思われるしまい、中立的な派閥から更に距離を置かれる可能性があったからだ。

いや、それだけならまだマシな方で、最悪、ダイクン派が蜂起した際にそちらにつくと言いかねない勢力も出てくるかもしれない。

そうならないためにも、マハラジャには「汚い罪人」の状態のまま処刑台に立つて貰う必要があったのだ。

だが、この一件でマハラジャが死んだとなれば、彼を「殉教者」にしてダイクン派の結束と中立派閥の離反を促しかねなかった。

「それは・・・詳しく調べてみないことには」

「・・・不味いな」

ギレンはこの状況を不味いと感じる。

事故か事件か曖昧な状況となれば、仮にこの件が事故だろうとそうでなかりようと、おそらく世間は謀略と取るだろう。

何故なら、世間というのはミステリアスな謀略論を唱えたがる習性があるからだ。

そして、この場合、怪しいのはギレンと取られるのは間違いない。政敵であることや爆破前にサイド3への呼び出しをしていたことなど、怪しさを裏付ける動機や状況証拠は山程揃っているからだ。

加えて、ザビ家にはジオン・ズム・ダイクンを殺害したという疑いも掛かっている。

それも加味すれば、余計怪しく思われるだろう。

そして、そうなれば前述したように反ザビ派勢力を急成長させかね



ない。

(いや、仮に本当に事故だったとしてもザビ家の疑いは晴れないか)

前世で読んだアルキメデスの大戦という漫画で權直が言っていたように、人は憶測でものを判断するし、時が経てばそれが真実となる。それはアルキメデスの大戦の部隊となった20世紀だけでなく、この宇宙世紀の時代においても変わらぬ原理だ。

やっていないことを証明するためには物理的な証拠を示さなければならぬのは変わらないのだから。

しかし、それが悪魔の証明と言われるように、物的証拠を示したとしても、捏造だと言い張って民衆がそれを信じればそれが真実となる。

ドラえもんみたいに物理法則を無視して証明する秘密道具のようなものがあり、民衆がそれを認識していれば別だが、この世界では秘密道具はあつても民衆がそれを認識していない。

(つまり、どうやっても我々の疑いは晴れないということか)

忌々しい事実には歯噛みするギレンだったが、それでも打つ手がないわけではない。

「セシリア、至急マハラジャが乗っていたHLVに、何らかの工作が仕掛けられていたという証拠」を探してくれ」

事故で済ませるところが疑われるなら、こちらから証拠を作って誰かに容疑を擦り付けければ良い。

さしあたっては連邦か、ダイクン派がそれに相応しいだろう。

「分かりました」

セシリアもギレンの意図を察したのか、そう答えながら工作活動にあたることを決意する。

バレたら物凄くヤバイ工作ではあったが、逆に言えばバレなければどうってことはないし、バレたとしても時間を稼げればその頃にはほとぼりが冷めている可能性がある。

もつとも、それでもそんな偽装工作は平時ならばリスクが大きすぎるのでやらないのだが、今は戦時であり、味方の不信を取り敢えずでも良いので払拭しなければならぬ。

(綱渡りな手段だが、今は戦争状態だ。多少のリスクを恐れてジオン軍内に不和協音を引き起こすわけにもいかない)

そう思いつつも、ギレンはこんな事態の原因を作ってくれたマハラジャに内心で罵倒の声を溢しながら、もし黒幕が居るのであればいずれツケを払わせてやると決意した。

UC0079年 11月20日 文民統制の崩壊

◇宇宙世紀0079年 11月20日 南米 ジャブロー

「これは由々しき事態だ・・・」

南米のジャブローの一室で大統領や閣僚達は一様に頭を痛めていた。

先のダカールの演説によって、当たり前だがジオン側は交渉の席を蹴ってしまい、閣僚達は慌てて講和会議をぶち壊しにしてくれたジーン・コリニー中將を拘束しようとしたのだが、その目論みは彼の配下に居るアフリカ方面軍自体が彼の意見を支持し、こちらが派遣した憲兵隊を追い出してしまったことで頓挫してしまう。

本来なら、ここでアフリカ方面軍を反乱軍と認定して討伐しなければならぬのだが、あいにく今はジオンと戦争中であり、そんなことをすれば重力戦線のジオン軍が息を吹き返して手薄になった場所に侵攻してくる可能性があったので、身動きが取れないのだ。

更にジーンの行動はその他にも、ある一つの政治的な問題を引き起こしていた。

それは――

「ジーン・コリニー中將のやっていることは明らかな文民統制の崩壊だ。これを何とかしなければならぬ」

そう、政府が軍を統制できない今の現状は明らかな文民統制の崩壊なのだ。

まあ、原作でも半ばそんな感じにはなっていたが、ここまであからさまではなく、政治家の言うこともある程度はちゃんと聞いていた。だが、今回のジーンの行動はそれを丸つきり無視している。

しかも、たちが悪いことに前述の理由から反乱軍とも認定できないので、ジーンの行動は“地球連邦正規軍としての行動”となってしまう

うのだ。

こうなると他の地域の軍もジーンのように政府の命令を聞かなくなる可能性があった。

「忌々しい！これでは旧世紀の日本の軍国主義ではないか!!」

閣僚の1人がそう叫ぶ。

そう、現在の連邦の状況はかつての満州事変の時の関東軍と政府の関係とかなり似通ったような状態となってしまうている。

まあ、軍人が政治家になっていない分、厳密には「まだ」軍国主義国家とはなっていないのだが、このままではその時と同じく軍部に政治が乗っ取られかねない事ぐらひは閣僚達にも容易に理解できた。

「やはり、多少無理をしてもアフリカ方面軍を討伐すべきなのは？」

閣僚の1人がそう言うが、大統領はすぐさまそれを却下する。

「駄目だ。アフリカ方面軍に居る数を忘れたか？」

「・・・」

その言葉に意見を出した閣僚は黙るしかなかった。

アフリカ方面軍の数は約300万人程居る。

これは現在の連邦地上軍の総員が2700万人なのを考えれば、丁度9分の1にあたる数字であり、一見、無理をすれば討伐も不可能ではないと感じる。

しかし、アフリカ方面軍以外の2400万人の将兵は世界中に散らばっている状態であり、一部はジオン軍と直に対峙しているのだ。

ならば、ジオン軍と対峙していない兵力を使えば良いのではないかと考えられるが、ジオン軍には降下作戦という手があるため、対峙

していないからといって手薄にすれば、その手薄になった場所に降下される可能性が十分考えられる。

つまり、アフリカ方面軍とジオン軍を同時に相手にすることは事実上不可能であり、それならばジーンの行動を黙認して相手をジオン1つに絞ろうというのが大統領の意見だった。

しかし、だからと言ってジーンの行動に心の底から賛同しているわけではないので、どうにかならないかと大統領は考える。

(ここはいつそのこと、またジオンと休戦を行うか?)

大統領はそうも考える。

ジオンが講和を蹴ってからまだ日が浅い以上、講和は不可能。

だが、休戦なら今から申し出ても可能だろう。

・・・そう、申し出るだけなら。

(しかし、ただの休戦ではジオンの方も呑むまい)

以前の休戦条約は途中で破られているため、ただの休戦ではジオンも呑まないだろう。

だが、アフリカ方面軍討伐のためと言えばどうだろうか?

自分達にとっては忌々しいことであるが、ジオンからすれば連邦軍同士が勝手に争って消耗してくれるのだ。

呑む可能性は十分にある。

そして、その休戦期間の最中にアフリカ方面軍を討伐し、以前の講和会議を再開する旨を伝えれば良い。

大統領はそう考えるが、問題も存在する。

それは以前、こちらが休戦条約を1度破棄してしまっていることで休戦すると言っても信用を得られないであろうこと。

加えて、アフリカ方面軍と戦う為と言っても、睨み合うだけで実際に戦わないのでは単に連邦に戦力を整える時間を与えるだけだということをジオン側も気づくだろう。

となると、休戦条約を呑ませるためには、何かしらのジオン有利な条件を出さなければならぬ。

(・・・難しい問題だな)

あまり有利な条件を出しすぎると、閣僚からの反発も来るだろうし、ジオンも不審に思うだろう。

かといって、生半可な条件でジオンが呑むわけもない。

悩む大統領であつたが、そんな時、閣僚の一人がこんな言葉を溢す。

「しかし、国民のほとんどがコリニー中将を支持していないのは不幸中の幸いでしたね」

そう、コリニー中将の演説はほとんどの国民の間で反感を買っていた。

当然だろう。

国民からすれば核ミサイルまで撃ち合っているこの狂気な戦争をさっさと終わらせて欲しいのだ。

それを逆行するかのよう『戦争継続します』などという宣言をされたら流石に怒る。

まあ、彼の配下であるアフリカ方面軍は逆に喝采を叫んでいたが。

「ああ、それについては同感だ。そんなことになっていたら手がつけられなくなっていただろうからな」

まあ、大半は様子見で動かないだけだろうがな。

大統領はそんな独り言を溢す。

一見、軍に受けが良いと思われていた先のジーンの演説であつたが、実のところ軍の間でもアフリカ方面軍以外は賛同する人間はほとんど居なかつた。

いや、むしろ、反感を買ってすらおり、特に東欧やアイルランド出

身の将兵に至っては、ジーンの手によって核を落とされたり、それによってジオンの核攻撃を呼び込んだ元凶として知られているだけに、かなりの反感を持たれている。

だが、油断は出来ない。

何故なら、賛同していないというのはジーンの味方にならないことと必ずしもイコールではないからだ。

ここで連邦政府がしつかりしていないと見れば、後から向こうに与するようになる輩が出ないとも限らない。

(しかし、こんな状況でどうすれば良いのだ?)

今の連邦は国家と国家の戦争中な上に、政府の統制を守る気があるのかかなり怪しい不穏分子勢力が登場している状態だ。

こういうときに一番良い対処法は一方の敵を片付けてから、もう一方を片付けることなのだが、ジオンにしてもアフリカ方面軍にしても簡単に片付けられるような相手ではない。

はつきり言って、どう上手く遣り繰りしたとしても一方の敵を片付けるので手一杯だろう。

(だとしたら、やはり戦うのはジオンか)

大統領は主敵をジオンと定める。

アフリカ方面軍を放置しても、彼らは曲がりなりにも連邦軍なので、これといった目に見える損失は出ないが、ジオンに独立されると他のサイドにおいても独立運動が加速してしまい、連邦の戦後の復興に支障が出てしまう。

いや、最悪、独立は認めても良いが、それは連邦の統制下でやらなければならぬと大統領は考えていた。

(では、ここはコリニー中将の演説に乗るとしよう。・・・もつとも、戦後にきつちりと処罰を受けて貰うがな)

大統領はそう思いながら、コリニー中将の演説に乗つかる事を決める。

だが、彼は知らなかった。

彼が利用しようと考えたジーン・コリニー中将がとんでもない事を画策しているということ。

#### ◇アフリカ ダカール

(ふん、気に入らん)

ジーンは現在の状況を不満に思っていた。

先の演説で自分の政治生命が取り敢えず繋がったのは確かであるが、アフリカ以外の世間と軍の受けは悪く、このままでは戦後に自分の立場が脅かされることは間違いない。

当面は連邦軍最高司令官に舞い戻ることが目標なジーンにとってそれは許容できないことだった。

(だが、この作戦が成功すれば人々は私の言うことに耳を傾けるようになる)

ジーンはそう思いながら、視線を部屋に貼り付けられた世界地図へ



と向ける。

この作戦が成功すれば、多くの人間が犠牲になることは間違いない。

だが、ジーンからしてみれば、それは連邦の勝利のためと自身の栄達の為には仕方のない犠牲だった。

（そうだ。私は将来、地球連邦の大統領となる男なのだ。こんなところで躓いているわけにはいかない）

そう思うジーンの目には、あのオデッサ作戦の時以上の狂気が宿っていた。

UCC0079年 11月24日 大西洋大津波

◇宇宙世紀0079年 11月24日 月面 グラナダ

「キシリア少将、これが本日の報告書です」

「うむ」

キシリアはそう返答しながら、部下の男から受け取った報告書を読む。

今、キシリアが読んでいるのは連邦のアフリカ方面軍の動向とそれに対する連邦政府の対応についてだ。

あのジーンの行動は南極の時に交渉団が慌てていた事から、連邦政府が意図した行動ではないことは既に察していた。

まあ、原作でも『ジオンに兵なし』の演説をしたレビル將軍の例があるので、キシリアにとつては不思議でも何でも無かったのだが、原作のあの時とは大分状況が違っている以上、念のために調べておくべきだと考え、こうして部下に命令して調べさせていたのだ。

「……ふむ、なるほど。連邦は我々への対処を優先した、か」

考えていた可能性の中で一番こちらにとって嬉しくない情報が入ってきたことにキシリアは眉をしかめる。

元々、あの演説の後、連邦が選べる選択肢は――

- 1 主敵はあくまでジオンとしてジーンの行動を追認する。
- 2 ジオンと講和、あるいは休戦を行い、アフリカ方面軍を反乱軍と認定して討伐する。
- 3 ジオンとアフリカ方面軍双方を同時に相手にする。
- 4 ジオンとアフリカ方面軍双方と和解を行い、戦争を完全に止める。

――の4つしかない。

ちなみにこの中で選ばれる可能性が一番低いのはやはり4だ。

と言うより、そこまで連邦が温厚であれば、そもそもこの戦争自体が起こらなかつただろう。

それを考えると、連邦政府が4を選ぶ可能性など期待するだけ無駄だ。

3は選択肢としては有りだが、リスクが高すぎるために選ぶ可能性はやはり低い（それでも4よりは可能性はあるが）。

となると、必然的に可能性が高いのは1と2だ。

そして、1はジオンの立場からしてみれば4つの中で最も選んで欲しくない可能性であり、2は逆に最も選んで欲しい可能性だった。

だが、どうやら連邦政府はジオンが最も選んで欲しくない選択肢を選んできたらしい。

（まあ、前と変わらない状態と言えばそれまでだがな。しかし、連邦政府の連中は分かっているのか？ジオンの行動を追認することというのは、軍国主義ルートに直行するということに）

前述したように、今のアフリカ方面軍は旧世紀の関東軍の満州事変の状態と変わらない。

そして、旧世紀の日本はこの関東軍の行動を事実上追認してしまったことで、これが切っ掛けとなり、軍国主義国家への道を進んでしまっている。

このままでは連邦も同じ道を辿ることとなるだろう。

まあ、ソ連のような軍の構成に支障が出るくらいの徹底的な大粛清を行えば話は別であるが、そんな思いきったことが連邦に出来るとも思えない。

（まあ、連邦の事情などどうでも良いが、これは我々にとつても不都合だな。軍が実権を握っているとすると、テイターズのような組織も簡単に出てくるだろうし）

原作ではデラース紛争を切っ掛けに創設されることとなったティターンズであるが、逆に言えばデラース紛争が起きるまでは連邦内部でも組織設立の反対者も多かったのだ。

まあ、こんな軍の暴走を許しかねない組織を民主主義国家の議員が簡単に賛同するわけもないので、当たり前前の事ではあったが。

だが、軍が実権を握っていた場合、議員の意見を大幅に除外することができるので、デラース紛争のような切っ掛けがなくとも、原作より早く創設される可能性が高い。

そして、ティターンズのような組織が設立された場合、連邦政府が完全に乗っ取られて対スペースノイド一辺倒となり、再びジオンに戦争を仕掛けてくる可能性も0ではなくなってしまう。

(これは再びアフリカに降下作戦を行うように兄上に進言するべきか?)

だが、そう簡単にはいかない。

アフリカは反ジオン(より正確に言えば反スペースノイド)感情が強く、降りたら最後、泥沼の戦いに突入してしまうのは目に見えている。

その為、取り敢えず一旦その考えを保留にして、更に報告書を読み進めることにした。

「……ん?」

そこでキシリアは気になる項目を見つけた。

「……おい、これは本当なのか?」

そうやってキシリアは男にその項目の部分を見せながら指を指す。ちなみにそこにはこう書かれてあった。

『アフリカ方面軍は核ミサイル及びNBC兵器を近々使う可能性有

り』と。

「はっ。調べた結果、事実のようです。既に核兵器の方はカナリア諸島に核ミサイルが5発以上の核ミサイルが運ばれています」

「カナリア諸島？何処だ？」

聞いたこともない島々の名前にキシリアは首を傾げる。

「アフリカ北西部にある島々だそうです」

「ほう。・・・どれどれ」

キシリアはそう言いながら、机の中に仕舞ってあった地図を取りだし、それを広げて男の行った位置を確認する。

「・・・ここか」

アフリカ北西部、アゾレス諸島の南西にその島々はあった。

（なるほど、ここから北米か欧州にでも発射して・・・いや、待て）

そこでキシリアは不自然さに気づく。

何故、わざわざこんなところに核兵器を運ぶのか、と。

旧世紀だと核ミサイルは長距離、中距離、短距離といった感じに色々の種類があったが、宇宙世紀の核ミサイルは技術が発展したことで基本的にオールレンジとなっており、なんなら日本列島から発射して地球の反対側にあるブラジルに撃ち込む事も可能だ。

勿論、ジオンが占領している欧州や北米に近づけて距離を短くすることでより確実に撃ち込めるといふ利点は存在するが、そんなことを

するよりは撃ち込む当日にミノフスキー粒子を現地にばら蒔いて迎撃ミサイルなどを無力化してから撃ち込んだ方が確実だし、そもそも移送中にジオンの攻撃を受けて失われる可能性を考えれば、やはりアフリカから撃った方が良い。

(やはり不自然だな)

キシリアはそう思いながらも、取り敢えず核ミサイルの事は置いておき、NBC兵器について聞くことにした。

「・・・なるほど。ところで話は変わるが、アフリカ方面軍が用意したNBC兵器というものはどういうものだ？」

「はい、ウイルス系の物だそうです」

「ウイルス、か」

キシリアはそれを聞いて、どうやらアフリカ方面軍は本気でそれを使うらしいと察した。

ウイルスというのは乾季である冬に爆発的に増殖する傾向がある。

そして、今は晩秋であり、冬は目前だ。

こんな季節にそんなNBC兵器を準備するということは、本当に使う可能性が高い。

(もう南極条約は形骸化しているな)

核ミサイルにしろ、NBC兵器にしろ使用は現在は禁止されている兵器だ。

もつとも、オデッサ・ベルファストの一件でジオン・連邦双方で条約が破られてしまっているが、一応、現在も有効な条約の筈だった。だが、アフリカ方面軍はあからさまに南極条約を破ろうとしている

る。

こうなった以上、南極条約は事実上形骸化していると、キシリアも考えざるを得なくなっていた。

(まあ、もつとも、形骸化して向こうが使おうとしていると言っても、こちらがあらさまに使う訳にはいかないがな。取り敢えず、ガルマとユーリ少将にはアフリカ方面軍が核とNBC兵器を使用しようとしている可能性が高いと警告しておこう)

そう思ったキシリア。

だが、彼女の行動は一步遅かった。

いや、仮に警告が早かったとしてもどうにもならなかっただろう。

何故なら、コリニー中將の計画というのは彼女の想像の斜め上を行くほど、壮絶なものであったのだから。

——そして、この1時間後、地球のカナリア諸島に存在するラ・パルマ島のケンブレビエ火山内部にて、連邦によって持ち込まれていた8発の核ミサイルが一斉に起爆した。

「・・・なんだ・・・ありや」

その瞬間、ニューヨークに居た誰もがその光景を見て絶句していた。

それこそニューヨーク市民、ジオン兵の区別なく。

まあ、当然だろう。

彼らの視線の先には海が盛り上がり、自分達を飲み込もうとしている光景が広がっていたのだから。

「つ、津波だあああ!!」

誰かがそう叫ぶ。

そして、それを皮切りにしてニューヨーク市民はパニックになり、一斉に津波の反対側である西へ、あるいは津波の範囲外であるかもしれない事を信じて南北へと逃げていく。

我に返ったジオン兵は逃げようとする民衆を押し留めようとするが、津波は現実存在しているし、そもそもそのジオン兵ですら津波の脅威にビビって逃げ出した人間も居るほどだ。

そんな状態でパニックになった民衆を押し留められる筈もない。

だが、何処に逃げたにしても、はつきり言ってそれは無駄だった。

何故なら、この時の津波は全高50メートル。

速度は1100キロという亜音速。

しかも、津波の範囲はニューヨーク近辺どころか、東海岸全体を含めた北米、カリブ海のほぼ全ての島々、南米北部、西ヨーロッパ、北アフリカの大西洋沿岸という広大な範囲で（時間差や津波の規模の大ききの違いは多少有ったが）起きていたのだから。

——こうして、後に「ジーン・コリニーの乱心」と言われる惨劇の1つである大西洋大津波により、ニューヨークに住んでいた人々は文字通りの意味で洗い流されることとなった。



UC0079年 11月28日 汚い空襲

◇宇宙世紀0079年 11月28日 北米 キヤリフォルニア・ベース

「・・・・・・・・・・」

ガルマは部下から寄せられてきた報告書をじつと見つめる。

だが、そこに書かれてあった事実を信じる事が出来ず、もう一度目を擦って報告書を見直すが、やはり書いてある内容は同じ。

それを見てようやくガルマはようやく現実を認識し、今度はその報告書に書かれてあった内容に卒倒しそうになった。

今、ガルマが見ているのは北米方面軍の被害報告書だ。

4日前に起きた大西洋大津波によって、北米方面軍の管轄地だけでも旧アメリカ東海岸とカリブ海の島々は洗い流される事態となっており、当然の事ながら現地に駐留していた北米方面軍は甚大な被害を被っている。

特に東海岸沿岸部とカリブ海に配属されていた戦力は文字通り消滅しており、死傷者は13万人を数え、その内、死者・行方不明者が11万人程だ。

北米方面軍は総勢50万人程なので、この時点で既に全体の4分の1の戦力が壊滅してしまった事になる。

まあ、それでも災害の規模を見れば、被害は少ないと言えは少ないのだが、それでも戦力が激減してしまったことに変わりはない。

もつとも、これについては欧州方面軍も同じであり、ガルマが把握している情報だけでも――

ブリデン島・・・軍の被害は比較的軽微だが、南西部が津波に晒されたことで少くない被災者が出ている。

アイランド島・・・守備隊長であるニアーライト少佐を含む守備隊の半数（5万人程）が死亡、あるいは行方不明。

アイスランド島・・・ほぼ壊滅。

——という惨状で、死者・行方不明者は12万人と、北米方面軍とほぼ同等の損害を受けている。

(これは兄上に頼んで本国から援軍を送って貰うしかないか)

もう今の状況では重力戦線の維持は不可能だと判断し、ガルマはギレンに援軍を要請することに決めた。

幸い、本国には新兵の部隊がまだ数多く残っているし、中東やオセアニアから撤退した兵士もそれなりに居る。

必要とする援軍の数の問題から、こちらに来るのはほとんどが新兵部隊となるだろうが、それでも無いよりはマシだ。

(戦力の問題は取り敢えずそれで良いとして・・・やはり、一番の問題は発生した難民だな)

ガルマはそう考える。

既に災害の混乱に乗じて、略奪、暴行、強姦などの騒ぎが起きており、救助活動に向かわせた部隊がその混乱の収集に奔走していた。

別にこれ自体は問題ではない。

許容できるかどうかは別として、こういった災害にはそういうモラルを失った行動が付き物だからだ。

実際、日本でも東日本大震災の時などは小規模であるとは言え、同じような行動が起こっている。

だが、ガルマが一番問題だと考えているのは、今回の災害で発生した難民の数だ。

(どれだけ低く見積もっても今回の津波の被災者の数は5000万人。その8割以上は津波で死んでいるようだが、それでも北米のジオン勢力下の地域だけでも膨大な数の難民が居る。今の北米方面軍にそんな難民を抱え込む余裕があるのか?)

勿論、この5000万人という数字は旧アメリカだけでなく、北米全体、南米、西ヨーロッパ、アフリカ北西部の津波の被災地域を全て合わせた数であるし、そもそもその内4000万人程が死者・行方不明者として数えられているので、北米方面軍が今後抱え込むであろう難民は数百万程だ。

これは地球の人口が宇宙移民によって20億人と少なくなっており、それに伴って人口密度も少なくなっていたことからこの程度の被害で済んでいた。

もしこの大西洋大津波が起きたのが宇宙移民が開始される直前くらいであったり、漫画版オリジンのように宇宙移民の規模が小さく、地球に大半の人間が残っているような状態であったならば、この程度の被害では済まされなかっただろう。

それを考えれば、今回の被害はまだ想定される最悪よりも少ないものであったと言えるし、対峙する連邦軍が今回の津波の被害（噂ではジャブローの一部が水没したらしい）でのうち回っており、こちらに攻勢を掛けてくる気配は全く無かった為、救助活動にもある程度専念できるのも良かったと言える。

しかし、それでも将兵の数が40万人を切ってしまった上に、生き残った将兵の救助活動も行わなければならぬ北米方面軍としては、数百万という数の難民の面倒を見ていられる余裕などない。

まあ、戦力については前述したように本国から送って貰えば良いのだが、それでも今から援軍を要請して送って貰うとなると、どんなに早く見積もっても数日は掛かるし、そもそも数百万という単位の難民の面倒を見ると、10万人程度の援軍では焼け石に水となる。しかも、その援軍がキチンとモラルを守れるかどうかも分からないため、そちらにも気を配らなければならない。

前から北米という地に慣れている将兵を救助活動に派遣して、代わりに本国から来た援軍を連邦軍と睨み合わせるという手もあるが、本国に居る部隊は基本的に新兵師団が多いために本当に連邦軍が攻めてきたら持ちこたえられない可能性がある。

(・・・やはりどうやっても遣り繰りするのには厳しいものがあるな。か  
といて、見捨てたりするという選択肢は出来ないだろうし)

ジオンには難民という弱者を見捨てるという選択肢はない。

何故なら、元々ジオンはどう言い繕ったとしても、この土地の人間  
からすれば侵略者であるので、ホワイトな印象を保たなければ治安が  
維持出来ないからだ。

いや、それを抜いたとしても、自分達の勢力圏内に居る難民を放置  
したりすれば、食料や医薬品などの生活物資を求めて難民が暴徒と  
なったり、ゲリラとなって統治しているジオン軍に襲い掛かってくる  
可能性があるので、北米の不安定化を避けるためには見捨てるという  
選択肢は一番やってはいけない選択肢だろう。

もつとも、ここら辺の事情は連邦も同じなのだろうが。

(まあ、幸い穀倉地帯のある旧アメリカ中部は無事だし、西海岸でもそ  
れなりの規模の食料生産地域は存在するから食う分には問題ないの  
だが・・・)

住居の手配と津波に伴って起きた混乱の終息は北米方面軍が(それ  
も北と南で連邦軍と睨み合いをしながら)やらなければならぬ。

その苦勞を考え、ガルマは頭を抱えた。

——しかし、その程度の苦勞など、ほんの序の口であったというこ  
とをガルマはすぐに思い知らされる事になる。

◇ブリデン島 南西部

「えっ、空襲!？」

ガンダム改に乗って瓦礫の撤去を行っていたのび太はペガサスの副長であるエーリツヒ・クリューガー大尉から『敵航空機が接近中。ただちに迎撃に向かえ』という指示を無線で聞き、思わずそう叫んでしまう。

大西洋大津波はブリデン島にも少なからず被害をもたらし、複数の街と街道を瓦礫の山へと変え、数万人の人々を冥府へと送った。

幸い、ペガサスは災害時にブリデン島東部の港に入港していた為にこの被害を受けず、ユーリ少将の命令によって、こうして災害を受けた地域の災害救助活動に向いていたのだが、そこに連邦軍による空襲が行われようとしていたのだ。

(なにもこんな時に来なくても良いだろう!!)

のび太は空襲しにやって来た連邦軍の航空隊に向かって、内心でそう罵倒する。

別に自分達の領域で災害が起きたからと言って、敵である連邦にそれを考慮しなければならぬという義務はないのだが、それでもこんな自然災害に見舞われて味方はおろか、巻き込まれた民間人の救助も行わなければならない状況下で空襲を行うという連邦の行動にのび太は怒りを覚えた。

しかし、それで連邦が空襲を止めてくれる筈もないので、仕方なく指示された迎撃地点へと向かう。

すると――

(もう来たのか。ずいぶん早いな)

迎撃地点に到着してすぐに連邦の爆撃隊はやって来た。

何時もなら地上に据え付けられた対空レーダーなどで事前に探知されて(例えミノフスキー粒子が散布されていたとしても敵が近づいている兆候であるということは分かる)、迎撃機(あるいはベースジャバーに乗ったMS)が飛び立ち、対空砲火も火を吹くのだが、それらは全て津波によって洗い流されており、周辺の地域には存在しない。

加えて、災害の混乱によって哨戒機もろくに飛んでいない有り様のため、索敵をペガサスの艦載レーダーに依存しなければならぬ関係上、初動はどうしても遅れてしまう。

しかも、この地域に救援として派遣された戦力はペガサスを除くとモビルスーツやプチモビばかりであり、おまけにかつてのガダルカナル島のような限定された範囲への空襲ではなかった為、はつきり言って迎撃戦力としてはあまり役に立たなかったのだが、それでも敵が来ている以上はやるしかなく、のび太はやって来た敵航空機にビームライフルの銃口を向けた。

そして、その引き金を引くとビームが発射され、それに貫かれた航空機はあっさりと撃墜される。

・・・なにやら、青い煙を撒き散らしながら。

「よしー次!!」

だが、のび太はその違和感にはすぐには気づかなかった。

敵航空機の数には意外に多かったため、その迎撃の事で頭が一杯であつたからだ。

おまけに被災地で救助を待っている人達のためにも救助活動を早く再開しなければならず、その為には早く敵をやっつけなければならぬという焦りの感情も若干あり、とてもではないがそんな小さな違和感を気にしてられる余裕などなかった。

しかし、敵機を次々と撃墜して、精神的に少し余裕が出てくると、よ

うやくその違和感に気づき始める。

(なんだ?この青色の煙。煙幕かな?)

撃墜した敵機がばら蒔いていった青色の煙はいつの間にかガンダム改の周囲を覆っていた。

それ故に煙幕かとも思ったが、それにしても薄いし、そもそもミノフスキー粒子が散布されていない空間で煙幕をばら蒔いてもあまり意味はない。

電子機器で敵を叩けば良いだけだからだ。

どういう意味かとのび太はほんの少し考えるが、その時、コクピット内で警報音が鳴り響き、続けてある文字がモニターに映し出される。

「なんだ!」

のび太は慌ててそのモニターに映し出された文字を見た。

だが、次の瞬間、そこに書かれている文字に凍り付く事になる。

「NBC兵器の発生・・・」

そう、周囲にばら蒔かれた青色の煙はNBC兵器であり、より正確に言えばキシリア機関が掴んだアフリカ方面軍が調達したというウイルス兵器そのものだったのだが、ガンダム改に搭載されているセンサーはそこまでは示さないため、ただNBC兵器だとしか表示されない。

だが、そこに書かれてあった文字にのび太は慌てざるを得なかった。

「ど、どうしよう!?!NBC兵器って確か毒ガスとかの事だよね!!」

のび太は前にNBC兵器とは何か分からずにドラえもんに聞いてみたことがあり、その時は説明されてもよく分からなかったが、毒ガスのようなものであるということは何んとなく理解していた。

そして、状況からしてガンダム改を覆っている周囲の青い煙が毒ガスであることは明白であるので、そんな場所の真っ只中に居ることに気づいたのび太は慌てていたのだ。

まあ、冷静になって考えればモビルスーツは宇宙空間で宇宙服無しでも大丈夫なほど機密性が高いので、別に周囲に漂っているのがNBC兵器だろうが、放射能だろうがコクピットに穴が開いてない限りは問題なかったのだが、この時ののび太はそこまで考えが及んでいなかった。

もつとも、慌てているからと言ってモビルスーツの外に出るほど馬鹿ではなく、むしろ、ブースターを使って周囲の煙を追い払うという行動を思い付いたのは流石と言えるだろう。

・・・実際はその行動は無意味であったと後で気づいて、恥ずかしい思いをすることになったとしても。

だが、毒ガスを空襲で撒くというこの凄惨な行為は同じく救助活動地域に居るモビルスーツやプチモビに乗っておらず、宇宙服も着けていなかった友軍や被災者となった民間人達を汚染していった。

そして、このウイルス兵器を撒き散らす空襲はブリテン島だけに行われたものではない。

アイルランド島、アイスランド島、旧アメリカ東海岸、カリブ海の島々など、主に津波によって被害を受けたジオン軍勢力下の地域に行われ、ブリテン島と同様にウイルス兵器を撒き散らしていく。

ちなみにこれらの空襲は、全てアフリカから発進されていた航空隊によって行われていた。

——そして、ジーン・コリニーの乱心による惨劇の第二幕は正にこの瞬間から始まったと後の歴史書には記される事となる。



U C 0 0 7 9 年 1 2 月 1 日 ギレンの決意

◇宇宙世紀0079年 12月1日 サイド3 総帥府

「何て事をしてくれたんだ・・・」

ギレンは珍しく怒りの感情を示す。

昨日、カイロから行われたジーン・コリニー中將の宣伝によって大西洋大津波の原因がラ・パルマ島の噴火であることが分かり、ジオンの占領下の被災地に散布されたNBC兵器もキシリア機関が掴んでいたアフリカ方面軍が保管していたウイルス兵器と同じである事が判明していた。

その際、ジーン中將はラ・パルマ島の噴火がジオンが核兵器を爆発させて起きたことであり、ウイルス兵器は元々ジオンが開発していたものが津波によって流出したと盛んに宣伝している。

どうやらこの大災害を起こした濡れ衣をジオンに着せるのが狙いであつたようだ。

しかし、実際のところ、これを真に受ける民衆はほとんど居ない。

これはジーンが対ジオン強硬派として知られており、今回の宣伝も災害を利用したジオン陰謀論の一環だろうとしか大半の民衆に思われなかつたということもあるが、この宣伝が成された後、ジオン公国政府は証拠付きでNBC兵器は連邦の航空機がばら蒔いていったものであると主張していたのに加えて、巻き添えで疑われるのは御免だと、連邦政府もそのNBC兵器をばら蒔いた航空機がジーン中將のアフリカ方面軍の所属であることを公表しており(この際、『自分達はこんな外道な行いをしたアフリカ方面軍を支持しない』と表明した)、これと合わせてあまりにも津波に関しての詳しすぎる情報とラ・パルマ島の存在するカナリア諸島の位置、更には日をあまり置かずして被災地にNBC兵器を迅速にばら蒔いていったそのやり口から、一部の高級官僚や軍人、民衆の間では、むしろジーンが大西洋大津波を引き起こしたのではないかと疑っているような状態だつた。

そういうわけで、重力戦線での民衆の反ジオン運動の活発化などは防がれた訳だが、だからと言って問題が全て解決されたわけではない。

大津波による被災地の救助活動、NBC兵器ばら蒔きによる疫病の拡大の阻止など、どちらか一つでも困難であろうことを同時に行わなければならぬのだ。

おまけに先日の子ーンの宣伝とキシリア機関の情報を纏めると、大西洋大津波に連なる大惨事は全て子ーンによって引き起こされたものであるとギレンを含めた転生者達は確信しており、自分達が散々気を使って犠牲者を最小限に納めるように努力したにも関わらず、勝手にこんな大災害を引き起こして多数の犠牲者を出してくれた子ーンに対して、ギレンは怒りの感情を抱くが、事は一刻を争うために一先ずその感情を抑え、今後の方針を考えることにした。

「不味いぞ。これじゃ重力戦線からの撤退などとても出来ない」

ばら蒔かれたウイルスの致死率は60パーセントと、NBC兵器としては、意外と低いらしいが、その代わりに感染力は馬鹿みたいに高く、散布されてから今日までの僅か3日間の間にジオン占領下の地域だけでも1万人を越える感染者を出しており、その内、4000人程が既に死亡している。

しかも、この中には不幸にも被災地域で救助活動にあたった際に例の空襲によって感染してしまった友軍も含まれていた。

このまま地球方面軍将兵の宇宙へ撤退させた場合、その将兵から疫病が移動の際に宇宙船内に持ち込まれ、最終的にコロニーや基地内部に広がってしまう可能性がある。

特に密閉空間であるコロニーに疫病が広がった先にある未来など地獄以外にはあり得ないので、そういったことを防ぐためにも地球方面軍の将兵を宇宙に帰す事は出来なかったのだ。

(しかし、この状況で増援を送っても感染者候補を増やすだけだから

送れないしな)

ギレンは先日ガルマから送られた増援要請を思い出して頭を痛める。

確かに地球方面軍は戦力不足だ。

加えて、その重要性はジオン軍上層部の殆どの将軍が考えているよりも高いので、増援を送るのも吝かではない。

しかし、疫病が流行したとなると、増援を送ったとしてもただ感染者候補を増やすだけになってしまう可能性も高いので、この際、地球に送る人員は医療関係者だけに留め、あとは補給物資のみを送るというやり方が一番合理的で安全性が高い選択肢だった。

が――

(それをやってしまうと地球方面軍の将兵は本国から見捨てられたと思ってしまうだろうな)

この状況で増援が送られない上に宇宙に帰れないとなれば、重力戦線に展開する80万人のジオン軍将兵は本国から見捨てられたと思うだろうし、そこまで考えなかつたにしても確実に士気は下がる。

原作ギレンのように冷徹な判断が出来る指導者ならば、それでも地球方面軍を切り捨てるという選択肢を選ぶのだろうか、この世界のギレンにはそこまで割り切ることは出来なかつた。

(やはり見捨てることは出来ないな。はあ、ここで連邦が講和してくれば、問題の殆どは解決するんだが)

ギレンは内心でため息をつく。

そう、連邦がここで講和してくればワクチンを開発する余裕も生まれる上に、軍の緊張もある程度は緩和出来るのだ。

だが、連邦政府は先の『自分達はアフリカ方面軍を支持しない』という声明を発表したものの、こちらと講和する気配は無い。

おまけに大西洋大津波によってジャブローの一部が水没した際にエルラン大将やシュダック中佐などのジオンのスパイの連邦軍高官が軒並み死んでしまったらしく、最近ではジャブローの内情も全く分からなくなってしまうた。

(ここで地球方面軍が感染の拡大阻止に失敗してしまったら、次は地球連邦お前らなんだぞ。分かっているのか?)

そもそも今の状況だけでも1万人の感染者と数百万の感染者候補が居る。

勿論、感染者の隔離は行っているし、感染者候補の中で検査を受けた後に陽性の反応が出た者は收容所に入れられ、それを抜けようとすると射殺されるなど厳しい措置が取られている(本来なら、感染者候補を全員收容所に入れる方が確実なのだが、それをやってしまうと手間も掛かるし、兵士達の士気も更に低くなるので行われていない)が、津波によって東海岸が荒れ果ててしまったせいでジオンも全ての感染者や感染者候補を把握できている訳では無い。

加えて、地球は地続きだ。

幾つものコロニーの集合体であるジオン公国であれば、最悪、感染が拡大したコロニーを封鎖(悪い言い方をすれば、切り捨てる)するだけで感染の拡大の阻止は容易であるが、地続きである地球はそうもいかない。

つまり、仮にジオン勢力圏内の地域で感染拡大防止に失敗してしまえば、今度は連邦がその対応に奔走しなければならないのだ。

しかも、感染爆発が起こった後で。

こうなると、どれだけ感染者の隔離と感染地域の封鎖を行っても限度があるし、仮に何処か一ヶ所に感染者を集めて滅菌作戦を行うにしても、それで全ての感染者を殺せる保証など無い。

そうならないためにはジオンと講和をして感染の拡大をまだ感染拡大の初期段階である今のうちに抑えておかなければならないのだが、どうやら連邦にその意思は無いようだった。

(もしかして、ワクチンが自分達には有るから大丈夫だと考えているのか?)

ギレンはその可能性を考える。

今回ばら蒔かれたウイルス兵器はアフリカ方面軍によって使用されることとなったが、あのNBC兵器を開発したのは元々連邦だ。

そして、開発した以上、散布地域で活動する友軍が感染しないようにワクチンを開発するというのはある意味当然の帰結であり、もしかしら連邦は既にワクチンを完成させているのかもしれない。

だが、それに頼りきるのは軽率だ。

新型コロナウイルスの変異ウイルスの例を見ても分かるように、細菌やウイルスという病原体は自分達に害を与えてくるワクチンに対応するように進化したり、あるいは変異して効かないようにするといった厄介な性質を秘めている。

なので、仮に連邦がワクチンを完成させてそれを使って感染拡大を抑えようとしたとしても、ワクチンが効かない変異ウイルスが新たに発生して、それが更なる感染爆発を引き起こすといった可能性も十分考えられるのだ。

「・・・いや、連邦もそこは考えているか。となると、動かないのは別の理由だな」

連邦政府首脳もそこまで馬鹿ではない。

そう思った(思いたかった)ギレンは連邦が講和に動かない理由は別にあると考えた。

だが、それを考えたところで連邦が講和に動かないという現実は変わらないし、感染の広がり具合から探っている時間もないので、ジオンだけで出来る対策を練るしかない。

しかし、その思い付く対策はどんな方法にしても連邦という存在が邪魔になってしまうのだ。

(・・・こうなったら、やはり今月中に連邦を屈服させるしかない)

ギレンは今月中に連邦との戦争に決着を着ける事を決意する。

感染拡大阻止対策をどう行うにしても、講和を申し出てこない連邦の存在はやはり邪魔だ。

しかし、今月中にジャブローを陥落させて戦争を終結させることができれば、感染拡大を最小限に留めることが出来るかもしれない。

幸い、ジャブロー攻略作戦は元々今月中に行われる予定だった作戦だ。

その為の兵器も準備してあるので、やってやれないことはない。

加えて、近々ジャブロー攻略を行うとなれば、地球方面軍に増援を送れない理由にはなるので、地球方面軍の将兵の士気もギリギリではあるが持つだろう。

ギレンはそう考えていた。

U C 0 0 7 9 年 1 2 月 3 日 ユーリの決意

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0 0 7 9 年 1 2 月 3 日 ブリデン島 ロンドン

「寒いな・・・」

ユーリ・ケラーネ少将はそう言いながら、シンシア大尉と共にロンドンの町を歩いていった。

ロンドンの存在するブリデン島は緯度は高いものの、意外と気温は高い地域であったのだが、今年は何故か例年よりもかなり冷え込んでおり、既に気温はマイナスへと突入している。

「この気温は本当に不味いな。なんとかなら無いか？」

「無理かと。ここはコロニーではありませんので」

「・・・だよな」

ユーリはそう言いながら、小さく舌打ちをする。

いまユーリが懸念しているのはこの寒さによる兵士の士気の低下と兵器の稼働率の低下だった。

当たり前の事だが、コロニー育ちで構成されるジオン兵はこのような寒さには慣れていない。

基本的にコロニーは気温を調整できたりするので、過酷な環境に晒されるケースは殆ど無いと言っても良いからだ。

勿論、兵士なので鍛えられてはいるのだが、それでもかつてのオセアニア方面軍に配置された兵士達のように慣れない環境に体調を崩すものは少なくなく、おまけに今流行っている疫病への不安と合わせて将兵達の士気を低下させ続けている。

まあ、この問題はまだマシだ。

既に本国からは防寒具などが補給物資として送られてきており、当

面の対策は取れているのだから。

だが、兵器の稼働率の低下についてはどうにもならない。

元々、地球方面軍で運用される兵器は過酷な状況でも使えるように設計されてはいるが、過酷な環境に対応するようには作られていないからだ。

宇宙で使えるように設計されたモビルスーツはそれでもかなり動かせるが、他の兵器については厳しいものがあつた。

つまり、今のジオン軍は旧世紀のバルバロッサ作戦終盤のドイツ軍と同じ惨状を晒していたのだ。

いや、実を言うと、それよりも酷い。

現在の気温はマイナス6度。

この程度の低気温となると、流石の複雑で壊れやすいと評された旧世紀のドイツの兵器でも問題なく稼働していたのだが、ジオン軍の兵器はこの気温ですら影響を受け始めていたのだから。

「だが、ここで兵器の稼働率が低くなるのは不味い。この事を知つたら、連邦の連中はすぐにでもドーバー海峡を越えて押し寄せてくるぞ」

現在の欧州方面軍は本当に危うい状態にある。

アイスランド島は大西洋大津波によって守備隊がほぼ壊滅し、生き残つた守備隊はアイスランド島に撤退。

そして、アイルランド島ですら指揮官であるニアライト少佐が津波によって死んでしまい、指揮系統は混乱しており、現在はユーリの副官であるシンシア大尉が指揮を執っている有り様だ。

こんな状況で連邦に本気で襲い掛かられたらひとたまりもない。

「・・・そうですね。せめて連邦も例の津波によって大打撃を受けてくれれば話は別でしたが」

シンシアもまたユーリの言葉に同意する。



欧州方面での大西洋大津波の被害はジオンの方が多い。

何故なら、ジオンはブリデン島、アイルランド島、アイスランド島と満遍なく攻撃を受けたが、連邦はイベリア半島西岸やブレストの西端くらいしか打撃を受けていないのに対して、ジオン軍はアイスランド島からは既に撤退している為、欧州の拠点はブリデン島とアイルランド島のみとなっている。

しかも、その内、アイルランド島の守備隊は半壊と言っても良いほどの状態となって居る上に、連邦はスカンジナビア半島という無傷の拠点も残しているため、連邦軍が少し無理をすれば欧州方面軍を両島を攻略することも可能なのだ。

・・・いや、実のところ、既にその兆候はあった。

昨日から旧フランス北部やスカンジナビア半島に兵力が集まり始めている。

最初はブリデン島やアイルランド島から脱出してくる感染者に対処するための兵力かと思っていたが、いま思えば攻略のための戦力だったのかもしれない。

「しかし、どうにか封じ込めたとはいえ、疫病が発生している島々をわざわざ取りたいなどと思うでしょうか？」

シンシアはそれが疑問だった。

欧州方面軍の疫病封じ込めは、島という狭い環境ゆえか、北米方面軍程苦勞はしていない、今のところ感染拡大阻止も上手く進めている。

しかし、それでもアイルランド島とブリデン島が疫病の蔓延する場所という現実は変わらない。

そんな『汚いバイ菌が蔓延る土地』を攻めようとするとは、シンシアはどうしても思えなかった。

だが、それに対して、ユーリはこう答えた。

「まあ、俺達のような軍人が考えればそうだろうな。だが、政治家なら

「どうだ？」

「政治家、ですか？確かにそれなら視点は変わりますが・・・やはりどう考えてもそんな意味の無い上に危険なこととは思いません」

「そうか。まあ、それも1つの確かな意見ではあるんだろうが、俺はこう考えてる。連邦はこのブリデン島とアイルランド島を近いうちに攻めて感染されていない無事な地域を確保。それから俺達を感染地域に追い込んで閉じ込めれば、効率よく俺達の数を減らせるんじゃないか、とな」

「それは・・・あまりにも」

乱暴すぎる結論だ。

シンシアはそう感じた。

そもそも一度連邦が攻めてくれば感染地域の封鎖にあたっては兵隊も前線に投入せざるを得なくなるのだ。

そうなったら感染地域から抜け出した感染者によって疫病は広まり、最悪、連邦の将兵も一緒に感染する可能性もある。

仮に連邦が疫病のワクチンを開発してそれを打っているとしても、変異ウイルスが出てそれに感染すれば、今回蔓延っているウイルスの性質から見るにあつという間に感染が広まるだろう。

それを考えれば、攻略はリスクがあまりにも高すぎる。

それをするくらいなら依然として旧フランス北部から行われているブリデン島に対しての空襲をもっと強化する方が効率的だとシンシアは考えていた。

だが――

「ああ、現場に立っている俺たちからすれば非現実的な考え方だろうな。しかし、報告書と地図しか見ずに現場を全く知らず、軍事的なことも深く分からない奴等の意見はどうなんだろうなあ」

政治家という存在は基本的に報告書の上でしか戦争を知らない。勿論、その政治家が元軍人というのであれば話は別だし、軍人の意見をキチンと聞く政治家というのも居る。

しかし、軍人という存在を快く思っていない、あるいは政治生命に危機が迫っていて、軍の人間の言葉を聞いている余裕がない人間が政府の閣僚、ましてや大統領の立場だったらどうなるだろうか？

アフリカ方面軍が半ば地球連邦から離脱しており、文民統制が崩壊しかかっているとは言え、それでもアフリカ方面軍を除けば依然として地球連邦政府に従う連邦軍人が大半だ。

例え理不尽かつ危険な命令であったとしても、従う可能性はある。

まあ、流石にワクチン抜きで突っ込めたと言われたら別だろうが、元々問題にしているウイルスは連邦が開発していたものであり、一から研究しなければならぬジオンよりウイルスのワクチンの完成は当然早い。

そして、もう完成させて旧フランス北部やスカンジナビア方面に居る連邦軍の兵士へのワクチン接種を終えているとしたら、それを安心材料にしてこちらに攻めてくるだろう。

「まあ、取り敢えず準備くらいはしとくべきだろうな」

「しかし、準備と言ってもどうすれば・・・」

欧州方面軍は先の大西洋大津波によって40万人ちよつとしか居なくなっている。

しかも、その内の数万人は感染したり、感染地域の封鎖の人員として割いているので戦力には数えられない。

こちらを攻める連邦軍がどれだけ居るかは知らないが、少なくとも100万人以上は用意してくるだろう。

ただでさえガタガタで士気も落ちている今のジオン軍にそんな軍勢を相手に出来るとは思えなかった。

だが、それに対してユーリはこう言った。

「連邦が攻めてきたと同時に感染していない奴から宇宙に脱出させるんだよ。感染している奴等については・・・俺が残って連邦に投降を申し出る」

「閣下が!?それは危険です!私が・・・」

「おいおい、それこそ冗談だろ。惚れた女を敵軍に差し出すほど俺はろくでなしじゃねえよ。それに俺は欧州方面軍の最高責任者だ。その総大将が部下を置いて逃げるわけにはいかねえ」

「しかし!」

「大丈夫だ。南極条約も有る。それにお前たちが居なくなっただけじゃ俺の価値なんて大して意味はない。本国の連中の作戦計画を知っている訳でもないしな」

厳密には想像はついている。

重力戦線が苦しくなりつつある今、一か八かで近いうちにジャブロー攻略が行われる事になる可能性が高い。

だが、これはあくまで“想像”であり、確証のある事実ではないし、そもそもそれくらいの事ならば連邦軍も想定しているだろう。

加えて、仮にユーリに自白剤を投与して欧州方面軍や北米方面軍の内情を喋らせたとしても殆ど意味はない。

その頃には欧州方面軍は撤退した後であるし、北米方面軍に至ってはユーリの管轄ではないので断片的な情報しか知らないのだから。

「それにお前には撤退する奴等の指揮という大事な仕事を任せたい。やってくれないか?」

「・・・分かりました。ですが、必ず帰ってきて下さい」

「ああ、分かっているさ」

ユーリはそう言いながらも、内心で信じてもない神に連邦が来ないことを祈った。

シンシアにはああ言ったが、出来ることなら捕虜になりたくはなかったからだ。

——だが、そんなユーリの想いも虚しく、連邦は2日後の12月5日にブリデン島とアイルランド島に対して一斉に攻勢を開始するこ  
ととなる。

UCC0079年 12月6日 休戦の申し出

◇宇宙世紀0079年 12月6日 北米 旧アメリカ キヤリ  
フォルニア・ベース

「なに、休戦の申し入れだど？」

ガルマ・ザビ大佐はダロタ中尉からの報告に困惑する。

昨日、連邦がブリデン島とアイルランド島の攻略を開始し、それを見た欧州方面軍は宇宙へと撤退、残った兵士達は司令官であるユーリ・ケラーネ少将と共に降伏した。

そして、欧州戦線が無くなったことにより、残った重力戦線は北米（あと一応、東アジア）だけとなり、連邦軍は勢いに乗る形で北米を攻略しようと目論み、旧メキシコ北部、旧カナダに戦力を集め続けている。

ガルマとしてはここでユーリ少将を見習う形で北米方面軍の撤退と自身と残る部隊の降伏作業を進めたかったのだが、流星にジオンの王族である自分が敵の手に渡れば外交的にかなり不味い事態となるので、この考えは一旦保留し、北米方面軍の戦闘準備を整えることを優先した。

感染地域に割かなければならない兵士のことを考えると兵力的には色々問題はあったが、幸い、補給は潤沢にあり、全面戦闘に突入してもある程度は戦えるし、こちらを攻めている間にジャブローが攻略されればこちらの勝ちが決まる。

そんな算段を立てながらガルマは配下の北米方面軍に戦闘準備を整えさせていたのだが、その矢先に連邦が休戦を申し出てきたのだ。

「・・・休戦の理由は？まさか、こちらに降伏の時間を与えてやろうとということではあるまい」

ガルマはダロタにそう聞く。

何処ぞの戦車乙女のチビツ子隊長ではあるまいし、屈辱的な降伏の機会を与えるために休戦の時間をやろうなどという馬鹿な真似（実際、そのチビツ子隊長は自らが与えた休戦期間中に態勢を整えた対戦相手に敗北した）を本物の軍隊がやるとは思えない。

となると、何か休戦する理由がある筈だとガルマは考えていた。

「はあ、相手側の言い分では『一旦戦争を辞めて共にウイルス感染拡大を阻止したい』との事でしたが・・・」

「・・・どういうことだ？」

ガルマは益々困惑する。

ウイルス兵器がばら蒔かれたのはもう1週間以上前の話であるし、そもそも連邦はついさっきまでこちらとの前線に兵力を集め続けており、明らかに攻勢の準備段階といった雰囲気を出していたのだ。

それを今更『休戦しませんか？』と言われても訳が分からない。

「何かの罠か？」

「分かりませんが・・・もしかしたら休戦と感染拡大阻止を口実に我々の領域内へと入り、そのまま休戦終了まで居座って休戦終了と同時に内外から挟み撃ちをするつもりなのかもしれません」

「そして、我々がその居座っている奴等を休戦期間終了前に手荒に追い出そうとすれば、それを戦闘行為と見なして休戦をこちらから破棄したという事にするわけか。なるほど、連邦ならやりそうなことだな」

鼻を鳴らしながらそう言うガルマ。

随分な言い草と疑いようであったが、今までの連邦の所業を考えれ

ば十分有り得る可能性だった。

「では、拒否しますか？」

「・・・いや、受け入れよう」

だが、ガルマが出した結論は意外にも休戦受け入れだった。

勿論、そう言う結論を出したのには理由がある。

北米方面軍は現在、感染地域封鎖に多数の兵士が割かれて居る状態であり、尚且つ感染を恐れて本国からの増援も期待できない有り様だ。

このまま拒否したら、感染地域を封鎖しながら北と南の2方面から来る膨大な兵力を持つ敵と戦わなければならないという無理ゲーを強いられることになる。

そうなったら北米方面軍は一環の終わりであるので、それを避けるためにも交渉は行うべきだ。

加えて、どんな思惑があるにせよ、ウイルスの拡大阻止を休戦の理由としているので、もしかしたら交渉次第ではウイルスのワクチンも交渉で手に入れられるかもしれない。

となると、話くらいは聞いておくべきだろうとガルマは考えていた。

「よろしいのですか？」

「ああ。怪しいのは確かだが、こちらから一方的に拒絶するのも不味い。それに我々が苦しいのも確かだしな。取り敢えず、ここは交渉だけでもしてみよう。それで敵からの休戦の申し出は通信で行われたんだよな？」

「は？」



「だったら、詳しい休戦交渉を私がしてみよう。ダメだったら改めて拒絶する」

「分かりました。それでは通信室の方へお越しく下さい」

「ああ、分かった」

ガルマはそう言いながら席を立ち、ダロタに案内される形で通信室へと向かった。

◇地球・ルナツー間宙域　ペガサス　格納庫

「しかし、地球に残った奴等、大丈夫かな？」

格納庫で自機の整備を終えたバーナード・ワイズマン伍長は同じく自機の整備を終えていた野比のび太特務准尉とドラえもんに向かつてそう言う。

連邦軍の侵攻と共にペガサス隊は脱出する欧州方面軍の部隊の殿部隊として残されたが、ペガサスそのものの装甲の厚さと搭載されているミノフスキークラフトを駆使した結果、最後のHLVが打ち上がった後にどうにか宇宙へと脱出することに成功する。

その後は命令によってルナツーへと向かっていたが、バーニイは地

球に残されて降伏した筈のペガサス隊の乗組員達がその後どうなったのか気になっていた。

「・・・連邦がどうかしてくれろと信じるしかないですよ。僕達には手の打ちようが無かったですから」

のび太は悔しげな顔を浮かべながらそう答える。

11月28日のあの日、のび太の他にも船外作業で救助活動に出ていたペガサスの乗組員は大勢居た。

勿論、バーニイもその一人だ。

だが、その乗組員達はのび太やバーニイのようにモビルスーツやプチモビに乗って作業をしていなかった者も大勢居り、しかもあの時の状況からペガサスでの収容も間に合わなかった為、彼らは空襲を凌げそうな建物の影へと退避したが、それ故にばら蒔かれた件のウイルスに感染してしまい、最終的にペガサスの乗組員の3分の1が死亡、あるいは入院する事態となってしまった。

そして、その入院した仲間達は感染の原因となるということで、地上への放置を余儀なくされ、降伏したユーリ・ケラーネ少将と共にその身柄を連邦軍に預けることとなっている。

幸い、ペガサスの同型艦であるホワイトベースは原作でもこの世界でも正規人員の大半が戦死した状況でも運用できた艦であるため、このペガサスも残り3分の2の人員だけでも問題なく運用されている。

しかし、ウイルスをばら蒔いた原因である連邦に地上に残った仲間達の身柄を預けるといふ方針には当然のび太も納得がいつていなかったのだが、そのウイルスに対処できるのが連邦だけという現実の前にはどうしようもなく、のび太は悔しい思いを抱いていた。

そして、そんな思いを抱いていたのはなにもものび太だけではない。

（「お医者さんカバン」が有れば・・・）

ドラえもんはポケットの中にお医者さんカバンが無い事実を恨ん

だ。

お医者さんカバン。

それは未来の子供がお医者さんごっこのために使う秘密道具であり、ドラえもん達の世界の22世紀では子供の遊び道具の1つにすぎない。

しかし、秘密道具というチートアイテムの1つに数えられているだけあってただの玩具とは訳が違い、実際に病気を治すことが可能であり、それこそ結核という重い病気から、地球とは全く別の星に居る生物の治療まで行いう事が出来る。

つまり、この秘密道具で治せない病気はほとんど無いと言っても良く、今回の感染騒ぎもお医者さんカバンが有れば容易く治めることが出来たかもしれない。

だが、現実にはその道具はポケットの中にはない。

その為、ドラえもん達はウイルスに感染して亡くなっていく者達を指を加えて見ているしかなく、特にお医者さんカバンをこの世界に来る直前まで持っていたドラえもんは、今までの大冒険ではなかっただろうしようもない無力感に苛まれていた。

「・・・そうだな。まあ、そう考えるしかないよな。それはそうと、この艦も随分寂しくなっちゃったな」

バーニイはそう言いながら、ペガサス隊編成時より明らかに人が少なくなつた格納庫を見回す。

前述したように、この艦の運用人員は3分の2まで減っており、特に殿部隊として連邦の攻勢を防いでいた際にペガサス隊の搭載されていたモビルスーツはその殆どがやられてしまい、生き残ったのはのび太のガンダム改とバーニイのジムⅢの2機だけだ。

撃破された機体に搭乗していたパイロットの生死についてはよく分からないが、状況から考えるに殆どが戦死していることは間違いない。

「ええ、まったくです」

のび太はバーニイの感想に同意した。

戦争で人が死ぬから仕方がないとはいえ、やはりつい最近まで生きていた仲間が次々と死ぬのは堪える。

仲間を失った哀しみによって神経は磨り減るし、次は自分の番かと怯えてしまうからだ。

だが、それでも死んだ人間達に報いるためには前に進むしかない。

(もうおそろしくこの戦争も長くない。どっちが勝つにしても、死んでいった人達に顔向け出来るような戦いにしないとね)

それが死んだ人間に対して自分が出来る唯一の弔いだ。

のび太は目の前で死んでいった伍長やタリアの顔を思い浮かべながら、そんな考えを抱いていた。

UCC0079年 12月9日 感染の広がり

◇宇宙世紀0079年 12月9日 サイド3 総帥府

「これは・・・不味いな」

ギレンは一部が感染地帯を示す赤色に染められている北米の地図を見ながら背筋が凍り付くような感覚を覚える。

現在、北米は3日前のガルマ直々の交渉によって1週間の休戦期間を設けており、一時的ではあるが戦闘的な意味での緊張状態は緩和されていたのだが、一方で医療的な意味での緊張はとんでもないほどに高まっていた。

「まさか、旧カナダと旧メキシコにこんなにも早く感染が広がるとは・・・」

予想していなかった訳ではない。

旧カナダは感染元の地である旧アメリカ東海岸と陸続きであった上に、東海岸の北側の封鎖は兵力の余裕の無さと連邦軍の存在を気にして封鎖は全く行っていないかつし、旧メキシコの方に至ってはカリブ海に展開していたジオン軍が大西洋大津波によって全滅してしまった為、哨戒網は穴だらけになっており、一応こちらにやって来る感染者が乗ると思わしき船や航空機は全てメキシコ湾の海上で撃破しているが、逆に出ていく船や航空機に関しては色々と余裕がなかった事から『去るもの追わず』の姿勢を取っていた。

つまり、ジオン軍はメキシコ湾と旧アメリカ東海岸の西側の区域封鎖以外は感染拡大阻止をろくに行っておらず（と言うより、行いたくとも出来なかった）、旧アメリカ東海岸から北上してきたり、カリブ海を通って連邦勢力圏である中南米などに感染者達がやって来る可能性は十分に存在していたのだ。

そして、案の定、やって来た感染者達に連邦軍は保護し、ウイルス

のワクチンを打ったのだが、ここで思わぬ誤算が出る。

なんと懸念していた変異ウイルスが早くも発生し、それが感染爆発を引き起こしてしまったのだ。

旧アメリカ侵攻の準備を進めていた連邦軍はこの報告を聞いて慌てることとなり、急遽ジョン軍と休戦をすることに決め、その結果、3日前の休戦が成立したという訳だった。

「幾らなんでも変異ウイルスが出てくるの早すぎだろ。まだ2週間と経っていないんだぞ」

ギレンはそう言いながら頭を抱える。

そう、アフリカ方面軍によるウイルス散布からまだ時間は2週間と経っていないのだ。

にも関わらず、こんなにも早くワクチンの効かない変異ウイルスが出てくるのは流石のギレンでも予想外すぎた。

これでは交渉で手に入れたというウイルスのワクチンを量産したとしても迂闊には使えない。

「さて、どうする？連邦は滅菌作戦を取っているようだが、我々がそんな事をしてしまったら只でさえ低くなっている北米方面軍の戦意は更に低下してしまう」

既に連邦軍は滅菌作戦によって変異ウイルスの感染者を文字通りの意味で焼き払っている。

どうやら休戦期間が1週間と短かったのは、滅菌作戦を行えば、短期間で感染を抑えることが出来るという目算を立てていたからだろうだ。

確かにこれならば短期間で感染拡大阻止は行えるだろう。

こういった感染爆発を引き起こすウイルス相手には感染元である人間を焼き払ってしまうのが一番手っ取り早いからだ。

まあ、非人道的ではあるが、逆に言えばそれを除けばこれ以上有効

な手はないと言っても良い。

しかしながら、ジオンには良くも悪くも連邦と同じことは出来なかった。

何故なら、何度も言うようにジオンが北米の住民に受け入れられているのはジオンが北米の住民を優遇しているからだ。

しかし、ここで滅菌作戦などをしてしまえば、北米の住民の支持を失ってしまい、反ジオン勢力によるゲリラ活動が復活してくるだろうし、そうなれば占領地帯の不安定化を招き、最悪の場合、感染阻止の失敗という本末転倒な事態を引き起こすかもしれない。

「そうになると、従来の方針を維持するしかないが、それも難しいんだよな」

実のところ、軍によって封鎖されている筈の東海岸の西側ですら感染が拡がり始めている。

これは封鎖に投入する兵力が封鎖地域の広さに対して少なすぎた為、封鎖の穴が小さいながらもあちこちに出来てしまい、少数の難民がそこを通る形で封鎖線を突破、その後、町に辿り着いて感染を広げるといった事態を引き起こしているからだ。

もつとも、今のところは曲がりなりにも封鎖されているだけあってそこまで極端に拡がっている訳ではないし、拡がりかけても迅速に対処して感染を押し留めているが、これを何時までも続けるのは難しいということ現場に居ないギレンですら容易に想像がつく。

なので、早めに何とかしなければならぬのだが、有効な手が思い浮かばないのだ。

・・・いや、厳密には手は一つだけあった。

それはユーリ少将がやったような無事な味方だけを撤退させ、残った者を降伏させるというものだ。

勿論、ガルマを捕虜にするわけにはいかないのですが、副官のダロタ中尉にその任を任せることになるだろうし、連邦軍も馬鹿ではないので欧州方面の二の舞を演じてくれる可能性は低い事を考えれば、何か工

夫を凝らす必要は有るだろうが、その事を考慮しても追い詰められた現状ではこれが一番の最善策だった。

しかし、問題なのはおそらくガルマはこの案を承認しないであろうということだ。

当然だろう。

ガルマにとって北米方面軍の兵士達は10ヶ月間もの間、共に戦ってきた仲間なのだから。

「となると、他の方針を考える必要があるな。しかし——」

それが思い浮かばない。

そもそも根本的な事を言ってしまうえば、時間があまりにも無さすぎるのだ。

もっと時間が有れば、ジャブローを攻略して戦争を無理矢理終結させるという一番手っ取り早い手段を取ることが出来た。

しかし、休戦から既に3日が経っており、残る休戦期間は4日しかないという現状では、そのような手段を取ることが不可能に近い。

いや、無理をすれば取れるかもしれないが、その結果は『攻略失敗』という形になって返ってくることとなるだろう。

「せめてジャブロー攻略までの時間が稼げれば……」

そう呟きながら、ギレンは地図をチラリと見る。

(旧カナダや旧メキシコに軌道爆撃……は駄目だな。範囲が広すぎるし、そもそもあの兵器を作るのに大分リソースを使いすぎて爆弾の数そのものが少ない。それに民間人に被害を出さない爆撃地点を計算するまでには時間が掛かる)

そう、軌道爆撃の為の爆弾はアウステルリッツの際にほぼ全てを使ってしまった、一応この1ヶ月間で補充はされたものの、その数は1



00 発弱程しかない。

これでは流石に旧カナダの広大な戦線に満遍なく爆弾の雨を降らすことは不可能だし、そこに旧メキシコ中部が加わるとなれば、尚更爆撃の効果は薄くなってしまう。

いや、そもそも爆撃地点の計算を短時間でやらなければならぬ関係上、民間人にも大きな被害が出てしまう可能性が高く、そうなれば後々の禍根ともなりかねない。

しかし、同時にこのまま手をこまねいていても北米方面軍に壊滅的な被害が出てしまうのも確かだった。

「ジャブロー攻略用の兵器はもう出来たから、もういつそのこと連邦軍がジャブローに引きこもってくれば・・・」

そう言いかけた時、ギレンはあることに気づいた。

「そうか。ジャブローに爆撃するという手があったな」

ジャブローへの爆撃。

それは原作でも北米から空爆という形で行われており、この世界でも回数は少ないものの、度々ジャブローに対する空爆が行われている。

しかし、原作では空爆を受けてもジャブローのモグラ達は平然としていた為、転生者達の間ではジャブローへの空爆はあまり意味がないと見込まれており、この世界の北米方面軍は積極的な空爆を行っていないかった。

その判断自体は間違いだとは思わない。

厚さ1万メートルのジャブローの岩盤を貫ける実弾兵器などジオンには存在しないし、唯一、貫けるアプサラスのメガ粒子砲はジャブロー上空に散布された変質的と言って良いまでのビーム攪乱幕によって事実上、無効化されていたのだから。

だが、軌道爆撃だったらどうだろうか？

ビームを火薬代わりにしている以上、ビーム攪乱幕の効果によつて爆発の威力は確実に落ちるだろうが、それでも大気圏から落とされる爆弾の質量による衝撃は物凄く、貫通はできなくともジャブローを揺らすくらいの効果は有るだろう。

すると、どうなるか？

先の大西洋大津波のこともあつて神経がピリピリしている連邦の閣僚達は動揺し、兵力をジャブローに戻すようになる。

無論、連邦の高官は臆病ではあつても馬鹿ではないので、軌道爆撃を受けてもジャブローが大丈夫であると分かれば、兵力の配置を元に戻そうとするだろう。

だが、兵力をジャブローに戻してから兵力の配置を元に戻すまでの間、ジオンは貴重な時間を得ることが出来る。

更に言えば、仮に攻略予定日である12月31日にジャブローに戻された兵力が配置されたままだとしても、あの兵器ならその部隊共々吹っ飛ばすことが可能だった。

(問題はこの軌道爆撃をやるタイミングだな。今すぐやるべきか、それとも休戦失効の12月14日まで待つべきか)

とは言つても、結論はほとんど出ている。

ガルマが結んだ休戦条約はあくまで北米方面に限定してのもので、一応、宇宙からギレン達が攻撃するのは条約違反ではないが、後でワーワー言われるのは確実だし、なるべく後々まで響くような禍根を残したくないギレンとしてはあまりやりたくはなかつた上に、そもそもやるメリツトも薄い。

それに爆弾の数も少ないので、それを少しでも揃えるためにも、やはりここは休戦期間終了を待つべきだとギレンは考えていた。

(さて、そうと決まれば早速ドズルと打ち合わせをしなければな)

ギレンはそう思いながら、秘書官であるセシリアを呼ぶために机の

上にある電話に手を伸ばした。

UC0079年 12月13日 反乱の予感

◇宇宙世紀0079年 12月13日 ルナツー ペガサス

「うくん」

ルナツーに停泊するペガサスの一室。

そこはドラえもんと共同で使っているのび太の部屋であったが、ここでは何故かのび太が地図とにらめっこをしながら難しい表情をしていた。

「どうしたの？のび太君。珍しく難しい顔をしているけど」

若干毒の含んだ言葉を混ぜながら、ドラえもんはのび太にそう尋ねる。

それに対して、のび太は『どういう意味だ!』と一瞬ドラえもんを睨むが、それが日頃の自分の行いのせいだと理解すると、若干顔をひきつらせながらもすぐに矛を納めてこう言った。

「いや、なんか地図を見て思い出したんだけどさ。こつちがジオン軍占領した地域には中国も含まれる筈なんだけど、全然話を聞かないなって思っ  
て」

「ああ、そう言えばそんなことが有ったような気がするね」

のび太にそう言われて、ドラえもんも東アジアに展開された重力戦線の事を思い出す。

東アジア占領を目的とした第五次降下作戦が行われたのは、ドラえもんがこの世界に来た直後。

その為、ドラえもんこの世界で東アジア戦線が展開されたといった感じの内容のニュースを見ていたが、その後はバツタリと聞かなくな

り、正直に言えばいまのび太に言われるまで東アジアの戦線の事をすっかりと忘れていた程だ。

しかし、その事をドラえもんはそれほど重要だとは思っていない。なにしろ、所詮は自分達が全く関わらなかつた戦線の情報にすぎなかつたのだから。

まあ、それでも友軍ではあるので多少の心配はしているが、逆に言えばそれだけで特別な感情が有るわけではなかつた。

「でも、なんでそんなことを気にするんだい？もしかして、東アジアに行けっという命令が来たとか」

「いや、そうじゃないんだけどさ。．．．なんか嫌な予感がするんだよね」

「嫌な予感？」

「うん。なんか近いうちにとんでもなく面倒なことが起きそうな予感が、ね」

のび太はそう言いながら、再び地図へと視線を向ける。

この予感がしたのは、ついさつき偶々地図に目を向けてからだつた。

最初は気のせいかとも思ったが、何故かどうしても気になってしまい、のび太の視線は地図に釘付けになっていたのだ。

そこをドラえもんに心配されて声を掛けられたのだが、地図から一瞬だけ目を離れた今になつても、地図を見てから感じた「嫌な予感」が消え去る気配はない。

のび太はこれをニュータイプとしての勘という奴かもしれないとは思つたが、何故この場所で嫌な予感を感じるのか全く分からなかつた。

(東アジアに何か有ったっけ?)

そう思いながら、のび太は東アジアの視線を再度よく見てみる。

(日本が有ったけど、ここからは嫌な予感がしないな)

日本。

それは前の世界でののび太の祖国であり、故郷。

なので、地球では一番のび太に縁がある場所と言えたのだが、そこからは嫌な予感はいらない。

(うーん。やっぱり、この中国の辺りからするな。でも、僕には中国にあまり縁はないし)

のび太にとって中国はあまり縁のない地域だ。

いや、厳密には大冒険の際にヒカリ族を移民させる過程で関わったが、それは前の世界、それも7万年前の過去の話だ。

関係しているとはとても思えない。

(・・・やっぱり気のせいなのかな。もしかして勝手に僕がニュータイプ  
の勘だと錯覚しているとか)

そう思ったのび太だったが、その時はドラえもんはあることを思い  
出してこう言った。

「あれ? そう言えば東アジアって、あのメイって女の子が居る場所  
じゃなかったっけ?」

「あつ・・・」

のび太はドラえもんに言われる形でその事を思い出した。

そう、メイは第五次降下作戦に参加すると8月のルナツーから出発する前夜に言っていたが、第五次降下作戦の降下先は言うまでもなく東アジアだ。

加えて、かつてのび太が参加した第三次降下作戦から見ると、よっぽどの事態が無い限り、降下してから宇宙に戻されたり他の戦線に配置されるということはまず無い。

ということは、まだ東アジアに居る可能性があった。

「うくん。確かにメイの事も心配なんだけど・・・まだなんかしつくりと来ないな」

だが、のび太はその事に気づきながらも、尚もしつくり来ていなかった。

勿論、メイの事は心配だ。

メイはのび太がこの戦争に参加する切っ掛けとなった少女であり、この世界で会った人間の中で一番思い入れがある人物なのだから。

いや、それどころか、恋心に似た感情すら宿している。

もし彼女に拒絶されたら、のび太は戦意を完全に喪失してしまうだろう。

だが、のび太はもつと大きな事が東アジアで起きるのではないかと予感していた。

そう、例えば――

「・・・もしかしたら、反乱でも起きるのかもしれないね」

「反乱?」

「うん、なんかそんな気がする」

「・・・アハハ、流石にそれは無いよ。のび太君も知ってると思うけど、東アジアは最前線だよ。そんなところで反乱を起こしてなんの意味

があるって言うのさ」

ドラえもんはそう言つてのび太の発言を笑い飛ばす。

実際のところ、仮にのび太の言うようにアジア方面軍が裏切つたとしても、彼らの居る東アジアは最前線の位置に配置（もつとも、地球方面軍はどの戦線も最前線であつたが）された軍団であり、下手をすれば裏切つた途端に敵である連邦と反逆者を討伐しに来たジオン軍に挟まれる可能性すらあるのだ。

まあ、アジア方面軍が連邦に内通していたりすれば話は別であるが、この21世紀の更に先の時代であるこの宇宙世紀の時代にそんな戦国時代でやっていたような敵と内通して自分達の祖国を裏切るなどといった行動をする軍が居るとは到底思えないというのがドラえもんの意見だつたが、ドラえもんより先にこの世界に来て戦争に参加しているのび太は違う意見を持っていた。

（味方が違う派閥だからって増援を送らないようなところだからねえ、ジオンは。味方だからって何処まで信用できるかは怪しいな）

のび太はオセアニア戦線に居た時に自分の配置されていたガダルカナル島は最前線で重要な場所であつたにも関わらず、守備隊の指揮官とオセアニア方面軍司令の派閥が違うことから、人員の補充がほとんど行われなかつたという経緯があり、その経験からのび太は味方だからと言つて一概に信用するのは危険だと考えていた。

勿論、同じ前線で戦う人間については命を賭け合う仲間ということ で全幅の信頼を寄せているが、後方の人間については今一つ不信任感が拭えていなかったのだ。

そして、そこまで考えたところで、のび太の脳裏にある可能性が思 い浮かぶ。

（もしかして、ジオンって結構ガタガタなんじゃ・・・）



それはゾツとする可能性だった。

しかし、有り得ない可能性ではない。

そもそも組織というのは、どんな組織であつても組織規模が大きくなれば大きくなるほど、様々な派閥やらが結成されてしがらみが大きくなる。

まあ、よつぽど腐っていない限りはそれでも組織としてちゃんと機能するのだが、逆に言えば腐っていたり派閥毎の溝が大きくなつていたりすると機能不全となるのだ。

そして、のび太はダイクン派とザビ派という派閥が対立していることは知っており、それが今回の嫌な予感に関係しているのではないかと思つたが、慌ててそれを否定する。

(いや、まさかね。少なくとも今は戦争中だし、そんな馬鹿な真似をするわけもないか)

のび太は嫌な予感を振り払うようにそう考えたが、それはあながち現実逃避な考え方でもない。

何故なら、戦争という差し迫った危機は多少の種族間のいざこざを吹き飛ばしてしまう効果が有るからだ。

実際、大冒険の人魚族と海魚族の戦いの時も、人魚族とのび太達地上人は仲違い(と言っても、人魚族の地上人への一方的敵視だが)を起こしながらも海魚族という差し迫った危機を前に手を組んだが、もし海魚族と戦争という事態になつていなかったら、人魚族と地上人の和解はもつと時間が掛かっていただろう。

それを考えれば、連邦という明確な敵があるうちは反乱が起こる可能性は低い。

まあ、カグヤ星の時のように長年に渡つてダラダラと戦争を続けているのであれば話は別なのだろうが、この戦争は始まってからまだ一年と経っていない以上、戦争中に反乱が起こる可能性はまず無いと言つても良いだろう。

(となると、反乱が起こるタイミングは戦争が終わった時か。戦争中に起こるよりはマシだろうけど、そんなことが起こって欲しくはないものだなあ)

平和な時の方が反乱が起こる可能性は意外なことだが結構高い。

現にのび太が知る中でもバウワンコ王国は平和な時にダブランダールがクーデターを起こしている。

そして、本当に東アジアのジオン軍が反乱を起こした時、自分はメイが居るかもしれない反乱軍と戦えるのだろうか？

のび太にはそのような迷いがあった。

(ああ、止めだ。止め。こんな難しいこと僕が考えることじゃない)

のび太は段々と難しくなってきた話に嫌気が差したのか、その“嫌な予感”について考えるのを止めた。

——だが、後にのび太はこの嫌な予感についてこう言う事になる。

『戦争中に反乱を起こさないとという予想は合っていたが、むしろ、その予想が外れて戦争が起こっている間に反乱を起こしてくれた方がマシだったかもしれない』と。

UC0079年 12月17日 4代目連邦軍総司令官の憂鬱

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0079年 12月17日 南米 ジャブロー

「やれやれ、連邦軍最高司令官の仕事はこうも大変なものなのだな」

開戦以来、早くも4代目となった連邦軍総司令官の座に着いてしまったゴツプ大將は憂鬱げな顔でそう言う。

エルラン大將が例の大西洋天津波で戦死してしまった後、ゴツプ大將は暫定的に現在の地位に座ることになったのだが、ゴツプ自身はこの地位は自分の手に余ると感じており、自分が就任を断る際の対案としてジョン・コーウエン少將を中將に昇格させて連邦軍総司令官の座に着かせるべきだと連邦政府の閣僚達に提案したのだが、流石に中將が最高司令官だと階級上の示しがないし、大將にするにしてもなんの理由もなく2階級昇進だと無理がありすぎるといふ事で却下された。

・・・この考え方は平時であれば間違いではない。

目に見える戦果を挙げる機会の存在する戦時と違い、平時においては戦時のような分かりやすいスピード出世の理由は基本的にないため、そのような人事をすれば反発する人間も出てくるからだ。

だが、今は言うまでもなく戦時であるので、出来る人材はどんどん階級を上げていくべきだとゴツプは考えていた。

(いや、それは閣僚連中も分かっているか)

そう、この戦時下では実力主義で人事を行うのが一番正しいということは連邦政府の閣僚達も分かっているのだろう。

しかし、ジーン・コリニー中將の裏切りによって誰を信用して良いか分からず、疑心暗鬼となっており、それならば多少指揮に不安が

あつても比較的信用できる人材を連邦軍最高司令官の座に着けた方が良い。

閣僚達はそのように考え、そして、その信用できる人材がゴツプしか居なかつた。

それだけの話なのだ。

「……こういう形で信用されたくはなかつたねえ」

ゴツプは顔をひきつらせながらそう呟く。

しかし、ゴツプも伊達に大将となつている訳ではなく、愚痴を溢しながらも与えられた仕事はちゃんとこなしていたのだが、それでも幾つか処理が難しい案件も存在する。

それは主に3つ。

1つ目は将校の人材不足。

兵力については3日前にジオン軍が行つた軌道爆撃（ちなみにこの時の爆撃でウツディ大尉が戦死している）に怯えた連邦政府閣僚がある程度の戦力をジャブローに戻すように命じたお蔭で、十分すぎるほどの戦力がジャブローに集まつていたのだが、大西洋大津波によつてジャブローの一部が水没した際にジャブローに勤務していたエルラン大将やジュダック中佐を始めとした幕僚の大半が洗い流されてしまったのだ。

その為、将校クラスの人材の損失は保守派・改革派問わずに酷く、おまけに保守派に至つては大西洋大津波の前にも大量の将校がグリーン・コリニー率いるアフリカ方面軍に着いていつてしまったこともあつて将校が激減しており、この当時はまだ大佐にすぎないジャミトフ・ハイマンが残つた保守派を纏めているような有り様だった。

改革派の方はジョン・コーウエン少将が残つていたが、元々改革派は保守派に比べて数が少なく、更には前述したように大西洋大津波によつて洗い流されてしまった人材も少なくなき、完全に主導権を握つてはいない。

もつとも、改革派の代表がジョン・コーウエン少将、保守派の代表

がジャミトフ・ハイマン大佐といった感じになっているので、その両者の階級を考慮すれば相対的に改革派の権威が増したという見方も出来なくはなかった。

まあ、どちらが主導権を握るにしても、現状では敵対派閥の力を借りないと戦争の遂行どころか、組織の維持すら難しくなるのだが。

そして、2つ目の悩みだが、それは保守派と改革派の今後の方針についての対立だ。

幸いと言って良いべきか、両者の人材が大量に洗い流されたお蔭で両者の派閥は内部での意見の対立が少なくなっており、両派閥内部での方針の決定はスムーズに終わった。

が、それはあくまで両派閥内部での話であり、改革派と保守派という派閥間での対立は依然として続いている。

そして、両者の代表であるジョンとジャミトフがゴツプに提案してきた方針だが、簡潔に纏めるところなる。

ジョン・コーウエン・・・アフリカ方面軍と協力してジオンとの戦争を続行しろ（意識）。

ジャミトフ・ハイマン・・・ジオンと講和してでも連邦の裏切り者であるアフリカ方面軍をまず潰せ（意識）。

・・・つまり、改革派の主張がジオンとの戦争続行、保守派の主張がアフリカ方面軍への対処を優先しろと言っているわけだ。

親スペースノイド派の多い改革派がジオンとの戦争続行を主張し、反スペースノイド派の多い保守派がジオンとの講和を主張する光景は、一見するとかなり珍妙に思えるが、両者の内側を覗いてみると意外とそうでもない。

元々、親スペースノイド派はスペースノイドの権限の拡大や参政権の付与を主張していたのだが、そういった主張はあくまで『連邦内部での待遇の改善』であり、その外に出ようとするジオンのような存在は決して許容できないのだ。

もし許容できていれば、原作の南極会談の際に改革派の代表であるレビルが『ジオンに兵無し』演説をすることはなかっただろう。

まあ、これは原作の一週間戦争の際に行ったジオンの大虐殺も関係

していると思われるので、一概に改革派がジオンの存在を全てを認められないかどうかは断言できないのだが、少なくともこの世界の現在の改革派を牛耳っている男（ジョン・コーウエン）は存在を認められないらしかつた。

そして、もう一方の保守派の首魁であるジャミトフ・ハイマン大佐であつたが、この人物は原作でティターンズを結成したことからよく勘違いされがちであるが、彼は地球至上主義者であつてアースノイド至上主義者ではない。

要するに彼の崇拜する対象は“地球そのもの”であつて地球人類ではないのだ。

その為、原作の一年戦争時代は地球の大地を踏み荒らすジオンの存在が許せずに徹底的な反スペースノイド強硬派となつていたが、一年戦争が終わると今度は未だに地球の大地に居座るアースノイドが許せなくなつてきた。

そして、デラーズ紛争を切っ掛けにティターンズを設立。

最終的には地球連邦そのものを粛清して地球人類を全て強制的に宇宙に打ち上げ、地球環境を保全するというのがジャミトフの目的だったのだが、その目論みはジャミトフがバスクに部隊の指揮権を預けてしまったことで初っぱなから瓦解してしまう。

そもそもティターンズの中で地球至上主義を唱えているのはあくまでジャミトフだけであつて、構成員の殆どはアースノイド至上主義者。

おまけにジャミトフの思想は知られてすらいないのだ。

まあ、こんな思想を知られてしまったら、地球連邦の前にジャミトフが粛清されるのは間違いないので、広めることは出来なかつたとも言えるのだが、ともかくそういうわけでジャミトフの思想を知らずに部隊の指揮権を預けられたバスクはアースノイド至上主義思想に則つて30バンチ事件を発生させ、反地球連邦組織エウーゴの結成という事態を引き起こしてしまう。

これが誤算の第一歩だつたのだが、その後が発生したグリプス戦役によつてバスクが戦いを主導したり、シロツコが登場したりしたこと

で、ティターンズの指揮権は完全に両者に乗っ取られ、終盤には神輿程度の存在にしかならなくなってしまった。

その後、シロッコによって謀殺されてしまうという最期を迎え、ティターンズという組織そのものもそのシロッコがカミーユによって討ち取られたことによって完全に瓦解。

これによってグリプス戦役はエウーゴの辛勝に終わり、その直後にエウーゴとネオ・ジオンの戦いである第一次ネオ・ジオン抗争が起る。

というのが原作でのジャミトフとティターンズの末路であったが、この世界ではジャミトフの思想は一年戦争の途中までは原作と一緒だったものの、大西洋大津波によってジーン・コリニー中将が『現在進行形で地球環境を汚している存在』と認識すると、方針の変更を決意した。

またジャミトフに賛同していない保守派もジーン・コリニーという『保守派の汚点』を消し去りたいという考えがあり、その結果、利害の一致によって保守派はジオンとの講和とアフリカ方面軍の討伐という方向で考えが纏まっていたのだ。

しかし、改革派と保守派の主張は言うまでもなく正反対であり、尚且つどちらの主張を通すにしても現状では反対側の派閥の力を借りなければならぬ為、彼らの上に立つゴツプが上手く調整と決定を行わなければならない、そこに『本来の後方職＋大量の将校が死んだこと』によって増えてしまった書類仕事をしなければならぬ事実も合わせ、彼の胃と心に盛大な打撃と負担を与えていた。

そして、最後の3つ目。

それは3日前に行われた軌道爆撃の意味だ。

あの爆撃は連邦軍のジャブローを揺らすような効果があり、前述したように連邦閣僚の怯えとジャブローへの戦力の集中を呼び起こしたが、連邦の最大拠点への空爆にしては爆弾の数が少なすぎた為、ゴツプは別の狙いがある事を早くから察していた。

それが何であるかは明確には分からなかったが、もしかしたらジャブローに戦力を集中することが目的なのではないか？

そのような疑いをゴツプは持っていた。

(そもそも入り口の位置は4ヶ月くらい前に既にバレている。その間、なにもしてこなかったということはジオンも対ジャブロー用の兵器を何か用意している可能性が高いな)

そう、そもそもの話、ジャブローの位置は既に4ヶ月も前にバレている。

しかし、ジャブローは地下要塞。

入り口がバレたからと言って入るところは限られており、無理に攻略しようとすれば大きな被害が出る事は当然ジオンも予想しているだろう。

そんな時にジオン軍が取る手段はゴツプの考える限り、2つしか思い浮かばない。

1つは4ヶ月前のように特殊部隊を潜入させて内と外から連邦軍を挟み撃ちにすること。

だが、それを取る可能性は低い。

何故なら、一度破壊工作を行ったことで連邦軍の警戒は以前よりも嚴重になっていることくらいはジオン軍も想定しているであろうからだ。

現にこの4ヶ月間でジャブローに入ろうとしていたジオンの工作員を何人が捕まえていたが、その中に集団で活動している者は居なかった。

となると、ジオン軍はもう1つの方である『何らかの質量攻撃を行ってジャブローに強引に穴を開け、そこから部隊を降下させて穴に向かって侵攻させる』といった選択肢を取る可能性が高い。

そして、この4ヶ月の間に侵攻してこなかったのは、まだ対ジャブロー用の兵器が完成していなかったため。

更にジャブローに戦力を集中させるように仕向けたのも、その質量攻撃によって連邦軍の戦力を纏めて吹っ飛ばし、戦後の連邦軍の力を出来る限り削ぐためだと考えれば辻褄が合う。



「とは言え、政治家連中がジャブローから逃げ出すと決断してくれない限りは私に出来ることはほとんど無いな。・・・まあ、仕方がない。こうなったら極東州の首相をやっているあの男に連絡を取って、戦後の後始末を任せるとしよう」

ゴツプはそう呟きながら、連邦がジャブローを攻略されて負けた後の戦後について考え始めた。

U C 0 0 7 9 年 1 2 月 2 0 日 ジオンの限界

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0 0 7 9 年 1 2 月 2 0 日 サイド3 総帥府

「兄貴、はつきり言って今のジオンの経済状況はかなり不味い」

総帥府のギレンの元に訪れたサスロは開口一番にそう言った。

「仮にジャブローを攻略して今月で戦争を終わらせたとしても、この借款によってジオンは5年は苦しむことになる」

そう、現在のジオンは各サイドに借款を引き受けて貰うことによって戦争経済を成り立たせており、生産力やそれに伴う経済を支えている状態だ。

その結果、ジオン国民の生活も戦前と比べて少し苦しい生活を強いられる程度で済んでおり、原作と比べると戦時下の国家にありがちな閉塞感はあまり無い。

そして、その対価としてジムIの友好価格での輸出（親ジオンを表明している一部のサイドではジムIIの輸出も行われている）などを行っていたのだが、どうやらそれでは到底足りなかったらしい。

「そうか。だが、戦争の終結も近い。MSの輸出対象を一段階繰り上げてジムII及びジムII改を各サイドに輸出、そして、親ジオン派のサイドにはジムIIIも輸出させる。それでなんとかならないか？」

ギレンはそんな提案を行う。

ジムIは既に各サイドに売却されて少なくともジオンの帳簿上からは在庫は全て無くなっている。

ジムIIは戦争初期で活躍した旧式ではあるが、未だジオンでは数的主力な兵器ではあるので、本格的な輸出対象とされるとそれなりに困った事態となるのだ。

しかし、それは戦争が長引けばの話であり、今月中に戦争が終結するならば今のうちに本格的に輸出対象として少しでも借金を減らした方が良いでしょう。

そして、ジムⅡが各サイドに本格的に輸出されると特別扱いでジムⅡを輸入することができていた親ジオン派のサイドが拗ねてしまうので、こちらには少数ではあるがジムⅢの輸出を許可する。

これならば当面の間は凌げるのではないかとギレンは考えていたが、それに対してサスは首を横に振る。

「確かにそれなら当面はなんとかなるだろうな。が、それでも数年は苦しむことに代わりはない。はつきり言って焼け石に水だ。もう一歩進める必要がある」

「具体的には？」

「敗戦した連邦にジムⅡで余った機体と大量のオツゴを高額で買い取らせ、ジムⅢを各サイドに本格輸出。そして、親ジオンを表明するサイドには量産型ガンダムを特別に輸出する。更に今月ロールアウトしたザムⅡを少数生産で終わらせる。これなら1年で借金は全て返せる」

「それは・・・」

その過激とも言える提案にギレンは顔をひきつらせた。

サスの提案を飲んだ場合、確かに借金は1年で返せるだろうが、代わりにジオンに残るモビルスーツは数的主力がザムⅠとなり、それに少数生産されたザムⅡとエース機である通常型ガンダムが残る形となる。

一見、大分スッキリした感じとなるので戦後の軍縮を考えれば良い案のように聞こえるかもしれないが、それはギレンからすればあまりにも極端な状態になりすぎないように思えた。

そもそもザムⅠからして今年8月にロールアウトしたばかりの機体であり、まだ200機を少し越えた程度の数しかなく、少数生産されるザムⅡは当然の事ながらそれより数は少なくなるだろうし、通常型ガンダムに至っては本当に極少数しかない。

つまり、もしサスロの提案を全面的に飲んでしまえば、ジオンは精々300機前後程度しかMSを保有できなくなってしまうのだ。幾ら借金を返すためだとしても、戦後に訪れるであろう戦乱に対処する為にはこの数はあまりにも少なすぎる。

「サスロ、流石にそれは無理だ」

「何故だ？ジオンがある以上はスペースノイド間での戦争は起こる可能性が低いと思うんだが？」

サスロはそう指摘する。

ジオンが独立するにあたって懸念されていた可能性の1つはジオンが独立してスペースノイドの自治独立が成し遂げられた結果、連邦の権威が低下し、ガンダムV時代のようなスペースノイド同士の争いである宇宙戦国時代が始まってしまうことだ。

だが、これはジオンが力を残していれば問題ないと目されていたし、戦争に勝って連邦の宇宙戦力を制限すればまずジオンの優位は揺らがない。

確かに一時的にMSの数はかなり少なくなるだろうが、戦後の軍縮が必要であることは開戦前から言われていたし、いずれ予算に余裕が出てくれば数を揃えるつもりであった。

更に言えば、軍縮と言っても新型機開発の予算制限まで行うつもりはなかったもので、少なくともそれで数年は保てるだろうとサスロは考えていたのだ。

だが、ギレンはサスロの言葉に対してこう返した。

「確かにお前の言うとおり、ジオンがある以上は宇宙戦国時代なんて

ことは起こらないだろう。しかし、地球上での反抗勢力は多い。それ  
に場合によってはアフリカ方面軍への対処もジオンが行わなくては  
ならない」

そう、確かにジオンが力を持っている以上は数年の間は宇宙は静か  
になり、仮にジオン軍が戦う機会が有ったとしても、それは精々宇宙  
海賊が相手となる戦争と比べるとかなり小さな戦いとなるだろう。

しかし、一方で地球上の反ジオン勢力は当たり前前のことだがかなり  
多い。

加えて、原作ジオン残党のように敗戦を不満に思った連邦軍が地球  
上で反ジオン活動を続ける可能性があり、特に連邦軍の指揮系統を外  
れているアフリカ方面軍は纏まった数が存在している為、その処理は  
かなり面倒だ。

おまけにアフリカ方面軍の対処にあたるであろう連邦軍は相当疲  
弊しているので、短期間での戦いの終結もあまり期待できない。

そして、この時代はガンダムUCの時代と違って宇宙ではなく、地  
球の資源を頼る時代であり、連邦軍残党に暴れられるとそれらの資源  
が手に入り難い状態に陥ってしまうのだ。

そうなれば回り回ってスペースノイドの生活も苦しくなり、それが  
原因で新たな戦いの火種が燻りかねない。

その為、場合によってはアフリカ方面軍の処理をジオン軍が単独で  
やらなければならないケース（連邦軍と協力して行うという考えも  
あったが、つい最近まで戦っていた両勢力が隣り合わせで戦うと、い  
つ「不幸な事故」が起こるか分からない為、その案は退けられた）も  
十分に考えられた。

勿論、サスロの言うように各サイドにモビルスーツを盛大に売却し  
て、各サイドと協力する形で戦後の治安維持にあたらせるといふ案は  
一瞬だけ考えたが、彼らはまだモビルスーツを保有してから1年も  
経っていないし、そもそもジオンと違ってまともな軍組織すら発足し  
ていないので、むしろジオン軍の足を引っ張る可能性が高い。

義勇軍の時はジオン軍の傘下となる形で上手く運用できたが、戦後

は各サイドも自分達で独自に運用させると言ってくるだろうし、足並みは確実に揃わなくなる（実際、この世界でのアフリカ戦線は足並みが揃わなかったことによって短期間で崩壊している）。

更に言えば、スペースノイドの全てがジオンに賛同しているわけではないし、何処アサハイムその企業が軍需拡大を狙って宇宙での戦乱を煽つてくる可能性もあるので、それを抑止するためにもやはり一定の強大な武力の保有がジオンには必要だった。

「しかし、例のアクシズでの研究も結構予算を使っている。俺もあれの重要性は分かるから予算を縮小しろとは言わないが、やはり通常兵器の規模縮小はどうしても必要だぞ」

「分かっている。だからMSの売却については戦後処理がスムーズに行けばサスロの言うとおりにしてくれて構わない。しかし、やはり残るMSのことを考えると、ザムⅡの生産縮小はやはり危険だ」

「むう。・・・まあ、確かにザムⅡは数年は使える高性能な量産機だからな。それに肝心のMS売却を俺の案の通りしてくれるというなら、ここら辺が落としどころだが・・・なあ、兄貴。前にも言ったが、連邦から賠償金は取れないのか？」

「それについては開戦前にも話しただろう。賠償金というのは相手の態度を頑固にさせる」

ギレンはそう言ってサスロの提案を切って捨てる。

実はサスロはこの戦争で完勝に近い勝利を得た時に連邦へ賠償金を求めるという意見を唱えていた。

確かに多額の賠償金が取れば戦争の過程で各サイドに作るであろう借款を一気に返済できるので、ジオンの内政を担当しているサスロがそのような提案をするのも無理はない。

しかし、賠償金というのは場合によっては相手の態度を強硬にさせ

る可能性がある。

“賠償金を払った”という事実そのものが、その国の権威に大きく傷を付けるからだ。

実際、日露戦争の時のロシアがそうであったし、第一次世界大戦後のドイツのように後で復讐戦を挑んでこられるほどに恨まれる可能性もある。

まあ、それでも相手を徹底的に痛め付ければ賠償金を要求しても問題ないのだろうが、元々国力の少ないジオンが連邦をコロニー落とし無しでそこまでボコボコに出来るとは思えない。

その為、戦争に勝ったとしても賠償金は要求しないことに決めていたのだ。

・・・もつとも、賠償金を取らずに連邦にジオンの借款を押し付ける方法は一応存在しているが。

「そうか。分かった。無理を言って悪かったな。では、MSとオツゴの売却については俺のやり方に任せて貰うということで構わないか？」

「ああ、構わん。ただし、しっかり状況を見てからやるんだぞ」

「そこら辺は分かっているさ。じゃあ、俺は仕事に戻るよ」

そう言つてサスロは執務室から出ていこうとするが、その途中であることを思い出し、再度ギレンの方に向き直る。

「なんだ？」

「いや、そう言えば開戦前の例のプランなんだが・・・やはりAで行くのか？」

「・・・まだ考え中だ。だが、心配しなくとも戦争終結までには結論を

出すさ」

「そうか。まあ、そこは兄貴に任せるよ」

サスロはそう言い残すと、今度こそギレンの執務室から退室した。



UC0079年 12月24日 ゴツプの依頼相手

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0079年 12月24日 サイド<sup>リィア</sup>6

それはサイド2と同宙域であるL4宙域に存在するコロニー群であり、原作でもこの世界でも南極条約によって明確にされたフォン・ブラウンに並ぶ中立地帯として知られている。

一般的に中立というのは2つのケースが存在しており、1つが双方の勢力を拒絶する積極的中立。

そして、もう1つが逆に双方の勢力を受け入れて自分達の勢力内での戦争活動を制限する消極的中立だ。

この内、サイド6が取っているのは後者の消極的中立であり、原作では連邦・ジオン双方の艦艇を受け入れている。

更に原作ではジオンのニュータイプ研究所が存在したり、ガンダム・アレックスの製造場所であったりと、連邦・ジオン双方に良い顔をするという八方美人のような事をしていたが、この世界ではジオンのニュータイプ研究所がジオン本国に存在しているので、サイド6にはジオンの重要施設はこれといって存在しない。

しかし、親連邦派のサイド6高官によって連邦のMSがサイド6のとあるコロニーで極秘裏に製造されているという情報をジオンはい最近になって掴んでおり、その確認と場合によってはそのMSを破壊するためにサイクロプス隊とペガサス隊をサイド6へ派遣していた。

◇サイド6 リボー・コロニー

「さて、どうしようかな」

のび太はそう呟きながら、これから出てくるかもしれないMSについての対処方法を考えていた。

今回のペガサス隊の任務はサイクロプス隊の支援だ。

その任務の内容の詳細としては、サイド6のとある施設に製造されているという連邦のMS（ドムというらしい）の存在をサイクロプス隊が偵察して確認し、発見され次第破壊作業を開始。

仮にそれが失敗して、そのMSが動いて外に出ることが有ったとしたらそこを外で待機している野比のび太特務准尉のガンダム改とバーナード・ワイズマン伍長のジムⅢが仕留めるとというのが今回の作戦だ。

ちなみに投入されるペガサス隊のMSが2機しかないのは、単にルナツーでMS隊が補充される前に今回の任務が言い渡されたからだった。

しかし、今、一番のび太を悩ませているのはそのドムというMSに対してどう対処するかということだ。

通常ならビームライフルかマシンガンを一定の距離から撃ちまくれば良いのだが、今回はコロニーの中、しかも市街地が近くにあるということ、更にはサイド6政府の嘆願によってそれらの装備は持たされていなかった。

ビームサーベルの方はなんとか持たされているが、それとて敵のコクピットを狙うようにキツク言い渡されている。

まあ、のび太も好き好んで民間人を殺したくはないので、それは構わないのだが、問題なのは向こうの出方がどうなのかが全く分からないという事だ。

普通の思考をしていれば、コロニー内でビームライフルやマシンガン、対艦ライフルなどをぶっぱなすような愚行は犯さない筈なのだ

が、サイクロプス隊の攻撃を受けて慌てて出てくるような状況で普通の理性を保つことは相当難しく、下手をすればコロニー内であるというのを忘れて、それらの兵器をぶっぱなしてくる可能性もあった。いや、仮にビームサーベルであつても動力炉を狙って撃破したりすれば、爆発によってコロニーに穴が空いてしまうだろう。

つまり、自分達はそんな理性を保っているかどうか分からない相手に対してビームサーベルをコクピットに突き刺すか、あるいは文字通りの意味でモビルスーツの腕で殴って撃破しなければならぬのだ。

まあ、これらはサイクロプス隊の仕事が失敗した場合に起こりうることであるので、杞憂に終わる可能性も高いが、それが自分達に与えられた唯一の仕事のケースである以上はその状況を想定しなければならぬ。

「・・・やっぱりバーニイと2人掛かりで抑えるしかないな。僕一人じゃ無理だ」

のび太はそう思いながら、少し離れた位置に配置されているバーニイのジムⅢといざとなったら協力して作業する算段を着ける。

現在は無線封鎖をされているので連絡はつけられないが、そのいざという時が来たら解除されるだろうし、ミノフスキー粒子もないので連携を取る事は可能だ。

そして、1人で不可能な以上、他の人と協力するしかない。

そうなのび太は考えていた。

・・・もつとも、この時ののび太の心配は杞憂に終わる。

この30分後にサイクロプス隊がリボードで開発されていたMS——ドムの破壊に成功したという報告が入ったからだ。

——そして、その後、のび太とバーニイはリボードの暫しの休暇を与えられるが、そこで彼らは1人の連邦の技術将校とのび太と同一年の少年に出会うこととなる。

◇ニホン トウキョウ  
サイド6でサイクロプス隊による破壊工作が行われていた頃、ゴツプはジャブローから地球の反対側である東京までわざわざ訪れて、ある人物と会談を行っていた。

「やあ、すまないね。突然お邪魔して」

ゴツプはそう言いながら、目の前の50前後くらいの歳の男——地球連邦極東州首相コウイチ・クロカワ（オリキャラ）に対して、いきなりこの地に乗り込んできた非礼を詫げる。

「いえいえ、このような非常時です。突然の訪問など大した問題にはなりませんよ。ところで、お話というのは？」

「うむ。少し前に君に戦後処理を任せたいといった話はしただろうか？ 今日はその打ち合わせに来た」

「……やはり、ジャブローは落ちますか？」

コウイチは眼光を鋭くしながら、ゴツプにそう尋ねる。

コウイチ・クロカワという人物は決して無能ではない。

少なくともゴツプに戦後処理を任せるのに最適な人物と目される程度には有能であり、もし一年戦争が起こっていなければいずれは大統領の座に座っていたかもしれない人物だ。

そんな彼からすれば、現在の状況は非常に危うい。

彼の担当地区である東アジア方面こそ、これといった変化はないが、アフリカ方面軍は言うまでもなく暴走しているし、ヨーロッパ方面でも感染者などの対応に四苦八苦していると聞いている（噂ではジオン軍捕虜への虐待行為も起きているらしい）。

戦況そのものは有利になりつつあるが、それでも連邦は未だに宇宙に拠点すら築けていないし、財政的にも世論的にもこれ以上の戦争続行は不可能であり、何処かで講和をする必要があるということは明らかだった。

いや、むしろ、例のウイルスの感染性を考えれば今すぐに講和をした方が良いだろう。

そして、感染症対策をジオンと共同で行い、アフリカ方面軍は反乱軍として扱って、ジオンに借りを作らない為にも連邦軍が単独で始末する。

これが現状における最善策だとコウイチは考えていたのだが、現実には未だに連邦政府からジオンに講和を打診する気配すらない。

ジャブローの詳細を知らないコウイチは当初、それをジャブローが大西洋大津波による混乱から立ち直っていないからだと思っており、その立ち直りの遅さに怒りすら覚えたものだが、先日、ゴツプからされた説明を聞き、状況は自分が考えていたものより更に悪いということを嫌でも認識させられていた。

「ああ、落ちるね。それも近いうちに。だから、こうして君に会いに来ているんじゃないか」

「そうですか。しかし、買ってきてくれるのは嬉しいのですが、それならばゴツプ大将が直々にやればよろしいのでは?」

「あいにく私は連邦軍最高司令官に就任してしまっていてね。私が居なくてはジャブローで降伏宣言が出せないんだよ。そして、降伏宣言を出した私があるまま大統領代行の席に居座るのは示しがないからね」

仮にゴツプが降伏してそのまま大統領の座に着いた場合、ゴツプを売国奴や裏切り者と判断する連邦軍の将兵や高官は必ず出てくる。

そうなれば連邦の求心力は失われ、連邦から脱退しようという動きやジン・コリニーについていこうとする人間が出てくる可能性が高かった。

しかし、だからと言ってジャブローで生き残った政治家に戦後処理を任せるわけにはいかない。

彼らには敗戦による混乱を少しでもスムーズに抑えるためにも自分と共に生け贄責任を取ってとなつてもらふ必要があるからだ。

なので、ゴツプ以外の、それもジャブローに居ない政治家に戦後処理を任せる必要があった。

そこで白羽の矢が立ったのがコウイチ・クロカワだったというわけである。

「・・・なるほど。しかし、講和と言ってもジャブローが落ちるということは事実上、連邦は敗戦国となりますが、その時に私が大統領代行の席に居座る事をジオンが許すでしょうか？」

「それは問題ない。今までの南極会談を見るに、ジオンには連邦を解体する意図はないようだからね。向こうの都合によほど悪い人間でもなければ臨時大統領の席に座る人間なんていちいち口出しはしてこないだろう」

ただし、ジオンが連邦をどのような存在で見ているかは不明なので、そこは注意する必要があるがね。

そうゴツプは付け加える。

「分かりました。戦後処理はお任せを」

「ありがとうございます。敗戦国の高官としての責任はこっちで引き受けよう。なにしろ、私は連邦の偉い人だからね」

ゴツプは自嘲するようにそう言った。

UCC0079年 12月25日 ラプラスの影

◇宇宙世紀0079年 12月25日 ニホン トウキョウ

「ふう、これから忙しくなるな」

コウイチ・クロカワはそう言いながら、リビングのソファにどっかりと座る。

ちなみにこの家はコウイチの自宅ではない。

クロカワ家の元使用人謙現愛人である人物とその娘が住む家であり、コウイチにとってクロカワ本家のしがらみを忘れて安らぎを与えてくれる場所でもあった。

「お疲れ様です」

そんなコウイチに声を掛けてくるとても10歳の娘が居ると思えない美しい黒髪青目の女性。

彼女の名はトウカ・クジヨウ（オリキャラ）。

コウイチの愛人であり、かつてはクロカワ家の使用人だったが、子供が出来たと同時に使用人を止めてこの家へと引っ越してきた人物だ。

ちなみにその子供の父親は当然の事ながらコウイチだった。

元々はクロカワ家の誰にも知られる事なく去るつもりだったのだが、コウイチに去ろうとしていることを事前に知られてしまい、結局、彼にだけはコウイチとの間に出来た子供の存在と引っ越し先の家の存在を喋ることになってしまい、その後、トウカの娘であるハルカが産まれてからもコウイチとトウカは一年に何回かこの家で密会を重ねている。

クロカワ本家にバレたら一家離散と政治スキャンダルが一挙に来る可能性のあるこの行為であったが、コウイチ本人はトウカを拾って妊娠させてしまった以上、そのくらいのリスクは覚悟していた。



「ゴツプ閣下との会談は如何でしたか？」

「・・・相変わらず耳が早いな」

トウカのその一言にコウイチは思わず冷や汗を流してしまう。  
それもその筈。

なにしろ、ゴツプとコウイチの会談は突然であつたし、トップの身分同士の秘密会談だけあつて情報はかなり秘匿されていた。

しかも、コウイチはトウカにゴツプとの会談があつた事を「一言も言っていない」のだ。

これだけでも彼女が「未だに」とんでもない情報収集能力を持っていることは明らかだつた。

「ええ、私にも伝が有りますので」

そう言いながらクスリと笑いを溢すトウカ。

もつとも、聞く人が聞けば聞いている内容の恐ろしさと美人が笑う光景のギャップによって震え上がっていただろうが、幸か不幸かコウイチは彼女の事をそこまで恐れてはいない。

しかし、これ以上聞いているは本当に恐ろしくなりそうだったので、コウイチは少々無理にはあるが話題を変えることにした。

「そ、そう言えば、ハルカちゃんは確かいま小学4年生だったかな？ということはもう10歳か。月日が経つのは早いものだな」

「ええ、私と違って健やかに育つてくれます」

そう言いながら、トウカは少々哀愁を漂わせた表情をする。

トウカは幼い頃、戦闘員として育てられ、過酷な生活を送らされてきた。

その後、1人で殺し屋や暗殺者としての任務を行うようになり、何時しか「最強の戦闘員」という異名を連邦の諜報機関の面々より付けられるようになる。

そして、とある任務でコウイチと出会い、歪ながらも幸せな家庭を築くことが出来た。

しかし、愛しい娘であるハルカを見てみると、時々何故自分はこのような普通の生活を送ることが出来なかったのかと、暗い感情を抱く事があったのだ。

もつとも、その感情を娘にぶつけた時は今まで1度たりとて無いが、だからこそその嫉妬の感情はこういった形でたまに露出する。

だが、その感情を向けられたコウイチは敢えてそれには触れない。彼女の過去とそれに伴う感情は彼女だけのもの。

自分にトウカを完全に支えることが出来ない以上、そこに深く踏み込むべきではないと思っていたからだ。

「・・・そうか。それは良かった。ところで、ゴツプ閣下と会談していた事を知っているということは、その会談内容は・・・」

「それは知りません。流石に私も現地に居たわけではないので」

「そうか。なら、詳しい内容は言えないが、率直に言うとなんか君に会うことは出来なくなる。下手をすれば、数年は会えないかもしれないな」

「そうですか」

「・・・あまり驚いてはいないのだな」

「予想していましたので。それと何をするかは存じませんが、旧中国のジオンには気を配っておいた方がよろしいかと。不穏な動きもあります」

「だろうな」

トウカの言葉に対して、コウイチは納得したようにそう答える。そもそもコウイチは旧中国に降下したジオンをあまり信用していない。

それは元々が敵軍であるということもあるが、それ以上にあれだけ狂信的に独立を唄っていたジオン・ズム・ダイクンを信奉する派閥が本当に地球連邦に利する行動をしようとしているとはどうしても思えなかったからだ。

一応、時が来たらジオンを裏切るという「裏の約束」はしているが、裏の約束である以上、破棄することはその気になれば可能だった。ましてや、その裏の約束をした本人であるマハラジャ・カーンが行方不明となった現在では尚更だろう。

いや、むしろ、約束を破棄するケースも考えてマハラジャは姿を眩ましたのではないか？

コウイチはそのような疑いも持っていた。

「まあ、とにかく情報をありがとう。それで、だ。暫く会えないから久しぶりに君としたいのだが・・・良いかね？」

その言葉にトウカは再び美しい顔を微笑ませると、コウイチの唇に自らの唇を重ねる事でそれに答えた。

◇月面 グラナダ

「なに？マーサ・ビスト・カーバインが東アジアの連中に接触したただと？」

キシリアはたった今、部下からもたらされた報告に少し驚いた。

先の大西洋大津波によってキシリア機関が地球上に築いた諜報網はズタズタにされており、失われた諜報員は決して少なくない。

しかし、戦争も大詰めに入ったことから、諜報網を再建するよりも残った諜報員を重要箇所集中配備する方が良いとキシリアは考えており、地球の幾つかの地域に生き残った優秀な集中配備していた。

そして、その重要箇所の1つが裏切り者候補の居る東アジアであり、地球に居た諜報員のおよそ半数以上がこの地域の諜報活動にしている。

これは終戦の時期と前後して現地に居るダイクン派が何かやらかすのではないかと疑っていたからだ。

しかし、どうやら事態はキシリアが思っていたよりも深刻な状態となつてしまったようだった。

「・・・例の箱は？」

「はっ。確認されておりませんが、状況を見るにやはり持ち込んだ可能性が高いかと」

「・・・」

不味い。

キシリアはそう思う。

マーサと東アジアのダイクン派が手を組む可能性は考えていな

かった訳ではなかった。

なにしろ、今のジオン公国は箱を使わなくとも独立できる。

いや、むしろ、箱の存在は余計な火種になりかねないので、とつと消し去ってしまいたい存在だ。

もつとも、キシリアはギレンから例のプランの変更を伝えられているため、終戦交渉の場でジオンの独立を要求するつもりはなかったが、箱の存在が邪魔であることに変わりはない。

しかし、ダイクン派は違う。

戦後、ダイクン派は開戦の経緯などから終戦後に冷遇されるのは確実視されているし、場合によっては反乱分子（と言うか、実際に反乱を画策していたのでその通りだが）として何らかの理由をつけられて逮捕されるような事態になるかもしれない。

となると、ダイクン派としては戦争が終わってしまったては困る訳なのだが、ジオンがジャブロー攻略を成功させてしまえば戦争終結の機運はもう止められず、それでも戦争を続けさせるには何か火種となる活性化剤が必要となる。

そこで出てくるのが前述したラプラスの箱だ。

原作ではビスト財団の連邦への脅し材料として使われ、実際に使うとほとんど役に立たなかった石礎だったが、それは人々が戦争に疲れていて独立やニュータイプという概念に飽きていた時代だったからであり、両方が熱狂している今の時代で使えば大層な効果がある。

加えて、マーサとしてもほとんど無理矢理強奪してまでラプラスの箱を奪った以上、このままではアナハイムに戻れないだろう。

そして、ダイクン派は火種を必要としている以上、この2つが手を組むのはなんの不思議もない話だった。

だからこそ、この2つが手を組むより前に対処したかったのだが、どうやらそれは失敗したらしい。

「・・・分かった。もうラプラスの箱の方は良い。持ち込まれてしまった以上、正攻法で片付けるしかなさそうだからな」

「はっ、申し訳ありません」

「構わん。それより例の作戦を来月の1月3日に開始するように現地の諜報員に伝えろ」

キシリアは部下に対してそう指示する。

ちなみに彼女が今指示したのは、終戦直後に予定されていたダイクン派粛清のためのマッチポンプ作戦だ。

内容としてはこちらの工作によって東アジアのジオン軍を反乱軍としてでっち上げ、それを討伐することでダイクン派の粛清を計るというものだった。

状況からしてラプラスの箱がダイクン派の手に渡ったのはほぼ確実だが、彼らだけではあの箱を最大限に活かすことは出来ない。

あの箱を使うにはタイミングもそうだが、それ以上に使う人間のカリスマ性が重要なのだ。

もつとも、シヤアがこちらの知らぬ間にダイクン派と合流してあの箱を使用したりすれば最悪な事態となるが、仮にそうだったとしてもその前に彼らを「反乱軍」として扱ってしまえば、「反乱軍の苦し紛れの言い分」として箱の効果を大いに減衰させる事が可能だった。

(ここからは時間との勝負。先に先手を打った方が勝ちだ)

惜しむらくはジャブロー攻略戦までは味方が混乱してしまうことからこの作戦が出来ないということであったが、こればかりは仕方がない。

流石にこの政争的な意味合いが強いこの内戦を他国との戦争中に引き起こすわけにはいかないのだから。

——だが、キシリアは後にこの作戦をジャブロー攻略前に発動しておくべきだったと強く後悔することになる。

UC0079年 12月31日 一年戦争終結

『この一撃は、愚劣なる地球市民に対する裁きの鉄槌である！神の放ったメギドの火に、必ずや彼らは屈するであろう!!』

——ジャブロー攻略作戦開始直後に行われたギレン・ザビの演説より——

◇宇宙世紀0079年 12月31日 サイド3 総帥府

「・・・遂に決着か」

演説を終えた後、総帥府に設置された戦況モニターの映像を見ながらギレンはそう呟く。

そして、その映像にはジャブローの存在する南米・アマゾン川流域に幾つかの巨大な光点が発生している光景が映し出されていた。

「グングニル・・・北欧の主神オーディンが持つ槍、か」

グングニル。

それは今回のジャブロー攻略のためにジオンが用意した新兵器の名称だ。

名称そのものはガンダムSEEDでザフトがパナマ攻略のために使用した巨大EMP爆弾の名前と全く同じであったが、この世界で使用されたそれは言うなれば「でっかい杭の形状をした爆弾」だった。

ギレンがジャブロー攻略を考えた際、まず考えたのがどうやってジャブローの岩盤に穴を開けるかだ。

当初であれば、アップサラスを使う予定であったが、それはオーストラリア大陸で予定よりも早く使用してしまったことで連邦に対策を取られてしまったので、別の方針を考える必要があった。

そこで次に考えたのがサイド7のグリーン・ノアを何らかの理由をつけて接収し、ジャブローに落とすことだが、この行為はコロニーに住むスペースノイドの反感を買う可能性も有り、後々の火種になりかねなかったので断念する。

そして、その後に最終的に考えた結果、脳裏に浮かんできたのがこのグングニルだ。

先端部分に成形炸薬弾頭を取り付けて爆発を一点に集中させ、更に軌道上の高さから落とすことよって厚さ1万メートルのジャブローの岩盤を貫通させて、あわよくばジャブロー内部に居る敵にもダメージを与える。

爆発が一点に集中するため、コロニー落としのように広範囲に打撃を与えることは出来ないが、攻撃目標をジャブローに限定するのであればそれは問題ない。

そして、今回用意した32発のグングニルの直撃を受けて空いた穴にジャブロー降下部隊を送り込み、一気にジャブローを占領するというのが今回の作戦だった。

「どうやらその目論見は成功しているみたいだが……これ地球の地軸が傾いたりはしないよな？」

ギレンはそう呟きながら冷や汗を流す。

やっておいてなんだが、この作戦で地球環境への影響などは一切考えられておらず、ギレンもこうやって目撃するまではジャブローの岩



盤を貫通できるかばかりを考えており、地軸が傾いたりする可能性は全く考えていなかった。

そして、地軸が傾いたりすれば新世紀エヴァンゲリオンのセカンド・インパクトが起きた後の世界のように地球の季節が大きく変動してしまう可能性があり、そうなればエレズム（地球神聖主義）を信奉する人々を大いに刺激してしまうことになる。

「ま、まあ、やってしまったものは仕方がない。取り敢えず、今は作戦の成功を祈ろう」

ギレンはそう言つて、半ば誤魔化すようにジャブロー攻略作戦の成功を祈るが、実のところ他にも懸念材料はあった。

それは連邦政府閣僚と連邦軍上層部がジャブローから引つ越していないかという疑念だ。

なにしろ、ジャブローは8月の破壊工作によって位置が漏れている上にその後の大西洋大津波によつて一部が水没している。

そんなジャブローに何時までも居るのを不味いと思つた連邦政府閣僚がこちらの知らないうちにジャブローから引つ越して別の場所に拠点を構えている可能性は大いにある。

もつとも、ジャブロー以上に安心な場所がないというのも確かなので、仮に脱出したとしてもジャブローが落ちてしまえば地球上に彼らの安息の場所は存在しなくなるのだが、同時に引つ越しをしてみえばグリプス戦役でティターンズがやったようなジャブローに敵を引き付けて核で吹っ飛ばすといった戦術が可能なのだ。

核兵器を禁止する南極条約は一応あるが、既に連邦はオデッサなどで核を使っているし、原作でティターンズがやったプロパガンダのようにならばジャブローの核爆発はジオンの仕業と主張すれば少なくとも終戦まではうやむやに出来る。

加えて――

（ガンダムの世界は味方が残つていようと平然と味方諸共敵を吹っ飛

ばすからな。・・・それを考えれば、ワルシャワの時は割と理性的な判断だったんだな)

そう、ガンダムSEEDのアラスカでサイクロプスを使った時もそうなのだが、ガンダムの世界というのは大量破壊兵器を使用する際、敵を効率良く破壊できる局面であれば、平然と味方諸共敵を吹っ飛ばしたりするのだ。

それを考えれば、ワルシャワでの核兵器使用はガンダムの世界にしてはかなり理性的な判断だったと見なすことも出来る。

まあ、吹っ飛ばされる側だったジオンにしてみれば、どちらにしろ堪ったものではないが。

(まあいい。とにかくもう賽は投げられたんだ。それに少なくとも大西洋大津波まではジャブローに政府と軍部の高官が居たことは確認されているし、あれだけの規模の人員を1ヶ月で秘密裏で引っ越しさせられるとは考えづらい。シュレディングアの猫の如く開けてみなくては分からない)

ギレンはそう思いながら、この最後の詰めとなるであろうジャブロー攻略戦を自らの目でしっかりと見届けることに決めた。

## ◇南米 ジャブロー

「……まで、か」

連邦軍総司令官ゴツプ大將はそう呟きながら、自軍の負けを悟る。ジオン軍によって32発ものグングニルを打ち込まれたジャブローの連邦軍はその一撃だけで大損害を負うことになった。

その中でも一番被害を受けたのは地上部隊だ。

そもそも幾ら地中に爆発エネルギーが集中すると言っても、軌道上から巨大な構造物を落としたりすれば、着弾した際に衝撃波が舞う。

そうなって地上に居る部隊が無事でいられる筈もなく、地上部隊はその大半がグングニルの一撃によって壊滅しており、指揮官であるアントニオ・カラス中佐は既に戦死していた。

もつとも、だからと言って地下に居る部隊が無事でいられたかと言えばそうではなく、不運にもグングニルが着弾した場所の真下に居た部隊やその周辺に居る部隊が死傷。

更に運悪く（ジオンにとつては運良く）一発のグングニルが連邦政府閣僚が避難している区画の真上に着弾。

そのままそのグングニルは爆発エネルギーを解放し、連邦政府閣僚達の殆どを死亡させた。

しかし、ジャミトフ・ハイマン大佐やジョン・コーウエン少将などの主だった将校は無事であった為、彼らが中心となってジャブロー守備隊の統制はどうか回復させたのだが、そこにルーゲンス少将の指揮するジオン軍降下部隊が突撃してきたのだ。

それに対して、連邦軍はようやく開発が終了して量産が開始された量産型MSであるザク（原作のザクII）を投入したが、その性能はジムIIと互角程度でしかない上にパイロットの大半も熟練されているとは言えない。

もつとも、最初こそは初の本格的なMS対MSの戦いが勃発したこ

とでジオンのパイロット達を戸惑わせたが、それでも時間が経つごとに練度と性能の差が大きく出てきて、連邦のMS隊はほぼ一方的に蹂躪される。

まあ、ヤザン・ゲール准尉など、一部では連邦のパイロットが逆にジオンのパイロットを圧倒している例もあったが、それはあくまで例外であり、全体的な戦局を見れば連邦軍のMS隊はジオンのMS隊によって押し潰され、戦闘開始から一時間が経つ頃には連邦のMS隊はその8割を消失していた。

勿論、MS隊以外のジャブロー守備隊も奮戦はしたのだが、30以上もの穴から同時進行してくるジオン軍を完全に防ぎきることは出来ず、既にジャブローの一部は占拠されてしまっている。

更にどうにか敷いた防衛線もジャブロー内部に侵入した量産型アプサラスのメガ粒子砲によって文字通りの意味で引き裂かれてしまい、それによって空いた穴にジオン軍は続々と殺到して防衛線を崩壊させていく。

もはや陥落は時間の問題だった。

「やれやれ。私も軍人の端くれだから敗軍の将となるのは屈辱的なのだけだね。命には変えられないな」

ゴツプはそう言うと、近くに居た通信士に向かってジオン軍への降伏の申し入れと味方の交戦中止命令を出すように命じた。

——そして、この30分後、守備隊に命令が行き届いたことにより、ジャブロー守備隊は降伏し、ジャブローはジオン軍の手に落ちる。

更に4時間後、臨時大統領の座に着いたコウイチ・クロカワによってサイド6を通じてジオン公国政府へ終戦協定の締結が打診され、それをジオンが受諾したことにより、後に一年戦争と呼ばれたこの戦いは、こうして幕を閉じることとなった。

## ネオ・ジオン抗争編

UC0080年 1月1日 第五次南極会談

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 1月1日 南極

5度目の南極会談。

それはジオンにとっては勝利を、連邦にとっては敗北を意味する会談であり、連邦側の代表団は暗い空気を纏わせたままこの会談に望んでいたのだが、この会談で勝者である筈のジオンは思いもよらない要求を連邦の代表団に対して行ってきた。

「これは・・・どういう意図があつての提案ですか？」

連邦の代表であるコウイチ・クロカワは驚いた表情で、ジオン側の代表であるキシリアに対してそう尋ねた。

ちなみにジオンから出された講和条約締結の条件は以下の通りだ。

1・・・ジオン公国改めジオン共和国を地球連邦の地方自治国家として独立した自治権を得る。

2・・・サイド3以外の各サイドも上記のジオンと同じ地方自治国家とする。

3・・・地球連邦政府はスペースノイドに対して参政権を与える。

4・・・ジオン共和国は占領した地球領土とルナツーを地球連邦に返還する。

5・・・地球連邦は各サイドが組織する軍の存在を認め、連邦宇宙軍の拠点は返還したルナツーのみとし、各サイドへの連邦軍の駐留はこれを認めない。

6・・・ジオン及び各サイドの10年間の地球上での資源採掘の承認。

7・・・地球連邦政府はジオン共和国に対して、ジオン公国がこの戦争でかけた戦費と同等の金額を賠償金として支払う。

8・・・地球連邦の首都をジャブローからフォン・ブラウンへと移

行させる。

9・・・サイド3を含む各サイドは地球連邦がコロニー建設にかけた費用を20年後のUC0100年までに地球連邦に返済する(ただし、無利子)。

10・・・地球市民の宇宙への移民の促進。  
以上。

そして、この条件を見れば分かるだろうが、ここにはジオンの当初の目的であった完全なる独立は一切書かれていないのだ。

あれだけ連邦からの独立に拘っていたジオンを知る連邦の人間としては、正直言つてかなりと言つても良いほど意外だった。

「別に。ただ今の状況でジオンや他のサイドが独立するのは地球圏に多大な悪影響を及ぼすと考えたまでです」

キシリアはコウイチの発言に対してそう答える。

無論、その言葉を額面通りに受け取る連邦の代表団の人間は皆無だったが、実のところ今、ジオンが独立することで地球圏に悪影響を及ぼすというのは事実でもあった。

なにしろ、大西洋沿岸は大西洋大津波によってガタガタ、アフリカ方面軍は暴走気味、この上に更にジオンや各サイドが独立したりなどすれば連邦の統制が崩壊して地球各地で独立祭りが起きかねない。

そうなれば、宇宙戦国時代ならぬ地球圏戦国時代という笑えない事態になりかねないので、ジオンの独立はこの際諦めて権限と利益を確保する方針に切り換えたのだ。

(しかし、まさかプランBがこんな局面で役に立つとはな。世の中、何が起きるか分からないものだ)

元々、開戦前にジオンが用意していた対連邦プランは3つあった。

プランA・・・連邦に対して宣戦布告を行つて開戦し、ジオンの完全なる独立を目指す。

プランB・・・連邦の一自治体に戻る代わりに連邦軍のサイド3への駐屯を許可しない。

プランC・・・連邦と開戦せず、宇宙の経済が地球の経済を上回る時を待ち、そこで改めてスペースノイドの参政権を要求する。

この内、プランCは連邦からのジオンへの宣戦布告という予想外の事態によって消滅してしまった為、残る選択肢はプランAとBの2つのみとなった。

そして、今回ジオンが連邦に提案したのは、そのプランBを修正したものだ。

本来、プランBはジオンが負けかけた時の為のプランだったのだが、まさか勝っているこの局面で提案する事になるとは開戦前は予想すらしておらず、キシリア自身、内心では今の状況にかなり驚いていた。

「・・・そうですか。それはありがたいですな」

コウイチは敢えてキシリアの言葉を額面通りに受け取る事にした。

ここで裏を探ってもろくな事にはならないと思ったからだ。

しかし、気になる条件が幾つか存在していたので、コウイチはそこを尋ねることにした。

「この10番目の条件ですが、これはどういう意味です?」

「書かれている通りだ。我々としては人類はいずれ宇宙に巣立たなくてはならないと考えている。まあ、すぐにではないが、その準備のためにも戦後は外宇宙の開拓を推し進めるつもりだ。連邦にはその手伝いをしてもらいたい」

「なるほど。それは夢のある話ですな。しかし、我々としては戦後はこれから始まります。火種が多く残っている以上、お手伝いをするのは当分先になるかもしれませんよ?」

「構わない。その時は我々と我々に協力してくれる者達だけで行う。貴国らが後ろから刺してくるような真似やその動作を見せて来ない限りは問題はない」

つまり、火種にかこつけて対ジオンやサイド向けの必要以上の軍拡（特に宇宙軍）を行うなど言っているのだ。

一見、連邦が手伝わずにジオンが撤退するというのは宇宙移民が進まないように思えるが、連邦はこれからアフリカ方面軍を討伐に掛かるだろうし、東アジアにも新たな火種が（ジオンの工作によって）起きる予定であり、そして、あちこちで戦争が起これば当然の事ながら地球に住む人々は『自分達は安全なのだろうか？』という不安にかられる。

そこでその不安を此方から煽り、彼らに『宇宙移民をすれば一先ずの安全は確保できますよ？』と囁けば良い。

そうすれば宇宙移民を速やかに行いたいと言った人々は出てくるだろうし、そこまで上手く行かなくても人々の関心を宇宙に集めることは可能だ。

更に今後台頭してくるであろうジャミトフも、この動きについては少なくとも邪魔はしないであろうし（そもそもこの方法も原作でジャミトフがティターンズを使ってやろうとしたやり方を参考にしている）、連邦軍の宇宙派閥についてはジオンが主導していることについては気に入らなくとも、宇宙移民そのものについては賛同してくれるだろう。

（もつとも、そうならなくとも最悪宇宙開発を邪魔をされなければ良いのだがな）

キシリアはそう思いながら、コウイチの反応を待った。

すると――



「それは結構。我々も不必要にあなた方を刺激するような真似は今後控えるようにしましょう。しかし、9は意外でしたな。てつきり、踏み倒されるものかと思っていきましたが」

「ふん。暴力による借金の踏み倒しはどうやっても禍根が残る。それに今後のコロニー建設に出来るだけ支障をきたしたくないのでな」

そう、仮にコロニーを強制的に無料で譲渡させたとしても、それはどう言い繕おうと借金の踏み倒しに他ならず、それを実行されて損をするのはコロニーを建設した出資者達だ。

そして、一度踏み倒せば今後のコロニー建設の際にまた踏み倒されるのではないかと、コロニー建設資金を出す資産家や企業、あるいは連邦政府は出資に及び腰となるだろう。

そうなれば地球市民の宇宙移民どころか、旧式化したコロニーを新式の物と入れ換えるコロニー再生計画にも支障をきたすだろうし、下手をすれば今後の宇宙開発にも影響を及ぼしかねない。

それを防ぐためにも借金の踏み倒しだけは避けなければならなかった。

「それでこの条件を飲むのか?」

「・・・良いでしょう。と言いたいところですが、最後に1つだけお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか?」

「なんだ?」

「この8の条件である首都の移行なのですが、これは少し期間を設けて貰わなければ無理です。なにしろ、連邦を主導する政治家のほとんどは貴国の攻撃によって死亡してしまいましたから、議会の再編に取り掛からなければなりません」

「・・・」

「加えて、地球のジャブローから月のフォン・ブラウンですから。いきなり、拠点を地上から宇宙に移すとなれば、残った政治家も渋るでしょう。その調整の為に少々時間を頂きたい」

「ほう？しかし、条件の中にはスペースノイドの参政権の付与も入っている。今まで散々植民地人扱いされていたスペースノイド達が貴君達を支持してくれるかな？」

「そ、それは・・・」

キシリアの指摘にコウイチは痛いところを突かれたといった苦い表情をする。

そう、地球圏の人口は約110億人居たが、今まで参政権は20億人のアースノイドにしか与えられてこなかった。

そして、今回の条約で残り90億人にも参政権が与えられることになるが、民主主義は良くも悪くも多数決であり、仮にアースノイド全員がコウイチ達を支持したとしても、今回の条約で参政権が与えられる者達がコウイチ達を拒否すれば（と言うか、今までの経緯からほぼそうなるのは確実）コウイチ達は議会の席から追い出されるか、残っても大きく権力を低下させられることとなる。

まあ、早い話、人口数の問題によって今後の地球連邦の政治家はスペースノイド中心となるので、その気になればコウイチ達が宇宙に上がってこなくとも議会は稼働できるのだ。

それでもコウイチ達を今後も議会に参加させる理由は、アースノイドを議会から弾いてしまえば、それはアースノイドに参政権を与えていないのと変わらないので、それを不満に思ったアースノイドによってテロや戦乱が引き起こされるのを出来るだけ防ぎたかったからだった。

しかし、コウイチ達が調整に時間が掛かるといふことはその間、地

球連邦の議会はアースノイドの議員抜きで行うか、それとも逆に揃うまで待つかの2択となる。

それは不味い。

そう思ったキシリアは敢えてコウイチを脅すことで、調整に出来るだけ時間を掛けさせないようにする事にしたのだ。

だが、同時に調整にある程度時間が掛かるということは推測できたので、譲歩案を提案する。

「まあいい。3年後のUCC0083年までに議員を宇宙に上げるように調整しろ。しないならば、地球連邦の議会はスペースノイド主導で行う事になる」

「・・・分かりました。3年も有れば十分です。その間に何とかして見せましょう」

「期待しています。では、交渉成立ということでは」

そう言つて2人は席を立ち、握手を交わす。

——そして、この瞬間、僅か1年で軍・民間人合わせて1億人近い犠牲者を出した（もつとも、これでも原作の55分の1以下の被害なのだが）一年戦争は正式に終結することとなった。

だが、このすぐ後に予想外の新たな戦乱が待ち受けているということとを、彼らはまだ知らない。

UCC0080年 1月2日 新たな火種

◇宇宙世紀0080年 1月2日 サイド3 総帥府

「ようやく戦争が終わったか」

ギレンは戦争が終わったことに一先ず安堵しながらも、まだ問題が山積みである現実には気づき、すぐに憂鬱げな表情になる。

「国内の説得が厄介だな」

なにしろ、戦前にあれだけ独立独立と散々騒いでいたのだ。

幸い、ジオンが重力戦線で負けかけていたことは公表されているので、騒ぐ人間は少ないだろうが、それでも騒ぐ人間は居るだろうし、特に過激派は確実に騒ぐ。

そういった人間に走らないように、国内の説得をどうにか上手く行わなければならない。

(いつそのこと、こんな形での講和しか出来なかった責任を取るってことで、総帥辞任は出来ないものか)

だが、それが叶わない事はギレンが一番よく分かっていた。

何故なら、このジオンという国は言うまでもなく独裁国家であり、日本のように首相を学級委員の交替のごとくポンポンと変えても(少なくとも表面上は)影響がないなどという訳にはいかない。

権力が集中する代償として責任が重くなっている以上、数年はこの職をやり続けなくてはならないだろう。

「まあ、幸い地球上にばら蒔かれた火種については連邦に押し付けられるし、その間は少なくとも平和になるな」

ギレンは物凄く悪意の籠った顔でそう言う。

実際、地球圏はかなりヤバイ状態だった。

懸念されていたグングニルをジャブローに攻撃したことによる地軸の変化はなかったものの、アフリカ方面軍は暴走しており何をするか分からない状態、東アジアのジオン軍はキシリアの工作によって明日には連邦に対して反抗の意を示し、ヨーロッパでは大西洋大津波によって北大西洋海流が変動したお蔭でブリデン島の気温はマイナス10度以下に、旧ドイツなどの西ヨーロッパに至っては例年を遥かに上回る降雪（吹雪も頻繁に起きている）とそれに伴う気温低下によって次々とその地域に住む人々が息を引き取っているらしい。

この状況から手を引けるのは正直言って有り難かった。

とは言え――

「例のウィルスの感染症の問題から、今すぐに宇宙に帰すわけにはいかない。少なくとも、治療してからでない。いや、医療専門の小型コロニーでも作るか、あるいは戦争終結と共に不要になるソロモンを改装して病院施設とするか」

もつとも、どちらも問題がある。

ソロモンを改装すれば小型コロニーをわざわざ一から作るよりは手間は少ないだろうが、万が一連邦と再度開戦するといった事態になれば不味いことになるし、そうでなくとも要塞としての有用性からおそらくこの世界でも組織されるであろうティターンズやエウーゴなどの勢力から狙われる可能性は非常に高い。

逆に医療専門の小型コロニーを作るとなると、莫大な費用を使うことになるので、幾ら南極条約に使った戦費を取り戻せると言っても、サスロから文句を言われるのは間違いない。

（いや、医療専門のコロニーとなると、ジオンの医学を発展させる上では良いサンプルにはなるか。将兵の治療が終わった後は医療関係の学校を多数建設して医療専門の学園都市とするのも有りだからな。

そういった未来への投資だと説明すれば、サスロも納得するかもしれない)

ギレンはそう考えながら、机の上に置いてあるカップを手に取って中身のお茶を飲もうとする。

だが、その時――

「あ、兄貴!! 大変だ!!」

サスロが慌てた様子で部屋へと入ってくる。

「どうした? 騒々しい」

そう言いながらも、そう言えば一年前にも同じようなことがあったなど当時のことを懐かしく思いながら、ギレンは優雅にお茶を口に含む。

しかし――

「い、今、シヤアがテレビに出ていて蜂起演説をしてるんだ!! しかも、あの例のラプラスの箱まで使って!!」

ギレンは1年前と同じく盛大に紅茶を吹き出した。



「この放送を聞く全ての方々へ。私はジオン公国軍元少佐、シャア・アズナブルであります。しかし、同時に知って貰わなければならないことがある。それは私がもう一つの名を持つことだ」

そう区切ると、シャアは仮面を取り、自らの素顔を晒す。

「私の名はキャスバル・レム・ダイクン。かつてスペースノイドの独立を夢見た男、ジオン・ズム・ダイクンの息子。それが私だ！」

「そして、私は今、ジオンの意思を示す者として語らせて貰う。無論、ジオンとは篡奪者であるザビ家によって歪められた公国でも、その篡奪者によつて売り渡された共和国のことでもない。父の語つたより正しき人類のあり方を、その有り様を体現した新たなる人類の一員としてである!!」

「顧みて欲しい。此度の戦争で多くの人間が傷ついた。その根源が何であつたのか」

「それは一部の古き人々の欲望に根ざしていたことは疑いようのない真実である。地球に住まい、我々スペースノイドを邪魔者だと宇宙へ放り出し、惰眠を貪る連邦政府は言うまでもない。彼らが戦火に焼かれたのは、時代の必然であつたと言えるだろう。だが、その裏で啜う者達を見逃してはならない！これを見ろ!!」

そう言つてシヤアは後ろに置かれていたシートを掴み、力任せに引く。

すると、シートが宙を舞い、その後ろから一つの石碑——ラプラスの箱が姿を現わした。

「これは地球連邦憲章の第7章、そのオリジナルの石碑である。そして、これこそが連邦政府のスペースノイドへの感情そのものであり、篡奪者たるザビ家の悪意を示す確たる証拠なのだ！」

「本来、宇宙移民とは来たるべき未来を担う新人類の揺り籠と期待されていた。それはこの文章から見ても明らかであり、良識ある人々が肯定していたことは石碑に刻まれている事実から疑うべくもない。しかし、この真実は当時の連邦政府の腐った人々によって闇へと葬られた！それが暗黒の80年を生み出した罪は重く、彼ら連邦を決して許してはならない。だが、ここでもう一つ、我々スペースノイドが絶対に許してはいけない存在がある」

シヤアは一旦言葉を区切り、大きく息を吸うと、はつきりとうこう宣言する。

「それはザビ家だ！父、そして、大恩あるマハラジャ・カーン准将を謀殺し、サイド3の権力を欲するだけに飽き足らず、全スペースノイドを支配するべく連邦が戦争を始めたのを良いことに、全人類に未曾有の戦火をもたらした!!しかも、それだけのことをやっておきながら父の悲願であったスペースノイドの自治独立はおろか、ジオンの独立ですら諦めた。そして、見ろ！」

強く握り絞められたシヤアの拳が石碑を叩く。

「この石碑をもつてすれば、先の戦争は全くの不要だった！我々はた



だ本来あるべき権利を主張すれば良かったのだから！それを彼らは自らの権力を確固たるものにするという私欲のために戦争という災禍を利用した！これを邪悪と呼ばずなんとするのか！しかも、ザビ家はジオンが勝利したにも関わらず、国を連邦に売り渡すという！その行為そのものがザビ家が自らの私欲のためにジオンを利用しているという確固たる証拠であり、それはこの戦禍を身に受けた全人類に対する明白な裏切りであることは疑いようがない!!」

「地球圏全ての人類の皆さん！今後、このような愚かな行為が行われないため、そして、このような悲しみが生まれないうために私はここに誓う!!スペースノイドでもアースノイドでもない真なる邪悪を討ち滅ぼし、新たなる人類、ニュータイプによる真なる恒久平和を実現すると!!」

そして、演説はクライマックスへと入った。

「我々は偽りのザビ家のジオンではない！我々の名はネオ・ジオン!!全ての古く悪しき者達を打ち払う剣であり、盾である！そして、心ある人類諸君!!共に世界を変えようではないか！誰もが栄光を掴む未来のために!!」

——東アジア・ペキンから地球圏全てに放送されたシャア・アズナブルこと、キャスバル・レム・ダイクンの演説より——

UCC0080年 1月6日 地獄の4日間

◇宇宙世紀0080年 1月6日 サイド3 公王府  
あの宣言から4日。

ジオン共和国の公王府では緊急家族会議（ちなみにキシリア、ガルマ、ドズルはレーザー通信で参加）が行われていた。

ちなみに4日も経ってようやくこの重要な会議が開かれたのは、予想外の事態が立て続けに起こり、その対処に奔走していたからだ。

そして、今日、ようやく家族会議を開くことが出来た訳だが、その空気はかなりどんよりしていた。

「……まず現在の問題を整理しよう」

重い沈黙の中、年長であるデギンがそう言っただけで口火を切る。

あの宣言後、まず起きたのがネオ・ジオン軍の華南への侵攻とジン・コリニー中將によるアフリカの地球連邦脱退宣言とそれに伴うアフリカ共和国の成立だった。

更にアフリカ共和国はネオ・ジオン支持を表明した上にそのネオ・ジオンと同盟まで組んだ。

しかし、ここまでは良い。

大変頭の痛い事実ではあるが、アンリ・シュレッツサー元准将やジンバ・ラルが居た時点でこの事は想像できていたし、その暴走ぶりによつて連邦に目を付けられていた事を考えれば、彼らがネオ・ジオンと手を組む事では生き延びられないであろう事は明らかであったのだから。

要はアフリカのこの行動は転生者達にとって予想の範囲内（連邦から脱退して国を建国したのは少々予想外だったが）でしかないのだ。

だが、問題はここからだった。

なんとアフリカ方面軍、否、アフリカ共和国軍はジャブローに核攻撃を開始。

6発の核ミサイルがジャブローの上空で炸裂し、現地に居たジオン

軍と連邦軍を纏めて吹き飛ばした。

上空で炸裂した為に流星に全滅することはなかったが、この攻撃でジオン軍だけで6万人、連邦軍も合わせると10万人以上が死亡（死者単位だと20万人を上回る）し、指揮官クラスだとジオンはルーゲンス少将、連邦軍はゴップ大將がそれぞれ死亡してしまっている。

オーストラリア方面ではブレックス・フォーラー大佐が反地球連邦組織『エウーゴ』の結成を宣言し、それに合わせてエウーゴの支援組織であるカラバも発足、現在はオーストラリア東海岸のシドニーやメルボルンといった主要都市を占拠していた。

更にエウーゴの艦艇が宇宙へと上がってサイド1に向かう。

そして、これをサイド1に配置されたジオン軍パトロール艦隊が迎え撃とうとしたが、そこでサイド1のMS隊が裏切って挟み撃ちとなり、パトロール艦隊は結局何も出来ないまま全滅（指揮官であるアンソン・シヨツカー少佐も戦死）し、エウーゴ艦隊はそのままサイド1に入港した。

本来なら、サイド1を含めたL5宙域の防備は宇宙要塞『ソロモン』の担当であり、ソロモンに配置されている艦隊がエウーゴを迎え撃つべきだったのだが、残念なことにそれは出来なかったのだ。

何故か？

それはソロモン艦隊の提督の一人であるエンツォ・ベルニーニ大佐が配下の艦隊（ソロモン艦隊全体の2割程の規模）が裏切り、ソロモン駐留艦隊に攻撃を開始したからだ。

結局、この攻撃はアナベル・ガトー大尉の指揮する部隊の反撃によってエンツォ大佐が乗艦する戦艦『ミラノ』を撃沈（エンツォ大佐は戦死）し、更にソロモン駐留のオツゴ軍団の猛攻を受け、反乱艦隊の大半が撃沈されたことよって終息。

残存艦艇は撤退し、エウーゴに占領されたサイド1に向かって逃げてエウーゴに合流したとの事だが、この攻撃によってソロモン艦隊は大損害を受け、更に裏切った艦も合わせると、全体の半数を喪失するという笑えない事態に陥っていたのだ。

以上がこの4日間で起きたことであったが、後に『地獄の4日間』と

言われることになるこの一連の騒動は、転生者達に改めてこの宇宙世紀という世界において、シヤアという人物が如何に恐ろしい存在であったかを嫌でも印象付けられることになっていった。

「これらを踏まえて、一個一個問題を片付けよう。まずサイド1についてだが、何か意見のあるものは居るか？」

「はい」

「ギレンか。言ってみろ」

「ここは膠着状態のまま保った方が良いでしょう。相手の数がそれなりに居り、更にコロニーが近くにある以上はそこで戦闘をするのは不味いですから。幸い、ソロモンの艦隊はある程度残っており、にらみ合いの戦力としては十分です。エウーゴや反乱軍もソロモンの艦隊が居るうちは他の宙域においてそれと出掛けられません」

その発言にソロモン要塞を担当しているドズルは嫌そうな顔をしますが、一応納得できる理屈ではあるが故に反論はしない。

サイド1は確かに現地に駐留していたジオン艦隊を背後から撃つた裏切り者であり、戦後にお仕置きする事は示しを着けるためにも絶対に必要なであるが、他のサイドへの感情も考えると流石にコロニーごと敵を吹っ飛ばしたりするのは不味い。

いや、そもそもの話、別に無理にサイド1を奪還する必要はなかった。

何故なら、サイド1には（主に開戦前の地球連邦のせいで）重工業コロニーが少なく、艦艇の修理程度なら兎も角、艦艇の補充はほぼ不可能だからだ。

更に宙域を封鎖されれば資源の外部からの供給も困難となり、サイド1は自然と干上がるし、ソロモンの存在そのものが牽制となってサイド1に立て籠る艦隊はサイド1から動くことも難しい。

そして、そんな状態が続けばサイド1に居るエウーゴ・反乱軍連合艦隊は引き籠って自滅するか、破れかぶれになって何処かに攻めめるかの2つしか選択肢がない。

まあ、高確率で後者を選ぶだろうが、出てきたところを一気に叩けば、宇宙の戦いはそれでカタがつく。

「なるほど。しかし、そうなるとソロモンというジオンと地球を繋ぐ補給拠点は使えなくなるぞ?」

「反対側のL4を使いましょう。特にサイド2は既に親ジオンを表明しているのです、そこを拠点にして地球に補給と再度の侵攻を行います」

「侵攻?お前は地球の情勢に手を出すつもりなのか?」

「ええ。連邦だけでカタを着けられるのであればその必要もなかったのですが、どうやらそういう訳にはいかないようですので」

ギレンはそう言うと、先日キシリアから送られてきた2枚の写真をデギンへと渡す。

「これは・・・ハイザックとガンダムMK-II?」

そう、そこに映し出されていたのは機動戦士Zガンダム登場したティターンズが所有していた(劇中ではガンダムMK-IIはエウーゴが運用しているが、元々はティターンズの持ち物)2つのMSだった。

ちなみにガンダムMK-IIの方はカミーユ・ビダンがグリプス戦役初期に乗っていたMSでもある。

「ええ、その通りです。そして、これは東アジアのネオ・ジオン軍が運用している機体でもあるそうです」

「馬鹿な！こんな機体をいつの間に開発していたのだ!？」

デギンは思わず声を荒げてしまう。

当然だろう。

ハイザックやガンダムMK-II（この世界ではガンダムIIと呼ばれているらしい）はグリプス戦役初期に登場するMSであり、とてもではないがこの時代に登場して良いレベルのモビルスーツではない。

更に言えば、これらを配備しているということはジオンの最新鋭のザムIIですら旧式化してしまったことを意味しており、今後少数のMS同士の戦いではネオ・ジオンに対して苦戦を強いられることとなる。

ましてや、原作のザクIIと同等の性能の機体が出来たばかりの連邦のMSなど相手にもならないだろう。

「・・・敵に転生者でも居るのか？」

『いえ、どうやらメイ・カーウィンが独自に開発したようです。どうやらあの小娘は予想以上の天才ぶりだったようですな。あとついでに東アジア方面軍。まあ、今はネオ・ジオン軍ですが、彼らのMSに仕掛けたコンピューターウイルスも彼女によって上手く除去されます』

キシリアがそう補足する。

そう、実はこの世界ではザムシリーズなどの原作の一年戦争時期には到底登場しないであろうMSを造ってしまったせいか、天才メカニックであるメイがそのザムシリーズを越えようとMS開発に必死で取り組んだ結果、本来なら原作では7年後に登場する筈のMSを完成させてしまったのだ。

それも2つも。

「そういうわけでサスロと話し合った結果、我々は予算は縮小したものの、開発を継続していた新型量産MSバムを量産体制に移行することを決定いたしました。合わせてZガンダムの開発も」

「そうか。それで、それは何時投入できる」

「バムの方はザムⅡのロールアウト前から開発が始まっていたこともあって開発は8割方終了しており、急がせれば来月にはロールアウト可能です。ただZガンダムの方はムーバブルフレームやバイオセンサーの問題もあって4月まで掛かるとの事でしたが、この際、可変機能を削除する方針で進めてムーバブルフレームの開発は凍結。バイオセンサーの開発に全力を注がせ、3月には実戦投入が可能となるように開発陣に指示しています」

「・・・それだと変形できない分、原作のZガンダムより加速性能と航続距離は劣ってしまうな」

「仕方ありません。そもそも原作のZガンダムは野心的な設計にすぎましたから、本来ならこれが普通かと」

そう、原作のZガンダムはベースジャバー抜きでの航続距離の上昇と加速性能の向上を目的として可変機構を取り付けていたが、実のところ可変機構は実戦での使い方が非常にめんどくさいし、コストも掛かる。

それでも技術者側の要望と開発に時間を掛けるつもりだったことから原作の可変機構とそれに必要なムーバブルフレームの開発を許可していたが、あいにく今回は時間がなさそうなので早い実戦投入が望まれるため、可変機構に必要なムーバブルフレームの開発を凍結し、可変機構そのものを削除することにしたのだ。

当然、開発陣の技術者からは文句が出たが、そこら辺は時間がないということで強引に押し通した。

「分かった。ところで話は変わるが、エウーゴの方は原作と同じ反地球連邦組織となっているが、ネオ・ジオンとの関係はどうなっているのだ？」

『分かりません。しかし、反乱艦隊が受け入れられていることから、少なくとも敵の敵は味方の論拠で手を組んでいる事は明らかです』

「なるほどな。ということはエウーゴとネオ・ジオン軍を纏めて相手にせねばならないということか。まあ、一纏めになっているのは逆にやり易くはあるが」

「そうですね。ですが、油断は禁物です。特にネオ・ジオンなんていう勢力は原作でも何をするか分かりませんでしたから」

ギレンはそう言いながらも、これ以上大変なことが起こらないように必死に祈った。

だが、それを嘲笑うかの如く、後に彼の予想の斜め上をいく“大変なこと”が起きてしまうということを彼はまだ知らない。



UC0080年 1月8日 スカウト（恐）

◇宇宙世紀<sup>c</sup>0080年 1月8日 グラナダ

「キシリア様、例の人物をお連れしました」

ノックの音と共に部下が部屋の外からキシリアに対してそう声を掛けてくる。

「よし、入れ」

「はっ。・・・しかし、本当によろしいのですか？手錠無しで」

「構わん。捕虜であれば、その措置も必要だっただろうが、建前上はもう捕虜ではないからな」

「・・・分かりました。では、失礼します」

そう言つて部屋の中に部下の男が入っていき、それに続けて部下が連れてきた人物——ブライト・ノア少尉が慥然とした顔付きで部屋へと入ってくる。

「よく来てくれた。ブライト・ノア少尉」

「独裁者の一族が捕虜の私に何のようだ？」

「こら、失礼なことを言うな!!」

「構わん。それと、もう貴官は捕虜ではない。戦争は終わったからな。しかし、貴官はよっぽど私と話したくないようだな」

「当たり前だ！」

「そうか。だが、今日は今後の君やホワイトベースの乗員達の身柄について話したいのだが、君が拒否するということは我々で決めてしまっても良いということになるが？」

「なんだと!？」

ブライトはキシリアの発言に目を剥く。

後年の落ち着いた名將のブライトとは違い、この時期のブライトは若さと経験不足ゆえか、結構血の気が多い。

その為、気に入らない相手にはこうやって面と向かって反発してくるのだ（まあ、後年のブライトも結構そういうところはあったが、それでもこの時点のブライトよりは落ち着いていた）。

「捕虜の扱いは南極条約で決められている筈だ!!」

「だからさっき言っただろう。貴官達はもう捕虜ではないと。まあ、本来なら戦争が終わったからにはお前達の身柄を速やかに連邦に返すというのが筋なのだが、貴官の場合はそうも言っていない。何故だか分かるか？」

「・・・分からん」

「それは簡単だ。民間人を無理矢理戦争に参加させた戦争犯罪者。そのような疑惑が出ているからだ」

その言葉にブライトは反論しようとしたが、すぐに口を閉ざした。何故なら、それを否定してしまうのは不味いと気づいたからだ。

一般的に軍籍の無い者が戦闘に参加した場合、その人物はゲリラと見なされる。

そして、ホワイトベースは大半の乗員を民間人で動かしていた。

一応、彼らの軍籍はジャブローに着いたら正式に貰える手筈になっていたのだが、その前にホワイトベースが陥落してしまったことで彼らはゲリラという身分のまま捕虜となってしまうたのだ。

そして、今回の場合、正規軍人の大半が戦死してしまった状況下の中で民間人を登用したことから、『正規軍人が戦力不足を補うために無理矢理民間人に戦闘をさせた』という見方も出来た。

それを否定することは出来るが、その場合、ホワイトベースの乗員として登用されていた民間人は全員ゲリラであったことを認めてしまうことになる。

「・・・私に何をさせたい？」

「ふっ、話が早くて助かる。今後、サイド3を含めた各サイドは独自の軍を持つことになる。貴官には我がジオン共和国軍に入隊してもらいたい」

「私に連邦を裏切れと？」

「裏切りではない。何度も言うようだが、もう戦争は終わったのだから。これは転職だ」

「・・・一つ、聞きたいことがある。もし私が下った場合、ミライ達の安全は保証されるのか？」

「勿論だとも。ついでに收容所時代に行われていた君とミライ嬢との大人の付き合いについても容認しようじゃないか」

キシリアはそう言いながら笑うが、実のところミライとブライトの付き合いについては転生者故のお節介だ。

と言うのも、ブライトとミライのカップリングが成立しなかった場

合、ハサウエイやチエーミンの2人が誕生しなくなってしまう。

流石に本来の世界では産まれる筈だった命を産まれなくしてしまうのは後味が悪いために捕虜収容所に収容されていた時もそれとなく2人がくつつくように仕向けたのだ。

そして、その狙いは上手く行き、ブライトとミライは将来を誓い合う仲となっていた。

まあ、それでもハサウエイやチエーミンが原作と同様に産まれるのは分からなかったので、そこだけが気掛かりだったが、実際はこのキシリアの心配は杞憂だった。

何故なら、すぐ後にミライが妊娠し、原作通り（原作ではハサウエイはUC0080年、チエーミンはUC0082年に生まれている）今年度内にハサウエイが誕生することになるからだ。

「・・・分かった。その話に乗ろう。ただし、期待に添えるかは分からないぞ」

「いや、貴官は必ず期待に答えてくれるさ。では、頼むぞ。ブライト・ノア中尉」

◇ルナツー MSパイロット更衣室

「まさか、あの赤い彗星があのかャスバル・レム・ダイクンだったなんてなあ」

訓練を終えた後、ルナツーのMSパイロット更衣室でバーナード・ワイズマン軍曹はそんな言葉を溢す。

ちなみにペガサスの乗員は一年戦争が終わると同時にバーニイは伍長から軍曹に、のび太は特務准尉から特務少尉といった感じにそれぞれ1階級ずつ昇進していた。

「有名なんですか？その人」

のび太はそう聞く。

「おいおい、知らねえのかよ。学校の教科書にもそこそこ名は出てるんだぞ」

そう、ジオン・ズム・ダイクンの息子であるキャスバル・レム・ダイクンの名は父親ほどではないが、サイド3の教科書の中に書かれてあるのだ。

当然、のび太くらいの子供が通う筈の小学校の教科書にも。

「そ、そうなんですか。僕、あまり教科書とかは見なくて」

のび太はそう言って苦笑するが、そもそもちゃんと教科書を見ていたとしても、のび太の通っていた学校はこの世界にはないし、たった1年前にこの世界にきたのび太がキャスバル・レム・ダイクンの名を知っている訳もなかった。

もつとも、そんなのび太の事情をバーニイが知るよしもない。

「おいおい、お前、教室で居眠りしているタイプかよ。よく軍隊に入つて短気な軍人連中にぶん殴られなかったな」

「・・・ここに来る前にも実戦は何度か経験したことがありましたからね」

「ん？なんか言つたか？」

「いえ。それより戦争が続いたのは予想外でしたね。僕はてつきり年末のあれで終わりかと思つてましたけど」

のび太やドラえもんにとつて戦争が続いたのは予想外だった。

正月に講和条約が締結されたと聞いて、それで終わりだと思つていたので。

だが、そこでバーニイは少し考え込むような仕草をすると、のび太に対してこう返す。

「それは仕方がないんじゃないか」

「仕方がない、ですか？」

「ああ、お前は子供だからまだ分からないだろうが、サイド3のザビ家を始めたとした政治家の連中は散々連邦からの独立を公約に掲げていたからな。それが破られたとなつちやな」

そう、前述したようにザビ家は散々独立を公約に掲げることで国民の支持を得てきた。

一応、今回の講和によつて自治権は獲得したものの、独立の方はお流れになったので、結果的にはあるが国民との約束を破ってしまったという見方も出来る。

そうなると当然その決定に納得行かない輩も出てくるし、そもそも

政治にほとんど興味がないバーニイでさえそんな感情を抱くのだ。

政治に関心があり、尚且つ独立を渴望していた人間が先の講和条約に対してどう思うかなど想像に難くない。

そこにあの演説、更にそれを行ったのがあのジオン・ズム・ダイクンの遺児となれば、それだけでザビ家の決定に不満を持つ人間は彼につくことを選ぶだろう。

「そう、ですか」

だが、のび太からすればなぜその程度の事でこんな大それたことを起こすのか理解できなかつた。

確かに独立こそならなかつたが、自治権は獲得できたし、賠償金も支払われる立場なのだ。

おまけに教科書で習った（時には実際に行った）終戦時の日本のように軍隊が解体させられるわけでも、進駐軍の国内駐留が有るわけでもない。

（そこまで悪い条件じゃないと思うんだけどなあ）

のび太はそう思うが、これはのび太がほんの一年前からやって来たばかりで、サイド3の住民がどれだけ独立を渴望していたかを知らないうということも大きく関係している。

まあ、とは言っても、正直のび太にとって今回の反乱がどのような理由であるかなど、どうでも良いことだ。

問題なのはこの新たに始まった戦争がいつ終わるかということだった。

「戦争の終わりが見えなくなりましたね」

「そうだな。まあ、所詮は反乱だし、国家と違って経済力や大量生産の基盤が有る訳じゃねえから、案外早く終わるんじゃないか？」

「・・・そうだと嬉しいですね」

バーニーに対してそう答えながら、のび太はネオ・ジオンについてであろうメイが今、どうしているか気になっていた。

(無事だと良いんだけど・・・)

のび太はそう思いながらメイの無事を祈った。



## UCC0080年 1月11日 ネオ・ジオンの進路

◇宇宙世紀0080年 1月11日 東アジア ペキン

あの宣言から1週間以上が経ち、ネオ・ジオン軍が華南の制圧を終えた頃、ネオ・ジオンの本拠地であるペキンではキヤスバル・レム・ダイクン、ジンバ・ラル、ダグラス・ローデン准将、アンリ・シユレツサー准将の4人が集まり、今後の方針についての協議を行っていた。

「さて、華南を占領して穀倉地帯を確保した訳だが、次に攻める拠点について諸君の忌憚なき意見を聞かせて貰いたい」

キヤスバルが残る3人に向かってそう言う。

現在のネオ・ジオンの占領地帯は華北、華南、満州、旧モンゴル東部だ。

この内、満州には穀倉地帯と石油、華北には鉱物資源と一部の工業地帯、そして、今回占領した華南には穀倉地帯と旧中国時代に建造された沿岸工業地帯の大半があった。

これらを占領したことにより、ネオ・ジオン軍は工業力を手に入れ、ネオ・ジオン軍が保有する艦艇の修理や建造も可能になったのだが、問題なのはこの先だ。

この時、ネオ・ジオン軍には5つの選択肢があった。

- 1．．．東進し、朝鮮半島及び日本列島を制圧する。
- 2．．．西進し、中央アジアへと侵攻する。
- 3．．．南進し、東南アジア一帯を占領する。
- 4．．．北進し、シベリア一帯を占領する。
- 5．．．現在の勢力を維持したまま防備を固める。

．．．もつとも、この内、4と5の選択肢は無いと言っても良い。何故なら、北に行けば広大なシベリアの大地を維持しなければいけないし、そもそも今は冬であり、そんな時期に厳寒な土地を攻めるのは自殺行為だ。

そして、現状維持もあり得ない。

現在のネオ・ジオンは総軍80万人であるが、逆に言えば80万人しか居ないのだ。

更にあの演説から9日が経つが、ネオ・ジオンに合流しようとする試みたり、エンツォ大佐のように宣言に呼応して動くジオン兵もあまり居ない。

これは転生者達が一年戦争中にダイクン派やジオン・ズム・ダイクンを信奉している人間などを片っ端からこの東アジア戦線に詰め込んだ為だ。

その結果、シャアはほとんど混乱を起こすことなくネオ・ジオンを纏め上げることに成功していたが、その代償として彼の宣言に呼応して動いたジオン軍はエンツォ大佐のような例を除けば本当に極僅かだった事へと繋がっていた。

こればかりは(エンツォ大佐の事例を除けば)転生者の目論み通りだったと言えるだろう。

そして、兵力と戦線がそのまま動かなければ、いずれ態勢を建て直した連邦軍によって押し潰されるのが落ちだ。

そういうわけで、実質、ネオ・ジオンが選べる選択肢は東進、西進、南進の3つしかなかった。

「私は東進を薦めます。敵の首都は早く叩いた方が良い」

キャスバルの言葉に対して、まずジンバがそう答える。

現在の地球連邦の臨時首都はトウキョウとなっていて、ここですぐ近くだ。

臨時大統領であるコウイチ・クロカワはトウキョウから臨時首都を動かしていない。

これは敵地の近くに敢えて首都を置くことで、連邦という組織全体の士気向上と求心力の回復を狙っていたからだ。

だからこそ、いま電撃侵攻すれば、首都を落とすことで連邦の混乱と求心力の更なる低下を誘える。

逆にこのまま放っておいて別の場所に侵攻したりすれば、地球連邦

はコウイチ・クロカワの狙い通りに士気と求心力を高めてしまい、こちらの予想よりも早く態勢を建て直してくる。

そうなる前にトウキョウを占領すべきだとジンバは主張した。

「いえ、それは意味がないでしょう」

だが、そんなジンバに対してダグラスはこう反論する。

「日本列島の防備は前線に近いだけあってかなり強固です。加えて、海という壁が立ちはだかっているので、陸伝いに攻めるわけにもいきません」

そう、確かにコウイチ・クロカワは味方を纏め上げるために敢えて敵の近くに首都を置くという危なげない事をしていたが、それでもただ危険な状態のままにしている訳ではない。

日本列島に配置されている兵力は100万人以上と、ネオ・ジオンの総兵力よりも多いし、既に主力機として運用が開始されているザクや最近開発が完了したドム（原作と同じ）などの最新鋭機が配備されている。

もともと、ザクにしろドムにしろ、ネオ・ジオンの主力機であるハイザックやガンダムⅡ、それに来月頭に完成予定のリック・ディアスには勝てないのだが、ここは重力戦線であるため、数が揃えばかなり面倒だ。

それにそもそも日本列島は海に向こうにあるので、海を渡っている時に攻撃されたら不味い。

「では、どうする？」

「私は南進を薦めます。東南アジア一帯を占領し、化石燃料を得るべきです。またシンガポール島まで到達できれば、南方からの陸上侵攻の可能性を完全に消失させることが出来ます。そして、そこから西進

してインドへ侵攻し、アラビア海を挟んでアフリカ共和国と合流を目指すべきです」

ダグラスはそう主張する。

アフリカ共和国軍と合流することに関してはダグラスも賛成だ。

あまり信用はできないが、他に味方が居ないという状況では手を組む以外の選択肢はないに等しいのだから。

しかし、その経路が問題だ。

もし直接西進する道を選んだ場合、アフリカ共和国と合流するには中央アジアと中東をほぼ丸々突っ切らなくてはならない。

それを選ぶくらいだったら東南アジア、インド、そこからアラビア海といった経路の方がよっぽど現実的だというのがダグラスの意見だったが、アンリ・シュレッサー准将はその意見に反対した。

「アフリカ共和国と合流を果たすというのは私も同意見だ。しかし、海路となると連邦に寸断される危険性がある」

そう、確かにダグラスの意見はアフリカ共和国と合流するのに一番最短の道だろう。

しかし、アラビア海という海路を使う以上、連邦海軍の海上封鎖によつてすぐに寸断される危険性がある。

一応、元戦略海洋軍の中の何隻かの潜水艦はネオ・ジオンについていたが、所詮は潜水艦であり、海上封鎖中の艦艇を全滅させるのはほぼ不可能だ。

水中用モビルスーツやホバークラフト搭載モビルスーツを使ったとしても、やはり限界がある。

となると、陸路で進撃してアフリカ共和国と合流するというのが一番確実な策ではあった。

・・・もつとも、それが成功できるかどうかは話が別であったが。

「とすると、やはりシュレッサー准将は西進を勧めるのかね？」

「ええ、一番大変ではありますが、それが一番確実ですからな」

「となると、見事に意見は3つに別れたわけだな」

シヤアはそう言いながら考える。

東進、西進、南進。

進路こそ3つであるが、作戦目的の種類は実質2つ。

すなわち、軍事的な意見を優先するか、政治的な意見を優先するかだ。

政治的な意見を優先するのであれば、やはり東進一択だ。

なにしろ、ジンバの言う通り、東進してトウキョウを攻め落とせば仮に首脳陣が脱出したとしても連邦の求心力は更に落ち、そこから生まれる連邦の政治的隙を自分達が開くことが可能になるのだから。

そうなれば、自分達には合流しなくともカラバやアフリカ共和国に合流したりする輩や新たな反連邦組織が結成されることにも繋がる可能性が高い。

だが――

(問題なのは先程ダグラス准将が指摘した通り、成功率が低いということだな)

前述したように日本列島の兵力はネオ・ジオン軍の総勢よりも多い。

一見、連邦の持っている兵器はジオン及びネオ・ジオンに比べると旧式兵器ばかりなので、兵器の質の差を生かせば攻略が可能ないように見えるが、幾ら質に劣ると言ってもこちらを撃破できない訳ではないし、現在の勢力圏の護りなども考えると、投入できる兵力には限りがある。

全軍で掛ければあるいは陥落させることも出来るのかもしれないが、現実的に考えてそんなことが出来る訳もない。

(そもそもネオ・ジオンに勝って貰っては困るしな)

今回の戦いの狙いは自分を利用しようとする勢力を肅清すること。出来る限り戦って最終的には盛大に負けて貰う必要がある。

しかし、今は負ける時期ではない。

勝つてもっと注目を集めなくてはいけない時期だ。

だからこそ、現実的に勝てる方針を選択する必要がある。

「キャスバル総帥はどうお考えで？」

そんなことを考えていた時、ジンバが自分の意見を聞いてくる。

「私か？私はダグラス准将の言う通り、南進が妥当だと考えるな。それが一番成功率が高い」

「しかし、敵の首都はすぐ近くですよ？」

「確かにな。だが、だからこそ惑わされてはならない。仮に敵首都を占領したとしても、その頃には我が軍の被害も甚大になっているだろう。そうなれば、我々はアフリカ共和国と合流することが出来ずに孤立。あとは惨めな敗退をするだけだ」

シヤアはそう言って東進は危険だと諭す。

そもそもネオ・ジオンの戦力は意外と低い。

兵力はそのほとんどが傭兵や義勇兵ばかり。

しかも自分があの宣言をして華南に侵攻するまでは連邦との裏取引によってまともな実戦を経験してこなかったのだ。

華南の時は陸続きであったからなんとかだったが、今回は海を渡って侵攻しなければならぬし、敵の方が圧倒的に数か上だ。

作戦が成功する確率は物凄く低い。

そして、兵力が消耗してしまえば、自分達が西進なり南進なりして  
アフリカ共和国と合流することは不可能になる。

いや、それどころか、兵力が大幅に減って士気が下がった途端に連  
邦の反攻が始まるかもしれない。

「はっ、申し訳ありません。出過ぎたことを」

「いや、構わない。これからもどんどん意見を言ってくれ。それでア  
ンリ准将、君は西進を推していたが、何か反対意見はあるかね」

「いえ、特には。アフリカ共和国との合流という目標は一致していま  
すし、キャスバル総帥が考えて仰られた事であれば否やは有りませ  
ん」

「そうか。では、我々の次の目標は東南アジアに決定する。指揮はダ  
グラス准将、君が執ってくれ」

「了解しました！」

こうして、ネオ・ジオンの次の進撃先は南へと決まった。

U C 0 0 8 0 年 1 月 1 3 日 子守り

◇宇宙世紀0080年 1月13日 サイド3 ギレン宅

「むー、また負けた！のび太、もう一回!!」

今年3歳となるプルシリーズの長女——エルピー・プルは膨れっ面をしながら、野比のび太特務少尉に対して今やっているゲーム——『ジオンの野望』の再戦を望む。

だが、その言葉に対して抗議したのは次女であるプルツーだった。

「おい、次は私の筈だぞ」

「良いの！私はお姉ちゃんなんだから!!」

「逆だろ。姉だからこそ譲るべきじゃないのか？」

「あの・・・2人とも喧嘩は」

喧嘩し始めた長女と次女に対して、プル姉妹の末娘であるプル・トウエルブ（後にマリーダ・クルスと命名）はどうか2人を宥めようとす。

しかし、私の強すぎる2人には効果が有りそうになく、目に涙を浮かべたその時、のび太が手を叩いてプル姉妹の注目を集めながらこう言った。

「2人とも落ち着いて。喧嘩はダメだよ」

「でも、プルツーが」

「プル、なんでも我慢しろとは言わないけど、お姉ちゃんなら妹に譲つ



てあげないと。ましてや、順番なんだから」

「むー」

「それ見ろ」

そう言っつてプルツーはどや顔を浮かべるが、そんな彼女に対してものび太は注意する。

「プルツーも。そんな言い方しちやダメ。偉そうな言い方はそれだけで反感を買うんだから」

「でも、女の偉い人はみんなこんなしやべり方をしているぞ」

「・・・この際、何処でそんな知識を仕入れているかは突っ込まないよ。だけど、それは本当に偉い人がやるもので、基本的に女の子がするしやべり方じゃないから」

のび太はそう言うが、実のところ、これは半ばのび太の偏見だった。そもそもこのび太の女の子のイメージとは、しずかのような御淑やかな女性だが、それはのび太が女性に対して抱いている幻想にすぎない。

まあ、それはのび太の方も内心では分かっているのだが、どうにもこのび太の中では『女の子』しずかのような女性』というイメージが強すぎてプルツーにもそういう「普通な言葉遣い」をして欲しいと思ってしまうのだ。

・・・もつとも、プルツーの言葉遣いは人によっては反感を買うというのも確かなので、のび太の言うこともあながち間違いではないのだが。

「・・・分かったよ」

何処か不満そうに言うプルツーに内心で溜め息をつきながら、のび太はこう思った。

どうして今自分は子守りをさせられる羽目になっているのか、と。数日前にルナツーからドラえもんと共に帰ってきたのび太だったが、そこでギレンから命じられたのはどういうわけか、プル姉妹の子守りだった。

これはのび太と懇意にしていたメイ・カーウインがのび太と敵対関係になってしまった故に、万が一にものび太がネオ・ジオンに寝返ることがないようにとの処置だったが、そんなことをのび太が知る筈もなかった。

(まあ、メイ達と殺し合ったりするよりは良かったかもしれないけど、ペガサス隊のみんなは未だに戦っている訳だし。なんか申し訳ない気がするな)

そんなことを思いつつ、のび太は次にプルツーと対戦するために「ジオンの野望」のシユミレーターを動かした。

◇フランス パリ

「やれやれ、折角昏睡状態から覚めたというのに、こんな最悪な段階と  
なってからまた実戦に出ることになるとはな」

先日、昏睡状態から目覚めたばかりの地球連邦軍総司令官ヨハン・  
イブラヒム・レビル大將は頭を抑えながらそんな愚痴を溢す。

ジャブローの一件から目を覚ました後、ジョン・コーウエン少将や  
臨時大統領となったコウイチ・クロカワから自分が昏睡状態となり目  
覚めるまでの話を聞いたレビルは思わず卒倒しそうになった。

それはそうだろう。

自分が昏睡していた5ヶ月の間に――

・南極条約を無視する形での核兵器（それも何度も）やNBC兵器  
の使用。

・こちらから提案する形で結んだ休戦条約をこちらから破棄する。

・大西洋大津波を引き起こし、大勢の敵味方（十民間人）を纏めて  
洗い流す。

・ジオンとの戦争が終わった直後にネオ・ジオンと名乗る輩が蜂起  
（しかも、ラプラスの箱という連邦にとって特大の爆弾を爆発させな  
がら）し、合わせてアフリカが連邦から独立した上に、エウーゴやカ  
ラバなどの反連邦組織が誕生する。

――といったどれか1つ取っても聞いた途端に頭痛と胃痛が同時  
に起きそうな事態が次々と起きていたというのだから。

しかも、これら全てが味方が引き起こした事となれば尚更だ。

更に――

「まさかブレックス君が裏切るとは」

レビルは自分の派閥であるブレックスの裏切りに心底ショックを

受けていた。

彼は軍人だけでなく政治家としての側面も持っていたが、同じ改革派であり、自分の理解者の1人だと思っていたからだ。

「この5ヶ月間の間に何か有ったと見るべきか、それともこれが彼の隠された野心だったのかは分からんが、どちらにしろ改革派は有力な人間を1人失ったことになるな」

そんな嘆きの言葉を吐きながらも、レビルは自分の仕事を果たすために目下計画中のアフリカ奪還作戦に関する書類に目を通すが、そこでもまたレビルはため息をつく。

「物資が上手く行き渡っていない。これでは作戦開始までにまだ時間が掛かる」

そう、物資の不足。

これが現在のアフリカ奪還作戦を準備する上で一番大きな支障となっていた。

端から見れば『あれだけ物資と国力が有りながらなにを』と思うかもしれないが、実はこれは決して冗談な話ではない。

連邦という国家は巨大であり、保有する資源、工業力、兵力は膨大なものだ。

しかし、巨大すぎるがためにネットワークが悪く、中でも全部隊に物資を行き渡らせる作業は非常に難しいものとなっている。

今まではゴップがこれらの作業を上手くやっていたのだが、そのゴップは先のアフリカ共和国軍によるジャブローへの核攻撃によって戦死しており、後任の人間が既にこの作業を行っていたものの、ゴップ程上手くは出来ていなかったのだ。

その為、膨大な物資をこのアフリカ奪還作戦に参加する部隊の一部に物資が届かないなどといった事態が発生しており、それが奪還作戦開始時期の遅れを招いていた。

(モタモタしている時間はないというのに)

レビルの心に苛立ちが募る。

それには早く戦いを終息させて被害を最小限に留めたいという思いも当然あったが、それ以上にレビルはアフリカ共和国軍の態勢が整うのを恐れていた。

何故なら、連邦軍情報部からの報告で、あのネオ・ジオンのMSであるハイザックのデータがアフリカ共和国軍に渡っており、アフリカでは既にハイザックの大量生産が行われているという情報がレビルの耳に入って来ていたからだ。

こちらの手にはザクやドムがあり、既に大量生産体制に入っているし、新型機であるゲルググも2月には完成する見込みであったが、向こうがネオ・ジオンのMSを使っているならば苦戦は免れないとレビルは考えていた。

・・・もつとも、実際は苦戦などという生易しいものではない。

この世界で連邦が開発したザク、ドム、ゲルググ。

これらはいずれにしても原作と同じ性能、つまり、原作一年戦争を戦い抜ける程度の性能しか有していない。

対して、ハイザックは一年戦争終結から7年後のグリプス戦役初期に連邦のエリート部隊であるティターンズが使っていた機体。

よほどパイロットの腕が離れでもしない限りは勝負にすらなりそうにないのだが、その事をレビルは知らない。

もつとも、この世界のMSがこのようなどんでもない進化を遂げたのはレビルが昏睡状態になった後の話であり、そんな短期間にここまですべてMS技術が発展していることを想像しろという方が無理な話なのだろうが。

「・・・やはり、多少無理をしても作戦開始をせめて2月初めには行うべきだろうな」

その重大な事実を知らないまま、レビルはそんなことを考えていた。

U C 0 0 8 0 年 1 月 1 7 日 行き詰まり

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 1月17日 東南アジア ネオ・ジオン軍  
野戦司令部

「完全に舐めていたな。この厳しい環境を」

ネオ・ジオン軍東南アジア攻略部隊の指揮官であるダグラス・ローデン准将は戦況図を見ながら苦い顔をする。

1月15日に東南アジアに向けて侵攻を開始したネオ・ジオン軍であったが、侵攻を開始してから3日目となった現在も侵攻を開始した時点から100キロ程しか進撃できていなかった。

その理由は幾つかある。

まず1つ目が連邦軍東南アジア方面軍の実力を甘く見すぎっていたこと。

現在の連邦軍東南アジア方面軍の司令官はイーサン・ライヤー准将であり、この人物は（性格に少々問題はあがあるが）優秀な指揮官だ。

更に彼の下にはザクが優先配備されている他、ドムなどの最新鋭のMSが配備されている。

まあ、これだけならハイザックの性能差で押し潰せそうなのだが、ここで問題となってきたのが東南アジアのジャングルだ。

ジャングルは日本語で書き直すと密林となり、文字通りの意味で木々が密集している状態の場所を表している。

当然、装甲車などの戦闘車両は通りづらい上に歩兵も進撃がしにくい。

もつとも、MSなら平然と踏み倒していけるのだが、問題なのは視界だった。

ハイザックにはガンダムⅡにも採用している全天周囲モニターが搭載されており、全方向の視界が確保できるように設計されているのだが、木々が生い茂る場所に隠れている敵を肉眼で発見するのは困難だ。

通常、こういった場合、サーモグラフィなどの赤外線センサーを使って敵を発見するのだが、それもミノフスキー粒子でダメになっただけで、肉眼で敵を発見する必要があった。

更にここは元々が連邦の土地で、ジャングル出身者も多数居る。

おまけにダグラス自身もジャングルでの戦いに慣れていなかった。

以前、オセアニア方面軍の司令を勤めていて、その勢力範囲にはジャングル地帯もあったのだが、彼の担当地区は主にオーストラリア。

勿論、視察などでジャングル地帯に赴いたこともあったが、所詮は視察であり、実際にそこで指揮するのは厳密には違う。

こういった事情もあり、ネオ・ジオン軍はジャングル戦において連邦軍に苦戦を強いられることとなっており、侵攻から3日目となってもその進撃は遅々として進んでいなかった。

「おまけに傭兵達がやらかしてくれたお蔭で住民達の反感も買っている。これではゲリラが出現するのも時間の問題だな」

ダグラスはそう考える。

前述したようにネオ・ジオン軍は義勇兵や傭兵が多い。

中でも傭兵はモラルが低いことで有名であり、金品の略奪や強姦などの所業をさも当然のように行う。

勿論、そうでない傭兵も居るし、その傭兵の元締めである民間軍事会社などがそのような行為を禁じているといったケースもあるが、貰いが少ない事を不満に思っている傭兵が憂さ晴らしにやったり、単純に暴れる行為を楽しむような人間も多く、そういった人間が引き起こした行為が傭兵全体のイメージを悪化させているというのも確かだった。

そして、今回の侵攻においても傭兵達がそういった所業を早くも犯しており、住民達の反感を買っていたのだ。

今のところ、まだ侵攻が始まったばかりということもあってゲリラの襲撃は起きていないが、それも時間の問題だろうし、仮にゲリラと



ならなくてもネオ・ジオンの敵対者である連邦への情報提供くらいは行うであろう事は想像に難くない。

ならば、傭兵達をクビにすれば良いのではないかとも思うが、元々ネオ・ジオンは兵力不足であるし、そもそも兵力に困っていなかったら傭兵など雇っていなかっただろう。

そういう訳で、住民達からの反ネオ・ジオンゲリラの結成はほぼ確定事項であると言える状況だった。

「前途多難だな。．．．しかし、それにしてもあまりにもジオン公国、いや、共和国の動きがないな」

ダグラスはネオ・ジオンの今後に不安を覚えるのと同時に、ジオン共和国の動きがないことを不気味に思った。

そもそもネオ・ジオンは今のところ、ジオン共和国に対してほとんど打撃を与えていない。

確かにエンツオ少将（戦死した為、ネオ・ジオンによって二階級特進された）の手によってソロモン駐留艦隊を半壊させたりしたが、サイド2やサイド5に駐留している艦隊が無事である以上、宇宙攻撃軍の大半の兵力は健在だ。

それにサイド1はこちらが占領しているが、ソロモンの残存戦力と睨み合っているお蔭で身動きがほぼ取れなくなっており、反対側のL4宙域を介してのネオ・ジオン勢力圏への降下作戦は十分可能だった。

まあ、戦後に友好国となる地球連邦に配慮しているのか、あるいは連邦に自分達の相手を押し付ける形で降下作戦をしていない可能性もあったが、元ジオン兵である自分達があれば盛大な蜂起演説を行った以上、ジオン共和国軍が反乱軍である自分達を直々に討伐しに来なければ、ジオン共和国の面子は丸潰れとなる。

あのギレンがそんなミスを犯すとも思えない。

またサイド3に潜入しているスパイによると、サイド3はあの演説に対して驚くほど静かになっているとの事で、政治的に見ても本国で

何か混乱が起こっているわけでは無さそうだ。

となると、すぐにネオ・ジオン討伐軍が編成されて自分達の討伐に掛かってくるというのがダグラスの予想だったのだが、どうやらその予想は外れてしまったようで、余計にジオン共和国上層部が何を考えられているのか分からなくなってしまった。

「まさか我々のモビルスーツの性能が予想以上だったので、次世代機が出てくるまで討伐を延期しているのか？・・・いや、それはないな」

ダグラスはその可能性に思い至るが、すぐに否定する。

確かにハイザックやガンダムⅡ、更には新型機であるリック・ディアスはジオン共和国の最新鋭量産機であるザムⅡの性能を上回っているし、全天周囲モニターやリニアシートなどの最新鋭技術が注ぎ込まれているが、これらの機体がジオン軍のMSと実際にぶつかり合った事は1度も無かった。

そして、常識的に考えるならば、仮にザビ派のスパイによってネオ・ジオンのスペック表などが盗まれていたとしても、実際にぶつかり合った事もないのにこちらのMSの潜在能力を含めた正確な力が伝わる筈もない。

ましてや、その報告書を見るのは結局人間だ。

精々、数字上で判断して自分達のMSより多少性能が優れている機体をネオ・ジオンが配備しているという認識しか持たないだろう。

まあ、戦う前からその機体がどれほどの能力を持っているかを正確に知っているというのであれば話は別だが、そんなことが現実には有りうるわけがない。

「そうになると、何か考えが有って今はその準備中だからなにも行動していないと考えるのが妥当か」

なんにしても、東南アジア及びインドの攻略は急がなくてはならない。

ダグラスは改めてそう実感していた。

◇サイド3<sup>ム</sup> ギレン宅

「あー、ダメだ！」

シンジはそう言いながら、床に倒れ込むように仰向けになる。

「だ、大丈夫か？ま、まあ、元気を出せ」

プル姉妹の末っ子であるプル・トウエルブ（後にマリーダ・クルスと命名される）はそう言ってシンジを慰めるが、プル姉妹の次女であり、シンジの対戦相手を務めていたプルツーは情け容赦なくこう言った。

「トウエルブ、甘やかすな。そんなことをすれば、付け上がってしまうぞ」

「いや、もっと優しくしてよ!!」

まるで奴隷を扱うような言葉を吐いてくるプルツーにシンジはそう突っ込むが、それに対してプルツーは鼻で笑いながらこう返す。

「ふん、2歳児に負ける11歳児など恥ずかしいにも程がある。そうは思わないのか?」

「ぐつ。そ、それはそうだけど・・・」

前々から内心で気にしていたその事を指摘されて、シンジは大きく落ち込む。

もつとも、シンジのゲームの成績はそれほど悪いものではない。

実際、プルとプルツー以外のプルトウエルブを含めた10人の姉妹にはシンジはほぼ互角の戦いを展開しているからだ。

更にシンジはプル姉妹以外とは対戦したことがないので気づいていなかったが、プルとプルツー以外の10人のプル姉妹はジオンのベテランパイロット並、プルとプルツーに至っては既にエース一步手前の精鋭パイロット並の実力となっていた。

これは言い換えれば、今のシンジはベテランパイロット並のMSの操縦技術があるということの意味している。

まあ、その持ち前の技量を戦場で活かせるかどうかとなれば、また話は違ってくるのだが、この時点のシンジがニュータイプとしての力に僅かながら目覚めているというのは疑いようのない事実だった。

もつとも、シンジはニュータイプという概念そのものを知らないので、その事には微塵も気がついていなかったが。

「もう、そんな言い方しないの!!」

「しかしな」

「じゃあ、お兄ちゃんがプルツーに勝てるように私が鍛える!!」

「ふん、お前に出来るかな?」

「むきー！お兄ちゃん、早速、今から特訓しよう!!」

「えっ、ちよ、プル」

シンジはそんな事を言いながら自分の手を懸命に引つ張るこの天真爛漫な長女に振り回されている自分に内心で戸惑いつつも、こんな生活も悪くないと思い始めていた。

現在進行形で戦争をしている国家の日常とは思えないほど平和な風景だったが、この平和な光景が1週間足らずのうちに惨劇へと変わるということを知らない。

UCC0080年 1月19日 赤髪の少女

◇宇宙世紀0080年 1月19日 L5宙域 宇宙要塞『ソロモン』

「正気ですか？私をまた使うなどと」

サイド1のエウーゴ及び反乱艦隊残党と睨み合う宇宙要塞『ソロモン』の一室。

そこではホワイトベースの件で拘禁されていたランバ・ラル元少佐とドズル・ザビ中将が会談を行っていた。

「ああ、本気だ。なにしろ、猫の手も借りたい状況なのでな」

ドズルは不機嫌そうな顔でそう言った。

流星に軍から脱走した挙げ句、結果的にではあるが連邦に寝返った人間を再度使うのは味方からも文句が出てくるであろう事が予測された為、ドズルもやりたくはなかったのだが、先日的一件で戦力が大きく減ってしまった現状では背に腹は変えられない。

「それに何もネオ・ジオンの連中の居るサイド1や東アジアを行けとは言わん。貴官にはオーストラリアに行って貰う」

「オーストラリア・・・カラバですか？」

「その通りだ」

カラバ。

地獄の4日間の時にはメルボルンとシドニーを占領していた反地球連邦組織であったが、現在は両都市から姿を消しており、行方を眩ませていた。

正直、カラバの組織的な脅威度はアフリカ共和国やネオ・ジオンと比べると圧倒的に下であったが、それでもそれなりに大きい組織となっているし、なにより何処に居るか分からないというのが面倒だ。ネオ・ジオンやアフリカ共和国に合流するなど、シンプルに1つに纏まってくればありがたいのだが、そもそもカラバは誕生したばかりでジオン情報部もその組織特性を把握しておらず、もし独自性の強い組織であったら合流せずに神出鬼没な戦いを展開してくる可能性が高い。

まあ、今のところそのような兆候はないのであくまで可能性の話であったが、原作のカラバはそんな感じだったので、一応視野に入れておく必要があった。

「お前にはカラバの搜索をしてもらいたい。本来なら、他の部隊をあてるべきなのだが、他に手の空いている部隊が居なくてな」

「・・・私が裏切るとは考えないのですか？」

「考えてはいないさ。と言うか、逆に聞くが今のお前はネオ・ジオンに付くべきだと考えているのか？」

「それは・・・」

それをドズルに指摘され、ランバは言葉に詰まる。

そもそもランバはネオ・ジオンが何をしたいのかよく分からなかった。

クーデターが狙いならば、本国に近い宇宙でやるべきであるし、演説場所も同じく宇宙でやるべきだっただろう。

ダイクンの名はアースノイドよりもスペースノイド相手の方がよく響くのだから。

加えて、資源こそあるものの、他の地域と比べて工業力に乏しいアフリカ共和国と組んだところで連邦及びジオンとの戦力差は覆せない

いいし、そもそも戦場が地球なのでジオン本国には演説での混乱以外に大したダメージを与えられない事くらいはシャアならば分かっている筈だ。

更にニュータイプによる平和の実現などと言っているが、ランバはニュータイプのことをよく知らない。

幾ら自分がダイクン派とはいえ、目的が不明瞭かつ本当に勝つ気が有るかどうかわからない集団に付く気はランバには更々無かった。

しかし、それとドズルの要請を受けるかは別問題だ。

「しかし、私がまた復帰すれば納得できない輩も出てくる筈です」

「勿論、見張り役くらいは付ける。・・・おい、入ってこい」

ドズルがそう言うと、部屋の外に待機していた1人の人物が『失礼します』という断りの言葉を述べた後に部屋の中へと入ってくる。

「・・・これが見張りですか?」

一瞬の沈黙の後、怪訝そうな顔をしながらランバはそう尋ねるが、それも当然だろう。

そこに居たのは、どう見ても十代半ば頃の少女だったのだから。

そして、ランバに“これ”扱いされた少女は、将来は美人になることを確約されているその整った顔を歪めた。

「ああ」

「しかし、彼女は どう見ても子供では?」

「まあ、今年で14で、今は13歳だからその通りだな。だが、彼女は間違いなく優秀だ。おい、自己紹介をしろ」



「エミリー・ツエツペリン特務大尉です。よろしくお願ひします」

そう言つて、赤髪の少女——エミリー・ツエツペリン（オリキャラ）  
特務大尉は頭を下げる。

そして、そんな彼女を見て、ランバはふとある存在を思い出した。

「・・・もしかして、彼女はニュータイプなのですか？」

ランバはそう尋ねる。

前述したようにランバはニュータイプの事について詳しくはない。

しかし、ニュータイプの場合、15歳に満たしていなくとも軍に入隊できる（もつとも、メイ・カーウインのようにニュータイプでなくとも入隊できる場合もあるが、これはあくまで例外）という話は聞いたことがあり、もしかしたら彼女がそうなのかもしれないと考えただ。

だが、ドズルは首を横に振つてそれを否定する。

「いや、彼女はニュータイプではない。しかし、士官学校を飛び級で卒業した才媛だよ」

「士官学校を？」

そう、この世界のジオンの士官学校は原作と違う部分が存在する。それは飛び級制度の存在だ。

この世界では転生者の想定よりも早く戦争が始まってしまった為に急ぎ士官を多数用意する必要があったが、兵隊と違って士官というのは簡単には増やせない。

その為、年齢に関わらず、試験（ただし、かなり難問）に合格すれば士官となれる飛び級制度を急ぎ作り、士官を増やすことを目論んだ結果、その制度を利用して士官となった人間の1人が彼女だったというわけだ。

もつとも、15歳に満たっていない為に特務階級となっているが、この飛び級制度で作られた問題は大人ですら合格が難しかった為、それを難なくクリアして、更には全科目満点という形で入隊した彼女は、紛れもなく天才レベルの優秀な人間だと言えた。

「・・・」

だが、ランバはそれを聞いて微妙な顔をした。

確かにあの飛び級制度を合格したということは、少なくとも頭脳面では大人顔負けな優秀なものを持っているということとは明らかだ。

しかし、若い年齢で学歴を持っているという事実は時として本人の過信にも繋がる。

飛び級制度というのは上の学級が勉強している事をそれより下の学年の中で特に優秀な人間が他の同級生よりも早く勉強できる制度だ。

上の学年の勉強をすることで、他の年代の人物よりも早く社会に出られるというのがこの制度の良いところだが、これは言い換えると精神的なものを学ぶ時間が短いということでもある。

通常、精神面での成長というのは時間を掛けて成長させるべきものであり、それを省いたりすれば人格を形成する上で重大な支障を来してしまう可能性もある。

そして、飛び級制度というのはそういういった精神的な面は全く考慮されていない為、社会に早く出ても周囲の人間と上手く付き合えないといった事態を招く危険性も孕んでいるのだ。

もつとも、それでも2、3年程度の飛び級ならさして問題にはならないのだが、士官学校の卒業は18歳、そして、この少女は今年14歳だそうなので、飛び級した当時は13歳。

つまり、5年飛び級していることになる。

・・・これだけ飛び級してしまえば、よっぽど人間が出来ていない限り、自分の実力に過信している可能性は高い。

実際、先程からエミリーの目から発せられる視線は、この『裏切る

かもしれない部隊の見張り』というとてもエリートがするとは思えない任務に対する明らかな不満を表している。

まあ、それを口に出さないだけ、同年代の人間よりは出来ているのかもしれないが、逆に言えばそれは彼女が軍という組織に完全には慣れていない証拠でもあった。

「……出来れば、大人を見張りに着けて欲しいですな」

「贅沢は言うな。さつきも言ったが、手空きの奴が他に居ないんだからな」

ドズルはそう言うが、その物言いに思わずカチンと来てしまったエミリーは思わず反応してしまう。

「お言葉ですが、その言い方は——」

「黙れ!!」

「!？」

だが、エミリーの反論はドズルの怒鳴り声によって封殺される。

「貴様は何様のつもりだ!?!尉官の分際で、将官と佐官の会話に口を挟むんじゃない!!」

一般人が聞いたたらかなり理不尽な言葉に聞こえるが、そのドズルの言葉は実は正しい。

ジオンでの階級は元帥（原作には無い）から二等兵までの19の階級が存在するが、それは大まかなステップに別けると元帥、将官（大将、中将、少将）、准将官（准将）、佐官（大佐、中佐、少佐）、尉官（大尉、中尉、少尉）、准尉官（准尉）、下士官（曹長、軍曹、伍長）、兵（兵

長、上等兵、一等兵、二等兵）となる。

そして、これは何処の軍隊でも同じであるのだが、基本的に軍隊では一ステップ上（ただし、准将や准尉などの准階級は除く）の者同士の話には割って入ってはいけないという決まり（もつとも、暗黙の了解に近いものだが）があった。

今回の場合、ドズルは中将でランバは少佐なので、将官と佐官の話となっているが、どちらの人間にせよ大尉（それも特務）のエミリーより上のステップの階級をした存在であり、軍隊の決まりに則れば、エミリーはドズルとランバの会話に割って入ってはならないのだ。

まあ、それでも本来ならエミリーがよっぽど食い下がらない限り、ここまで怒鳴る必要はないのだが、彼女はまだ幼い。

そして、先のエンツオ大佐の反乱の際には、彼女がオツゴ軍団の指揮を執る形で反乱艦隊をほぼ壊滅させるという戦果を挙げているのだが、下手に初陣でその有能ぶりを見せた分、最近はず調子に乗っている感じがあり、だからこそ、ここでその受かっている感情に冷や水を浴びせ、更には今後彼女の軍生活で関わってくるであろう上官や部下と軋轢を生まないように、敢えて必要以上に叱りつけることで、しっかりと上下関係を刷り込んでおく必要があった。

「・・・」

「・・・では、ランバ・ラル少佐。貴官はかつての部下、そして、エミリー・ツエツペリン特務大尉と共に地球に降りて貰う。両名、何か異論はあるか？」

「いえ、ありません」

「そうか。エミリー特務大尉は？」

「は、はい！こちらもありません」

「よろしい。ならば、少々遠回りにはなるが、グラナダ、サイド5を経由して1週間後には地球に降下して貰う。船はこっちで手配するから心配するな。では、解散！」

そのドズルの言葉に、2人は敬礼を以て返し、部屋を退出していった。

U C 0 0 8 0 年 1 月 2 3 日 幼女の虐殺

◇宇宙世紀0080年 1月23日 L2宙域 サイド3 ギレン宅周辺

「なに・・・これ」

シンジは呆然としながらその光景を見つめる。

食料が足りなくなったので、シンジは年上の使用人に言われて町に買い出しに出掛けたのだが、その買い出しを終えてシンジが戻つてみると、そこには燃え盛るギレン宅とその周辺に群がる多数の暴徒の姿があった。

「ダイクンを暗殺したザビ家の者共に鉄槌を!!」

「ジーク・ジオン!」

そんな言葉を叫びながら、暴徒達はギレン宅で破壊の限りを尽くしていく。

しかし、ギレン宅に居た使用人もただやられていた訳ではない。

この家は世話をするプル姉妹が12人と多かつたことから、使用人の数は20人以上居り、そのほとんどが元軍人という経歴を持っている。

更にテロリストの襲撃が懸念された事から武器も家の中に隠されており、使用人達はそれを使って暴徒に対して応戦を開始していた。

だが、襲つてきた暴徒の数は100人前後であり使用人側の5倍の数。

おまけに銃器まで持っている。

もつとも、元軍人の使用人達とは違って訓練を受けた訳ではないし、使用する武器の性能差などもあるので、あらかじめ来ることが分かっていたら問題なく対処できたのだが、今回は突然襲撃を受けた為

に数で劣る使用人側が初動の対応に遅れてしまい、その結果、応戦し始めた頃にはほとんど手遅れといった状態となってしまうていたのだ。

更に外から見ていたシンジは知らなかったが、この時点で既にプル姉妹の何人かは暴徒によるなぶり殺しに遭って死亡してしまっていた。

「ど、どうしよう・・・」

シンジはお世話になってる家が焼かれているその現状を見て思わず動揺してしまい、どうするべきか全く分からずにいた。

冷静に考えれば、シンジのような子供に出来ることはほぼ無いので、ここから一旦離れてから渡された携帯で警察に通報するべきだったのだが、この世界に来る前から数々の大冒険を潜り抜けてきたのび太と違って、前の世界で冷たい家庭環境の中で日々を過ごしていた事以外はまったくの普通の少年であるシンジにこのような非常事態での冷静な判断など出来るわけもない。

ただそんな中でも生物特有の生存本能だけは上手く働いており、『この場から逃げ出したい』という思いがシンジの中で徐々に大きくなっていく。

しかし、その時――

『助けて!!』

突如、聞き覚えのある少女の叫びがシンジの脳裏を走る。

実際に耳に響いたわけではない。

そんな気がしただけだ。

しかし、その瞬間、先程までシンジの中にあっただ『逃げたい』という感情は何処かへと消え失せ、シンジは現在進行形で銃撃戦が繰り広げられているギレン宅へと突撃していった。

◇数時間後 公王府

「なんとということだ・・・」

『ギレン宅、ダイクン派の暴徒に襲撃される』。

その報告をたったいま自らの配下であり、ジオン共和国首相でもあるダルシア・ハバロから受け取ったギレンの父——デギン・ソド・ザビは思わず顔を手で覆う。

三週間前のキャスバルの演説以来、ジオン本国は驚くほど静かだった。

多少のデモくらいは起きていたものの、それでもザビ家が当初懸念していた暴動の大量発生という事態は起きておらず、あまりの静かぶりにザビ家の面々は却って不審に思っていたくらいだ。

だからこそ、今回、ギレン宅が暴徒に襲撃されたことはある意味自然な光景とも言えたのだが、だからと言って起きて欲しかったかとか聞かれれば答えはNOである。

しかも——

「幼い子供をも虐殺するとは・・・野蛮人共め！」



デギンは怒りの声を上げる。

そう、今回の襲撃は暴徒達が駆け付けた警察や軍によって鎮圧された事によって終結し、暴徒側はほぼ全滅、僅かに生き残った人間も捕縛されるという結末となった。

しかし、結果としてギレン宅で働いていた使用人達は暴徒と同じくほぼ全滅、彼らが護っていたプル姉妹もまた長女のエルピープル、次女のプルツー、更に原作でマリィダ・クルスと命名された末娘であるプルトウエルブの3人を除いた9人が殺害されてしまっている。

しかも、状況から見て襲撃に巻き込まれたのではなく、明らかに故意に殺されており、ザビ家の関係者というだけでまだ二桁にも満たない年齢の少女を平然と殺した暴徒達にデギンは怒りの色を隠すことが出来なかった。

「・・・それで暴徒共の背後関係は洗えたのか？」

「はっ。拘束した数人の暴徒を尋問したところ、どうやら彼らはダイクン派の思想を持ってはいたようですが、支援していたスポンサーはこれといって無いようです」

デギンの問いにダルシアはそう答える。

「突発的に徒党を組んで襲撃したということか？その割りには統率が取れていたようだが」

そう、実際に見た訳ではないが、今回襲撃した暴徒はある程度統率が取れていた筈だ。

何故なら、確かに暴徒の数は100人も居たが、ギレン宅に居た使用人はそのほとんどが元軍人であり、戦闘のプロばかり。

おまけに1人や2人なら兎も角、20人という纏まった数が居て武器も有るとなれば、よっぽどの事がない限り、5倍程度の数の差など

容易に引っくり返せる。

それだけ統率の取れていて戦闘訓練を受けている者とそうでない者には差が有るのだ。

しかし、現実には20人の使用人のほとんどが死傷してしまった上に護っていた筈の9人のプル姉妹まで死んでしまった。

ということは、暴徒側もある程度統率が取れていたことになる。しかし、纏まりに欠ける暴徒側が軍人の集まりを苦戦させるほどの統率を発揮するには相当な統率力を持つ指導者が必要だ。

既に死んでいるならばそれで良いが、もしあの場から逃げ出すことに成功していた場合、今後もザビ家にとって脅威となってくる可能性がある。

「ええ、暴徒達の話の聞くと、彼らの指導者は少年だったらしいですが、彼は何処で学んだのか、指揮が相当上手かったようです」

「少年、か」

デギンはひきつった顔をする。

無理もないだろう。

アニメで自分のような悪に位置付けされるキャラクターを主人公の少年が叩くというのはよく有る話であり、それはこのガンダムの世界でも例外ではないのだから。

もともと、この時代の宇宙世紀の主人公であるアムロ・レイはこちら側なのでその心配はないと言えるのだが、それでもどうも自分の位置付けを考えると少年という言葉には警戒してしまうのだ。

「それでその少年は捕まえたのか？」

「いえ、既に死亡しているようです。確認も済んでいます」

「そうか。身元は特定できるか？」

デギンはそう尋ねる。

死亡が確認された以上、心配はないのかもしれないが、万が一何かの間違いであった場合、大変なことになってしまうかもしれない。

その為、念のために身元を尋ねていざとなったら家族を人質にすることも考えていたのだ。

汚い手と思われるかもしれないが、向こうは3歳にも満たない子供を10人近く虐殺することをやってのけているので、これくらいは許されるだろうとデギンは考えていた。

「そこまでは聞いておりませんので分かりませんが・・・遺体が確認されている以上、調べれば案外すぐ出てくるかもしれません」

「では、至急調べてくれ。そこから暴徒共の背後関係を洗えるかもしれない。・・・まあ、可能性は低いかもしれないがな」

「分かりました」

「あといま思い出したが、彼女達はギレンの養女だったな。そのギレンはどうしている?」

「耳に入ってきた情報では養女達の死亡を聞いた途端に倒れられたと。命に別状は無いようですが、過労もあって数日は目覚められないような状況ではないとのことなので、今はサスロ様が代わりに執務を臨時で引き継いでいるようです」

「そうか。では、ギレンにはそのまま療養に集中してもらおう。無理に出てきて潰れて貰っても困るからな。ところで、ギレン直轄の親衛隊の方は?」

「親衛隊ですか?」

ダルシアは何故いまその事を尋ねるのか分からずに思わず聞き返す。

まあ、それはそうだろう。

普通に考えれば、クーデターを起こさない限り、親衛隊の動向など尋ねてもしょうがないのだから。

だが、デギンはクーデターを起こすつもりはなかったが、別の事を気にしていた。

それはギレンが倒れたことによって親衛隊が暴走しないかということだ。

心配のし過ぎかもしれないが、親衛隊の長であるデラーズ大佐にはそのような暴走癖があるので、念のために尋ねておきたかったのだ。

「ああ、特にデラーズ大佐は今どこに居る？」

「デラーズ大佐ならば、ギレン総帥の見舞いに出向いておりますが」

「・・・そうか、ならいい。では、下がってくれ。例の件、くれぐれもよろしく頼むぞ？」

「分かりました」

ダルシアはそう言うと、デギンの居る部屋から出ていった。

U C 0 0 8 0 年 1 月 2 9 日 大人の仕事

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 1月29日 L2宙域 サイド<sup>ム</sup>3 墓場

「・・・」

サイド3・ムンゾのとあるバンチに存在する墓場。

そこではつい先程、骨壺が入れられたばかりの墓場の前で1人の少年が立ち尽くしていた。

(何も・・・出来なかった)

少年——碓シンジはそんなことを思いながら両方の拳を思いきり握り締める。

シンジは悔しかった。

漫画に出てくるヒーローのようにプル姉妹達を助けられなかったことが。

勿論、そんなことが現実には不可能なのは分かっていた。

もしそんな存在が居たのであれば、自分はあれほど過酷な幼少時代を送ることは無かつたであろうから。

更に言えば、シンジは完全に何も出来なかったわけではない。

生き残った3人のプル姉妹の内、末娘であるプルトウエルブが助かったのは紛れもなくシンジの功績だ。

もしシンジが居なければ、プルトウエルブは暴徒によって傷つけられ、最低でも重傷、最悪の場合は死亡してしまっただろう。

しかし、その功績をもって他のプル姉妹の死を割り切れるほど、シンジも割りきりの良い性格はしていない。

もしシンジがそんな性格であったら、原作終盤であそこまで精神は磨耗しなかつただろうし、そもそも内向的な性格になることもなかつただろう。

(もつと、強くならないと駄目だな。でも——)

幼少期から『妻殺しの父の息子』と言われて虐められてばかりだった自分にそこまで強くなることが可能なのだろうか？

シンジはそんな疑念を抱く。

(それに僕に何が出来るんだ？喧嘩が強いわけでもなければ、勉強もあまり出来ない。こんな僕に出来ることなんて——)

シンジの思考はどんどんとネガティブな方向へと進んでいく。

しかし、そんな時——

「ここに居たのか」

1人の男がシンジに声を掛けてくる。

その聞き覚えの有る声に、シンジは思わず声がした方向を振り向くと、そこにはジオン共和国の総帥——ギレン・ザビが立っていた。

「ギレン・ザビさん？」

「ギレンで良い。君も墓参りか？」

「・・・はい」

「そうか」

ギレンはそう言うと、墓の前に立って手を合わせ、天国に居るであろう9人のプル姉妹の冥福を祈る。

そして、祈り終わると、改めてシンジに対して向き直りながらこう言った。

「さて、シンジ君。昼飯はもう食べたのか？」

「えっ？いえ、まだですけど・・・」

「そうか。では、一緒に食事をしないか？何か悩みがあるようだが、聞くくらいなら出来るぞ？」

「でも・・・」

「何か悩んだ時は大人に頼ってみろ。まあ、最終的には自分で判断を下す必要があるが、大人というのは曲がりなりにも君達子供より長く生きてるからな。参考くらいにはなるぞ」

あくまでこの世界では、だがな。

ギレンは内心でそう思いながら、シンジの出身世界である『新世紀エヴァンゲリオン』の大人達について考える。

（あの世界は子供を放り出した後は基本的になにもしないからな）

ロボットが活躍する世界というのはガンダムを含めても大抵が子供に頼っているものばかりだ。

もつとも、そうしないと子供向け番組ではなく、ただの戦争アニメになってしまうという事情も絡んでいるので、仕方のない部分もあるのだが、だからこそ、その世界で住む子供達は過酷な人生を歩んでいる。

特に新世紀エヴァンゲリオンの世界でシンジが所属する組織であるネルフは基本的にエヴァとパイロットを放り出した後はなにもしない（特にテレビ版）のだ。

一応、作戦は考えはするのだが、それを考えて伝えた後は安全な穴蔵（ジオフロントのネルフ本部）に引きこもっている。

もつとも、エヴァ以外はATフィールドを使えないという事情（計

画のために使えないようにさせていたという見方もあるが)もあるの  
で、パイロット達の邪魔をしないためにも安全な場所に引きこもると  
いう選択肢は合理的ではあった。

しかし、それで納得するかどうかは人による。

惣流・アスカ・ラングレーや綾波レイは納得するだろう。

彼女達は長年訓練を受けてきている上に実戦に出ることに納得  
している。

更にその性格上、大人が後方に引きこもる事に特に不満は持ってい  
ない。

だが、シンジはどうだろうか？

訓練も受けていなければ、実戦に出た経緯もほとんど周囲からの脅  
しみたいなもの。

そんな中で大人が後方に引っ込んでいて自分だけ戦闘に出されて  
いるという状況であれば、別にシンジでなくとも不満は持つし、納得  
もしないだろう。

ましてや、初めての戦闘でいきなり(文字通りの意味で)痛い目を  
見たのであれば尚更だ。

その事を原作で赤木リツコは「ヤマアラシのジレンマ」と評して  
いたが、別に可笑しなところは何もない。

シンジの反応はあくまで極普通のものであり、それに気づかないネ  
ルフの人間の方が異常だったにすぎないのだ。

それでも使徒戦中盤までは取り敢えずなんとかあったのは、使徒戦  
そのものに慣れてきたことと仲間や友達との馴れ合いの楽しさによ  
って心が癒されていた為に、そういった内々に存在する不満がうや  
むやになっていったからだった。

しかし、使徒戦が終盤に入り、シンジの周囲の人間の誰もが余裕が  
無くなってくると、それまでに溜まった不満が一気に噴出して終盤の  
シンジになったのだ。

(大人なんだから、きつちり最後までやり遂げろよ。まったく)



ギレンは物語終盤のネルフの大人達の惨状ぶりを思い出して、思わず怒りを覚える。

なにしろ、物語終盤の大人、特にパイロットに直接関わるミサトやゲンドウの愛人であるリツコは自分達が直接戦闘をしたわけでもないのに勝手に潰れてしまったし、そもそも第12使徒戦の頃から発令所スタッフはゲンドウを除いてほとんど役に立たなくなっており、ぶっちゃけエヴァを放り出す以外は何もやっていないと言っても良い。

つまり、新世紀エヴァンゲリオンという物語に出てくる大人達の中で一番自分の仕事をまっとうしたのは、シンジ達を道具にしたゲンドウだったという笑えない事実が存在していたのだ。

子供を利用するという点では自分達も人のことは言えないが、そこまでしてやる以上、大人として与えられた自分の仕事くらい最後までまっとうして欲しかったというのがギレンの本音だった。

(考えれば考える程、ネルフという組織は情けないな。まあ、戦自の侵攻を受けた際に人を撃つことに躊躇うなんて事をしているところから見るに、メンタルはよっぽどチキンな奴ばかり揃っているんだろうから仕方ないか)

そんな悪態をつきながらも、ギレンは未だ迷っている様子のシンジに対してこう言った。

「それと私の家が無くなってしまったから、今後の君の身の振り方についての話もしたいんだ。ダメか？」

「・・・分かりました」

「では、行こう」

ギレンがそう言った後、2人は近くにあるレストランの方向へと歩

いていった。

◇L5宙域 サイ<sup>ザ</sup>イド<sup>ン</sup>1

「こちらが受取書です。サインをお願いします」

今日、上手くソロモンのジオン共和国艦隊の哨戒網をすり抜け、サイド1へと入港したエウーゴ補給部隊の指揮官——マチルダ・アジャーン中尉はそう言いながら、エウーゴ艦隊の指揮官兼エウーゴ代表の男——ブレックス・フォーラー大佐に補給物資の受取書を差し出す。

「ご苦労。しかし、よくこれだけの物資を運べたな」

ブレックスはマチルダから差し出された書類にサインをしながら運ばれた物資を見る。

そこにはアフリカ共和国に供与されたというMS——ハイザックが多数置かれており、中には少数ではあるがネオ・ジオンでも最新鋭のリック・ディアスの姿もあった。

正直、これはありがたい増援だ。

エウーゴ艦隊の総数は約60隻、反乱軍残存艦隊は数隻であり、両

方を足しても70隻は越えない。

対して、ソロモン艦隊の方は一時的に数を半数に減らしたものの、サイド5とア・バオア・クーからの増援によって既に戦力は回復しており、自分達に圧力を加えている。

しかも、エウーゴのMSはザクとボールが主力であり、とてもではないがジオンのMSに対抗は不可能だ。

元ジオン艦隊である反乱艦隊もソロモンからの脱出の際にMSがほとんどやられてしまった為に10機程しか保有していなかった。

幸い、ジオンがコロニーへの被害を気にした為に嫌がらせ以上の事はされていなかったものの、もし本気で攻めてきていたら当の昔にエウーゴは全滅してしまっただろう。

しかし、今回来たハイザックやリック・ディアスはジオンのMSをも上回る性能を持っており、これがあればサイド1周辺の制宙権の奪還くらいは十分に可能だった。

「はい、ミノフスキー粒子の濃いところを上手く進めましたので。しかし、この次の補給は何時になるか分かりません。更に言えば、我々も無事に帰れるかどうかも」

「それなら、もう少しここに留まったらどうだ？制宙権をこちらの手に治めてからなら比較的安全に帰れるかもしれないぞ」

「申し訳ありません。なにぶん、予定が詰まっております。補給に成功したらすぐに帰ってまた補給任務に就くようにキツク言われています」

「・・・そうか。まあ、こちらは苦しい立場だからな。貴官らのような補給部隊の仕事は多いか。分かった。だが、途中まで送るくらいの事はさせてくれ。それがこちらの精一杯の誠意だ」

「はっ、ありがとうございますー」

ブレックスの言葉に、マチルダは敬礼を以て返した。

UCC0080年 2月1日 東南アジア戦線

◇宇宙世紀<sup>uc</sup>0080年 2月1日 地球 東南アジア シンガポール島 地球連邦軍東南アジア方面軍司令部

「・・・思ったより歯応えが無いな。こっちに侵攻してきたジオンの連中は」

地球連邦軍東南アジア方面軍司令官——イーサン・ライヤー准将は机の上に広げられた東南アジアの戦況図を見ながらそう言うが、イーサンの後任として独立機械化連隊の連隊長に就任したコジマ大佐はその発言に対する注意を行う。

「ネオ・ジオン、ですよ。ライヤー准将」

「ふん、どっちでも変わらんよ。ここにジオン軍の連中が居ない限りはな」

「・・・そうですか。しかし、くれぐれもジオン共和国の人間の前では言わないで下さいよ。問題になりますからな」

「分かっている。しかし、向こうが歯応えのない連中というのは変わらんだろうか?」

「まあ、それはそうですが・・・」

そこにはコジマも同意する。

実際、そう言ってしまうほどネオ・ジオン軍の軍勢は弱かった。

なにしろ、ジオン共和国で最新鋭のザムⅡすら上回るMS——ハイザックを駆使しているにも関わらず、この半月間でのネオ・ジオン軍の進撃は旧ミャンマー東北部、旧ラオス北部、旧タイ北端、旧ベトナム

△北部を結ぶ線でストップしてしまっていたのだから。

「今回、我々が相手をしている敵将はダグラス・ローデン准将。我々にとってはオーストラリア以来の因縁の相手ですが、そんな彼が指揮しているにしては進撃速度が予想よりも遅いですな」

「おそらく兵の統制が上手くいっていないのだろう。なにしろ、傭兵が多数居る組織だからな」

イーサンはそう言うが、実のところ、これは半分正解といったところで、実際は傭兵どころか義勇兵の統制さえあまり上手くいっていない。

何故なら、オーストラリアの時の義勇兵は各サイドから集められた中でも比較的まとまな者を選別して編成されていたが、ネオ・ジオンの場合はダイクン、あるいは彼の思想の信奉者ばかりが転生者達によって意図的に送り込まれており、それらの者の思想が暴走することによって、現地人や友軍の正規兵・傭兵と軋轢を起こす例が多く発生していたからだ。

つまり、ネオ・ジオン軍の東南アジア侵攻軍の中でダグラスの言うことをまとも聞いているのは、正規兵と一部の義勇兵のみであり、大半の義勇兵や傭兵は命令を一応聞きはするが、遵守しないことも多く、ネオ・ジオン軍の足を引っ張っている状態だった。

もつとも、流石にこの時点ではそんなネオ・ジオンの無様な内情はイーサンには伝わっていない。

その為、ネオ・ジオン軍の進撃速度が予想以上に遅いのは、傭兵が暴走しているの自分達の奮闘、そして、この東南アジアのジャングルという環境に手を焼いているからだといーサンは判断していた。

「おまけに連中、占領地でも敵を増やしているらしいな。お蔭で現地人はこちらに協力的だ。・・・ここで攻勢に出れないのは惜しいな」

そう、前述したネオ・ジオンの義勇兵や傭兵達が現地人と軋轢を起こしたことによつて、反ネオ・ジオンゲリラが早くも結成されており、既にネオ・ジオン軍を度々襲撃していた。

更に敵の敵は味方ということ、現地人も比較的連邦軍に協力的になつてきており、そのお蔭で東南アジアでの連邦軍の活動も以前よりやり易くなつてきている。

その結果、ネオ・ジオン軍は東南アジア北部で立ち往生している状況となつており、本来ならばここで攻勢を掛けてみるというものも一つの手ではあつた。

しかし――

「仕方ありませんな。こちらのMSの殆どがやられてしまいましたから」

コジマはイーサンの言葉にそう返しながら、先日 of 事を思い出す。実はコジマの指揮する独立機械化連隊は先日、ネオ・ジオンに対する攻勢を仕掛けて多少の損害を与えることに成功したのだが、その代償として連隊に所属するMS隊の8割が損耗するという大損害を負つてしまつたのだ。

まあ、これは考えてみれば当然の話だつた。

そもそも連邦の主力MSであるザクとドム、そして、ネオ・ジオンのハイザックは原作通りの性能を持っているが、転生者ならすぐ分かるように連邦が使っているMSは原作一年戦争時の機体であり、ネオ・ジオンが使っている機体はグリプス戦役時のもの。

そして、一年戦争の主力機とグリプス戦役時の主力機が戦えば、当然の事ながら後者が勝つ。

なにしろ、両者のMSは原作基準で8年という年代差が有るのだから。

つまり、この損害は自軍と敵軍のMSの性能差を見誤つたコジマのミスだつたと言える。

・・・もつとも、転生者でもないのにこれだけの性能差を正確に認

識しろという方が無理なのかもしれないが。

「もう少しで新鋭機が量産されると聞きます。それを待つて攻勢に出るべきでは？」

「それは無理だな」

「どうしてです？」

「今、アフリカ侵攻作戦が始まっているのは知っているだろう？おそらく、レビルが全部取ってしまってしまおうよ」

そう、現在、アフリカでは連邦軍によるアフリカ上陸作戦が行われている最中であり、アフリカ北西部の旧モロッコにはレビル率いる本隊が、そして、南西部の旧アンゴラからはパウエル中将率いる別動隊が上陸を開始していた。

作戦が開始されたばかりだけに、イーサンのところには詳細な情報は入ってきていないが、東南アジアよりもMSが必要な場所になっているのは間違いなく、おそらく近いうちにロールアウトするゲルググは全てアフリカ戦線に取られてしまう。

少なくとも、イーサンはそう予想していた。

「それは残念ですな。まあ、仕方ありませんが、そうなるはこちらの戦線は暫くの間、膠着ということになりそうですかな？」

「そうなるな。向こうの足下に火が点いている間に攻めたかったがね。まあ、向こうがゲリラや我が軍による嫌がらせによって消耗してから攻めるといいうのも存外に悪くない」

イーサンはそう言いながら、冷めてしまったコーヒーを口に含んだ。



◇アフリカ 旧アングラ 地球連邦軍アフリカ攻略軍別動隊  
ビッグ・トレー級陸戦艇『マニラ』 艦橋

ビッグ・トレー級陸戦艇。

それは地球連邦陸軍が採用している全長215メートルの超巨大な陸戦艇であり、その大きさはもはや陸上戦艦と呼称しても良いくらいだ。

主に指揮車両？として使われており、作戦の際には主に将官、あるいは重要な任務に就く佐官クラスの人間が艦橋に居座って全体の指揮を執ることとなっている。

これだけ大きいと言うまでもないことだが、その装甲は厚く、MSが使うマシンガンでは艦橋に直接撃ち込まなければならず、30センチ砲を持つヒルドルフであっても10キロくらいまで近づかなければ有効打を与えられない。

そして、そんなビッグ・トレーの艦橋ではアフリカ攻略軍別動隊の指揮を執るパウルス中将が現在の戦況を再確認していた。

(随分と脆いな。敵は我々が西岸から上陸してくるとは考えていなかったようだ)

パウルスはそんな感想を抱く。

アフリカ共和国は前述したようにネオ・ジオンからハイザックの情

報を提供され、既に量産体制にも入っている。

しかし、幾ら最新に近いMSを生産していると言っても、供与されてからあまり時間も経っていない上に他の大陸に比べて工業力が低いのもあり、全ての部隊にハイザックが行き渡っている訳ではない。

現にパウルスが上陸した場所を守備していたアフリカ共和国軍の部隊はハイザックどころか、MSは一機たりとも無く、お蔭で別動隊は悠々と海岸付近を制圧し、橋頭堡を築き上げる事に成功していた。

「レビル將軍の本隊の方はどうだ？」

パウルスはオペレーターに旧モロッコ北部に上陸した筈の本隊の動向を聞く。

すると――

「はっ、上陸には成功したようです。しかし、被害は甚大であるため、進撃には掛かるとの事です」

オペレーターはそう答えた。

そう、悠々と上陸できたパウルス中將の別動隊とは違い、レビル率いる本隊の上陸場所付近にはハイザックが配備されたMS部隊が配置されており、上陸した本隊に大損害を与えていた。

それでも形振り構わず戦力を集中投入したことによってどうにかMS部隊を撃退し、橋頭堡は確保したものの、これ以上の進撃は最低でも24時間の準備期間を経ないと出来ないような状態となっていたのだ。

「そうか。では、我々はすぐに東進を開始する。各部隊に奥地への進撃の用意をするように伝えろ」

「本隊と歩調は合わせないのですか？」

「何故、我々が本隊に歩調を合わせねばならん？それに本隊とは違って我々にはまだまだ余力がある。ならば、敵の態勢が整う前に進撃した方が良い」

「・・・分かりました。そう伝えます」

「頼んだぞ」

そう言い終えた後、パウルスはどっかりと指揮官用に用意された椅子へと座る。

——そして、この数時間後、アフリカ攻略軍別動隊は東進を開始した。

UC0080年 2月3日 MS計画変更

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 2月3日 L2宙域 サイド<sup>ム</sup>3 総帥府

「MS開発計画の変更、ですか？」

職務に復帰したギレンによって総帥府に呼ばれたジオン共和国司令部技術本部の本部長——アルベルト・シャハト技術少将はギレンから渡された書類を見ながらそう言う。

「そうだ。バムの生産を中止し、代わりとしてザムⅡのコクピットを全天周囲モニターとリニアシートに換装したザムⅡ改の量産を進める。それと既存のガンダムシリーズも改造を行い、ザムⅡ改と同じ処置とする」

「待ってください。今さらバムの生産を中止するのは製造現場の混乱を招くのでは？それに幾ら全天周囲モニターを搭載すると言っても、ザムⅡではネオ・ジオンのハイザックとの性能差はカバー出来ません」

「そこはパイロットの腕でカバー出来るといふ試算が出ている。そもそもザムⅡとハイザックは基本性能ではそこまで差がない」

そう、アルベルトはあくまでスペック上の数字からザムⅡとハイザックの性能の試算を出しているが、実はそこまで基本性能の差はなく、ギレンの言う通り、パイロットの腕でなんとか出来る程度の差ではない。

原作で例えるなら、ザクⅡとジムの差くらいなものだ。

それでもハイザックとザムⅡが戦えばかなりの高確率でハイザックが勝つと言われるのは、全天周囲モニターの有無によるものが大きい。

しかし、それは逆に言えばザムⅡを全天周囲モニターに改装すれば、ハイザックにもある程度は対抗可能になるということでもある。

「しかし、ネオ・ジオンにはリック・ディアスというハイザックを上回る機体も登場してきています。流星にそれが相手では……」

「分かっている。だが、こちらが掴んだリック・ディアスの性能が本当だとすれば、バムを量産したとしてもキツイ。ならば、数で押し潰した方が良い。……それにリック・ディアスは元々生産に向けた機体ではないしな」

ギレンは最後の部分を小声で呟く。

そう、リック・ディアスはグリプス戦役の最初期から出ているMSであったが、結局、エウーゴの主力機となったのはネモだったところからするに少数生産機と見るのが一番妥当なところだと言えた。

いや、厳密には『元々は主力機であったが、コストが高過ぎた為にネモに主力機の座を奪われた』という方が正しいのだろうが、なんにせよそれほど数が出てくるとは思えない。

ということとは、ネオ・ジオンはハイザックを主力機、リック・ディアスは指揮官機、そして、ガンダムⅡをエース機として運用してくる可能性が高いと言えた。

「何か仰いましたか？」

「いや、なんでもない。それよりZガンダムの件だが、これはそのまま続行しろ。おそらく、使う機会が出てくるからな」

「分かりました。しかし、今から計画を変更するとなると、関係各機関を説得するのに1週間は掛かりますが……」

「それくらいなら構わん」

「了解しました。では、失礼します」

アルベルトはそう言って敬礼すると、部屋を退室していく。

そして、それと入れ代わるようにセシリア・アイリーンが部屋へと入室してくる。

「お疲れ様です」

「ああ、まったく。本当に疲れたよ。これだけの事が一辺に起きるかならな」

ギレンは思わず弱音を吐く。

それは指導者にはあるまじき行為だが、その気持ちは分からないでもない。

なにしろ、ようやく戦争が終わったかと思えば、ネオ・ジオン蜂起、ラプラスの箱公開、エウーゴやカラバの結成、ソロモン艦隊半壊、サイド1占拠、プル姉妹の虐殺、そして、昨日起きたサイド1周辺宙域制宙権の失陥。

これらの事が僅か1ヶ月の間に立て続けに起きていたのだから。

「心中、お察しします」

「ありがとう。ところで、エウーゴの連中がどうやってハイザックやリック・ディアスを持ち込んだかは分かったかね？」

ギレンはそう言いながらも、その答えにあまり期待はしていなかった。

なにしろ、エウーゴがハイザックやリック・ディアスを持っているという情報は昨日起きたサイド1周辺宙域での戦闘でエウーゴが使ってきたことで発覚したばかりだ。

流石に1日という短期間ではそこまで調べるのは不可能だろう。

ギレンはそう思っていたが、ジオンの諜報機関はギレンが思っている以上に有能だった。

「はい、どうやらカラバから持ち込まれたようです」

「カラバから?」

「ええ。おそらく、ネオ・ジオンからカラバを経由してサイド1のエウーゴの手に渡ったものと思われます。・・・どうやって地球のカラバからサイド1まで運んだのかは分かりませんが」

「そうか。まあ、君の推測は多分合っているだろう。少なくとも、サイド1を占拠した時のエウーゴはハイザックやリック・ディアスを持っていなかったわけだしな。・・・ところで、そのカラバからエウーゴに届けた人間の名前は分かるかね?」

ギレンはセシリアの推測を肯定しつつ、地球からサイド1にハイザックやリック・ディアスを運んだ人物の名前を尋ねた。

地球からソロモンの戦力によって包囲されているサイド1に物資を届ける。

こんな行動はよっぽどの運や指揮能力を兼ね備えていなければ成功しない。

その為、ギレンは分かるならばそんな偉業をやったのけた人物の名前を聞いておきたかったのだ。

そして、そんなギレンの問いに対して、セシリアが口にしたのは意外な名前の人物だった。

「メンバー全員は分かりません。しかし、指揮官の名前ならば分かります」

「ほう、なんという名前だ？」

「はい。カラバのマチルダ・アジヤン中尉という人物です」

「なに？」

意外と言えば、意外な人物の名前が出てきたことにギレンは目を丸くする。

マチルダ・アジヤン。

原作ではホワイトベースに2回ほど補給を行い、最終的にはオデッサ作戦直前に黒い三連星に討たれて戦死したレビル付きの女性士官だ。

実はこの世界でも一度ホワイトベースに補給を行っているのだが、ギレンはそれを知らない。

「ご存じでしたか？」

「・・・まあ、レビルお付きの補給部隊の指揮官だということは前に耳にしたことがある。それで、その人物がエウーゴにハイザックとリック・ディアスを届けたということか？」

「そうなります」

「ふむ」

それを聞いたギレンは考える。

（あの女性士官は確かレビル派の人間。ということは、連邦からカラバに送り込まれたスパイか？）

ギレンは一瞬だけそう考えるが、すぐにその可能性を否定する。



(いや、それはないな。もしそうだとしたら、連邦から一言くらい連絡が来ている筈だ)

そう、仮にマチルダがカラバに送り込まれたスパイとするならば、今回のハイザックやリック・ディアス輸送の話を連邦がジオンに報告しないのは可笑しい話だ。

なにしろ、ジオンによって封鎖されているサイド1に連絡を入れずに入ろうとするのは、もし見つかつていれば問答無用に落とされても可笑しくない行為なのだから。

エウーゴやカラバにマチルダがスパイであると疑われないために、敢えてリスクを犯してジオンに連絡を入れずにサイド1へと運んだ可能性はあるが、潜入した組織の中でネオ・ジオンの最新MSを運ぶというかなり重要な仕事を任せられる地位に就いているスパイにそんなリスクが有りすぎる行為をさせる可能性はやはり低い。

ということは、彼女は真正正銘、セシリアの言うようにカラバの一員である可能性が高いということになる。

(しかし、マチルダ中尉ってそんな反政府活動に従事するような人物だったか?)

ギレンにはそこが疑問だった。

原作のマチルダは『戦争という破壊の中で唯一、ものを作っていくことが出来るから』という理由で補給部隊に配属を志望するほど軍人にしては甘いとも取れる優しい人物だ。

そんな人間が理由もなしに反政府組織に所属するというのは考えづらい。

(何か戦争中に反政府組織に所属する理由でも出来たのか? 婚約者が死んだとか)

何気無しにそう思ったギレンだったが、実のところそれは当たって  
いた。

マチルダ中尉の婚約者であるウツディ大尉は一年戦争中にジオン  
軍の軌道爆撃によって亡くなっており、マチルダはその事で原作と  
違つてジオンを憎むようになったのだ。

そして、戦争終結を不満に思つてカラバに参加したという訳なのだ  
が、そんな細かい事情をギレンが知るよしもなかった。

(・・・まあいい。それより速やかにサイド1周辺宙域の奪還を考えな  
いとな。このままではエウーゴをサイド1に閉じ込めて日干しにす  
る策が失敗してしまう)

そこでギレンは一旦マチルダに対する思考を打ち切ると、改めて  
エウーゴが居座るサイド1への対策を考え始めた。

UC0080年 2月5日 碇シンジ特務准尉

◇宇宙世紀0080年 2月5日 L3宙域 ルナツー 司令部

「本日よりルナツーに着任しました。碇シンジシンジ・イカリ特務准尉です!!よ、よろしく願います!!」

敬礼をしながら着任報告を行う少年——碇シンジ特務准尉を見て、ジオン共和国軍ルナツー司令——シーマ・ガラハウ大佐は顔を少しばかりひきつらせた。

(なんだい、この子は?・うちは託児所じゃないんだよ)

7ヶ月前ののび太やタリアと言い、ニュータイプというのは子供しか居ないのか?

シーマはそう思いながら、シンジの瞳を見てあることに気づく。

(しかも、こいつ、実戦を経験した人間の目じゃない。ということは新兵かい。まったく、厄介だね)

そう、いま目の前に居る碇シンジは半年前にこのルナツーにやって来たのび太やタリアのような実戦経験者とは明らかに違う目をしていた。

まあ、それは当然で、碇シンジは幼少期を引き取り先の親戚に冷遇されて過ごしたこと以外は正真正銘普通の少年であり、のび太のように元の世界で大冒険を潜り抜けた訳でも無いし、一年戦争終戦翌日にこの世界に来たので、一年戦争にも参加していない。

更に言えば、MSの操縦もニュータイプであるだけあって普通の人よりは出来るが、のび太の射撃のような突出した何かがあるわけでもないのです、正直言ってシーマの新兵という評価は正しくその通りであると言えた。

(たくつ。ニユータイプだかなんだか知らないけど、子供を戦場に送り込むんじゃないよ)

シーマはシンジをこのルナツーに送り込んだ人物であるギレンが何を考えているのかさっぱり分からなかった。

有能な人物であることは分かる。

そうでなければ、人口2億人の国家を独裁体制で運営することなど不可能だからだ。

そして、冷徹な男ではあるが、必ずしも非情な男ではないのも分かる。

あのルナツー防衛戦の後のギレンののび太に対する対応がそうであり、もしギレンが非情な男ならばあそこでのび太を徹底的に英雄として持ち上げることで国民の士気を上げるといいうやり方を取っていただろう。

だが、現実には多少無理にでものび太の功績を取り上げることで英雄としてしまうことを避けている。

一見、子供を英雄とさせないギレンの手腕は器が小さいようにも見えるが、英雄の立場になる人間はだいたい悲惨な目に遭うと相場が決まっているので、この判断は正しい。

ちなみにシーマは知らないことであるが、のび太は過去に何度か英雄に持ち上げられたことがある。

それで悲惨な目に遭わなかったのは、本人がその功績を成し遂げた後に成し遂げた場所から立ち去ったからであり、もしその場に居座っていたれば、他の英雄同様に悲惨な目に遭っていただろう。

・・・もつとも、のび太には持ち前の恐ろしいほどの人徳もあるのが、必ずしも他の英雄同様に悲惨な目に遭うとは言い切れなかったが。

「・・・ご苦労。じゃあ、着任して早々なんだけど、あんたの実力を見せてもらおうよ。モビルスーツデッキに行きな」

「は、はい！」

シンジはそう言うと、足早に部屋から退室し、シーマの言った通りにモビルスーツデツキへと向かった。

「あんなんであだし達の訓練に耐えられるのかねえ」

ジオン海兵隊の訓練は戦場帰りだったのび太が当初キツイと評した通り、戦場帰りな人間にもかなりキツイ訓練だ。

それをあんな見るからに実戦経験どころか、まともな訓練をあまり受けていなさそうなシンジが耐えられるとは思えない。

「まあ、やらせてみなければ結果は分からないさね。一先ず見てみて駄目そうだったら送り返すしかないか」

シーマはそう考えながら、シンジのMSの腕を見てみることにした。

「そうか。パウエル中将の別動隊がルサカを占領したか」

部下からの報告を聞きながら、アフリカ攻略軍本隊の総司令——ヨハン・イブラヒム・レビル大將は今後の戦略を考える。

ジブラルタルを経由して旧モロッコ北部に上陸したレビル大將の本隊は上陸から3日経った2月4日に旧モロッコの首都ラバト（ただし、大西洋大津波によって廃墟となっているが）を占領し、そのままカサブランカ（これまた大西洋大津波によって廃墟となっている）へと進撃した。

しかし、その間にパウエル中将の率いる別動隊は上陸から僅か2日の2月3日に旧アンゴラを制圧。

その翌日の2月4日には旧ザンビアの首都ルサカへと進撃を行い、そして、つい一時間程前にそのルサカも陥落させていた。

「はい、向こうの話ではそのまま旧ザンビア東部を制圧した後、旧マラウイに進撃するとの事です」

「なるほど、旧マラウイ、旧モザンビーク北部を制圧して中央アフリカと南アフリカを分断しようということか」

「我々はどうするべきでしょうか？」

参謀の1人がレビルにそう聞く。

前述したようにパウールの別動隊とは違ってレビルの本隊は然程進撃が進んでいるとは言えず、それどころか別動隊の数倍の被害を出している有り様だ。

もつとも、これはパウルスが有能でレビルが無能だからそうなっているのではなく、アフリカ共和国軍のMSがこちらの戦線に集中しているからであるということはこの居る幕僚の誰もが理解している。

しかし、後ろに居る人間、特に政治家というのは基本的に作戦開始から経過した時間で占領した領地の広さとそれに対して払った犠牲の少なさでものを見るので、今は何も言っただけなくともその内、こちらの方針に口を出してゐるのではないか？

そんな懸念を幕僚達は抱いていた。

しかし、レビルはそんな幕僚達の懸念をまるで気にしていないかのようにこう宣言する。

「補給を待つて再度カサブランカに進撃する」

「しかし、このままでは進撃しても大した距離は進めません。・・・新型のゲルググとかいうMSも大して役に立ちませんでしたし」

そう、昨日に起きた戦闘の際、本隊はロールアウトされたばかりの新鋭MS——ゲルググを投入したのだが、なんの活躍もしないままあつさりとやられてしまった。

まあ、これについては大した機体交換訓練もさせないまま実戦に投入した方にも非があるのだが、仮に訓練をしたとしても結果は大して変わらなかっただろう。

ゲルググとハイザックではゲルググ側のパイロットがベテランでハイザック側が新兵という状況でもないかと勝てない程の性能差があるのだから。

「分かっている。だが、現状では他に有効な策はない。それに我々が進撃し続けることで敵のMS部隊を北アフリカに釘付けに出来る。そして、その間にパウルスの特動隊が中央アフリカと南アフリカを寸断すれば、我が軍が打ち込むアフリカ共和国への楔は決定的なものとなる。だからこそ、我々は進撃を止めるわけにはいかん」

「・・・そうですね。申し訳ありません。出過ぎたことを」

「いや、良い。・・・しかし、ゲルググが性能不足だというのは驚いたな」

レベルはボソリとそう呟く。

実のところ、レベルにとつてもロールアウトされたばかりのゲルググが全く通用しなかったという事実は少しショックだった。

なにしろ、ゲルググは先にロールアウトしたザクやドムと比べても高価な機体であり、その分、圧倒的な戦闘力を持っている筈だったのだから。

だが、レベル達にとって不幸だったのはこの世界のMS技術の進化が主に転生者達のせいと異常に早くなっているということだった。

これが原作世界ならば、レベルの期待通り、ゲルググは（原作の同時期と比べてもちよつと古いが）強力な戦力として活用することが出来ただろう。

しかし、原作を知らないレベルにそんなことが分かる筈もない。

（もう更なる新型MSの登場はおそらくこの戦い中は行われないう。時間もなしな。となると、ゲルググの改良と大規模な量産による数で敵のMSを押し潰すしか方法がないか）

レベルが出した結論は奇しくもギレンが考えた方針とほとんど同じだった。

違うのはZガンダムのような超高性能MSの開発計画が連邦には無いことくらいだ。

「・・・とにかく、我々はこのまま敵に対する攻勢を掛け続け、敵を出るだけ引き付ける。この方針に変わりはない」

「敵が別動隊に戦力を割いた場合は？」

「その時は我々に掛かる圧力が減っているということでもある。なの



で、もし敵がパウルス中将の方に向かえば、敵の戦線を突破できる可能性は高い」

「なるほど。しかし——」

「なんだ？」

「情報部の報告では、敵にはあと1、2発核ミサイルが有ると聞いています。数が少ないため、滅多なことでは使つてこないでしょうが、もしこちらの司令部をピンポイントで狙われたら・・・」

「それはない。さすがに彼らも自国領で核を使ってくるほど、バカではあるまい」

レビルはそう言ったが、この時、彼はあることを忘れていた。

先日、占領したラバトとこれから向かうカサブランカが誰の手によつて壊滅させられたかということ。

UCC0080年 2月9日 ジーン・コリニーの焦り

◇宇宙世紀0080年 2月9日 地球 アフリカ共和国 首都  
カイロ

「このままでは不味いな」

アフリカ共和国総統——ジーン・コリニーは焦っていた。  
今現在、アフリカ共和国を直接脅かしている存在は2つ。

レビル率いる本隊とパウルス率いる別動隊だ。

しかし、この内、レビルの存在はあまり脅威ではない。

既に占領されたラバトやカサブランカ（2月8日に陥落）は大西洋  
大津波によって壊滅している都市であり（やったのはコリニーだが）、  
占領されても大して影響はないからだ。

だが、問題なのは別動隊の方だった。

この軍勢は既に旧ザンビア東部を制圧しており、現在は旧マウライ  
の攻略に掛かっている。

現在は現地に配備されているアフリカ共和国軍と熾烈な戦いを繰  
り広げているが、領土が狭いこともあって陥落は時間の問題だ。

そして、旧マウライが攻略されれば、次はおそらく旧モザンビーク  
へと侵攻してくるだろう。

特に北部を占領された場合、別動隊はインド洋を目にすることに  
なってしまう、中央アフリカと南アフリカは分断される。

まあ、そうなったとしても、コモロ諸島とマダガスカルを経由して  
中央アフリカと南アフリカの連絡線を繋げるといふ手もあるのだが、  
陸路で遮断されると心理的な影響はやはり大きい。

「とは言え、北アフリカからMS部隊を引き抜くわけにはいかん。も  
しそんなことをしたら、レビルの進撃を許してしまう」

そう、現在、アフリカ共和国軍が保有する全てのMS部隊は北アフ

リカのレビル率いるアフリカ攻略軍本隊と対峙しており、南アフリカや中央アフリカには全く配備されていない。

そして、それがパウルス率いるアフリカ攻略軍別動隊の快進撃を許す一番の原因となっているのだが、だからと言ってここでレビルと対峙しているMS部隊を引き抜いてパウルス中将の別動隊の方につづけた場合、今度はレビルが快進撃を始めることになる。

「八方塞がりか。・・・こうなったら、核を使うしかないか」

しかし、使いどころはよく考えなければならない。

なにしろ、ジーンの手元の核はラ・パルマ島とジャブローでそのほとんどを使ってしまった、残りは万が一のためにと残しておいた1発しか存在しないのだから。

・・・ちなみにこの時、曲がりなりにも自国領となったアフリカの大地で核を使うことにジーンは全く躊躇していなかった。

この戦争で負ければ、間違いなく自分は縛り首。

しかも、後の歴史の教科書に第二次世界大戦時に国が負けたことで吊上げられたアドルフ・ヒトラー、ベニート・ムッソリーニ、ヒゲキ・トウジョウに並ぶ愚かな指導者として名前が載るというおまけ付きで。

それだけは絶対に御免だ。

ジーンはそう考えながら、残った1発の核の活用法を考える。

(一番良いのは、レビルとパウルスが揃ったところで奴等を纏めて吹き飛ばすために使うというものだが、流石にそれは都合が良すぎるな)

戦場で一番重要なのは指揮官だ。

勿論、兵士が居なくてはそもそも戦争が出来ないので、兵士が重要でないというわけではないのだが、その兵士達を効率良く動かすのはやはり指揮官であり、逆に言えばこれを抹殺すれば軍全体の動きは悪

くなる。

核ミサイルが1発しか残っていない今、ゾーンに残された核の活用方法は、もはやレビルやパウルスなどの最高指揮官の抹殺しか残っていないなかった。

しかし、同時に2人の指揮官を抹殺するのはどう考えても虫が良すぎるので、片方の指揮官に絞って確実に仕留めるのが一番の最善策だ。

「だが、どちらを選ぶべきか？レビルを選べば連邦軍全体の士気を落とすことが出来るが、それで別動隊の進撃が止まるわけでもない。かといって、パウルスを選べば、別動隊を撃滅することは可能になるかもしれないが、それで我々の核は打ち止めとなる」

どちらを選んでもメリットは有るが、それでも片方は無事となる上に核ミサイルというカードを失うデメリットもある。

ここで核ミサイルが2発以上有れば、どちらも狙うという選択肢も有ったのだが、現実には1発しかない以上、それは出来ない。

「そもそも司令部を上手く消滅させることが出来るのか？」

オデッサやベルファスト、そして、ジャブローの時はその場から移動しない司令部施設に居たからこそ、周囲の兵隊諸共司令部を吹き飛ばすなどということが出来た。

しかし、今回は敵の司令部は陸上戦艦に在るので、常に移動している。

これを確実に仕留めるには、敵司令部を核ミサイル施設によほど引き付けなければならない。

もともと、原作のオデッサ作戦の終盤ではマ・クベがそれをやりながらも失敗しているが、あれはアムロというチートが居たからにすぎず、もしアムロが居なければ発射された水爆はレビルとその周辺に居た部隊を纏めて吹き飛ばしていた筈だ。

つまり、敵司令部を核ミサイルの存在するところの近くまで誘き寄せれば、(それこそアムロのようなチートが居ない限り)核ミサイルによる敵司令部の消滅はほぼ確実に成功するという事でもある。

だが、同時にある問題も存在した。

それは『どうやって敵の司令部を核ミサイルの近くまで誘き寄せるか?』ということだ。

原作ではレビルとその直轄部隊が前線まで出張ってきたお蔭で上手く行きそうになったが、そんな都合の良い状況などそう滅多に起こるものでもない。

(だが、やるしかない。そうしなければ、私は破滅だ)

ジーンはそう考えながら、なんとしても核ミサイルによる敵将軍の抹殺を成し遂げることを決意する。

——そして、この2日後、アフリカの大地で1つの核の炎が灯る事となった。

#### ◇東アジア ペキン

「ねえ、少佐。もし計画が成功したら、その後はどうするの?」

褐色の肌をした女性——ララア・スン少尉は、先程まで自分と肌を重ねていた男——シヤア・アズナブルに向かってそう尋ねた。

現時点で一番シャアが信頼し、そして、愛し合っている女性である  
ララァ・スンにはこのネオ・ジオンの本当の目的は既に伝えてあり、ラ  
ラァもそれを分かった上でシャアに協力している。

しかし、計画が成就してネオ・ジオンやアフリカ共和国が壊滅した  
後のことについてはなにも話しておらず、ララァはその事を気に掛け  
ていた。

「む？そうだな、場所については考えてはいないが・・・何処かに身を  
隠してひっそりと暮らそうと思っっているよ。勿論、君も一緒だ」

「まあ」

「・・・そう言えば、ララァの友人のメイ・カーウィン技術少尉だった  
かな？彼女は どうする？君が望むなら連れていくが・・・」

「ふふつ、結構です。彼女には素敵な王子様が居るようすし」

「そうなのか？」

そう言われたものの、シャアはピンと来なかった。

メイとはシャアも何回か会ったことがあるが、それらしい人物は居  
なかつたからだ。

「ええ、私も会ったことは有りませんが、どうやら公国、いえ、共和国  
の方に居るようすわね」

「・・・そうか。ということは彼女には悪いことをしてしまったかな？」

「仕方ありません。これも一つの運命の廻り合わせですもの。少佐が  
気になさることはなにもありません。それに――」

「それに？」

「必ずしも悪いことが起きたからと言って、結末がそのまま悪いことになるとは限りません」

「・・・なるほど」

シヤアはララアの言葉に納得したような表情をする。

「ところで、少佐。例のコロニー落とし。何処にするかは決まったのですか？」

「まだだ。なにしろ、こちらに寝返った者は兎も角、エウーゴの方はこの作戦に反対する者も多くてな。どうやらハイザックとリック・ディアスの入手で気が大きくなっているらしい。まったく、カラバも余計なことをしたものだよ」

「そうでしたか。でも、この作戦を行えば大勢の者が死にますから、彼らの気持ちも分からなくは無いですね」

ララアはエウーゴの者達に同調するようにそう言う。

実際、コロニー落としというのは原作が示すように一度落とされれば、落とされた周辺の地域は文字通りの意味で消滅し、場合によっては何億もの犠牲者を出すことになる。

もつとも、この世界ではコロニー落としが一度も行われていないので、それがどれだけ悲惨なものになるかは妄想の域を出なかったのだが、直径数十キロのコロニーが宇宙から落ちれば地上にかなりの被害をもたらすのはバカでも想像がつく。

その為、ララアにもコロニー落としをされれば、沢山の人間が死ぬということが分かり、出来るならそんなことをシヤアにして欲しくはなかった。

しかし、だからと言って積極的に止める気もない。

何故なら、自分はもうシヤアの下でしか生きていけない存在となっているので、そのシヤアに嫌われたく無かったからだ。

「そう言うな。もう決めたんだから。まあ、おそらく3月頃には決行できるようになるだろう。それぐらい経てば、戦局も大分変遷してエウーゴが不利になっているだろうからな」

不利になっている状況は人の視野を狭くし、勝っている、あるいは膠着している戦況では許可が出ないような無茶な作戦も容認されるようになる。

シヤアはそう考えながら、焦らずその時が来るまでじつとチャンスを待っていた。



U C 0 0 8 0 年 2 月 1 2 日 アフリカ戦線の危機

◇宇宙世紀0080年 2月12日 L2宙域 サイド3 総帥府

「・・・ふむ」

ギレンはセシリアが持ってきた報告書を読みながら唸り声を上げる。

現在、宇宙の情勢はサイド1周辺宙域での攻防が日々繰り広げられている事以外は静かであり、正に膠着状態と言っても良い。

そして、地球の情勢も東南アジア方面は一進一退の攻防となっており、こちらもほぼ膠着状態だ。

・・・しかし、問題なのはアフリカ戦線だった。

「まさかこの局面で残った核を使ってくるとはな」

ジオンの諜報部もアフリカ共和国に残された核が少ないということとは既に掴んでおり、その報告を以前に受けたギレンも当然知っていたし、ジーン・コリニーの性格上、土壇場で使ってくるだろうとは思っていたが、まさか自分の支持基盤であるアフリカの地で使ってくるとはギレンも流石に思っていなかった。

更にこの核攻撃によってアフリカ攻略軍別動隊の指揮官であったパウルス中将が戦死。

指揮系統を失った別動隊は混乱し、その隙を突く形でアフリカ共和国軍が反攻を行い、旧アンゴラに進撃した結果、旧アンゴラ北部は既に占領され、現在は旧アンゴラ南部で激戦を繰り広げているが、アフリカ共和国軍は集中的に旧アンゴラ方面に兵力を集中しており、おまけに指揮系統が混乱しているのもあって陥落は時間の問題との事だ。

そして、ここで旧アンゴラが完全に占領された場合、別動隊は包囲される事となる。

「それだけは避けなければならないな」

なにしろ、別動隊が叩かれれば、連邦軍のアフリカ攻略作戦は完全に破綻してしまう。

そうなれば、この戦争が長引いてしまうことは確実であるので、この戦争に早期に終結させるためにはどうかして別動隊を救援するしかないのだ。

だが、連邦軍の救援は期待できそうにない。

「となると、我々がやらなければならないか。しかし、軍団規模の兵力など今から用意しても間に合わない。やるとしたら、少数の兵力だな」

しかし、ただ少数の救援を送っても焼け石に水なので、一騎当千の戦力を用意しなければならない。

もつとも、普通はそんな都合の良い兵力など無いのだが、今回に限ってはそんな都合の良い戦力が存在する。

「・・・やはりホワイトベース隊をアフリカに送るのが良いだろうな」

ホワイトベース隊。

原作ではジオンを散々に苦しめてジオン敗北の遠因を作ったファーストガンダムの主人公勢だ。

この世界では丁度ガルマが原作で戦死した日にこちらが送った刺客であるペガサス隊に敗れ、乗員は捕虜となり、ホワイトベースそのものも鹵獲されている。

もつとも、損傷が酷かった為に修理に時間が掛かり、結局、修理が完全に終わったのは一年戦争終結直前。

仮に今回の戦いが勃発しなかったとしたら、戦後の軍縮と維持などの問題から、ホワイトベースはモスボールされた状態で本国の倉庫に

埋もれたままとなつただろう。

しかし、今回の戦いが起こつたことでこの艦にも活躍の機会が与えられ、連邦軍からスカウト（笑）したブライト・ノア中尉を艦長に据え置いたジオン版ホワイトベース隊が発足しており、現在は艦の人員の編成を終えて来るべき時に備えての訓練が行われている（ちなみに同隊にはアムロ・レイ少尉や何故か志願したハヤト・コバヤシ伍長なども配属されている）。

ギレンはこれをアフリカに向かわせることを考えていた。

（当初の予定ではペガサス隊を地上援護に向かわせて、ホワイトベース隊をサイド1攻略の突破口を切り開くのに使う予定だったが、ペガサス隊がまだ戦力の再編成を終えていない以上は任務内容を逆にするしかないな）

なにしろ、事は一刻を争う。

そして、戦力の再編成すら終わっていないペガサス隊と再編成を終えて訓練中のホワイトベース隊のどちらをそのような急を要する任務にあてるべきかなどわざわざ説明するまでもない。

だが、それでも懸念はある。

それはホワイトベース乗員の練度だ。

ペガサス隊とは違い、ホワイトベース隊は最近結成されたばかりな為に乗員の練度は当然の事ながら低い。

加えて、そもそもブライトは最近連邦からスカウトしたばかりなのにジオン共和国軍人からの信用はほぼ皆無。

一応、連邦とは講和して戦争が終わっている上にザビ家直々にスカウトしたという事から、あからさまに批判する人間は居ないが、それでも彼の下につきたいというジオン軍人はなかなか居ない。

かといって、命令を出して強制的にホワイトベース隊に配属させてもぎくしゃくするだけなので、そこら辺を色々と考慮した結果、比較的細かいことをあまり気にしなさそうな軍人やエンマ・ライヒ中尉などの比較的信頼できそうな義勇兵を乗員として活用することにした

のだが、結果として乗員は寄せ集めとなってしまう、目玉であるMS隊の連携や艦の乗員の練度に不安が残ってしまったのだ。

まあ、アムロが居る上にブライトも有能な指揮官。

更にホワイトベース隊のMS隊の隊長であるエンマ・ライヒ中尉の腕も確かだ。

いや、そもそも原作でもこの世界でもホワイトベースは寄せ集めの戦力で運用されて活躍していたので、もしかしたらむしろその方がなんとかなるのかもしれない。

ギレンはそう思うことにして、ホワイトベース隊のアフリカ派遣を決定した。

#### ◇L3宙域 ルナツー周辺

「なかなか良い腕をしてるな。シンジ」

愛機であるガンダム改が改修中の為、代用としてザムIIを操縦している野比のび太特務少尉は、碇シンジ特務准尉の操る量産型ガンダムの様子を見ながらそんな独り言を呟く。

1週間前にルナツーに赴任してきた碇シンジは当初こそMSの腕があまり良いとは言えなかったが、それはこの1週間の間に瞬く間に改善され、現在では海兵隊の一般パイロットと互角に戦えるようにま

でなっていた。

のび太のように特筆すべき才能はないが、それでも総合的なMSパイロットとしての能力に関しては、明らかにのび太よりも才能があり、こちら辺は本場ロボット操縦系主人公（もつとも、エヴァは厳密にはロボットではないし、操縦方法もかなり特殊だったが）の面目躍如といったところだろう。

「そう言えば、無事訓練が終われば、ペガサス隊に配属になるって言ってたっけ？ペガサスのMSパイロットは少ないから正直言つてシンジが来てくれるのは有り難いな」

ペガサスのMSパイロットは地球での戦いで大半がやられてしまい、のび太とバーニイだけになってしまった。

その後、補充要員として新たにペガサスMS隊の隊長に就任したクルト中尉やスレンダー軍曹などが来たが、それでも4人しかいない。

だが、ここでシンジが来てくれれば、MSパイロットは合計5人になる。

これでもペガサスの搭載量を考えれば若干少ないが、それでも負担が4人の時より軽くなることだけは間違いない。

（でも、あの夢はなんだったのかな？）

のび太は昨夜見た夢を思い返す。

その夢の中では神様みたいな光の存在が現れ、のび太にこう告げた。

『ドラえもんはあと1ヶ月で元の世界に戻る。そして、君は死ぬまでこの世界から抜けられない』、と。

普通なら所詮は夢と一蹴してしまうか、あるいはそもそも夢の内容を覚えていないだろう。

だが、のび太は夢の内容を鮮明に覚えていた上にそれを一蹴することも出来なかった。

何故なら、かつての大冒険の中でこういった夢が何かの予兆になっていたケースを現実に何回か経験していたからだ。

(もしあの夢が本当で、ドラえもんが元の世界に帰って僕が残るとしたら・・・この世界に骨を埋める覚悟が本格的に必要なのかもしれないな)

のび太は1年前の自分が聞けば驚くであろう考えを抱きながら、ザムⅡの操縦を継続していたが、その時、シンジの乗る量産型ガンダムから通信が入った。

『のび太さん』

「ん？ああ、どうしたの？」

『目標ポイントに到達しました。これからどうすれば良いですか？』

「そうだな。あんまりルナツーから離れるのもあれだし、来た道を大回りしながらルナツーに帰ろう」

『分かりました』

そう言う通信が切れ、再びコクピット内は静かになる。

「・・・まあ、考えるのは後にして、今は訓練を終わらせることに集中しよう。事故でも起きたら大変だしね」

のび太はそう考えながら、操縦するザムⅡの進路を変え、先程シンジに言ったようにルナツーを大回りする経路へと進ませた。

U C 0 0 8 0 年 2 月 1 6 日 マチルダの最期

◇宇宙世紀0080年 2月16日 サイド1周辺宙域 輸送艦  
ブリッジ 艦橋

「・・・失敗したわね」

輸送艦のブリッジにて、マチルダ・アジャン中尉は悟ったような目をしながらそう言う。

1月の終わり頃の補給の後、地球へどうにか戻ってカラバに合流したマチルダであったが、2日前に再びエウーゴに荷物を届けるように命令され、地球を発ち、数隻の輸送艦を率いてサイド1へと向かった。

だが、ジオンも馬鹿ではない。

外部からMSが届けられたと分かるや、その外部からの侵入口をミノフスキー粒子の濃い宙域であると推察し、その宙域の封鎖を行うことを試みる。

勿論、サイド1周辺の宙域はエウーゴとジオン共和国軍が制宙権を奪い合っている宙域でもあるので、封鎖は容易なことではなかったが、それでもジオン共和国軍はそれなりに痛い犠牲を払う形で数日前にどうにかミノフスキー粒子が濃い宙域の制宙権を奪還し、その宙域に網を張った。

そして、マチルダ達は見事にそれに引つ掛かってしまったという訳だ。

それに対して、マチルダ率いる輸送艦隊は積んでいたハイザックやリック・ディアスを用いて応戦を開始する。

もしここでマチルダ達が遭遇した部隊が通常のジオンMS部隊であれば、(多少の損害は受けていただろうが)機体の性能差によって無理矢理突破することは可能だっただろう。

しかし、今回彼女達が遭遇したのは黒い三連星の率いるジオン軍の精鋭MS部隊だった。

この黒い三連星はガイア大尉、マツシユ中尉、オルテガ中尉の3人で構成されており、原作テレビ版では初戦でアムロ・レイの力量とマチルダの妨害によってマツシユ中尉が戦死した事で二連星となり、その後のオデッサ作戦の際の再戦で完全に全滅し、劇場版に至っては僅か一回の戦闘でアムロとセイラによって全て葬られてしまう。

これだけ聞けば、名前持ちのパイロットの癖に意外と大したことがない者達に見えるだろうが、これは相手が悪すぎただけであり、彼らは開戦初期から戦ってきたジオンの立派なエースパイロット達だ。

現に原作のルウム戦役ではレビル搭乗艦である『アナンケ』を沈めてレビル将軍を捕虜にするなどの戦果を挙げている。

この世界ではルウム沖会戦後、ジオン本国でMSパイロット教官の任に就き、以後、一年戦争終結まで実戦の機会は無かったのだが、今回のエウーゴのサイド1占拠とハイザック、リック・ディアスが出現したことにより、彼らは再び前線に立つことになったのだ。

そして、戦場に出た彼らの技量は一年というブランクを経ているにも関わらず、遺憾無く発揮されており、性能で劣る筈のザムⅡ改3機を駆使してハイザックやリック・ディアスを次々と叩き落としていく。

また彼らの部下達も黒い三連星に鍛えられた腕は伊達ではないのか、性能で優位に立っている筈のハイザックやリック・ディアスを圧倒する戦いぶりを見せている。

その結果、マチルダ隊のハイザック、リック・ディアス隊はほぼ壊滅状態になり、輸送艦隊もマチルダの乗艦する輸送艦を除いて撃沈されてしまった。

「やはり戦争には私のような甘い考え方は合わなかったのね。．．．  
ウツデイ」

それが彼女の最期の言葉だった。

次の瞬間、マチルダの乗る輸送艦はオルテガ機のビームサーベルによって艦橋を串刺しにされ、彼女の体もまた超高温の熱によって蒸発



する。

——また1人、勇敢な戦士が宇宙の塵となった瞬間だった。

◇L3宙域 ルナツー

「副隊長、ですか？」

マチルダが盛大な散り様を見せていた頃、ルナツーでは野比のび太特務少尉がクルト中尉に呼び出され、ペガサスMS隊の編成表を見せられていた。

そこにはこう書かれてある。

・ペガサスMS隊の編成

隊長・・・クルト中尉（ザムⅡ改）

副隊長・・・ノビタ・ノビ特務少尉（ガンダム改B型）

一般隊員：・・・シンジ・イカリ特務准尉（量産型ガンダム）、バーナー

ド・ワイズマン軍曹（ザムⅠ）、スレンダー軍曹（ジムⅢ）

以上。

「でも、僕は指揮なんて執ったことないですよ？」

そう、一兵士としてはかなり有用な才能を持っているのび太だった

が、指揮官として考えるとその能力は未知数だ。

何故なら、のび太は前の世界で指揮官という立場になったことは1度として無かったのだから。

「分かってる。お前にそんなことが向いていないこともな。だが、階級上はお前がナンバー2だから、万が一、俺が戦死したらお前が指揮を執ることになる。それに、だ。他の奴等が指揮官に向いていると思うか？」

そう言われて、のび太はクルトと自分以外の3人のパイロットの事を思い返す。

まず階級上のび太の次であるナンバー3である碓シンジ。

これは論外だ。

経験が浅いというのもあるが、内気な性格をしている上にのび太の目から見ても社交性があまり無い。

将来は分からないが、少なくとも今は絶対にリーダーにするべき人材ではないと言えるだろう。

次にスレンダー。

ルウム沖会戦の時から従事しているだけあって経験はあるが、何処か頼りなくリーダー向きではない。

最後にバーニイ。

3人の中では一番まともだが、やはりリーダー向きとは言えない。

「・・・つまり、僕を含めたクルト中尉以外のメンバーはリーダー向きではないので、それならばクルト中尉の次に階級の高い僕を副隊長に就任させたいということですか？」

「そういうことだ」

はつきりとそう言うクルトにのび太は少しムツとするが、自分がリーダーに向かない人材であるということは自覚しているので、口を

紡ぐしかない。

そして、そんなのび太に対して、クルトはこう言う。

「まあ、心配するな。副隊長と言っても飾りだ。基本的に指揮は俺が執る。幸い、メンバーも5人しか居ないしな」

「? なら、なんでわざわざ副隊長なんて立場を作ったんですか?」

「さつきも言っただろう? 万が一、俺が戦死した時に代わりに指揮を執る立場の人間が居なかったら困るからだよ。云わば、お前は指揮官の予備だな」

「なるほど」

そのクルトの説明に、のび太は納得したような表情を見せるが、それでも内心ではクルトが死んだ時に本当に自分にクルトの代わりが出来るのか自信がなかった。

前の世界でのび太が見てきた中で、こういったリーダーに向いていた人材はクラスメートであれば（認めたくはないが）出木杉、大冒険のメンバーの中ではドラえもん、大冒険の時に知り合った中ではソフィア、ペコといったところだ。

この内、ドラえもんはこの世界に居るが、夢の内容が本当であったならばあと1ヶ月くらいで向こうに帰ってしまうし、そもそもドラえもんはのび太が居るということで軍に協力してはいるが、軍の所属ではない。

（・・・僕がやるしかないって訳か）

自信はないが、この世界に骨を埋めるつもりであればこのくらいはやってのけなければならぬだろう。

のび太はそう考え、腹を括る事にした。

「分かりました。副隊長の任、お受けします」

「おう、やってくれるか。まあ、やってくれなきや命令するだけだったんだが、自分からそう言い出してくれるのはありがたいな」

「ははは。ああ、そうだ。ついでに聞きたいことがあったのですが・・・」

「なんだ？」

「次の出撃は何時になりそうですか？」

「今のところはまだ予定はない。シンジの訓練も終わっていないからな。お前も今の機体に慣れていないだろう？」

のび太のガンダム改はコクピットを全天周囲モニターに換装されたB型に改修されており、真下以外の全方向がモニターによって見えるようになってる。

しかし、全天周囲モニターは使用時に空中に放り出されたような感覚を味わうので、初めて使う人間は違和感を大きく感じてしまうのだ。

クルトもその感覚に慣れるのに苦労した経験があり、ガンダム改B型を受領してから1日も経っていないのび太はまだその感覚に慣れていないだろうと思ってそのような事を言ったのだが、のび太から返ってきた返事はこうだった。

「いえ、大分慣れました。すぐにでも実戦に出られます」

「なに？あれにもう慣れたのか？」

「？ ええ、そうですけど・・・」

クルトの反応にのび太は不思議そうに首を傾げる。

そう、普通の人間には慣れるのに苦勞する全天周囲モニターなのが、のび太のようなニュータイプにとつてはわりと早く慣れることが可能なのだ。

いや、のび太の場合、仮にニュータイプではなかったとしても同じだっただろう。

何故なら、前の世界でのび太はタケコプターで空を飛ぶ中でそういった感覚に慣れていたし、なんなら実際に空中を放り出された経験が何度もあったのだから。

「そ、そうか」

クルトはひきつった笑みを浮かべながらそう言うしかなかった。

U C 0 0 8 0 年 2 月 1 9 日 エウーゴに秘策有り

◇宇宙世紀0080年 2月19日 L5宙域 サイド1 首都  
バンチ

ここはサイド1の首都バンチ。

現在、エウーゴとジオン反乱軍が共同で占領している場所であったが、その首都バンチの施設の1つにて、エウーゴとジオン反乱軍の代表は一对一での会談を行っていた。

「先の君たちの提案の解答についてだが・・・やはり私はコロニー落としには反対だ」

エウーゴの代表——ブレックス・フォーラー大佐はジオン反乱軍の指揮官——ランス・ガーフィールド少佐に向かって、はつきりとそう告げる。

そう、今話し合っているのは先日、ネオ・ジオン側からエウーゴに提案されたコロニー落としに関してだ。

内容としてはサイド1のコロニーの内、1つを選んで住民を退去させ、地球に落下させるという原作でジオンがやった毒ガス戦術に比べれば穏当なものではあった。

もつとも、それは落とすコロニーに住むスペースノイド住民だけの話であって、落とされる側であるアースノイドにしてみれば、どちらもさして変わらないのだが。

まあ、それはともかく、コロニー落としという提案はブレックス、いや、エウーゴからしてみれば絶対に飲めない話だった。

何故なら、そんなことをしてしまえばエウーゴ内に居る親スペースノイド派アースノイドが間違いなく離反するからだ。

「しかし、このままではじり貧です」

ランスの言葉は事実だった。

このサイド1はサイド3と違って工業用コロニーが少ない。

もつとも、全く無いわけではなく、現在はそれを使ってMSの修理や生産を行っているが、それでもサイド3とは雲泥の差がある。

しかも、既にサイド1周辺の制宙権の一部は奪還されており、このまま消耗戦を続ければ間違いなく息切れするのはこちらだ。

そう指摘するランスだったが、それでもブレックスは首を縦には振らない。

「駄目だ。幾らじり貧になりかけているとはいえ、敵に大ダメージを与える代わりに我々の勢力も弱体化させては意味がない」

「それは・・・確かにそうですが、対案は有るのですか？」

「有るさ。これを見てくれ」

そう言いながら、ブレックスは1つの書類をランスへと渡す。

そして、それを受け取ったランスはその書類の表紙に書かれてある文字を見て驚いた顔をした。

「ルナツー攻略作戦？」

「そうだ」

ブレックスはランスの言葉に頷きながらこう説明する。

「確かに君がさっき言った通り、このままではじり貧だ。だが、ここでルナツーを落とすことが出来れば、堅牢な基地が手に入るし、上手くすれば大量の物資を手に入れられるかもしれない」

「・・・しかし、それは上手く行ったらの話です。それにルナツーは言うまでもなく宇宙要塞ですので、落とすのはかなり困難だと思われま

すが……」

そう、確かにブレックス大佐の言うようにルナツを落とすことが出来れば、メリットはかなり大きい。

なにしろ、今占領しているサイド1と違い、ルナツは小惑星を改造した堅牢な軍事要塞であり、ここを占領すればエウーゴやネオ・ジオンの一大拠点が宇宙に出来上がることになるのだから。

しかし、それは占領できたらの話であり、現状のエウーゴとネオ・ジオンの戦力では攻略はほぼ不可能だというのがランスの正直な意見だった。

「第一、戦力はどれ程投入するのですか？生半可な戦力で落とすことは間違いなく無理です」

「ああ、その通りだ。だからこそ、エウーゴの全戦力とサイド1から徴発した民間船に陸兵を乗せてルナツを攻略する予定だ」

「!? そ、そんなことをしたら……」

ランスは慌ててブレックスを止めようとする。

なにしろ、宇宙でのネオ・ジオンの戦力はソロモンから脱出する際にほとんどやられてしまつて残っていないのだ。

ここで宇宙での大半の戦力を担っているエウーゴの戦力が丸々抜けられれば、サイド1は間違いなく落ちる。

だが、そんなランスに対して、ブレックスはこう言った。

「分かっている。ここでエウーゴの戦力を丸々ルナツ攻略につき込めば、その間にサイド1は間違いなく落ちるだろうな。だが、それは敵が攻めてくればの話だろう？」

「……大佐は敵がコロニーへの損害を考えて侵攻してこないと予想し



ておられるのですか？」

「そうだ」

そう断言するブレックスに、ランスは『そんな馬鹿な』と内心で思う。

確かにジオンがコロニーへの損害を気にしているのは事実なのだろうが、多少の外壁や港の損害くらいなら気にしない。

もしそうであつたら、一年戦争開戦直後に1、2、4のサイドを軍事侵攻して占領するなどといった行動を起こしている筈がないのだから。

今ジオンが攻めてこないのは、エウーゴとネオ・ジオンの戦力がそれなりのものである為に、ここでドンパチやれば勝つても負けてもサイド1のコロニー群はかなりの損害を負う可能性が有るからだろう。

だが、ここでエウーゴが抜けた場合、ネオ・ジオンとサイド1防衛隊の戦力だけでサイド1を守らなければならず、『それだけの戦力しか居ないならば、速やかに制圧すればコロニー群への損害は最小限に抑えられる』と考えたジオン軍が攻めてくる可能性は十分にある。

そう考え、ランスは改めてブレックスを説得しようとしたが、ここであることに気づく。

(待て。これは逆にチャンスではないか?)

先程、ブレックスはエウーゴの全戦力をルナツーに出撃させると言っていた。

ということは、彼らが出撃した後にこちらがコロニー落としを行えば、止める者は居ないということになる。

(もつとも、タイミングとサイド1防衛隊への説明が面倒ではあるがな)

なにしろ、コロニーの移動というのはかなり目立つ。

そして、コロニーの移動に気づいたエウーゴが引き返してくれば、ネオ・ジオンとエウーゴの同盟は完全に崩壊し、下手をすればそのまま交戦状態となって肝心の作戦も失敗する可能性が高い。

となると、この作戦を実行するのはエウーゴがルナツターのジオン軍と交戦状態となった直後が最適だ。

次にサイド1防衛隊への説得だが、これは1度こちらに参加した以上、後戻りは出来ないとしても脅せばどうにかなる。

(しかし、一番の問題は我々だけで落下するコロニーを護衛できるかどうかだな)

前述したように、コロニーの移動というのは目立つので落下させるコロニーをサイド1から抜け出させた段階でジオン共和国軍が察知する可能性は非常に高い。

いや、确实と言っても良いだろう。

そして、コロニーが落ちるとなれば当然の事ながらジオン共和国軍も全力で妨害してくる。

勿論、それに対応するためにネオ・ジオン軍は全力で護衛を行うつもりだが、宇宙に居るネオ・ジオン軍は少数であり、とてもではないが護りきれるとは思えない。

そうになったら、作戦は間違いなく失敗する。

いや、失敗するくらいなら可愛いもので、最悪の場合、コロニーが軌道から外れて味方の陣地に落ちるといいう可能性も十分にあった。

(やはり我々だけでは作戦を遂行できる可能性は低いか。さて、どうしたものか)

ランスはそんなことを考えていたが、先程から何かを考え込んでいたランスを心配したのか、ブレックスは心配そうにこう言ってきた。

「ランス少佐、どうしたのかね？」

「ああ、いえ、すいません。少し考え事をしていたもので」

「そうか」

「申し訳ない。しかし、やはりルナツを攻略できるとは思えませんね。何か秘策がお有りなのですか？」

「秘策か。まあ、秘策と言えば、秘策だな。その書類の最後のページをよく見てみてくれ」

「最後のページですか？」

そう言われて、ランスは書類の最後のページを捲り、じっくりと読む。

すると――

「こ、これは・・・」

そこに書かれてあった内容に、ランスは目から鱗が落ちるような思いをした。

そして、そんなランスにブレックスはニヤリと笑う。

「どうだ？ 気に入ったかね？」

「感服しました!!これならなんとかかなりそうです!!」

「そうか。では、作戦開始日は3月1日とするが、それまでにそちらは準備できるかな？」

「勿論です！必ず準備させます!!」

ランスはそう喜色満面な顔でそう叫んだ後、ブレックスに対して最大限の敬意を込めた敬礼を行った。

UCC0080年 2月22日 危機のフラグ

◇宇宙世紀0080年 2月22日 L2宙域 サイド3 ズム・シテイ 総帥府

「・・・凄まじい働きぶりだな、ホワイトベース隊は」

ギレンはセシリアから渡された報告書を読みながら、半ばドン引きしていた。

1週間前の2月15日にアフリカに降下したホワイトベース隊は旧モロッコ北部へと降下し、そこを占領していたアフリカ共和国軍相手に存分に暴れ回り、結果的に後方を荒らされた旧モロッコ南部のアフリカ共和国軍は混乱し、アフリカ攻略軍別動隊は逆に息を吹き返す。

そして、その後、別動隊とホワイトベース隊は協力する形で旧モロッコ南部に侵攻してきたアフリカ共和国軍を叩き、遂に旧モロッコ南部からアフリカ共和国軍を退けることに成功し、別動隊包囲の危機は取り敢えず去った。

(別動隊には明日、連邦軍の増援が到着するって話だし、これで当面はアフリカ戦線は問題ないな。・・・そうになると、ホワイトベース隊はどうしようかね?)

正直なところ、アフリカ戦線が崩壊しては不味いからとホワイトベース隊をアフリカへと送ったが、その後の事はあまり考えておらず、ギレンはここで彼らを宇宙に戻すか、それともこのまま地上に活動させようか迷っていた。

だが、これについては存外早く結論が出る。

(宇宙に戻しても使う場面は今のところ、特にはない。なら、このまま地上で活動させよう。連邦に恩も売れるだろうしな)

そう思い、ギレンはホワイトベース隊に引き続き、地上で活動させることを決定し、次にMS計画についての書類を読み始める。

「Zガンダムは予定通り、3月に完成する、か。可変機構が無い分、原作より性能は劣るだろうが、これであるガンダムMK-2擬きはなんとかなりそうだな」

ギレンはZガンダムに可変機構が無いことをあまり重大な問題とは思っていない。

何故なら、MAに変形出来ないことよって加速性能が原作より劣ると言っても、それはMSの性能が向上するにつれて解決する問題だし、可変機はそのZ時代ですらも主力量産機に採用されなかったことから分かる通り、コストが高いのだ。

原作ではそういった問題もあって、可変機構のあるMSはガンダムも含めてZ時代以降、姿を消している。

つまり、長く使い続けることを考えれば、可変機構削除というのは却って都合が良いのだ。

(あとはネモでも準備できれば言うこと無しなんだが……流石にこの戦争には間に合わないだろうから、おとなしくザムⅡ改の量産と他の機体の改修を進めた方が良さそうだな)

そう思いながら、ギレンはサイド1を未だ占拠しているエウーゴとネオ・ジオンへの対応を考え始める。

だが――

(……やはり難しいな。コロニーをほとんど傷つけずにサイド1を取り戻すのは)

何度頭の中で考えても出てくるその結論に、ギレンはため息をつ

く。

これが開戦初期であれば問題はなかった。

あの時は駐屯する連邦艦隊の数も少なかったし、コロニー内に居た連邦軍の駐屯軍はルウム沖会戦にて連邦艦隊のほとんどがやられ、更にはルナツーを占領された時点でそのほとんどが降伏し、徹底抗戦を選んだ駐屯地も時間をかけてゆっくり制圧することが出来たからだ。

しかし、今回は敵の艦艇（特にエウーゴ）があまりに多すぎて、コロニーに大きな損害を出さずに制圧するといった真似は事実上不可能だった。

いや、厳密には時間を掛ければ出来る。

当初の予定通り、周辺宙域を封鎖して敵を日干しにすれば良いのだから。

だが、それをやった場合、サイド1周辺宙域の奪還も含めてとんでもない時間が掛かる。

そして、だらだらと長く宇宙で戦いを続けて地球での戦いを片付けた連邦が出張って来られても困るので、早めに決着を着けなければならぬとギレンは考えていた。

（向こうが出てきてくれれば手っ取り早いんだがな。いや、そんな都合の良い話は流石に無理か）

ギレンはそう思いながら、もう少し様子見をするという結論を出そうとするが、その前に念のため、傍らに居るセシリアにエウーゴの動向について尋ねてみることにした。

「セシリア、サイド1の動向について何か気になることはあるか？」

「サイド1ですか？」

「そうだ」

「……そうですね。そう言えば、2つのコロニーで疎開が始まっていると聞いていますが……」

「なに？」

物凄く不穏な単語が出てきたことに、ギレンは眉をしかめる。

「どうかされましたか？」

「……そのコロニーに関してだが、何か工事をしている様子はなかったか？」

「いえ、そこまでは……」

「では、現地の諜報員にそこら辺の詳しい報告をさせてくれ」

「……2日前から既に音信が途絶えています」

なんてことだ。

そう思いながら、ギレンは内心で舌打ちをする。

コロニー住民のコロニーからの疎開。

一見、なんとでもないように聞こえるが、この宇宙世紀の世界ではある2つの可能性に対するフラグでもある。

まず1つ目がコロニーレーザーへと改造されている可能性。

そして、もう1つがコロニー落とし用に徴発した可能性だ。

いや、2つと言っていたので、両方である可能性もあるが、どちらにしてもとんでもない大量破壊兵器である事は間違いない。

勿論、この2つの可能性が全くの杞憂で何か他の理由で疎開を行っているという可能性もあるが、この大量殺戮が簡単に起こる宇宙世紀の世界ではそんな可能性は期待するだけ無駄だ。



(そう出てきたか。確かにそれしか向こうに取れる手はないが・・・)

元々、今回、ジオンと連邦の敵となったアフリカ共和国、ネオ・ジオン、エウーゴ、カラバの内、アフリカ共和国以外は地に足を着けているとは言えない組織だ。

となると、当然の事ながら一度戦力を消耗すれば回復はほぼ不可能であり、一発当てて敵の戦力を一気に削りたいと考えるのは当然の帰結だった。

勿論、やられる側としては堪ったものではなかったが。

(さて、どうするかね)

コロニーレーザーにしろ、コロニー落としにしろ、大して時間は無いのは明らかだ。

なにしろ、この世界のソーラ・レイは確かに建造に2ヶ月くらいは掛かっているが、あれは未完成の部分をこちらが手直しした為に時間が掛かったのであり、原作でのマハルを基にしたソーラ・レイは住民の疎開から10日も経たずして実戦に投入されているし、コロニー落としに至っては原作では事前に計画を練ったとはいえ、サイド2のコロニーを確保してから僅か一週間で地球に落下させているのだから。そして、一番の問題はその対処方法だ。

コロニーレーザーはまだ良い。

そのままエネルギー供給施設と砲口部分を徹底的に破壊してしまえば良いのだから。

しかし、コロニー落としとなると地球の軌道に乗る前にコロニーそのものを破壊しなければならぬのだが、原作で連邦艦隊が落下を阻止しようとして結局地球に落ちてしまったことから分かるように、それはかなり困難なのだ。

加えて、コロニー程の質量を跡形もなく完全に破壊するには、そこそ核ミサイルやソーラ・システムでも持ってこなければならぬ。

(だが、それは不味い。スペースノイドはコロニーを破壊されることに凄まじい忌避感を感じるからな)

ついでに言えば、コロニーレーザーの開発やコロニー落としが行われようとしているという確かな証拠もない。

そんな状況で核ミサイルやソーラ・システムなどの大量破壊兵器を使ってしまうえば、コロニーを壊すのは戦後の他のサイドとの関係に凝りが残ってしまう。

となると、通常兵器でやらなければならない。

(…仕方ない。多少コロニーに損害が出てしまうことになるが、さつき出した様子見のプランを変更してサイド1に対する強襲攻撃を行うか)

ギレンはそう考える。

実のところ、サイド1強襲のプランは以前から考えており、内容としては『多数のベースジャバーに乗せたMS部隊でサイド1に居る艦隊に強襲を掛ける』というものであったのだが、やはり流れ弾によってコロニーに被害が出ることから、取り止められていた。

しかし、ここに至ってはやはり腹を括ってやらなければならないだろう。

そう思い、ギレンは改めてセシリアの方に向き直ると、彼女に向かってこう命令する。

「セシリア。すまないが、ソロモンのドズルに通信を繋げてくれ」

「ドズル閣下にですか？」

「そうだ。ちょっと伝えなければならぬことができた」

「分かりました。では、一旦失礼します」

「頼む」

ギレンがそう言うと、セシリアは一礼した後にギレンに任された仕事を果たすべく部屋を退室していく。

——こうして、ブレッツクスの秘策は始まる前から破綻する気配を見せようとしていた。

U C 0 0 8 0 年 2 月 2 7 日 狂気

◇宇宙世紀0080年 2月27日 地球 アフリカ共和国 首都カイロ

「くそっ！何故だ!？」

ジーン・コリニー総統はそう叫びながら、たった今部下が持つてきた書類を床に叩きつける。

ホワイトベースが降下してからというもの、戦況は刻々と不利になっていった。

旧アンゴラ南部の攻勢が失敗し、その後来た増援と合流したアフリカ攻略軍別動隊は軍の再編成を終えた後、旧アンゴラ北部奪還作戦を開始し、これに成功。

折角占領した旧アンゴラ北部はまたもや奪われることとなった。

そして、レビル將軍の本隊の方は多数の損害を出しながらも、旧モロッコ全土を占領しており、更にはジャミトフ・ハイマン大佐の率いる軍勢もまた旧ソマリアに上陸して橋頭堡を築きつつある。

対して、こちらは肝心のMS部隊はレビル本隊を抑えることで精一杯、いや、それすら怪しくなっている上に核ミサイルはもう使いきってしまった。

・・・はつきり言つて、ここまで来ると敗色濃厚な気配が漂っていることは、脳の障害があるか、薬をやっている人間でもない限りは子供でも分かる。

だからこそ、ジーンは狂乱に近い焦りを覚えていた。

「ネオ・ジオンは何をしている!!」

ジーンは思わずそう叫ぶ。

そもそもジーンがネオ・ジオンに便乗して事を起こしたのは、戦後となれば自分は確実に更迭されるかもしれないという恐怖もあった

が、それ以上にネオ・ジオンの戦力を宛にしていたからだ。

だが、蓋を開けてみれば、そのネオ・ジオンは東南アジアのジャングルに悪戦苦闘しており、ダグラス・ローデン准将の巧みな指揮によつてどうにか少しずつではあるが前進しているものの、それは亀のように遅い進撃速度となっていた。

しかも、戦術的な観点から見ると、ネオ・ジオンの消耗は現地の連邦軍を上回っており、ネオ・ジオンはかなりの出血を強いられることとなつている。

つまり、現実にはネオ・ジオンは全く宛にならなかつたのだ。

「くそっ！どうすれば良い!!」

核ミサイルもダメ、MS部隊も一方面にしか展開していない上に押され気味、更に別動隊撃滅にも失敗し、それどころか戦線は3つに増えた。

この状況をどうにかしようとジーンは必死に頭を回転させるが、何とも良い案が思い浮かばない。

(いつそこのまま逃げるか?)

ジーンはそうも考える。

しかし、逃げたとしても地球連邦に弓を引いた自分を地球連邦政府は血眼になつて探すだろうし、ジオン共和国もまた一年戦争で多大な損害を与えられた経緯から、自分の身柄を必死に探すだろう。

そして、地球連邦とジオン共和国の諜報機関は優秀であり、この2つに挟まれたとなると、逃げた場合のジーンの迎える最終的な結末は確保↓拷問↓死、あるいは確保↓(形式上の)裁判↓(見せしめのための)公開処刑の流れになることはまず間違いない。

「そんなのは御免だ!」

そう叫びながら、この状況を抜け出す手段をなんとか考える。

そして、その答えは意外とすぐに出た。

……ろくでもない形で、だが。

(……そうだ！まだ化学兵器が残っているじゃないか)

そう、あのウイルス兵器は使いきってしまったているが、まだ化学兵器は残っているのだ。

その中には原作でシーマ・ガラハウ率いる海兵隊が使ったGGガスなどの毒ガス兵器が含まれている。

(特に毒ガスは良い。あれならば、細菌やウイルス兵器と違って後始末の手間も掛からない)

ジーンはそう思うが、実のところ、毒ガスというのは確かに細菌兵器やウイルス兵器に比べると後始末には困らないし、コロニーなどの密閉空間ではかなりの効果を発揮するのだが、逆に言うと地球のような外気が存在する環境では、強い風が吹くと効果が急速に薄くなった。場合によっては風に乗せられた毒ガスによって友軍がダメージを受けるなどというケースもざらにあるのだ。

実際、そういった経緯もあって第一次世界大戦以降、毒ガスは滅多なことでは使われなかった。

そして、ジーンが毒ガスの使用を想定している場所は当然の事ながら地球、それもアフリカ大陸上なので、友軍どころか、自国民であるアフリカ共和国の国民にまで毒ガスが行ってしまう可能性もある。

……つまり、自国領で毒ガスを使うというのは、相当な愚策ではないのだが、ジーンはそれを分かっているながらも「些細なこと」と脳内で片付けてしまっていた。

人間というのは追い詰められてとんでもない事をやらかそうとすると、そのデメリットを見ない、あるいは軽視する生き物であるが、ジーンの場合は正にその典型的な例だろう。

更に――

(いや、待てよ。どうせなら、世界中に毒ガスをばら蒔いた方が効率が良いのではないか？敵は少ない方が良いのだしな)

ジーンはそう考える。

もう考えていることが完全に狂人の思考なのだが、ジーン自身は気づいていないし、そんな心の余裕もなかった。

(だが、今はガスの数が少ない。せめて数が揃うまで待とう。そうしたら、現在アフリカに上陸している連邦軍が居る辺りと世界中に一斉にばら蒔けば良い)

ジーンはそんな算段を立てながら、近くに人が居たなら裸足で逃げ出していたであろう歪んだ笑みを浮かべていた。

◇L5宙域

マゼラン改級戦艦『ダカール』

艦橋<sup>ブリッジ</sup>

「やられた……」

エウーゴの代表――ブレックス・フォーラー大佐は悔しげに歯噛み

をしながらそう呟く。

数時間前、ジオン共和国軍は2波に渡る猛攻撃を行ってきた。

まず第一派でビーム攪乱幕をサイド1近辺にばら蒔き、メガ粒子砲などのビーム兵器を無効化。

第2派でマシンガンやバズーカなどの従来の実弾兵器を装備した黒い三連星の率いる部隊がネオ・ジオンを無視してエウーゴの艦艇とMSに集中攻撃を掛けてきた。

その結果、エウーゴは3分の1の艦艇とMSの半分を失い、更にはサイド1から叩き出されることとなったのだ。

「これではルナツー攻略どころか、他の拠点を攻略することも困難だ」

現在、エウーゴの艦艇は40隻程までに減っている上に切り札であった2基のコロニーの内、エウーゴが護っていた1基のコロニーは既に占拠されていた。

もう1基のコロニーはサイド1とネオ・ジオンの艦艇が護っていたが、こちらの占領も時間の問題だろう。

こうなると、ルナツー攻略はもう不可能であり、おまけに前述したようにサイド1から叩き出されてしまっている為、代わりの拠点を探さなければならぬ。

だが、40隻もの艦艇と多数のMSを整備できるコロニーは既にジオンの手が回っているし、中立であるサイド6も『エウーゴやカラバに関して支持しない』とはっきり表明してしまっているので、自分達がサイド6に近づいた途端にジオンから売却されたMSによつて編成されているという現地の防衛隊に攻撃されてしまうだろう。

勿論、無理矢理排除することも不可能ではないが、それをすることはエウーゴがスペースノイドの支持を失うことにもなる。

「そうなるよ、向かうのはやはりフォン・ブラウンか?」

フォン・ブラウン。



サイド6と同じ中立地帯であり、また一年戦争後の南極条約によって、戦後の地球連邦の首都が内定している月面都市でもある（ちなみに原作のV時代でも地球連邦の首都となっていた）。

サイド6と違う点は、どの勢力にも支持を表明していない点であり、またこの都市に駐留する武力もアナハイムの影響力が強いことからアナハイムへの技術流出を恐れてジオンからMSも輸出されおらず、ザクとドム、ゲルググが警備隊に配備されている程度。

まあ、それでもサイド6の防衛隊より規模は大きいし、配備されているMSの性能も意外に高いが、サイド6防衛隊のようにジオンから軍事指導を受けているという訳ではないので、その運用方法は杜撰なもの。

今のエウーゴなら占拠は難しくない。

ジオンに気づかれなければ、の話だが。

（決まりだな。一か八か、フォン・ブラウンに向かおう。一度、都市に入ってしまったら、ジオンもそう簡単に手出しは出来ない筈だ）

もつとも、ジオンがフォン・ブラウンの損害に構うことなくエウーゴ撃滅を優先すれば終わりだが、その時は潔く諦めるしかない。

そう考えながら、ブレックスはフォン・ブラウンに向かう旨を伝えるようにブリッジスタッフに命令しようとするが、その前にブリッジスタッフの1人がとんでもない報告をブレックスの耳に入れてくることになった。

「ブレックス大佐！大変です!!ネオ・ジオンとサイド1防衛隊の連中が護っていたサイド1・28バンチの核パルスエンジンが動き始めたとのことです!!」

「なんだと!?モニターに出せ」

ブレックスがそう叫び、数秒の後、モニターにスタッフが言ったサ

イド1・28バンチの様子が映し出される。

「なんてことだ・・・」

そこには動き出した核パルスエンジンによって、動き出したサイド1・28バンチの光景があった。

「・・・目標到達予測値点は？」

半ば確信しながらも、ブレックスは敢えてその進路を尋ねる。  
すると、ブレックスの予測通りの答えがスタツフから返ってきた。

「91パーセントの確率で・・・地球、です」

U C 0 0 8 0 年 2 月 2 9 日 秘密道具

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0 0 8 0 年 2 月 2 9 日 地球軌道上

(もう少しだ・・・)

コロニーを落下軌道まで護衛しているネオ・ジオンのMS部隊の隊長——ランス・ガーフィールド少佐は乗機であるリック・ディアスを操りながらそのようなことを思っていた。

ここまでコロニーを運ぶためにネオ・ジオンとサイド1防衛隊のMS部隊はかなりの奮闘をし、その数はランスの機体も含めて既に数機まで減ってしまっている上に、攻撃を受けたことによつてコロニーそのものもかなりボロボロになってしまっている。

しかし、原形はちゃんと留めており、地球に落ちれば確実に地表に大ダメージは与えられる筈だ。

加えて、コロニーの落下阻止限界点まで残りあと数分。

もはや阻止は間に合わない。

そして、その落下目標は旧アメリカ西海岸カリフォルニア・ベース。

そこは一年戦争終結後にジオン軍が撤退する予定になっていた場所であったが、今回の戦争の勃発によつて一時棚上げとなり、未だガルマ・ザビ大佐による統治が行われている場所だった。

その場所を選んだ理由は当然の事ながらネオ・ジオンの主流派であるダイクン派によるザビ家への復讐の意味合いが強い。

と言つても、そのトップであるシャアは原作と違ってザビ家への復讐心はほとんど無かつたし、そもそも本来のブレックスの計画では地球へのコロニー落としてはプラフになる予定だったので、この落下目標はランスが勝手に決めたものなのだが。

(これで一矢報いる事は出来る筈だ)

ランスはコロニーが落ちた後の自分の死を確信していた。

まあ、この状況下で無事に生きて帰れると思う方がおかしいだろうが、だからこそ彼はせめて末弟とはいえ、ザビ家の人間に自分の手で抹殺したかったのだ。

もつとも、既にキャリフォルニア・ベースから逃げている可能性もあったが、その時は味方を見捨てて逃げたとしてガルマの名誉とザビ家の権威を纏めて貶める事が可能になる。

つまり、目標であるキャリフォルニア・ベースにさえ落ちればどう転んだとしてもネオ・ジオンにとって損はないのだ。

そして、数分後、残ったコロニーの護衛が自分の機体だけとなったのとほぼ同時に、コロニーが落下阻止限界点を越え、彼は勝利を確信する。

しかし――

「なんだ？」

突如、巨大な赤いマントとその四隅を持つ4機のジオンのものらしきMSが現れ、そのまま落下進路上へと移動していく。

だが、それを見てもランスは敵が何をしたいのか全く分からなかった。

当然だろう。

ただの赤いマントをコロニーの進路上に持ってきたところで、コロニーを止められる筈がないのだから。

(何かの新兵器か?)

ランスはそうも考えるが、もう落下阻止限界点を越えている以上、何か出来るとも思えない。

首を傾げるランスだったが、次の瞬間、不思議なことが2つ起こった。

1つは4機のMSが持っていたマントがいきなり巨大化したこと。

そして、もう一つはその巨大化したマントがコロニーと接触した事によって、落下するコロニーが文字通りマントによって弾かれ、その進路が大きく変わってしまったことだ。

(なんだと!?)

その一連の流れを見たランスは目を大きく見開く。  
それはそうだろう。

状況から見てコロニーを弾いたのはあのマントであるのは間違いないが、それがどうして巨大化したのか、そして、どうやって弾いたのか、いや、そもそもたかがマントに数十キロの大きさのコロニーが弾き飛ばされるといふその光景は、とてもではないが信じられなかったのだから。

「な、なにが起きた!？」

混乱して頭が真っ白となるランスだったが、それが彼の命取りとなった。

何故なら、彼のリック・デياسに、いつの間にか接近していたペガサス隊の隊長——クルト中尉のザムⅡ改のビームライフルの銃口が向けられていたからだ。

そして、次の瞬間、その引き金が引かれてエネルギー弾がリック・デياسの動力部を撃ち抜かれ、機体は文字通りの意味で宇宙の塵となり、彼の意識もまた永遠に途絶えることとなった。



「なんとか間に合って良かったあ……」

赤いマントの四隅の一角を持つガンダム改B型に登場するパイロット——野比のび太特務少尉はそう言いながら、息を大きく吐いて安堵した様子を見せる。

のび太達がやったことは簡単だ。

まずビッグライトでひらりマントを大きくし、その四隅をモビルスーツ4機でそれぞれ持つ。

次にフェルミラーでビッグライトの数を増やし、それぞれの機体のパイロットに配り、ひらりマントをコロニーの落下進路上に運び、接触する少し前のタイミングでそれぞれの機体がビツクライトを光らせてひらりマントを更に大きくしてコロニーを弾く。

まあ、要するに旧作ドラえもんの映画『のび太の宇宙漂流記』で超巨大移民船——ガイアを小惑星から反らすのに、のび太が思い付いて仲間と共に実行した作戦である。

ちなみにこの世界に転移したのび太は新作ドラえもんののび太なので、宇宙漂流記は経験していない筈なのだが、旧作と新作という世界観の違いはあれども流石同じのび太と言うべきなのか、コロニーが落下するという話を聞いて咄嗟にこの方法を思いつき、ドラえもんとペガサス隊のメンバーに話して協力して貰い、コロニーを弾くことに成功したのだ。

そして、その肝心のコロニーだが、ひらりマントで盛大に上に向かって打ち上げられた結果、重力圏を逆行して軌道上へと戻っている、そこで完全に動きを停止させた。

あれならば、ランスの目標であった北米西海岸はおろか、地球にすら落ちはしないだろう。

のび太がそう思っていた時、のび太のガンダム改B型を含めた4機の機体に対してクルト中尉から通信が入る。

『お前らよくやったな。これでコロニーが地球に落下することは無くなった』

『ええ。しかし、あんなマントでコロニーを弾き返すって聞いた時は正直、耳を疑いましたよ』

クルトの言葉にスレンダー軍曹はそう返し、それを聞いたのび太は苦笑した。

(そう言えば、前の世界でもドラえもんが来た当初は秘密道具の力を疑ったり、実践して町の人に騒がれたりしたなあ)

のび太は前の世界での過去を思い出す。

今ではすっかり慣れてしまっていたが、ドラえもんが来た当初はポケットに入っていた秘密道具の力をのび太は疑っていた。

当然だろう。

空気を圧縮して空気の弾丸を放つ空気砲や相手を気絶させる程度のエネルギーを放つショットガンならまだ理解できるが、どう見ても人間の力を支えきれない大きさで飛ぶタケコプターやあらかじめインプットしている土地は10光年先までならドアを開けば一瞬で行けるどこでもドア、果てはこれから起こる出来事そのものを返ってしまったりする秘密道具など、突っ込み満載の秘密道具も多かったのだから。

まあ、それでも実際に秘密道具を使ってみて『これが22世紀の科学力かあ』と僅かな期間であっさり秘密道具の存在を受け入れてしまえるのがのび太の凄さでもあったのだが。

そして、それはのび太だけではない。

のび太の住む練馬の住民も最初こそタケコプターなどの秘密道具

に驚いたものの、僅か数日であっさり慣れ、大冒険などで出会った宇宙人、別世界の住民、更にはそもそも人間ではない存在などは、それこそび太よりもあっさり秘密道具の存在に馴染んだ。

しかし、今思えばこれが異常だった。

人間というのは本来、自分の常識をぶっ壊すような代物が現れた場合、それをなかなか受け入れない存在なのだ。

そう、この世界の人間が秘密道具の事を説明してもなかなか信じなかったように。

(そう考えると、よくこの作戦に賛同してくれたな)

今考えれば、こんな端から見ると無茶苦茶な作戦、幾ら危機的状况にあるとはいえ『ふざけるな!』と一蹴されるのがオチだろう。

だが、ペガサス隊のメンバーは思ったよりすんなり作戦に賛同し、協力してくれた。

(・・・やっぱり良い人達だな。ペガサス隊のみんなは)

のび太はそう思ったが、実のところ、それだけではない。

確かにのび太の思った通り、ペガサス隊のメンバーは良い人間達だったが、それだけであんな無茶な作戦が承認されるわけではないのだ。

しかし、それでも承認されたのは、やはりのび太やドラえもんの人徳によるものが大きい。

もし仮にのび太やドラえもん以外がこの作戦を提案したら、間違いなく作戦は却下となっていただろう。

無茶な作戦を行わせるには、指揮官、あるいは作戦立案者にそれなりの人徳が必要なのだから。

まあ、中には葛城ミサトのように人徳抜きでテレビ版エヴァのラミエル戦やサハクイエル戦のように作戦成功率一桁台や万に一つも成功しないような作戦を無理矢理やらせる例もあるが、この時のシンジ



達のモチベーションは間違いなく下がっていた筈だ。

もつとも、それで作戦を成功させるのだから、この時のシンジ達・パイロットの働きも大したものだったが。

『はっはっは。では、全機。ペガサスに向けて帰還する。帰るまでが終わりだ。今、敵が見えないからと言って油断するなよ!!』

『『『了解!!』』』』

そんなやり取りがあつた後、5機のペガサス隊のMSは一路母艦に向けて帰還していく。

——こうして、コロニー落としは未然に阻止され、宇宙でのネオ・ジオン勢力もまた壊滅することになった。

だが、宇宙での戦いはまだ終わりではない。

何故なら、まだエウーゴの存在が残っているのだから。

U C 0 0 8 0 年 3 月 1 日 隠蔽

◇宇宙世紀<sup>U</sup>0080年 3月1日 L2宙域 サイド<sup>ム</sup>3 ズム・シ  
テイ 総帥府

「やれやれ、今回ののは流石に肝が冷えたな」

ネオ・ジオンによるコロニー落下の件についての報告書を見たギレンはそう言いながら、傍らに居たセシリアに向き直りこう告げる。

「それで、言われた通りコロニー落下阻止の経緯についての隠蔽工作はやってくれたかね？」

「いえ、隠蔽のシナリオを考えるのがなかなか難しく原因不明ということで誤魔化してあります。・・・申し訳ありません」

セシリアは申し訳なさそうに頭を下げる。

もつとも、この件に関しては彼女は悪くない。

なにしろ、コロニー落しという一大事が阻止された真相を隠せというギレンの命令は、どう考えても無理がありすぎるものなのだから。

それを自覚していたのか、ギレンは慌ててこう励ます。

「いや、そこまで責めたりはしない。要はこの件についての真実が漏れなければ良いのだからな」

とは言ったものの、実のところ命令したギレンでさえ真実を隠蔽する必要性について半ば疑問に思っていた。

なにしろ、赤いマントがいきなり巨大化してコロニーの軌道を反らして打ち上げたなどと言っても誰も信じないであろうからだ。

（まあ、それでも念には念を入れた方が良いな。この事が漏れたら大変なことになる）

そう、ギレンを含めた転生者達にとって、秘密道具という存在はなによりも隠匿しておきたい代物だ。

何故なら、その存在がバレたりすれば間違いなく争いの火種の1つになる。

人間は強い力が目の前にあった時、それを手に入れることを簡単に諦められるような出来た生き物ではないのだから。

加えて、他の勢力が手に入れたりすれば大変なことになる。

だからこそ、ギレン達はのび太達に対して秘密道具の使用を迫らなかつたし、自分達が秘密道具を使おうという気も更々無かつた。

自分達が使った利より、他勢力がその存在を知って奪った際の損の方が大きいと考えていたし、なにより秘密道具を使ったことによって自分達が想像も出来ないような歪みがこの世界に発生して貰っても困る。

・・・まあ、『秘密道具の存在は自分達の今までの頑張りを全否定されているような気がして嫌だ』という私情もちよっぴり存在していたが。

（まあ、そもそも秘密道具製造に必要なフルメタルが無いから秘密道具を自作することはほぼ不可能だろうがな）

ギレンはそう思いながら、未だ健在となっているエウーゴの動きをセシリアへと尋ねる。

「ところで、コロニー落とし騒ぎのどさくさで逃げたエウーゴの動きはどうなっている？」

「はい、どうやらフォン・ブラウンへと向かっているようです」

「フォン・ブラウンか・・・確かあそこにはあまり大した防衛戦力はなかったな」

「はい。丁度、予測進路上の近くにはサイド5があり、コンスコン少将の艦隊が駐留していますが、この艦隊をエウーゴの迎撃に差し向けますか？」

「・・・いや、止めておこう。それで裏を搔かれて留守となったサイド5に空き巣に入られては目もあてられん」

セシリアの進言の内容を一瞬考えた後、ギレンはそう判断した。

サイド5防衛隊はジムⅡを主力機としており、一部にジムⅢが配備されているなど、ジムⅠが数的主力だったサイド4防衛隊や今は壊滅したサイド1防衛隊に比べると強力な軍事勢力ではあったが、流石にエウーゴのハイザックとは勝負にならないし、仮になったとしてもエウーゴの艦隊をサイド5防衛隊だけで押し留めるのは不可能だ。

となると、コンスコンの艦隊はやはり動かすべきではない。

しかし、それ以外となると動かせる部隊は相当限られてくる。

まずソロモン艦隊は無理だ。

先日のザーン会戦にてエースパイロットには損失は出なかったものの、多数のベテラン・熟練パイロットを失ってしまい、回復に3ヶ月（ただし、機体だけならば1ヶ月で補充可能）は掛かる大損害を負ってしまった上に、ネオ・ジオン撃滅とコロニー破壊で地球軌道に出払ってしまったので、時間的にもう間に合わない。

サイド2駐留のユーリ・ハスラー准将の艦隊もまた距離的に遠すぎて無理だ。

となると――

「グラナダ艦隊を動かすしかないか・・・」

グラナダにはフォン・ヘルシング大佐の指揮するグラナダ艦隊が駐

留しており、この艦隊ならばエウーゴ迎撃に間に合うし、仮に裏を掻いてグラナダに空き巣に入ろうとしてもその時はグラナダ駐屯のジオンMS部隊の出迎えを受けることになる。

正にこの状況に打ってつけの部隊なのだが、問題なのはグラナダ艦隊は数が少なく、艦艇の数は16隻（それも旧式の巡洋艦が4隻と駆逐艦12隻）とエウーゴの半数以下しか存在しないことだ。

更に艦も旧式ならMSも旧式揃いであり、流石にジムIこそ居ないが、ジムIIやジムIIIが主力として運用されており、隊長機としてザムIが配備されているという有り様だった。

（これじゃ勝負にならないな）

ギレンはそう思いながら、苦虫を噛み潰したような表情をする。

元々、一年戦争の頃からグラナダ艦隊の重要性はそれほど高くなかった。

何故なら、グラナダは完全なる後方の拠点だったからだ。

小説版ガンダムではソロモンを無視してグラナダに連邦軍が侵攻してきたが、この世界ではサイド5が健在なので、ここにジオン軍の戦力が駐留している限りはそれを無視してグラナダに行くことはほぼ不可能であり、だからこそ、グラナダに戦力を多く置くことは無かった。

そして、一年戦争が終結してこの戦争が始まった時も舞台となったのはL5宙域であることから依然としてグラナダは後方として見られており、艦艇の増強は行われることは無かったのだが、その措置は今この時に限っては完全に裏目に出てしまっていたのだ。

「・・・やはりグラナダ艦隊だけではただの的になってしまいうからダメだな。他に動かせる部隊は有るか？」

「ア・バオア・クーの艦隊は如何ですか？」

「ア・バオア・クーか・・・」

ギレンは素早くそのIQ240の頭脳でア・バオア・クーからフォン・ブラウンまでの距離、更にはエウーゴ艦隊が今居る場所とフォン・ブラウンに到着するまでの時間を計算する。

その結果――

「ギリギリ無理だな」

そんな結論が出た。

「それにソロモンへの増援でア・バオア・クーの艦隊は大分目減りしているからな。仮に間に合ったとしても、エウーゴに対抗できるかどうかは微妙なところだ」

「では、グラナダ艦隊並びにフォン・ブラウン防衛隊に時間稼ぎを行わせて、ア・バオア・クーからの艦隊を増援を間に合わせるといのはどうでしょうか？」

「それは・・・」

ギレンはそれにも微妙な顔をする。

グラナダ艦隊とフォン・ブラウン防衛隊。

どちらが戦力が有るのかと言われれば、フォン・ブラウン防衛隊だが、それにしてもエウーゴと比べれば五十歩百歩の差でしかなく、仮にグラナダ艦隊と合同でエウーゴを迎撃したとしても蹂躪される未来しか想像できない。

ぶつちやけ、精々、弾除けくらいにしかならないだろう。

「・・・やはり駄目だ。上手く行く保証が無すぎる」

なるほど、確かにフォン・ブラウン防衛隊とグラナダ艦隊を合流させて迎撃すれば足止めは可能かもしれないし、上手く行けば2つの勢力を相手に消耗したところでア・バオア・クー艦隊をぶつけて撃滅することが出来るかもしれない。

しかし、この手のタイミングを必要とする作戦は大抵が失敗する。

この作戦もフォン・ブラウン防衛隊やグラナダ艦隊が予想よりも早く撃退されるか、あるいはア・バオア・クー艦隊が駆け付けるのが遅ければ終わりだし、そもそもタイミングが合って作戦が上手く行ったとしてもアポロ作戦のシロツコみたくフォン・ブラウンに強行着陸されたらジオンにとってかなり不味いことになるのだ。

何故なら、フォン・ブラウンはジオンが次の地球連邦首都として指名した都市。

もしここでフォン・ブラウンにエウーゴが着陸して、ジオンが強行手段を取った場合、ジオンの外交的な面子と信頼がセットで失われることになる。

それだけはジオンとしても避けたいので、フォン・ブラウンにエウーゴが入ったらジオンは撤退するしかなくなるのだ。

とは言え、このままなにもしないわけにはいかないというのも事実だ。

「・・・やむを得ん。ア・バオア・クー駐留のMS部隊の幾つかをフォン・ブラウンに派遣しろ。あとグラナダ艦隊も出撃させ、エウーゴのフォン・ブラウン攻略が始まり次第、側面から奇襲するように通達してくれ」

「それではアナハイムにMSの情報が漏れますが？」

「構わん。この際、やむを得ないと割りきる」

「・・・分かりました。フォン・ブラウン市には話を通しておきます」

「頼んだ」

こうして、ア・バオア・クーのMS部隊がフォン・ブラウン市に向かうことは決定され、翌日にはフォン・ブラウン市に進出した。

——そして、その更に2日後、エウーゴがフォン・ブラウンに侵攻し、後にフォン・ブラウン沖会戦と呼ばれる戦いが始まることとなる。



UC0080年 3月4日 フォン・ブラウン沖会戦

◇宇宙世紀0080年 3月4日 フォン・ブラウン周辺宙域  
エウーゴ旗艦『ダカール』ブリッジ 艦橋

「左舷下方からMS一機、突っ込んできます!!」

「対処しろ!!」

エウーゴ旗艦『ダカール』のブリッジにて、オペレーターと艦長の怒号が響き渡る。

フォン・ブラウンに侵攻したエウーゴ艦隊だったが、そこで待っていたのはフォン・ブラウン防衛隊とジオン共和国フォン・ブラウン軍駐屯軍のMS部隊による迎撃だった。

当然、エウーゴも応戦するが、ザクやドム、一部ゲルググといった部隊で構成されているフォン・ブラウン防衛隊は兎も角としてザムⅡ改で構成されるジオン軍の相手は流石のエウーゴ艦隊といえども手こずっており、先程から必死の防戦を繰り返している。

「敵モビルスーツ撃墜!」

自らに向かってくる脅威をまた一つ撃墜したダカールであったが、一難去ってまた一難、今度は凶報が訪れる。

「巡洋艦『ラピアン』が撃沈されました!!」

「戦艦『マウライ』も中破!」

次々と増えていく損害にブレックス・フォーラー大佐は歯噛みする。

(いかな。思ったより抵抗が大きい)

当初の予想ではフォン・ブラウンでの戦闘は比較的早く終結する筈だった。

と言うのも、フォン・ブラウン防衛隊にはザクやドム、ゲルググしか配備されておらず、それくらいならハイザックで一蹴できると思っ  
ていたからだ。

しかし、現実にはジオンがフォン・ブラウンに駐留するという予想外な事態が起こったことで、エウーゴは激しい抵抗を受けることになってしまっている。

だが、それでもブレックスは勝利を確信していた。

(しかし、致命傷ではない。このまま一直線にフォン・ブラウンに入ればこちらの勝ちだ)

確かに抵抗は激しいが、今のところやられたのは数隻程度であり、艦隊全体にとって致命的な打撃を受けていない。

そして、まだまだエウーゴは無傷の艦艇が30隻以上居る段階。

これをハイザックの迎撃を潜り抜けながら全て倒すのは困難であるし、出来たとしてもその頃にはフォン・ブラウンはエウーゴによって陥落しているだろう。

そう考えていたブレックスだったが、その目算は次のオペレーター  
の報告によって崩れ去ることとなる。

「! 10時の方向から敵モビルスーツ部隊。更にその後方に艦隊が  
出現!!」

「なに。数は!？」

「モビルスーツは最低でも20以上。機体は旧式のジムですが、一部  
にザムも混じっています。艦艇は10以上です!!」

「迎撃に出せるモビルスーツは？」

「もう有りません！全機フォン・ブラウンのMS部隊と交戦中です!!」

そう、現在、エウーゴのモビルスーツ部隊のほぼ全機がフォン・ブラウンから発進したMS部隊を迎撃している。

しかし、逆に言えばそれが限度であり、新たに現れたフォン・ヘルシング大佐の率いるグラナダ艦隊に対応するだけの戦力はもう残っていないかった。

なにしろ、先日のザーン会戦によってエウーゴはMSの半数を失ってしまっていたのだから。

(不味いな。これは撤退するしかない)

ブレックスはそう判断した。

識別を見る限り、グラナダ艦隊は旧式ばかりであったので、今のエウーゴ艦隊でも無理をすれば対処できなくはない。

もしこれが連邦軍時代ならば、ブレックスも間違いなく立ち向かうという選択肢を選んでいただろう。

消耗しても戦力はすぐに回復するのだから。

しかし、エウーゴは連邦軍と違って艦艇どころか、モビルスーツの補充ですら困難だ。

その為、ここで無理をするという選択肢はブレックスの中には存在しなかった。

「全艦に告げろ。撤退だ」

その言葉がオペレーターに告げられた数分後、エウーゴ艦隊は全艦が撤退を開始し、その後、グラナダ艦隊が追撃を行わなかったこともあって無事に撤退することに成功する。

——だが、この戦いでエウーゴは損害が酷かったことで自沈した艦も含めて5隻の艦艇を失い、MS部隊に至ってはリック・ディアスが全滅、ハイザックも殆どが未帰還という壊滅的な打撃を受けた。そして、行き場を失った彼らはとある暗礁宙域に身を潜めることとなる。

◇地球 東南アジア 密林地帯

東南アジア。

そこは現在、ダグラス・ローデン准将率いるネオ・ジオン軍とイーサン・ライヤー准将率いる地球連邦軍東南アジア方面軍が激しい消耗戦を繰り広げている場所でもある。

しかし、ジオン共和国軍もなにもしていないという訳ではなく、第8特殊小隊を始めとした部隊を現地へと送り込み、工作活動と連邦軍支援を行わせていた。

「隊長さん！水と食料を持ってきたよ!!」

オレンジ色の髪をした少女——キキ・ロジータはそう言つて、ジャングルのとある場所に潜伏する第8特殊小隊の隊長——シロー・アマダ中尉に食料と水を差し出す。

「ありがとう」

そして、シローもまた礼を言いながら食料と水を受け取り、それを口に入れ、それを見たキキは『どういたしまして』と言いながらニコリと笑う。

このキキ・ロジータという少女はこの辺りのゲリラ組織を指揮しているバレスト・ロジータの娘であり、原作ではその父親が負傷したことで代わりにゲリラの指揮を執っていた人物だが、この世界ではバレストは未だ負傷していない為、彼女はゲリラの一員にすぎない。

しかし、逆に言えばそれ故に原作よりも自由が効き、こうして気軽にシロー達に差し入れを持っていくことが出来ていた。

ちなみにシローと彼女が会った経緯は原作と同じであり、彼女がシローに惚れているのもまた原作と全く同じだったりしたのだが、シローにアイナという恋人が居り、更にその恋人が既に妊娠しているという事はキキも知っているので、キキは原作よりも早々にシローを諦めている。

万が一、何かの手違いで2人の仲が不仲となり、彼らの間に産まれた子供が不幸になるのは彼女にとっても不本意だからだ。

しかし、せめて手伝いだけは行いたいと、こうして彼らに頻繁に差し入れを持ってきていた。

「ねえ、やっぱり向こうの司令部を特定するなんて無茶じゃないかな？ 嚴重に護られているから危険すぎるよ」

キキはシロー達第8特殊小隊に与えられた任務に対してそんな不満を溢す。

そう、シロー達第8特殊小隊は他に東南アジアに送り込まれた部隊とは違い、敵司令部の特定（厳密に言えば、ダグラス・ローデン准将の居場所の特定）という特段危険な任務が与えられていた。

これは冷遇されているというわけではなく、ムラサメ研究所の破壊任務など、数々の特殊作戦を成功された点が評価された結果だったの

だが、当然キキはそんなことを知らないし、それは隊長であるシローも同じだ。

しかし、軍人であるシローはそういう過酷な任務が特殊部隊の仕事である事は当然理解しているし、必要な物資も順次与えられているので、別に文句はなかった。

ちなみにキキが任務の内容について知っているのは、彼女がこの部隊に協力してくれる以上、自分達も任務について明かさなければ対等ではないとシローが判断したからだ。

本なら軍の任務について話すのは軍規違反なのだが、協力してくれる人間に軍機を盾に任務を明かさないのは、その相手に対して『君を信用していない』と言っているようなものであり、不和の元にもなるので敢えて明かすというシローの判断はある意味では間違いではない。

・・・もつとも、任務について話したのはキキが信用できる人物とシローが判断したからであり、もし違う人物が協力者であればシローも話さなかったかもしれないが。

「確かにそうだが、俺は軍人だからな。命令に従うまでさ」

「ふーん。それで司令部を見つけたらどうするの？そのまま攻撃する？」

「いや、この部隊が命じられているのは位置の特定だけだ。攻撃は他の部隊が行うらしい。ただ――」

「ただ？」

「その攻撃する部隊の回収を俺達がやることになっている」

「・・・やっぱり、危険じゃないか」

敵司令部への攻撃は成功・失敗を問わず、敵軍を蜂の巣をつついたような騒ぎにさせる。

司令部を攻撃する部隊というのが攻撃に成功して敵軍が混乱すれば良いが、失敗した場合は敵の統制が回復して追われることになるし、成功しても運悪く大規模に敵部隊に発見されてしまった場合も同じだ。

そして、攻撃部隊の危機はそれを回収するシロー達の危機に直結してしまう。

「ああ。だが、やるしかないんだ。この戦争を早く終わらせるためにもな」

「・・・それで隊長さんが死んじや意味ないじやないか」

「死なないさ。アイナとこれから産まれる子供が待っているからな」

キキの呟きに対して、シローはそんな力強い言葉を返した。

UC0080年 3月7日 スポンサー

◇宇宙世紀<sup>U</sup>0080年 3月7日 とある宙域 ペガサス  
フリーフィンゲル<sup>C</sup>ム  
作戦室

「なに？Zガンダムをシンジに譲る？」

クルト中尉はそう言い出した野比のび太特務少尉に怪訝そうな目を向ける。

コロニーを押し返してから一週間。

一旦、ソロモンに寄港していたペガサスはフォン・ブラウン会戦にて逃亡したエウーゴを追撃する為に編成されたエウーゴ追撃艦隊に合流するために一路フォン・ブラウンに向かつて航行していた。

その過程で一機のMSがペガサスに配属される。

Zガンダム。

最近開発が完了してロールアウトされたMSで、原作と違って可変機構こそないが、それでもエウーゴやネオ・ジオンが使うハイザックやリック・ディアス、ガンダムIIを十分に圧倒する性能を持っている機体だ。

当初、クルトはこの機体をのび太に預けようと思いい、彼に話をしたのだが、当ののび太から断られた事に彼は驚いていた。

「はい」

「なぜだ？あれは最新鋭機だぞ。もしかして、信頼のおける旧式の機体を使い続けたいという思いがあるのか？」

「いえ、そういうわけではないんですけど、次の任務のことを考えるとあまりに換装の時間が無さすぎて・・・」

換装訓練というのは、言ってしまうえば機体と自分の癖を合わせる為



の訓練であり、これを短期間で無理矢理仕上げようとすると、パイロットが機体の動作に「違和感」を感じてしまうことになる。

そして、それは時に戦場で致命的な隙となつて現れてしまうこともあるのだ。

なので、それを払拭するためには相応の時間が掛かるのだが、今回の任務であるエウーゴ討伐作戦が発動される正確な日付は決まっていないものの、どう長く見積もっても一週間以内に発動されることは確実視されており、流石にその期間ではのび太も換装訓練を完全に終了させられる自信は無かつた。

「まあ、オリヴァー・マイ大尉が居ればそこら辺もなんとかなつたのかもしれないけど、ソロモンで降りちゃいましたし」

そう、オリヴァー・マイ技術大尉は先日、ソロモンで配置変えの辞令が出たことによつてペガサスから降りていた。

彼が居れば、OSの調整も上手くやってくれて作戦までに間に合つたかもしれないが、降りてしまった今となつてはそんなことを言つてもどうしようもない。

「それにシンジならば、まだMSパイロットとしての経験が浅いですから、比較的機体に早く適応できます」

戦時に新米パイロットを新型の機体にあてるといふのはよく有ることだ。

これはベテランと比べると、新入りは良くも悪くも癖が無いために機体に適応しやすいのが理由だった。

まあ、それでも平時ならばあり得ない処置なのだが、時間がない戦時では話は別だ。

おそらく原作の一年戦争終盤でもそういった理由から新米パイロットにゲルググが配備されるという事態になつたのだろう。

そして、一連ののび太の説明にクルトは苦い顔をしながらも一応納

得した。

「・・・そうか。お前がそう言うのなら仕方がないが、一度シンジに調整してしまうとそのままシンジが使う事になるぞ?」

「構いません。それにシンジは今回の戦いが初陣です。なので、なるべく生き残る可能性が高い状態で出撃して欲しいですから」

「分かった。その件については了承しよう。・・・ところで、最近、青い狸型ロボットを見掛けないんだが、いったい何処へ行ったか知らんか?」

「ああ、ドラえもんなら故郷に戻りました」

正確には「故郷の世界に」だが、話がややこしくなるので、のび太はそこまで言わない。

だが、クルトは取り敢えずそれで納得したらしく、少しだけ寂しそうな顔をしながらこう言った。

「・・・そうか。もうちつと話していたかったんだがな」

「生きているなら、また会えますよ」

「そうだな。取り敢えず、俺達はこの戦争を生き残ることに集中するとするか。そこで戦後になったら、シーマ様も誘って生き残った祝いでもするか」

「はいー」

のび太はクルトの言葉に力強くそう返事をした。

#### ◇暗礁宙域

##### 暗礁宙域。

それは主にコロニーの残骸やスペースデブリが漂う宙域に対して付けられた名称で、この宙域内ではミノフスキー粒子が無くともレーダーが乱反射して有効に働きづらくなっている。

しかし、何もコロニーの残骸やスペースデブリの群れのみにつけられる名称ではない。

小惑星、あるいは隕石レベルの岩石の小規模な群れ（ちなみに小規模というレベルではなくなると、アステロイドベルトという名称になる）にも暗礁宙域という名称は適応される。

そして、隕石の数々が漂う月面近くの暗礁宙域の1つではエウーゴの艦隊が身を潜めており、現在はある民間企業が保有する船団と接触していた。

「ありがとうございます、ウォンさん」

ブレックス・フォーラー大佐は接触してきた民間企業——アナハイム・エレクトロニクスの中国系のような名前をしたベトナム系ルナリアンの幹部——ウォン・リーに対して感謝の意を伝える。

実はエウーゴを結成する前、ブレックスはアナハイムと密約を結んでおり、宇宙で活動する際はジオンや連邦にバレない範囲でアナハイ

ムがエウーゴのスポンサーとして支援する手筈となっていたのだ。  
そして、今回、彼らが持ってきた荷物。

それは艦隊への補給物資とこれから連邦に採用される予定のMS  
——ゲルググ改だった。

このゲルググ改はコクピットにネオ・ジオンのMSやジオン共和国のザムⅡ改や新鋭機であるZガンダム、更には改修が完了した通常型ガンダムシリーズなどと同じ全天周囲モニターとリニアシートを採用しており、更に機体の改良を行って若干ではあるがゲルググより性能を向上させている機体で、ジオンのザムⅡと互角に戦える(ただし、ザムⅡ改相手だと少しキツイ)性能を持っている。

言うまでもなく反政府組織に渡して良い代物ではないのだが、そこはアナハイムと言うべきか、気にすることなく幹部の1人であるウォンを介してエウーゴに物資を供与していた。

「いや、これくらい構わんよ。それより大分戦力が減ってしまったというみたいだが、これで本当に事を成せるのかね?」

ウォンはエウーゴの艦隊数を見ながらそう言った。

今のエウーゴは先日フォン・ブラウン会戦によって艦艇は40隻を切り、MS部隊はほぼ壊滅してしまっている。

その内、MSの方はアナハイムが供与してくれたことによって少なくとも数だけは持ち直したが、それでも艦艇の供与はアナハイムとしても厳しいらしく、流星に供与はしてくれなかった。

もつとも、まだ30隻以上残っているので、1つのサイドを占領することくらいなら可能だったが。

「はははは、問題ありませんよ。少なくとも、ジオンに一泡吹かせられるだけの戦力はまだ残っています」

「そうかね?だが、戦局はかなり厳しい。地上ではネオ・ジオンの進撃は停滞、カラバは地下に潜り、アフリカ共和国も大分追い込まれてい

るとのことだ。ここでエウーゴが負けたら宇宙は完全にジオンの手の内となり、我々の敗北はほぼ決定的になる」

ウオンの言っていることは間違いではなかった。

現在、地球ではネオ・ジオンの進撃は東南アジアでほぼ停滞している上に、カラバはランバ・ラル隊の活動によってアジトの幾つかを潰されて地下へと潜っている。

更にアフリカ方面ではレビル率いる本隊が西サハラを制圧して旧アルジェリアに進撃中、別動隊は旧マラウイとモザンビーク北部を制圧して中央アフリカと南アフリカの分断に成功。

更にジャミトフ率いる軍勢は旧ソマリアと旧ジブチを制圧し、現在は旧エリトリア、旧エチオピア、旧ケニアの3地域に向けて進撃中だ。つまり、アフリカ共和国は3つの連邦軍勢からの攻勢によって食い潰されるように領土を奪われており、もはや勝ちの目は無い状態だった。

ここでエウーゴが負けたりすれば、宇宙は完全にジオンの手中に落ち、そこからジオンによる連邦軍支援のための再度の地球進出が行われれば、敗北が決定的となるのはまず間違いない。

「そうなれば、我々の投資も無駄になる」

「分かっております。しかし、我々の方も苦しい状況ですので、今しばらく時間を頂きたい」

「それは見れば分かる。だが、どれくらいの時間が必要だ？そして、それまでの間、敵が待ってくれるのか？」

そう指摘するウオンにブレックスは少し苛つく。

確かにウオンの指摘していることは正しいが、それはすぐになんとかなる問題ではないのだ。

そして、こういう問題を指摘をする場合、指摘をした直後に具体的

な解決策、あるいは対案を提示すべきなのだが、ウォンはそれをしていない。

これではブレックスが怒るのも無理はないだろう。

だが、相手はスポンサーであり、機嫌を損ねると今後の活動に支障が出る可能性がある。

だからこそ、ブレックスはその不満を顔には出さずにこう言った。

「ご心配なく。人員の補充やパイロットの訓練も含めてあと1ヶ月もあればまた活動を再開させる事が可能です。まあ、その間にジオンに見つかった場合は話は別ですが」

「・・・ならば、我々は見つからない事を祈るよ」

ブレックスの言葉に、ウォンは苦々しげにそう答えた。

U C 0 0 8 0 年 3 月 1 1 日 ペガサスの死

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 3月11日 暗礁宙域

「くそっ！情報と全然違うじゃないか!？」

野比のび太特務少尉はそんな悪態をつきながらも、目の前にやって来た2機のゲルググ改をビームライフルと有線式ビットを駆使して瞬く間に撃墜する。

ペガサスを含めた10隻のエウーゴ討伐艦隊は一路暗礁宙域に向かって進み、エウーゴ艦隊を発見すると同時に第一次攻撃隊を発進させた。

ちなみにこの10隻の艦隊の中にはジオン共和国に3隻しか存在しないドロス級空母（ドロス、ドロワ、ミドロ）の内、ネームシップであるドロスが含まれており、MSは艦隊全体で200機以上存在する。

そして、その圧倒的なMSの数の暴力によってエウーゴの艦隊を全滅させるというのが今回の作戦だったのだが、それはのっけから頓挫した。

理由はエウーゴのMSの数の多さだ。

当初、討伐艦隊上層部はエウーゴのMSは既に十数機程までに減っていると思込まれており、作戦前の説明でのび太にもそう伝えられていた。

しかし、現実には居たのはどう見ても100機は越えるであろうMSの群れ。

対して、こちらの第一次攻撃隊の機数は80機だ。

しかも、こっちはMSの相手に加えて敵艦隊も攻撃しなければならぬ。

作戦開始早々、いきなり不利な状況に追い込まれたのび太としては、相手が十数機という寝惚けた試算を口にした人間に対して文句の1つや2つ言いたくなるのも当然と言えた。

もつとも、今回の場合はその試算を出した人間は悪くないだろう。現にフォン・ブラウン沖会戦が終わった後のエウーゴには確かにそれほどのMSしか残っていなかったのだから。

むしろ、生産拠点も確保していない武装勢力が僅か1週間で100機以上のMSを手に入れることを予測しろという方に無理がある。

(シンジを連れてこないで良かったな)

今回の作戦ではシンジは新兵ということも考慮して第二次攻撃隊に配置されていた。

その采配は間違っていないかったと断言できる。

ニュータイプとは言え、新兵であるシンジにこんな状況にいきなり放り込まれて生き残れるだけの力量は無いのだから。

そんなことを思いながら、のび太は更にゲルググ2機を叩き落とし、ふと戦場全体を見渡した時、あることに気づいた。

(あれ？結構弱い?)

そう、敵が結構弱いのだ。

戦闘開始からまだ僅か数分であったが、この時点でジオン軍のMSは殆ど落とされておらず、逆にエウーゴのMS部隊は30機も落とされていた。

見たところ機体の性能差はほぼ互角な上に、数に至ってはエウーゴの方が上回っているにも関わらず、だ。

(そう言えば、さつきから嫌にあっさり落ちていたような・・・)

のび太は先程の戦闘を思い返す。

一年戦争の頃とは違い、この頃になると敵も味方もそれなりにMS対MSの戦いに慣れてきており、のび太といえども今までのようにあっさりと落とせなくなっている。



しかし、先程のゲルググ4機は秒殺と言っても良いほどあっさりと落とすことが出来ていた。

(パイロットの腕が悪いのか、それともあのゲルググという機体に何か不備があるのかな?)

のび太はそう考えるが、実際は正解は前者の方だ。

ザーン会戦とそれに続くフォン・ブラウン沖会戦にてパイロットを大量に喪失してしまったエウーゴはシュミレーターを使ってパイロットを0から養成することにした。

しかし、ゲルググ改が届いたのはつい4日前。

本来ならシュミレーターの外にこの宙域での訓練を含めて最低1ヶ月程は訓練を続ける予定だったのだが、その前にジオン軍のエウーゴ討伐艦隊がやって来てしまったのだ。

そして、取り敢えず敵がやって来たということで実戦に出したのだが、ニュータイプならいざ知らず、通常のオールドタイプの間がたった4日訓練を行った程度で実戦をまともにこなせる筈もなく、歴戦のジオン軍パイロットによってあっさりと狩られていつてしまっているというのが今の現状だった。

だが、そんな事情をのび太が知るよしもないし、知る必要もない。

(まあいいや。取り敢えず、早く片付けよう)

そう思いながら再び戦闘の渦中へと入り、のび太は更にゲルググ5機を撃墜した。

それから更に数分程してエウーゴのMS部隊が大分目減りして殆ど姿が見えなくなつた頃、のび太は一旦その戦闘宙域から離れて敵艦隊へと向かい、残つたエネルギーを使って敵の艦艇を攻撃することを試みる。

そして、そこには敵艦隊の姿があり、既にのび太より先に到着した味方が攻撃を仕掛けていた。

だが――

「あれ？10隻くらいしか居ない」

そう、そこに居たのは紛れもないエウーゴの艦艇であったが、数は味方が撃破したであろう破壊された艦艇も含めても10隻程しか居ない。

（可笑しいな。情報では30隻以上居るって話だったけど・・・）

首を傾げたのび太だったが、取り敢えず敵ならば攻撃しようとその艦隊に向かってガンダム改B型を突っ込ませる。

――だが、この時、のび太は周囲のミノフスキー粒子が高過ぎたせいで気づかなかった。

本隊が大変なことになっていたことを。

◇暗礁宙域周辺

エウーゴ討伐艦隊

ペガサス

艦橋<sup>ブリッジ</sup>

時は少し遡り、のび太達第一次攻撃隊がMS部隊と交戦していた頃、討伐艦隊本隊は突如として現れたエウーゴの別動艦隊と交戦を開始していた。

「メガ粒子砲、大破！」

「左舷居住区にも被弾しました!!」

次々と入ってくる被害報告に、艦長であるマルチン・プロホノウ大佐は艦内電話を使って矢継ぎ早にダメージコントロールの指示を各所に出していく。

(してやられた！こちらが攻めるつもりが、逆に敵が特攻してくるとは!!)

そう、ブレックスはジオン艦隊接近の報を聞いた時、MS主体の艦隊であることを見抜き、自らの艦隊を2つに分ける決断をした。

1つは暗礁宙域に残って敵のMSを引き付ける役目を持った艦隊。

もう1つはこっそりと暗礁宙域を抜け出し、敵艦隊に向かって特攻する役割を持った艦隊だ。

前者が10隻程、後者が残りの二十数隻で編成されており、前者の艦隊にエウーゴの保有するゲルググ改を全機直援にあたらせ、後者の討伐艦隊を急襲する艦隊は隻数こそ暗礁宙域に残る艦隊には生き残ったエウーゴのベテランパイロットの乗るハイザック十数機を全て付ける。

そして、ハイザックを囷にしている間に別動隊の艦隊が側面から敵を攻撃するというのが今回の作戦だ。

一見、上手く行きそうにない作戦にも思えるが、この辺りはミノフスキー粒子の濃度が濃く、艦クラスの大きさの接近にすら気づきづらい。

更に敵艦隊の数も10隻と少ないため、厄介なMSの大半を引き受けてくれさえすれば別動隊による急襲と撃滅は可能だと見られていた。

しかし、ここで誤算だったのは討伐艦隊が攻撃隊を数段に分けて行う波状攻撃戦法を採用したこと、更にはエウーゴがドロス級の詳細な

データを知らなかったことだ。

これにより、第一次攻撃隊に全てを注ぎ込んだと誤認してしまったエウーゴは未だ120機以上のMSを残す艦隊に突っ込むという無謀な真似をしてしまうことになった。

・・・とは言え、前述したようにミノフスキー粒子濃度が高かったこととハイザックが囷として働き、討伐艦隊がの目が正面に釘付けになっていたこともあって、討伐艦隊が別動隊の存在に気づいたのは別動隊が討伐艦隊を射程距離に入れる直前だった。

そして、別動隊の艦隊の存在を認識した討伐艦隊は慌ててMS隊をそちらに向けるが、時既に遅しであり、その瞬間から旧世紀のサマー沖海戦のような空母と戦艦ドロス エウーゴ戦艦群による「死の鬼ごっこ」が始まることになったのだ。

「三番エンジン大破！船の行き足、落ちます!!」

その報告に内心で舌打ちをするマルティン。

この状況で速度の低下は致命的だ。

向こうの艦隊もこちらのMS部隊の猛攻によって艦の数を徐々に減らしていたが、その前にこちらがやられれば意味がない。

そう思っていたマルティンだったが、そこにとんでもない報告が入る。

「か、艦長！ドロスが、ドロスが沈みます!!」

そう言われてメインパネルを見てみれば、そこには弾薬庫に誘爆したのか、艦中央部に大爆発を引き起こし、宇宙の塵の1つと化したドロスの姿があった。

(やはり、ドロスは逃げられなかったか・・・)

ドロスは巨大な為に艦そのものの速度は遅く、またペガサスと違っ

て敵中を突っ切ることが出来るほど、頑丈には作られていないので、砲撃を受ければ沈むのも当然と言えば当然の話だった。

だが、感傷に浸っている時間はない。

ドロスが撃沈された以上、次の目標はおそらく自分達なのだから。

「取り舵一杯!! すぐにこの宙域を——」

しかし、そのマルティンの言葉は最後まで続かなかった。

当然だろう。

エウーゴ艦隊の戦艦の砲撃によってブリッジを破壊され、マルティン・プロホノウ大佐やエーリツヒ・クリューガー少佐を始めとした艦橋要員は全員蒸発してしまったのだから。

UC0080年 3月14日 暗殺作戦

◇宇宙世紀0080年 3月14日 L2宙域 サムソン3 総帥  
府

「やはりペガサスは解体処分にするしかないか」

報告書を読みながら、ギレンはそう判断する。

3日前の戦いでエウーゴを壊滅させることに成功したジオン軍だったが、その代償は巡洋艦2隻とジオンに3隻しか居ない宇宙空母の内の1隻の喪失、そして、ペガサスが大破するというあまりに痛すぎるものだった。

いや、ペガサスも実質喪失と言っても良い。

なにしろ、一応、艦の形が残っていることからフォン・ブラウンの工場に運んだものの、そこで出た結論は『1から造った方が早い』というものだったのだから。

「仕方ない。ペガサス隊は解散にして別の部隊に編入させよう。何処が良いのだろうか」

候補は幾つかある。

その内の1つがシグ・ウェドナー少尉が所属している部隊であるブラード隊。

ちなみにアインはネオ・ジオン蜂起の際にソロモンにて反乱軍に寝返っており、そこで攻撃を受けたシグをセラが庇って被弾するというある意味原作通りの事が発生していた。

その後はどうなったのかは知らないが、少なくともセラがアインによって連れ去られ、更に2人の生死がザーン会戦以後、完全に不明となってしまうということだけは確かであり、原作通りに生きて後に登場してくる可能性は十分にある。

(いや、ペガサス隊を解散せずにシグをペガサス隊に入れるという手もあるか。まあ、考えておこう)

ギレンはそう考えながら、現在の状況を改めて整理する。

「何はともあれ、これで宇宙での戦いは完結だな。今度は地上一本に絞ることとなるか」

そう、3日前の戦いで確かにエウーゴは壊滅した。

何隻かは逃げてしまったとのことだが、おそらく10隻にも満たないだろうし、少なくともこの戦争中は何か手を出してやることはもうないだろう。

となると、今度は地上での戦いが主となる。

「アフリカ共和国はともかく、ネオ・ジオンをここで連邦に相手にさせると折角作った貸しが返されることになるからな」

ジオン軍はホワイトベース隊をアフリカの大地へと送り、別動隊の壊滅を防ぐことで1つ連邦に貸しを作った。

だが、この段階で連邦にネオ・ジオンを掃討されるとその貸しが消えてしまうことになる。

別に焦るほどのものでもないが、それでも連邦に貸しを作れるのは大きいため、出来ることならこちらでネオ・ジオン掃討をやっておきたいというのが本音だった。

「しかし、エウーゴとネオ・ジオンの影響でここ数ヶ月は宇宙での戦いに集中してリソースが注ぎ込まれていたからな。地上に兵を派遣するには少々時間が掛かるか」

しかし、大規模な軍勢は派遣できない。

連邦を刺激するし、なによりサスロが許さないだろう。

なにしろ、つい先日モドロスが沈んだという報告を受けて泡を吹いて失神したばかりなのだから。

「となると、やはりこの作戦を実行するしかないか」

そう言いながら、ギレンは表紙に『ダグラス・ローデン准将暗殺作戦計画書』と書かれた資料を取る。

(聞けば、東南アジアのネオ・ジオン軍は統制があまり取れていない。ここでダグラス・ローデン准将を暗殺すればあつという間に瓦解するだろう)

それだけではない。

ネオ・ジオンには将レベルの指揮官がダグラス・ローデンとアンリ・シュレッサーの2人しか居らず(一応、シヤアも立場的にはそこに居るのだが、原作を見るに彼は将には向いていない)、もし作戦通りにダグラス・ローデンを暗殺することが出来れば、残る将はアンリ・シュレッサー1人となり、ネオ・ジオンは大きな打撃を受ける。

まあ、首魁であるシヤア・アズナブルを仕留めた方がもつと確実なのだが、流石にトップとなるとガードが固いし、そもそも彼自身が強いのでそれはほぼ不可能だ。

よって、トップよりはガードが比較的緩く、前線の近くに居て捕捉しやすいダグラス・ローデンを暗殺するのが一番現実的だった。

「幸い、第8特殊小隊が敵司令部の捕捉に成功している。大気圏突入用に作られた『アレ』ももう少して完成する。やるなら今なんだが、問題なのは人選だな」

この作戦はその性質上、並のパイロットには出来ないため、必ず腕利きパイロットにやらせる必要がある、それだけならジオン軍パイロットにも該当者はたくさん居るのだが、大気圏に突入した後、降下



しながら空中で敵司令部に向けてピンポイントに射撃できる人材は結構限られる。

いや、出来るのはのび太くらいしか居ない。

なので、のび太は作戦に参加することは確定なのだが、残りの人選が大変なのだ。

(いっそのこと、ペガサス隊のメンバーにシグ・ウエドナーを加えた編成にするか？これなら新編成の連携訓練をあまり気にしなくても良い)

戦時の軍隊というのは部隊を再編成する場合、対象の部隊を他の部隊と統合させるといった処置を取ることが多い。

何故なら、1から新たに部隊を編成するとなると、部隊全体の連携に不備が出てくるために連携訓練が必要となるからだ。

だが、戦時というのは基本的に時間がなく、そんな訓練を悠長にやっている余裕がない。

その為、部隊の統合によってそういった余計な訓練を省く処置が為されるのだ。

「時間も無いし、そうするしかないか」

ギレンはそう呟きながら、シグ・ウエドナーをペガサス隊に合流させることを決定した。

◇地球 北アフリカ ビッグ・トレー級陸戦艇『パターン』  
艦橋<sup>ブリッジ</sup>

「ふむ、毒ガス、か」

ビッグ・トレー級陸戦艇『パターン』のブリッジで、ヨハン・イブラヒム・レビル大將は唸りながら、情報部の将校が持ってきた報告書を見る。

内容としては旧エジプトの幾つかの施設でアフリカ共和国軍が毒ガスを大量に生産しているというものだった。

だが、それを読んだレビルの反応はかなり鈍い。

「プラフではないのかね？」

一見、大きな計画を敵に掴ませて、裏で全く別な本命の計画を進めるといふのは古今東西よくある計略だ。

今回の事も毒ガスはあくまでこちらの目を欺かせるための囮であり、何か別の計画が裏で進行しているのではないかとレビルは疑っていた。

「分かりません。しかし、毒ガスが現実に存在するのは事実なようです」

「だが、コロニーならいざ知らず、この地球で今時毒ガスなど使って効果があるのかね？」

レビルの言っていることは間違いではない。

旧世紀において毒ガスを防ぐためには最低でもガスマスクなどの

装備を必要としたし、中にはNBC対策部隊が装備するような専用装備を必要とするような代物もあった。

しかし、今は宇宙世紀であり、毒ガスを防ぐことなどノーマルスーツを着込むだけで済む。

まあ、民間人を対象とするのなら話は別だろうが。

「それは……しかし、ミサイルに積めることで別の大陸に飛ばすといった事は可能です。それに向こうは核兵器を使いきっているみたいですから、核兵器の代用として地球各地の都市、あるいは軍事基地にでも撃ち込むつもりなのではないでしょうか？」

「なるほど、そういう考え方もあるな」

レベルは情報部の男の言葉に納得したような表情を見せるが、同時に嫌な可能性に思い至った。

「ちなみに、だ。あまり聞きたくはないんだが……アフリカに侵攻中の我が軍にその毒ガスが行使される可能性はあるか？」

「まさか。流星にあり得ませんよ。第一、そんなことをしたら我が軍よりもこの大陸の民間人の方が多く犠牲になるでしょう」

情報部の男は笑いながらレベルの言葉を否定する。

連邦軍兵士は戦闘の邪魔になることから、常に身に付けているわけではないものの、常にノーマルスーツをリュックの中に入れて持ち歩いている。

なので、毒ガスが散布されたらそれを着れば済む。

しかし、民間人の場合、宇宙を生活の場とするスペースノイドなら兎も角、アースノイドが個人単位でノーマルスーツなど持っているわけがない。

つまり、地球上で軍人と民間人の混在する地域に毒ガスが散布され

れば、軍人よりも民間の方が先に死ぬのだ。

ましてや、このアフリカ大陸はアフリカ共和国の人間曰く『自国領土』。

普通、自国領内に毒ガスを撒く馬鹿は居ない。

情報部の男は常識的な考えに基づいてそのような思考を行ったが、レベルはそんな「楽観的な思考」をしている男に対して一喝する。

「馬鹿もん!!相手は自分達の領域で核を撃ってくるような連中だぞ!!  
そんな連中に正気な考え方を期待するのか!!?」

「!? も、申し訳ありません!!」

「急いでこの事についての調査を進めろ!!全ての生産場所が全て特定され次第、毒ガス製造施設を纏めて破壊する!!」

「はっ!」

情報部の男はそう言うと、慌てた様子でブリッジを出ていく。

その様子を見ながら、レベルはため息をつく。

「まったく。こんなことも予想できないとは。危機管理が足りん」

もつとも、あの情報部の男の気持ちはレベルにも分かる。

自分だって先月までは『自国領内で核を使ってくるような愚かな真似は流石にしないだろう』という楽観的な考え方をしていたのだから。

(だが、核が使われた後で認識を改めないのは減点ものだ)

内心でそう吐き捨てるレベルだったが、この直後、彼もある判断ミスをする。

それはこの毒ガスの情報を「全部隊で共有させなかつた」ことだ。  
これは全ての毒ガス製造施設の正確な位置が判明してから、改めて全部隊に通達しようとレビルが考えたからであつたが、もしこの時点でレビルがこの事を全部隊に伝えていたら4日後に起こる悲劇をある程度は防ぐことが出来ていたかもしれない。

だが、ここでレビルが伝えないという選択肢を選んだことで、4日後、アフリカの大地にまた1つの悲劇が発生することとなる。

U C 0 0 8 0 年 3 月 1 8 日 毒ガス

◇宇宙世紀0080年 3月18日 地球 マダガスカル島

南アフリカを完全に制圧した地球連邦軍アフリカ攻略軍別動隊は次なる目標をマダガスカル島に定める。

そして、ジオンからの援軍として派遣されたホワイトベース隊もまた先日の南アフリカ攻略作戦の際に戦死してしまったエンマ・ライヒ中尉の死をどうにか乗り越え、この作戦に参加していた。

「そー！」

そう叫びながら、アムロ・レイ少尉はガンダム改B型の手に握られたビームライフルをトーチカに向けて発射する。

すると、ビームの高熱によって中に居る人間は蒸発し、更に弾薬庫に誘爆したのか、そのトーチカは大爆発を引き起こして跡形もなく吹っ飛ぶ。

だが、それでアムロは油断せず、こちらに発砲してくる2台の装甲車の姿を見定めると、そちらにビームライフルの銃口を向けて発砲し、これらを撃破する。

(ふう。これでだいたいの敵は掃討したかな?)

アムロはそう思いながら辺りを見回す。

戦況は上陸側である連邦軍が有利だった。当たり前だろう。

このマダガスカル島にはアフリカ共和国のハイザックが1機たりとも配備されておらず、一方で上陸した連邦軍は最新のゲルググ改こそ無かったものの、ゲルググを始めとしたドム、ザクなどのMSが勢揃いしていたのだから。

(これでマダガスカル島を制圧すれば、一旦宇宙に戻れる。・・・エン

マさんの遺体も持っていきかけたな)

ホワイトベース隊はマダガスカル攻略作戦が終わった後、一時宇宙に帰投するようにジオン軍上層部から命令が出されている。

だが、先日死んだエンマは宇宙を故郷としたスペースノイドであり、遺体が腐るということから地球の土へと埋めたが、出来る事ならば遺体だけでも宇宙に連れ帰ってあげたかったというのがアムロの本音だった。

(せめてエンマさんの死を無駄にしないように、ホワイトベース隊に居たみんなだけでも生かさないと)

アムロがそんな決意を固めた時、当のホワイトベースから通信が入ってくる。

『ア——ロ。聞こ——るか。アム——』

ミノフスキー粒子の効果によって阻害されつつも無線から聞こえてきたホワイトベースの艦長——ブライト・ノア中尉の声にあムロは反応する。

「どうしましたか!?ブライトさん」

『作戦は——だ』

「え?」

『もう——言う。さくせ——中止だ』

途切れ途切れになっていたが、一応、*“作戦の中止”*という言葉だけは理解できた。

しかし――

「ば、馬鹿な！こっちは優勢なんですよ!!」

そう、こちらが優勢なのだ。

そんな状況でこちらが作戦を中止するなど訳が分からない。

思わず聞き間違えかと、無線機に限界まで耳を近づけるが、やはり言っている内容は変わらなかった。

(いったい、何がどうしたんだ?)

そう思うアムロだったが、この時、彼は知らなかった。

後方である南アフリカ一帯でとんでもないことが起きていたということを。

◇旧エチオピア アデイスアベベ



別動隊がマダガスカル島攻略を進めていた頃、ジャミトフ・ハイマン大佐が率いる軍勢は、旧モロッコに続いて旧エリトリア、旧エチオピア、旧ケニアを制圧し終え、現在は旧スーダンへの侵攻の為の準備を進めており、その打ち合わせを幕僚達と共に行っていたジャミトフは副官からとんでもない報告を聞くことになった。

「なんだと!？」

「それは本当なのか!？」

幕僚達はざわめいていた。

当然だろう。

その副官が持ってきた報告の内容が「南アフリカに毒ガスが広範囲に渡って散布された」というものだったのだから。

しかし、そんな中でも冷静であったのはやはり彼らの長であるジャミトフだった。

「落ち着け。それで、南アフリカに居た別動隊の被害はどれ程のものなのだ?」

「は、はい。現地からの報告では全体の3割が死傷したと」

「3割?」

ジャミトフはその損害の大きさにいぶかしんだ。

上陸当初なら兎も角、別動隊の占領範囲は南アフリカ一帯にまで広がっており、これだけ広いとどうやっても兵力もそれ相応に散らばる。

加えて、連邦軍の兵士は皆、ノーマルスーツを常備しており、毒ガスが撒かれた場合、すぐにそれを着込んで防ぐことが出来る。

つまり、この状態で3割もの損害を出すには相当な広範囲に（それ

も短期間で）毒ガスを散布しなければならぬのだ。

「何故、それほどの被害が出たのだ？」

「それは先程も言ったように広範囲に毒ガスが散布されたからです」

「その具体的な範囲は？」

「それは・・・その地図をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「構わん」

「失礼します」

副官はそう言うと、ペンを取り出して机の上にあるアフリカ大陸の地図の南の部分丸で囲っていく。

「まだ詳細は分かっていませんが、現地から入ってきた情報を分析班に分析させたところ、毒ガスが散布されたのはこの範囲となります」

そうやって副官は丸をした部分を指し示す。

「こ、これは・・・」

「・・・」

幕僚達はそれを見て絶句した。

何故なら、その丸で囲われた範囲には別動隊が占領した南アフリカ一帯のほぼ全てがすっぽりと収まっていたからだ。

「これだけの範囲を覆う毒ガスをどうやって・・・」

「いや、それ以前に本当にこの情報は確かなのか？」

「そうだ！前線では情報が錯綜して誤った分析が成されることもある！！」

「しかし、これだけ混乱しているということは毒ガス散布はそれなりの範囲で起きたことなのでしょう。被害を過小に見積もるのは危険では？」

議論する幕僚達。

そんな彼らを見ながら、ジャミトフは副官の情報を自分なりに推察する。

（事実かどうかは定かではないが、事実であつても可笑しくないという事だけは確かだろうな）

なにしろ、相手は大西洋大津波を引き起こしてアメリカ東海岸やヨーロッパ西海岸はおろか、自分の領域であるアフリカ北西部の海岸を洗い流し、更には連邦から独立した際にジャブローに核兵器を撃ち込み、拳げ句の果てには自国領内で核兵器を使用するような相手なのだ。

理性など考えるだけ無駄であり、今回の事が例え事実であつたとしてもなんの不思議でもない。

（まったく、ジーンめ。なんてことをしてくれたんだ）

ジーン大將は何度も言うようにジャミトフの所属する保守派の首魁的な存在だった。

そんな彼がこうも思いつきり連邦に仇を成すような事をすれば、その分だけ保守派の面々は発言力が下がるのだ。

まあ、とは言つても改革派の方もブルックスという裏切り者を出している以上、それほど発言力は上昇しないだろうが、それでもゾーンとブルックスでは連邦に与えた被害が違いすぎる。

加えて、ジャミトフ個人としてもゾーンの存在は許せなくなっていた。当たり前だ。

なにしろ、ジャミトフは地球至上主義者であり、地球を汚す存在は、スペースノイド・アースノイドの区別なく彼にとっては駆逐すべき対象なのだから。

(しかし、これで連邦政府の奴等はどうか出る？腑抜けた対応などしなければ良いが……)

ジャミトフが気にしているのは今回出た民間人の被害だ。

別に地球至上主義者である彼にとって地球を汚す人類が何人死のうと構わない(むしろ、好都合)のだが、連邦政府にとってはそうではなく、仮にこの毒ガス攻撃で数百万人レベルでの死者が出ていた場合、政府が何かを言うてくる可能性があった。

それが戦いを早期終結させろという催促ならまだ良いが、アフリカ共和国と講和し、あまつさえ独立を認めるなどと言い出したりすれば不味いことになる。

・・・それも致命的なまでに。

(馬鹿な政治家連中はジオンのジャブロー攻略戦の時に死んだみたいだが、それ故に今の臨時政府がどう出るか私にも予想がつかんからな。まあ、ひとまずは様子見といくか)

そう考え、ジャミトフは未だ議論を続ける幕僚達に向かってこう宣言する。

「諸君。我々は一旦ここで進撃を停止する」

いきなりのその発言に幕僚達は再びどよめく。

「ジャミトフ閣下。それはどういう意味ですか？」

「言葉通りだ。我々は進撃を現時点の占領地域で停止するのだ。当然、旧スーダン攻略も延期とする」

「しかし、それでは敵に時間を与えてしまう事になります。それにジャミトフ閣下の副官が持ってきた情報が確かならば、毒ガスはもう使いきってしまったている可能性もあります。もしそうなら、逆に進撃するチャンスでは？」

若干希望的観測が混じった幕僚の意見だが、この時に限ってはその推測は合っていた。

実のところ、アフリカ共和国は今回の南アフリカでの使用によって毒ガスを完全に使いきってしまったのだ。

なので、幕僚の男の言う進撃のチャンスという意見は決して間違いではない。

だが、そんなことを知らないジャミトフがそんな希望的観測に基づいた意見を採用する筈もなかった。

「ダメだ。使いきっているという保証は何処にもない。むしろ、毒ガスの製造施設を速やかに見つけて爆撃なり、破壊なりする方が現実的だ」

無論、簡単ではない。

南アフリカ一帯を覆う量の毒ガスとなると、製造施設も広範囲に渡って存在すると予想されるのだから。

「・・・ですが、兵士達にノーマルスーツを着せれば・・・」

「我が軍のみに関して言うならば確かにそうだな。が、ここらに住む住民はどうだ？今から全員にノーマルスーツを行き渡らせられるのか？」

「そ、それは・・・」

無理だ。

なにしろ、この軍団の占領下だけでも1000万人以上の住民が居るが、この軍団の総兵力は120万人程。

予備のノーマルスーツを足しても全然足りない。

「そういうことだ。情報部の人員は総出で敵の毒ガス製造施設を見つけろ。早急に、だ」

こうして、ジャミトフの軍団は進撃を一旦ストップさせる事となった。

この判断が凶と出るのか、それとも吉と出るかは後の歴史にしか分からない。

U C C 0 0 8 0 年 3 月 2 0 日 毒ガスの脅威

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 3月20日 月 グラナダ

「では、南アフリカで使用された毒ガスというのは今後現地に残り続けるものなのだな？」

キシリアは確認するようにキシリア機関所属の分析官に向かってそう言った。

キシリア機関が現在調べている情報。

それは2日前にアフリカ共和国が使用した毒ガスについてであり、この毒ガスは原作でジオンが使用したG2ガスやティターンズが使用しようとしたG3ガスとも違うことが分かったのだが、それをよく調べてみたところ、とんでもないことが判明していた。

(まさか散布と同時に効果範囲が急速に広がる上に、放射能のようにその場に残る滞留性も持っているとは……)

そう、毒ガスというのは基本的に気体な為、強い風が吹けば吹き飛ばされる性質を持っているのだが、この毒ガス——D5ガスは比重が信じられないほど重く、それこそ台風やハリケーンでも無い限りは吹き飛ばせない代物であり、一度散布されれば暫くはそこに残る滞留性も持っている。

また効果範囲も非常に広く、一発のミサイルに積み込まれた量で凡そ半径100キロの範囲に影響を及ぼせるらしい。

「はい、少なくとも数年は現地に残るかと思います。まあ、ウイルスや細菌兵器のように人を介して拡がるわけではありませんし、比重が重い関係上、風にも乗りにくいので効果範囲の外にはあまり拡がりません。なので、効果範囲外への脅威を心配する必要は無いかと」

「そうか。それで南アフリカでの犠牲者の数は？」

「連邦軍を含めて、少なくとも1000万人は下りません。そして、言うまでもありませんが、亡くなったのは民間人が大半です」

「1000万人か・・・」

1000万人。

それは旧世紀の日本で言えば、東京の人口に相当する数字であり、仮にキシリアの前世でこれだけの死者を出させたこの世界のジーンのような指導者が居た場合、その人物は『21世紀最大の殺戮者』として歴史の教科書に乗ることはまず間違いないだろう。

しかし、この宇宙世紀では大した数字ではない。

なにしろ、原作の一週間戦争では55億人が死亡しているし、その後の30バンチ事件でも南アフリカの1、5倍にあたる1500万人が死亡しているのだから。

（やれやれ、大西洋大津波の時といい、数千万規模の犠牲者が少ないと感じてしまうとは。私の感覚がマヒしているのか？それともこの宇宙世紀がそれほど狂氣的な世界なのか？）

そう思ったキシリアだったが、今考えることではないと即座に思考を切り換え、分析官に向かってこう言う。

「それで毒ガスの製造施設の位置は掴めたのか？」

「はっ。こちらが掴んだ情報では製造施設は5つ有るようで、その内の2つは場所が特定できています」

「では、残り3つの特定を急がせろ。あと特定された2つの場所の情報も連邦軍の情報部に上手く流せ」



「はっ、分かりました。それと、もう一つお耳に入りたい事が有りません」

「なんだ？まだ有るのか？」

「はい。先程、5つ製造施設が存在すると申しましたが、現地からの報告によると更に製造施設を増設する気配があるとの事です」

「・・・奴等は地球を死の星にでも変えるつもりか？」

キシリアは呆れたような表情でそう言うが、この冗談のような言葉は意外と笑えない。

何故なら、この毒ガスを大量に用意すれば、それこそ冗談抜きで地球を死の星に変えることも可能だからだ。

「こちらの方はまだ場所は特定できていません。こちらも搜索しますか？」

「・・・いや、止めておけ。地球に居る諜報員も有限だからな。それに増設されているという事はまだ稼働はしてしまい。稼働するまでに連邦軍の情報部がなんとかすることを祈ろう。・・・しかし、これだけの事をしておいて、よくアフリカ共和国内で反乱が起こらないものだ」

キシリアはこの段階に至っても反乱が起こらないアフリカ共和国を不思議に思った。

ジャブローの核攻撃はまだ良い。

いや、こちらにとっては全然よろしくないが、アフリカ共和国にとっては外の領地で発生した被害であり、仮にアフリカ共和国の良識ある兵士が憤ったとしても反乱を起こす程のものではないのだ。

しかし、先月の核兵器に続き、今回の毒ガス攻撃は自国領内で起きたことであり、更に南アフリカに至っては文字通り死の大地に変貌してしまっている。

アフリカ共和国軍の中にも南アフリカ出身者や身内が居ても可笑しくはない筈なのだが、何故かそういった人間による反乱行為は今のところ起きていない。

「おそらく、洗脳でもされているのでは？」

「ふん、あの男にそんなカリスマ性があるものか」

分析官の発言をキシリアはそう切つて捨てる。

国民を一人の指導者の手によって洗脳するには相当なカリスマが必要だ。

それは旧世紀だとアドルフ・ヒトラー、宇宙世紀であればジオン・ズム・ダイクンとその子供のキャスバル・レム・ダイクン、そして、ドズルとサスロを除いたザビ家の面々がそれにあたるが、ジーン・コリニーにそんなカリスマが有るとは思えない。

(となると、情報操作でもしたか？しかし、これだけの事を情報操作など無理が・・・いや、出来るか。この宇宙世紀なら)

そう、宇宙世紀では数千万人程度の犠牲であれば隠蔽可能なのだ。

実際、原作の30バンチ事件では1500万人もの人間を毒ガスで殺したにも関わらず、伝染病という形で誤魔化して少なくとも表向きには終息させている。

まあ、幾らコロニーが閉鎖空間だからと言っても、犠牲となった数が数だけに、あまりにも無理が有りすぎてエウーゴが誕生する切っ掛けとなったりはしたが、それでも表向きには終息できていたのだ。

(やはり改めて考えると恐ろしい世界だな。この宇宙世紀は)

数千万人の犠牲が一步間違えれば簡単に闇に葬られてしまう世界。はつきり言ってガンダム00のアロウズが可愛く思えてくるその恐ろしさにキシリアは冷や汗を流すが、それをどうにか思考の隅へと追いやり、分析官に向かって指示をする。

「まあいい。反乱が起きなくとも苦しむのは主に連邦だからな。それより毒ガス製造施設の特定と連邦への情報流出は頼んだぞ」

「はっ、承知しました」

分析官はそう言つて、背筋を伸ばして見事な敬礼を行った。

◇L5宙域 ソロモン

「あれ？シンジ、こんなところに居たのか」

野比のび太特務少尉は偶々見つけた碇シンジ特務准尉に対してその声を掛ける。

「のび太・・・」

「どうしたの？元氣無いみたいだけど・・・」

「・・・いや、戦場は怖いものだなんて思ってたさ」

「・・・ああ、なるほど」

のび太はなんとなくだがシンジの心情を察する。

シンジはあの暗礁宙域での戦いが初陣だ。

しかし、あの戦いでは母艦が撃沈されてしまったことで、シンジは初陣で僅かながらでも知り合った人間をいきなり失うことになってしまった。

今まで戦闘経験が全く無かったシンジにとって、これはかなりショックだったのは想像に難くない。

「そこは慣れるしかないね。僕だって最初は戦争が怖くて怖くて堪らなかったから」

「そうなの？」

「うん、そうだよ。自分が死ぬっていうのもそうだったけど、なにより自分の手で人を殺すのが一番怖かった」

のび太は自分の体験談を語る。

そして、それはのび太の偽らざる本音でもあったのだが、それがシンジの心を更に暗くさせた。

「・・・のび太は強いんだね。僕なんて敵の命の事まで考えていられる余裕はなかったよ」

そう、先の戦いでシンジは何機かのMSと交戦していたが、自分の命の事を考えるので手一杯で、とてもではないが敵の命まで考えてい

られる余裕はなかったのだ。

だが、のび太はそこまで考えられた。

それはシンジにとって、のび太が自分より強い証明に他ならず、彼はのび太に対して少しばかりの嫉妬心を抱く。

「そうかな?」

「そうだよ。少なくとも、僕にとっては。と言うか、そんなに相手を殺すのが嫌いなら、なんで戦争に参加したの?」

シンジはそこを疑問に思っていた。

そもそもシンジが戦争に参加したのは、プル姉妹が死んだ遠因であるネオ・ジオンという組織が許せなかったからで、そこには明確な敵への殺意がある。

だからこそ、戦争に参加するといった決断をすることが出来た。

しかし、今までの言動から察するにのび太はそういう敵への殺意があつて戦争に参加したようには見えない。

ならば、なぜ戦争に参加したのか?

シンジにはそれが分からなかったのだ。

「・・・まあ、簡単に言うなら女の子に頼まれたからかな」

「女の子、ですか?」

「うん。その女の子の力になりたかつたんだ。まあ、今思えば少し浅はかだったかもしれないけど、実は前にも何度か仲間や友達の為に命を賭けた事があつて、そのノリで戦争に参加しちゃったんだと思う」

「そう、だったんですか」

意外だった。

先程まで嫉妬すら抱いていた人物がそんな軽薄な理由で戦争に参加したとは思わなかったからだ。

(なんでこの人は女の子や友達に頼まれただけで命を賭けられるんだろう)

シンジはそう思うが、実のところ、このシンジの考え方も聞く人によつてはかなり薄情な考え方だろう。

しかし、シンジはのび太と違つて学校でも家庭でもかなり冷たい環境で育つており、仲間意識の概念が酷く薄い(もつとも、それでもレイヤアスカよりはマシだが)。

なので、こういう考え方になるのもある意味では仕方がないものと言えた。

「じゃあ、のび太は戦争に参加したことを後悔してる?」

「いや、そんなことはないよ」

「えっ?」

「だってまだその女の子を助けられてないからね。もし後悔するとしたら、それは女の子を助けられなかった時か、あるいはその後だろうね」

そう、のび太にとって後悔という感情は事が完全に終わった後にするものだった。

何故なら、もし後悔によつて歩みを止めてしまえば、そこまでの道程で犠牲になった人達の命は全て無駄になってしまうからだ。

そして、数々の大冒険と一年戦争を経験してきたのび太にとって、犠牲になった人達の命が無駄になるのは絶対に許容出来ない。

だからこそ、少なくともものび太はメイを助けるまでは誰がなんと言

おうと、歩みを止めるつもりは一切無かった。

・・・それが犠牲になった仲間と自分が奪ってしまった敵の命への  
弔いだと強く信じていたから。

「・・・やっぱり、のび太は強いよ」

それを聞いたシンジは、改めてのび太は自分が想像するよりもずつ  
と強い人間だと感じた。

それと同時に先程までの醜い嫉妬の感情は消え、代わりに一種の憧  
憬のような感情がシンジの中に芽生え始める。

だが、それは当のシンジですらまだ気づいていなかった。

UC0080年 3月22日 ルオ商会の悲劇

◇宇宙世紀0080年 3月22日 地球 ニュー・ホンコン  
ニュー・ホンコン。

そこは原作のグリプス戦役でアウドムラが立ち寄った街であり、サイコガンダムが大暴れした街でもある。

現在ではネオ・ジオンによって占領されてはいるものの、そのネオ・ジオン自身が東南アジア攻略に忙しいからか、大した駐留軍は置かれていない。

そして、この街には地球でトップクラスの財力を持つルオ商会が存在しており、今、そこでは1人の客人が迎えられていた。

「これもどうもマーサ・ビスト・カーバイン様。ようこそ、お越し頂きました」

ルオ・ウーミンはそう言いながら、社交辞令の言葉を口にする。しかし、その社交辞令の言葉はもちろん本心ではない。

(このババアめ。次は何を要求してくるのだ?)

ルオは憎々しげな感情を隠すのに必死だった。

なにしろ、ネオ・ジオンにニュー・ホンコンを占領された後、ルオ商会はネオ・ジオンによって強制的に資金の一部を没収されており、商会の維持にかなり苦労していたのだ。

それだけならばネオ・ジオンを恨めば良いのだが、その金の流れをよく調べたところ、この目の前の女に大半の金が入っているのが判明している。

自分達の金をむしり取っている相手を本心から歓迎しようなどと思っている筈もなく、ルオは内心でマーサに憎しみと軽蔑の感情を抱いていた。

だが、マーサはそんなルオの心情を知ってか知らずか、彼の社交辞



令の言葉にこう返す。

「早速ですが、更なる資金提供をお願いします」

「・・・」

ルオはその欲望丸出しな言葉に盛大にひきつった顔をするが、すぐに全力で引っ返めてこう返した。

「そう言われましても、我が商社にはもうこれ以上のお金はありませんよ」

これは半分嘘だ。

確かに表向きの金はマーサに奪われたせいでもう商會が維持できぬギリギリの額しか残っていないが、裏側の資金はまだ残っている。

そして、その資金は当たり前前の事だが、存在が分からないように色々と工作してあり、並の税理士では絶対に分からない。

勿論、裏金の事はマーサも知っているようでその存在を調べていることはルオも知っていたが、同時にまだその金の在処を特定できていない事も知っている。

だからこそ、強気に出た（やけくそになったとも言える）のだが、マーサはルオの考えているより強欲な人物だった。

「では、あなた方の運用資金を全て供出してください」

「はっ？」

マーサのあまりの発言に流石のルオも一瞬呆けてしまう。

それはそうだろう。

マーサの発言は一言で言ってしまうと、『有り金を全部寄越せ』というものだったのだから。

「・・・はははは。ご冗談を。それでは我が社が潰れてしまいます」

「ええ。ですから、ルオ商会を潰してでも資金を供出して下さい。・・・命が惜しいのなら」

「!?」

その脅し文句にルオは目を見開く。

そして、次の瞬間、部屋の外から銃声の音とルオ商会の社員のものと思われる悲鳴が響き渡ってきた。

「なんの真似だ!?!」

ルオはマーサにそう問い詰めるが、彼女は相変わらず涼しい顔をしながらかこう言う。

「もうこの商会の存在はネオ・ジオンには必要ありません。あなた方の使っている資金は我々が有効活用致します」

「馬鹿な!?!ここでルオ商会を潰したりしたら、地球の経済は無茶苦茶になるぞ!!」

そう、ルオ商会は原作でカラバのスポンサーとなったり、ダカールの議会で工作できたことから分かるように、地球では政財界に多大な影響力を持っている。

そして、現在の地球は経済的にかなりボロボロだ。

ここでルオ商会が潰れたりすれば、ルオの言うように地球の経済は無茶苦茶となり、戦後の復興に多大な支障が出るのは間違いない。

だが――

「ええ、確かに経済的にはかなり混乱するでしょう。復興も遅れるでしょうね。しかし、それは私達にとってむしろ好都合。地球の復興が遅れば、再起を計るチャンスが出来るのですから。そして、その為に必要な資金をここで頂きます」

マーサがそう言った直後、部屋の外が静かとなり、1人のネオ・ジオン兵が入室してくる。

「掃討、完了しました」

「ご苦勞様。・・・さて、ルオ会長。私も鬼ではありません。この商会の残りの運用資金の全てを渡し、更に裏金の在処を全て話してください。命だけは助けましょう」

内心でこれから命乞いをするであろう男を嘲笑いながらマーサはそう言うが、ルオから放たれた返答は彼女の予想を覆す。

「お断りだ」

ルオはキツパリとそう言い、その返答に対してマーサは目を丸くした。

「・・・命が惜しくないのですか？」

「勿論、惜しいさ。今だって命乞いをしてでも生き延びたい感情はある。が、お前の薄汚い目はこう言っている。『裏金の在処さえ分かれば用済みだ』、とな」

「・・・」

「私にもプライドはある。どうせ死ぬなら見苦しく無いようにしたい

のでな。・・・ああ、それと最後に1つ聞きたいのだが、良いかね?」

「なんででしょうか?」

「我々の財を奪ってまで、お前は何を成すのだ?まさかアナイムを自分のものにするといった程度の事ではあるまい?」

「・・・答える義理は有りません」

一瞬言葉に詰まりながらも、マーサはそう言って回答を拒否するが、そんな彼女をルオは鼻で笑いながらこう言った。

「確かにそうだな。残念だ。だが、これだけは忠告しておこう。お前は所詮、私と同類の薄汚い人間にすぎん。自分だけが綺麗だと思うなよ」

「!? うるさい!!この男を射殺しろ!!」

マーサは激昂し、ネオ・ジオン兵にルオを射殺するように命じる。そして、その命令に従い、ネオ・ジオン兵がルオに銃を向けると、ルオは死期を悟って目を閉じる。

(ステファニー。後は頼んだぞ)

そう思った直後、ネオ・ジオン兵の持った銃から放たれた弾丸がルオの命を容赦なく狩り取り、彼はその生涯に幕を閉じることとなった。

◇L5宙域 ソロモン 司令室

「大気圏突入用ベースジャバーは既に準備が整っています。バリユートも明日までには必要数が揃う予定です」

「そうか。となると、作戦開始日は3日後ということになるな」

ラコック大佐からの報告を聞きながら、ドズル・ザビ中将はそう考える。

大気圏突入用ベースジャバーとバリユートシステム。

どちらも最近になって開発が完了した大気圏突入用装備だ。

元々、この2つは敵のMSが戦場に投入されると予想された昨年10月頃に間に合わせるように開発が進められていた。

そもそも大気圏突入というのは下の部分から掛かる高熱を如何にしてクリアするかがネックであり、逆に言えばそれさえクリアすれば耐熱コーティング抜きでの大気圏突入が可能なのはグリプス戦役でのエウーゴによるジャブロー降下やキリマンジャロ降下によって証明されている。

更にMSの耐熱コーティングは大気圏突入の際に自由度が効くというメリットがあるが、重い上に自力では取り外せないといった欠点があり、大気圏突入後にMS戦に突入したらまずやられてしまうと考えられていたからだ。

だからこそ、降下後のモビルスーツ戦を想定してこのような装備が考えられたのだが、それが何故当初の予定より5ヶ月も遅れた今になって開発が完了したかと言えば答えは簡単で、その必要が無かったからだ。

連邦のMS開発は遅れに遅れていたし、一年戦争が終わった後も降下作戦は特に無かった。

更にグングニルやザムⅡや通常型ガンダムの全天周囲モニターへの改修などにリソースが振り分けられていたことによつて益々開発が遅れ、やつと今月になつて開発が完了したのだ。

そして、これらの装備は3日後に行われる『ダグラス・ローデン准将暗殺作戦』に投入される予定となつていた。

「ところで、第8特殊小隊にMSはちゃんと届いているか？」

「はい、問題有りません。先日、通信が入り、無事届いたという報告が入っていますので」

その言葉に安堵するドズル。

無いとは思っていたが、万が一にも原作でマ・クベがランバ・ラル隊に対してやったような補給物資の横取りなんてことがあつたら堪らないので、一応確認しておきたかつたのだ。

「そうか。では、予定通り3日後に作戦を行う」

「分かりました。それと一つ質問があるのですが・・・」

「なんだ？」

「最近、このソロモンから次々と戦力を本国やア・バオア・クーなどに引き抜いています、大丈夫なのでしょうか？」

「仕方あるまい。エウーゴはほとんど撃滅されたとはいえ、何隻かは逃して行方を眩ませている。そして、コロニーはソロモンと違って頑丈じゃない。数隻でも脅威となる。それに兵達にも休暇を与えたいという思惑もある」

「それは分かります。しかし、今回の戦いも急に始まっており、もしまた連邦か何処かの勢力が宇宙に上がってきた場合、このソロモンは再び最前線となりますので、あまり戦力を引き抜きすぎるのは得策ではないかと」

「・・・まあ、お前の言うことも一理あるが・・・」

ドズルはそう言いながらも、それはないのではないかと思っていた。

この戦争においてジオンと連邦に逆らう勢力は4勢力存在したが、その内エウーゴは既に壊滅、カラバは地下に潜っており、アフリカ共和国は劣勢。

唯一、ネオ・ジオンだけが互角な戦いを繰り広げているが、前述した作戦が成功すれば一気に劣勢に立たされることとなるだろう。

この状態で何処かの勢力がソロモンを占領する可能性は方に1つもない。

(唯一、懸念されるのはこつちの内ゲバだが、ダイクン派は軒並みネオ・ジオンに行ってしまったし、ザビ家内でも誰かが死んだわけではないから、ザビ家の誰かに反乱の意思がない限り、反乱は起きない。まあ、誰かが勝手に暴走して反乱を起こせば話は別だが、そこまで大きな反乱は起きないだろうな)

ドズルはそう結論付けるが、ラコックの言う懸念も理解していたので、無下にはしなかった。

「分かった。だが、さっきも言ったように今の戦況ではソロモンに戦力はそれほど必要ない。俺もなるべく兄貴達に戦力をソロモンに置くように言ってみるが、あまり期待はしないでくれ」

「・・・了解しました。お手を煩わせて申し訳ありません。では、これで失礼します」

ラコックはそう言って敬礼を行った後、部屋を退室していった。



UCC0080年 3月25日 上空からの狙撃

◇宇宙世紀0080年 3月25日 地球 東南アジア上空

「高度3万。もう少しだな」

野比のび太特務少尉はバリユートシステムによって降下する自らの機体の中で高度計を見ながらそう呟く。

今回の作戦は3段階に別れている。

まず第一段階として軌道上に展開した艦隊がミノフスキー粒子を詰めた砲弾を地上に向けて発射し、目標地点周辺にミノフスキー粒子を充満。

第2段階としてのび太を除いたペガサス隊が大気圏突入用ベースジャバーに乗って大気圏を突破し、目標地点周辺に降下して攪乱を行う。

そして、最後に大量のダミーのバリユートと共に降下したのび太のガンダム改B型が目標の建物を狙撃し、対象人物であるダグラス・ローデン准将を暗殺するというのが今作戦の内容だったが、この作戦に関してのび太は少し疑問に思っている部分があった。

（敵の司令官が違う場所に居たらどうするんだろう？）

そう、仮にこの作戦が成功して敵の司令部を木っ端微塵に出来たとしても、対象となる司令官が何らかの理由で外に居たり、あるいはそもそも居る建物が違ったりすれば意味がないのだ。

（偶然1つで失敗が確定する作戦、か。考えてみると相当な博打だな、これ）

のび太は考えるが、同時に狙いは悪くないとも思っていた。

何故なら、幾ら敵をやっつけても敵の頭が健在である限り、最後まで

で戦い続けるのが普通だからだ。

そうなるのは戦いが長引くし、犠牲者も多くなる。

実際、一年戦争もジャブローを潰したことによってやっと終わったし、その前の大冒険での悪魔族や海魚族との戦いでも頭であるデマオンやブイキンを倒した事によって不利だった形勢はあつという間に逆転して終結した。

つまり、頭を潰すというのはそれほど重要な事なのだ。

(まっ、戦争がダラダラと長引くよりは良いけどね)

そんなことをのび太が考えていた時、遂に高度は予定高度である一万メートルに達し、のび太はパラシユートを開く。

本来のバリユートシステムの使い方ではもう少し高度を落としてから開くのだが、今回は建物への射線や爆発の影響範囲を考えた結果、この高度でパラシユートを開くように指示されていたのだ。

そして、パラシユートが開くと、それまでエアクツションによって閉ざされていた視界が一気に開く。

「おおーん、これはスリル有るな!!」

全天周囲モニターによって真下以外の全ての空間がモニターによって映されることもあって、のび太は座席に座った状態のままスカイダイビングをしているような感覚を味わう。

これは気の弱い人間だったら気絶しかねないものであったが、のび太は驚きつつもあまり動じない。

この程度の事であれば、前の世界で散々経験しているのだから。

「よし、あとはこれを当てるだけだ」

のび太はガンダム改B型の腕に構えられているメガ・バズーカ・ランチャーの照準を合わせるためにスコープを覗き込む。

メガ・バズーカ・ランチャー。

それは原作グリプス戦役で百式が使っていた装備であり、今回の暗殺作戦の要となる兵器だ。

この兵器は云わば『モビルスーツが装備するメガ粒子砲』であり、一度撃つたら充電が必要だという欠点こそあるものの、その威力はビームライフルより高く、グリプス戦役時にエウーゴが使っていた戦艦であるアイリツシュ級戦艦に搭載されている大型メガ粒子砲並みの威力がある。

今回の戦いでは対象の建物のおそらく地下に居るであろうダグラス・ローデン准将を確実に抹殺するために持ち出された。

「・・・」

のび太は集中する。

スコープに映し出される画面はかなりぶれていた。当然だ。

パラシュートによって機体の落下速度は減少しているとはいえ、それでもモビルスーツ程の重量となるとかなりの落下速度になり、更に目標の建物はのび太の居る高度から距離にして5キロ以上離れている。

おまけにミノフスキー粒子も充満しているため、レーダーや赤外線センサーも頼れない。

こんな状況で対象の建物に命中させるなど、熟練したパイロットでも到底無理だし、それどころかニュータイプ最強のパイロットであるアムロ・レイですら無理だろう。

だが、のび太は違う。

しっかりと目標の建物をスコープ越しに見据えていた。

(僕に当たらない目標はない)

傲慢なまでの自信。

見る人によつては過信とも取れるが、射撃というのは自分を信じる  
ことが一番重要であり、逆に自分を信じきれない人間はそれが例え一  
流の狙撃手であろうと二流に成り下がるといふことはのび太はよく  
理解している。

更に言えば、今回の作戦はある程度の高度で撃たなくてはならず、  
その高度はもうすぐで到達するのだが、それを知っていてなおのび太  
の中に焦りの感情は存在しない。

焦って撃った弾丸など、如何なる射撃の腕の持ち主であろうとも絶  
対に当たらないということも大冒険や一年戦争でよく実感していた  
からだ。

——そして、遂に射撃の瞬間が訪れる。

「3、2、1・・・今！」

のび太は射撃のスイッチを押す。

すると、メガ・バズーカ・ランチャーの砲口からメガ粒子砲が発射  
され、見事に目標の建物に命中してそのまま建物の地下まで到達。

そこに詰めていたダグラス・ローデン准将とその副官のジェーン・  
コンティ大尉、そして、メイの親友であるユウキ・ナカサト伍長を始  
めとしたオペレーター達の命を一瞬で狩り取った。



「!? やったか!!」

メガ・バズーカ・ランチャーのエネルギーらしき奔流が上空から撃ち下ろされる光景を見て、クルト中尉は作戦が完遂されたことを悟る。

バリユートによって降下したのび太に先行して大気圏突入用ベースジャバーで地上に降下したペガサス隊は作戦通り降下地点周辺に展開していた第8特殊小隊と協力する形で司令部の近くに居たネオ・ジオン軍の攪乱を開始した。

高濃度のミノフスキー粒子が散布されていたこともあつて狙い通りネオ・ジオンは部隊の大半が混乱したが、ケン・ビーダーシュタット少尉の指揮する小隊が即座に反撃を開始。

その結果、ペガサス隊はスレンダー軍曹のジムⅢが動力炉を撃ち抜かれて撃破され、スレンダー軍曹は戦死。

碓シンジ特務准尉のZガンダムもまた機体の右腕が切り落とされて中破し、一足先に後退させられていた。

そして、つい今しがたまでクルトはシンジのZガンダムを中破させた敵MSであるガンダムⅡ（クルトは知らないが、ケン・ビーダーシュタットが搭乗している）と対峙していたのだが、そこに上空からメガ・バズーカ・ランチャーの奔流が迸ったのだ。

「よし、全員撤退だー!」

クルトはガンダムⅡがメガ・バズーカ・ランチャーの命中した方向に意識を向けたのを見てその隙を突く形で撤退を意味する色の信号弾を上空に打ち上げ、全軍に撤退する旨を伝える。

作戦が取り敢えず完遂された以上、ここに居座る理由はない。

あの攻撃で目標であるダグラス・ローデン准将が暗殺されたかどうかは分からないが、ここは敵地であり、確認している余裕など無いのだ。

「さて、問題はこいつが逃してくれるかどうかだな」

そう言いながら、クルトは改めて敵であるガンダムⅡを見据えた。メガ・バズーカ・ランチャーの方に意識を向けていたガンダムⅡであつたが、先程の信号弾で我に返つたのか、再びこちらに意識を向けているのが分かる。

加えて、戦つてみて分かつたが、ガンダムⅡは性能面でZガンダムには及ばない（ちなみにそれでもZガンダムが先程負けたのは単純にパイロットであるシンジの技量不足）が、それでもクルトの乗るザムⅡ改よりは確実に性能が高い。

しかも、乗っているパイロットの技量も非常に高く、確実にクルトよりは上だ。

つまり、ここで戦えばよっぽど運が良くない限りは死あるのみとなる。

（・・・これはいよいよ覚悟を決めるしかないか）

そう思ったクルトだったが、そこに救いの手が差し伸べられてくる。

「!? のび太か!!」

そう、狙撃を終えてバーニアを吹かして着陸しようとしていたのび太のガンダム改B型が偶々クルトのザムⅡ改の姿を見つけ、チャージが完了したメガ・バズーカ・ランチャーを使って支援攻撃を行ったのだ。

慌てて回避したガンダムⅡであつたが、流石に避けきれずに両足が

丸ごと消失する。

そして、そうなつてはまともに着陸できる筈もなく、着地した瞬間に機体は仰向けにひっくり返ってしまふ。

それをチャンスと見たクルトのザムⅡ改がビームサーベルを引き抜いてとどめを刺そうとするが、そこに2機のハイザックが現れたことで断念する。

「ちっ！折角のチャンスは逃しちゃったか!!だが、命があっただけでももうけもんだ!!」

そう言うと、クルトはザムⅡ改のスラスターを吹かしてその場から撤退していき、のび太のガンダム改B型もまたその後を追って撤退していった。

U C 0 0 8 0 年 3 月 2 8 日 決まった戦局

◇宇宙世紀0080年 3月28日 L2宙域 サイド3 ジオン共和国 ズム・シテイ 総帥府

「遂に連邦も堪忍袋の緒が切れたか」

ギレンはそう言いながら、セシリアがたった今持ってきた連邦の核兵器使用通知書を見る。

2日前、ジオンからの情報提供によって特定された2ヶ所の毒ガス製造施設を連邦は一方を空爆によって破壊し、もう一方を特殊部隊を派遣して破壊させた(ちなみにギレンは知らないが、この特殊部隊にはダグザ・マックール中尉の姿もあった)。

しかし、それがアフリカ共和国を刺激したのか、アフリカ共和国軍は翌日の3月27日に更なる毒ガス攻撃を開始。

これによつて旧トルコや旧シリアなどの中東地域が攻撃され、概算で300〜500万人の犠牲者が発生しているらしい。

そして、この行動によつて連邦の首脳部は遂に切れたらしく、核兵器をアフリカ共和国のカイロに対して使用することを決定した。

しかし、流星にジオン共和国に黙って核を使用するのは不味いと考えたのか、こうして使用通知書をジオン共和国に送ってきたのだ。

「通知を送ることで、一応は筋を通したということか。今度の連邦の指導者は結構まともな奴らしいな」

「どういたしますか?」

「どうもこうも黙認しかない。それに元々、南極条約はジオンと連邦との間で結ばれた条約だし、そもそも効力も切れているからな」

そう、実のところ、南極条約は一年戦争においてのジオンと連邦の



戦時条約であり、一年戦争が終わった時点で効力は切れている。

なので、一応は連邦が核兵器を使っても条約違反にはならないし、本来ならこんな通知も送ってくる必要はないのだが、おそらく過去に南極条約を破って核を使ってしまった後ろめたさからこのような通知を送ってきたのだろう。

「加えて、そもそもアフリカ共和国が何時までも存在されると我々としても困るしな。ならば、ここは黙認するしかないだろう」

「分かりました」

「ああ。・・・ところで、ホワイトベース隊は東南アジアにもう着いているか？」

「はい。既に第8特殊小隊及びペガサス隊に合流しています」

「そうか」

そう言いながら、ギレンは今後の戦略を脳内で再構築する。

現在、東南アジア方面はペガサス隊によるダグラス・ローデン准将暗殺が成功した事で一気に連邦軍優位に戦局が進んでいた。

もつとも、ネオ・ジオンの中には鬼神のような働きをして連邦を苦しめているMS部隊が居るらしいが、それは局所的なものであり、戦局全体ではもはや東南アジアにおけるネオ・ジオンの敗退は免れない。

このまま行けば数日で東南アジアは連邦軍によって奪還されることになるだろう。

そうなれば、ネオ・ジオンと連邦の戦いの場は華南へと移ることになる。

（華南か。そう言えば、ルオ商会が潰れたと聞いているが・・・まった

く、とんでもないことをしてくれたな)

ルオ商会は地球で屈指の経済力を持っており、それが潰れたとなれば当然地球経済は混乱する。

そして、地球経済が混乱すれば戦後の地球の復興は遅れ、地球に住まうアースノイドの不満は高まり、それが新たな戦いの火種となるのだ。

(あるいはそれが狙いか。そして、こんな真似をするのは・・・あの企業しかないな)

この時、ギレンの頭の中に真つ先に思い浮かんだのは、やはり言うべきかアナハイム・エレクトロニクスだった。

なにしろ、原作でも反政府勢力に性能の高いMSを渡し、それに対抗しようとする連邦軍に敢えてその反政府勢力に渡したMSより少し性能の劣るMSを大量に売るといっようなえげつない死の商売をしていた企業だ。

ルオ商会を潰すことで火種を作り、そこにMSを売り込んで儲けようなどということを考えてもなんの不思議もない。

まあ、実際はアナハイムではなく、マーサが独自にやっていた事なのだが、流石のギレンもそこまでは想像できていなかった。

(やはりアナハイムはいずれ潰した方が良いだろうな)

そう思ったギレンだったが、流石にすぐには無理であることも理解していた。

なにしろ、もうすぐこの戦争は終わり、戦後の復興が始まる。

しかし、それには政府のみならず、大手の企業の経済力が必要不可欠だ。

そして、ルオ商会が潰された今、アナハイムまで潰してしまえば確実に戦後の復興に支障が出てしまう。

(とは言え、戦後復興に携わらせてアナハイムを太らせるのもあれだからな。何か手は打っておかないとな)

◇地球 東アジア 華南 ネオ・ジオン 野戦陣地 MS格納庫  
内

「メイ、もう大丈夫なのか？」

ケン・ビーダーシュタット少尉はMS格納庫でMSの整備をしている今年15歳となる少女——メイ・カーウィン技術少尉にそう声を掛ける。

あのダグラス・ローデン准将の暗殺から3日。

ケンの率いるMS小隊は東南アジア戦線で連邦相手に大暴れをして20機以上のMSを撃破したが、戦局にはあまり寄与せず、結局、こうして華南まで後退することになった。

そして、メイは父親の友人であり、よく自分の世話をしてくれたダグラスや親友のユウキ・ナカサト伍長が戦死したという報告を受けた

時、シヨックのあまり寝込んでしまったのだ。

だからこそ、あれからそう日が経っていないにも関わらず、自分の仕事であるMSの整備を始めようとする彼女をケン心配してそう言ったのだが、そんなケンに対してメイはこう返す。

「何かしていないと落ち着かないの。それに戦局は結構厳しいんでしよう？だったら、私が呑気に寝てるわけにもいかないよ」

メイはそう言いながらMSの整備を行っているが、その声に張りがないことにケンは気づいていた。

（何か声を掛けてやりたいが・・・俺にはその資格がない）

不意打ちだったとは言え、ダグラスやユウキを殺したあの灰色のガンダム改の攻撃によって自分のガンダムIIは両足を喪失した。

部下のガースキー・ジノビエフ曹長とジェイク・ガンズ軍曹のハイザックが駆けつけたからこそ、それ以上の追撃は無かったが、逆に言えば彼らが駆け付けていなければ自分は死んでいた可能性が高い。

そして、そんな醜態を晒した自分にメイに偉そうに言える権利はないとケンは考えていた。

（加えて、メイの言ったように戦局も悪くなってる。このまま行けば、ネオ・ジオンはあと1ヶ月持つかどうかだ）

東南アジアはもう失陥したも同然であり、次の戦場はこの華南となるのは誰の目にも分かりきったことだ。

そして、華南が抜かれれば華北が戦場となり、そこが抜かれれば満州、旧モンゴル東部で最後の抵抗を行うことになる。

ケンはそこまでの期間をあと1ヶ月と見ていた。

随分と早いように見えるが、そもそもネオ・ジオンは傭兵が多く居ることもあつて統率が取れているとは言い難い組織だ。

実際、東南アジアでも傭兵が勝手に住民に無法を働いたことで反ネオ・ジオンゲリラを産み出してしまっている。

まあ、それでもダグラスの統率力によってどうにか戦線を維持して連邦と互角に渡り合っていたが、そのダグラスが暗殺されたことによつて東南アジア戦線はあつという間に崩壊してしまった。

これで長く保つと考えられる方が可笑しい。

(最初から勝つのが無理なのは分かりきっていたが、こうも崩壊が早いとは)

そもそもケンは最初からネオ・ジオンが今回の戦争で勝利できるとは思っていないかった。

当然だろう。

地球連邦はジオン公国との戦いで弱つていたとは言え、地球連邦は依然としてかなりの超大国であつたし、ジオン共和国も裏切りがあつたとは言つても未だに多数の戦力を残していた上にそれなりの国力もあるのに対して、ネオ・ジオンは占領した土地の鉱物資源や工場などを活用して戦力の補給や補充・増強を行えたが、それは決して国力と言えるほど安定したものでは無かつたのだから。

幾らMSの優位があると言っても、これで勝てる筈がないのは軍学校を卒業できる程の頭脳を持った人間であればすぐに気づくだろう。

だが、それでもダグラス達がネオ・ジオンについていくことを決めたのは、他に居場所が無かつたからだ。

なにしろ、ジオン共和国は既にザビ派の巣窟となつており、もはやダイクン派の居場所はない。

しかし、だからと言って地球連邦に身を寄せるのも悪手だ。

どんな扱いをされるか分からないし、最悪、情報だけ取られて処分されるという可能性もある。

だからこそ、消去法でネオ・ジオンについていくことを選んだのだが、今思えばこの戦争が開幕した直後にジオン共和国に投降した方がもつとマシな事になっていたかもしれない。

(まあ、今更遅いんだがな。・・・そうになると、唯一俺がメイにしてやれることは、あの灰色のガンダム改を倒してユウキ達の仇を取ることか。もつとも、その後の身の振り方も考えなくちゃならんがな)

ケンはそう考えていた。

UCC0080年 4月1日 掛け違い

◇宇宙世紀0080年 4月1日 地球 東アジア ペキン

「どうしたのかね？アンリ・シユレッサー准将」

ネオ・ジオン総帥——キヤスバル・レム・ダイクンは暗い表情で自室を訪れてきたアンリ・シユレッサー准将に対してそう尋ねる。

「・・・閣下。正直言つてこの戦争での我々の勝機はもう無くなりました」

そう、アンリがキヤスバルに言いたかったのは、ネオ・ジオンの勝機はもう無いという「事実」だった。

元々、キヤスバル以外のネオ・ジオン上層部がキヤスバルの蜂起に賛成したのはジオン公国にもう帰れる見込みは無いからという事もあったが、それ以上にアフリカ共和国、エウーゴ、カラバと協力し合えば連邦とジオンに対してそれなりの勝機を見込めるのではないかと考えたからだ。

しかし、エウーゴは既に壊滅し、カラバは地下に潜り、アフリカ共和国もまた昨日首都であるカイロに核ミサイルが撃ち込まれたことによつてジーン・コリニーを始めとした首脳陣がほぼ全滅。

こうなると、アフリカ共和国の陥落もまた時間の問題であり、アフリカ共和国が陥落すれば、ネオ・ジオンは単独で連邦とジオンの相手をしなくてはならなくなる。

そうなつては勝つ可能性など、万に一つもない。

アンリはそう説明するが、そんなことは当然シヤアにも分かっていたし、そもそも逆にネオ・ジオンに勝つて貰つては却つてシヤアにとつては困つた事態になる。

なにしろ、シヤアの目的は自分を利用する者達の粛清であつたのだから。

だが、シヤアはそれをおくびにも出さずにこう言う。

「つまり、我々は孤立無援。だから勝つのは不可能。そう言いたいのだな？」

「はい」

「それで、君は私にどうしろと？」

「信頼できる者を護衛に着けますので、キヤスバル様は今のうちに脱出し、その者達と共に何処かに身を隠し、再起を待つべきです」

もはや勝機が無い以上、キヤスバルは敵が来ていない今のうちにここから逃げるべきであり、生き延びればまた再起することも可能だ。そう主張するアンリだったが、シヤアは逆にこう質問する。

「しかし、総大将が逃げ出すというのは士気に関わるのではないかね？」

「影武者を用意します。暫くはそれで誤魔化せるでしょう」

「ふむ……」

アンリにそう言われ、シヤアは少し考える。

(ここが潮時か？いや、護衛をつけられるのは不味いな。私の居場所が常にバレてしまう)

確かに今のうちに逃げ出せば、何処かに身を隠すことは可能だろう。

一年戦争やこの戦争の混乱によって、身を潜める場所には事欠かな



いのだから。

しかし、護衛がつくということは、連邦に敗北した後、生き残って野に下るであろうネオ・ジオンの人間達にシヤアの居場所が割れるという事でもある。

利用されるのが嫌いで、戦後はララアと共に静かに暮らしたいと思っているシヤアとしてはそんな余計な付録が着くのは真つ平御免だった。

(殺すにしても、1人でも生き延びてしまえば面倒になる。やはりここは当初の予定の通り、混乱している最中に逃げ出すのが一番だろうな)

シヤアはそう決めると、アンリに対してこう答える。

「やはりいま逃げ出すのは私としては反対だ。もしバレたら将兵達は着いてこなくなってしまう」

「しかし・・・」

「安心しろ、アンリ准将。私もなにもしていない訳ではない。ジンバを通じて既に手は打ってある。数日後には結果が出る筈だ」

シヤアはそう言いながら、不敵に笑っていた。

◇東南アジア 旧ベトナム ハノイ

シヤアとアンリが会話を行っていた頃、第8特殊小隊及びペガサス隊はアフリカからやって来たホワイトベース隊と合流し、アムロとのび太は去年の9月でソロモンで会って以来の7ヶ月振りの再会を果たしていた。

「まさか、アムロさんと再会できるとは思いませんでしたよ」

「ああ、お互いどうにか生き残って良かったよ」

野比のび太特務少尉の言葉に、アムロ・レイ少尉はそう返す。

「ええ、まったくです。ああ、そう言えば、アムロさんはつい最近までアフリカに居たんですよね？どんな様子でしたか？」

そう言うのび太だったが、実のところアフリカの戦局に対して興味はなかった。

ただ、前の世界の大冒険で行った事のある大陸であるということもあり、なんとなく興味があつてそう尋ねただのだ。

だが、それが少し浅はかな考えであつたことをのび太は直後の会話によつて嫌でも理解させられることになる。

「・・・あそこは地獄だったよ」

「地獄、ですか？」

のび太は首を傾げる。

戦場が地獄であることなど当の昔に知っているし、のび太と同じく一年戦争を初期から戦い抜いてきたアムロも当然知っている筈だ。だが、アムロの言う地獄は戦場の地獄とはニュアンスが違って聞かえた。

どういふことだろうかとのび太が思っていると、アムロがのび太に対してこう尋ねてくる。

「ああ。南アフリカ一帯に毒ガスが散布されたことは知っているか？」

「え、ええ。まあ」

「僕はその時、マダガスカル攻略作戦に参加していたんだが、その毒ガスの一件で作戦そのものが中止になってね。その後、ホワイトベースは南アフリカの幾つかの街を回るようになったんだ。毒ガスで犠牲になった人達の遺体を回収するためにね。そしたら——」

「そしたら？」

「何処の街も文字通りの意味で死の街だった」

アムロはそう言うが、決してそれは比喩ではない。

実際に何処の街にも生存者など居なかったのだ。

少なくとも、ホワイトベースが立ち寄った町では。

「僕は思ったよ。なんでこんな酷いことが出来るんだろう、とね。それで僕は自分の手でこんなことをした奴等の首魁であるジーン・コリニーを討ち取ってやる。そう思っていたんだ。・・・だけど、その矢先にホワイトベース隊はこっちに転属するように命令が出た」

「それは・・・」

あまり言いたくはないが、それは正解だったのではないか？

そう思ったのび太だが、流石に不謹慎だと考えたのか、口には出さずに言い籠る。

のび太から見て、アムロから感じる感覚は復讐心に近い義憤だ。

更に毒ガス攻撃の際に持ち前のニュータイプ能力の高さによって死んでいった大勢の人々の死の感覚を感じ取ってしまったことも、その心を強くしてしまっている。

別にその心の持ち方は間違いではない。

映像越しで見ただけならともかく、目の前で人が大勢死んでいるのにそれに対する怒りを持たない人間など、心が破綻しているとしたか言いがたないのだから。

それにのび太自身も去年の大西洋大津波やウイルス散布などの際にアムロ程ではないが、それでも大勢の人々の死と苦しみをニュータイプ能力で感じ取っており、アムロの気持ちはよく分かる。

しかし――

(その復讐心や義憤は周りの人を巻き込むよ、アムロさん)

そう、復讐心や義憤は周りの人間を巻き込むことが多く、それが時としてテロリストのように自分の正義を果たすためならば無関係の人間が死んでも構わないというような思考になる。

“復讐は醜い”、“義憤は危険”と見なされるのもこれが原因だ。

まあ、戦場での味方の敵討ちや民間人を守る為に戦うといった義憤程度ならばよくある事なので別に良い(と言うか、のび太もかつてやっていた)のだが、世の中そんな理性的な復讐や義憤を果たせる人間ばかり居るわけではない。

そして、今のアムロの心は結構危うく、一步間違えればテロリストと同等の類いで復讐心や義憤を持つようになってしまう。

のび太はそんな危機感を抱いていた。

(やれやれ、これは慎重に言葉を選ぶ必要がありそうだな)

そう思うと、のび太はアムロに対してこう言った。

「でも、アムロさん。その毒ガスを撒いたっていうアフリカ共和国の偉い人はもう死んでいますよ。まあ、その為の方法はあれでしたけど、少なくとも毒ガスがもう撒かれる事は無いんじゃないですか？」

「それはまあ、そうかもしれないけど・・・でも！」

「あまり思い詰めると頭に良くないですよ。こういう嫌な事はなるべくすぐに忘れるに限ります」

嫌な事は忘れる。

それはのび太の処世術であり、戦場では意外と重要な事だった。

なにしろ、戦場では悲劇的な事など吐いて捨てるほど存在するし、戦場で生き延びれば生き延びるほどそれを目にする機会は多くなるのだが、そこで悲劇的な出来事に引き摺られれば、戦場での集中力が低下する上に生存率が極端に低くなり、中には心が潰れてとんでもない行動をやらかす場合もある。

だからこそ、そういった悲劇的な出来事を上手く消化して一時的でも良いので忘れるという行為はかなり重要なことだったのだが、この時、のび太はある事実を失念していた。

それは――

(何が忘れるだ。あんな事実を忘れられるわけないじゃないか)

そう思いながら、アムロはのび太に冷ややかな視線を向ける。

そう、実のところ、そもそも戦争で起きた悲劇的な事実を忘れるというのは非常に難しく、出来るとすればのび太や原作のジュードのようにその事実を心の中で上手く消化出来る強いメンタルを持った人

間か、悲劇を悲劇と認識していない人格破綻者くらいなものなのだ。しかし、アムロは原作でもラリアの死を10年以上も引き摺っていた(ちなみにここには居ないが、シンジもまた原作ではトウジの負傷やカヲルの死をなかなか上手く消化出来ずに、最後の最後の局面まで引き摺られていた)事からも分かる通り、人格破綻者でもなければ、のび太やジュドーのように悲劇を心の中で上手く消化出来るような強いメンタルを持った人間でもない。

そして、そういったナイーブな性格をしている人間からすれば、のび太は非常に薄情な人間に見える。

(どうしたんだろう、アムロさん?)

アムロの目が冷ややかになったことに気づいたのび太だったが、その原因が分からず、首を傾げる。

当然だ。

そもそものび太とアムロでは心の持ち方が根本的に違うし、年齢より大人びているとは言え、それでものび太は根本的な人生経験は10年ちよつとしかない。

加えて、同じニュータイプ同士とは言ってもニュータイプ能力では心の変動は分かってても、その原因までは分からないのだ。

故に、のび太はアムロの考え方が理解できないし、視線が冷ややかになった理由も分からない。

仮にここに居たのがのび太ではなくアムロと同じような心の持ち方をしているシンジだったか、もしくはのび太がもう少し精神的に成長していたら少しはアムロの内心も理解できただろうが、それはもはやifの話だった。

「・・・ありがとう。励ましてくれて」

言葉の内容とは裏腹に、冷たく言い放って去っていくアムロ。何かが決定的に掛け違った気がする。

のび太はそう思いながら、立ち去るアムロの後ろ姿を呆然と見送っていた。

UC0080年 4月3日 南洋の反乱

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 4月3日 L2宙域 サイド<sup>ム</sup>3 ズム・シ  
テイ 総帥府

「なに!?南洋同盟が反乱を起こしただど!!?」

総帥府でその報告をセシリアから聞いたギレンは思わず叫んでしまふほど驚いた。

南洋同盟。

それはサンダーボルトに登場した宇宙世紀では珍しい宗教勢力であり、原作では一年戦争が終結して7ヶ月が経ったUC0080年8月に反連邦を掲げて反乱を起こしている。

(しまった!奴等の存在を忘れていたな)

そう、実のところ、ギレンを含めた転生者達は南洋同盟の存在を当然知ってはいたのだが、あまり警戒してはいなかった。

何故なら、確かに南洋同盟は宗教勢力であるが為に連邦・ジオン双方にそれなりの影響力を持っているもの、それは諜報面においてであり、保有戦力そのものはそれほど強大なものではなかったからだ。だが、それは原作においての話。

そして、このタイミングで動いたということはネオ・ジオンと何らかの形で繋がっている可能性は高く、下手をすればハイザックが既に供与されているかもしれない事に今さらながら気がついた。

(もう起きてしまったものは仕方がない。まずは詳細を知るのが先だ)

ギレンはそう思い直すと、セシリアに対してこう尋ねた。



「それで、南洋同盟の勢力範囲はどれ程だ？」

「は、はい。丁度、旧インド及び旧パキスタンの領土全般です」

先程、怒鳴られたことによっほど動揺したのか、ドギマギしながらセシリアはそう答える。

「そうか」

そう言いながら、ギレンは考える。

思ったより勢力範囲は狭い。

原作での南洋同盟は東南アジアを中心として極東、インド洋、中東と幅広い範囲に影響力を持っているという描写があったのだが、この世界で実際に蜂起したのは旧インドと旧パキスタンのみ。

もし南洋同盟が原作通りの勢力であるならば、今回の反乱は南洋同盟全てが関わっている訳ではなく、その一部が暴走しただけという推測も出来る。

しかし、それはあくまで推測であり、確定情報ではない。

単純に一部の地域に戦力を集めて反乱を起こさせ、他の地域では諜報活動を中心に活動を行うという南洋同盟の戦略である可能性も十分に存在するのだ。

「それで相手の戦力は？」

「はっ。詳細はまだ調査中ですが、概算でだいたい数は30万程かと」

「30万か。意外と少ないな」

しかし、油断は出来ない。

南洋同盟が保有しているであろうMSの中に纏まった数のハイザックが存在すれば、例えば味方が100万人の兵を有していようと、

十分に脅威なのだから。

「それで肝心のMS戦力は？」

「それについても調査中です。しかし、確認できる限りでもネオ・ジオンのハイザックや旧式のジムシリーズ。更に連邦のザクやドムも少数ですが保有しているようです」

「・・・微妙だな」

ギレンはそう評する。

いまセシリアが挙げた南洋同盟のMSはハイザック以外はかなりの旧式であり、ジオンのザムⅡ改どころか、連邦のゲルググ改にすら勝てない。

更に原作を見るに兵の練度はそれほど高くないと予想されるので、はつきり言ってこれならば潜伏したカラバの方がよっぽど脅威だと言えるだろう。

・・・反乱を起こした場所がネオ・ジオンの勢力範囲の近くで無ければ。

「だが、反乱を起こした位置が問題だ。ここではネオ・ジオンと合流される危険がある」

「しかし、地理的に2つは分断されていますし、旧中国や東南アジアに居る連邦軍が合流を許すとは思えません」

セシリアはそう言うが、それは甘い見通しだ。

南洋同盟は南洋宗という仏教系の宗教を信奉する宗教勢力であり、いまセシリアが言った旧中国や東南アジアにはその南洋宗を信奉する人間も多数居る。

そして、もし仮にネオ・ジオンと南洋同盟が合流することを目指し

て東西で同時に旧中国中部に対して進撃を開始した場合、その通り道に居る住民が一齐に蜂起したりすれば内と外からの挟み撃ちによって連邦軍は確実に窮地に陥るだろう。

そうなれば、合流される可能性は高くなる。

(だが、そもそも合流したとしてなんの意味があるんだ?)

ギレンはふとそう思った。

確かに南洋同盟とネオ・ジオンが合流すれば戦いはもう1ヶ月は長引くだろう。

だが、それだけだ。

鎮圧される運命なのは変わらない。

(そう言えば、南洋同盟は原作ではアナハイムの撃滅が真の目的だったな。この世界でもそうなのか?)

原作の南洋同盟はサイド3を強襲し、コロニーレーザーを奪取、そこから月面のアナハイム・エレクトロニクスを潰して真の平和を実現するという目的で反乱を起こしている。

しかし、この世界ではコロニーレーザーのある位置はサイド3の反対側のL3宙域。

しかも、そこにはルナツーが存在するので奪取は簡単には出来ないし、そもそもこの世界ではソーラ・レイは1度も使われていないので、その威力は知らない筈だ。

とすると、原作通りコロニーレーザーを奪取してアナハイムに鉄槌を加えるといった行動をする可能性は低いし、そもそも目的が原作と同じだという保証も何処にもない。

(まあ、この際、南洋同盟の目的はどうだって良い。とにかく一刻も早くネオ・ジオンを潰さなくてはな)

ギレンはそう考えると、セシリアにこう指示する。

「・・・現地のホワイトベース隊、ペガサス隊、第8特殊小隊に伝えてくれ。南洋同盟は連邦に任せてネオ・ジオン討伐に集中せよ、とな」

「分かりました。しかし、連邦が南洋同盟討伐を要請してきた場合はどういたしますか?」

「丁寧にお断りしろ。宗教勢力に関わるとろくなことがないからな」

「かしこまりました」

セシリアはそう言うと、ギレンの命令を現地に伝えるために一旦部屋から退室していった。

#### ◇地球 東アフリカ

「あの糞坊主共め。こんな時に事を起こしよって」

南洋同盟の反乱の報を聞き、ジャミトフ・ハイマン大佐はそう言い

ながら苦虫を噛み潰したような顔をする。

この戦争は終結に向かっていた。

アフリカ共和国は首都であるカイロが核によって焼かれ、指導者であるジーン・コリニーが死亡したことによって統率を失い、領土を次々と連邦軍に奪われており、既にアフリカ大陸全体の60パーセントがアフリカ攻略軍占領下となっている。

アジア方面では東南アジアの奪還は既に終わり、数日後には華南の制圧が開始される予定となっており、それが終わればあとは詰めとして華北、満州、旧モンゴル東部の制圧を行うだけだった。

しかし、ここで南洋同盟が蜂起したとなると、話は少し変わってくる。

(このままでは戦争が長引く。そうなれば、今度はヨーロッパが蜂起してしまう可能性が高い)

ジャミトフが懸念しているのはヨーロッパの情勢だ。

東ヨーロッパは知つての通り、一年戦争の頃にワルシャワとオデッサに連邦が核を撃ち込んだせいで反連邦感情が高い状態となっていたし、西ヨーロッパでも大西洋大津波による復興の遅れから東ヨーロッパ程ではないものの、反連邦感情が燻っている。

今は無理矢理抑え込んでいるが、南洋同盟の反乱に同調する形で反乱を起こしたとしても不思議ではない。

いや、仮にいま同調しなかったとしても、この戦争が長引けば南洋同盟に続く形で間違いなく反乱を起こすだろう。

そういった事態を防ぐためには、なるべく早く南洋同盟とネオ・ジオンを潰す必要がある。

(幸い、蜂起した南洋同盟の数はそれほどではない。その気になれば短期間で力付くで制圧できるだろう。・・・今の政府の者共に本気で宗教と対立する気があるのなら、だがな)

宗教対立は西暦の時代の頃に地球連邦が発足する過程で大体は解決したものの、宇宙世紀になっても南洋同盟やイスラム圏などが残っていることから分かる通り、宗教勢力そのものは完全に消滅した訳ではない。

そして、アメリカ合衆国の血を色濃く受け継ぐ組織である地球連邦にとつて、宗教勢力との戦いはある意味トラウマであり、これと戦うのには相当な覚悟が必要だ。

なにしろ、下手をすれば政府閣僚がテロの標的になりかねないのだから。

(まあいい。これについては政府の連中に任せるしかあるまい。だが・・・あまり期待はしないでおくか)

ジャミトフはそう思いながら、政府の出方を待つことに決めた。

UCC0080年 4月5日 闇夜の蹂躪

◇宇宙世紀0080年 4月5日 地球 旧タイ バンコク

「准将、今度はシンガポールの方で我が軍の駐屯地が南洋同盟の構成員らしきゲリラ集団によって襲撃されたとの報告が」

「ええい！またか!!」

副官が持ってきた情報に、東南アジア方面軍の司令官——イーサン・ライヤー准将は苛立っていた。

2日前に反乱を起こした南洋同盟に対して、地球連邦政府が取った対応はジャミトフの懸念とは裏腹に討伐という名の強硬策であり、地球連邦は南洋同盟と全面的に対立する道を選んだ。

しかし、その決定によってイーサンの管轄する東南アジア方面では南洋同盟の構成員があちらこちらで軍の駐屯地を襲撃する事態が起こっており、東南アジア方面軍はその対応に追われていた。

「取り敢えず、現地の部隊には自力で撃退するように伝えろ」

「し、しかし。現場からの報告では今回襲撃を行っているゲリラ集団は複数のモビルスーツを持つとのこと。一方で、シンガポール基地にはモビルスーツが配備されていません。ここは救援を送るべきでは？」

敵がモビルスーツを繰り出してきた以上、こちらもMS部隊を救援に向かわせるべき。

そう主張する副官だったが、イーサンの意見は変わらない。

「忘れたのか？この東南アジア戦線にはMSはそれほど多く配備されていない。加えて、我々には3日後に華南侵攻作戦が控えている。こ

ここで戦力を消耗させるわけにはいかん」

「いや、しかし・・・」

「くどい！早く命令を伝えたまえ!!」

「は、はいー」

そう言つて慌てたように出ていく副官。

そして、副官が部屋から出ていった後、イーサンは手を思いつきり目の前の机へと叩き付けた。

(くそっ！面倒なことになった!!)

イーサンは南洋同盟との本格対立を決めた地球連邦政府の面々を内心で恨んだ。

そもそも蜂起したのが旧インドや旧パキスタンであると言っても、南洋同盟の本拠地はこの東南アジアであり、言い換えるところの地が一番南洋同盟の影響力が濃いとと言える。

そして、地球連邦政府が南洋同盟との対立を表明した以上、本拠地であるこの地の南洋同盟の人間がなにもしない訳はなく、先程副官が言った軍の駐屯地への襲撃や破壊工作などのゲリラ攻勢を仕掛け続けていた。

しかも、本拠地があるだけあってこの地の住民は南洋同盟に協力的な者が多く、そのせいで南洋同盟ゲリラの拠点の発見や殲滅がほとんど成功していない。

イーサンが苛立つのも当然と言えた。

・・・もつとも、イーサンも当事者ではなく、政府閣僚と同じ立場であれば彼らと同じく南洋同盟との対立を主張したであろうので、彼に文句を言う資格はあまり無いのだが。



「しかも、この上で華南侵攻作戦を強行しようとするとは」

先程、副官にはああ言ったが、実のところイーサンもこの作戦には反対だった。

なにしろ、南洋同盟が蜂起したせいで東南アジア方面軍は北にネオ・ジオン、西に南洋同盟と2正面で敵と睨み合う状況になってしまっていたし、前述したように足元も南洋同盟のゲリラ活動によってガタガタな上に肝心のモビルスーツの数も100機をちよつと越える程度しか存在しない。

これではイーサンでなくとも、余程の馬鹿でない限りは作戦に反対するだろう。

だが、政府は何を思ったのか、当初の予定通り、3日後に華南侵攻作戦を行うように命令を下している。

戦力が不足していて作戦遂行は困難だと説明しているにも関わらず、だ。

(政治的な判断か、あるいは何か焦りが有るということか。どちらにしろ、実際に指揮を執る私にとっては迷惑な話だがな)

イーサンはそう思いつつも、軍人らしく政府の命令には素直に従い、華南攻略作戦の準備を行うことに決めた。

◇日本列島 トウキョウ

(いったい、どうなっている!?)

暗闇の中。

戦闘服に身を包んだ1人の男は、必死に今の状況を理解しようとしていた。

彼はアナハイム、厳密に言えばマーサ・ビスト・カーバインが保有する私兵部隊の隊長であり、主人であるマーサからある任務を命じられる。

それは臨時大統領であるコウイチ・クロカワの愛人とその娘を確保しろという内容の任務だ。

マーサは既にネオ・ジオンの敗北を既に予期しており、再起を計る事を考えていたのだが、ここで問題となったのは何処に身を寄せるかということだった。

アナハイムはもう駄目だ。

既にメラニー・ヒュー・カーバインが手を回しており、社内からマーサの派閥が一掃されつつある。

ここで帰ったとしても、連邦に犯罪者として引き渡されるのがオチだろう。

ジオンも駄目だ。

自分がネオ・ジオンを支援していたことは既にバレていると思われるので、そちらに身を寄せようとした途端、問答無用に何らかの形で消されるだろう。

残ったのはネオ・ジオンと共に地球に潜伏するか、連邦内に居場所を作るのだが、表舞台に立ちたいマーサは後者を選んだ。

そして、連邦内の居場所を作るためにマーサが考えたのが臨時大統領の愛人と娘を確保し、それを脅しの材料として後ろ楯を得ることだった。

基本的に大統領を含む政府高官の家族はSPなどの重要人物を警護することを専門とした警察官が常に警護している。

政府高官の家族が人質となり、政府高官がその人質を取った人間に無理矢理言うことを聞かせられるといった状況を防ぐためだ。

しかし、愛人に関してはその限りではない。  
当然だ。

そもそもその存在を表沙汰に出来ないのだから。

だからこそ、警備が存在しない愛人とその家族を人質にしてコウイチを脅すというマーサの策は、かなり卑劣ではあれど有効だと言える。

もつとも、肝心のコウイチが愛人の家族を切り捨てたりすればそれで終わりなのだが、マーサは事前の資料からその可能性は低いと見ていたし、そもそもコウイチ・クロカワはあくまで臨時の大統領であり、この策が上手く行ったとしても近いうちに切り捨てるかもしれない存在だ。

成功すれば儲けもの、仮に失敗したとしてもその時は別な戦略を考えれば良い。

マーサはそのように考え、彼らをコウイチ・クロカワの愛人宅であるクジヨウ家へと送り込んだのだ。

・・・しかし、ここで送り込まれた部隊はある致命的なミスをした。それは母であるトウカ・クジヨウと娘であるハルカ・クジヨウが一緒に居る時に襲撃してしまったことだ。

この判断は普通なら間違っていない。

確かに別々に拉致した方が確実だが、纏めて拉致してしまった方が手っ取り早いというのも確かだからだ。

しかし、もしトウカ・クジヨウを知る諜報組織が彼女達を拉致する

事を考えたとしたら、絶対に前者のやり方を選んでいただろう。

何故なら、トウカ・クジヨウという女性は「普通」の枠組みには到底入らないのだから。

そして、作戦開始から1分少々。

12人だった襲撃部隊はその3分の2が殺られ、残ったのは隊長である彼を含めた4人のみとなっていた。

「わ、わあああああ!!」

残った4人の内の1人が恐怖に耐えられなかったのか、悲鳴を上げながらその場から逃走しようとする。

しかし、その悲鳴もすぐに聞こえなくなった。

トウカがその悲鳴を上げた男に向かってナイフを投擲し、その男の脳天を貫いたからだ。

これで残ったのは3人のみとなった。

(化け物め！こんな奴がターゲットなんて聞いてないぞ!!)

隊長はそう思いながら、ターゲットの情報を詳細に教えてくれたかった主人を内心で盛大に罵りつつ、同時にこんな任務を引き受けてしまったことを後悔した。

しかし、彼もプロ。

目の前の一方的な蹂躪劇（しかも、自分が狩られる側）に恐怖を抱きつつも、思考停止はせずに必死に生き残る方法を考えようとする。

だが――

「がつー！」

「ぐえあ!!」

そんな余裕をトウカが与える筈もなく、瞬く間に2人を殺し、生き

残ったのは隊長のみとなった。

そして、彼にもまたトウカの凶刃が迫る。

(ちくしょう！これで終わりかよ)

そう思った直後、隊長の喉はトウカのナイフによって切り裂かれ、これが致命傷となり、彼は10秒程経った後に死んだ。

——こうして、クジヨウ家へと送り込まれたマーサの私兵部隊は全滅し、彼女のクジヨウ家母娘拉致計画は完全に頓挫することとなった。

U C 0 0 8 0 年 4 月 8 日 華南の戦い

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0080年 4月8日 地球 華南

「このパイロット、かなり強い!!」

野比のび太特務少尉はそう言いながらガンダム改B型の機体を必死に動かし、敵MS——リック・ディアスのビームライフルから放たれるビームの猛攻をかわし続ける。

華南に侵攻を開始した連邦軍と歩調を合わせる形で派遣されたジオン軍の部隊もまたそれぞれ進撃を開始した。

のび太の所属するペガサス隊は敵のMS部隊と接触したのだが、なんの因果かそのMS部隊の中にケン・ビーダーシュタット少尉の指揮する小隊が含まれていたのだ。

そして、現在、のび太はケンの乗るリック・ディアス（ちなみにケンの本来の機体であるガンダムⅡはまだ足の修理が終わっておらず、後方に移送された）と一対一で対峙していたのだが、かなり苦戦していた。

当然だ。

ガンダム改B型はガンダム・タイプとは言っても性能は原作アレックスに毛の生えた程度であり、グリプス戦役時代に活躍したリック・ディアスと比べると流石に性能が劣る。

加えて、リック・ディアスのパイロットであるケンもオールドタイプのの中ではかなりの腕前を持っており、幾らのび太が優れたニュータイプであると言っても自分より優れた機体とパイロットを前にしては苦戦するのは必然と言えた。

まあ、仮にのび太の乗っている機体がZガンダムだったら今の状況は真逆になっていただろうが、それはあくまでifの話であり、のび太が直面している「現実」ではない。

「いー。」

だが、のび太もやらねばならない。

機体を上手く滑らせながら、ビームライフルで応戦する。

しかし、それはあっさりとかわされてしまう。

(やっぱり、ビームライフルじゃ射線を読まれるか)

のび太は自機の向けるビームライフルの射線が敵に読まれていることを察する。

命中率が高く、他者にはほとんど真似できない射撃技術を持つのが太であったが、当然弱点も存在する。

それは焦って撃つる時には全く当たらないこと(逆に言えば、焦っていないければどんな姿勢や状況下で撃つても95パーセント以上の確率で当たる)、そして、正確すぎるが為にその射線が簡単に読まれてしまうことだ。

もつとも、後者の弱点はこれまでの戦闘でのび太の方も既に分かっており、動きながら撃つて射線を分からなくするなどの工夫も凝らしていたのだが、その小細工もケン程の技量を持つ人間が相手では通用しないようだった。

(厄介な相手だな。せめて味方の援護が有れば良かったんだけど、他の奴と戦ってるから無理だし・・・)

そんなことを思いながら、目の前のリック・ディアスとどう戦うか必死に頭を回転させていた時、相手のリック・ディアスが突如、ビームライフルを捨ててビームサーベルを構え出した。

(なんだ？弾切れか？でも、それにしてもはなんかおかしいような・・・)

違和感を感じながらも、敵がビームライフルという遠隔攻撃手段を捨てたというのは確かであったので、そのままビームライフルを向け

て発砲しようとする。

だが、その時――

「!? 後ろか!」

のび太は後ろからの殺気を感じ、咄嗟に機体を後ろへと振り向かせ、その存在にビームライフルの銃口を向け、そのまま引き金を引いた。



「ジェイク!」

突然、後方へと振り返ったガンダム改B型のビームライフルによって動力源を撃ち抜かれ、爆発四散した部下のジェイク・ガンズ軍曹が乗るハイザックを見ながら、ケンはずいぶん叫んだ。



(くそっ！直前まで気づいていなかった筈なのに。これがニュータイプという奴なのか!!)

そう、先程、ケンのリック・ディアスがビームライフルを捨ててビームサーベルを握ってその場から動かなかったのは、ガンダム改B型の意識をこちらに集中させ、その間に偶々ガンダム改B型の後ろから来たジェイクの乗るハイザックにガンダム改B型を撃破させるという算段を立てていたからだ。

そして、それは直前まで上手く行った。

仮にのび太にニュータイプ能力が無ければ、のび太はここでこの世から退場することになっていただろう。

しかし、現実はのび太のニュータイプ能力による殺気の察知によって、ケンは逆に部下の1人を失ってしまうこととなってしまった。

(悔っていたつもりはなかったが、ここまでとはな。こうなったら、接近戦でやるしかない)

自機のビームライフルは既に捨ててしまった。

となると、ビームサーベルを使った白兵戦でガンダム改B型を仕留めるしかない。

そう考えたケンは機体をダッシュさせ、ガンダム改B型に肉薄していく。

それに気づいた敵のガンダム改B型が慌ててこちらに向き直るが、向こうのビームライフルが発砲するよりこちらのビームサーベルの刃が届く方が早い。

「もらったー！」

そう叫びながら、ケンは勝利を確信するが、それは直後のガンダム改B型の行動によって覆されることになる。

「なっ!?!ビームライフルを投げただと!」

そう、自分が持っていたビームライフルをこちらに向けて投げたのだ。

咄嗟に反応してそのビームライフルをビームサーベルで斬ったケンのリック・デياسであったが、その直後にビームライフルに残っていたエネルギーが爆発し、至近距離に居たリック・デياسはよろめいてしまう。

「ぐっ!」

そんな苦悶の声を上げながらも、ケンはすぐさま機体を建て直し、この隙を突いて煙の中から現れるかもしれないガンダム改B型に備えて身構える。

しかし、ガンダム改B型が煙の中から現れることはなく、そのまま煙は晴れていく。

だが――

「居ない。何処だ?上か?」

その先にガンダム改B型は居なかった。

ならば、正面と見せ掛けて上から奇襲する作戦かと咄嗟に上を見るが、そこにも居ない。

(逃げたのか?)

そう思ったケンだったが、直後に嫌な予感を感じて咄嗟に機体を横に移動させる。

――しかし、背後から飛んできたビームによってケンのリック・デياسは右肩を貫かれることとなった。

「勘の良い相手だ。もしかして、ニュータイプなのかな？」

◇

のび太はそう言いながらも、内心ではこの一撃で仕留められなかった自分の射撃の未熟さに舌打ちする。

あのビームライフルを投げたの目眩ましをした際、のび太は当初、ビームサーベルを引き抜いて煙の中を突っ込んで突撃するか、それとも上から奇襲するかを考えていた。

が、どちらにしても上手く行くとは思えず、他に何か方法は無いかと考えていた時、先程、リック・ディアスが捨てたビームライフルの存在を思い出したのだ。

そして、煙に紛れてリック・ディアスの後方へと回り、そこからビームライフルを拾ってリック・ディアスを狙い撃ったのだが、結果は見ての通りリック・ディアスの右肩が撃ち抜かれて、その右腕が切断されるだけに留まった。

（折角のチャンスだったのに……まあいいや。こっちの方が圧倒的に有利なのは変わらないし）

なにしろ、こちらにはビームライフルが有って弾丸も数発残っている。

対して、向こうは右腕が切断されて左腕のみな状態となっている上にビームサーベルも右腕が切断された際に取り落としてしまった。

取ることも出来るが、この状況でそんな隙を晒してしまえば、ガンダム改B型が構えるビームライフルの餌食となる。

もつとも、逆に言えばビームライフルの弾丸は残り数発しかないし、更に言えばマガジンもガンダム改B型が使っているものとは違うので、再装填も出来ない。

おまけに向こうはこちらの射撃を悠々とかわすほどの腕の持ち主。こちらが圧倒的に優位な立場にあるからと言って油断は出来ない。そう考え、のび太は相手の出方を待つ。

が、この慎重な対応が結果的に敵であるケンの命を救うことになった。

「！ 敵か!!」

そう、ガンダム改B型のセンサーが敵の援軍らしきハイザック3機を捉えたのだ。

それはケンの部隊とは全く別な部隊であったが、のび太にとって敵であることに違いはない。

「ここまでだな。他の味方と合流しよう」

今の状態でこれ以上交戦するのは危険。

そう考えたのび太は近くに居るであろう味方に合流するため、ガンダム改B型のブースターを吹かし、この場から離脱しようとする。

相手も深追いは危険だと思ったのか、のび太の機体を追ってくることはなく、のび太のガンダム改B型はこの戦線からの離脱に成功した。

U C 0 0 8 0 年 4 月 1 1 日 連邦の策略

◇宇宙世紀0080年 4月11日 L2宙域 サイド3 ズム・シテイ 総帥府

「華南の制圧は完了、か。思っていたより、少し早かったな」

ギレンは先程セシリアが持ってきた報告書を読みながら、そんな感想を口にする。

連邦軍が華南を制圧したのは昨日の深夜だ。

しかし、ギレンの予想では華南の制圧はもう少し時間が掛かると見えていた。

何故なら、華南が陥落するということはネオ・ジオンにはもう後がなくなってしまうという事でもあるからだ。

だからこそ、必死の抵抗を行つてくると考えており、侵攻開始から僅か3日で華南が陥落するという結果はギレンからすれば少し予想外だった。

「まあ、早く終わったのならそれで良い。その分、華北での戦いは激戦になるだろうがな」

ギレンはここまで早く華南が陥落したのは、ネオ・ジオンの温存を計り、比較的早く華南以北に戦力を引き上げさせたからだと予測していた。

となると、華北への進撃の際にはネオ・ジオンは本拠地であるペキンを守るために背水の陣で挑んでくると考えられるので、華北での戦いはこの戦争最後の大決戦となるだろう事は容易に想像がつく。しかし、それに対してギレンに緊張の色合いはない。

何故なら、華北での決戦がどう進むにしろ、連邦軍の勝利はほぼ決まっているも同然なのだ。

まあ、コロニーレーザーのような一発逆転出来るような兵器を持つ

ていれば話は別だが、その可能性はほぼ無いと見て良い。

(いや、そう考えるのは早計か)

だが、可能性が僅かではあれどもまだ残っているのも事実だった。なにしろ、原作ではジオン軍はソーラ・システムの存在を実際にソロモンに使われるまで気づけなかったし、連邦軍もまたコロニーレーザーを実際に使用されるまで気づくことが出来なかった。

もつとも、コロニーレーザーの場合は開発から実戦投入までの期間があまりにも早すぎたので、連邦軍が掴めなかったのも無理はない話なのだが。

まあ、そういうわけで敵が一発逆転の大量破壊兵器を用意している可能性も全く無い訳ではなかったのだ。

とは言え、それを考慮したとしてもギレンに焦りの感情は全く無い。

何故なら、そうなったとしてもジオンは戦力をほとんど消耗しないからだ。

現在、重力戦線に展開しているジオン軍はガルマの北米方面軍とランバ・ラル隊、ペガサス隊、ホワイトベース隊、第8特殊小隊だが、この内、連邦軍に同行して華北の決戦に参加するのは北米方面軍とランバ・ラル隊を除いた三部隊のみ。

この三部隊はいずれも精鋭部隊なので、失うと確かに痛いけど、ジオン軍全体からしてみれば大した数ではない。

つまり、仮に大量殺戮兵器が出てきたとしても、消耗するのはほとんど戦力の中核を担う連邦のみなのだ。

いや、むしろ、連邦軍が消耗してくれるほど、戦後世界でジオンの影響力は高まると言っても良い。

(おっと、いかんいかん。こんなゲスな事を考えてはいずれ破滅してしまうな)

ギレンは慢心していた自分に気づき、改めて気を取り直し、慢心していた自分を戒める。

そして、次に気になったことをセシリアへと尋ねた。

「そう言えば、連邦は南洋同盟に対してどう対応するつもりなのだ？あれから全く動きがないが」

現在、連邦と南洋同盟の戦いは膠着しており、事実上のフアンニールウォーまやかしの戦争状態となっている。

とは言え、南洋同盟がはつきりと連邦に弓を引いた以上、そんな状態が何時までも続く筈もない。

ネオ・ジオンと連邦の戦いが終結する前に南洋同盟は必ず何か仕掛けてくるとギレンは睨んでいた。

「はっ。どうやら連邦と南洋同盟のトップはなにやら交渉を行っているようで、現在は一時的に停戦しているようです」

「・・・普通に考えれば、交渉は連邦側の時間稼ぎ。そして、交渉している間にネオ・ジオンを落として、それから南洋同盟を改めて叩き潰すというのが連邦の魂胆なのだろう。が、それは当然、南洋同盟の方も気付いている筈だ」

そうなる、1つ疑問が浮かぶ。

何故、南洋同盟が連邦の茶番に付き合っているのだ。

こんな単純な時間稼ぎを見破れないほど、南洋同盟の首脳部も馬鹿ではないだろう。

となれば、それに付き合っているには相応の理由がある筈だ。

(まさか、連邦と何か裏で交渉をしているのか?)

ギレンはその可能性に思い至る。

原作では南洋同盟の目的は反連邦活動と見せ掛けたのアナハイムの殲滅だった。

この世界でも全く同じかは分からないが、もし原作と同じアナハイムの殲滅が目的であれば、何らかの宇宙に出る手段が必要になる。

そして、連邦が停戦の代償に南洋同盟に対して宇宙に出る手段を用意してもなんら不思議ではない。

なにしろ、連邦内には反アナハイム派の人間も居るし、そもそも現在宇宙に軍を展開しているのは主にジオン軍だ。

仮に南洋同盟が宇宙で何かやらかしたとしてもその時は必然的にジオン軍が対応しなければならぬ。

（“自分だけ楽をしようとするのは許さない”という連邦のメッセー  
ジか。流石、連邦の古狸だな。だが、そうと分かれば、その思惑は外  
さして貰おう）

そう考えたギレンは、セシリアに向かってこう言う。

「セシリア、1つ頼みたいことがある」



◇地球 ニホン列島 トウキョウ 執務室

「では、これにて失礼します」

南洋同盟の外交担当官はそう言いながら、臨時大統領であるコウイチ・クロカワの執務室から退室していく。

その様子を見届けた後、コウイチは補佐官の男にこのような言葉を漏らす。

「・・・本当にこれで良かったのかね」

「宇宙への移動手段を用意したことですか？」

コウイチの呟きに、補佐官の男はそう返す。

しかし、コウイチはその言葉に首を横に振る。

「いや、そうではない。私だって戦後のジオンの戦力が少しでも削れるには賛同しているからね。しかし、ソーラ・システムを提供したのはやりすぎではないかと思っている」

そう、ギレンの読み通り、連邦は南洋同盟と裏で交渉しており、ネオ・ジオン攻略の間、本格対立しない代償として宇宙への移動手段を提供していた。

しかし、それだけではなく、ソーラ・システムをも譲渡しようとしていたのだ。

「仕方ありません。まさか宇宙戦艦を譲渡するわけにはいきませんか  
ら」

南洋同盟は反乱時、連邦軍の宇宙戦艦を確保することはしなかった。

これは一年戦争の後期に建造した艦艇のほとんどをエウーゴが奪取してしまったのと、ペガサス滲獲に引き続いて面目が丸潰れになってしまった連邦宇宙軍が残った艦艇に嚴重な警備体制を敷いており、それを見た南洋同盟が奪取を諦めたからだだったが、兎も角そういうわけで南洋同盟は宇宙戦艦を一隻たりとも保有していなかったのだ。

そして、幾らジオン共和国の戦力を削らせるために宇宙に南洋同盟の戦力を上げると言っても、開戦当初は持っていなかった筈の連邦の宇宙戦艦を南洋同盟が保有していれば連邦から譲渡されたもの同士ぐにバレるだろうし、仮に「盗まれた」と言って追求をかわそうとしても今度はあんな巨大なものを盗まれた不甲斐なさをなじられて損害賠償を請求されることになる。

それではあまり意味がないが、かといって宇宙戦艦無しのモビルスーツだけでジオンの戦力を削るなど不可能に近い。

ならば、上手くやれば一度に多数の敵を撃破できるソーラ・システムを供与しようということになったのだ。

「それより本当なのでしょうか。南洋同盟のネオ・ジオンとの同盟の真の目的はジオン公国、いえ、共和国への復讐というのは」

そう、実は南洋同盟が宇宙への移動手段を要求した時、南洋同盟側の外交官はその目的をジオン共和国への復讐だと言っていた。

勿論、この話には一応筋が通っている。

なにしろ、原作より少ないとはいえ、ジオンによって殺された連邦軍人の数は1000万人近く居るし、南洋同盟信者も戦争に参加していたので、当然の事ながら死者が出ていた。

しかし、復讐しようにも連邦とジオンは講和してしまっている。

この状況から復讐など出来る筈もない。

だからこそ、一旦、連邦から独立を表明したのだ。

そして、同時に連邦と裏で交渉し、宇宙への移動手段を入手。

最終的にはジオン共和国に対する復讐を行うことが目的というのが先方の言い分だった。

そう言われれば、不自然ではないようにも思える。

だが、補佐官の男は南洋同盟の目的が本当にジオンへの復讐なのか疑問に思っていた。

根拠は特に無い。

強いていうなら勘のようなものであるために今まで口にしなかったのだが、いざ南洋同盟との交渉が成立すると、改めて不安に思ってしまう口に出してしまったのだ。

「他の目的があるとしても言うのか？」

「いえ、ただの勘ですよ。特に根拠があるわけではありません」

「・・・そうか。まあいい。とにかく、南洋同盟の連中とジオンの連中が宇宙で戦っている間に我々はネオ・ジオンを潰す事に集中しよう。それから改めて南洋同盟を潰す。上手く行けば、ジオンの連中にも恩を売れるかもしれんな」

コウイチはそんな悪巧みを口にする。

もつとも、ジオンに恩を売ることに関しては上手く行くとは全く思っていなかったが、これで連邦が対ネオ・ジオンに集中できると言うのも確かだ。

——しかし、この時、彼らは知らなかった。

“アナハイムの撃滅”という南洋同盟の真の目的を。

その事実を彼らが知るのは戦後になってからだった。

UC0080年 4月13日 スーパーガンダム

◇宇宙世紀0080年 4月13日 地球 華北 ネオ・ジオン某基地

「これが改装されたガンダムⅡか」

華北に存在するネオ・ジオンの秘密基地。

そこではケン・ビーダーシュタット少尉がメイ・カーウィン技術少尉によって改装されたガンダムⅡの姿を見て感嘆の声を上げていた。

新たに改装されたガンダムⅡは背中にモビルアーマーのようなものが装着されており、そこには外付けされたジュネレーターと大型のビームライフル——ロング・ライフルが搭載されている。

その姿をもし仮に転生者が見ていたとしたらこう言うだろう。

スーパーガンダム、と。

「どう、隊長。気に入った？」

「ああ、火力は明らかに向上しているな。それは見れば分かる。しかし、これでは取り回しが悪くないか？」

ケンはそんな感想を口にした。

実際、このロング・ライフルは背後の外付けされたジェネレーター装備から直接エネルギーを供給しなければならぬ関係上、ジェネレーター装備と連結する必要があり、それ故に真っ直ぐにしか撃てないという欠点がある。

それを考えれば、ケンが口にした懸念も決して間違いではない。

「うん。最初は私も特殊なワイヤーを通してエネルギー供給するっていう方法を取って取り回しをもう少し良くするつもりだったんだけど、時間が無かったから・・・」

「つまり、これは間に合わせの装備という訳か」

「そうなの。ごめんなさい」

「いや、メイが謝ることはない。むしろ、限られた時間の中でよくやってくれた」

ケンはその言つてメイの頭を撫でる。

「それで、これはどれくらいの頻度で撃てるんだ？」

「5秒に一発くらいかな？でも、銃身の冷却の手間を省けば2、3秒に1発のペースで撃てると思うよ。」

ロング・ライフルはメガ・バズーカ・ランチャー程ではないが、威力がとても強力（ちなみにジェネレーターを複数用意すればメガ・バズーカ・ランチャー並みの威力にすることも可能）であり、仮にモビルスーツの胸の部分に命中すればその部分に穴が空くどころか、胴体丸々吹っ飛ばす程の威力があった。

しかし、その反面、発射時に強力なエネルギーが銃身内に籠るため、銃身を冷やすための冷却装置が設けられており、その機能をカットすればメイの言ったように連射速度は速くなるのだが、その代わりに銃身寿命が極端に短くなるという欠点も抱えている。

原作のロング・ライフルではこのような問題は起きなかったのだが、十分に手間と時間を掛けて作られた原作とは違い、この世界でのロング・ライフルは時間がないために有り合わせの資材で作られた間に合わせものであり、原作と同じ信頼性を期待するには無理があった。

むしろ、性能面だけでも原作と同じにしたメイの手腕は凄すぎると言える。

「そうか。だが、それでは結構厳しいな」

「どうして？」

「あの灰色のガンダム改を葬るにはこれでも足りないからだ」

ケン は 苦い 顔を しなが ら そう 言っ た。

なにしろ、ケンは既にあの灰色のガンダム改に2度も苦渋を舐めさせられている。

1度目は不意打ちによってガンダムⅡの両足が持つていかれ、2度目に至ってはガンダム改より性能が勝る筈のリック・ディアスに乗っついていながら正面から叩き潰され掛けた。

そんな経緯もあってケンはこの改装されたガンダムⅡ改で本当にあの灰色のガンダム改に勝てるのかどうか、はつきりとした自信が持てなかったのだ。

(いかなんな。弱気になりすぎてる。これでは戦う前から負けだな。それにこの機体を改装してくれたメイにも失礼に・・・ん?)

そんなことを思いながら、ふとメイの方に顔を向けたケンは、そこで彼女の顔がいつの間にか青ざめていることに気づいた。

「おい、どうしたんだ？メイ。体調が悪いのか？」

「い、いえ」

「じゃあ、さっきの私の発言に何か粗相があったのか？それなら謝るが・・・」

「違います!!」

メイは叫ぶように否定し、その突然の大声によってケンはずむ。思わず固まる。

更に周囲に居たパイロットや整備員も何事かと2人の方に視線を向けていた。

「あつ。ご、ごめんなさい！」

自分が怒鳴るように叫んでしまったことに気づいたメイはいたたまれなくなつたのか、ペコリと頭を下げると、慌ててその場から立ち去っていく。

そして、そんなメイの様子をケンはずむしながら見送っていた。

◇南シナ海北部 洋上 フェリー甲板上

「助かったわ、ステファニー。船のチケット、なかなか取れなかったから」

黒髪の美女——トウカ・クジヨウは金髪の女性——ステファニー・ルオに対して礼を言う。

「いえ、それは良いのよ。でも、あなたがあんなところに居たのには驚いたわ。ニホンで静かに暮らしているって聞いたのに。いったいどうしてこんなところに？しかも、娘まで連れて」

ステファニーは少し離れた船の甲板上で走り回っているトウカの娘——ハルカ・クジヨウの姿を見ながらそう尋ねる。

このフェリーの行き先はニューホンコンであるが、そこは言うまでもなく最前線に近い位置に存在する町。

加えて、マーサの手によってルオ商会が壊滅してしまったことで治安も以前よりかなり乱れており、とてもではないが女子供が入って良い町では無くなっている。

もつとも、トウカが通常の女性の枠に入らないことはステファニーも知っているのも、もし彼女一人と遭遇したのであれば、何か仕事で行くんだと思い、深く突っ込みはしなかっただろう。

しかし、娘を連れていくのであればそういう意図で行くのは明らかに違うことが分かるので、彼女の友人としてどうしても気になってしまったのだ。

「・・・ちよつとトウキョウに居られなくなっちゃってね」

「なに？あの男と喧嘩でもしたの？」

「そんなんじゃない。第一、それくらいだったら、わざわざ危険なニューホンコンには行かないわよ。正体不明の武装勢力に襲われたの」

「武装勢力？」

「そう。それもアサルトライフルや手榴弾、拳銃で完全武装した特殊部隊っぽい男達に。まあ、動きからして連邦軍の特殊部隊じゃないっ



「て事だけは確かだったけどね」

「・・・なるほど。確かにそんな連中に襲われたんじやニホンに留まっている訳にもいかないわね。あなたならその特殊部隊が100人単位で襲ってきたてもなんとかなりそうだけど、子供を人質に取られたりしたらそうもいかなそうだし。でも、治安が不安なニューホンコンでもそれは同じ・・・いや、待って。もしかして」

「相変わらず察しが良いわね。その通りよ。私達は宇宙に出るつもり」

「・・・本気なの？」

ステファニーはほんの一瞬だけトウカの正気を疑った。

確かにニューホンコンにはシャトル用打ち上げレールが存在しており、宇宙に出ることは出来るし、混乱続きの地球と違って宇宙は治安はジオンが制宙権を完全に掌握しているお蔭で比較的安定している。

しかし、トウカとハルカは仮にも地球連邦大統領の愛人とその娘という地球連邦政府にとって表沙汰になるとかなり不味い立場だ。

ジオン側に知られれば人質として捕らえられる危険性もあるし、そもそも連邦側が素直に宇宙に出すとも思えない。

「ええ、本気。ああ、連邦の方には話を通してあるから大丈夫」

「でも、宇宙にはジオンが・・・」

「ジオンはそもそも私の存在すら知らないわ」

トウカはステファニーの言葉を遮る形でそう断言するが、実のところこれは間違っていない。

ジオンは彼女の存在を全く知らないのだ。

と言うのも、ジオンは戦前、各サイドを素早く占領するために各サイドや月への諜報を重視しており、地球への諜報網設置は後回しになっていた。

そして、ジオンが一通りの諜報網を地球に設置する頃には彼女は活動をとくに終えており、その結果、ジオン諜報部は「最強の戦闘員」の存在こそ知っていたものの、掴んだ情報は噂程度であり、その脅威どころか、性別すら把握していない始末だったのだ。

ちなみにこの情報をトウカがどうやって知ったのかというところ――

「これはニホンを彷徨っていたジオンのネズミを数匹狩って手に入れた情報だから確かよ。彼らは私の情報を全く知らなかったわ。もしジオンがニホンに特殊部隊を送ったのだとしたら、それらの諜報員に連絡が入っていないのは可笑しいでしょう?」

特殊部隊が敵地で活動するのには、現地に潜入している諜報員か、あるいは協力者が必要不可欠だ。

その為、特殊部隊が活動する敵地で現地の諜報員がその特殊部隊のターゲットを知らないなどということは基本的にあり得ない。

その事からトウカは襲ってきたのはジオンの特殊部隊ではないと判断していた。

・・・ちなみにトウカが捕らえた諜報員達は、既にその全員が彼女によって始末されている。

「それはそうだけど・・・」

「それに地球で安全な場所はまだ無さそうだし、だったら一か八かで宇宙に出るしか道はないわ」

「・・・」

ステファニーは友人の言葉に沈黙するしかなかった。

なにしろ、今の地球は何処で核兵器や毒ガス、化学兵器が使用されても可笑しくない情勢となっている。

であれば、トウカの言うように宇宙に出るといふ選択肢がそういった情勢から逃げ出す唯一の手段であることは誰の目にも明らかだった。

(それでも普通の人ならそこまで思い切った判断は出来ないものなんだけど、それをやってしまう点は流石トウカと言ったところか。それにしても、トウカ達を襲ったっていう愚かな人たちはいったいどんな輩だったのかしら)

そう思うステファニーだったが、彼女は知らない。

トウカ達を襲った特殊部隊が彼女の父親の仇であるマーサ・ビスト・カーバインの部下であったということ。

UCC0080年 4月15日 逆攻勢案

◇宇宙世紀0080年 4月15日 地球 ニュー・ホンコン M  
S格納庫

華南侵攻作戦終了から数日。

作戦の1つを終了させたペガサス隊は、これからやって来るであろう華北侵攻作戦に向けての補給と乗員の英気を養うためにニュー・ホンコンへと立ち寄っていた。

「しかし、まさかこのタイミングでホワイトベース隊が宇宙に帰っちゃうなんてな。まったく、上も何を考えているのやら」

バーナード・ワイズマン軍曹は格納庫の隅っこでそんな愚痴を溢す。

その発言は完全に上層部批判そのものなのだが、今彼の近くには軍規に煩くない、あるいはその内容をよく分かっていない野比のび太特務少尉と碓シンジ特務准尉しか居ないので、2人が上官に告げ口でもしない限り、咎められる心配はない。

「仕方ないですよ。上からの命令でしたし。それに代わりにランバル隊が来るって話でしたし、戦力的には十分穴は埋められますよ」

「信用できんのか？」

バーニイは不機嫌そうにそう尋ねるが、それも当然の反応だった。

なにしろ、のび太やバーニイ、更にここには居ないがペガサス隊の隊長であるクルト中尉は半年ほど前にそのランバル隊と交戦しており、その時の戦闘で少数ではあるが仲間も失っているのだから。

まあ、そうでなくとも敵と味方を行ったり来たりしている人間など、到底信用できないだろうが。

「・・・おそらく。まあ、本当に信用できるかどうかは実際に会ってないと分からないでしょうけどね」

「そりやそうだな」

のび太の言葉にバーニイは納得したように頷く。

ちなみに彼らの横で一連の話を聞いていたシンジは、自分が来る前のペガサス隊とランバル隊の間に何か因縁があることを察し、内容が気になりはしたものの、地雷だと思つて話に突っ込むことはしなかった。

「それより僕が気にしているのは次の戦いですよ。確か華北でしたっけ？ネオ・ジオンがそれなりの戦力を残している今、そこでの戦いは過酷なものになりそうですからね」

「だろうな。お偉いさんは既に勝った気でいるんだろうが、実際に戦う俺達からすれば、こんな大詰めな戦いは堪ったものじゃねえな」

のび太の指摘に対して、バーニイは吐き捨てるようにそう言った。

基本的に追い詰められた敵の反応は勝ち目がないと意気消沈して逃げ腰となるか、それとも逆に奮起して死兵と化し、火事場の馬鹿力を発揮してこちらに向かつてくるかのどちらかだ。

今回の華北攻略作戦の際のネオ・ジオン軍がどちらに当てはまるのかは分からないが、少なくとものび太とバーニイは後者だと睨んでいた。

と言うより、幾ら追い詰められているからと言っても実際に敵が来ている中で逃げ腰になるというのは総大将が逃げ出す、あるいは求心力を大きく失ったといった状況でもない限りはあり得ない。

なので、今回の華北侵攻作戦は対ネオ・ジオン戦の最後の戦いであると同時に、実際に戦うのび太達にとっては死兵と化したネオ・ジオン軍と戦わなければならない過酷な戦場となる可能性が高いという

事を意味している。

そんな風に2人が話していた時、今までその近くに居ながら話に加わってこなかったシンジが口を挟んできた。

「・・・あの。すみません」

「ん？どうしたんだ？」

「いえ、今までの話を聞いていれば、こちらから向こうを攻める前提の話ばかりしていますが、逆に向こうがこっちを攻めてきた場合はどうなんでしょうか？」

「向こうからこっちって・・・ネオ・ジオンが俺達へ攻勢を仕掛けてきた場合って事？」

「うん。向こうに残っている兵力とかを考えたら、可能性としては有りそうかなって」

そう、現在進行形で追い詰められているとはいえ、これまでの戦いで戦術的に致命的な打撃を受けていないのもあってネオ・ジオンは未だ数十万人の兵力を擁する一大勢力だ。

もう一度攻勢を仕掛けるぐらいの力は残っているし、そもそも追い詰められてから攻勢を行う例は歴史上無かったわけではない。

「それは・・・そう言えば、考えてなかったなあ」

「だが、流石にないだろ。もしそんな動作があったとしたら、連邦軍の情報部が察知している筈だしな」

「そうですかね？意外と察知していないのかもしれないよ？」

シンジはそんな冗談混じりな言葉を口にしているが、その言葉が真実であつたことに気づくのはまだ先の話だつた。

◇東アジア ペキン

「閣下。満州、旧モンゴル東部に配置された兵力の撤退と華北への集結が完了しました」

「ご苦勞。それでオペレーション・アインハルトはどれくらいで発動可能なのだ？」

「はっ。戦力の再配置を含めて明後日には発動可能です」

「・・・分かった。下がって良い。少しだけ休んでいてくれ」

「はい、失礼します」

そういつて退室していく副官の後ろ姿を見届けた後、閣下と呼ばれた男——アンリ・シュレッツァー准将は厳しい視線で表紙に『オペレー

シヨン・アインハルト作戦計画要綱』と書かれた作戦計画書を見る。  
オペレーシヨン・アインハルト。

それはまず最初に満州と旧モンゴル東部を含めたネオ・ジオンの全兵力を華北へと秘密裏に集結させ、次にその兵力を南下させて連邦軍の不意を突く形で打撃を与え、最終的に華南の奪還を行うという主旨の作戦であり、そこでの勝利を対価に連邦と講和を行うというのがこの作戦の目的でもあった。

(まさか、ここまで追い詰められるとはな)

アンリはそう思いながら、苦笑いをする。

ネオ・ジオンが蜂起した当初、彼はこの戦いによって完全勝利は無  
いまでもジオン公国を打倒することは十分に可能だと考えていた。

なにしろ、ジオンと直接戦うことになる宇宙戦力はエウーゴだけ  
もかなりのものであったし、それに離反した戦力が合わさればジオン  
と十分に対抗可能。

そして、対抗期間が長くなればなるほど、ネオ・ジオンが掲げたキャ  
スバル・レム・ダイクンという御旗によって求心力が落ちたザビ家の  
ジオン公国から士気の低下による投降者や離反者が続出していき、最  
終的にはネオ・ジオンとジオン公国の戦力は逆転し、サイド3はダイ  
クン派の手に落ちる。

少なくとも開戦当初、アンリはそんな算段を立てながら戦いに望ん  
でいたのだ。

しかし、現実を考えていたよりも非情であり、ジオンからの離反者  
はソロモンの一部だけに留まった。

まあ、これは転生者であるザビ家の面々があらかじめ反乱を想定し  
て将から兵、民衆に至るまでのダイクン派を出来る限りこの東アジア  
に集めた結果であったのだが、その事をアンリは知らない。

(しかし、キャスバル様を逃がすためとはいえ、このような博打にもな  
らない策をやらなくてはならないとは・・・兵達が聞い



たらなんと言おうだろうな)

そう、実のところ、アンリはこの作戦が成功するとは露ほども思っていないかった。

確かに負けている側である今のネオ・ジオンが連邦に対して攻勢を行えば不意を突くことは可能だろう。

仮に連邦軍の情報部がネオ・ジオンの動きを事前に察知していたとしても、攻撃側だった連邦がいきなり防衛側に立場を変えて上手く立ち回れる筈がないのだから。

だが、それも連邦軍が本格的に防衛体制を整えたら終わりであり、そうなったならネオ・ジオンは間違いなく壊滅的な被害を受ける。

にも関わらず、この作戦を実行する理由。

それはネオ・ジオンの総帥であるキャスバル・レム・ダイクンを今回の攻勢の混乱に紛れて逃すためだった。

(キャスバル様が健在ならば、このネオ・ジオンという組織は何度でも復活する)

その考えは間違いではなかった。

なにしろ、このネオ・ジオンという組織は良くも悪くもキャスバル・レム・ダイクンという人物によって成り立っており、それは彼が倒ればネオ・ジオンは終わりを意味するのだが、逆に言えば彼が倒れない限りは何度でも復活することが可能なのだ。

それほどのカリスマ性が彼——キャスバル・レム・ダイクンには存在する。

(まあ、俺はここで散ることになるだろうがな。あとはジンバの奴にでも任せるとするか)

アンリはそう考えていた。

UCC0080年 4月16日 軌道上の遭遇戦

◇宇宙世紀0080年 4月16日 地球 ニュー・ホンコン  
ニュー・ホンコンに存在するジオン共和国軍の臨時駐屯地。

その一室ではペガサス隊の一員である野比のび太特務少尉が隊長であるクルト中尉に呼び出され、ある話をされていた。

「隊長の交代、ですか？」

のび太は確認するようにクルトに向かってそう言う。

クルトがのび太にした話。

それは人事異動によるペガサス隊の隊長交代についてだった。

「ああ」

「しかし、なぜこんな時期に？今は作戦の重要な時期ですよ？」

のび太はそんな疑問を口にする。

そもそも作戦直前での指揮官の交代は決して良い選択肢とは言えない。

何故なら、指揮官という頭脳の突然の交代によって部隊の戦いのテンプが崩れてしまい、作戦そのものが失敗してしまう可能性が存在するからだ。

まあ、前任の指揮官がよっぽど無能で後任の指揮官がよっぽど有能という両極端な状況であれば話は別だが、基本的にそんな特殊な状況になることは滅多に無い。

「この作戦は連邦の上層部にとっては重要でも、ジオン軍うちの上層部にとっては然して重要じゃないからな。だから、作戦に参加する一部隊の隊長くらい、交代させても問題ないと考えたんじゃないか？」

「・・・つまり、上の人間はこちらを軽んじているということですか？」

「軽んじていると言うよりは、重要視していないと言った方が正解かもしれないな」

クルトはそう言いながら、とある資料をのび太へと渡す。

「これは・・・」

「新たにペガサス隊の隊長になる奴のプロフィールだ」

「・・・エミリー・ツエツペリン。年は僕より2つ程度上で階級は特務大尉。大学を飛び級で卒業した才媛で3ヶ月前にランバ・ラル隊に配属されて地球へ降下、とありますね」

「ああ」

「確かランバ・ラル隊は1月から対カラバを担当してきた部隊ですから、この経歴を信じるならば実戦経験は有りそうですね。どれほどのものかは分かりませんが」

のび太はそう考察する。

「しかし、うちと同じモビルスーツ部隊であるランバ・ラル隊で3ヶ月だけでもやってこれたという事はそれなりに使える人材かもしれないません。これならクルト中尉が上手く補佐をすれば大丈夫なのでは？」

エミリーのプロフィールを一通り見たのび太はそんな意見を口にするが、その発言を聞いてクルトは呆れたような目をしながらこう言った。

「なに他人事みたいに言っているんだ。補佐はお前がやるんだよ」

「えっ?でも、階級的な序列ではクルト中尉が副隊長では?」

基本的に部隊の隊長と副隊長というのは、分かりやすく階級で一番偉い人間と二番目に偉い人間がそれぞれ勤めるのが普通(ちなみに階級が被った場合は先任が勤めることが多く、のび太もこれにあたる)だ。

なので、今回の場合もこのエミリー・ツエツペリン特務大尉を隊長として、クルト中尉を副隊長とするように隊内で人事整理がされるとのび太は考えていたのだが、クルトが口にした答えは違っていた。

「普通はそうだ。だが、今回の場合は文字通り隊長の“人事交換”だな。俺はこの小娘と交代する形でランバ・ラル隊に異動することになっているんだよ」

「ええ!?!」

のび太は今度こそ驚いた。

まさか、そんな無茶苦茶な人事によって自分が引き続き副隊長をやらされるとは思わなかったからだ。

そして、のび太は改めて今の自分がとんでもない貧乏くじを引かされていることに気づいてしまった。

「・・・ちなみにその副隊長の仕事、シグさんに代わって貰うことは?」

「無理だ。作戦に近い以上、隊長だけでなく副隊長まで変えたら指揮系統は少なからず混乱しちまうからな」

クルトはキツパリとそう言い、それを聞いたのび太はガツクリと肩を落とすが、よくよく考えてみれば仮にシグ・ウエドナー少尉に副隊長

長を代わって貰ったところで同じ部隊である以上、自分がエミリー・ツエツペリンという少女の指揮下で動かなければならない事実に変わりはない。

ならば、副隊長という少しでも状況をコントロール出来る立場に居るのはむしろ好都合ではないか？

のび太はポジティブにそう考えることにした。

「・・・分かりました。なんとかやってみます。それで、その人が来るのは何時なんですか？」

「3日後だ。本来なら明日だったんだが、急に入った任務があるらしいくてな。それを終えてから来るらしい」

「そうですか。なら、今のうちにみんなに伝えた方が良さそうですね」

クルトの言葉にのび太はそう答えた。

「なんてことだ・・・」

リック・ドムに搭乗する南洋同盟の兵士は呆然とした様子で自らの母艦が燃え盛る姿を目撃する。

連邦との裏取引によって宇宙へと出る手段と方法を確保した南洋同盟は早速先遣隊としてそれなりのモビルスーツ戦力を宇宙へと送り込み、橋頭堡を確保しようとしたのだが、そうして宇宙へと送り込まれた南洋同盟の兵士達が見たのは、軌道上に待機するホワイトベースを含めたジオン軍の臨検艦隊だった。

そう、ジオンの総帥ギレン・ザビは南洋同盟が民間船に紛れて宇宙へと上がってくるのを読み、軌道上に臨検の為の艦隊をあらかじめ待機させていたのだ。

とは言え、南洋同盟の使うと思われる船舶が不明だったので、見かけた民間船を片っ端から臨検する羽目となり、連邦からは抗議を受けたが、『サイド3へのテロを目論むテロリストが民間船に紛れて宇宙へと上がってくる計画を掴んだ』と理由をどうにかでつち上げてそのまま臨検を続行。

そして、今日、遂に臨検艦隊の一部であるホワイトベース隊が南洋同盟の偽装民間船を発見した。

すぐさま臨検を要求したものの、当然の事ながら南洋同盟側がその要求を呑む筈もなく、解答代わりにMS隊の発進を行ったことによつてそのまま戦闘へと突入する。

しかし、この時の戦闘は正直言つて戦闘とすら呼べるかどうか怪しい程、一方的な展開となった。

その理由は3つある。

まずホワイトベース隊と南洋同盟のMSの性能差。

連邦軍から分派した南洋同盟のMSは基本的にドムを中核としており、今回宇宙に派遣された先遣隊のMSもほとんどがリック・ドムで編成されていた。

だが、リック・ドムは言うまでもなく旧式機であり、ジオンのMS——特にホワイトベースに搭載されているザムII改やガンダム改に

は流石に対抗できない。

二つ目に艦の性能の違い。

ホワイトベースは知っての通り強襲揚陸艦という特殊な艦種であり、単艦で運用することも想定されている。

その為、他の戦闘艦よりも頑丈に出来ており、例えばビームライフルを喰らったとしても一発や二発では到底撃沈できない程の堅牢さだ。対して、南洋同盟側の艦艇は民間の宇宙船をMSを搭載できるように改造したものに過ぎず、そもそも軍艦ですらない。

その差は実際に戦闘を行うと浮き彫りとなり、ホワイトベースは先程から南洋同盟のMS部隊の攻撃を受けても平然としているのに対して、南洋同盟の艦艇はホワイトベースMS隊の攻撃を受けてあっさり沈んでしまっている。

そして、最後の3つ目。

それは――

「悪魔め……」

味方を悉く蹴散らしつつこちらへと向かってくる白いガンダム改B型を睨み付けながら、男は吐き捨てるようにそう言った。

そう、3つ目の理由。

それはパイロットの技量の違いだった。

そもそもこういった少数同士での戦いは、要塞攻略戦などの大規模な戦いとは違い、エースパイロットが居るか居ないかで戦局が大きく変わってくる。

勿論、エースという存在は軍全体で見れば極少数なので、遭遇することは滅多に無いのだが、この時の南洋同盟にとっては最悪なことに、ホワイトベース隊には白い悪魔という異名を持つ宇宙世紀でもトップクラスの技量を持つエースパイロットが居た。

その結果、南洋同盟のMSは次々とそのパイロット――アムロ・レイによって撃墜されていき、宇宙の塵へとその姿を変えていく。

勿論、彼もその光景を黙って見ていたわけではなく、アムロを止め

ようとライフルを放つが、それらはアムロのニュータイプ能力による  
“先読み”によってかわされてしまい、当たることは無い。

——そして、その直後、彼の機体は反撃のビームライフルを喰らって爆発四散し、その意識は永遠に閉ざされることとなった。



U C 0 0 8 0 年 4 月 1 8 日 雨の中の決着

◇宇宙世紀0080年 4月18日 地球 華南 上空  
4月18日の華南の空。

そこではクルト中尉のザムⅡ改と野比のび太特務少尉のガンダム改B型の2機のMSが連邦軍のSFS——ド・ダイに載せられる形で戦場へと向かっていた。

『もうすぐ戦場だ。分かっているとは思いますが、気を抜くなよ』

「はこ」

クルトの言葉にのび太はそう答えながら、改めて現在の状況を確認する。

昨日の4月17日の早朝から行われたネオ・ジオンの大攻勢——オペレーション・アインハルトの発動によって連邦軍は大混乱へと陥った。

数日前に満州や旧モンゴルから撤退して華北に兵力を集中させたことは確認されていたのだが、それは華北での決戦に備えた動きだと思われており、まさか攻勢の為の動きだとは思っていなかったのだ。

そして、連邦の不意を突いたネオ・ジオン軍の攻勢によって、最前線近くに居た連邦軍はその8割が壊滅してしまい、現在は必死に防衛体制を整えている最中だったのだが、その防衛体制が整うまでネオ・ジオンが待つてくれる筈もなく、アンリ・シュレッツァー准将の巧みな指揮もあって連邦軍の即席の防衛体制は次々と喰い破られていった。

だが、連邦軍も黙ってやられるばかりではない。

イーサン・ライヤー准将の指揮の下、形振り構わず戦力をぶつけることでどうにか戦線を維持した。

しかし、この2日間の戦闘で戦力を遊ばせておく余裕のなくなった連邦軍はペガサス隊と第8特殊小隊に出動を要請（本来なら命令だが、指揮系統が違うためにそういう形となった）し、両部隊の指揮官

であるクルトとシロー・アマダ中尉はその命令を受諾。

その結果、のび太達ペガサス隊はこうして戦場に向かうこととなっていた。

ちなみにのび太とクルト以外のペガサス隊の隊員や第8特殊小隊は、それぞれ別のド・ダイに載せられて別々の戦場に向かつており、後から合流する予定となっている。

(しかし、凄い雨だな)

現在の天候はかなりの豪雨だ。

おまけに戦場が近いのか、ミノフスキー粒子の濃度も濃い。

MSにはミノフスキー粒子に対応した探索用のセンサーが幾つか有るので、そんな盲目の状態でも周囲の状況はある程度分かるもの、そうでなかったら5メートル先の状況すら分からなかっただろう。

(天候って結構重要なんだよなあ)

天候というのは昔から戦況を左右することもある重要な要素だと言われている。

特に13世紀に起きた元寇での台風は有名であり、日本はこれで2度のモンゴルの攻勢を凌ぐことが出来たと言っても良いほどだ。

しかし、近代になって電子技術や戦術が発達してくるにつれて天候の重要性は低くなっていき、宇宙世紀の時代になると生活の場が地球から宇宙へと移っていった事もあり、天候は戦いにおいて然程重要なものではなくなっていた。

だが、ミノフスキー粒子の登場によって電波やそれに頼った戦術が無力化され始めると、再び天候は戦いにおいて重要な要素となったのだ。

そして、今も雨によって視界が妨げられていることで、のび太は500メートル以上先の状況が全く把握できなくなっていた。



——そして、その光の弾丸は吸い込まれるようにリック・ディアスの動力源に直撃した。

◇  
ガンダム改B型とリック・ディアスの居る位置から少し離れた場所。

そこには先程ド・ダイとザムⅡ改を纏めて撃破した大型のビームライフル——ロング・ライフルを構えるガンダムⅡ改の姿があった。

「くっ！ ガースキー曹長がやられたか!!」

スーパーガンダムのパイロット——ケン・ビーダーシユタット少尉は部下のガースキー・ジノビエフ曹長が搭乗するリック・ディアスが爆散するのを見て、彼が戦死してしまったことを悟る。

勿論、機体が爆散したからと言って戦死したとは限らないのだが、リック・ディアスの脱出ポットは働かないことでも有名だ。

であれば、生存は期待するだけ無駄。

普段のケンならしないその冷徹な思考は、彼が宿敵である灰色のガンダム改B型との戦いに全神経を傾けている証拠でもあった。

(不味いな。ただでさえ視界が悪いのに、これじゃあロング・ライフルの利点がほとんど活かせない)

ケンは状況の不味さに内心で舌打ちしつつ、打開策を探すために頭を回転させる。

そう、実のところ、ガンダムII改の探索範囲はのび太のガンダム改B型と然程変わりはなく、本来ならこのような天候下で先程のようなロング・ライフルの利点を活かした射撃は不可能な筈だった。

しかし、それでも出来たのはガースキーのリック・ディアスが専用の探索装備を積んで射撃観測を引き受け、光学通信によってスーパーガンダムに観測データを送っていたからだ。

だが、そのリック・ディアスは先程やられてしまった為、観測データは手に入らなくなってしまった。

おまけに先程のビームの射線からガンダム改B型はこちらの欲しいの距離と方角を特定している可能性が高い。

(となると、勿体無いが取り回しの悪いロング・ライフルは今すぐ捨てて白兵戦に移った方が良いな。しかし――)

問題なのは向こうが持っているビームライフルだ。

あれを何とかしなければ、白兵戦に移る前にこちらがやられてしまうだろう。

ロング・ライフルを捨てずに銃撃戦を行うという手もあるが、取り回しの悪いロング・ライフルではやはり不利だ。

(せめて遠隔操作が出来れば・・・いや、待てよ。確かこのロング・ライフルには時限式の発射システムがあったな。あとパージして使う

ことが可能だとも)

ケンはあることを思い付き、それをすぐに実行に移す事を決め、ロング・ライフルをガンダムⅡ改から一度パージした。

◇

ケンがガンダム改B型の撃破に失敗したことを察して次の策を練っていた頃、ガンダム改B型は無事に着地に成功し、ロング・ライフルのビームが発射された方向へと向かっていた。

「・・・撃ってこないな」

のび太はロング・ライフルの第二射がなかなか来ないことを疑問に思いつつも、ガンダム改B型の足を止めさせずにそのまま直進させる。

ただし、スラスターのレバーには常に意識が向けられており、発射の兆候が有ればすぐさま空に逃げて回避するつもりだった。

——そして、そのまま数十秒が経過した時、遂に前方から巨大な閃光が迸る。

しかし——

(・・・どういふことだ?)

発射されたビームはのび太の居る位置とは全然検討違いな場所に  
向かって着弾した。

(もしかして、向こうはこちらの位置を把握していないのか?)

のび太はそうも考えるが、結論を出すにはまだ早いとその考えを一  
旦打ち切り、再び機体を前進させる。

だが、その後もロング・ライフルの射撃はガンダム改B型には全く  
当たらず、先程の推論は合っていたのではないかと思ひ始めるが、同  
時に不自然さも感じた。

(おかしい。さっきから同じ場所に射撃が叩き込まれてる。本当に闇  
雲に撃ってるなら必ず着弾場所はズれる筈なのに)

そう思いながら慎重に機体を進めていると、遂にロング・ライフル  
の存在が確認できる位置まで来た。

——しかし、そこにはロング・ライフルがポツンと置かれているだ  
けでMSの姿はない。

(居ない? 元々、あのライフルしか無かったのか?)

そうも思ったが、とにかくまだ機能が生きているらしいロング・ラ  
イフルを破壊しようと、ガンダム改B型のビームライフルの銃口をロ  
ング・ライフルへと向ける。

だが、その瞬間――

(!? 右か!!)

ニュータイプ能力によって右から何か近づいてくるのを感じたのび太は咄嗟にビームライフルの発射を止めてスラスターを吹かそうとする。

しかし、一歩間に合わずその近づいてきた存在——ガンダムⅡのビームサーベルによってガンダム改B型の右手が持っていたビームライフル共々切り裂かれ、直後、ビームライフルの誘爆によってガンダム改B型は大きく仰け反った。

「くっ！」

だが、のび太もやられてばかりではない。

機体の態勢を整え直す傍ら、残ったもう片方の手である左手でビームサーベルを引き抜いて発振させると、半ば投げ付けるようにガンダムⅡの頭部に向かって刺突を行う。

雨とビームライフルの誘爆による視界不良もあり、ケンも流石にこれをかわすことは出来ず、ガンダムⅡの頭部はそのままガンダム改B型のビームサーベルによって貫かれ、頭部のバルカン砲の弾丸が誘爆したことで軽い爆発が起き、今度はガンダムⅡの機体が仰け反る事となった。

その間にガンダム改B型はスラスターを使ってガンダムⅡから距離を取る。

(危なかった。あと少し気づくのが遅れていたら今のでやられてた)

のび太はそう思いながらも、素早く自機の状態をチェックし、次に敵の様子を確認する。

(・・・さっきの攻撃でこっちは右手とビームライフル、そして、ビームサーベル一つを喪失。残った装備は頭部バルカンと予備のビームサーベルのみ。対して、相手の被害は頭部喪失、か)



状況を改めて確認したのび太は状況の不味さに気づいて冷や汗を流す。

元々、ガンダム改B型とガンダムⅡでは後者の方が性能的に有利だ。

そんな中、こちらは右手と主要武器だったビームライフルを喪失してしまい、残った装備はビームサーベル1つと頭部のバルカン砲のみ。

しかも、バルカン砲は牽制くらいにしか使えないので、実質こちらの手元に残された装備はビームサーベル1つのみだ。

対して、相手は頭部のセンサーとバルカン砲を完全に喪失してしまったものの、両腕は健在だし、モニターもおそらく生きている。

ビームライフルこそ持っていないが、それでも現在の状況がガンダムⅡに有利だという事実は揺らがない。

(最悪だな。こうなったら逃げるのが一番なんだけど・・・それは向こうが許してくれそうにないな)

となると、戦うしかない。

だが、現在の状況をどう打開すれば良いのか全く分からず、のび太は焦りを感じていた。

すると、先程のロング・ライフルの銃口からエネルギーが再び迸る。しかし、それがガンダム改B型やガンダムⅡに当たることはない。

(・・・やつぱり、あれは僕を誘き寄せる為の罠だったのか。まんまとしてやられたな)

のび太は今更ながらにその事に気づいて悔しげに顔を歪めるが、同時にあることに気づく。

(待てよ。これはもしかしたら利用できるかもしれない)

のび太はもはや定期的にビームを発射するだけの砲台となったロング・ライフルの活用方法を思い付く。

だが、その直後、ガンダムⅡがビームサーベルを構えたままこちらに突撃してくる。

(・・・やるしかないか)

のび太はそう思いながらガンダムⅡの迎撃を行うためにガンダム改B型の左手を操作し、予備のビームサーベルを引き抜いた。



(くっ！なかなかやるな)

ガンダム同士の白兵戦が始まって数分。

ケンは性能差を己の技量を以て戦いを有利に進めていたものの、同時になかなか追い詰められない現状に苛立っていた。

(ガンダムの性能はこちらが有利。しかも、相手は右手を喪失している。なのに、何故勝てない!!)

正確には追い詰めてはいるのだ。

先程から灰色のガンダムは防戦一方であるし、こちらの斬撃を受け止めている左腕の間接部は若干ではあるが軋みを上げている。

だが、ここまで追い詰めていながらケンは簡単に勝てる気がしなかった。

むしろ、ここで徹底的にやらなければ逆転されるかもしれない。

そのような焦りの感情が彼の心を支配していた。

普段の彼ならば、このようなことはなかっただろう。

むしろ、もっと丁寧に戦いを進めていた筈だ。

しかし、彼はこの灰色のガンダムによって奪われたものがあまりにも多すぎた。

1度目の遭遇で信頼ダグラス・ローデンでできる上司と何時も自分達を支援してくれたオペレーターユウキ・ナカサトの女性を失い、2度目の遭遇で2人居たMSパイロットの部下ジエイク・ガンスの1人を失い、そして、今回の戦いでもう1人の部下ガイ・スを失っている。

その怒りが、憤怒が、憎悪が、彼の心を熱くし、普段の冷静さを奪っていき、視野を狭くしていく。

——だからこそ、彼は気づくことが出来なかった。

いつの間にか自分の機体がロング・ライフルの射線に入れられていたこと、更には発射までの時間が残り数秒しか無かったことに。

それは明らかに致命的なミスだった。

「貫った!!」

遂にケンのガンダムⅡのビームサーベルがガンダム改B型の左腕を切り落とす。

——そして、止めのコクピットへの刺突を行おうとした瞬間、彼の肉体は己の機体と共に光の奔流の中に吞まれていった。

UCC0080年 4月20日 一先ずの終結

◇宇宙世紀0080年 4月20日 地球 ニホン列島 トウキョウ

「そうか。ペキンが落ちたか」

地球連邦臨時大統領——コウイチ・クロカワは補佐官の男からその報告を受けて安堵しながらも、何処か拍子抜けしていた。

それはそうだろう。

華南で散々苦戦していた中でネオ・ジオンが撤退した満州、旧モンゴル方面から軍を進めてみれば、敵の本拠地であるペキンがあつさと落ちたのだから。

「どうやら本当にネオ・ジオンは華南での攻勢に文字通り全力を投入していたようすな」

「ああ、おそろしくこちらに一撃を加えて講和することに全てを賭けていたのだろう。……まあ、無駄だった訳だが」

「ええ、仮にネオ・ジオンに華南が奪還されたとしても、我々はネオ・ジオン討伐を諦めなかつたでしょう。その為に南洋同盟とも取り引きをしたのですから」

補佐官はコウイチの言葉を肯定するようにそう言う。

そう、実のところ、連邦にとって南洋同盟との取り引きはそれなりに賭けの要素が大きかった。

当たり前だ。

明らかにジオンの敵を宇宙に打ち上げ、尚且つ大量破壊兵器に分類されるソーラ・システムを南洋同盟に渡したりしたのだから。

幾らジオンも消耗していて戦争の可能性は低かったと言っても、場

合によっては第二の一年戦争が起こっても可笑しくはなかった。

そうなったら一年戦争の敗北と今回の戦争での離反者の続出でロボロになった連邦の体制は崩壊していたかもしれない。

そこまでのリスクを犯してネオ・ジオン撃滅に方針を絞った以上、ネオ・ジオンの撃滅はなんとしても成し遂げなければならなかったのだ。

「だが、そうなるとキャスバル・レム・ダイクンの身柄を確保できなかったのが痛いな」

コウイチはそう呟きながら、ネオ・ジオンの指導者であるシャアの身柄を確保できなかったのを残念に思った。

元々、ネオ・ジオンはシャアの私兵だと言っても良い存在だ。

もしシャアの身柄を確保できれば、今現在、華南で大暴れしている数十万のネオ・ジオン軍を降伏、あるいはそこまで行かなくとも士気を大幅に低下させることは十分に可能だっただろう。

しかし、現実には確保に失敗しているため、連邦軍はもはや残党と化した数十万のネオ・ジオン軍を地道に掃討しなければならぬ。

「仕方ありません。ジンバ・ラルの死亡が確認されただけでも行幸でしょう。あとは華南で暴れているアンリ・シュレッツァーの首さえ取れば、ネオ・ジオンの支柱は瓦解し、例えキャスバルが生きて合流しても掃討は時間の問題となります。ですが――」

「なんだ？」

「・・・一年戦争と此度の戦争で地球の土地はロボロです。これでは例え掃討を行っても残党が多く出る可能性があります」

補佐官はネオ・ジオンの残党勢力が戦後に多く生き残る可能性があることを指摘する。

そして、この懸念はあながち間違いででもない。

原作でジオン残党勢力が地球でしつこく生き残っていたのは、『ジオン公国の亡霊』という『悪』を敢えて生き残らせることで連邦内の結束力を維持するという狙いも勿論あったが、それ以上にジオンのコロニー落としとそれに続く地球侵攻作戦によって国土がボロボロになりすぎて、戦後もそれなりの数と戦力を保持していたジオン残党を全て掃討する余力が無かったという事情もあったのだ。

では、この世界ではどうかというと、確かにコロニー落としこそ無かったものの、地球侵攻作戦や大西洋大津波、更には軌道爆撃に核兵器の使用及びNBC兵器の乱射などで人死にこそ原作ほどではないが、国土の凄惨さという意味では原作とどっこいどっこいになっている。

なので、原作のように地球各地に潜伏することは一応可能だった。

「なるほど。しかし、戦争が終わってジオンが投降を呼び掛ければ残党の大半が国に帰るんじゃないか？」

「ジオンが引き取ると思いますか？」

「……いや、無いな」

補佐官の言葉にコウイチは少し考えた後にそう解答する。

そう、元々、この世界のネオ・ジオンは原作と違ってダイクン派の巣窟という面が強く、ジオン共和国からすれば反体制派の人間ばかり。

そんな獅子身中の虫をザビ家率いるジオン共和国がわざわざ引き取るとは到底思えない。

「となると、ネオ・ジオンの残党処理は我々のみで行う事になりそうだな」

「それとアフリカ共和国の残党に地下に潜ったカラバ、南洋同盟。場合によつてはエウーゴ残党も処理する必要があります。．．．まあ、エウーゴに関してはジオン共和国も協力してくれるでしょうが」

「．．．先が思いやられるな」

戦争時よりは脅威ではなくなったとはいえ、これだけ敵対勢力が多く残っている以上、平和が訪れるのはまだまだ先。

そう実感したコウイチは溜め息をつきながらそう言った。

◇L2宙域 サイド3<sup>ム</sup> ジオン共和国 ズム・シテイ<sup>ン</sup>  
コウイチが補佐官からペキン陥落の方を受けていた頃、ジオン共和国でもまたギレン・ザビ総帥が秘書兼愛人であるセシリア・アイリ<sup>ン</sup>からとある報告を受けていた。

「そうか。ランバ・ラル隊がやってくれたか」

ギレンはそう言いながら、ほんの僅かな笑みを浮かべる。

今回、ギレンの下に届いた朗報。

それは連邦が南洋同盟に渡していたソーラ・システムがランバ・ラル隊によって破壊されたという情報だった。

「となると、戦いは終わりだな。あとは連邦軍が処分してくれるだろう」

「はい。それと帰還できずにそのままになっていた北米方面軍と生き残りの欧州方面軍ですが、現在は感染者も大幅に減っており、今年中には0に近い数字になりそうとのこと。こちらはどうなさいますか？」

「そうだな・・・」

ギレンは少し悩んだ。

感染者が減ったというのは喜ばしい話だし、ギレンも鬼ではないので兵士達を出来るだけ早く家族の元に帰してやりたいと思う。

しかし――

(コロニー内で振り返したら不味い)

コロニー内は文字通りの意味で閉鎖空間だ。

だからこそ、病気が広がるときにはあつという間に広がってしまう。

そうなつては不味いので、将兵の帰還は慎重にやらなくてはならない。

「・・・当初の予定通り、ソロモンを医療施設に改造してそこで帰還してくる兵士達の精密検査を行おう。そうすれば、取り敢えずは発病した兵士がコロニー内に入ってくるといった事態を出来るだけ防ぐ」



完璧にとは言わない。

勿論、完璧に防ぐのがベストではあるのだが、そんなことはコロニー内へ一生兵士達を入れないといった処置でも取らない限りは不可能だ。

流石に今まで命懸けで戦ってきた兵士達にそんな残酷な仕打ちをするほどギレンも非情にはなりきれなかったし、そもそもそんなことをしてしまえば故郷に帰れない事に絶望した将兵達が反乱を起こす可能性すらある。

「あと検査は厳しく行う。発病者は勿論だが、その疑いがあるというだけの者も入院させる」

「懸命な処置かと。しかし、今から色々改造をしたとして、帰還には最低でも1年、下手をすれば更にもう1年掛かりますが・・・」

「構わん。旧世紀の大戦の敗戦国の復員もそれくらいの時間が掛かったと聞いている。なんとかするさ」

「分かりました。では、早速そのように手配いたします」

「頼む。それで他に何か報告はないか？」

「はっ。実は先程、アクシズから連絡が入り、その・・・」

「なんだ？良いことではなさそうだが、報告は正確に行ってくれ」

「・・・例のブラックホールエンジンが暴走したとのことです。またその暴走に巻き込まれてギニアス・サハリン技術少将が死亡したと」

「・・・そうか」

ギレンは無念といった感じでそう言う。  
ブラックホールエンジンの暴走。

これは半ば予想したことなので、特にショックは無い。  
しかし、問題だったのはギニアス死亡の報告だ。

ギニアスは知つての通り、アプサラスを開発した人物であり、ジオンでも有力な技術者だった。

だからこそ、ブラックホールエンジンの開発者に抜擢したのだが、  
どうやらそんな彼を以てしてもブラックホールエンジンの開発は失敗してしまつたらしい。

「分かった。アクシズにこう伝えてくれ、ブラックホールエンジンの開発は完全に凍結。関連データは完全に破棄しろとな」

「よろしいのですか?」

「ああ。元々、ブラックホールエンジンは1度開発が失敗すれば諦めると決めていたからな。・・・まあ、関連データの破棄は実際できるかどうか分らんが、最悪、連邦にデータが渡らなければ良い」

つまり、もし仮に連邦にブラックホールエンジンのデータを渡そうとする技術者が居れば、その人物をすぐに始末しろという意味だ。

それが理解できたのか、セシリアの表情は先程よりも硬くなつていた。

「・・・まあ、そういうことだ。それで他に何か報告は?」

「いえ、これといった大きな報告は特に有りません」

「分かった。では、下がってくれ。・・・少し休みたいのでな」

「分かりました。私はこれで失礼します」

セシリアはそう言っただけで部屋を退室していき、残されたギレンは背凭れに体を預けながら大きな溜め息をついた。

——こうして、一年戦争から続いた戦争は多くの火種を残しながらも幕を閉じた。

だが、この世界の人々は知らない。

今回の戦いが後に『地獄の0080年代』と言われる一連の戦いの始まりの終わりでしか無かったことを。

## 再構成戦争編

UC0081年 3月1日 将来を見据えて

◇宇宙世紀0081年 3月1日 地球 ニホン列島 トウキョウ

1年前のネオ・ジオン抗争にてジャブローがアフリカ共和国の核兵器によって汚染されたことから地球連邦の臨時首都となったトウキョウ。

かつて大都市であっただけはあり、都市としての完成度は非常に高く、一年戦争終結時に結ばれた南極条約で将来的なフォン・ブラウンへの首都移転が決定されていなかったら、もしかしたら地球連邦の新たな首都として歴史に名を刻んだかもしれない。

そして、現在、そのトウキョウの重要施設の1つでは要人である2人の男女が会談を行っていた。

「地球リフレッシュ化計画？」

ジオンの外務長官——キシリア・ザビは地球連邦臨時大統領——コウイチ・クロカワが差し出してきた計画書の表紙に書かれていた計画名を読み上げる。

「ええ、内容を読んでみれば分かると思いますが、あなた方スペースノイドにとって、なによりも有益な話だと思いますよ」

そう言われて、キシリアは計画書を捲りながら計画の内容を見る。地球リフレッシュ化計画。

それは地球復興と平行して地球環境の本格的な改善を行い、地球を大勢の人間が住める星にするといった計画だった。

更にその中にはスペースノイドの地球への移民といった内容も含まれている。

「なるほど、これは確かにスペースノイドにウケそうな話ですね」

その計画の内容を一通り見たキシリアはそんな感想を口にする。

基本的にスペースノイドという存在は大なり小なり地球という存在に憧憬の感情を抱いている。

それは地球に住むアースノイドがエリートだと思っっていることからも明らかだ。

だからこそ、原作では宇宙に住む者と地球に住む者での戦争が起きてしまったし、この世界でも結果的にはそうなった。

この溝を完全に解決するには原作でシヤアがやろうとしたようにアースノイドを全て宇宙に上げるか、もしくは逆にスペースノイドを地球に戻すしかない。

だが、後者はアースノイド、スペースノイド問わずに様々な勢力の反発が予想される。

何故なら、この世界では地球環境は人の命よりも重い上に、地球に人が多ければ多い程、地球の環境は汚れてしまうと考えられているからだ。

実際はそんなことはないのだが、それが判明するのはずっと後の時代になってからの事だ。

なので、今の時代でスペースノイドを地球に戻すのは、アースノイドを全員宇宙に上げるよりも難しい。

まあ、それでもリタ・ベルナルの祖母のように宇宙から地球に戻ってきた人間が完全に居ないわけではないのだが、おそらくあれはかなりの例外だろう。

したがって、この世界で宇宙から地球に人を戻すという方針は転生者達ですら考えておらず、それをやるくらいだったら火星をテラフォーミング化して移住した方がかなり現実的だというのがキシリアを含めた転生者達の意見だった。

——しかし、それは逆に言えば地球の環境問題さえ解決できれば、一気に現実的になってくるということでもある。

「しかし、いったいどういう風の吹き回しです？宇宙から地球に人を戻すなど」

「・・・まあ、簡単に言えば将来の火種を潰すためと言ったところでしようか？」

「将来の火種を潰すため？どういう事です？」

「言っている意味がよく分からず、キシリアはコウイチに説明を求めらる。」

「その辺りはこれから説明しますが、その前にキシリア殿。南極条約は覚えておいでですね？」

「？ ええ、勿論です。そもそもあなたも私とあの場に居たじゃないですか」

「はい、そうです。そして、その席であなたはこのような条件を出した。スペースノイド全てに参政権を与える、と。まあ、これ自体は悪いことだと言うつもりはありませんが、仮に新しくフォン・ブラウンで開催される議会でアースノイドの強制宇宙移民法、あるいはそれに酷似した法案が提出されたらどうなると思います？」

「それは・・・」

そう言った時を想像したのか、キシリアは苦い顔をする。

スペースノイドは一年戦争直後に結ばれた南極条約によって参政権を得て2年後には議会に参加する予定だ。

しかし、この世界の地球圏の人口の分布はスペースノイド80億人、ルナリアン10億人、アースノイド20億弱。

つまり、従来通りの民主制では人口の多いスペースノイドの意見がほぼ無条件で通ってしまうのだ。

そして、前述したようにスペースノイドは地球に人間が住むことを良しとしないので、コウイチの言ったように原作のハンター、あるいはそれよりも過激な方法でアースノイドを宇宙に上げる政策を可決させる可能性が高い。

そうになると、当然の事ながらアースノイドも反発し、おそらく連邦内で大規模な内戦が起こるだろう。

(それは予想していない問題ではなかったのだがな)

そう、実のところ、戦後のアースノイドの宇宙移民への反発という問題は転生者達の間でも懸念されていたものではあった。

だからこそ、南極条約の際にジオンはアースノイドの強制的な宇宙移民を主張せず、アースノイドが自主的に宇宙に移民するまで仕向けることにしたのだ。

まあ、結果はあまり上手く行かなかったが、元々上手く行けば儲けもの程度に考えていたので、それほど気にはしていなかった。

しかし、よくよく考えればスペースノイドはジオンだけではない。

いや、むしろ、全体的に見ればジオンの方が少数だ。

そして、前述したように民主制では多数派の意見が通る。

つまり――

(このままではその内戦が起こることは確実ということか。だから、スペースノイドをアースノイドにしてしまうことを考えたのだな)

確かにこの方法ならスペースノイドとアースノイドの人口差問題を多少なりとも改善できるし、キシリアやコウイチが想像したような内戦の火種を潰すことが出来る。

加えて、首都移転が進んでいない今ならば、臨時政府の権限で法案を可決させることも可能だ。

——しかし、それは同時に別な火種を生んでしまうということでもある。

「・・・あなたの話は理解しました。しかし、大統領。あなたの法案はスペースノイドや地球至上主義者はともかく、アースノイド至上主義者は絶対に納得しないでしょう。その点はどうするおつもりなのですか？」

ギレンの野望のムービングやバスク・オムを見れば分かるが、アースノイドという存在は自尊心がそれなりに強い。

そんな彼らが今まで格下に見てきたスペースノイドが自分達の同胞となつていく姿を黙つて見ているとはとても思えない。

必ず何らかの行動を起こしてくるだろう。

それがテロならばまだ可愛いもので、最悪の場合は紛争レベルの闘争が起きても決して可笑しくはない。

「それは分かっております。そして、彼らに対する処置は既に考えてあります。その点に関してはあなた方に迷惑は掛けませんのでご安心を」

「・・・そこまで言うのであれば、我々としてもこれ以上突っ込みはしません。・・・それで我々に何をしろと？」

ここに呼び寄せて、こんな話をしたからにはジオン共和国に何かして欲しい事がある。

そう確信したキシリアはコウイチに向かってそう問い掛けるが、そんな彼女の問いに対して彼はこう言った。

「我々の計画に対する支持を国として表明していただきたいのですよ」



「支持？」

「はい。あなた方は一年戦争によってスペースノイドの代表的な立場になっている。そんなあなた方がこの計画に支持を表明すれば、スムーズにスペースノイド達の理解を得ることが出来ます」

「・・・なるほど」

「勿論、対価は支払います。具体的にはあなた方が現在行っている火星のテラフォーミング化を支援致しましょう」

それを聞いてキシリアは考える。

はつきり言って、これはかなりありがたい申し出だ。

火星のテラフォーミング化計画は構想とそれに必要な技術そのものは既に一年戦争前から準備されており、ネオ・ジオン抗争直後から早速着手されている事業だ。

この計画は3年（残り2年）という惑星の規模からすれば物凄い短期間で完了させる予定の計画ではあったが、幾ら地球より小さいとはいえ、惑星一個を丸々改造する関係上、莫大な費用が掛かっており、ジオン共和国の財政には相当な負担になっていた。

まあ、それでもテラフォーミング化が終わって人が移住するようになれば回収出来る見込みがあるので投資は続けられているが、やはり負担は少ない方が良い。

（問題なのはこの男の計画に支持を表明する場合のデメリットだが・・・）

それは主に2つ挙げられる。

1つはアースノイド至上主義者から更なる敵意を向けられること。

しかし、これは今更なことなので然程問題ではない。

問題なのはもう1つ。

地球至上主義者（とエレズム主義者）にどう思われるかだ。

この地球リフレッシュ計画は地球環境の再生という部分では彼らの賛同を得られるだろう。

彼らが崇拜するのは地球そのものなのだから。

しかし、その後に地球へ人が移住するとなれば、彼らが反発する可能性も存在するし、その時は支持を表明したジオンも彼らの非難の対象となるだろう。

（私としては賛同したいのだがな）

そう思ったキシリアだったが、内容は明らかに自分だけで決められるようなものではないため、一度この案件を持ち帰ることにした。

「・・・この案件、一度持ち帰らせて貰っても構いませんか？」

「いいですよ。ただし、返事はお早めにしてください」

「勿論です。それと私個人としてはこの計画に賛同しておりますので、どうにか兄上達を説得して来ようと思っております」

「それはありがたい。よろしくお願いします」

そう言つて2人は握手を交わし、この日の会談は終わった。

——そして、この3日後のUC0081年3月4日。

キシリアの説得が功を奏したのか、ジオン共和国は地球リフレッシュ計画の支持を表明することとなる。

UC0081年 3月3日 かつて戦った者達

◇宇宙世紀<sup>u</sup>0081年 3月3日 夜 地球 東アジア

「・・・はあ、何やっているんだろうな。僕」

東アジアの某所の丘の上で星空を見上げていた少年——野比のび太特務少尉はため息をつきながらそう言った。

ネオ・ジオン抗争の終結から11ヶ月。

のび太の母隊であったペガサス隊は解体され、除隊した碓シンジを除いた隊員達はそれぞれ別の部隊へと編入された。

その後、のび太はグレンの計らいによつてジオン共和国から地球へと派遣されたネオ・ジオン残党掃討部隊の1つであるインビシブル・ナイツに編入される。

そして、この一年間、ネオ・ジオン残党の搜索と掃討の任務に当たっていたのだが、実のところのび太は軍に残った事を少し後悔していた。

何故かと言えば、軍に残った理由が『ネオ・ジオン残党の中に居るかもしれないメイ・カーウインを捜したいから』という完全なる私情だったからだ。

今のところ、メイ・カーウインは発見されていないので、その関係で仲間に迷惑を掛けてはいなかったが、彼女と遭遇したら自分はどういう行動をしたら良いのか分からないことにのび太は今更ながら気づき始めていた。

「そんなところで何やってるの?」

一人で星を見上げていた事を心配したのか、インビシブル・ナイツの副隊長——タチアナ・デア中尉がのび太に声を掛けてきた。

「あつ、タチアナ中尉」

「ああ、敬礼はしなくて良いよ。それより難しい顔をしていたみたいだけど、何か悩み事でもあるの?」

慌てて敬礼をしようとするのび太の行動を手で制しつつ、タチアナはそんな言葉を投げ掛ける。

「・・・ええ、まあ。でも、大したことじゃありませんよ」

「そんな誤魔化しはダメだよ。その悩みが戦場で命を落とす原因になるかもしれないんだから。良かったら私が聞いてあげるよ?」

タチアナは片目をウィンクさせながらそう言った。

彼女はのび太がこの部隊に来たばかりの時から色々世話をしてくれた女性だ。

そんな人間の申し出を無下にするという選択肢を、この時ののび太は選ぶことが出来なかった。

「・・・そうですね。やっぱり相談してみることになります」

そう言いつつ、どういう言葉で説明しようかと暫し考える。

まさか本当の事を馬鹿正直に言うわけにはいかないが、ぼかして話すにしても話し方が結構難しい問題だ。

(・・・出たところ勝負しかないか)

そう思ったのび太はまずこう切り出す。

「タチアナ中尉はフロントムスイープ隊のユীগ大尉に惚れていますよね?」

「えっ?」

一瞬、何を言われたか理解できなかったタチアナだが、徐々に脳が理解していくとのび太の言葉に慌てて反論する。

フロントムスイープ隊。

それはネオ・ジオン残党を掃討するために編成された連邦軍の部隊であり、インビシブル・ナイツとは共闘関係にある。

交流も幾度となく行われており、どういった経緯かは知らないが、副隊長であるタチアナがフロントムスイープ隊の隊長であるユーク・クロ口大尉に好意を寄せていることはのび太も含めたインビシブル・ナイツの隊員の間では有名な話だった(もつとも、タチアナの兄であるクリスト・デア軍曹だけはその事実を認めていなかったが)。

「そ、そんなことないよ!何かの間違いだよ!!」

そう否定するタチアナであったが、顔を真っ赤にした状態では全く説得力がない。

そんな彼女の様子に苦笑しながらも、のび太は話を続ける。

「これはあくまで例えばの話なんですけど、もし今後、彼らと対立することになったらあなたはどうします?」

「えっ?」

あまりに突拍子もないのび太の問いに思わず言葉が詰まってしまったタチアナだったが、対面するのび太の目が真剣であることに気づき、彼女もまたそれに応える形で真面目な解答を行う。

「・・・勿論、そうになったら戦うよ。敵だもの」

「本当ですか?」

「本当だよ」

そう言うタチアナであったが、その声は震えていて、とても本心から言っているようには思えなかった。

しかし、それを見てものび太はその点には突っ込まない。

自分だって同じことを尋ねられたら同じ反応をするであろうから。

「……そうですか。すみません、変な話をしちやって」

「ううん。でも、なんでいきなりそんなことを聞いたのかは聞いても良い？」

「別に……ただ好きな人が裏切って敵に行くっていう夢を見ただけですよ。不謹慎な夢だと思いましたがけどね」

少々の嘘を混ぜたのび太の言葉だったが、もしこの発言を転生者が聞いていたら盛大に苦笑したかもしれない。

何故なら、好きな人が裏切って敵に行くというシチュエーションは、この宇宙世紀世界では珍しくもないからだ。

「そ、そうなんだ。と言うか、ノビタって好きな人居たんだね」

「そりゃあ僕だって男ですから。好きな人くらいは居ますよ」

「ふーん。あつ、もしかして戦争後も軍に残っているのもその好きな人のため？」

「……まあ、そうですね」

一応、嘘ではないので肯定するのび太だったが、改めて考えてみる

と随分と女々しい理由で軍に残ってしまったんだなと内心で自分の愚かさを嘲笑った。

(僕もなかなか下らない理由で残っちゃったんだなあ。軍に)

だが、その流されたにも近い決断をのび太は後悔していない。

仮にメイを探さず、戦争後に除隊したシンジのように学校に行つて普通の日常を過ごしたりしていれば、心の何処かで凝りが残っていたであろうし、こうしてインビシブル・ナイツの面々とそれなりに楽しく過ごすことも無かつたのだから。

(・・・学校か。そう言えば、元の世界はみんなは今頃どうしているんだろうなあ)

のび太はもう2度と会えないかもしれない仲間の事を思いながら、再び星空に目を向けた。

◇L2 宙域 サイド3 ジオン共和国 6 バンチ・コロニー

のび太が地球で星空を見上げていた頃、月の裏側に存在するコロニー群であるサイド3では、少年——碇シンジが今日の学業を終えて下校しようとしていた。

「今日も楽しかったな」

シンジは上機嫌な様子でそう言う。

本来、シンジにとって学校という場は非常に苦痛な場所の筈だった。

幼い頃は妻殺しの父を持つ息子と蔑まれ、少し成長した年齢になると今度は愛想がないと虐められる。

幾ら世界が違おうと言っても、そんな辛いイメージのある学校に通いたいと思う筈もなく、だからこそシンジはネオ・ジオン抗争後、学校に通わずにのび太と同じく軍に残るつもりだったのだが、ギレンに生き残ったプル三姉妹の世話をするように頼まれ、渋々それを承諾して軍を除隊したのだ。

そして、当初は暗い気分のままこのコロニーの小学校に通っていたのだが、実際に通ってみるとすぐに友達が出来たり遊んだりして楽しい学校生活を送れており、シンジの日常はそれなりに充実していた。

「……こんな生活が何時まで続くのかな?」

シンジはこの生活が何時までも続くとは微塵も思っていなかった。こちらの世界に来た時と同じくまた向こうの世界に戻ってしまうのではないか?

ニュータイプとしての能力か、それともシンジ自身の本能故かは分からないが、そんな直感をシンジは抱いていたのだ。

(……帰りたくないな)

人間というのは苦しい生活を送っていればいるほど、1度優しい世



界を経験してしまえば、また苦しい世界に戻ったりはしなくなる。

本人の経験に刻まれたトラウマとも言うべき本能が苦しい世界に再び入ることを拒絶するからだ。

シンジもその例外ではなく、この世界で居心地の良い居場所を見つけた今、戻ったら最後、苦しい生活を送らされる事が確定されている元の世界にわざわざ帰ろうという気はまるで無くなっていた。

(まあ、そこら辺はなるようになるしかないか。元の世界に戻るっていう考えも杞憂かもしれないし)

そんな風に何処か影が差した思いをシンジが抱いていた時、1人の少女がシンジに声を掛けてきた。

「あの・・・シンジさん。一緒に帰りませんか？」

少し恥ずかしがりながらそうやってきたのは、シンジより1つ年下の少女——ハルカ・クジヨウだった。

長い黒髪に小学生ながら整った顔立ちをしており、そのまま成長すれば将来は美人になることが約束されている。

「ああ。うん、構わないよ。一緒に帰ろう」

特に断る理由も無かったので、シンジもその誘いを了承する。

すると、ハルカは嬉しそうにニッコリと笑いながらこう言った。

「では、行きましょう」

ハルカはそう言ってシンジと共に別れ道までの帰路を歩いていった。

UC0081年 3月5日 ラサの裏側

◇宇宙世紀0081年 3月5日 ラサ 地球連邦軍本部 某所  
ラサ。

そこは原作では第08小隊の舞台となり、第一次ネオ・ジオン抗争後はジャブロー、ダカールに続く三番目の地球連邦の首都として機能し、第二次ネオ・ジオン抗争時に行われたネオ・ジオンのファイブ・ルナ落としによつて壊滅した都市だ。

この世界では大西洋大津波によつてダカールが壊滅し、その後、ジャブローが崩壊したことによつて首都はトウキョウへと移されたのだが、ネオ・ジオン抗争後に政府と軍部の関係が悪化したことによつて政府機能と軍本部を別々な場所に置くことになり、政府機能は従来通りフォン・ブラウンに移されるまでトウキョウに、軍本部はこのラサに置かれることになっていた。

——さて、このラサ地球連邦軍本部には地球連邦政府にすら隠している軍の秘密施設や建物が幾つか存在する。

無論、本来は政府に申請した目的以外での軍資金の応用は横領となり、それに関わった者は場合によつては刑事裁判に掛けられるレベルの案件なのだが、この本部においてそのような事を気にする者は、少なくとも軍上層部には1人も居ない。

そして、今、本部の地下に秘密裏に建造された部屋では2人の将官が会談を行っていた。

「それでコーウエン中将。例の計画の準備は完了しているのか？」

そう言うのは男の名はヨハン・イブラヒム・レビル元帥。

連邦軍の最高司令官であり、地球連邦政府と政治的に対立している軍部勢力のトップだ。

ちなみに元帥という階級は連邦軍の正式な階級ではないのだが、政府への反感の意を込めて敢えてこの階級を使っている。

・・・そして、それは逆に言えば、そんなことが罷り通ってしまう

ほど、軍部と政府の溝が深まっているという証でもあった。

「はい。既に南太平洋艦隊のバッフェ中将、オーストラリア大陸方面軍のブースター中将（オリキヤラ）、アフリカ方面軍のバレル大将（オリキヤラ）、そして、このヨーロッパ方面軍のガーター大将（オリキヤラ）が元帥に付くように根回しを完了させてあります」

レビルの問いに対して、尋ねられた男——ジョン・コーウエン中将はそう答える。

「ふむ。それに加えて宇宙軍司令官の君が加わるわけか……グリーン・ワイアット少将はどうした？」

「はっ。誘いを掛けてみましたが、断られました。本人はこの事は誰にも言わないと言っていますが、念のため休暇を取らせて自宅で療養して貰っています」

「そうか。それは残念だな」

レビルはそう言いながら少しばかり残念そうな顔をする。

グリーン・ワイアット少将は一年戦争でルナツー攻略作戦に失敗してしまったことで降格させられてしまった人物だが、連邦軍の中では貴重な宇宙戦の経験を持つ将校であり、彼をこちらに引き入れる事が出来れば近いうちに行うレビル達の計画の大きな助力となってくれた事だろう。

だが、断られた以上は仕方がない。

レビルはそう思い、更に話を続ける。

「MSの調達はどうなっている？」

「現在連邦軍に配備されているマラサイの8割以上と比較的製造が新

しいハイザックを確保しました。・・・しかし、あまりにも強力なMS戦力を手元に置きすぎて、こちら側ではない連邦軍情報部員が不審に思っているとの報告を受けています」

「それは仕方あるまい。覚悟の上だ」

「はっ。それとトリントンのニタ研で研究されていたサイコ・ガンダムが間もなくロールアウト出来るそうです」

「そうか。それは結構なことだが、あのクルストとかいう博士の開発したEXAMシステム。・・・本当に役に立つのか？」

レベルはそこに疑念を持っていた。

EXAMシステム。

それはジオンから連邦へと亡命したクルスト・モーゼス博士が開発した対ニュータイプ用システムだ。

原作では一年戦争中にこのシステムが搭載された陸戦型ガンダムを改良したMS——ブルーディスティニーが投入されたものの、この世界ではそんな危険な人物に転生者達が貴重なニュータイプを預けさせるわけもなく、一年戦争中、クルストはジオンのニュータイプ研究に一切関わることはなかった。

しかし、その直後に起きたネオ・ジオン抗争中に何処からかニュータイプの事を知り、原作と同じように『ニュータイプによってオールドタイプは駆逐される』という妄想を抱き、クルストはジオンから連邦へと亡命し、その後、偶々シドニー付近で見つけたニュータイプの少女——リタ・ベルナルを人柱にすることで原作と同じEXAMシステムを作り出したのだ。

だが、実のところ、このEXAMシステムをレベルはあまり信用していなかった。

当たり前だろう。

システムというにはあまりにもオカルトチックすぎたものだった

のだから。

しかし、ジオン軍のニュータイプを抑える手段が他になかった（連邦軍のニュータイプ研究所であったムラサメ研究所は一年戦争中に第8特殊小隊の攻撃を受けて壊滅し、関連資料、研究員の多くを喪失した）事から研究させたのだが、やはり胡散臭さは拭えなかった。

「分かりません。そこら辺はやってみるしか……ただ、このEXAMシステムは本物のニュータイプのように戦場の殺気にも反応して攻撃を回避するシステムも有るそうですので、対ニュータイプ以外でも役に立つでしょう。そして、これが量産されれば我々の戦力を飛躍的に増大させることが可能です」

ジオンはそう言うが、実際はこの回避システムはあくまで機体の安全を最優先にするようにプログラムされており、間違っても中に乗っているパイロットの安全が考えられたシステムではない事を彼は知らない。

「……カタログ通りの働きをすればな。まあいい。それで肝心のジオンと連邦政府、更に各サイドや月の動きはどうなっている？」

「はい。まずジオンですが、こちらの動きに気づいた様子はありません。その証拠にソロモンは以前のような宇宙要塞ではなく、病院施設のままになっています」

そう、かつて宇宙要塞であったソロモンは現在では病院施設として改装されており、配置されている戦力は警備隊程度のものとなっていた。

それは1個艦隊ですら頑張れば陥落させられる程の脆さであり、もしルナツーに配置されている戦力の大半が投入されれば、ソロモンは1日と経たずに落ちるのは間違いない。

「このままこちらの動きに気づかないのであれば、ソロモンは楽に落とせるでしょう。しかし、問題なのはサイド1のジオン駐留軍です。こちらにはネモや量産型Zガンダムなど、ジオンの最新鋭の機体が配備されていますので、油断は出来ません」

「なるほど。だが、この資料を見る限り、サイド1駐留軍は強力だが少数だ。であれば、サイド1のジオン軍は無視する形でソロモンのみを攻めた方が良さそうだな」

「ええ、どうせ出てこれないでしょうから、それが最善の選択でしょう。それと政府の方ですが、既に工作の準備は完了しています。…ですが、『例の戦闘員』の居場所が分からないため、作戦が絶対に成功するとは断言できません」

それを聞き、レビルは眉をしかめる。

レビルも軍のお偉いさんであるため、10年くらい前に諜報関係者を騒がせた『最強の戦闘員』の事くらいは知っているし、それが今ではコウイチ・クロカワのボディガードを勤めているという『噂』も当然知っていた。

だからこそ、そのコウイチ・クロカワが臨時大統領に就任してしまっただけという今の現状は彼の暗殺を考えている人間には忌々しく、暗殺を実際にやらされる人間にとっては悪夢でしかない。

…もつとも、実際は最強の戦闘員とその家族はサイド3に移住しており、コウイチ・クロカワの周りどころか、地球にすら居ないのだが、その事実を彼らは知らなかった。

(厄介だな。これは作戦は失敗すると見込んだ方が良さそうだな)

そう思ったレビルだったが、そうだとしても問題はないとも考えていた。

なにしろ、連邦軍の主戦力のほとんどはレビルの手の内に有るのだ

から。

「そうか。ならば、仕方ない。この作戦は成功すれば儲けもの程度に考えておこう。それでコロニーと月は？」

「それが・・・大半の勢力はこちらの誘いには乗ってきませんでした。唯一、サイド4は乗ってきましたが・・・」

そう、この計画を建てるにあたり、レビル達はスペースノイドやルナリアンを味方につけるためにサイド3以外の各コロニー群や月面都市郡などにも水面下で自分達の計画に参加するように交渉していたのだが、その結果は芳しいものではなかった。

当然だろう。

各サイドや月面都市の大半は一年戦争で国力差があるにも関わらず、ジオンに負けた連邦軍の力を疑問視していたのだから。

「ただ、サイド1は駐留するジオン軍を追い出してくれれば、補給のための入港くらいは許可すると言ってきています」

「・・・つまり、今のところの味方はサイド4だけということか」

思ったより自分達の味方が少なく、少し不安に思ったレビルだったが、自分達が勝てば風向きが変わってくると思えば、ジオンに向かってこう言った。

「よし、予定通り、6日後の3月11日に行動を開始する。それまで十分な準備を進めておいてくれ」

「はっ」

レビルの言葉に、ジオンは敬礼を以て返した。

UC0081年 3月8日 三人目の来訪者

◇宇宙世紀0081年 3月8日 地球 ニュー・ホンコン ファ  
ミレス

(まさか、こんなことになるなんてなあ)

野比のび太特務少尉は目の前で差し出された料理を食う少年——  
桐ヶ谷和人の様子を見ながら、これからどうするべきかを考える。

実は今日、のび太は休暇を取ってニュー・ホンコンにシヨツピング  
にやって来たのだが、そこで偶々今にも飢えて死にそうな自分と同年  
代の少年を発見したのだ。

見捨てるのも忍びなかつたので、こうしてファミレスに連れ込んで  
食事を奢っている訳だったが、その途中で事情を聞いてみたところ、  
どうやら数日前に日本の小学校で卒業式を迎えて下校する途中、気づ  
いたらこの町に居たらしい。

何処かで聞いたような話だったので、一応、今年が何年か聞くと、  
返ってきた解答は西暦2021年の3月とのこと。

この時点で自分と同じ異世界から来た者であるのはほぼ確定だっ  
た。

(まあ、この世界の過去から来た可能性も有るんだけど、どちらにして  
も生活基盤が無いんだよなあ)

そう考えると、2年前にこの世界に来た時、サスロに拾われたのは  
非常に幸運だったと言えるだろう。

あれが無ければ自分は今頃飢えて死んでいたかもしれない。

(何とかしてやりたいんだけど、僕も軍務が有るしな)

今度の定時連絡の時にギレンに事情を話して保護を申し出ようか



?

一瞬そう考えたのび太だったが、その案はすぐに引つ込める。

(いや、これ以上迷惑を掛けても不味いか。でも、この年で職に就くなんて出来るわけないしな)

前述したように桐ヶ谷和人はのび太と同じ年であり、加えて、学歴は小卒(しかも、この世界の学校ではない)でしかない。

そんな彼を雇ってくれるような職場がこの町にあるとは到底思えなかった。

・・・とは言え、一度拾ってしまった以上、せめて本人が自立するまでは自分が面倒を見る必要がある。

のび太はそう思い、何か良い案は無いかと考えていたが、その時、食事を終えた和人がのび太に対してこう言ってきた。

「あの・・・ごめんな。食事を奢って貰っちゃって」

「ん？ああ、良いよ。別に。僕から誘った訳だしね」

「すまないな。それと一つ聞きたいことが有るんだが・・・」

「なに？」

「碓シンジという人を知らないか？」

和人の口から出たその名前を聞き、のび太は目を大きく見開く。

碓シンジ。

ネオ・ジオン抗争時にペガサス隊に入ってきたのび太の戦友であり、現在は軍を除隊して普通の日常を過ごしている少年の名前だ。

しかし、まさか和人の口からその名前が出てくるとは思わなかったので、のび太はその事に少し驚いていた。

「知っているけど・・・その人がどうかしたの？」

「あつ、いや。実はここに来る直前に声が聞こえて」

「声？」

「ああ。なんでも、俺と碇シンジは次の戦争が終わり次第、元の世界に戻るって」

「・・・」

それは身に覚えのある話だった。

なにしろ、1年前、のび太はそれと同様の夢を見たのだから。

しかし、そこで聞き捨てならない言葉があったことに気づき、のび太はそこを和人に尋ねる。

「待って。今、〃次の戦争〃って言ったよね？」

「えっ？あ、ああ」

「それって何時の事だか分かる？」

この時ののび太の目は真剣だった。  
当然だろう。

今の地球圏の情勢下で一年戦争レベルとは行かずとも、ネオ・ジオン抗争レベルの戦争が起きれば、現在ののび太の母国であるジオン共和国はほぼ間違いなく巻き込まれるだろうし、軍人であるのび太もその戦いに駆り出される可能性が高いのだから。

「・・・ごめん、それは分からない。具体的には何も言っていなかったか

ら」

「・・・そっか」

のび太は残念そうにそう言うが、だいたい推測は出来ていた。

1年前のドラえもん帰還の警告の時はその事態が起きる1ヶ月前。つまり、今回もその前後である可能性がある。

まあ、これは一回きりの例で分析しているので、そうでない可能性も当然の事ながら高いのだが、まさか数日で戦争が起きるといふ事は無いだろう。

のび太はそう考えていた。

(まあ、これについては次の定時連絡の時にでもギレンさんに伝えておくか。信じて貰えるかは分からないけど。取り敢えず、今は和人の処置を考えないと)

このまま見放して飢え死にされては目覚めが悪いが、のび太は明日には部隊に復帰しなければならず、面倒を全て見るといふ訳にはいかない。

(いっそのことお金だけ渡して何処かの宿にでも泊めさせるか?・・・いや、それじゃ根本的な解決にはならないか。となると、部隊での保護を行うか)

勿論、それには理由付けが必要だ。

何か切羽詰まった理由もなしに人間の保護を行う程、軍隊も暇ではないのだから。

(和人の両親はネオ・ジオンに殺されたということにしとこう。それならエリク隊長も保護を受け入れてくれるだろう)

ちよつと酷い設定ではあるが、取り敢えず部隊で保護をする理由くらいにはなるのも確かだ。

のび太はそう考えながら、部隊への紹介の際に口裏を合わせさせるため、和人に対して口を開いた。

◇L2宙域 サム<sup>ム</sup>ズ<sup>ズ</sup> ジオン共和国 ズム・シテイ 総帥府

「えつ、ラーフ・システムを承認して頂けるのですか？」

総帥府に呼び出されたフェアトン・ラーフ・アルギスは、たった今ギレン・ザビ総帥が発した言葉に目を丸くした。

「その通りだ」

「し、しかし、以前進言した時は却下と」

「状況が変わったのだ。4日前のあの宣言によってな」

ギレンはそう言いながら、ラーフ・シシステムを承認した背景を説明する。

ラーフ・シシステム。

それはガンダム00のイオリア・シユヘンベルクが作り上げた太陽光発電システムを基にした（と思われる）宇宙世紀版の超巨大太陽光発電システムであり、原作では第一次ネオ・ジオン抗争中に提唱されながらも、結局、実現しなかった計画だった。

では、この世界ではどうかというと、原作より8年も早い去年の末頃に一応提唱されはしたのだが、ギレン・ザビ以下の転生者はこれを却下している。

何故か？

それは単純な話で、物理的にジオンにはこの計画は不可能だったからだ。

ラーフ・シシステムは地球軌道上に建設する関係上、地球連邦政府の許可を取らなければならぬのだが、そんなところに巨大構造物を作るとなれば、当然、連邦の方も何か有るのではないかと勘繰ってくるだろう。

なにしろ、連邦にとってジオンは未だに潜在的な敵国なのだから。加えて、ガンダム00では何故か起きなかったが、太陽光発電への直接攻撃も懸念される。

そういった理由から、転生者達はラーフ・シシステム採用の許可を出さなかったのだが、連邦政府が持ち出してきた地球リフレッシュ計画によって状況は変化した。

なにしろ、このラーフ・シシステムは建造の手間こそ掛かるものの、ガンダム00でもあるように仮に地球の化石燃料が枯渇したとしてもエネルギーを賄うことが出来る。

地球至上主義者達の目もあって出来るだけ地球環境に影響を与えないことなくエネルギーを得たい連邦としては正に打ってつけのシステムであり、試しに連邦にこの話を持ち掛けたところ、『是非採用した

い』という返答を貰っていた。

そういう経緯があり、ラーフ・システムは改めて正式に採用されることが決まったのだ。

「・・・なるほど、そういう事情でしたか」

「うむ。ただし、この計画は反ジオン派を刺激しないために連邦主導で行うことになる。君には暫くの間、連邦に出向して貰うことになるが、それでも構わんか？」

「ええ、それは勿論構いません。しかし、よろしいのですか？連邦主導で行うとなると、ラーフ・システムの技術が連邦に流出してしまうことになりますか」

「それは構わない。今回のラーフ・システムの技術提供は連邦政府への融和政策の一環だ。要は恩を売ったのだよ。それにジオン単独でこのような太陽光発電システムを造るとなると、何年掛かるか分からんしな」

そう、ジオンは現在、火星のテラフォーミング化に力を入れており、とてもではないが直径10万キロの超巨大太陽光発電システムなど作っていられる余裕はないし、仮にやるとしてもジオン単独では手間が掛かりすぎて完成が何時になるか検討もつかない。

それくらいならば連邦に融和政策の一環として技術を差し出して恩を売ってしまった方が良いというのがギレンを始めとした転生者達の意見だった。

「分かりました。では、行って参ります」

「頼んだ。出発は1週間後だ。それまでに準備を整えておくように」

「はっ」

フェアトンはそう言うと、踵を返して部屋を退室していく。

そして、それを見届けたギレンもまた別の仕事へ取り掛かるために机の上にある書類を手を取った。

U C 0 0 8 1 年 3 月 1 1 日 地球統一軍

◇宇宙世紀<sup>u.c.</sup>0081年 3月11日

『地球圏の皆さん。突然のご無礼をお許しただきたい』

その日、地球圏全体に流されるテレビの映像に1人の老人の姿が映し出された。

『私の名はヨハン・イブラヒム・レビル元帥。地球連邦軍の最高司令官であります』

レビルはそう名乗ると次にこう言い始めた。

『先の戦争から既に1年近くが経過し、地球圏は一先ずの平穏を取り戻しました。——しかし、先の戦争の清算は済んだでしょうか？いえ、していません。何故なら、サイド3には依然として独裁者が政権を握っており、民主主義など影も形もありません』

『そして、各サイドも準備のないまま高度な自治権を与えられた結果、治安が大いに乱れており、人々は戦前のような平穏な生活を送ることが出来ていません』

『また、本来、治安維持を行うべき連邦軍も南極条約という恥ずべき約定によって各サイドに入ることが出来ず、あろうことかジオンは戦争終結後も依然としてサイド1に居座り続けています』

『更に連邦政府もまた腐敗の結果、その行動を止めることが出来ていません。このような横暴が許されて良いのでしょうか？』

『いえ、良いわけがありません！そして、我々は連邦の腐敗とジオンの



横暴に鉄槌を下すために立ち上がりました!!』

『我々は地球統一軍！連邦の腐敗を一掃し、ジオンによって乱されてしまった秩序と法を取り戻す為、我々は地球連邦政府及びジオン公国・・・に対して宣戦を布告する!!』

——ヨハン・イブラヒム・レビル率いる地球統一軍の宣戦布告演説より——

◇地球 東アジア

(くそっ！なんでいきなりこんなことに)

ガンダム改C型(ガンダム改B型に近代化改修を施した機体)の機体を操り、やって来た敵と交戦を続けながら野比のび太特務少尉は内心で悪態をつく。

あのレビルの宣言の数時間後、ある打ち合わせのためにトウキョウに出向いていた東アジア方面軍の司令官であるゴドウィン・ダレル准

将が謎の武装集団による大統領官邸への襲撃に巻き込まれる形で生死不明となり、東アジア方面軍司令部は大いに混乱することになった。

そして、そのどきどきに紛れる形で東アジア方面軍の副司令官であるマクギエル大佐が指揮権を掌握し、レビル率いる地球統一軍への参加を宣言。

その後、ネオ・ジオン掃討の為に派遣されていたジオン共和国軍に攻撃を開始し、当然の事ながらのび太の所属するインビジブル・ナイツもそれに巻き込まれ、攻撃してきた東アジア方面軍所属の連邦軍、否、地球統一軍と交戦を開始した。

その中にはつい先日まで隣で戦っていたファントムスイープ隊も含まれている。

そして、数時間前まで友軍だった勢力との交戦によってジオン共和国側の兵士の精神的動揺は激しく、更には休暇中などで部隊の人員が全て揃っていない（インビジブル・ナイツもタチアナ中尉が休暇中でこの場に居ない状態）事もあって、ジオン共和国軍は非常に厳しい戦いを強いられていた。

「お、おい。大丈夫なのか？」

避難する先が無かったということで、のび太の機体のコクピットに同乗していた少年——桐ヶ谷和人は心配げにそう言うが、正直のび太に構っていられる余裕はない。

「ちよっと黙ってて!!今、忙しいから!!」

そう言いつつ、のび太はガンダム改C型のスラスターを吹かして一旦機体を浮き上がらせ、そこからターンをして後ろから迫ってきていたハイザックに向けてビームライフルを放ってこれを撃破する。

（不味いな。部隊が分断されてる上にミノフスキー粒子の濃度も段々

濃くなってきてる。これじゃ味方の状況が分からない)

こういった場合、一旦引いて態勢を整えるのが最良の策なのだが、まだ自分の他にも交戦している仲間が居る以上、勝手に引くわけにもいかない。

そう思いながら、機体を着地させ、次の敵にビームライフルを向けようとするが、その時、北の空から1つの信号弾が打ち上がる。

「あれは・・・僕達の軍の撤退信号か。しかし、撤退って言ったってどうするんだよ」

部隊は分断されている上にのび太の機体の周囲にも敵が数機居る。

この状態では秩序だった撤退など到底出来ないし、仲間の機体を助けている余裕など到底ない。

(・・・仕方がない。今は無事に脱出することだけ考えて他の味方に関しては何も出来たら助けるとしよう)

のび太はそう思いながら機体を操作し、撤退の突破口を開くために敵の機体へと向かっていった。

◇地球 旧ドイツ ベルリン 地球統一軍総司令部

「そうか。大統領の暗殺は失敗したか」

レビルは副官の報告を聞いてそう言いながら、次なる戦略を考え始める。

そう、大統領官邸への謎の集団による襲撃。

それはレビルが選抜した特殊部隊によって引き起こされたものであり、目的は地球連邦大統領——コウイチ・クロカワを暗殺し、地球連邦政府を混乱の渦に叩き込むことだった。

しかし、警備が予想以上に硬かった事と偶々大統領官邸を訪れていた東アジア方面軍司令官——ゴドウィン・ダレル准将が特殊部隊の誰かが投げた爆弾からコウイチを庇った事によって、結果的に暗殺は失敗に終わってしまったている。

・・・もつとも、これが地球連邦政府にとって不幸中の幸いだったかと言えば、そうとも言い難い。

なにしろ、今回の騒動の中でゴドウィンはコウイチを庇ったことで死亡してしまい、それによって東アジア方面軍は地球統一軍につくことになったし、更にはそのゴドウィンによって庇われた事で命を落とすことを免れたコウイチもまた意識不明の重症を負ってしまったのだから。

それを考えれば、暗殺こそ失敗したものの、連邦政府を混乱させるという当初の目的は達成出来たと言えた。

(これで連邦政府と連邦軍は暫くは動けない。その間にジオン共和国をどうにかして制圧しなければならんな)

そう思ったレビルは副官にあることを尋ねる。

「コーウエン中将のルナツー艦隊は今、何処に居る？」

「はっ。現在はL5宙域周辺に居るとの事です。おそらく、あと数時間ですロモモンに到着するかと」

「そうか。では、L5宙域に居るジオン軍の戦力に何か変化は有ったかね？」

「いえ、特に無いようです」

「ふむ」

それを聞き、レビルはこれなら事前の予想通り、ロモモンは楽に落とせると確信する。

しかし、それでも油断は出来ない。

仮にロモモンを落とすとしても、ジオンには本国とロモモンの間に存在する宇宙要塞『ア・バオア・クー』が健在であるし、サイド3本国艦隊もまたネオ・ジオン抗争終結によって各サイドや月面都市に駐留していた艦隊がサイド1を除いて戻っていることもあって、一年戦争時とは比べ物にならないほど強力になっている。

そして、万が一にもジオン共和国の攻略に手間取れば態勢を建て直した連邦軍とジオン共和国軍によって地球統一軍は挟み撃ちになってしまう。

まあ、そうなったとしてもまだ戦えるだけの戦力が地球統一軍には存在するが、それでも苦戦は免れないことは確かであり、そうならないためには連邦政府が混乱している今のうちにロモモン、ア・バオア・クー、サイド3本国の3つを速やかに陥落させる必要があった。

（攻略はやはり急ぐ必要があるな。となると、ロモモン陥落後は私自らア・バオア・クー及びサイド3攻略を行うか。総大将が出てくるとなれば、連邦軍、否、統一軍将兵達の士気も上がる）

レビルはそう考えつつ、次に地球の戦線の状況について考える。

現在、レビル率いる地球統一軍に編入されたのは事前に根回ししたこのヨーロッパ方面軍とアフリカ方面軍、オーストラリア大陸軍と南太平洋艦隊、そして、偶然とはいえ新たに加わった東アジア方面軍だ。

対して、連邦軍側に残っているのは東南アジア方面軍にオーストラリア大陸軍を除いたオセアニア方面軍、中東方面軍に中央アジア方面軍、ユーラシア方面軍、北アメリカ方面軍、南アメリカ方面軍、そして、大西洋艦隊、北太平洋艦隊、インド洋艦隊だった。

両者の戦力を見比べた場合、今のところはマラサイなどの最新MSを事前に大量に確保していた地球統一軍が有利ではあったが、それでも国力的には（一年戦争時のジオン公国と地球連邦程の差はないしろ）統一軍は連邦に劣るため、決して侮って良い相手ではない。

（もつとも、纏まればの話だがな）

レビルは現在の連邦軍がそもそも纏まれるのか疑問に思っていた。

現在、連邦軍に残っている領域に居る司令官は反レビル派か、中立派のどちらかだ。

その内、中立派、中でも保身を第一に考えるような輩は少し小突けば勢いのあるこちらに靡いてくるとレビルは見ているし、そうでない司令官はあくまで連邦軍としてこちらに全力で反抗してくるだろうが、そんな彼らにしても主人である連邦政府が混乱している状況では纏まって戦えるとは到底思えない。

（これは思ったより、計画が上手く進められるかもしれないな）

あまりに自分達に有利に進んでいるこの現状に、レビルは内心で笑みを浮かべる。

——それこそが慢心であると気づかぬままに。